

オリ主が逝くりりカルなのはsts

案山子屋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第一章

ある所に一人の青年が居た。青年は過去に家族を殺され、唯一残った家族である妹も心を病み、病院から出られぬ身となった。その青年も、理性を保ちながら僅かながらに狂気を孕み、仇への復讐を誓った。

第一章終了

第二章

管理局と決別し、家族を助けるためにかつての仲間を傷つける青年。青年に親しい者を傷つけられ、犯罪者ではなく身内の仇として彼を憎む八神はやて。戦う理由は互いに家族のため。立場の違いから憎しみ合い、傷つけあう。その果てにある結末は、どうなるか。

完結しました

目次

序章

第0—1話

1

第0—2話

4

仇討

第1話

9

第2話

14

第3話

21

第4話

26

第5話

33

第6話

43

第7話

48

第8話

53

第9話

57

第10話

60

第11話

65

第12話

70

第13話

75

第14話

80

第15話

83

第16話

90

第17話

97

第18話

107

第19話

111

第20話

116

番外	クツキー	239
第42話	腹黒	235
第41話	見舞い	229
第40話		225
第39話	挨拶代わり	220
第38話	決断	215
第37話		208
第36話		202
第35話	手合わせ	197
第34話		192
第33話	会話	186
第32話	探りあい	179
第31話	決闘	172
第30話	感情	167
人間らしさ		
第29話	会食	161
第28話	迎え	158
第27話	別れ	156
第26話	処分	153
第25話	呼び出し	148
間章		
第24話		136
第23話		131
第22話		126
第21話		121

第67話	第66話	第65話	第64話	第63話	第62話	第61話	第60話	第59話	第58話	第57話	第56話	第54話	第54話	第53話	第52話	第51話	第50話	第49話	第48話	第47話	第46話	第45話	第44話	第43話
	会議	狂気	交渉		死闘 (フェイト)	死闘	交戦開始		説得			呼び出し	恋		危機	潜水		提案		狩り	猟犬	朝食	覚悟	
391	384	377	372	365	360	353	346	341	333	330	327	322	314	307	302	293	285	279	272	265	260	256	250	243

戦いの跡	505
最終決戦	497
第84話	492
第83話	487
第82話	480
第81話	475
第80話 帰還	469
第79話 逃走	466
離別	460
第77話 面会	454
第76話 抵抗	449
第75話 失敗	441
第74話	435
第73話	430
第72話 殲滅	424
第71話 帰還	419
第70話	411
第69話 脱出、再びの死闘	401
第68話 潜入	395

序章

第0—1話

時空管理局が自らを元世界の長と主張してから、もう随分と時代は流れた。発足当時には自称管理者に対する猛烈な攻撃があつたらしいが、管理局は圧倒的な技術力で反抗する世界を次々と併合していったらしい。歯向かう者には死を、受け入れる者には生を。その単純な姿勢を維持し続け、今の管理局。今の『比較的安定した』次元世界が存在するという話をよく耳にする。

まあしかし、そんな強烈すぎる技術力を前にしても受け入れられない人間は居るもので。長い歴史の中、そういう人達が集まった世界と何度も衝突があり、身の程もわきまえず時空管理局に戦争を挑んで滅んだ世界がいくつも存在する。今は随分と落ち着いているようだが、やはり水面下での戦争、所謂テロ行為には事欠かない。

私が今いるこの世界、この瓦礫の山と化した都市の跡は、過去繁栄を極めた世界の成れの果てだ。競うように立ち並ぶ、見上げれば首が痛くなるほど高い、半ばで折れた高層ビル。ある部分が弧を描いて消滅した建物。根本から倒れたビル。どの建物も一つとして元の機能を維持している建物がないことから、管理局がどれほどのことをしたのか、過去に何が起きていたかが容易に想像できる。

しかし人間とは存外にしぶといふものだ。逃げ場など無いであろう砲火の中を逃げ惑い、まるでゴキブリのように生き延びた。そういう者達は何度でも集まって反旗を翻す。勝ち目など無いと知りながら、必死に戦い続ける。正面から戦っても無駄死するというのを理解し、やがては民間人を狙ったテロを行うようになる。そういう奴らの頭を処分するために、私はこの世界送られてきた。

この街の跡には、一つのトンネルが存在する。瓦礫を掘って作ったトンネルとも言えないような、人間二人が並んで通れる程度の小さなものだ。そして私はその入口を、ビルの割れた窓からずっと見張っている。

視界に入っているのは、縦横2本の線のみ。その線の交差する場所を、トンネルの入口へずっと当てている。通りかかる人間を待ち続け、かれこれ3日くらいだろうか。そろそろ水も食料も切れかけている。

限界はまだ来ていないが、そろそろ来てほしいものだ。

それから数時間。日が暮れて月の光が大地を照らす中だった。十字が刻まれた視界の中に、ようやく人が入ってきた。人数は一人、二人、三人。事前に渡された情報通り、男二人と女一人。最近世間を賑やかすテロ組織のボスとその取り巻きだ。倍率を最大まで上げて拡大すると、横顔がくつきりと見えた。標的も三人の中に居る。トンネルの中へ入ろうとしている。安全装置を解除し、ボルトハンドルを起こして、ボルトを引き、押し戻し、元の位置へ戻す。装填弾数は五発。外しているのは二度まで。

楽しそうに話している真ん中の男の胸に十字を合わせ、人差し指を曲げる。反動が肩を、破裂音が耳を貫いた。発射から一秒とせず十字の刻まれた視界の中で、男は倒れた。もう一度ハンドルを引き、戻す。

状況を理解できていない残り二人のうち、女の胸に同じように十字の真ん中を合わせて引き金を引く。一人目と同じように倒れる。

ハンドルを引く。戻す。三人目は瓦礫に身を隠していた。だが頭が出ていたので、頭を撃った。

倒れた二人はどうやらまだ生きているようだったので、残る二発であまり動いていない頭を撃ち抜いて、止めを刺した。

これで作戦の目標であるテロリストの殺害は終了したので今度はテロリストのリーダーが所有する『蛇』と呼ばれるロストロギアの確保をしに移動する。これは本作戦のもう一つの目標だ。

このロストロギアの特徴は、人に寄生して人間の持つ感情を餌にして、糞の代わりに魔力を吐き出す。また、周囲の人間の感情を宿主の感情とシンクロさせ、増幅させる効果もあるので、扇動者が持つと危険思想の人物を量産する厄介極まりない物となる……らしい。近頃頻発するテロもそのせいだと伝えられている。そして蛇は宿主が死

ぬまで体を離れない。なので殺傷することで体から離し、専用の道具を用いて確保することがもう一つの目標。それさえ済めば今回の任務は終了する。

念のためスコープで一通り索敵して敵がいらないのを確認。ライフルを背負い、どう見ても虫取り網と、虫籠にしか見えない捕獲道具が入ったバツクパツクも背負い、ラペリングで地面に降下。

そこまで遠いわけではないが、近いわけでもないの、瓦礫の上を駆け足で進む。管理局にテロを仕掛けるような余裕があるなら戦争の後片付けくらいすればいいのと思うのだが。

十分ほどかけて死体の所まで進むと、死体の腕を飲み込もうとする黒い蛇を見つけた。これが件のロストロギアなのだろう。網を死体の腕の下へ差し込んで、蛇をすくい上げて網の中へ……入れようとする、網の柄に巻き付かれた。

「……」

網の柄を折って虫籠に入れようとしたが……今度は腕に巻き付かれたかと思うと、そのまま腕に吸収されるように消え、腕に蛇の鱗状の痣を残された。痛みを感じない体質なので痛みは当然ない……が、皮膚の下で何かが蠢くような気持ち悪い感覚がある。切り落としたくなるが、こんなところで切り落としては治療ができないので出血多量で死んでしまう。

「……?」

急に頭が、痛くなり、地面に膝をつく。痛みは、昔あった事のせいで無くなったはずなのに、痛い……頭の中を、直接頭蓋骨に穴を開けてナイフとフォークで掻き回されるような。強烈な吐き気を伴う痛みだった。その痛みの奔流に乗って、頭の奥底に封じ込めていたおぞましい記憶が蘇ってきた。

第0—2話

少しばかり昔……そうだ、私が小さい頃の話。確か、12かいくらかの歳の誕生日だった。あの時は何が起きたものかと、自分でも状況が認識できていなかった。両親が誕生日のお祝いの料理を作ってくれている最中に、五人の男たちがドアを蹴り破って入ってきた。お父さんが注意したが、何か光る弾が胸を貫いて、赤い水をまき散らしながら床に倒れた。

大きな音の様子を見に来たお母さんは、それを見て悲鳴を上げた……そして男たちの興味はすぐにそちらへ向き、まるで飢えた肉食動物のように母さんの元へ向かっていった。母さんはすぐに逃げ出したが、男たちに捕まって組み伏せられ、突然男たちの手に現れた刃物に服を切り裂かれた。その時には、もう色々と『解って』きていた年頃なので、その行為の意味も理解できた。なので、目の前で行われようとする蛮行へ立ち向かおうと、手元にあつたナイフとフォークを握り、男たちへ駆け、母を押さえつけているクソ野郎の目にフォークを突き刺した。その後は蹴り飛ばされて、意識が消えたので憶えているはずがない。

で、家の中のことを覚えているのはそこまで。次に目が覚めたのは、何も見えないような真っ暗闇の中。手足を手錠で縛られているのか、体がほとんど動かない上に鎖がガチャガチャと鳴る。

「目が覚めたか？」

声と一緒に突然明かりが灯り、視界が真っ白に染まる。そして視界が元に戻る前に、腹にキツイ一発をもらった。腹の中に何も入っていなかったため嘔吐はしなかったが、胃液が逆流し、喉を焼く。

「……」

「おいおい、そんな顔すんなよ。つまんねえな。殴らないで、とか言ってみろよガキ」

光に目が慣れたら、顔が見えた。頭に包帯を巻いて右目を隠しているその男は、他ならぬ自分が眼球を抉った男だった。胃液混じりの唾を吐きかけると、また殴られた。その後も何度も殴り、蹴られ、

痛めつけられた。意識が飛ぶ度に体を揺すられて無理矢理に起こされて。そしてまた殴られ、蹴られ、わずかばかりの反抗心すら潰される。僕は何もできない。ひたすらに、一方的に殴られ続けるだけで。それ以外の記憶は、この言葉。

「そういえば、お前の母ちゃんだが……あんまり具合良くなかったな。全然泣かないし、つまらないから殺してやったぜ。ヒヒヒ」

この一言で、こいつ。否、こいつらへの復讐を決意したんだった。懐かしい。実に懐かしい話だ。

「その目だ……いいぞ、それでこそ殴る価値があるんだよ」

まるで、持っていたオモチャに新しい遊び方を見出したかのような、子供のよな顔だった。悪意が固まりすぎて、逆に純粹に見える。否、そうではなく純粹な悪意だったのだろう。でなければあんな醜い笑顔など出来やしないだろう。

その後は、血反吐を吐くまで殴られ、蹴られ続けた。死にかけるほど痛めつけられると、何かで治されてまた殴られる。どうやらこいつは俺を殺すつもりはないらしい。

そして死にかけてたらまた治される。それを繰り返され、しばらく経ったら飯を出され、犬のように這いつくばって食う。そしてまた殴られて蹴られて治されて、飯を食って。ひたすらそれを繰り返された。まるでそれが今までの日常だったかののように、繰り返された。

いったい何度繰り返された頃だろうか。十だろうか、二十だろうか、三十だろうか。回数なんて全く覚えていないが、ちようどいい加減に痛みにも飽きてきた、絶妙なタイミングで、それは起きた。

「今日は少しだけ、意趣を変えてみたぞ」

裸の妹が目の前に連れてこられた。暴力は受けていないようで、体に痣は見受けられないが、その顔には……表情が欠片も存在しなかった。呼吸のたびにわずかに動く胸が無ければ、瞬きがなければ、妹の姿形をした人形と言われればそう信じただろう。

何をされたのかは、大体予想ができる。予想したと同時に、また怒りが湧いてきた。怒りの感情など既に消えたかと思っていたが、消えたわけではなかったようだ。

鎖を引きちぎろうとしたが、子供の力ではギチギチと鳴るだけで全く千切れるような気配がない。そもそも大人の力でも引きちぎるのは無理だろう。

「……よくも……殺してやる」

「こいつはなあ、よく鳴くぞ？　小さいからか具合もなかなかいい」

言葉の意味は理解できる。だが、妹はその対象となるにはあまりにも若すぎる。幼すぎる。小さすぎる。そもそもこのような、絶対に望まない状況で純潔を奪っただと？　許せるわけがない。殺してやらねばなるまい。

「ほれ」

「あう……ん」

そして、あろう事か全裸の妹を、そのまま、僕の目の前で辱めた。許せない、絶対に許せない。

「ほれほれ、こいつも見られて喜んでるぞ？」

「殺す！　殺してやるから今すぐ解放しろ!!」

いくら怒り喚き散らしても、鉄の鎖は千切れることなく、その役目を存分に果たし、俺を捕らえ、繋ぎ留める。ギチギチと、耳障りな音を立てる。いつそこの手足が無ければ、芋虫のように這いつくばってでもその首元へ辿り着き、首を食い千切れてやれるのに。これほどまでに自分の無力を怨んだことはない。悔しくて、悲しくて、涙が出るが、その光景を叫びながら見続ける。この屈辱を忘れないために。

この時僕は相手が何を言っていたか、相手に何を言ったのか、全く覚えていない。ただ許せない。相手のことが許せないからこそ、自分のことが許せない。殺してやりたいが、殺せない。その葛藤だけが頭の中を塗りつぶし、単一の思考だけが僕を支配していた。

「子供がそんな汚い言葉使っちゃいけませんよお？　ママに教わらなかつたんでちゆかあ？」

頭が沸騰する。もう腹が立つとか、そういう次元じゃない。もはや何も考えられない。確かに教わったことだが……

「殺したのはお前だろう！　それでも人間か！」

「ああ、お前と同じなあ」

長い舌を出して、妹の頬をべロリと舐める。醜い顔だ。今すぐにも殴り殺したくなる、嫌な顔だ。だが自分には何もできない。

「そうだなあ、お前には何もできない。ほれ、そろそろ出すぞ」

「うああ……」

「……!!」

そこで記憶は途切れている。つまりは、覚えていないのだ。その後はまた以前と同じことが繰り返された。殴られて、蹴られて、治されて、また殴られて、蹴られて、治されて。

それが何度も何度も繰り返されてやっと、全く知らない奴らがやってきて、クズを片手で引きずって……何か言っていた。覚えていないが、とりあえず俺たちを助けに来たという内容だったのは覚えている。

……視界が白く染まり、次の瞬間には真っ青な空が。あたりを見渡せば、自分がさつきまでいたがれきの山の中だった。

今見ていたのは、この何年かで忘れかけていた、俺が管理局へ入る理由となった事件。懐かしい？ いや、忌々しい。だが、初心に帰ることができたのは嬉しいことだ。

今まで汚れ仕事ばかりやらされてきたから、すっかり忘れていた。

「こちらスズメバチ。任務完了。迎えを寄越せ」

『了解。すぐに送る』

スズメバチ、というのは今回の任務をするにあたってのコードネームというか、暗号名みたいなもの。特に名前に意味があるわけでもない。そこらにある瓦礫を立てて狙撃を凌ぐための壁を周りに作り、その中に座り、カップ麺が出来上がるくらいの時間を待つ。すると魔導師が空から降ってきた。ただそれだけ。

「ご苦労だった。それで、蛇は？」

「やけに偉そうだな。階級下のくせに」

「非魔導師なんか敬語を使う必要はない。さつきと出せ」

ああ、嫌になる。どいつもこいつも魔法最高って、魔法が使えない奴は自分より下に見える。AMFが濃いエリアだから私に声がかかったというのに。ここで俺がライフルを撃てばこいつは死ぬ。

「残念ながら、寄生されてしまったから渡せない」

服の袖をまくり上げて、腕の痣を見せる。手首から肩にかけて、鱗模様のついた黒い線が巻き付いている。これは蛇に寄生されたものの特徴だ。安易に触るんじゃない。

「ここで切り落とせばいいだろう？ 一発で落としてやるよ」

デバイスの剣を抜かれたので、靴底に鉄板の入ったブーツで顎を蹴り上げる。高濃度AMF下ではバリアジャケットを維持するだけで精一杯のはずだ。こんな軽い打撃でも十分ダメージは通る。揺らいだ脳は体の姿勢を保持することで精一杯で、防御など出来るはずがない。無防備な顔面に銃床を顔面に思い切り叩きつけた。クリーンヒット。受身を取ることもなく地面に倒れる。口から結構な量出血しているの、歯が何本か折れたのだろう。

さらにライフルの安全装置を解除し、ボルトを引いて戻し、銃口を額に突きつけて引き金を引いた……が、弾は出なかった。そういえばリロードをしていなかった。

「じよ、冗談だ……」

「剣を抜いて腕を切り落とす、と上官に向けて言ったんだ。冗談では済まない」

一応、襟についている階級章を見てから蹴った。こいつの階級は三曹で、私は准尉。部隊こそ別だが、上官に対し暴言を吐いたという指導への大義名分は存在する。よって私の行いは間違っていないのだ。「さて、それじゃさっさと連れて帰ってくれ」

仇討

第1話

蛇と呼ばれるロストログアを腕に宿してから一週間ほど。ようやくいろいろな検査から開放されてわかったことは、こいつは待機状態だと血肉に溶けて宿主と一体化しているため、外科的手術で取り出すのは不可能ということ。実体化させて遠くに引き離したとしても、戻ってくるということ。あとは、宿主の意思に従って形を作る。銃のような複雑な形は無理だが、剣の形を思い浮かべれば剣に。槍の形を思い浮かべれば槍になる。最後に、食わせる感情は激しければ激しいほど強い魔力を吐き出すということがわかった。この特性はどれだけひねり出したとしてもせいぜいDランク程度の魔力しか無い私には非常に都合がいい。感情をコントロールするのは得意だし。あとは、何も持っていない状態からいきなり槍や剣を出して、相手を驚かせて殺すとか。使い道は色々あるだろう。

まあ、そんなことは過去の話で今現在。賄賂コネゴマすり汚れ仕事等等、何年もかけて多くの準備をし、そして紆余曲折の果て。試験的かつ多くの条件の下、小隊規模の部隊と、陸の敷地内にプレハブの隊舎を持つことを許された……つまりは、今までの汚れ仕事からは解放されて、ようやく公的な立場を手に入れたということになる。

設立の明文は最近増えているガジェットへの効果的な攻撃手段の確保、非魔導師の有効戦力化による人手不足の解消。頑固な中將について認めさせたのだ。

……が、配属されたメンバーはたった三人。人員の不足している陸で三人も確保できたこと自体奇跡的なのだが、せめて十人は欲しかった。どこぞの課はエリートまたはその卵ばかりでこの数倍以上の規模だと言うのに、ひどい格差だ。まあ、文句を言っても始まらないしさっさと話を進めよう。時間は無限ではない。この見るからに肉体

労働してましたというような筋肉野郎共を指揮するのはきつと楽だろう。脳みそまで筋肉で出来てるなら、シンプルに傷めつけてどちらが上かを認めさせるだけでいい。あとは命令をきちんと聞いて、銃器をそれなりに扱えるよう教育すれば、インスタント兵士のできあがり。

「始めまして。私の名前はオズワルド。この質量兵器運用小隊の隊長であり、階級は准尉。諸君には試験的に設立された質量兵器運用小隊のメンバーとして、質量兵器の運用、戦闘、整備方法を学んでもらう」
各自のテーブルに座り、見るからに嫌そうな顔をしてこちらを睨む男が三名。まあ予想通りの反応だ。言うことを聞かないのならば叩きのめしてでも命令を聞いてもらおう。訓練をするにも教育をするにも、まずは言うことを聞いてもらえなくては困る。

「当然ながら君たちは私の指揮下に入るため、命令には従ってもらおう。若造の命令が聞けるか！ 自分より若いくせに階級が高いとは許せん！ とか、そういう不満がある奴は立て」

そう言ってから起立したのは、三名中三名。つまり全員。これもまあ、予想通りと言ったら予想通り。一人くらい柔軟な考えができる奴が居るかと思っただが、幸い体は大体できているようだから、あとは少し整えて技術を教えて命令には服従するように調教するだけで済む。楽に行こう、この部隊を戦えるように仕上げるのが目的ではないのだし。私の管理局での地位をより強固なものとするための足がかりとして設立したのだ。

「二人一人かかって来いとは言わない。世間知らずのガキに躰をするつもりで、全員でかかってこい」

「いや、お前のようなガキ一人に何人もいらねえ。俺一人で十分だ：ま、一発なら殴らせてやるよ。かかって来な、クソガキ」

威圧のつもりか、指をボキボキと鳴らしながらこちらに歩み寄る。しかし宣言通り先に一発殴られるつもりなのかとても隙だらけ。ある管理外世界では子供ですら爆弾を抱えたり機銃を撃ちながら敵に特攻する事もあるらしいのに、相手を見た目で判断するとは、全く平和ボケにも程がある。

間合いに入ったところで、床を蹴り、首へフェイントとして右の拳を向ける。それを掴もうと手を伸ばされるが、本命は違う。直前で踏みどまり、足を振り上げ股間を蹴り上げる。もちろん相手は将来の部下なので、潰れない程度に手加減はしてある。

「!!!」

そして声にならない悲鳴を上げつつ股間を抑えて地面を転げ回る筋肉ダルマ。いくら図体がかくても、いくら筋肉の鎧で体を守っていても、人間急所を狙われればこんなものだ。痛みには勝てない。

「お前、それでも男か!?!」

さきほどの行動を見ていた残り二人の内、髪はやや長い方。隊員Bとしようか、そいつが私のことを非難する。しかしその非難はおかしい、勝つためには手段を選ばないというのが正しいのに、なぜ非難されなければならない。潰れないよう手加減までしたのに。

「このように相手がデバイスを展開していない魔導師なら、先制攻撃で一撃で行動不能に追い込むことが重要だ。正々堂々正面からの殴り合いなんて、馬鹿にやらせておけ」

手段を選ばずに戦って結果負けたら非難されてしかるべきだが。しかしこうして私は立っている。つまり私は正しい。備品に被害も出なかったし、文句無しの成果だと言えるだろう。

「さて。他にやりたい奴は」

方法はどうであれ、できる限り一撃で行動不能に陥らせるのが戦闘では正しいのだ。地力による差が大きい斬り合い、殴り合い、撃ち合いは非合理的。奇襲かアウトレンジからの攻撃で相手に準備を整える暇を与えず、初撃で仕留めるか、最悪でも動きを鈍らせ、二撃目で絶対に相手を仕留める。それが非魔導師が魔導師を打ち倒す最も確実な方法だ。

「いや、遠慮する。まだ独身なのに子を作れなくなるのはちよつとな」
「まだ若いのに恐ろしいな……」

なんだ、来ないのか。つまらない奴らだ。まあいい、あとは質量兵器を扱うために必要な書類にサインをさせて、それからこいつらの訓練をしよう。銃種類や構え方、撃ち方、弾の込め方、リロード、メン

テナンスなどを教えなければいけないので、これから忙しくなるはずだ。面倒だが、どれも管理局で奴らに仕返しをする基盤作りのためだ。手抜きはできない。

「いい判断だ。無駄な手間が増えるのは面倒なだけでよくないからな……では、まずは自分のテーブルにある書類にサインして印鑑を押ししてくれ。質量兵器を扱うために必要な書類だ」

質量兵器はほとんどの人間の所持、使用が禁止されている代物だけあり、本来なら面接や精神鑑定、教習や筆記試験などいくつもの面倒な手続きを踏まなければ使用は愚か所持すらさせてもらえない。それを中将に頼んでその権限というか威光というか……そんなもので可能な限り簡略化して、その結果が書類一枚へのサインと印鑑となる。

「でもよ、ナイフや鉄パイプならともかく質量兵器なんて俺たち扱ったこと無いぜ？」

ナイフや鉄パイプ。学生くらいの頃には不良でもしていたのだからか。

「誰でも最初は素人だ。そこからの伸びは本人の努力と才能次第。才能がなくても、ある程度は訓練次第でどうにでもなる。死ぬ気で訓練すれば、才能があっても努力しない奴になら勝てるようにはなる」

エースと呼ばれる人達はその名に恥じぬだけの努力をしているらしいが、その他中の上、上の下程度ならあまり努力をしていないことがほとんどと聞いている。努力の量と武器の性能があれば、ある程度のハンディキャップなど埋められるはずだ。無論、努力なんて無意味で、どうしようもない相手も世の中には居るだろうが。

「俺たちが質量兵器なんて持ったところで、低ランクはともかく高ランクは落とせないんじゃないかね」

「素晴らしい疑問だ。貴様の言う通りいくら我々非魔導師が質量兵器で武装し、厚い防弾ジャケットを着込んだとしても、そんな防御手段は魔導師から放たれる砲撃や強烈な近接攻撃の前には卵の殻のように脆く頼りない。せいぜい無いよりはマシ程度のものでしかないだろう。銃にしてもそうだ。目で追えるか追えないかくらい的高速で

動き回る相手にそうそう当てられるものでもない。そしていくら強力でも当たらなければ意味がない。厚い鉄板よりもさらに頑丈な障壁を張る魔導師には当たっても貫通せず、有効打とはならない。ならどうする、金的」

足下で未だに蹲っている筋肉ダルマに声をかける。さつき卑怯な手段にやられたこいつなら多少はわかるはずだ。わからなければ今度は玉を片方潰す。スパルタ路線で行くと決めているのだし、苦情は受け付けない。

「……」

「おい」

頭を何度か軽く蹴るが、反応がない。

「なんだ、気絶してるのか。情けない。他にわかる奴はいるか」

「速い奴には当たる物を。硬い奴には貫通力のある物を使う」

今度は左側に座っていた比較的長髪のメガネをかけた美男子。体はやけに筋肉でガチガチのアンバランスさが実にシユールな部下が声を出す。

「百点だ。褒美に今日の射撃訓練で、一番に銃を撃たせてやる。あとはそうだな。万一失敗したら一度引いて、他の魔導師連中に任せろ。で、戦闘に夢中になってるところをまたねえ。それが一番確実に被害も少なく、安上がりで、簡単に手柄も立てられる。美味しいところを持って行かれたと嫌われるだろうが、聞く耳を持つな」

と、一通り言いたいことも言ったので今度は訓練にでも移ろうか。銃はもう用意してある。ひとまずは、それからだ。

第2話

訓練という名の指導に疲れたが、部隊を設立した以上やらねばならないことというのは存在する。そう、報告書だ。内容は「部隊は完成し、部下の訓練も非常に上手い具合に進んでいる。現段階では質量兵器の特性と、整備方法。運用方法を身につけさせ、既に実戦が可能となるレベルにはなっている。倫理観の排除も進んでいる。このまま一ヶ月もすれば、十分実用に足る兵士となるでしょう」という感じだ。あと今日は何発弾を撃ったか。どんな道具を使ったか。どういう整備をしたかとか、ありとあらゆることを事細かに。

といっても整備方法などは地球から取り寄せた某合衆国海兵隊のマニュアルをそのまま取り込んで、一応購入したデバイスのツールで翻訳して入れているだけなので、大した労力はかかっていない。

『訓練映像は見せてもらった。経過は順調そうだな』
「でなければ困ります。貴重な人材をもらってにおいて、実戦だと役立たずでしたでは笑えません」

全員やる気はあまりないが、とりあえずやらなければ弾を玉にブチ込むと脅しておいたので、見た目の上では真面目にやっているように見える。だが、中将はともかく他所はこの質量兵器運用部隊の存在をあまりよく思っていないようで、急遽明日、設立してから一週間程度しか経っていないのに魔道犯罪者の拠点襲撃に駆り出されることを書類で通達された。模擬戦すらやらずに実戦投入させられるということ、さらにやる気をなくしている。真面目にやらなければ死ぬというのに、やる気を無くすとはどういうことやら。

「それよりも明日のことですが、陸の機動六課以外の部隊から何人かマトモに戦える魔導師を手配していただけませんか。どう考えても人質の救出には戦力が足りません」

最低でもAランクの近接戦魔導師を一人。またはそれに匹敵する人員を寄越して貰いたい、さすがにそれは難しいだろう。なぜ機動六課以外から、という条件をつけたかという、同時期に設立された

2つの部隊。片方が先に戦果を上げれば、そちらへ注目が行くのは当然のこと。機動六課に手柄を取られてしまえば、『機動六課に比べてあそこはやはり……』という目で見られるのは間違いない。

だが、この任務で失敗しても『やはりあそこはダメだったか』と言われるのも確実だ。しかし成功すれば……より目の上の瘤として扱われるだろうな。どう転んでも嫌な未来しか見えない。

『すまないがそれはできない。私にも立場というものがある。表立って援助をすれば、私にも非難が向くようになる。元より私も、あまり他からはよく思われていないのでな』

それは私がいくら馬鹿でもわかる。この仕事において他人からの評価というのは大いに行動に響く。付き合っている相手の位が高ければ高いほど、影響は大きくなるものだ。中将ほどの付き合いともなれば一体どのような有形無形の嫌がらせを受けていることやら。想像もつかない。

「……では、海と空に、我々がどんな状況に陥ろうと助けに来ないように、と言っておいてください。手柄を奪われてはたまりませんので」
陸が無理なら空と海しかない。そして派遣される奴らの目的は、手柄を横からかつさうことだ。手柄を取られるくらいなら、単独で叩き潰す。人質の命を考えなければ、ちよつとむずかしい程度の任務だ。

『大丈夫か?』

「失敗したらその時です。迷惑をかける前に大人しく死にましよう。ただし成功したら、命令を出した糞野郎に苦情の一つでも言わせてください」

『まあその位なら構わんだろう。勝算は?』

「狙撃で先手を取り敵戦力を削り、爆発物であぶり出して、狙撃で改めて仕留めます。人質は諦めていただく事になります」

相手が居るのは、山中の開けた場所にある廃棄された工場。人質が何人が居るらしいが、どうにも救出するには犯人グループに気付かれずに施設内に侵入し、搜索する必要がある。よって救出は諦めて、砲撃後に生き延びていれば助けるといふ方針でいく。倉庫には迫撃砲

とその砲弾、ロケットランチャーもあつたはず。どうせあつても使わないのだし、許可をもらつて盛大に在庫処分をしよう。あとは建物の所有者に破壊許可ももらつておかないと。後で文句をつけられては困る。これは私がするよりも中将に頼めばいいだろう。

「そのために、明日の朝までに建物の所有者に破壊許可をもらつておいてください」

中将ならなんとかできるはずだ。多少強引にでも許可をもらつてもらおう。もらわなくても破壊はするが、後の始末書は少ない方がいい。

『シンプルでいい作戦だ。破壊の許可はもらつておこう、どうせ使われていない工場だ』

「ありがとうございます」

機動六課のエースほどの力があれば、他にもやりようはあるだろう。だが、私にはそれが無い。対して機動六課を代表する高町なのは、デバイスを手に入れてすぐにエース級の魔法を扱うようになったとか。望んでいないのに偶然力を手に入れ、偶然その力を扱うだけの才能を持ち、偶然活躍する機会に恵まれ、好き勝手できるような地位を手に入れた。

……よく考えれば私もそれなりのものか。望んで戦うための力を手に入れ、望んでは居なかつたがそれなりに便利なロストログアを手に入れ。試験的にはあるが部隊を与えられ、嫌がらせを好意的に解釈すれば活躍する機会を与えられているとも言える。力の大きさを除外すれば、それほど大きな差異はないのではないかとすら思えてくる。

『貴様がこれから活躍してくれることを期待している』

「与えられた命令をこなす事こそが軍人の使命です」

『軍人の模範だな。試験課の記念すべき初出撃だ。無事を祈っている』

その言葉を最後に通信を切られる。祈るよりも形のある支援を行つてもらいたいものだ。金とか人員とかヘリとか。そんな事を考えながら空中に浮かぶスクリーンを触れて消し、書類を手にとって目

の前に立つ隊員1号に向き合い、発言許可を出す。

「隊長、使用物品の確認と積み込み済み済んだぞ」

「ご苦労様。それじゃ外に出よう」

椅子にかけてある隊章である二つの拳銃がクロスしたエンブレムの縫い付けられた迷彩服を持ち上げ、じつくりと観察する。今は新品として、アイロンをかけて糊も効かせてある綺麗な服だが。そのうち汚くなるのだろう。それを羽織り、ボタンを止め、プレハブの外に出る。と、そこにはもう既に着替え終わり、整列している三人が居た。その表情はやはり士気が高そうには見えない。薬を使ってしまうえば簡単な士気向上が見込めるのだが、それは少々非人道的であり、外部に漏れると色々と騒がしくなるので使えない。あと依存性もある。薬が切れたから戦えませんかと言われては困る。

非合法組織では常套手段なのが、公的組織だと途端に使えなくなる手段というのは数多い。だが公的な立場があれば支持も得やすいし補給も安定する。メリットとデメリットが釣り合っているのです、やむを得ない事情がなければ今の社会的地位を保持しておきたいものだ。「諸君、今回は我々の記念すべき初出撃だ。単独出撃で援軍も無く、おまけに死ぬ可能性も非常に高い。その割に報酬は雀の涙という理不尽な仕事だが、我々の栄光の道への第一歩と思えば出撃してくれ。作戦は車内で説明するので、トラックに乗り込め」

「隊長！」

「質問は車内で聞く。さっさと乗れ。時間がない」

「……了解」

この一週間で上下関係と、命令遵守の精神は叩き込めたのが幸이었다。命令への反発を理由に三日三晩飯を与えず、水だけで訓練を続けさせたのが効いたらしい。質問を引っ込めずにごすと暗緑色にペイントされたトラックの荷台へ乗り込んでいった。他の二人も乗り込ませて、自分も乗り込む。運転手は自動運転で目的地まで連れて行ってくれるので不要だ。リモコンのスイッチを押し、車を発進させる。

「さて、一号。さっきの質問は何だ？」

一号というのは、反抗者第一号という意味で付けたニツクネームだ。ゴリラにするか筋肉ダルマにするかで悩んだのだが、やはりシンプルな方がいいためこういう名前にした。

「たったの一週間の訓練で、しかも単独で実戦に出るとするのはあまりにおかしいと思う」

「その通りだ。しかし、周知の通り管理局も管理世界の人間も、そのほとんどは質量兵器をよく思っていない。上にはそういう考えの奴らが沢山居て、当然ながらこの部隊の事はあまりよく思われていない。だからさつさと潰したくて適当な場所に突っ込ませたんだろう」

全く迷惑な事だ。終わっても中将の助けがなければ文句の一つも言えやしない。せいぜいこの部隊の有用性を見せつけて、驚かせるくらいしかできないだろう。しかし手柄を立てたら立てたでさらに危険な場所へ放り込まれ、潰れるまでそれが繰り返されるだろうが。使い潰されない程度に活躍する……難しいな。それを考えるのも隊長の仕事か。面倒だ。

「隊長、拒否はできなかつたのですか」

「三号。お前は拒否できると思うのか？」

記念すべき私の三人目の部下。少し線は細いが、様々な状況に適応できる冷静な判断能力を持っている。事務もできるし、戦闘は遠近どちらも適性があるようなので過労死しない程度にこき使っていく予定。

「……いいえ」

「では作戦の説明に入る。前情報では、確認されている犯人は六人。陸戦魔導師が4名。戦闘タイプは近接2名と中遠距離射撃型が2名。空戦の砲撃魔導師と、その護衛の格闘戦主体の魔導師が1名。対してこちらは4人。しかし今回の作戦は2組に別れて攻撃を行う。一号と二号は迫撃砲とロケット弾で砲撃を加えて炙り出せ。出てきても近寄られるまでは砲撃と機銃による弾幕で抑え込め。近寄られたら地雷をばら撒きながら逃げろ。三号は私と来い。夜明けまでに狙撃でできるだけ削る。砲撃後は出てきた奴を……空戦型を最優先で狙撃する」

立体表示ディスプレイを荷台の床に置き、工場周囲の地形を映し出す。工場は郊外の山中にある。そのため、遠慮のない砲撃を加えても何の問題もない。派手に解体工事を行えば、きつと耐え兼ねて出てくるに違いない。出てこなければ瓦礫の下敷きになるか迫撃砲の砲弾の爆発に吹き飛ばされるだけだからな。人質ごと殺されるとわかれば、たまらず飛び出してくるだろう。だれだって死ぬのは怖い。

「二号と二号は工場南の道路で待機。三号と私は南西の台地に移動。しかし狙撃に失敗することも十分に考えられる。その場合はすぐに撤退命令を出すから、追ってきたら地雷と機銃で弾をばら撒きながら逃げる。最悪空戦魔導師に追い回される可能性もあるから、その場合は死ぬ事を覚悟しろ。以上。質問は」

「無し」

「同じく」

「死なないためにはどうすればいい」

「殺られる前に殺れ」

「素晴らしいアドバイスをありがとうよ。隊長」

正直、それくらいしか手がないのが現実。方法はどうでもいいから、とにかくこっちが死ぬ前に相手を殺す。模擬戦じゃないんだ、相手は非殺傷設定なんて使ってくれるはずがないのだし。

「日の出まではあと5時間。それまでに配置につくこと。配置についてら攻撃指示があるまで待機しろ」

三人とも頭を縦に振ったので、話を続けることにする。3Dスクリーン映像の中に手を入れ、指で狙撃地点と砲撃地点を指すと、そこに赤い点が出る。

「次は撤退時のルートを確認する。狙撃班はこの台地から攻撃するが、空戦魔導師の排除に失敗し400m以内に接近されたら撤退開始。森の中に引っ込んで……」

台地にある赤い点に触れ、指を森の中へと動かす。指の動きに合わせてラインが引かれ、そのラインが少しずつ蛇がのたうつように曲がりくねり波のような曲線を描いて撤退経路を表示する。

「このラインに沿って撤退する。このラインは数年前まで使われてい

た古い林道で、今は誰も利用していないからかなり道が荒れている。だが何もないところを走るよりはかは動きやすいはずだ。それに木のおかげで上からは見えないから、比較的安全に撤退できるだろう。2時間ほど歩けば普通の道に出るから、そこで合流する」

「了解」

そして今度はもう一つの赤い点に触れ、また指を動かして線を引きく。

「相手が200m以内になったら、砲撃班は車に乗ったまま、地雷と弾丸をばら撒きながら道を走って逃げればいい。魔導師でも当たったら死ぬ弾丸が雨霰と飛んできて、踏めば重傷確実の地雷があれば敵もそこまで執拗には追って来れないだろう」

「追ってきたら？」

「陸戦なら挽肉になるだけだ」

「了解」

撒いた地雷は指向性を持って爆発するから、道路はあまり傷まないし、リモコンで一斉爆破できるから処理には困らない。ベアリングが沢山転がることにはなるが。

「さて、それじゃ到着まで好きにしていいいぞ。寝るなり、酔わないなら本を読むなり、雑談しても構わない」

私は寝る。到着まではしばらく時間があるし。自動操縦で、林道入口についたらそこで一旦停車するように設定してある。レポートの作成のおかげで仮眠すら出来ていないので、非常に眠いのだ。よって寝る。起こしたら殴る。

第3話

ゆさゆさと体を揺すられて、泥沼のような眠気から意識が少しずつ引き上げられる。目を開くと、そこには見目麗しい女性が……いる訳もなく、居たのはただの隊員だった。

「隊長、移動地点に到着した。降りようぜ」

「……ん、ああ。そうだな、行こう。観測器具は持ったか？」

なにか金髪の女に追い掛け回される夢を見た気がするが、まあそれはいい、どうせ夢は夢だ。任務に関係はないだろうし、内容もはっきりとは覚えていない。大方枯れていたと思つてた欲求が鎌首をもたげて出てきただけだろう。

壁にかけてあるボルトアクション式の対物ライフルとその弾を取り、さらに木の枝や草をたつぷり括り付けた簡単なギリースーツを被り、トラックから降りる。

「ああ」

「よし。それじゃ行こう」

降りたらそこからは徒歩で狙撃地点まで移動する。トラックで狙撃地点に行くのは木が邪魔で無理なので、仕方なく徒歩で行く。贅沢を言えばヘリで急襲して皆殺しが最高に楽なのだが、この部隊にそんなものを与えてもらえないはずもない。大型倉庫の方には地球産の大型武装ヘリがあるようだが、いきなり引っ張り出すわけにも行かない。

鬱蒼とする森の中へ立ち入り、狙撃地点に向けての行軍を開始する。

「……隊長」

道無き道を進み始めてしばらく。三号に声をかけられた。

「何だ」

「なんでその歳で階級まで上り詰めた。子供がそうそうなれるものじゃないはずなのに、どうしてなれたんだ」

これは果たして答えていい事なのだろうか。答えるのは簡単だが、立場としてはどうなのか。流石に「懂れたから」という理由では無理があるし、かと言って本当のことを言うのも不幸自慢のようになって複雑な気分だ……だが部下との信頼関係も重要。信頼関係を築くためには、嘘はよろしくない。

本当のことを話そうか。

「褒められた理由じゃない。復讐だよ」

「テロリストに？」

「それなら話は簡単だったんだけどな。犯人は随分前に証拠不十分で釈放された管理局員だ。忘れちゃったか。まあそいつらだ。両親を殺されたあとその後妹共々連れ去られて拷問を受けてた。そこを救ってくれたのが管理局のさるお方だ……復讐だけならテロ組織に入ってもよかつたんだが、一応の恩返しにな」

それにしても全くひどい話だ。管理局に家族を奪われ人間性を奪われたのに、そこから救ったのもまた管理局だなんて。まあ、憎んでいるのは個人であって管理局という組織ではないので別になんとも思っていないが。

「この部隊を立ち上げたのも、この階級まで上り詰めたのも、全て復讐の土台作りだ。足場があれば多少は動きやすいだろう」

正直に言えば管理局だろうとテロ組織だろうとどちらでもよかつた。制限は多いがそれなりの地位が手に入り、活動にあまり支障のない管理局に、制限は無いが管理局に追い回されることになるテロ組織。どちらも魅力的だし。助けられたのが管理局だった。助けられたのがテロリストなら自分もテロリストになっていただろう。

「どうりで。目が死んでるわけだ」

目が死んでるのか。それはいけないな、これからは公人として会見に出ることもあるだろうから、出来るだけ自然な顔を作れるようになってほしい。

「そうか。で、なぜ急にこんな質問をした」

「俺達の部隊の謎多き若隊長だが、いまだにまともに話したことが無い。少しでも親睦を深めようと思ったわけだ」

「そうか」

私はこいつらの個人情報などどうでもいいし、私も進んでこいつらと話をするつもりはない。ただ、話をすることで訓練への意欲が高まるならそれも試す価値はあるだろう。

と、林道を歩いていると目の前の景色に少しだけ違和感を感じたので立ち止まり、3号にも止まるように手で合図をする。

「ど……」

言葉を出そうとした3号の口に指を突っ込んで黙らせる。

「何か居る。静かに」

耳元で囁き、音を立てないように地面に伏せさせる。もちろん自分も地面に伏せ、様子を見る。だが違和感だけがあっても、見るだけではその正体まではわからない。なので、バックパックスのポケットに入れてあるサーマルスコープを取り出し、装着してその正体を探る。

「……ああ、なるほど」

くつきりと浮かび上がる、明るい色のついた人型の影。なかなか上手く隠れている、普通に歩いていたらまず気付かなかっただろう。警戒しながら歩いていてよかった、危うく後ろから殺られるところだった。

接近戦になったときのために持ってきた大口径拳銃にサブレッツサーを付けて、もう一度他にも敵が居ないかを確認。そして銃を構え、胴体に狙いを付けて、単発射撃。

「うぐあ!?!」

弾はバリアジャケットを貫通したようで、何もなかった空間に血の赤が浮かび上がる。どうにも森で獣を狩っているハンターではなさそうだ。少々時間のロスが出るが、尋問に30分はまずかからないだろう。

「周囲を警戒。動くものがあれば撃て」

「りよ、了解」

3号に指示を出し、腹を押さえて呻いている男を仰向けにしてマウントを取る。そこから口を抑えて右腕に発砲し、デバイスを強制的に手放させる。あとは、マウントという姿勢からちようど傷の上に乗る

形になるので、痛みのあまり声も出ず、目を見開き、顔は青ざめ、それほど暑くもないのに汗を顔面に大量にかいている男の顔を改めて観察する。頭のなかに入れてある指名手配犯の顔写真とは一致しない。

とりあえずこのままでは意思の疎通もままならないので、口にハンカチを突っ込み、顔を一度平手で叩き、正気に戻してからナイフを顔面の横に突き立てる。

「これからいくつかの質問をする。イエスかノーで答えられる簡単な質問だから、声は出さなくていい。出したら眼球をえぐり出す。オーケー?」

「……!!」

ガタガタ震えているせいで首を振っているのか振っていないのかわからないが、とりあえず首を振った事にして尋問を進めよう。

「最初の質問だ。お前は廃墟を占拠している犯罪者の仲間か?」

首は動かない。さっきのは首を振っていなかったのか? 仕方ないな。意思表示をしたくなるようにしてやるか。次は右手で相手の左手を抑え、もう片方の手でナイフを持ち、刃先を犯罪者の抑えている左親指に当てる。

「これから質問を拒否するごとに一本ずつ指を切り落とす……嘘をついていると判断した場合にも同じだ。まず一回」

少しずつ指の付け根に刃を食い込ませて行く。少しずつ力を加えていくと、皮膚を破り今度はより手応えのある筋肉に当たる。

「ん?! んん!!」

泣きながら暴れるが、動けないようにマウントを取っているのだから、いくら体格差があろうと動けるはずもなし。鋭い刃は筋肉を突き破り、硬い骨に当たって止まる。ここからその気になって力を入れれば、骨も簡単に断ち切れるだろう。

「さあ、ここで挽回のチャンスをやろう。お前は犯罪者の仲間か?」
「!!」

目に涙を浮かべながら必死で首を振る男。さっきの姿勢はどうしたのやら、やはり身の危険を鮮明に感じると人は素直になれるよう

だ。

「次の質問。この林道、その周りに居るのはお前だけか？」

今度も首を縦に振る。言ってることが本当かどうかはわからないが、ひとまずは周囲の警戒をしながら進むのが先決か。時間も無限ではない。警戒を強めながら進めば問題無いだろう。

「よく答えてくれた。ありがとう」

礼を言ってからナイフを指から外し、懐にしまう。解放してもらえると勝手に思いこみ、安堵の表情を浮かべる男の脳天に銃弾をぶち込む。額に小さな穴があき、地面には真っ赤な花が咲いたように血が広がる。胸にももう一発撃ちこんで、確実にトドメを刺しておく。

「なんで殺したんだ隊長。抵抗してなかっただろう」

「放置しても出血多量で死んでいた。どっちにしても結果は同じだ」
騒がれてもかなわないし、あのまま放っておいて出血多量で苦しんで死ぬよりはいいだろう。背を向けた途端にもかいたら最後の力を振り絞って殺しにかかってきたかもしれない。そう考えれば、自然なことだ。

周りを見回し、人影がないことを確認し地面に転がったデバイスを回収。バックパックに放り込み、また林道を進む。デバイスは売れば多少の金になるからな。3号が何か言いたげな顔をしていたが、これも仕事だ。これからも同じことを何度もして、何度もさせるのだし、早く慣れてもらいたい。

「はあ……元からマトモじゃないとは思っていたけど、まさか人を殺すしデバイスは奪うし。ひどい上司だ」

「何を今更。馬鹿なことを言っただけで早く行くぞ。時間に遅れたら作戦に支障が出る」

初仕事で失敗なんてしたら、部隊の存在意義を問われるだろう。中将に援軍は要らないと言った手前もある。失敗なんてしたら、恥ずかしいだろう。

第4話

先ほど始末した男の言っていたことはどうやら嘘だったらしく、もう一人だけ隠れている奴が居た。もちろん見つけた瞬間に発砲して、声を出される前に3号に始末させた。殺した感想を聞くと、魔導師でも先手を打てばこんなものか、とあっさりとした感想しか返ってこなかった……まあなんともつまらない。

「質量兵器か……こりや禁止されるわけだ。向けられたくないもんだな」

「魔導師も防御魔法を使わなければあのザマだからな」

自分が使っているのが恐ろしい物である、という自覚を持てるのはいいことだ。自分の手にあるもので何ができるか、何ができないか、何をしてはいけないかを理解できないままに道具を使えば、その内に道具を壊すか道具に壊されるかの、どちらかの結末に落ち着く。管理局が質量兵器を禁止するのは、多数の愚者が簡単に人を殺せる道具を手にし、人死が出るのを防ぐためでもあるのだろう。かといって個人の良心に任せきり、極端な表現だが都市一つ簡単に席圧できる程の力を個人にもたせるのもどうかと思うが。

もしも銃を持ち、乱射する輩が所有者千人につき一人居るとして、被害者は多くても十、二十ほど。対して魔導師でも都市を制圧できるほどの力を持つものはごく少数。しかも大体の人間は管理局に入っているのです、暴れるのはさらに少ない。暴れさえすれば、それはもう被害者が百人単位で出てもおかしくないが。

相対的に見れば、銃を持ち犯罪を犯すのが1として、高ランク魔導師犯罪が0・0001、低ランクならもつと多いだろうが、銃には届かない。なるべくしてなった結末だろう。銃もきちんと管理して、管理局だけが持てるようになれば一番いいのだろうが、やはりどこかで裏ルートに流通するんだろうな。

「隊長、ストップ。その先崖だぞ」

と考えている間に狙撃地点まで到着してしまった。それどころか通り過ぎて転落死するところだった。日の出までどのくらいだろう

か。

「今の時間は、四時五十分。ギリギリだな、休む暇もない」

バックパックを広げ、中からライフルケースと菓子パン、コーヒーを引っ張り出す。夜食にと思って買っておいたのに、まさかこんなハイキングついでに食べることになるとは。腐らすよりはいいが。パンを半分に割り、三号に渡す。残りの半分をコーヒードリッパーで流し込みながら一分とかけずに食べ切り、ライフルの調整をする。スコープのゼロインは700mで、風は右に微弱。弾が逸れることは考えないでいいだろう。ボルトを立てて引いて薬室を開き、弾薬を装填。ボルトを元の位置に戻し、薬室に弾を押し込んで準備は完了。二脚を立てて、工場跡を狙えるように構える。サプレッサーは弾道にブレが出る可能性があるので使わない。三号は伏せて双眼鏡を覗き込み、索敵を行う。

「三号。頭を出してるバカは居るか」

日の出までは、通常の高倍率スコープでは薄暗くてよく見えない。かと言って暗視スコープに付け替える暇はない。付け替えたら多分照準が少しズレる。

「二階右から四つ目の窓から、外を監視してるのが一人。正面玄関付近を巡回するのが二人」

「……一人、二人三人。確認」

空も少しずつ白んできている。地上にも太陽の光が差し込んでくるので、敵の姿もはっきりと見えて来た。デバイスは起動していないようで、何も持っていない。

「先に仕留めたらどうだ？」

「日が出るのを待つ。薄暗いとあまりよろしくない」

残りの一人は人質の見張りか、あるいは人質とお楽しみ中か。そうでなければ休んでいるのだろう。

「五時零分、作戦開始」

『了解』

スコープを覗き、十字線を中心に窓から顔を覗かせる男に合わせ、

トリガーを一度引く。ドゴン、と腹に響く音が鳴り、ほぼ同時に犯罪者の体が真つ二つに裂けた。さすが対物ライフル。人間に使うには少々威力が大きすぎる。

「見張り二人が音に気づいてデバイスを起動しました」

「問題ない」

バリアジャケットを展開した歩哨に照準を合わせ、また発射。運よく頭にあたったのか、首から上が消し飛んで、首から噴水のように血を噴き出して倒れた。もう一人も狙おうとしたが、建物の中に隠れられてしまった。

「砲撃開始」

『了解、砲撃開始！』

ボン、ボン、とまずは二度砲撃音が静かな山の中に響いてから数秒後。さっきの砲音とはまた別種の大きな音が鳴った。こちらもまた腹の底に心地よく響く轟音。迫撃砲の砲弾は見事建物に着弾し、その屋根に大きな穴を空けた。

「工場に着弾。砲撃班、穴から一人魔導師が出てきた。空戦魔導師」

「了解」

『了解』

スコープを当ててない方の目で空に出た魔導師の姿を探し、銃を動かしてまたレイトクルに合わせる。今度は頭でなく胴体を狙う。が、空中でうろうろと飛び回り砲撃班を探しているので、正確に狙えない。狙いはついているのだが、止まらなければ命中は期待できない。

「砲撃班、第二射」

『今撃つ』

ボン、とまた大きな音がして砲弾が空中に飛び出し、放物線を描いて建物へ落下して行く。はずだったが、その砲弾は放物線の頂点で爆発した。魔力弾に撃ち抜かれたのだ。しかし同時に魔力弾を撃った直後の硬直を狙って私も撃ったので、砲弾を撃ち落として自分も撃ち落とされる結末となった。

「空戦魔導師撃墜」

『隊長！　なんか落ちたぞ！』

ヘッドセットから1号の大きな声が。耳が痛い。たかが人が降ってきたくらいで騒ぐなよ、まったく。

「鳥だ。気にするな」

『いや、思い切り人型に見えたが』

「じゃあ人の形をした鳥だ」

「砲撃班の方に2人向かった。道路を走ってるが、早い。逃げた方がいいんじゃないか」

銃を構え直し、走る魔導師の走る速度を考え、当たるように手前に銃弾を撃ち込む。しかし、外れてずっと手前に着弾した。やはり動く目標は狙えないか。おまけにこっちに気付かれた。片方向かってきたし、これはまずい。

『了解。撤退する』

「了解。三号、お前はライフルを持って撤退しろ」

ライフルをケースにしまって三号に渡し、動きやすいようにギリリースーツも脱いで普通の迷彩服に。剣の形をイメージして、ロストログアの形を整える。そしてすぐに消す。イメージさえ固めておけば、一息と置かずに出せる。出せるようになるまで練習した。

「隊長は？」

「迎撃するから逃げろ」

「年下を置いて逃げろって？ 無茶言わんでくれ」

はつきり言って、居られても迷惑なんだが。まあ仕方ない、変に反抗を買いたくもないし、居たいなら本人の意志を尊重しよう。

「ここで迎撃する。茂みに隠れて、隙があつたら撃て」

三号に指示を出し、こちらに向かってくる魔導師に向き直る。それにしても、あの魔導師は足が早い。さつきはかなり遠くに居たはずだが、もう結構近くまで接近してきている。残り十秒もあれば交戦距離に入るだろう。60秒はかかると思ってたんだが。

蛇足だが、木々を足場にして走るのは非常に気持ち悪い。

「こんにちは、死ね！」

崖を垂直に駆け上がってきたと思ったら、そのまま飛び上がり、大剣を重力に任せて振り下ろしてきた。なかなかインパクトのある攻

撃だが、大振りなので避けるのは非常に簡単だった。横に少し飛ぶするだけで避けれる攻撃なんて意味がないだろう。しかも剣が地面にめり込んで抜けなくなってるし、それを必死になって抜こうとしている。こいつは間違いない馬鹿だろう。どうしてこんな馬鹿が人質を取れたんだ？ ……馬鹿だからか。

「ぐはー」

剣を抜こうと必死になっているところを、三号が容赦なく弾丸を撃ち込む。しかし頭に見える程度の発赤ができただけで、ダメージはなさそう。所持する武器の中で一番貫通力のある武器で、鎧はともかく露出している頭部を狙ってこれとは、非常にまずい。戦っても勝ち目は薄いだろう。

対物ライフルを腰だめに構えて、銃口を頭に押し付ける。

「ちよ、待てよ！ 俺まだ剣抜いてないぜ!？」

そんなことは知らない、トリガーを引くが、手応えは今一。頭の潰れる音どころか、まるで鉄の塊を殴ったような音しかなかった。それでもデバイスは地面に刺さったままになり、その所有者は吹っ飛んで崖の下へ真っ逆さまに落ちて行ったのだが。きつと死んではいないだろう。生きていてもデバイスは地面に刺さっているから、大した戦力にはならないだろう。

「何だったんだ、あいつは」

「知るか。それよりも、砲撃班。被害状況を報告しろ」

こっちは雑魚というか馬鹿だから無力化に時間はかからなかったが、向こうも馬鹿とは思えない。死んでるとは思えないが…連絡はしてみようか。

『あ、隊長。無力化できたぜ。こっちの傷は擦り傷程度だ』

『地雷の一斉爆破でミンチになったの見ちまった……しばらく肉は食えねえな』

…どうやら無事だったようだ。初任務で死傷者ゼロ、素晴らしい成果だ。人質はどうか知らないが、全員始末したし残りは空か海かが送ってくる部隊に手柄を譲ろう。人質が生きていければの話だが。

「それじゃあ、中将のに報告しようか」

バックバックを漁り、連絡用の端末を探す。確か底の方に押し込んでいたはずだが……なかなか見つからん。あつた。

端末を取り出して、番号を入力。空中に映像が投影され、渋いオッサンの顔がアツプで映る。

「報告、犯人は一名除き全員殺害。その一名は崖の下へ落としたので、生死の確認は不可能。人質の無事はこれから確認します。あとは迎えをお願いします」

『ご苦労だった。迎えは出せない、行きに使ったトラックで帰ってきてたまえ』

「わかりました。あとはこんなふぎけた任務を言い出した奴に『訓練中なのにあまり無茶な仕事を押し付けるな、脳が疲れて凝り固まった老害』と言っておいてください」

目障りだから排除したいという気持ちはわからなくてもないが、流石に今回のような事は我慢ならない。設立一週間の部隊をいきなり戦場へ放り出すなんて馬鹿がどこにいる。私が経験豊富なテクニシャンだから安心して任せた、とかそういう言い訳は聞かないぞ。

『こちらにも抗議はしておく。迎えはすぐによこそう』

「ついでに予算もいただけませんか」

『それは無理だと何度も言っているだろう。だが、人員は一名確保できた。また後日隊舎に向かわせる。それと、また後日本日の件で表彰を行う。帰ってきたら制服にアイロンをかけておけ』

「了解しました。失礼致します」

通信を切る。表彰と人員追加とは。嬉しいやら嬉しくないやら。確かに今は人員も、名誉に伴う支持も必要だが、一番必要なのは予算だ。名誉を得て支持を得て、金がなくても少ない予算のまま人員が増えても動きづらくなるだけ。そして今後は活躍の場をもっとたくさんもらえるだろう。嬉しくない。

「二号と一号は人質の回収に向かえ。私と三号は回収ポイントで待機する。死亡していても回収しろ」

『了解。人質の回収に向かいます』

人質が生きていれば、善意での募金を頼んでみようか。まあ、無理

だろうな。人質のごと砲撃で殺そうとしたんだし。

第5話

日の出からわずか十分という短い時間で終了した、犯罪者の撃破作戦。救出した人質は四人。全員脱水と栄養不足により入院。その内一人は犯罪者の慰み者になり、精神に大きなダメージを負い、社会復帰は困難と思われる。一人は我々が砲撃した時に降ってきた瓦礫に腕を潰され、治療することに。手術は済んだらしいので、後で謝罪に行く予定。

死者は二人。片方は脱水と栄養不足で衰弱したところにさらに暴行を加えられて死亡。もう一人は砲撃時に降ってきた瓦礫の下敷きになり、死亡。これは一応報告はするが、公表時には犯罪者のせいにする。死人に口なし。人質にも情報を漏らされると少し困ったことになるので、喋らないように釘を刺しておく。脅迫と口止め料を渡せば黙っておいてくれるだろう。見舞いについてやってみようか。

逃した最後の一人の犯罪者は、捜索隊による山狩りの末無事に死体で見つかった。死体には大型の獣に引つかかれ、噛み付かれた跡があり、山を降りようとしたら熊にでも見つかって襲われて死んだのだろう。

「以上が報告です。どうでしょうか、中将」

「……准尉。我々は市民を守るために居る。その市民を脅すようなことは、市民に沈黙を強制することは、あってはならない」

「わかりました。ではそのように」

市民を脅すな、沈黙を強制するなどは、あくまでも表向きの発言なのだろう。防いでもそれが必要なことならばきつと許してもらえないはずだ。例えば、ひったくりをして逃げる犯罪者を捕まえるために半殺しにして、逃げられないように足を折ったりする。それと同じようなことだ。

「今度は部隊の人員と予算追加の要求だが……一部隊だけを優遇する訳にはいかないのだよ。わかってくれ」

やっぱりダメか。活躍すればもしや……と思っただけだが、そううまく行くはずもないか。部隊が作られただけでも奇跡に等しいんだ、これ

以上を望むのは贅沢というもの。ましてや結構な数の人員と、ヘリや立派な隊舎まで持っている、同じ時期に作られた機動六課と比べるなんて……隊舎がプレハブ小屋なのは人数も少ないし予算もほとんど無いうちの部隊では仕方がないことなんだ。

「機動六課の隊舎は立派ですよ。同じ時期に設立された部隊なのに」

「准尉。気持ちはわかるが手は出すなよ」

「わかってますよ中将」

さすがに私もそこまでバカじゃない。あの部隊のバックには色々と控えているからこそ、あんな部隊に馬鹿みたいに予算を割けるんだ。ああ、羨ましいこと。どうやったらあんなに大きなコネを作れるのか、今度聞いてみるか。聞いた所で参考になるかは知らないが。

「君の部隊には、あそこほどでは無いがそれなりの特権もあるだろう」
「発砲許可を待つ必要がないことと、保管庫にある武器は自由に使っていることですよ」

発砲許可はともかく、保管庫にある武器はホコリは被ってるしほとんど純正品じゃないし。弾と銃がセットで置いてあると思ったら、その銃には使えない弾だったり。銃が山のように積み上げられてたり。爆薬が剥き出しで置いてあったり。分解整備しないと怖くて使えないと思ったら、整備用の器具もない。その器具は予算が無いから郊外にあるガンショップから自腹で取り寄せたり。都合がいいから整理や整備まで押し付けようとしているとしか思えない。

「もう少し陸の予算と人員が増えれば、どうにかなるのだが。今年度の予算はどうなるやら」

「噂ですが、海は次元航行艦をまた増やすという話を聞きました」

「せめて、あれ一隻分でも陸に回してくれればいいものを……」

「空は空でヘリをダース単位で買うとか」

「そうか……で、陸は？」

「戦車はスクラップにしろと要請がくるかもしれませんが。使わない物をいつまで置いておくつもりなんだ、という話を聞きましたから。予算は増減なし。もしスクラップにするとしたら整備代が浮きますね」

「遅かれ早かれくるとは思っていたが……准尉、戦車を一台君の部隊にやろう」

何と嬉しいことだ、ありがとうございます中将。とは言わない。戦車は非常に強力な兵器だが、立派な金食い虫だ。動かすには金がかかりすぎる。管理局では珍しく実弾をメインに使う兵器では、質量兵器を運用するうちの部隊にピッタリとも言えるのだが。現場に持って行ったら一度で予算が空になる。運用するための人員も居ない。結局は立派な置物だ。

「ランニングコストは誰が持つのでしょうか」

「そちらの予算から出してもらおう」

だと思った。流石にそんな美味しい話があるわけがない。大きな金を支払って払って購入した兵器をタダでプレゼントしてもらえないはずがない。

「無理です。それに戦車を持ち出さないと対応できないような高ランク魔導師が、陸の管轄内に出ることはそうないでしょう。出たとしても海か空が手柄目当てに出てきて、勝手に倒してくれるでしょう。つまり現状と変わらず、置き物になります」

仮に出張してきたよその部署が失敗したとしても、24時間張り付いて狙撃で仕留めることになると思うので、きつと使うことはないだろう。維持費だけかかって役に立たないものは不要だ。

「そうか。まあ、仕方が無いか。無理に置き続ける必要もあるまい」
そうしてくれるとありがたい。が、利用方法もない訳ではないので廃棄処分にするのは少し気が早いと思わないでもない。

「これはあくまでも小官の意見ですが、最近ガジェットが増えているようなので、それへの対策に置いておくのもいいのではないでしょうか。AMFのせいで魔導師が対処できなくても、質量兵器を扱える者ならどうとでもなります」

「来るかどうかもわからない物のために、とは言うつもりはない。現にアインヘリアルの完成を推し進めているしな」

あんなでかい砲台が、何の役に立つのか。この中将は現場をよく知っている男だ、でなければ平和の立役者と呼ばれることもないだろ

うし、ただの一大艦巨砲主義者《時代遅れ》とは考えられない。何を考えているのか聞き出さなければ、予算を回してもらえない事に納得がいかない。

「……出過ぎた意見と承知で言いますが、建造中のアインヘリアルは非常に大型の砲台であり、ガジェットのような多数の小型目標には効果薄いと思われます。ガジエットの出現数が飛躍的に増えているのにあえてその建造を進めるのには、何か理由があるのででしょうか」

「……何故だと思う」

この男、なかなか意地が悪い。言いにくいと知っておきながら、あえてそれを口に出させようというのか。

「武器というのは、破壊する対象がありそれに合わせて、あるいは上回るよう作られるものです。あれだけ強力な砲台ならば、それに見あつた大型の目標となるのではないでしょうか。例えば戦艦のような。しかし現時点で管理局以外にそんな物を保有する勢力は存在しません……ここから先は言葉に出せば懲罰を受けると予想されるので、発言は控えさせていただきます」

「少し考えれば誰でもたどり着ける、安易な結論だ。まあ現時点で明らかになっている情報では、そんなものだろう。議会が陸に予算が回さない理由の一つにもなっている。しかし、君の予想は外れているから気にするな」

「……中将は刑事ドラマをご覧になられますか？」

そんな言葉が信用できるはずがない、と遠回しに言ってる。

「暇な時にはな」

「取り調べをする警察は、必ず『お前がやったんだろう』と言って容疑者に自白させようとしています、あれはどうなんでしょう」

「取り調べでは犯人でなくても、犯人であつても。大抵は自分は犯人ではないと言うだろうからな。仕方が無い」

「確実に犯人でないという証拠が無ければ、いつまでも疑い続けるでしょうよ」

この男は頭がいい、今の状況と会話の内容を照らし合わせて、言い

たいことはわかってくれる。

「……つまり、信じるに足る証拠を示せと言うのだな？」

「上下関係において信用・信頼は重要ですよ、中将殿」

下手をすれば懲罰で降格処分を受ける可能性もあるが、そうなたらそうなたで諦めよう。今はこの男が管理局に牙を向けるのか否かを確かめる。向けるのならば海や空に報告する。向けないのなら現状維持。排除しようなどとは考えない。私にも立場というものがある。

「どうしても話せないのだ。わかってくれ」

「ではこれ以上深入りするのはやめておきます」

「そうしてくれ」

「失礼します」

敬礼してから部屋のスライドドアの横にある武器を取り、部屋の外へ出て一呼吸。節電のためか、照明を点けず窓から入る光だけで照らされる廊下は薄暗く、少し不気味で、何かが出そうな気がしないでもない。陸にしばらく勤めてはいるが、今日ほど何かが出そうな雰囲気を出している日はそうなかった。

というか、出ているのだが。指が、床から。

変な薬を飲んだ覚えはなし。アルコールを摂取した覚えもなし。昼食に幻覚性の物質が入っていた訳もなく、目の前の怪奇現象が現実であると視覚が訴えて来る。

「……」

とりあえず何かが気になるので、近寄って腰をおろしじつくりと観察……しようとする、床に沈んで消えた。

何だったのかはわからなかったが、指の先にカメラがついていたので、幽霊のような存在ではないと思われる。しかし、少なくとも私はそんな人物が居るとは聞いていないし、地面に潜れるレアスキルを持った人間は陸には居ない。コソコソと地面に潜り、カメラで見て回る怪しい存在。スパイとしか考えられない。

「……」

スパイの一人くらい居ても、陸が潰れるような事はまずないだろう

し、どうでもいいか。報告しても連れて行かなければ、「スパイなどどこにいる」で済まされるだろうし。それで予算がもらえるわけでもないだろうし。

数歩進むと床に人間大の影が現れ、こちらを掴もうとしているように見えたので、振り返りながらナイフを抜き、そのまま振り抜く。動作が大きかったので当然ながら空振りしたが、相手が距離を離してくれたので、その容貌をよく観察できた。

「タイミングは完璧だと思っただけでなく、気付かれたかあ」

水色の髪に、防御力よりも動きやすさを重視しているのか、肉体の露出は無いが、ボディラインをはつきりと浮かばせるラバースーツのような際どい服装の少女。胸は小さい。趣味で着ているのなら痴女と呼べる人種に入るだろう。年齢は10代後半か前半か区別がつけにくい、20はいってないだろう。

「折角床に潜れたのにどうして姿を出した？」

「ドクターには連れて来いと命令されたツスから」

殺害ではなく、気絶させることが目的。気絶させて拉致するつもりだったか。馬鹿正直に答えてくれるとは、馬鹿なのか律儀なのか。味方と呼んでも潜られて逃げられるだろうし、一人で捕まえて誰が何のために拉致させようとしたのか吐かせよう。

「抵抗するのなら、攻撃も許可されてる。できれば抵抗せず着いて来て貰いたいかな」

「殺す気は無いと」

「まあ、ドクターには生きてまま連れて来るように言われてるから」

「何のために」

「話がしたいとだけ聞いてるよ」

テレビドラマだと、話がしたいと言われてホイホイ付いて行ったら殺された。または殺されないまでも酷い目にあつたという展開が多い。

しかし相手の実力がわからないまま戦闘をするのも不安が残る。逃げるのも、床に潜れるならどこへ逃げて追ってくる。応援を呼べばどうにかなるだろうか、すぐそこに中将の部屋があるし。よし、呼

ぼう。

「静かにしてもらえないか。私は面倒が嫌いなんだ」

「……」

叫ぼうとしたが、背後から首に冷たいものを当てられたので、ナイフを手放して両手を上にあげ、黙る。痛みを感じないと言っても、出血が過ぎれば死んでしまう。

「大人しくついて来てもらおう。准尉」

一人でなく複数だったとは。これはうっかりしていた。まあ、敵地に単独で侵入するなんて、どこかのゲームの主人公のような真似を實際にするはずもないか。それを頭に入れていなかった自分の考えの浅さに呆れてしまう。

ナイフを落として、両手を頭の上に置いて降参の意思を示す。

「わかった。抵抗しない……」

私は抵抗はしない。私は、な。

「離れろ！」

私の首に刃物と思しき物を押し付けている方の侵入者が叫び、私を捕まえようと近寄っていた少女も両方とも離れる。その直後、弾丸が頭の横を通り抜けて床に着弾、同時に銃声も耳に届く。

「くそ、応援か！」

「何というか。ここがどこだと思ってる」

巷では無能と罵られていても、ここは地上本部のど真ん中。監視カメラくらいはある。立ち入り許可を得ていない部外者がのんびりしてれば人が来るのは、当然の事だ。さらに新参とはいえ一部隊の隊長が危害を加えられていれば、何が何でも拘束しようとするだろう。だが陸にもメンツというものがあるので、外部に知られる訳にはいかない。警報が鳴らないのもきつとそのためだろう。

無力化より殺傷を優先した大口径拳銃を取り出し、落としたナイフを拾って構え。拳銃は相手の胴体を狙い、引き金に指をかけておく。一歩でも動いたら撃つ。

射撃の第二射が来ないのは、私が射線上に居るからだろう。味方ごと撃てなんて事は教育していないからな。

「一発で仕留めろよ二号」

「無茶言わんでくれ。隊長ごと撃つわけにも行かないだろう」

よし、二号には後で罰をくれてやろう。

「分が悪い、逃げるぞ」

さつき私に刃物を突きつけてくれた方の侵入者が窓に飛び込もうとしていたので、拳銃弾をフルオートでばら撒く。一秒しない間に1マガジン12発の銃弾がばら撒かれ、その内何発かは命中したが、恐ろしいことに全て当たる寸前でバリアのようなものに弾かれた。

「追撃する」

「無理はするなよ准尉」

「わかっている。2号、当たらなくてもいいから狙撃で支援しろ。私に当てなければ構わない」

心配されているが、本当に無理はしない。相手の実力がこちらより上なら火力支援をさせて撤退するつもり。狭い廊下よりも広い場所の方が全力を出せる。狭い中より広い外のほうが射線も通るし、物品を破壊する恐れもないので思い切り暴れられる。

デバイスを使わずに肉体強化をしてから窓から外に飛び出し、逃げる侵入者を追う。銃の予備弾は持っていないのでホルスターに納めておく。

「追って来るか!」

肉体強化の魔法を使っていると思う位の速度で走っていた侵入者が足を止め、こちらに振り向いた。右目は潰れているのか眼帯をしている。魔導師ではなさそうだが、あの運動能力は通常の間ではあり得ない。だから警戒しつつ右側から攻め、確実に行動不能に追い込む。もう一人も警戒しておこう。

「大人しく投降しろ。そうすれば危害は加えない」

一応降伏勧告を行う。問答無用で攻撃してもいいのだが、一応だ。おとなしくしてくれるならよし、そうでないなら……相応の対応を取らせてもらう。

「ふん、そちらから追いかけてくるとは。好都合だ……手足の一本や二本は覚悟しろ!」

交渉決裂、ということでもいいのだろう。ナイフのような物を4本同時に投げられたが、急所だけ左腕で庇いつつ右手に持ったナイフで2本だけ叩き落としながら前進。腕と脇腹に一本ずつ、深く刺さる。しかし行動に支障はないので正面から突っ込む。

「かかったな、アホが！」

左腕と腹に刺さったナイフが熱を持ったかと思えば、爆発して肉を大きく削り取って行った。さらに爆発で舞い上がった砂や土が視界を塞ぐ。肉体に損傷を負ったのは不都合だが、視界がふさがったのは好都合だ。

「……しまった、殺したか？」

最初は何度か切りつけてから、と思っていたが流石に能力の低下が出るので計画変更。一撃で行動不能に追い込む。土煙の中をさらに勢いをつけて相手の右側目掛けて突っ込み、ナイフを捨てて腕を振り上げ、ロストロギアを発動。一瞬の間すら置かず手の中に大剣が現れたので、離さないようにしっかりと握る。力の入らない左腕は、上から抑えるだけ。

「クソ！」

肉体強化によりブーストされた筋力で鉄塊とも言える大剣の腹を下にし、上段から垂直に振り下ろす。目の前の少女はあの爆発を突破してきた事か、今の私のダメージで動ける事に驚いているのか。隙だらけだ。そんな事はお構いなしに、そのまま叩きつける。さつきも拳銃への防御手段として出てきたバリア、のような物に軌道を逸らされ、外れた。

「化物め！」

さすがに単純過ぎたようだ。避けられてしまい地面を叩く形になってしまったが、思っていたよりも勢いがついていたのか刀身がバウンドして僅かに浮いた。それを今度は相手の方へ飛び込みながら足を狙って水平に振る。今度はバリアごと切り裂き、肉を潰し、骨のような物に当たった……が、硬い。音も骨ではない。両足まとめて叩き切るつもりで振ったのだが、残念。だが、足に真横のベクトルの力が加わり、そのまま空中で一回転して顔面を地面に叩きつける形と

なった。追撃にもう一発と剣を振り上げたが、反撃にさきほどのナイフのようなものを投げてきたので、剣を盾の代わりに構えて弾き、爆風に巻き込まれないために後ろに飛ぶ。これ以上のダメージは危険だ。

「チンクー！」

潜っていたもう一人が姿を現し、倒れたチンクと呼ばれる少女を抱きかかえて地面に潜り、連れ去ろうとする。しかしそんなことは許さない。これだけの無茶をしてくれたのだ、逃がすわけにはいくまい。

「逃がすなよ、2号」

『今度は当たる。多分』

二発の弾丸が地面に当たり、一発がチンクと呼ばれる少女の腹部に。もう一人の上腕に一発。腹部に二発が命中。いくら何かされた人間でも、大口徑狙撃銃の銃弾を何発もくらって動けるはずがない。しかし慢心は死を呼び込むので、さっさと隊員に回収させよう。私の出血量もそろそろやばくなって来る頃だろうし、遅れてやってきた糞つたれで役立たずの他所の部隊員に止血だけでもしてもらわなければ。

『無茶しないって言ってなかったか、隊長』

「判断ミスだ。早く治療してくれ」

あの時受けずに弾くか避けていればもう少し軽傷で済んだだろう。あんな手品を使ってくるとは思わなかったし、相手に殺す気が無いようだったので、意表を突くためにわざと受けてしまったが。今度からはダメージ回避をもう少し考えて動こう。あれがもしも胸に当たっていたら即死だった。危ない危ない。

第6話

私を狙った地上本部襲撃事件から三日。返り討ちにして捕獲した襲撃犯が逃走したという知らせを、電話でさっき聞いた。尋問しても頑として口を割らず、薬をぶち込んでも耐性があつたのか口を割らず。おかげで結局奴らの本当の目的がなんだったのか、それはわからなかつたそう。ただ、身体検査でやつらが戦闘機人という、いわゆるサイボーグというやつだったらしい。それを聞いて道理で身体能力も高いし、骨は硬いわけだ。と一人納得した。あと地面に潜つたりナイフを爆発させたりするのも、そいつらの固有の能力だったとか。どういう原理かよくわからないが、レアスキルも同じようなものか。「しかし、どこから情報が漏れたんだろうな」

普通ならどこの部隊がどういう戦力と交戦したとか、そういった情報はその部隊を保有する本部……私たちならば地上本部が嚴重に管理し、広報するか否かを決定するものだが。広報しないとすれば、どこにも漏れるはずがないのだが。レジアス中將からは入院初日に、今回の戦闘は広報しないという意向を知らせに来てくれた。しかし、なぜか入院二日目には鬱陶しいマスコミが飽きたがる蟻のようにワラワラと病院へやってきた。しかもなぜか私のことを、地上本部に襲撃をかけた犯罪者を単独で撃退し、名誉の負傷を負った、地上本部新部隊の若き隊長、非魔道士における希望などという扱いで取材に来た。静かに寝たいということ。院長に直訴して全員お帰り願ったが、顔は撮られるし今日の新聞にはそのことが一面にデカデカと貼られていたし。おまけに今度は騒ぎを聞きつけたあの機動六課の隊長が会いに来た。非常にうれしくない。

「それで、一体何をしに来たんでしょう」

私のベッドの横に座り、ニコニコと非常に楽しそうな笑顔で馴れ馴れしく接してくる八神はやて。今までただの一度も、直接的にも間接的にも接触を持ったことはないのに、この馴れ馴れしさは一体なんなのか。演技でも初対面の人間とこれほどフレンドリーに話せるものなのか。

「まあまあ、そう言わんと。同じ時期に立ち上げた部隊の隊長同士、仲良くせえへんか？」

天然なのか狙って言ってるのか。こいつは地味に腹の立つ事を言ってくれる。私の質量兵器試験運用部隊と機動六課、予算額の差と、部隊員の数の差も半端じゃないのに、仲良くしろというのはさすがに無理があるだろう。どうせ私の交戦した相手の情報が目的なのだろうし、話す気もなければ話す許可もないので、さっさと帰ってくれないだろうか

「どうせ情報が目当てなんでしよう。中將に聞いてください。私には話す権限がない」

「もう行って頼んだわ」

「なるほど。それで拒否されたから私のところへ来たわけですか」

中將は機動六課を嫌っているからな。嫌っているのは私もだが。頭を下げて頼み込んで、却下される様が目に浮かぶ。しかし同情はない。嫌われるようなことをする方が悪い。

「まだ拒否されたとも何とも言つとらんけど」

「許可が出たのなら本部で情報を閲覧して今頃隊舎に戻っているはずでは？」

「……まあその通りや」

「ここに来るまでの時間を無駄にしていまい申し訳ないですが、相手が戦闘機人であり、私を拉致しに来たという事以上はわかりません」
背後に居る人間についてはだいたい予想できる。この広い次元世界といえど、あんなモノを創りだしてさらには管理局に喧嘩を売るような奴といえば、数は非常に限られる。

ジェイル・スカリエッティ……確か、生命工学を研究し、違法な実験を行い、違法なモノを創りだして指名手配されている。管理局が本気を出して捕まえようとすればどこへ逃げようと数日で捕まえられるはずだが、それでも長い間逃亡・隠遁生活を続けているところを考えるとスパイでも居るのだろう。もしくは上のほうがわざと捕まえず、泳がせているのか……そんなことは一兵には関係ないか。

「せやな、無理強いはせえへん。無理言つてごめん」

「いいえ、構いません。せめてものお詫びです、玄関まではお送りしましょう」

シーツを持ち上げ、ベッドの端に座ってシューズを履いて立ち上がる。傷自体はもう塞がっているが、組織の修復に一週間はかかるということで安静にさせられているだけ。歩くくらいは問題ないだろう。痛みは元から無いからもし傷が開いてもわからないが。まあ、その場合は入院期間がすこし伸びるだけだ。問題ないだろう。

「立つても大丈夫なん？」

「痛みがないので大丈夫でしょう」

きつと大丈夫だと思い、ドアを開いてエレベーターまで連れて行く。エレベーターまでは会話はなかったが、エレベーターに乗ってから話しかけられた。視線は交わさない、隣に立っているだけ。

「なあ、君。管理局の人に助けられて入局したんやろ？」

「……ええ」

助けられたから管理局に入ったわけではない。復讐するための力を手に入れる手段として、管理局に入った。その力を元手にして、私はさらに大きな力を手に入れようとしている。今の部隊も、少しずつ人員を増やし、予算も獲得していくつもりでいる。分の悪い賭けだ、途中で見つかり、蟻のように踏み潰される可能性も高いというのに。我ながら、よくもここまで分の悪い賭けをする気になったと思う。折角部隊を立ち上げたからには最後までやるつもりだが。

「でも、魔導師やない」

「ええ」

「辞めろとは言わへんけど、前線からは引いた方がええと思うで」

何も知らないくせに、よく言う。いや、何も知らないからこそ言えるのか。私がどんな気持ちで管理局に入ったのか、なぜこうして働いているかなど。才能に恵まれ、力に恵まれ……そして強大な部隊と多くの予算を分捕っていった、何もかもに恵まれているこの女にわかるはずがない。

「なぜ？」

「死ぬで。家族や友達を悲しませたくないやろ？」

「家族に友達……エエ、ソウデスネ」

「何や？」

家族は居るが、友人は一人も居ない。おまけにその家族も……昔に比べれば随分と回復してきたのか、最近会う度に「死ね」だの「殺してやる」と言つて首を絞めてくる。枯れ果てた木のようにやせ細った腕なのに、首を絞める力だけは力強くて。痛みは無いはずなのに、痛いと感じた。瞳孔は夜中の猫みたいに開いて、眼球は激しく動いて……とてもとても、正気とは呼べない。

私にとつては家族でも、彼女にとつては私はもう家族ではないのだろうか。きつとそうなのだろう。自分が目の前で辱められているのに、助けてくれなかったのだから恨むのも当然だろう。確か願いを叶えるロストロギアがあつたと思うのだが、どうにかして奪えないだろうか……それがあれば、もしかしたら心も治るかもしれない。手に入るのが無理か。

「いいえ、何でもありませんよ」

「……もしかして、家族居らんの？」

鼻のよききく嫌な女だ。これ以上話したくないな。ボロを出して弱みを握られたくはない。

「居ますよ……ちゃんね。しかし、これは今話さなければならぬ事でしょうか」

「それはまた別の機会にゆっくり話し合いたいって事？ 嫌やわあ、そんな急にデートの誘いをされても困るんやけど」

あえて言おう。うざい。半端じゃなく、うざい。妹のことを思い出して落ち込んでいるところにこのうざさ。殴りたいけど殴るとマズイ……理性と激情に挟まれて心が折れそうだ。拳を握り締め、深呼吸を一回することで心を落ち着けて耐える。

「……はあ、馴れ合いをするつもりは無いですよ」

「そうそう、馴れ合いで思い出したわ。危なく忘れるとこやった。今度、部隊同士の交流戦せえへんか？ もちろん報酬は出すで」

交流戦？ ……拒否しようか。いや、しかし考えてみればなかなかこういう機会はない。実戦に勝る訓練はないが、実戦形式の訓練も

対応できる状況を広げるのに役立つだろう。だが、問題は銃だ。非殺傷設定なんて便利なものは無いし、常に急所を狙うように命令してあるから、ヘタをすれば死人が出る。それはまずい。

「私の部隊は目標の殺傷が基本となる部隊ですから、テロリスト役にはちょうどいいかもしれませんね。しかし、模擬弾がないのでひよつとすると怪我人、下手をすれば死人が出るかもしれません」

「模擬弾くらいなら、余った予算で調達したげるけど」

模擬弾くらい？ 余った予算？ こっちは予算がなくて倉庫の中の使用期限が切れてる弾丸を暴発しないかヒヤヒヤしながら使ってるのに……羨ましいことだ。

「そうですか。なら退院して体の調子が戻ったらお願いします」

「あ、受けてくれるん？」

「生きた的を提供してくれて、さらには模擬弾まで用意してくれるのに、拒否する理由がありませんよ」

エレベーターが止まって扉が開き、その先に正面玄関が見えた。ついでにマイクを持ったマスコミの姿も。

「では、私はここまでで。またお会いしましょう、八神二佐」

「ほなな。模擬戦、楽しみにしとるで、オズワルド准尉。あと、はやってって呼んでもええんやで？」

「遠慮させて頂きます」

背中を押してエレベーターから押出し、すぐに『閉める』ボタンを押す。目をつけられた以上これから長い付き合いになるだろうが、必要以上に慣れ合うつもりはない。互いに適切な距離を保って、部隊は違うが同じ隊長同士として付きあっていくつもりだ。

第7話

人体とはなかなか頑丈なものだと、私は思った。技術が優れているのもあるのだろうが、入院から五日で退院できてしまった。医者曰く、「ここまで回復が早いのはどうかしている」とのこと。ロストロギアの判明していない機能に、宿主の回復力強化でもあるのか。

それと退院するときには、医者からは、鎧でも着て働いたらどうかと言われた。銃を構えるときに邪魔になりそうなのであまりよろしくないアイデアだ。

医師からは一応少しの間激しい運動は避けるようにと言われたので、今日は訓練はしない。

「諸君。今日の訓練はなしだ。倉庫の整理をしてもらおう」

質量兵器はその特性上ほとんどが地球製だが、管理局が管理世界として登録する前には科学を使い生活をしていた世界には、よく質量兵器が存在している。しかし、たった100年程度で管理局が手を出すのを躊躇するほど発展した科学を持つようになった地球製品の前には大抵の物は劣って見えてしまう。だが優れている物が無い事も無いはず。今回はそういうものを探るのが目的だ。

「あの山をたった四人で片付ける？ 無茶を言うなよ隊長」

「ここで、諸君にサプライズだ、なんと我が部隊の要望が聞き入れられ、人員の追加が決定したのだ」

一号から三号までが、少しの間フリーズしたように動かなくなり、数秒後に再起動し、その場で子供のように飛び回り喜びを全身で表現していた。むさいオッサン三人が飛び跳ねて喜ぶ光景は、二度と見たく無いほど見苦しかった。

「といっても一人だけだが」

直後、一斉に肩を落として地面に膝をつく。こいつら気持ち悪いほど息が合っている。日頃の訓練の賜物か。

「なん………だど？ よくも騙したな隊長！」

「人間きの悪い事を言うな一号。私は人数を言った覚えはないぞ」

それにしてもこいつら全員、頭は大丈夫なのか。少し訓練がキツすぎるのかもしれない。緩くするべきか？ いや、それは不要だな。映画で見た訓練はもっと激しかった。うちは厳しいと言われるが、規則や口の聴き方に関しては何も問題ないはずだ。

「陸は人が少ないんだ。新しく人を回してもらえただけありがたいと思え」

本当に、陸には人が居ない。空や海に比べると本当に少ない。あちこちから人を集めていた機動六課から声をかけられたのに、同じ課の人に行かないでくれと懇願されたから断ったという話があるほど少ない。

まあそんなわけで、私含め隊員が四人から五人になったただけだが、できる事はかなり増えるだろう。何ができるようになるかとか、具体的な事は運用を始めてからでないとわからないが。

「あと忘れてたが、お前らは全員、一等陸士から陸士長に昇級。先日活躍が認められたそうさ。階級章は後で配る」

私の階級は変化なしだが。まあ、准尉ともなればそうそう階級は上がらない。何度も目覚ましい戦果を上げ、管理局へ大きく貢献しなければ難しい。機動六課のトップ達はそれぞれPT事件、闇の書事件で大きな活躍をしているのでまあ納得の行く階級だ。

私は今までテロリストの暗殺や調査、拠点の爆破等色々表沙汰にはできない物騒な事ばかりしていたせいも、わずかに数年でいつの間やら准尉になっていた。

「さて、それでは新人の御披露目の時間と行こう。4号、入れ」

プレハブ小屋の扉を開き入って来たのは、肩にかからない程度の長さの茶髪、それなりに整った顔に大きな火傷の跡を残した女性だった。目つきは非常に悪い。しかもガタイもいい。

事前に写真は見せてもらったが、実際に見るとなかなかインパクトがある。偽装フィルムがあるはずなのにあえて使わないなんて、素晴らしい根性がありそうだ。

「エレーナ・ルーダス三等陸曹だ。よろしく頼む」

「ルーダス陸曹。ここでは貴様の事は4号と呼ぶ。また、ここでは階

級の概念は捨てる。1号から3号まで全員陸士長で、貴様よりも階級は下だが、見下す事は許さん。個人的な理由で嫌うのは勝手にすればいいが、その場合は速やかに相手に改善を要求しろ。できなければ私に言え。私相手なら敬語は使わなくていい。最後に個人的な質問だが、なぜ顔の傷を隠して居ないんだ?」

「女だからといって見下される事が嫌だからだ。何か問題でも?」

素晴らしい、気に入った。これは使えそうな奴を送ってくれた、中将には感謝しなければな。

「むしろ素晴らしいと感服するよ。質問はあるか」

「なら一つだけ。この部隊は質量兵器を扱うと聞いているが、私は資格を持っていない。大丈夫なのか?」

「隊員として活動中には許可が降りるようになっていく。それじゃ2号、質量兵器の講義を4号に30分ほどしてやれ」

本人に聞いた話では2号はさわやか美中年(自称)な見た目とは裏腹にかなりの質量兵器マニアらしく、毎月地球から取り寄せている雑誌のおかげで知識だけなら私よりも優秀だ。特に好きなのは爆弾らしい。自作爆弾を中等学校の課題として持ち込んだときに大騒ぎになったのを、誇らしげに話すほどの危険人物である。

「30分? 短いぜ隊長。せめて12時間は欲しいね」

「使う上で最低限の知識と注意だけ教えて、それ以上は今度にしろ。倉庫を片付けるのに一体どれだけかかると思ってる」

雑に積まれて、黒い山になっている武器を全て持ち出して外に種類別に並べて、使えるものと使えないものに分けて、使えないものはバラして使える部品を修理用に保管。後は屑鉄として買い取ってもらう。使えるものはそのまま整備して使う。

うちの部隊だけでは一体どれだけの時間がかかるやらわかったものではない。手の空いている部署に応援を頼まなければきつとかなり長い時間をかけないと終わらないだろう。パトロールの仕事がある治安維持課以外に拒否された所がなくてよかったと心から思う。

「25分経ったら電話をかけるから、適当に切り上げろよ。来なかつたら走るのになつてもらう。1号、3号行くぞ」

「へーい」

「他所の部署にも協力してもらうんだから、気合を入れろ」

「オツケーボス」

「誰がボスだ」

茶番を続けながら、窓から見える質量兵器保管倉庫に目をやる。倉庫は嚴重な警備で常に見張りが居る……というわけでもなく、監視カメラが一台あるだけ。使うなら倉庫の見張りもやっつてろという事なのか、倉庫の真正面にプレハブ小屋を作られて、そこを隊舎として使わされているのだ。

倉庫は正面に大型の質量兵器を入れるための大きなシャッターと、トラック用の普通のシャッター。人が入るためのドアがあり、今日はすべての出入り口を使って外に搬出する予定だ。もう既に何十人かの人と数台のトラックが倉庫の前に集まって、作業を始める準備をしている。現場指揮を取らないといけないのが面倒だ。そう思いながらも、さっさと外に出て集まった人たちの前が出る。

「おはようございます。今日は本来なら私達だけで行うべきこの倉庫の掃除を手伝っていただき、感謝します。あまり長い事を言うつもりはないので、安全のためにいくつかの注意だけ話して開始させていただきます。

掃除をするときに、銃がたくさんありますが一つずつ確実に安全装置をかけて持ち出してください。わからない時、安全装置がない時には、銃口を地面に向けて、絶対に人に向けてください。銃を持ち出す時に、トリガーに指をかけずに、また絶対に放り投げないでください。粗悪品の場合には暴発する可能性があります。以上です。質問がないようなら、仕事に取り掛かっていただきます。ではよろしくお願ひします」

挨拶を終えると、倉庫のシャッターがすべて開き、中から錆臭い空気が流れてくる。そしてシャッターが開き切ると、大量の質量兵器が山を作っていた。中に入る度にいくらなんでもこれは雑すぎる。そこに息を巻いて突入する地上本部の職員たち。踏んで暴発したら、危ないだろうな。責任は取らないが、きつと文句はいくつか言われるだ

ろう。

「射撃場と好きな銃を貸すつてだけで、こうもやる気を出してもらえるか。安上がりでいいな」

「触れる事はあっても撃つことは普通ありませんから。興奮するのも仕方ないでしょう」

大人は皆大きな子供、ということか。これだけの人数が射撃場に入り切るか不安になるが、もし入らなければ数分ごとに交代させればいいだろう。

そんな甘いことばかり考えていると……

「投げても大丈夫だろ」

「うぎゃ!？」

「暴発したぞ！ 医療班をよこせ！」

……というような声がいきなり上がった。先行きが激しく不安だ。私としては死人さえ出なければいいのだが、参加させてからは私に責任がある。とか言われてしまうと非常に困るので、できれば怪我人も出ないほうがいいがたい。

第8話

地上本部の職員総動員で丸一日かけて行った倉庫の整理は、まあひどいものだった。

銃を投げて暴発したり、ふざけて人に向けてたら弾が出たり、足を滑らせて銃口が尻に刺さったり。死者こそ出なかったが、怪我人は非常に多かった。幸い、最初の暴発以降魔導師はデバイスを起動させ、バリアジャケットを展開したまま作業を行っていたので、重傷者は出なかった。そして事前に注意をしておいただけあって、責任は一切問われなかった。

そしてそれだけの損害を出して得られた成果だが、携行できる殆どの銃が粗悪品。整備なしでまともに使えるような純正品は数える程度。整備すれば使えそうなのが、それなりの数。多分、地上本部の非魔導師の職員たちが武装するには十分な数があると思う。

弾薬は意外なことに使用期限の切れてない物がそこそこあったので、しばらく弾に困るような事はないだろう。

今度は対空砲などの大型の質量兵器。火砲だ。これは意外な事に、多くが純正品だった。大型の火砲はどれも地球の第二次世界大戦で使われていた旧型。対空機関砲には一部新型に近い物もあるが、きつとこんな物を使う予定はないだろう。

次は同じく大型の兵器だが……まあなんというか、どこからどう見ても正規軍から盗んできたとは思えない、ロケットポッドとドアガン、機首下に機銃を搭載した完品というか新品同様のヘリが一機だけあった。改造などは一切されておらず、燃料が石油なためミッドの空を飛ぶに少し手続きが必要ならしい。

しかし、倉庫で眠らせておくにはもったいない兵器だ。予算さえあれば是非使いたいのだが、扱える人員も居ないし、整備代、燃料費とコストを考えれば……月に一度くらいならなんとかなるが、連続運用は難しい物がある。少し発想を変えてみよう。私の部隊だけで使う必要はあるのかと。陸の部隊で共有すればどうかと。

「というわけで、あのへりを陸全体で共有する兵器にしたらいと思うのですが、どうでしょう」

「質量兵器搭載の兵器を、許可を得ていない部隊が運用することはできない。許可を出すのは簡単だが、その後を考えれば好ましくない」

何事にも許可は必要か。全ての部隊に許可を出せば解決するが、陸のイメージが悪くなるから難しいか。質量兵器は悪党が使うものというのが、一般の認識だからな。それにしても前の取材は私をヒーローに仕立て上げようとする意志が見えたが……中将が差し向けたという線はないな。嫌がらせをした連中が私から恨みを買われないためにもてはやしたのか？ 余計な事をする。

「ではへりが運用できるよう予算の増額を……」

「却下だ。しつこいぞ准尉」

「それなら、私の部隊をそのままどこかへ合流させるのは」

「機動六課でいいか」

「……」

あそのこの性質はどちらかという警察。対して私達の小隊は軍。彼女らは犯罪者を捕まえて牢屋に放り込むのが仕事。よって極力犯人の殺害は避けるべきである。私たちは敵を殺したり、根絶やしにするのが仕事になってくる。

「そういえば、お前宛てに六課へ出向するように、という要請が出されていたな。どうする？」

「今の部隊は作ったばかりなので、部隊ごとならともかく私一人出向くというのはいけません」

「厄介な事に部隊ごとだ。同時期に設立された六課と第一小隊。予算も規模も、設備も差がある。しかし六課よりも先に実戦で手柄を挙げた。その筋で私が嫌味を言ったから、目障りになったのだろう。嫌がらせがあるかもしれんな」

「それは構いませんが、第一小隊とは？」

うちの部隊名は、ただの「質量兵器試験運用小隊」だったはず。どこの課にも属さない、独立した部隊というのは六課にも似ている。

まあそんなことはどうでもいいとして、名前が変わるのは何故だ？
第一、ということとは他に部隊が作られるのか？

「手柄を挙げたことで、正式に部隊として認められた。今日からは、質量兵器運用課第一小隊ということだ。返答次第では、機動六課質量兵器運用小隊になるが。まあ、流石に質量兵器を扱う部隊を簡単に認める訳にはいかなかったからな。第二はこれからお前の部隊が手柄を挙げ続けられれば、作られるかもしれない。その前に併合を選べばそれは機動六課解散後になるが。どうする、行くか？」

六課には多くの予算と設備がある。特に予算はほんの数パーセントでも、私の部隊の予算に匹敵する。人を見ず、単なる財布として見るならとても魅力的だ。しかし人を見れば、警察の中に軍人が紛れ込むような感じになり、人間関係で苦勞することになるだろう。

このまま単独で活動し、地道に手柄を上げ続けて予算の拡大を待つよりも、豊富な資金を使って思う存分手柄を立て、アクセルを踏みながら坂を駆け登るのがいいだろう。

「六課の予算の一部を割り振ってもらえるのでしょうか？」
「併合されるわけだからな。当然だろう」

予算が増え、活動範囲が広がれば活躍もしやすくなる。活動しやすくなれば、高官に会う機会もふえる。所謂コネクションを持てるだろう。そうなれば、あのクズどもを殺す機会にも恵まれる。

迷うことはないな。

「その話、受けましよう」

「だろうな……ガジェットを狩るのには質量兵器が最適だ。AMFを使うガジェットはエースならともかく、新人には辛いだろうからな、精々手柄を横取りしてやれ」

手柄を奪って嫌がらせをし、機動六課へ嫌味を言うための口実を作れと。わざわざ自分の金を使ってまでする価値があるのだろうか。何を考えているのかよくわからないな。

「それに、その方が貴様の目的への近道となるだろう」

「ご存知でしたか」

「ここしばらく見なかった変わり者だ、素性を調べないわけにもいく

まい。オズワルドというのも偽名だろう?」

当然偽名なものも知られていたのか。それなら全部知られているだろう、否定しても無駄だな。

「……どうします? 排除しますか?」

「ここに居るのは、時空管理局地上本部所属のオズワルド准尉。少し問題のある部下だ。その輩ではないのだから、排除する必要もないだろう。もちろん何か問題を起こせば、相応の処分を与えねばならぬ。では、六課での活躍を期待する。これは退院祝いと、栄転の餞別だ。受け取れ」

ポンと投げ渡されたのは札束一つ。勿論、もらえる物は素直にもらって置く。所謂賄賂というものなのだろう、本来なら私の中將に渡すべきなのだが、使える物なら貰っておくべきだ。後でバレても別に何ともない。少しマスコミからバッシングを受けるだけだ。

「ご期待に応えられるよう、全力で職務に当たります」

早く戻って、ヘリの移送の手配を……使えるように整備した火器弾薬もコンテナに詰め込んで、それも輸送するとなると業者からトラックを借りなければならぬ。それも大型のものを。ヘリも使いたいから、飛行許可をスムーズに出させるためのルート作りも必要だ……また忙しくなるな。

第9話

トラックの窓から見える、今日からの仕事先である機動六課の隊舎。間近で見ると実にでかい。昨日まで自分の居たプレハブと比べれば月とスッポンというほどだ。腹立たしいが、この機動六課で今日から働かねばならない。

胃の痛くなる日々が続きそうだ。トラックが完全に停車すると、隊舎玄関からこの課のトップである八神二佐と、その取り巻き3名と1匹が、制服に身を包んで出迎えてくれた。

自分もシートベルトを外し、外に出る。続いてあとの四名も降りてきて、私の後ろに横一列に整列する。

「質量兵器運用第一小隊、オズワルド准尉。ただいま召喚に応じ参りました。本日より、我が部隊は貴官の指揮下に入ります」

「ようこそ機動六課へ。あんたら全員、歓迎するわ」

白々しい事を言う。顔は笑顔で取り繕っても、声に歓迎はしないと言うメッセージがこれでもかというほど込められている。先に手柄を立てられたのがそれほど妬ましかったのだろうか。

「ところで、一人除いて全員魔導師やないって聞いたけど、大丈夫なん？」

「本部隊の設立の名目は、非魔導師の有効戦力化であります。非魔導師が主戦力となっております。そしてこの編成で実戦をし、戦果を挙げております。それでも戦力として不安でしょうか」

役に立つのか？ とか人殺しをするのか？ とか、そういうのはよく聞かれる話だ。もう聞き飽きた。地球では全てのほぼ軍人が魔法も使わず、質量兵器で殺し合いをしているのに、戦闘で使えない訳がない。心配されているわけも無いので、単に嫌がらせだろう。

「そういうわけやないんや」

取り繕ったような回答。いきなり士気を下げる事を言ってくれる。喧嘩を売っているのだろうか。そうなのだろう、ならば買ってやろうじゃないか。

「失礼ながら、こちらを信用していただけないのなら、私達も貴官の部隊を信用出来ません。信用出来ない相手に背中では任せられません」

「せやから、信用するためにまずは模擬戦をして実力を見せてもらいたいんやけど」

「そちらのエース相手だと我々は手も足も出ませんが」

恥をかかせるのが目的なら帰らせてもらおう。

「安心してくれ。模擬戦の相手は新人だ」

赤い髪の女……確か、八神シグナム。が前に出てきて言う。新人が相手なら別に問題無いだろう。歳が違い、実戦経験があるだけで、こちらの部隊も訓練を始めたばかりの新人共だ。一人はそれなりに慣れているようだが、うちの部隊にとっての新人には変わりない。

最初から最悪の第一印象だが、空気が合わなくとも予算だけ回してもらえればそれでいい。もとよりそれだけが目的なのだし。

「というわけで、お願いできんかな。まともに戦って、どれだけの戦力になるか見ときたい」

「まあ、構いませんが……禁止事項はありますか」

「部隊員の殺害。または再起不能になるほどの重傷を負わせる。これされ守ってもらえれば好きにやってくれてええ。ペイント弾とそれを撃つための銃も用意しとるから、それを使ってな」

少なくとも狙撃用のペイント弾は用意されてないだろう。ペイント弾はおそらくガス発射式。弾速も射程も精度も実弾に劣る。ということは近寄って撃つしかないわけで、リスクは大きくなるか。死角から襲撃しろと教えてはいるものの、それを実践できるかはわからない。高所で観察しつつ指揮をとるのが一番いいか。

「了解しました。もしもそうなった場合はどうなるのしょう」

「少なくとも始末書では済まされんな。他には」

「開始時刻はいつでしょう」

「いつでも。早い方がうれしいけどな」

武器の準備に時間はさほどかからないが、戦場の地形を把握して作戦を立てないときつと負ける。負けてどうなると言う事もないだろうが、やるからには勝った方が気分がいい。

「すぐでも問題ありません。模擬戦場の地図はありますか」

地形がわかれば作戦も立てやすいし、袋小路に迷い込むこともない。地の利

「部屋にあるけん取って来るわ。それじゃシグナム、後は頼んだで」「わかりました。では、私についてこい。訓練場まで案内する」

階級ではなく呼び捨て。やけに親しいようだが、そういえば家族だったか。髪の色からして血は……どうなんだろう。ハラオウン家は緑の髪から黒い髪だし。名前は両親の国籍がそれぞれ違えばおかしくもない。深いことは考えないようにしよう。時間の無駄だ。

第10話

模擬戦とは、実戦のように戦闘を行い、実際の戦闘における戦術や戦法の選択肢を広げる事が目的である。断じて殺し合いが目的ではない。

と車の中で二等空尉様からしつこく釘を刺されてしまったりしたので、八神二佐にルールの追加を求めた。そのルールとは、お互いに一撃当たった時点でリタイアとすること。話を戻そう、そのルールに関して二佐に意見を伺ったところ、怪我人が出ないなら大歓迎だと言われ承認された。で、相手にもそのルールを説明したら……

「オモチャで戦う？ 一発もらったら撤退？ ふざけるな」

というような反応が返って来た。階級が私より低かったので口には出さなかったものの、そういった雰囲気をガンガン出してきたのでそう思っていたのだろう。これで我々が勝ったら、彼女達はきつといい笑い話の種になる。

「今回は市街戦だ。建物の中や入り組んだ路地を活用し、敵を落とす。そして今回はお互いに一発当たればリタイア。相手は防御魔法を使ってもいいという設定なので、正面から行っても意味はない。不意を撃って死角から襲撃し、一回で潰せ」

『了解』

『了解』

『了解』

『了解』

全員の返事が聞こえたところで、開始の合図にロケット花火を打ち上げる。この模擬戦場は無人の設定なので非常に静かなので、よく音が響く。

『開始の合図を確認。模擬戦を開始してください』

街のあちこちに仕掛けられたスピーカーから聞きなれない声が響く。きつと歓迎の場に居なかつた者が言ったのだろう。区画を一望できるビルの屋上で双眼鏡を構え、隅々を見渡す。すると、動く者の

居ないはずの区域に移動する塊が二つ。それぞれ三人ずつ、計6人……と、小さい竜一匹。内二人は事前に通達されていた審判だろう。二手に別れて行動しているようだ。片方は通りのど真ん中を歩くあたり、警戒心が薄過ぎると言わざるを得ない。狙撃できればしていたのだが、実弾禁止でペイント弾しか撃てないのに当たる距離ではない。よってここは指示を出すだけにする。

「E3に三人。近接格闘と、銃持ち。あとは審判が一人。S1に三人と一匹。槍と、召喚師、竜。あとは同じく審判が一人。全員E3へ向かえ。S1はまつすぐこちらに向かってきているが、人数が少ないのでひとまず様子見にする」

『了解』

私はこのまま観測を続けて、状況に応じて加勢するかも片方を仕留めるかを決めよう。槍持ちの方は真っ直ぐこちらに向かっていているようだし、放置すれば罠にかかると思う。罠にかかるほど間抜けなら、そつちを一人で仕留めに行く。

床に置いた画像表示用端末に地図が表示され、四つの赤い点が青い点に向かって動く。青い点は私がスポットした物なので、自動的に表示されるわけではない。つまり不正はして居ない。

五分ほど経つと、部下からの念話が入った。ちなみに部下の内魔導師は一人しか居ないので、当然ながら四号だ。私にも小さいながら一応リンカーコアはあるので念話は聞こえる。受信だけで送信の仕方はわからないが。

『目標との距離50mまで接近。気付かれてはいけません。包囲します』

「網の真ん中に入ったら一斉に撃て。逃走経路は確保してあるな」

『はい』

悪くない、優秀だ。もう片方はどうなってるだろうか。端末を表示画面を変え、カメラの映像を映す。

「……」

展望台の入り口に仕掛けておいたワイヤートラップは既に壊された後。注意力はしっかりあるらしい。トラップの位置からして、そろ

そろこちらに着く頃か。後ろからは階段を登る足音もすっかり聞こえる。前からは何かが羽ばたく音。挟まれた。

ロストロギアを大剣状態で起動し、階段の扉の蝶番を切る。そして身体強化でブーストされた筋力で扉を蹴り飛ばし、その扉を盾にして階段へと飛び込み、槍を持った少年に襲撃をかける。

「エリオ、退場」

扉が直撃し、その下敷きになった少年に剣を振り下ろそうとした所で、隣に居た審判役の背の小さな少女からストップが入る。扉による攻撃でも、一発とみなすらしい。

「今のつて攻撃扱いなんですか!？」

「実戦なら扉ごと叩き切られるか、撃ちぬかれてるぞ」

「そういうわけだ。次からは避ける」

階段を駆け下りて建物の中へ。あの竜の巨体なら建物の中へは入ってこれないだろう。殺してはいけないというルール上、建物ごと吹き飛ばすわけもない。少しだけ息をつく。

そういえば、四号達はどうしているだろうか。勝てていればそれでもいいが、負けていたら非常に不利になる。

「四号、聞こえるか」

『聞こえます』

「そつちはどうなった。結果を教えてください」

『ああ、一度で終わりました。簡単なものでしたよ』

それは嬉しい知らせだ。しかし、こちらは非常にまずい状況。空を飛ぶ竜にペイント弾は当たらないし、そもそも竜に当てても術者に当たらないと全く意味がない。がしかし、術者は竜の頭の上。当たるわけがない。

「こつちは少しまずい事になってる。竜が頭の上を飛んでて一歩も動けない」

『確かに飛んでますね、大きいのが。どうすればいいでしょう』

「術者が頭の上に乗ってるだろう。そいつにどうにかして攻撃を当てろ」

『オモチャじゃ届きません』

「……誘導弾は撃てないのか。魔導師なんだろう?」

『一応そうですが。全力だと殺傷設定しかできません』

「なら手加減しろ。あとはお前だけが頼りだ。ハマするなよ」

『わかりました。少しだけ待ってください。あの糞竜の羽をもぎ取ってやりますから』

そこまでしろとは言わんが、まあいい。結果が同じなら文句はない。楽ができるならそれに越した事はない。

「……大丈夫だろうか」

E区画の方を見つめる。落してもらえず、4号が落とされれば私達の敗北は決定する……わけでもないが、可能性は著しく低くなる。

十秒ほど待つとE区画の方から何か飛んできて、一瞬で空飛ぶ竜に突き刺さった。飛ばしたのは矢、ではなく大きく太い、槍のようなものだった。

その槍を羽に受け、バランスを失った竜は地面へと緩やかに落下を始める。もちろん、その頭に乗った少女も共に落下する。かに見えたが、地面に落ちる寸前で持ち直し、その首を再び空へと向けた。このまま空に上がられれば、四号の所へ向かうのは確実。それは困るので、窓を破って空中へ飛び出し、落下中に竜の首に乗っている少女の頭を両手で掴んで竜から引きずり落とす。

「きゃっ!」

地面との距離は10メートルほど。このまま地面に叩きつけられれば気絶するか。と思ったら竜に腕を啜えられて落下が止まった。いかな少女の体重といえど、落下の速度も加われば片手で持っていられるはずもなく、手からすり抜けて落ちていった。

「実戦なら食われてるな。私の負けだ、下ろしてくれ」

「ウオオオオ……」

ゆっくりと羽ばたいて降りていき、地面に足がついてから服を離される。人の言うことを理解できるとは、見た目よりも知能があるらしい。あと今気づいたことだが、啜えられた左腕は折れていた。

「審判、退場する」

左腕をだらりと下げたまま審判に告げる。

「わかった、キャロ。お前は？」

「……はい、足をくじいちゃいました」

「模擬戦は終了だな。よし。あっちにも伝えとく」

私の部隊の退場者は私一人。相手の部隊は全滅。文句なしに素晴らしい戦果だ。これで中将に胸を張って報告できる。

まあ、報告したからといって褒美がもらえるわけではないだろうが。なんとなく褒められれば気分がいいだろう。

第11話

先の模擬戦から数日。模擬戦の結果は中将にも伝えられたらしく、八神二佐が呼び出されて嫌味を言われた、と話していた。非魔導師でも魔導師と戦えるという証明となったのは、私からすればかなりいい成果だ。しかし彼女にとってはそうではないらしく、部下たちを褒めていると「隊長なら隊長らしく事務仕事をやっている」と言われ書類の山を渡されてしまった。部下を労うくらいさせてくれてもいいのに、と思わない事もない。

「手が止まってるよ」

物思いに耽る暇すら与えてもらえないようだ。隣で書類の山を少しずつ片付けていくもう一人の執務官に注意される。

「はあ……」

ため息をつきながら書類を捌く。こんなもの、私がやらなくても手の空いてる奴にやらせればいいのに。予算が分けてもらえると安易に考えて併合を選んだのがいけないかったのか？ しかし何にせよ働かねばならないのは階級がなんだろうが、役職がなんだろうが同じなわけで。結局は働かなければならない。世知辛い世の中だ。

「そういえばさ、君が管理局に入った理由を聞いてなかったね」

唐突に話しかけられる。仕事に飽きてきたから話でもして気分を紛らわそうとしているのだろう。

「特にありません」

本当の理由を言うわけにはいかないので、適当に茶を濁しておく。しかし、クロノ・ハラオウンの妹なら知っていてもおかしくないような気もするが、知っていればもう少し警戒心を持って接してくるか、あるいは排除しに動くか。

「でも、理由が無いとあれほど強くはなれないよね。仲間もついて来ない」

そう来るか、厄介な質問だ。こんな時に都合よくスクランブルでもかかってくればいいものを。

『緊急連絡。ガジェットドローン出現、出撃準備をお願いします。繰

り返します……』

なんとまあ都合のいい時に出て来てくれたものだ。少々不謹慎だが、ガジェットを差し向けた奴には感謝しなければな。おかげで尋問タイムを回避できた。

「スクランブルですよ、一等空尉殿」

「……そうだね、また聞かせてもらうから」

頼むから諦めてくれ。黙っているのも辛いんだから。書類を途中そのままにし、私の部隊に割り当てられたロッカー室へ走る。ロッカーには迷彩服やゴーグル、ガスマスク等、銃以外の色々な物が置いてあり、最早物置の様相を呈している。

そこで手早く着替えを終えて、次は保管室の鍵を開けに行く。もう隊員が全員保管室の前でスタンバイしていたので、さっさと開けて中の銃と弾を取らせる。今回の武装はアサルトライフルと拳銃のみ。ヘリから銃を撃ち、弾かれるようなら機銃掃射を行う予定だ。

「全員、自分の銃は持ったな」

「はい」

「よし、施錠する」

きつちりと鍵をかけておかないと、誰かに入られたら始末書ものだ。始末書を書くのは面倒なので、鍵はしっかりとかけておく。ちなみに、この鍵のスペアは机の鍵のかかった引き出しの中なので、私以外がこの扉を開ける事はできない。

「この課に移ってからの初仕事だ。活躍すれば中将からお褒めの言葉がある。かもしれない」

「報酬は？」

「素晴らしい質問だ2号。個人的に出してもらえるように頼んでおこう」

「よっしゃあー！」

出してもらえるかどうかわからないのに喜ぶとは、安上がりなやつだ。

「行くぞ」

ヘリの発着場まで急いで走り、整備されていていつでも出撃でき、全武

装に弾を満載にした戦闘状態攻撃ヘリに集合する。

隣には機動六課に元からあったヘリがあるが、こちらのはそれよりも大きく、装甲もかなり厚いようだ。扉を開き、すぐに乗り込む。全員乗り込んですぐに扉を閉めようと、手を掛けた瞬間……

「……」

「……」

こちらを親の仇のような目で睨むランスター二士と目が合った。私がかした覚えも無いので無視し、扉を閉めて副操縦席に座り、ベルトを締める。

「離陸する」

「了解」

ヘリのローターが回転を始めて機内に大きな音が響き、徐々に回転音が大きく、早くなっていく。それからヘッドホンを装着し、外からの音を遮断する。

「隊長、今回の任務は？」

「モノレールを襲撃するガジェットドローンの排除。先行して空中と、外側に取り付いているのを機銃で撃ち落とし、突入の支援を行う」

と、携帯端末に送られて来た情報には書いてある。モノレールの積荷の中にレリックというロストロギアがあり、それに引き寄せられてガジェットが集まっているのだとか。私も一応ロストロギアを所有しているのです、私のところにも集まってくる可能性があるかもしれない。注意はしておこう。

「簡単な仕事だ」

「そう言わないでくれ。魔導師にとっては天敵とも言える相手なんだからさ」

「俺たちには的だけ」

「レーザーやミサイル、機銃を撃ってくるのも居るらしい。油断はするな」

油断する一号と三号を諫める二号と四号。改めて、いい人材の揃ったいい部隊だと思う。六課に併合されても、変わったところはない。「隊長、そっちに火器コントロールを移す。武器はロケットと機銃。」

操作方法はわかるか？」

「マニュアルに目は通してある」

「流石だ。高度上げるぞ」

ぐんと高度が上がり、ヘリポートと六課の隊舎が遠くに流れていく。上空から見ると、街並みもよく見える。道を歩く人々はまるでアリのようだ。

それから数十分ほど。移動を続けると、レーダーに多数の反応。反応の先には何かに取り付かれてしまい動けなくなったモノレールと、その周りを浮かぶ大量の豆粒のような何か。画像を拡大すると、それがカプセル型の機械に触手が生えたものである事がわかった。資料通り、単純な形……あれがガジェットドローンと言う奴なのだろう。「こちら質量兵器運用小隊、オズワルド准尉。先行して敵戦力を可能な限り削るので、その後残敵の掃討と目標の確保を頼む」

『こちらヴァイス陸曹。了解しました』

「火器ロック解除。ドアガンも用意しろ」

『了解』

交戦圏内に入った。

「敵機射程圏内。機銃撃つてくれ」

トリガーを引いて機銃掃射を行いながら敵陣を縦に突破する。射線上に居る敵が次々と穴あきチーズのようになり、爆散していく。レーダーを見ると、敵の分布が縦一列に減っていることがわかる。効果はかなりあったようだ。

「もう一度し掛けます」

空中でターンして、また敵の中へ突っ込んで行く。レーザーが飛んで来るが、厚い装甲の表面を炙るだけで効果は現れない。やはり人を焼ける程度の出力ではこの装甲は抜けやしないらしい。ミサイルでもなければ問題ないようだ。

「魔導師かと思ったか？ 残念。質量兵器でした！ ハツハツハア！」

ミサイル持ちは優先的に落とされ、食いこぼしはテンションがおかしくなってるドアガンナーに撃ち落とされて。まさに無双。このま

まなら六課の空戦部隊の出番はないだろう。

「そろそろいいだろう。撤退だ。後は六課のメンバーに花を持たせてやれ」

敵を八割ほど落としたりとところで撤退の指示を下す。あまり活躍しすぎるのもよくないだろう。

「その前に、少し荷物を軽くして行こう」

積んである対戦車ロケット弾を、空中に密集しているところへ数発。さらにいくらかモノレールに取り付く大きい奴にぶち込んで、あとは撤退。私の持つロストログアに釣られたのか何機か後ろをついて来るが、放置でいいだろう。

「後続の部隊へ。空中の敵は粗方始末しておいた。あとは任せろ」

『了解しました、准尉』

まだまだ弾も燃料も残っているが、暴れすぎて手柄を全部奪ってしまっても関係が悪くなるだけだ。あの様子なら車内にも侵入してんだろうし、手柄はこれで半分程度。この一件で少ない予算でもそれなりの活躍はできるが、予算があればより活躍できる、使いやすい部隊と認識を改めてもらえれば嬉しいのだが。

第12話

今日は休みである。本来なら出勤する日なのだが、機動六課への嫌がらせに部隊全員の分の有給休暇を前日に無理やりねじ込んでおいた。その休みを使って妹の見舞いへ行こうと思っただら病院に門前払いされたので、仕方なく海へ釣りに来ている。なぜ釣りをしているのかは私にもわからない。なんとなく、待つのが好きだから釣りに来ている。釣り場がいいのか、入れ食い状態で、そろそろクーラーボックスがいっぱいになる。

「やあ、こんにちは」

その男は、白衣を着た紫の長髪、目つきはやや悪い。有名な指名手配犯、ジェイル・スカリエツィによく似ている。というのが第一印象だった。

しかしながらこんな所に高名な犯罪者が来るわけがない。犯罪者、指名手配犯というのはもっとヒツソリとしていて然るべきなので、きつとよく似た別人なのだろう。釣りに来るような格好には見えないので、散歩をしている最中に見慣れぬ釣り人を見つけて気になって話しかけたのだろう。

「釣れるかな?」

「まあそれなりに」

軽く言葉を交わし合っただけ。男はすぐ横に腰を下ろした。

「精神病院で、門前払いされてたね」

「見ていたんですか」

「散歩のコースに君が居てね。知人でも入院していたのかい?」

答えるべきかどうか悩んだが、相手は全く知らぬ人間だ。相手も私を知らないはず。話しても別に問題はないだろう。知ついても別に問題ない。マスコミの記事のネタにされても「だからどうした」と鼻で笑ってやろうと思いつつ口に出す。

「ええ、家族が。もう何年も前に……犯罪の被害に逢いましたね。私と、妹だけが生き残って。まあ、その妹も心に傷を負って入院してます」

「それはそれは……何も考えずに聞いてしまった、申し訳ない」
「構いませんよ。隠すようなことでもないです」

のんびり時間を潰そうと思っていたが邪魔が入ったので、リールを巻いて釣り糸を巻き上げ回収する。今日はアパートに戻って寝よう。いくら疲れや痛みを知らない体でも偶には休息も必要だ。

荒んだ心を癒すには、海を見ながら釣りをするのもいいが、ゆつくり何も考えずに寝るのも悪くない。悪い夢さえ見なければ。しかしそれも薬を飲めば夢を見ることもなくぐっすりと眠れる。

「余計なことを聞いてしまったのと、釣りの邪魔をしたお詫びに食事でも奢らせてもらえるかい？」

「初対面だというのに、いいんですか？」

「いいんだよ。どうせ一人で食べるより、何人かで食べたほうが美味しいだろう？ まあ、拒否もさせないがね」

言葉に並々ならぬ悪意を感じ、さらには誰も居ないはずの背後から足音がしたので、サプレッサーのついた拳銃を抜いてスカリエツテイ似の男に発砲。命中もせず、途中で割り込んだ見覚えのある格好の女に弾かれた。

真後ろから一瞬で正面に回りこみ、更には銃弾を弾くとはとは大した移動速度と技量だ。戦っても勝ち目はないだろう。銃の安全装置をかけ、ホルスターに収める。それから両手を頭の後ろで組んで、降伏の意思を示す。

「それが一番賢い選択だよ。なに、ただ話をするだけだから警戒しなくてもいい」

この女の格好は、以前見た戦闘機人と同じだ。ただ前に見たのよりもプロポーションは遥かにいいが。それはともかく。隙はあるのだが、仕掛けてもあの速度を持つてすれば勝負にならない。そして、それを従えるということとは、こいつはジェイル・スカリエツテイその人となるわけだ。まさか指名手配犯が平日の真昼に外を出歩いているとは思わなかった。

「話が洗脳に変わらない保証は？」

「無い。私は嘘を言わない人間だ、信じてもらえないかな？」

「嘘をつかない人間なんて居ない。少なくとも私はそう考えている」
「手厳しいね。まあ、事実だ。目的を明かすとだね、少し取引がしたいのさ。詳しいことはそのレストランで話そう。トーレは普通の服を着てついて来てくれ」

抵抗も拒否もできないので、スカリエッツィの後ろを殺す機会を伺いながらついていく。しかし、チラリと後ろを見るたびにトーレという戦闘機人に睨まれるので、結局襲撃をかけるのは断念してレストランへ入る。そして店員に案内された席へ座る。椅子が繋がっているタイプの席だったので、逃げないように隣にワンピースを着て変装した戦闘機人が座り、対面にスカリエッツィが座る。

「それでは、取引のことについて話そうか。断ってくれても構わない。断ったからといってどうするつもりもないから、安心して聞いて貰いたい」

「聞くだけ聞こう」

店員に配られた水を飲みながら、メニューを開いて今の気分にあった食べ物を探す。肉という気分でもない。魚、は折角奢ってもらえるのに安いのはもったいない。適当な値段の魚介類。エビフライでいいか。パンにするか、カレーにするか。

「スパイにならないかい？ 他の言い方をすれば、工員。内通者。やってほしいことは情報の譲渡と内部工作による活動の妨害だ」

「質問をしてもいいか」

「構わない」

「エビフライはカレーかソースかどっちがいいだろう」

「……」

「……」

横と前から二人分の冷ややかな視線が突き刺さる。これで調子は崩せただろう。

「二つ目の質問。どうして私に目をつけた？ 他にも管理局員なら腐るほど居るだろう」

「理由は君の出自にある。管理局へ心からの忠誠を誓っては居ないだろう？ 家族を皆殺しにした組織だ、いい気分がするはずもない」

だから簡単に引き込めるだろうと。間違っていない。動くかどうかは対価次第だな。

「まあな。それで、対価は？」

「私に用意できるものなら何でも出そう。君は何を求める」

「妹の心を治せ。若しくは、暴行された記憶と家族を殺された現場の記憶を完全に消すだけでもいい」

「申し訳ないがその方法は知らないね。記憶とは脳に刻印されたもので、それを完全に消そうとすれば脳ごと消す以外に方法はない」

「そうか。残念だ」

とりあえず注文を聞きに来た店員にエビフライカレーを注文する。

「私はコーヒーだけでいい」

「私にはカツサンドをください」

注文を終えて店員が下がると、また話が始まる。

「資金の援助はどうだい？」

「今のところ必要ない」

むしろ今必要なのは実績。機動六課を差し置いて、独立して予算をもぎ取れるだけの手柄だ。それもこのスカリエツティを連れて行けば一発で解決しそうだが……右を向く。

「なんだ？」

「改めて見ると、外見は普通の人間と全く変わらないな。思っただけだ。見とれていたわけじゃないぞ」

戦闘機人が居るからそれも無理と。通信で応援を呼べば大量に来るだろうが、事前に対策はしてあるだろう。無策で管理局員に会いに来る愚者ならば、指名手配されてまもなく捕まるはずだ。というわけで無理。

「これだけ人と近ければ、スパイが居ても気付きそうにないな」

「……」

黙って目を逸らされた。これは黒だな。内通者が居るという考えは当たっていたか。

「なるほど。暴露されたらマズイことを知られているから、捕まえるに捕まえられないということか」

「察しがいいね」

スパイは少なくとも機動六課内には居ない。だから私を誘った。そういう線で考えれば何もおかしいことはない。管理局に所属しながら管理局のことをあまり良く思っていない。加えて忠誠心もそこまでではない。つつけば崩せる砂の城に見えても仕方ないな。

「ドクター。私は仲間にならないのならここで殺すべきだと思う」
「殺るか？ オススメはしないが」

パンパン、と膨らんだポケットを叩く。この膨らんだポケットの中には倉庫にあった押収品のC4爆薬が100gほど入っている。起爆スイッチを押せば店ごとドクターが消し飛ぶ。

なんでそんなものを持つているかと聞かれれば、護身のためだ。一度襲われているのだし、二度目があってもおかしくない。しかし常に持ち歩けるのは拳銃が限度。だが拳銃では威力不足なので、威力十分な爆薬を持ち歩こうという考えに至った。それだけだ。

「無理強いはしない。また考えておいてくれればいいさ」

「悪い話ではないからな。魅力的な対価があればいつでも話に応じるつもりだ」

頼んでいたメニューが来たので、カメラで撮ってから食べ始める。今日は嫌な日かと思っただが、そこまで悪い日でもない。食事をした相手を犯罪者と戦闘機人ではなく、不審者にしか見えないオッサンと美しい女性と考えれば。あと情報も手に入ったし、悪いことばかりでもない。

ちなみに、食事をした後何故かスカリエツティとのツーショットを撮るはめになった。トーレとも撮ったので、役得ではある。

第13話

「今日はあなたが強く望んでいたことが叶う日です」出勤前に見たテレビの占いで、星座占いの運勢第一位のコメントで言っていた。そして、今日はホテルアグスタの警備について話す予定なので、それでいい場所に配置してもらえるとか、きつとそういった類の事だと思う。些細な事だ。

「明後日ホテルアグスタへ行く事になっているので、その警備について話し合いたいと思います。私となのは、はやてはアグスタで出品される物の監視を担当する事は決まっていますので、外の警備と要人の警護、どちらかを選んでください。残った方を、六課のメンバーで引き受けます」

「要人……」

要人というと、やはり管理局の高官あたりか。ならば仇が混じっている可能性もゼロではない。むしろ佐官クラスの人間が多いようなので、十分にあり得る。機会も将官ほど警備は厚くはないだろうし、当然あるだろう。もし無いようなら作ればいい。

「リストを見せてもらえませんか」

「どうぞ」

渡された資料に書いてあるオークションへの参加者名を片っ端から読んでいき、ある名前を目にする。

ヘンリー・グスタフ……階級は一佐。俺の家族をぶち壊して、人生を大きく変えてくれた犯人の一人……何年も思い続けた仇の一人。望みが叶うというのはこの事か。案外占いというのも当たるものじゃないか。

「どうしました？ そんな怖い顔して」

「いや、笑ってただけです。見覚えのある名前があったもので」

この男……どう殺したのか。一人を殺すために残りを諦めるような事になっても困る。目撃者が多数いる状況での殺しは控えておくべきか。どうにかして一対一の状況に持ち込み、証拠を可能な限り

残さず殺す。難しいな。多分不正の一つや二つや三つくらいはして
るだろうし、それを確たる証拠を持って追求。反撃されたら正当防衛
で殺害。これも一週間ほど間が空いていけばまだしも明日となると
時間が足りない。

とりあえず渡された書類にサインをしてからフェイト執務官に返
却する。

「誰？」

「このヘンリーというク……男、管理局に入るきっかけを作ってくれ
た人達の、一人なんですよ」

クソ野郎と言わなかった自分を後で褒めたいものだ。思い出せば
人の親を殺して、妹もレイプして、私に拷問までして……裁判では金
で無罪を勝ち取って。クソ野郎としか言えない奴なんだがな。もっ
とひどい言葉で表現するべきなのかもしれないが、私の貧弱な語彙で
はこれが限界だ。

「そうなんだ。でもその顔は？」

「笑顔が怖い、と妹に昔言われてたんですがね。どうも、笑顔を作るの
は苦手なんです」

もうそんな事は二度と言われないうら。辛い事だ。原因や作っ
た奴に死をもって償わせてもあの頃には戻れない。あの頃の家族は
戻ってこない。なんだかやるせないが、殺ると決めたからには最後ま
で殺ろう。一人残らず、確実に。

それにしてもジュエルシードだったか。あれがあればこの願いも
叶えられるのだろうか。もしも叶うのだとすれば、無理にでも奪いた
いものだが……冷静に考えればまず無理だろう。ロストログアは質
量兵器よりもさらに嚴重に保管されるものだし。

「そうなんだ。妹さんて、どんな子なのかな、君に似て素直じゃないの
かな？」

「昔はいい子でしたよ。いつも後ろをついて来て、離れませんでした」
昔は。小さな体で、花のように可愛らしい笑顔で、「お兄ちゃん」と
呼んで慕ってくれていた。だというのに今では「殺す」だの「死ぬ」だ
の「殺してやる」だの叫びながら首を締めてくる。本当に、昔のこと

は思い出すたびに嫌になる。鬱になりそうだ。

「今は？」

「……」

「どうなの？」

「申し訳ありませんが……話したくありません。思い出したくもないんです」

目頭を抑えて、声を震わせて涙をこらえるふりをする。私は人を騙すのも、自分を騙すのも得意だ。世渡りをしている内にいつの間にか身に付いていた能力だが、演技が上手というのは悪いことではないだろう。特に交渉事だったり、こういう風に話したくないことを追求させないためには。

「ご、ごめん……そんな事になつてるなんて、知らなくて」

顔を青ざめて、慌てた風に話す彼女。反省しているようだが、大事の前の小事。昔にはもつとひどいことをされたわけだし、この程度のことになんか怒ったりはしない。少しだけ嫌な気分にはなったが、悪気があつて聞いたわけでもない。少しだけ気になっていることを聞いて、答えてもらえたら許そう。

「これからする質問に答えてくだされば、許しますよ」

「え、内容にもよるかなあ……」

「それほど考えるようなものでもありません。もしも願いが叶うなら、あなたはどんな願い事をしますか？」

突然聞かれると非常に難しい質問だろう。私はと聞かれれば、断然、過去の事件の消去だが。あの事件さえ無ければ今まで殺してきた多くの人間を殺さずに済んでいて、人並みに幸せな人生を送れていたはずなのだから。

「うん、今の平和がいつまでも続くとか。かな？」

「欲がないですね」

「うん、お金なんて働いてれば入ってくるし。階級もこれ以上上がったもね？」

つまらないと言えばつまらない回答だが。堅実とも言える。こう欲がなければ賄賂を受け取ることもないだろうし、つまらない不正で

処分されることもないだろう。こういう性格なら規則もキツチリ守ると思う。模範的な上司の姿だ。

模範的であっても、下につきたくはないが。面白くない。

「そういう君は？」

「さっさと死にたいです」

過去の事件を消したい、とは言えない。これはそこまで親しくもない相手に話すべきことじゃない。なのでもう一つの偽らざる本心から来る願いを話しておく。叶えることは簡単だが、叶える訳にはいかないこの願いを笑って言っつてやる。今も、昔も、この先も、きつとずつと幸せなんて無いだろう。先が奈落しか無い人生なら、死ぬ以外にない。だが死ねない。私が死んだら妹の入院費用は誰が出す。まだ退院がいつになるかもわかっていないのに。もしかしたら一生あのままかもしれないのに。復讐も終わっていないのに、死ねるか。

「どうしてか、聞いてもいい？」

「幸せのない人生なんて、生きていても辛いだけですから」

「どうして幸せがないって言えるの？」

「理由は言えませんが、確信があるんですよ。そういうね」

奴らを殺すのだから、結局は自己満足のためだ。人をいくら殺した所で、私の家族を奪った連中に近づくだけで―いや、むしろ奴らよりもより『悪い』人間になっていくかもしれない―家族は帰ってこない。あの楽しかった生活は帰ってこない。あの頃には戻れない。

「……何があったのかは、私にはわからないけど。私も同じような考えをしたことがずっと昔にあった」

「へえ、そうなんですか」

聞きたいことは聞いたし、これ以上の話に興味はないので中将へ送るレポートをさっさと仕上げていく。

「だからこそ言わせてもらうね。生きていけば、必ずいつか幸せになれる。だから希望を持って。死にたいなんて言わないでね。思ってもダメだから」

「では、任務の途中に殉職したいです」

「同じ事だつてば」

「自殺なら保険金は出ませんが、任務中の事故であれば保険金が出ます」

「えっと、君には妹以外家族がないはずでしょ？ 誰が受け取るの？」

作業の手が止まる。はて、隊の人間と中将以外には教えた覚えはないのだが。あの中将に機動六課のメンバーが聞きに行くはずがないし、かといって私の隊のメンバーが勝手に喋るとは思えない。

結論。誰かが勝手に調べて勝手に話した。と言ってもそんなことをやりそうな奴は非常に限られてくるが。一応聞いておこう。

「教えた覚えはありませんが」

腰に提げている銃を抜き、徐に安全装置をかけた外したりして遊んでみる。銃弾はもちろん装填してある。

「は、はやてが教えてくれたんだよ」

ビンゴ。やはりあの女か。信用のおけない女だとは思っていたが、まさかこんな事までしてくれるとは。いくら部下とはいえ、犯罪行為もしていない人間の身辺調査するのは職権乱用、もしくは越権行為ではないだろうか。これは中将へ報告せねばなるまい。

「そうですか」

レポートを途中保存し、中将へのダイレクトメールを開いて先の件について書いて送る。これで中将からも注意が行くだろう。そして今度は使い捨てのアドレスを作って、そこから八神二佐への空メールを1000件ほど、ツールを使って連続送信する。そして送信後はすみやかにアカウントを削除。調べれば私が送ったということはわかるだろうが、先に喧嘩を売ってきたのはあちらだ。

人の弱みを握れるのが自分だけだと思ったら大間違いだということとを教えてやる。

第14話

時計の針が12で重なり、太陽が頭の真上に来る時間。つまり昼。正午を告げるブザーが鳴り響き、訓練予定時間の終了を知らせる。使用していた銃に安全装置をかけて、さらにトリガーガ

ドの部分に南京錠をかけて発砲が不可能な状態にしておく。

「午前の射撃訓練を終了する。使用した弾種と弾数を記録して休憩に入れ」

「へーい」

それぞれが使用していた的の画像を手元の端末で確認する。一番的の中心に弾痕が集中しているのはやはり二号。次点で四号。四号は魔導師なので、身体強化でもして反動を押さえ込んだのだろう、訓練を始めて間もない素人にしてはなかなか成績がいい。二号は時間外にも自主的に射撃訓練をしていたので成績がいいのはまあ当たり前だ。

一号と三号はどうもコメントしづらい。上達はしているのだが、まあ普通だ。普通。二号のように時間外にも練習をしていなければこんなものだろうという程度。特に言うこともない。

ちなみに私のはバースト射撃なのでそれほど良い成績は出せていない。

「よし……」

地面に転がる薬莖を箒とちりとりで回収して、演習場に鍵をかけて休憩に入る。トイレへ行つて手を洗つて硝煙を落とし、ロッカーから弁当を回収して食堂へ。食堂は相変わらず、機動六課のメンバーが揃っていて非常に賑やかだ。

今日の昼食は昨日釣った魚のフライをパンで挟んだもの。つまりはサンドイッチ。それほど量はない。置いてある共用レンジで温めてからゆつくり一人で頂く。

「やあ准尉、隣見えかな?」

「硝煙の臭いで食事が不味くなりますよ。空いている席があるのでそちらへどうぞ、八神二佐」

「いやいや、ちょっと話がしたいんや。今朝の大量の空メール、あんたやろ」

多分、今朝送った空メールのことだろう。とりあえずしらばっくれしておくか。確たる証拠はないが、言ってきたということは何かしら心あたりがあるということ。そういうことをされるようなことをした、という自覚はあるらしい。

「何の事でしょうか。それよりも八神二佐。人の家庭情報を勝手に調べると越権が過ぎますよ」

「あのなあ……仕返しは覚悟しとったけど、せめて職務の邪魔にならん範囲にしようや。間違えて必要なメールまで消したで」

「知りませんよ。ところで私のことをどれくらい調べました?」

「話を変えるなあ。家族の事と入局の理由までしか調べとらんで」

反撃のために起訴するには十分すぎる理由となる。しかし、だ。相手は二佐。おまけにバックには数多くの権力者。勝負をする以前に、戦うリングにすら上がらせてもらえないだろう。無駄なことはせず、このネタを中将へ報告しておくに止めよう。

「……」

「そんなに怒らんといて、あんたを信用するために調べたんや」

「正当な理由あつてのことなんですね」

「興味本位で人のことを根掘り葉掘り調べたりせんて」

「本当ですね?」

「とらすとみー」

拳を彼女の鼻の1ミリ前に突き出して、止める。何が起きたのかさっぱりわからないって顔をしているが、腹がたつたので寸止めした。

「蚊が飛んでいました」

「え、ああ……そうなん」

「そうですよ」

残っているサンドイッチを頬張り、少し噛んでコーヒーで流し込む。

「それ私のコーヒー」

「これは失礼。わざわざ持ってきてくれたものと思ってました」

空になったコーヒーカップをゴミ箱へ投げ込み、弁当箱を風呂敷に包んで席を立つ。

「今回は嫌がらせのレベルで済ませましたが、これ以上踏み込むのなら相応の覚悟をしておいて

ください」

捨て台詞を吐いて食堂から出て行く。ああは言ったものの、具体的に何をするかはまだ考えていなかったりする。端末にウイルスをぶち込んだりとか、は軽すぎる。もつと盛大に迷惑になることを。

……施設の爆破は、無理ではないが盛大すぎる。

端末にウイルスを仕込むのは今回のとあまり変わらない。

任務中に誤射を装って味方を一人撃ち殺す。状況が難しいな。

砲撃支援で敵ごと爆殺。エリートが揃っているこの部隊でこちらに支援を要請されることもないだろう。

となると、やはり本人を撃ち殺す……のはやりすぎとして、逮捕状を出すのはできるだろう。

彼女のやったことは十分に犯罪だし、やれないことはない。バックを考えれば起訴、逮捕は不可能でも、逮捕状なら出せる。それが出たという事実だけで彼女の経歴に大きな一点物の傷が付く。中將も機動六課をあまりよく思っていないし、妨害をする手伝いはしてもらえないだろう。

そうと決まれば、今晚辺りから用意だけでもしておくか。

第15話

今日は、今生で最も良い日となり、同時に最悪に近い一日となるだろう。何せ、あの糞共の内の一人をようやく殺せる日になるのだから。しかし殺すにはあの糞の顔を拝まなければならない。それは非常に腹立たしいことだ。おまけにただ殺すだけではダメで、周りに気付かれないように殺る。若しくは正当な理由を持って殺害する必要がある。

「全員、装備の点検が済んでいるな。もしも不足の事態が起きた場合は先日の訓練を思い出し行動しろ。いいな」

「了解」

四人の声が重なり、それぞれが決められた配置へと向かって行く。アグスタの警備は外を機動六課が担当、建物の周囲を武装局員が担当。地下や建物の中も六課が警備。オークション会場内の巡回警備を私達分隊が任された。いざという時に要人の盾として使うなら、非魔導師を使うのが一番理に叶っているという話だ。どうせ使い捨てにするならば、戦力として優れてない奴がいいというのは理にかなっている。

「隊長はどうされるのでしょうか」

「私は要人の警護を行う。恩返しも兼ねた警護をな」

受けた恩はきっちり返さないと気が済まない。両親の分、妹の分、俺の分。あつさり殺してしまうには大きすぎる恩だが、時間をかけてじっくりとはいかない。相手は腐っても魔導師。私は身体強化が使えるだけでバリアジャケットも纏えない、限りなく非魔導師に近い魔導師。

プランは複数あり、ドリンクに利尿剤を仕込んでトイレへ連れて行き、サクつと殺る。トイレには爆弾が仕掛けられており、爆弾を設置しようとした奴と鉢合わせになり殺されたという事にもできる。警備が厳しく難しいなら、トイレに仕掛けた爆薬で騒ぎを起こして、その混乱に乗じて殺す。どちらも確実ではないが、トイレの確認は私の仕事ではない。何も言われることはないだろう。

だが、不安要素が一つだけある。八神はやてだ。彼女は私の入局した理由を知っていると聞いたが、それが果たして面接の時に話した「家族がテロリストに殺されたので、似たような人間を生み出さないために管理局で働きたい」という理由か、本当の理由である「家族を殺した糞野郎が管理局に居るので、そいつを殺す機会を持つために管理局で働く」なのか。

もしも本当の理由を知っているなら、計画の邪魔をされるだろう。「それぞれ持ち場につけ。任務を開始する」

だが、一度決めたことだ。準備もしてあるのだし、殺るしか無い。この機を逃せば、次に機会が巡ってくるのはいつになるかわからない。

「了解！」

オークションが始まるまでは、まだ時間がある。それまではまともに仕事をしていよう。変な行動をして怪しまれては計画は成せない。

「やる気は充分そうやな。感心感心」

「そういう八神二佐は警備も兼ねてのお楽しみでしょうか」

ドレスを着た二佐は、仕事というよりも遊びに来たような雰囲気だ。それでもいざとなれば動くのだろうか。

「まあな」

任せられる側からすれば、上司だけが仕事をせず自分たちはひたすら仕事をこなす、働きアリの気分だ。まあ、仕事なら良い気も悪い気もしない。

「気に入らんか？」

「出張先で休日の仲間にあうようなものです。気に入るも気に入らないもありません」

「そっか、気に入らんなら付き合わせようかと思っただんやけどな」

それだけは迷惑だ。なんでも無いときなら誘いに乗るのも悪くないが、今日ばかりは特別だ。あのクソ野郎に受けた恩を返さなければならぬ。

「そうそう、護衛する相手がもう着いとるで。会って来たらどうや？」
「一通り巡回を行い、その後会いに行きます」

今すぐにも感動の再開と行きたいところだが、それはまだ早い。オークションが始まって、注意がこちらへ集まるまで、目撃者なしに殺すのは難しい。リスクは最低限にするべきだろう。

「そか。ならがんばってな」

「義務は果たします」

敬礼をして、離れる二佐を見送る。怪しまれる事も無く、何事も無くこのまま作戦を続けられればいいのだが。

「そうそう、なんかこの会場に怪しい人物が居たらしいんやけど」

「……それは警戒しないといけませんね」

「もしも警戒が足りずに要人が……特に管理局の高官が殺されでもしたらまずいよなあ」

こちらに振り返り、何か探るような目と声で話す。もしや、俺の計画がばれているのか？ 単に探りを入れているだけなのか？

「ええ、そうですね。より警戒を厳重にするよう、部下にも伝えておきます」

「せやな。恩人が殺されたら悲しいやろ？」

「そうですね」

間違い無く俺の計画を知ってるな。だが計画を変更する訳にはいかない。待ちに待った復讐の機会だ。邪魔をされるくらいなら……

「邪魔されるくらいならここで始末する、か？」

ベルトに納めたナイフに手を伸ばしたところで、心の内を言い当てられる。まあこの状況ならわからない方が阿呆だが。

「何のことだかさっぱりわかりませんね。恩人を殺すわけないでしょう」

「しらばっくしてくれでも無駄や。ここで私を殺したら復讐はできひんで。

手を出した瞬間に人が集まって、あんたは捕まり仇は逃げる」

「さつきから何を言ってるんですか？」

「……隠す必要もないんやで」

「ここで私が『その通り』と認めれば、そこらに隠れている奴等に飛びかかられ取り押さえられ、危険人物として牢屋へ放り込まれる。冗談じゃない。何もしてないのに、少し考えたというだけでだ」

ため息が出る。どうして私はこうも運に恵まれていないのか。家族を奪われて、その上復讐の機会すら奪おうとは。

神は俺に喧嘩を売っているようだ。買ってやろう。買ってやろうじゃないか。

ナイフと拳銃に手をかける。これで完璧に反逆罪に問われるだけの行為はやり尽くしてしまった。

「まあ……その通りなんですがね」

銃とナイフを抜き、彼女に向ける。潜んでいたシグナムがこちらに飛びかかるが、行動が少しだけ遅く、首に剣を当てられるだけで済んだ。もうこちらはトリガーを引くだけでいいのだから、もう手は出せない。

「動くな」

「こつちは首を刎ねられる前に撃てる。それを踏まえて、少しだけ話を聞いてもらいたい」

説得できるとは思わない。だが、試す価値はあると思う。何もせずに諦めるなんてのは、怠慢であつて愚か者の行為でしかない。

「法が罪人を裁けないなら、被害者が裁く以外に方法はないと私は思っています」

「……」

「被害者にはその権利があるのではないでしょうか」

しっかりと、彼女の目を見て自信を持って言い切る。自分は正しい。俗にいう正義ではないが、同じような境遇の人なら理解を得られるはずだ。法が裁かないなら自分が裁いてやりたいと思うのは、あたり前のことだろう。

「法廷に立たせて罪を償わせるのは？」

「正当な裁きを受けていれば、そもそもこんな真似はしません」

私だつて本当は糞の同類になるような真似はしたくない。だが家族の名誉のために、自分の満足のために、奴らを裁く必要がある。こんなことをしたところで過去には戻れないし、幸せは手に入らない。所詮自己満足にすぎない行為だが、そのためには喜んで殺す。予行演習も済ませて、既に肥溜めに片足を突っ込んでいる。もう復讐を諦め

るという選択肢はない。

「そんな事をして家族は帰ってこんのやで」

「知っています」

「復讐は何も産まん。それがわからんのか？」

なんともありきたりなセリフだ。つまらない、小説で使い古されたな。ありきたりな言葉で返すのもつまらない、少し変わった言葉で返してやろう。

「シグナム二尉。私がここで八神はやてを殺したら、あなたはどうします？」

目も向けずに話題を振る。こいつにとって八神はやては家族であり、家族とは即ち大切な物だ。それを目の前で奪われて、一体誰が冷静でいられようか。

「知れた事。叩つ斬る」

「復讐は何も産みませんよ。それでもやりますか？」

「当然だ」

「との事です」

家族を目の前で殺されて、妹をレイプされ、自分も痛みを感じなくなるほど拷問されて。その苦しみがわかるだろうか。いいや、わかるはずがない。人間性すらも奪われた苦しみがわかるはずがない。

わからないなら、わからせてやればいい。

「あなた達には関係ない……私が仇を取るのを止めますか？」

「それが仕事やしな」

「それが主の意志だからだ」

「はあ……どうしてこう、最近の司法は被害者に優しくないんでしよう」

また大きいため息をつく。彼女たちに既に全てを知られているのなら、もはや復讐は継続できないということ。計画の続行は不可能。生きていく上で最も重要な任務は失敗。

目の前から光が失せていくのを感じた。もう何も考えられない。この感覚が、絶望というやつなのだろうか。

「……復讐ができないなら生きてる意味もありません。殺してください」

い」

「お断りや」

「私も断る」

「そうですか。ならこうしましょう」

今構えている銃は前日にきつちりと整備されており、弾薬も使用期限の切れていない正規品。ここに来る前には試射も済ませ、動作不良が起らないことも確認してある。そして弾薬の入ったマガジンがセツトされていて、チャンバーに弾丸は送られている。

わずかに銃口をずらし、特に考えることもなく軽いトリガーを引く。結果弾詰まりを起こすこともなく、弾丸は彼女の肩へと飛んで行った。

「つあああ!?!」

発砲音、後悲鳴。

「貴様ア!!」

さあ、殺せ。

そう言うまでもなく、首につけられた剣は横に一閃され、切られたところから血が噴き出て、血が抜けて行くのと同じように体から力が抜ける。大理石の床に膝をつき、一度止まる。

彼女も、俺の味わった苦痛と恐怖、屈辱の一片くらいは味わってくれただろう。悔いは……数えればいくらでも出てくるが、もう死ぬんだしどうでもいいか。

髪の毛を掴まれ、目の前に剣の切先が迫る。これが頭を貫いてくれれば、楽になれるのだろう。そう思い目を閉じた瞬間に、ガツンと鈍い音がして体が床に放り投げられた。剣はまだ頭に達していない。

「隊長大丈夫か! すぐ止血する!」

意識が朦朧としてきたが、この声は一号か。多分一号に首を押さえられている。止血しようとしているのか。力の入らない腕で振り払おうとするが、やはりびくともしない。

「どういう事だ。説明を要求する」

騒がしさにまぶたを開くと、二号と三号が一尉に銃を向けていた。四号は八神二佐の様子を見に側へ立っている。いい加減、楽にして欲

しいものだ。もう疲れた。ゆっくり寝たい。

「こいつは主を撃った！ だから斬った！ 文句があるか!!」

「そうなのか、隊長」

小さく頷く。そして目をとじる。これ以上は、何も考えられない。考えなくて済むのだろう……。

第16話

目が覚めてまず目に入ったものは、真っ白な天井だった。体にかかっているのは白いシート。顔に付けられているのは酸素マスク。となると、ここは天国でも地獄でもなく、ただの病院らしい。鬱陶しいマスクを外し、一度深呼吸する。そしてベッドの窓側に座っている女に声を掛ける。

「どうして殺してくれなかった」

「シグナムはトドメを刺そうとしよったけど、私とあんたの部下が止めたんや」

余計な事をする。あのまま死なせてくれれば良かったのに。

「ところで、なんで私を撃つたん。大体検討はつくけど、教えてもらいたいわ」

「腹が立った。自分の味わった苦痛の一片でも味わわせてやれば、というのが半分。あなたを撃つたらシグナムが殺してくれると思っただのが半分」

「……ひどい男やな、あんたは」

「お互い様でしょう。そっちは人の内側を土足で踏み荒らした」

人の気持ちを知りもせずに、知った風な口を聞いて、復讐はさせないと言ってきた。撃たれて当然とは言わないが、理性が飛んだのは自然なことだ。なにせ、この何年も積み重ねてきた物全てを否定されたのだし。積もり積もった怨念と、それによって生まれた感情は、理性を砕くには十分すぎた。

だがあの場で彼女を撃つたのは賢くない選択だった。自分の頭を吹き飛ばせば事は簡単に終わっていただろう。今更後悔しても遅いが。

「大事な物を奪われたのはこれで二度目です」

一度目は家族を奪われ、二度目は復讐の権利を奪われた。ここまで見事に奪い尽くされてしまえば、私にはもう何も残っていない。空っぽだ。

「何も生きていく理由がなくなつたから、死のうとしたんです」

「妹さんはどうするん？」

「……それもやはり調べられていましたか。正気も理性も思考も何も残ってません。私が生きようが死のうが、良くなることも悪くなることもないでしょう」

人は何かしらの目標を持ち、思考を巡らせ手段を模索し、理性で選択し、己を動かしてこそ人間と呼べる。私にも妹にも、目標なんて無いし目標を探すだけの思考も巡らせられない。そんなのはただの獣だ。人間じゃない。私も、妹もだ。

「私が死んでもあなたに何か損が出ますか？」

「……あなたの指揮する分隊を纏められん」

「彼らは私と違って大人です。上司に従うだけの常識はありません。纏められないにしても、大した戦力にもならないので切り捨てればいい」

「いいや。適切な運用をすればかなり強力や。それに彼らはあんたを慕つとる」

「いつ死ぬかは私の人生で、死のうとしたのは私の意思です。死ぬ権利まで奪わないでください」

「この頑固者」

「何とでも言つてください。綺麗事ばかり並べ立てて、全部結局は自分が損をしたくないだけじゃないですか」

「違う！ あんたのためや。復讐なんかしたら、あんただけやなく妹まで人殺しの家族として罵られるんやで？」

「妹も罵られて腹が立つような思考能力は残っていません。私は全員殺したら死ぬつもりでしたし問題ありません」

「死んだ家族のために人生を棒に振るんか？」

「管理局が仕事をしないからこんな事をしようと思つたんですよ」

「……今は拘束中や。裁判の準備もしとる。あとはあんたが証人として出れば、有罪にできる」

仕事もせず、偉そうに綺麗事ばかり言ってるのかと思つたら。なんだ、ちゃんとしてたのか。

「それはいい知らせです。仕事してないなんて言っちゃダメ、すみません」

「ヘンリー・グスタフ他四名。裁判で罪が確定すれば、牢に入れられるから復讐はできん。けど、報道は大々的にする。出て来てもまともな社会生活は送れんはずや」

「そうですか……」

殺せないのは悔しいが、罪状が罪状だ。刑は無期懲役か死刑のどちらかだろう。結果として、奴らが後悔しながら死ぬのならそれでも構わない。と言う事にして、妥協しなければやってられない。法廷に武器は持ち込めないし、ロストログアを使ったとしてもすぐ取り押さえられる。何にせよ、復讐は諦めざるを得ない。

「管理局、辞めるかな……」

「はっ」

「知つての通り、私はあいつらをぶち殺すために管理局に入りました。管理局に入って、手柄を立てて偉くなれば、奴らに近付いて殺す機会を得られると思った。殺せないなら管理局にとどまる意味もありません」

中将には、目的を理解してもらい、わずかながらとは言えその援助をしてもらった割に終始迷惑ばかりかけていた。結局、何一つとして返せていない。

申し訳ないとは思いますが、私にできることは何も無い。

「ちよい待ち。部隊はどうするん」

「任せます」

「裁判が終わったら？」

「速やかに死んで、保険金を妹の入院費に当てます」

「私の今までの説得は？」

「ずっと前から決めてた事です」

「……わかったわ、私を撃つた事許そうと思っただけ、やめや。罰として、機動六課がある間は私の下で働け！ その後は管理局で死ぬまで働け！ ええな！」

窓が割れそうなほどの声量で叫ばれた。他の人の迷惑にならない

かと少し心配したが、この病室は個室だったようだ。

「お断りします」

「どうしてそんなに死にたがるんや？ 年頃の男なら、恋とか肉欲に溺れた生活とかそういうのに興味があるはずやろ？ 人生を楽しまずに死んでどうするんや！」

「興味がないんです」

あの日以来ずっと、そういう事とは全く縁のない人生を送ってきた。縁がないどころか、ずっと復讐のことしか考えていなかったせいも、そんな欲求は欠片も無かったから考えたこともなかった。なので、ほんの少しだけ考えてみる。自分が目の前の女を裸に剥いて組み敷いて、その上で腰を振る姿を。

……興奮するどころか、どうしても糞野郎と重なってしまい、言葉では言い表せないほど嫌な感じがする。道理で今まで考えて来なかったわけだ。こんな気分になるのなら、無意識の内に拒否していてもおかしくない。

「ところで疑問なんですけど、どうして私にそこまで生きて欲しいんです？ 赤の他人でしように」

「私も昔は家族が一人も居らんかった。けど……今は皆が居る」

皆、とは。シグナム、ヴィータ、シャマルの三名か。あとはペット。「それはとても感動的ですね。それで、私にも同じように家族がどこからともなく現れるとでも？ それとも妹が正気に戻るとでも？」

仮にそんな奴が出て来たとしても、ガキならともかくこの歳で家族として受け入れられる訳がない。妹に関しては、あのスカリエツティすら匙を投げたのだ。いくら時間を費やしたとしても、果たして治るものだろうか。

「そんな都合のええ話があるわけ無いって顔しとるな」

「現実的じゃない」

「ところがや。ええ話がある。私の家族にならんか？」

「……」

思考停止、数秒の沈黙。瞬きを何回かして、彼女の顔をじつと見る。表情から真意は窺い知れない。思考を再開して、何をするのが最適か

を導き出す。

そして出した結論は、ナースコールを押すこと。きつと撃たれたショックで脳のどこかにダメージを受けたのだろう。でなければこんなことを言うはずがない。精密検査をしてもらったほうがいい。『どうしました?』

「見舞客の様子がおかしいので、頭の検査をしてやってください」

「私はどこもおかしくないで!」

『……取り込み中のようなので、また後で向かいますね』

一体どの口が言うんだ。自分を撃つた相手を許すだけでなく家族になろうと誘うなんて、器が大きいとか、そういう次元じゃない。もはや聖人と崇められてもいい位の善人だ。感動した……が、彼女の考えは私には理解できない。わずか20年も生きていない短い人生だが、ここまで理解できないものは始めて見た。感動よりも、得体の知れなさから来る気持ち悪さのほうが大きい。吐き気を催すような気持ち悪さとはまた別種の……そう。不気味な感じだ。一体彼女は何がしたい。何を考えて私を家族にしたいと言った。考えても、全くわからない。

「正気ですか?」

「正気やし、本気や。目の前で自殺する人が居ったら助けるのが普通やろ。同じような境遇の相手なら尚更」

同情か。不愉快だ。馬鹿にされているような気分になる。同じ苦しみを、絶望を味わったこともないのにわかったような事を言っ。口には出さないが、私はこういう奴が一番嫌いだ。

「どうしてお前なんかと結婚しなくちゃならない」

「結婚?! いや、私は弟にならんかって意味で言うたんやけど……」

弟か。どちらにせよ考えは変わらない。

「お断りします」

「なんでや」

「差し出される手を取るか払うか。選ぶのは個人の自由です」

その手を払い除けることを選んでも、今の状態とさほど変わらない。手を取れば新たな人生が開けるかもしれないが、それは私にとつ

て魅力的ではない。私は屑だ。屑は屑らしく、ゴミ箱へ投げ込まれるべきだ。

「その頑固さが気に入らんのか。なのはに頼んで叩き直してもらおうか」

「自分には関係ないのに、よくそこまで気を使えますね」

「……似たような境遇つてのを抜きにしても、仲間やろ？」

「認めた覚えはありませんが」

「頑固者」

「何回言ったら気が済むんです？」

「そうまで言うなら条件付きで諦めたる」

条件付きなあ……そんな物出されても面倒なんだが。

「今度の模擬戦でなのはに勝ったら諦める。負けたら強制的に、ずっと私の監視下に置く」

「こつちにメリットが一切ありません」

「それじゃあ……勝ったら復讐を見逃してもええ。これでどうや」

「留置場や法廷にいる奴に手が出せるわけがないでしょう」

関係のない人物を巻き込めば話は別だが、無関係な多くの人間を巻き込むのは、できれば殺すのは最小限にしたいという考えに反する。甘い良心を捨てきれなかったからこんな事になったのだが、無関係の大勢の人間を目的のために巻き込むのはただのテロだ。私がしたいのはテロじゃなく、敵討ちだ。どれだけ言葉で飾り付けをしても、人を殺すという事には変わりはないが、敵討ちの方が殺す相手の幅は狭い。より正当性があるような気がするから、敵討ちをする。

「代わりに、あいつらを確実に死刑にしてください。あなたのバックに居る方の協力があれば、その位簡単ですよ。それだけがこちらの望む条件です」

私が復讐をしようとするのも。いや、しようとしていたのも、家族を奪った奴らがのうのうと生きていることが許せないから。要は奴らが死ねばいいのだ。何も自らの手で殺さずとも、ほんの少しの妥協で。自らの手で殺す、という拘りさえ捨てれば奴らは死ぬ。それも、正当な裁きの末に。

願っていた結末とは多少違うが、最善に近い結果だ。私が奴らを殺せば犯罪者となり死んでも保険金は出ない。口座も差し押さえられるだろう。そうなれば妹の治療は続けられない。だが奴らが裁判の未死刑になれば、私は満足して殉職できる。そうすれば保険金が出て、妹の治療を続けられる。

「……ええやろ。模擬戦は三日後。しつかり体を治すんやで」

「ええ。そちらもお大事に」

もしもこの模擬戦に負けても、一生監視が付くというだけ。自殺は止められても、戦闘中に殉職する分には障害にならないだろう。死ぬための状況を作るのは簡単だ。スカリエツティを呼び出して、殺意を持って攻撃を加えればいい。そうすればセットで着いて来るであろう戦闘機人が殺してくれる。簡単なことだ。幸い、奴のアドレスは教えられているし。裁判が終わったら、殺されに行くとしよう。

第17話

模擬戦とは。読んで字の通り模擬的な戦闘の事で、本当の戦闘……つまりは殺し合いではない。よって死人を出すのが目的ではなく、殺傷兵器の使用は望ましくない。ということらしく、持ち込もうとした対空ミサイルと対物ライフルは没収されてしまった。

だが、模擬的とはいえ戦であるため、戦い、経験を積む事が目的である。よって一方的に殴られる事もまた目的に反するらしく、アサルトライフル（AK）とロストロギアで適度に反撃しろとの事だった。

正直に言おう、勝つのは無理。静止しているならともかく空を飛び回る相手に弾をまともに当てるなんてのは無理だ。それが持っている銃がAKならなおさら。当たっても防御力に定評のある高町なのはのバリアジャケットは貫けないだろう。

地上に降りてきたとして、ロストロギアを使った接近戦を挑むとしても、近寄る前にバインドで捕獲されて砲撃を食らいノックアウトされる。

「それじゃ、今日の模擬戦は事前の説明通り、私対ティアナ、スバル。あとはハンク君の1対3です。どんな作戦を練って来たのかは知らないけど、頑張ってね」

ハンクというのは、私のファーストネームだ。ファーストネームで呼んでくれと頼んだ覚えはないが、この部隊なら仕方ない。

あとの持ち物は破片手榴弾、閃光手榴弾、発煙手榴弾のみ。ちなみに前に呼ばれたティアナ・ランスター、スバル・ナカジマの二名とは全く会話したこともなく、まず戦力としてカウントはされていない。目標としての優先度は最低限となるだろう。

「実戦力で考えるなら100対3。私は逃げて隠れるから、助けは求めな」

「冷静に言わないでください、准尉」

「准尉さんは、戦わないんですか？」

「戦わないのではなくて、戦えない。というのが正しい。」

「立ち向かうなんてバカな事はせずに、素直に時間切れまで逃げるの」

が賢明な判断だと思うがな」

なんと弱気な、と罵られ、軽蔑されてもおかしくない発言だが、私は銃を持っていて、少し肉体強化が使えるだけだ。あの女みたいな化け物からすれば街を歩く一般市民を捻り潰すのと何ら変わりないだろう。

「初手に目くらましと煙幕をする。音が鳴るまで下を向け。その後は任せる」

高町なのはがデバイスを起動し、バリアジャケットを身に纏って宙へと舞い上がった。全力で飛ばば攻撃は可能だが、外せば隙だらけ。通らなくても隙だらけ。よって両手を後ろに回して、三種の手榴弾のピンを抜く。

「それじゃ、模擬戦を始めようか」

本人は模擬戦のつもりでも、他人からみればそうではなく、見る人が見ればそれは一方的な蹂躪。あるいは虐殺と呼ばれる類の行動だろう。さすがに殺されることはないだろうが。

右手に持ったフラツシユバンと破片手榴弾を空中の高町へ投げ、左手のスモークグレネードを地面に転がす。

フラツシユバンとグレネードは瞬時に迎撃されたが、太陽が爆発したような閃光を撒き散らし、耳を貫く爆発音を立てて破裂した。グレネードの破片が降り注ぐ前に煙幕の中をビルの影へと駆け出す。

「?????!」

向こうで何か叫んでいるような気はしたが、音のせいで耳がやられ、一時的に聴覚が麻痺している。

ここで手頃なゴミ箱を見つけ、中身を掻き分けて中に入り、蓋を閉じて底で寝転がる。シミュレーターがゴミ箱の中まで再現しているからといってそこに隠れるのはどうかと思うが、この際気にしないことにする。

物理設定でなければ実体を持つ物を破壊することは不可能なので、どれだけ薄かろうと壁一枚挟めば容易に防げる。そして、相手も死人を出すわけにはいかないので物理設定には変更できない。よってこ

ここに居れば安全なのだ。あとは、模擬の制限時間である一時間がすぎ
るまで隠れていればいい。

そして、数分経ったところで外が静かになった。しかし、外を見る
つもりなど一切ない。顔を出したところをサーチャーに捉えられれ
ば、蓋を開けられて魔力弾の嵐を叩き込まれるだろう。

「ハンク君……一体どこに居るの？」

悪魔の囁きがすぐ近くで聞こえるが、冗談じゃない。このまま隠れ
続けていればこちらの勝ちなのだから、呼吸と心拍以外で体を動かさ
ず、石のように固まっておく。

「こつちに逃げ込んだんだよね、レイジングハート」

『はい、間違いありません』

「でもこつちは袋小路。壁をよじ登った跡も無いし」

……なるほど、二人はやられてしまったか。情けないとは言ってや
るまい、当然の結果だ。蟻二匹が象に挑むのと同じこと。むしろ瞬殺
されないだけ、よく持った方だ。

「……なるほど、考えたね。確かにゴミ箱の中に隠れていれば、魔法は
通らない」

煙幕の中を補足されていたのか。まあ、相手は機械とペアだ。仕方
ないと言えば仕方ない。そして近寄ってくる処刑人の足音。アサル
トライフルの安全装置を外して、左手で真上に構えておく。右手には
ロストログアを起動しておいて、後詰として持っておく。

「さあ、年貢の納め時だよー」

勢いよく開かれた蓋と、そこから差し込む光。逆光になってよく見
えない顔に銃口を向けて、トリガーを引き絞る。

「うわっ!？」

叫び声は聞こえるも、有効打にはなっていない。予め防御魔法を部
分的に使っていたようだ。弾が顔に当たるより前に弾かれていた。

魔法を使って強化した身体能力で、かなり無茶な体勢のまま剣を突
き出す。防御膜に阻まれるが、構わずそれごと突き上げる。

「痛いなあ……」

5. 45mm弾30発を至近距離で食らって、さらに普通の人間な

ら頭が胴体から離れる突きを食らって痛いで済むとは。わかつてはいたが、圧倒的な戦力差だ。圧倒的すぎて笑えてくる。路地から飛び出して、表通りへと飛び出し、正面のビルの玄関ガラスを突き破って中へ逃げ込む。勝ち目が無いのだから、相手をするつもりは一切ない。

「逃がさないから」

逃がすとプライドに傷がつくからか、と言いたくなかったが口を閉じる。わざわざ怒らせる必要もなかった様子。上のフロアからガラスを突き破って入ってきたからだ。一瞬だけ呆気にとられたが、すぐ魔力弾とガラスが降ってきたので非常階段へ走り、防火扉を閉めて恐ろしい精度で飛んでくる誘導弾を防ぎ、それを背にして座り込み一度深呼吸をする。施設の内部まで精巧に再現されているシミュレーターに助けられた。

「全く……ああいう奴は一度一方的に殴られる怖さと痛さを知るべきだ」

痛みも恐怖も感じないが。感じる時期はあった。その気になればすぐにでも捕まえて、砲撃でノックアウトするのも可能だろうに。どうしてそれをしないのか……ああ、逃げる様子を見て楽しみたいからか。趣味が悪いな。

「あるよ、一方的に攻撃された事」

防火扉の向こうから声が聞こえる。声そのものは、愛する子に話しかけるような優しい声だが、その奥に込められた感情はまた別だ。背筋の凍るような憎悪がこれでもかと込められている。ここまで憎まれる事をした覚えは無いが……そういえば、私の持つロストログアの効果に感情の増幅というものがあつたような。ああ、きつとそれだ。

「そういう君はあるのかな？」

「……今まさに」

「そう……そういえば、君ははやてちゃんを撃つたらしいね」

「それがどうしました？」

「少し、その事について話を聞かせてもらいたいと思ってたんだ」

「模擬戦が終わってからにしませんか？」

会話しながら息を整え、心臓が落ち着くのを待つ。体の強化をして
いるとはいえ、蛇のおかげで体の再生能力が高まっているとはいえ、
病み上がりでこの運動は少しキツイ。酸素が足りない。消化に良い
食事しかしていないから、エネルギーも足りない。ついでに言うとい
力も足りない。

「そうだね。じゃあ、速く終わらせようか」

先ほどの声とは真逆の。中身はさつきと同じ、強い憎しみの籠った
冷たい声。その言葉に込められた意図をなんとなく把握。非常に嫌
な予感がしたので防火扉から離れ、身体強化に使う魔力を増やし、跳
ね上がった筋力で階段を1フロア飛ばしで上がる。

「クロスファイア、シュート！」

あろう事か、防火扉を砲撃でぶち抜いて、空いた穴から階段へ侵入
してきた。それはつまり魔法の設定が物理設定に切り替えられてい
るということ。

思考している日まではない、逃げなければ殺される。殺されるのは
別にいいが、まだ奴らの死を見届けていない今死ぬ訳にはいかない。
とりあえず上へ逃げる。

「言ったよね、逃がさないって」

もう二つフロアを上がり、三階への扉を切り破って侵入。しかし後
ろから追ってくる。正面には何も無いフロアに、ガラスの窓。

迷う暇はなく、ガラスの窓へ突っ込んで突き破り、また外へ。竜退
治をした時にもこの位の高さまで跳んだはずだ、着地もいけるはず。

「っしー」

地面に無事着地し、また逃げる。振り向かず、次に逃げ込む場所を
探しながら逃げる。振り向きはしない、恐ろしい物が迫って来ている
のはわかるから、ひたすら走る。

背中に一発誘導弾が当たる。痛みはないが、衝撃で体勢を崩しそう
になったからわかる。背中から足へと、ぬるい液体が流れる。それで
も逃げる。今のところそれ以外に方法はない。

「待ってよ……どうして逃げるのかな。私はただ話がしたいだけなの
に」

振り返れば、彼女の顔は笑っていた。その背後には大量の誘導弾が浮いていて、それはまるでこちらを食い殺そうとする鮫の顎に見えた。逃げられるわけがない。

私が軽く絶望したのを見て楽しくなったのか、笑みを深くする高町なのは。そして、大量の誘導弾が雪崩のように押し寄せてきた。

異常を察知したのかインカムから助けに行くだの何だのという音が流れる。しかし、このままでは部下たちが助けに来るよりも私が死ぬほうが速いだろう。逃げるのはやめにして、一回りサイズを大きくした剣を地面に突き刺して誘導弾に対する盾にする。拳大の電が屋根に当たって砕けるのと同じような音が十数秒ほど続き、ようやく止んだ。

「殺したいならもう少し待ってくれるか。具体的には一週間ほど」

左と後ろから誘導弾が飛んできたので、片方を避けて片方を切り裂く。

「殺したいなんて思ってないよ。ただ、動かずに私の目を見て話をしてくれたらそれでいいんだよ」

少しでも正気が残っていればと思ったが、ロストロギアの影響で増幅された怒りに飲まれて完全に正気を失ってる。言ってることとやろうとしている事が大きく食い違っているのがいい証拠だ。

とりあえずマトモに戻すには、パソコンと同じように意識をシャットダウンさせるしか無いだろう……できるかどうかは別としても、このまま何もしなければ殺されるだけだ。糞野郎が死刑になる瞬間を見届けても居ないのにまだ死ぬ訳にはいかない。

応援が到着するまで残り60秒という声がまた流れる。それだけあれば何回死ねるだろう。

残り2つのスモークグレネードを地面に転がして煙幕を張り、その中を姿勢を低くしながら移動する。あちらの位置と、誘導弾の位置は光っているのでわかる。が、バインドはそうもいかない……残り55秒。スモークが晴れるのはあと5秒ほどだ……なにか生き残るためにいい手はないか。

スモークが晴れるまで残り3秒。ふと自分の腕に住み着いている

ロストロギアの名前と特性を思い出す。

ロストロギア、蛇。宿主の望む形に姿を変え、狩りを手伝う……とありあえず頑丈。賭けてみようか。

残り2秒。桃色の光の塊がついさつき自分が居た場所へと極太の砲撃を行う。その余波だけでスモークが消え去ってしまった。相手はこちらに気づいて、砲口をこちらへ向ける。それと同時に、細長い縄の形に変化した「蛇」を相手に投げつけ、巻きつけようとする。回避しながら撃ち落とそうとされるが、それはただのロープじゃなくて、「蛇」だ。撃ち落とそうとする弾を身をよじって避け、避ける彼女を追いかけて、巻き付いて動きを止める。

そのロープを全力で引き下ろし、相手を地面に叩き落とす。土煙が舞い上がったところで縄を剣に戻し、右側に弧を描きながら突っ込む。

空戦魔導師との戦闘の基本。まずすべきことは何とかして相手を地面へ引きずりおろし、視界を封じる。

砲撃、射撃が得意な相手の場合、相手に気付かれる前に長射程の武器で仕留める。無理な場合はどうかしてインファイトに持ち込むこと。

その基本に則り一息に接近。右側で足を止め、姿勢を起こす勢い乗せた斬撃を斜め下から切り上げるように叩きこむ。が直前に割って入った左腕で弾かれた。左腕のバリアジャケットすら切れていない。

ならば次狙うのはがら空きの左脇腹。右腕は弾かれて伸びきっている。やや無理のある姿勢から左の拳を突きこむ。骨の折れる音がしたが、折れたのは相手の肋かこちらの腕か。一体どちらか。

「つくー！」

相手が少しだけ苦悶の声を上げるが、こちらの左腕は肘と手首のちょうど真ん中くらいで曲がっている。痛み分けというにはややこちらの損傷が大きい。さらに言うなら、彼女はデバイスを持った右腕をまだ使っていない。

気づけばこちらに向けられた砲口に光が集まる。弾かれた剣を腕力で強引に引き戻し、相手の右腕に叩きつけて砲撃を明後日の方向へ撃ちださせる。ビチリ、とまたもや嫌な音と、腕の中で何か弾ける感覚。右腕も使いものにならないか。

「また外しちゃったよ」

腹に一発、砲撃ではなく魔力弾を撃ち込まれる。痛みはないが、どす黒い血反吐を地面にぶちまける。胃がやられたようだ。

「ねえ、どんな気持ち？ 痛い？ 痛いよね？ はやてちゃんもつと痛かったんだよ？」

「申し訳ないが、痛みを感じない体なんです」

傷はどうも、かなり深いようだ。腹筋が壁になってくれたはいいの、衝撃は内臓を十分に痛めつけてくれた。立てたとしても録に動けはしない。筋が切れて動かなくなった右腕から、骨は折れているが筋は繋がっている左腕に剣を移す。動かすための筋さえ繋がっていれば、強化して無理やり動かせる。だが、もう何もできることはない。既にあちらは立ち上がって私を見下ろし、デバイスの先をこちらへ向けていた。杖の先には先ほどの貯め無しより遥かに大きい魔力が集まっていて、既にそれを撃つための準備が整っていることを知らせる。遠くにへりの飛ぶ音が聞こえるが、今からではとても間に合わないだろう。

「スターライト……」

「まるで、悪い夢だ」

圧倒的な力を前に、手も足も出ずにやられる。結局は昔と何一つ変わっていない。復讐のために死に物狂いで力をつけてきたつもりだったが、やはり自分はこの程度なのだろう。そもそも自分なら魔導師を相手にしても勝てるなんて、思いあがり過ぎたのだ。

自分の身を弁えなかった結果がこれ。大人しく二佐の提案を受け入れていればよかった、と今更後悔する。

「ブレイカーー！」

閃光、爆風、轟音、そして光の壁が迫る。ここまで来れば、もう何もできやしない。大人しく運命を受け入れ、眼を閉じる。

が、体が光に焼き尽くされる事もなく。別の何かに担がれて災害から逃れられてしまった。目を開くと、金色の髪が風に揺られて舞っていた。

「ごめんね。もう少し早く来ようとしたんだけど。割って入るのが遅れちゃった」

「……いえ、助かりました」

助かった……のか。いや、また死に損ねたとも言える。

「高町一尉はどうなりました」

「皆が押さえ込んで。傷は大丈夫？」

「……さあ？」

痛みは感じないが、とにかく全身ボロボロなのはよくわかる。多分、右前腕筋断裂と左前腕骨折。背中を広い範囲で損傷。腹部にも一発直撃をもらって、内臓も多少傷ついているだろう。

よくもまあ、生きているものだ。

「……さあ？　って……血がたくさん出てるけど」

「痛みだけは一切感じない。便利な体です」

「だからそんな平気な顔してるの!?　シヤマル！」

「はいはい、居るわよ。傷はかなり広いし、この出血量だと結構深さもあるわね」

「つまり？」

「意識があるのがおかしいレベル。応急処置も必要だけど血が出過ぎてる……できるだけ早く輸血しないと危険だわ」

なんだ、そこまで来てるのに死んでなかったのか。今回もまたギリギリで生き残ってしまった。死の淵まで叩き込まれるのは慣れてるが……今月に入って三度目だ。戦闘機人との戦闘で一度、自殺未遂で二度目。今回で、三度目。

ここまで来て死んでいないのは不幸なのか、幸運なのか。

「……なのはは、一体どうして急にこんな」

「私のロストログアの効果ですよ。起動していると周りの人の感情を増幅させるんです」

便利なものを拾ったと思えば、とんだ災難を呼び寄せる。拾うん

じゃなかったな。

「怪我してるなら静かにしてて」

「痛くないから大丈夫でしょう……まあ、そろそろ限界です。あとは、お願いします」

戦いが終わって、気が抜けた。戦闘中はハイになってたおかげで意識を保っていられたが……終わってしまえば興奮状態も冷める。おかげで眠い。痛いと言えないって話もあるが、痛みを感じないのはこういうときに便利だ。

第18話

周りがほぼ真っ暗な中で目を覚ました。月の光だけが視界を確保できる唯一の光源。

起き上がろうとしたが、首に輸血の点滴が刺さっているのがわかったのでやめておく。起き上がるのはやめて、服の裾を捲り上げて傷口に触れてみる。

包帯が巻かれているせいでどうなっているかはわからない。だが、それに滲んだ血が固まっているのを考えると、気を失ってから一日も経っていないのだろう。おそらく血はもう止まっていて、傷も塞がりかけといったところか。近頃ロストロギアのおかげか傷の治りがおかしいくらいに速い。包丁で指を切った程度なら数秒で跡形もなくなる。

その分速く仕事に復帰できるのはありがたいのだが、自分が人間じゃなくなっているような感じがして少し恐ろしくもある。ロストロギアに寄生されている時点でマトモな人間とは言い難いが。

それにしても、本当に私は運が良いのか悪いのか。並の魔導師よりもはるかに強いといわれる戦闘機人と戦って一度は勝利。上司に二度殺されかけて、二度とも生き残れた。しかも、二度目は本気で殺す気だった高町なのはを相手にして、だ。こう何度も死にそこねると、死神に嫌われているのではないかと思ってしまう。

死にたがりなのに死に損なって安堵するのもおかしいな。

自嘲の笑みを浮かべて改めてベッドに体を預けると、天井から指一本が突き出ているのが見えた。幻視ではない。前に見たことがある。そういえば捕獲した戦闘機人二人に逃げられた、という話を聞いたな。お礼参りで殺しに来たか、それともこれを機に拉致して洗脳してスパイにしようという魂胆か。

「ども、こんばんは」

頭だけを出して挨拶される。しかも笑顔で。どうも殺しに来たとか俊いに来たとか、そういう物騒な雰囲気は感じられない。

「何しに来た？」

「お見舞い。高町なのはに腕骨折と肋二本に罅を入れたのに生きてるって聞いたからさ」

顔だけだと思ったら、全身天井から滑り出て空中で綺麗に一回転。十点満点の着地を見せてくれた。その後許可してもいないのに面会者用の椅子に座られた。そして月明かりが彼女の持つ白い紙に反射する。

「で、調子はどう？ カルテには右前腕の筋断裂が複数箇所。左尺骨橈骨単純骨折。胃、小腸、肝臓、大動脈損傷、胸椎、肋骨損傷、その他軽傷多数って書いてあるけど……」

そこまでひどい傷だったのか。本当によく生きていたな、自分。そしてわずか二発の直撃だけでそこまでやられるとは。やはり魔導師というのは恐ろしいものなのだ。そんな魔導師という化物を相手に何の防御手段もなしに接近戦を挑むなんて、私はきつと慢心していたのだろう。この負傷は、慢心、思いあがりの結果以外の何物でもない。

「医者 of 腕が良かったのか、傷はもう塞がってきてる」

「どれだけ医者 of 腕が良くても普通そこまで速く治らないから。あたし達みたいになノマシンでも入ってるの？」

「蛇」の事は知られてないのか。ひよつとして単純なデバイスとして見られているのだろうか……いや、スカリエッティの事だ。内通者から情報を引き出して、既に知られているだろう。知られていなくてもいずれ知られる。だから今話しても問題無いだろう。

既に治ってしまった右腕を上げる。最近は両腕にも痣が現れてきているのだが、左腕はギブスが巻かれているので見えない。

「痣？」

「生体ロストロギアが寄生してる証だ。これが肉体の回復力を上げてくれる」

「……ああ、もしかしてチンク姉のIS食らったのに突っ込めたのってそのせい？」

「違う。痛みを感じないから何も考えずに突っ込んだだけだ」

今思えばなかなか無謀な判断だった。一歩間違えば死んでいたかもしれない。あの時から既に死に急いでいたのか。

「あんたも大概化物だねー、普通は痛くないからって戦闘機人相手に戦い挑んだりしないよ?」

戦闘機人という本物の化物に化物と言われるか。別に体を弄ったりはしていないのに、体が変わっている自覚があるから妙な気分だ。「あの時は相手が戦闘機人だなんて知らなかった。知ってたらあんな無茶はしてなかっただろうな」

「書類では陸戦Eの魔導師とも呼べない人間に、あたしとチンク姉は負けて捕まっちゃったのか。傷つくなー」

陸戦Eなのは、魔法が身体強化しか使えないからだ。いくら戦果を上げて、射撃魔法が少しも使えないとなると、Dにさえなれない。質量兵器を使った試験は認められていないので、それも原因の一つだ。質量兵器込なら多分、陸戦Cくらいの実力はあると思う。これもまた思いつきか。

それにしても、こいつは見舞いに来たと言うよりも、ただ話しをしにきたようだ。会話をしているうちに楽しそうに見える。

「私たちは所詮不意打ちでしか勝てない弱者の集まりだ。気を落とすな」

「不意打ちでも格下に負けたっていうのが結構効くんだよ……怒られちゃったし」

格下扱いか。まあずっとそう思ってくれていたほうがこちらとしてはやりやすい。油断している相手を始末するときこそ、質量兵器は真価を発揮する。

「次があったら、絶対油断しないから」

「次があるかはわからないが、死にたくないならそうするべきだな。私だったら見逃してやるが、私の部下は当てる」

というのは嘘。私でも見逃さず、隙を見つけ次第一発で撃ち殺すつもりでいく。ここではもしもスカリエツテイと組むときになった時のためと、敵として対峙したときのため。両方の場合を想定し、警戒心を削ぐためにデタラメを言っている。

「まあそれはともかくだ。見舞いに来てもらって置いて、何もなしに帰れとは言わない。そこにある菓子は全部食っていいぞ。持って

帰ってもいい」

誰が置いていったのかも知らない菓子を指さして持って帰るように言う。どうせ置いていても私は食べない。

「あ、いいんだ。じゃあもらっていくよ。なんだか悪いねえ」

「礼はいい。代わりにスカリエツティに自首した方が罪は軽いぞと伝えておいてくれ」

中将が怪しい動きをしている中で、さらにスカリエツティのことまで気を使わなければいけないのは面倒極まる。だが、スカリエツティさえ自首してくれば近頃世間を賑わすガジエツトドローンも出てこなくなり、仕事がなくなつてとりあえずミッドは平和になって、私は部隊を設立する前と同じようにとても危険な暗殺・潜入・工作任務であちこち奔走することになるだろう。

「二応伝えとくね。じゃあ、また近いうちに会いに来るから」

できれば来ないでほしい、という願いを口に出すよりも速く、床に沈んで消えていった。もしも私がジェイル・スカリエツティとつながりがあると六課の面々に知られれば、間違い無く面倒なことになる。せめて……裁判が終わるまでは会いに来ないことを祈ろう。

第19話

午後零時。今日は午前七時に起床し、血で固まってパリパリになった包帯を、鬱陶しいからと自分ではがしてゴミ箱に捨てた。そして朝食を持ってきたナースに怒られた。血のついたものは感染性廃棄物として決められたゴミ箱に廃棄することになっているのに、普通のゴミと一緒にするなどのことだった。

朝食の後は体をタオルで拭いて。輸血の管を抜いてもらって。前入院した時に世話になった医者に見てもらうって、「退院しても問題ない」と言われて。折れた左腕も治っていたのでついでギブスも外してもらった。

医者には退院しても問題ないとは言われたが、まだ退院したくないのが現実。八神二佐を撃つてからまだ一週間と経っていない上に、六課のメンツの前で謝罪していないせいで、六課のメンバー。特に八神二佐の家族である三人からの印象は最悪といってもいい。今戻れば視線の槍が体中に突き刺さることだろう。退院したらきちんと謝罪しておかねば。

まあ、その前に謝罪されることになるようだが。

「……あの」

謝罪の言葉が出てくるよりも速く割って入る。

「謝罪は不要です。高町一尉」

本日の見舞い客二人目。高町一尉が謝罪する必要はどこにも無い……わけでもないが、私が殺されかけたのは自業自得だ。一尉の親友である八神二佐を撃つたら彼女が怒るのは当たり前。それを全く考慮せず、自分の持つロストロギアの特性を忘れて起動した結果、怒りの感情が増幅されてそれに飲まれた。おとなしく非殺傷設定のまま殴られるか、負けを認めるかしていればこんな事にはならなかったのだし。

「でも、私が君を……殺そうとしたのは、間違いない事だから」

「貴女が怒り、私を殺そうとした理由は至極まともなものです。大事なものを傷つけられた、それだけで害意が湧くのは当然のことです」

私自身、そういう経験を過去にしてきた。そして殺意を持ち、実行に移そうとしていた。だから批難するつもりは欠片もない。批難する資格もない。

「あなたは悪くありません」

やったことは責められて然るべき事だが、責めて何が得られるわけでもない。それよりかはここであっさり許して懐の広さを示しておく方が、後のためには良い判断だろうと思った。自分の命は羽のように軽く、裁判が終わったら別にいつ捨てても問題ない物だと思っている。だから自分を殺しかけた相手をこうも簡単に許せる。

「私は、そうは思わないよ……抑えられなかったのは私だし」

許す、と言っているのにグチグチと。どうしても何か償わないと気がすまないのか。それとも自分が人を殺そうとしたことがよほどショックなのだろうか。そんな馬鹿な、一尉にまでなっておいて処女というわけもないだろう。

「それはどうでもいい事です。それよりも、腕と肋を折ってしまい申し訳ありません」

「いや……ハンク君があやまる事はないよ。自分を守るためだったんだし」

所謂正当防衛であるから、彼女の言うとおり私は悪いことはしていない。文字通り正当な理由があつて攻撃を加えたのだから。だが、彼女に怪我を負わしてしまったという事実は、機動六課にとってとても大きな戦力減となる。私が寝ている間に攻撃があつたそうだが、その際は高町一尉は出撃できずに治療を受けていたとか。そのせいで少し苦戦したとも聞く。

「私のような有象無象が死んでも戦力の損失は無いに等しく、補填も容易です。しかし高町一尉が怪我をしたり、精神的に不安定となり出撃できないとなれば、補填は容易ではありません」

「自分が戦力にならない？ 君だつて十分戦力になつてるし、皆の役にも立ってる。だから死んでもいいってわけじゃないよ」

「お褒めに預かり光栄ですが、それは過大評価です。質量兵器は運用法さえ覚えれば誰にでも使用可能で、一定の戦力となります。私が死

んでも短期間の訓練で同等の戦力が補充可能です」

私のように痛みを知らず、恐怖を知らずに突っ込む兵士を作るのも、薬を使えば簡単だ。ただしその場合、本来の能力をフルに発揮するのは難しい。むしろ無理か。

それにしても、わからない。なんで私のような有象無象を殺しかけた程度でここまで自分を追い詰めるのか。

「高町一尉はなぜ私のような有象無象に気を使われるのですか。今まで手を下してきた犯罪者と同じように、殺そうとしただけでしよう」
そういえば今まで人を殺した事がある風にしては、やけに落ち込んでいるが。

「まさか、人を殺したことが無いと」

「無いよ！……そういう君はあるの？」

そんな馬鹿な。いくら実力があるとはいえ、一人の人間も殺さずにその歳で一尉の階級まで上り詰めるなんて無茶苦茶だ。出鱈目だ。そんなことが人間にできるのか……できるのだろう、それを実行した奴が目の前に居る。

もはや人の形をしたロストロギアと言われたほうが納得がいく。

「はい」

「……」

途端に眉を顰める高町一尉。人殺しにそれほど嫌悪感があるのだろうか。私は最初から嫌悪感など無く、必要だから殺してきたが。私がおかしいのか……おかしいのだろう。まあそうだ、家族を殺されて、妹もあんなになったんだ。正気でいられるはずもないか。

「どうして、殺したの？」

「家族の仇を取るために、出来る限り短期間で出世する必要がある。そのためには、とても表沙汰にはできないような仕事を進んでこなす以外になかったのです」

淡々と、レポートを読み上げるように説明する。事実を言っただけが、嫌われただろうか。そのほうが好都合だが。死に行く時に助けられても困る。

「仕事だからって、人を殺していいのかな」

「わかりません。ですが、私のしたことは管理局の利になっていると思います」

私が今まで殺してきた人間を野放しにしていれば、さらに多くの人間が死んでいただろう。そう考えれば任務にも正当性がある。正当性がどうかはわからないが。

わからない。だが、私がやってきたことが復讐の前段階へ至る手段とはいえ、正しかったのかどうか。議論する価値はある。

「犯罪者を魔法ではなく銃や爆弾で。捕らえるのではなく殺害して。そうやって世界の安定に貢献してきましたが……これは間違っているのでしょうか。率直な意見を求めます」

今までに何度か、自分は自分と同じ境遇の人間を作り出してきただけではないのだろうかと思ふことはあつたが。ひよつとするとあの糞野郎共も任務で私の家族を殺したのかもしれない。そうすると私のやってきたことと、奴らのやったことは同じ。私を肯定されれば、奴らのことも肯定されることになる。

屈辱だが、事実だ。だが仇を討とうとしていたのは私のエゴだ。奴らのしたことが正しかろうが間違つていようが、それは変わらない。……どうなんだろう。君を殺そうとした私が言うのもなんだけど、どんな理由があつても人を殺すのは良くないことだと思う」

「間違つてはいないと」

「わからない……けど、管理局には人が足りない。特に陸は」
「ええ」

「本来ならやつちやいけないことでも、やる必要がある。なら、仕方ないことじゃないのかな……私がやったことは、する必要もなかったことだけだ」

「それが答えですか」

認めはしないが、否定もしないと。どっちつかずの答えだが、それが正解なのかもしれない。

「うん。君はどうなの?」

「概ね同意見です」

「そう……ところで、昨日持ってきたお菓子は食べてもらえたかな」

「あれは高町一尉が持つてきてくれたんですか。夜中に起きて腹が減っていたので、ありがたくいただきました。美味しかったですよ」
実は食っていないが、見舞いに来た戦闘機人にやったと言うわけにもいかなないので自分が食ったと報告しておく。まさか、私が嘘をつくとは思っていないだろう。

「そう。良かった……じゃあ、今日はこれで。また来るから」

「もう退院するので、次会うのは隊舎です」

「え、もう退院？ あんなに大きな怪我してたのに？」

「医者のお腕がいいんですよ」

「そ、そうなんだ……じゃあ、また今度は隊舎で」

改めて別れの挨拶を告げられる。よくわからない反応を返されたが、不気味と思われただろうか。私も彼女とは別種の化物になりつつあるということの自覚はある。自分でも気持ち悪いと思うくらいだ、他人がそう思わないはずもない。

その内、首を切り落とすくらいでは死ねなくなるかもしれない。体を木っ端微塵に吹き飛ばさないと死ねなくなるとか、嫌だな。

第20話

午後3時。病院服から管理局の制服に着替え、持ってこられていた荷物をまとめ会計へ。まさか短期間の間に二度も病院の世話になるとは思っていなかった。なので支払いはキャッシュで。足りないということはありえない。今まで汚れ仕事や危険な任務をこなした経歴と、さらに准尉という階級もあり、なんだかんだで一般市民から見れば金持ちと言っても差し支えない程度の貯金はある。

といっても、この金は自分のためのものではないのだが。領収書を受け取って財布の中にしまい、会計場に背を向けて玄関へ真っ直ぐ歩く。

病院の玄関から出ると、迎えらしき人物が居たので、声をかける。

「こんにちは」

「……」

「そう露骨に嫌な顔をしないでください、八神二尉」

気持ちはわかるが……全員の前で一度に謝罪するつもりだったが、とりあえず謝っておくか。

「以前のことは申し訳ありませんでした。あの時は少し錯乱していましたが、許してもらえませんかね」

「……ハンクー！」

まるで腹を殴られ息ができない状態で無理やり出したような声だ。

しかもなぜ階級なしでファーストネームで呼ぶのか。

「貴様のやったことは、許すようにと主から言われている」

珍しい。あの女もたまには自ら進んで良い事をしてくれるのか。嫌がらせしかしないのかと思っていた。あとは、呼び方も命令か。きつとそうだろう、私だつて嫌っている相手をわざわざ気安くファーストネームで呼ぼうなんて思わない。

「そうですか。ところで、ファーストネームで呼ぶのはやめていただけませんか。階級、役職、以外の呼び方で呼ばれるのは慣れていないもので」

「……私も非常に遺憾だが、主の命令だ」

やっぱりか。あいつは必ず何か一つは嫌がらせをしないと気がすまないのか……あるいは私と六課のメンバーとの距離が遠いことを気にしているのか。後者ならば、あまり親しくなると私が死んだ時にパフォーマンスが下がるからあえて不要な慣れ合いを避けていたのだが。

「それと、主からの命令だ。今後は私達のことを階級ではなく名前で呼ぶように、とのことだ」

「私達、とは六課のメンバー全員でしょうか」

「そうとは聞いていないが、おそらくそうなんだろう」

「了解しました。命令とあらば従います。シグナム……さん？」

一瞬どんな敬称をつけるか悩んだが、さん付けで呼ぶのが一番いいだろう。おふぎけと嫌がらせを兼ねて「ちゃん」付けで呼ぼうかとも思ったが、そんなことを言えばこの場で斬り殺されかねない。

それにしても感情がわかりやすい女だ。嫌という感情が、まるで色のついた靄となって周囲に漂っているような……

「……」

本当に、靄が見えるような。そんな筈はないと思い目をこする。

「どうした？」

「眼にゴミが入っただけです」

また眼を開くと、靄は消えていた……疲れが出たのだろうか。きつとそうだ、最近はいろいろなことが短い期間で起こりすぎている。部隊の訓練をして、試験小隊としての初の出撃。戦闘機人の襲撃と撃退。機動六課との併合。模擬戦。機動六課との共同出撃。ホテル・アグスタで復讐を断念させられた。その後八神二佐を撃って、シグナム二尉に殺されかけた。その後さらに高町一尉との模擬戦で殺されかけて。

なるほど、幻覚を見るのも仕方ない。

「そうか。なら車に乗れ、六課へ戻る」

病院玄関のすぐ正面の道路に駐車してある車を指して言う。普通の、それほど値段が高くもない人気のある乗用車だ。トランクに荷物

を放り込んでから助手席に乗って、シートベルトを締める。

「出るぞ」

特に言葉を交わすこともなく、そのまま車を発進させる。

車が病院の敷地から出てしばらく。ナビは搭載されているようだが音楽は一切流れず、エンジン音だけがBGMとして六課への道を進む。会話は一切ない。相手の顔を見ることもなく、やや眠気がしてきたのでシートを倒してまぶたを閉じておく。六課まではあと三十分ほどかかるはずだ、その間寝ていよう。

「……私は」

寝ようと思ったら、相手が沈黙を破り声を出した。独り言ではないだろう、すぐ隣。どんな小さいこえで呟いても聞こえる位置に人が居るのだし。

「主にお前を許すように言われたが、私はどうしても許しきれない」

何かと思えば、あたり前のことを言ってるだけか。どれだけ他人から殺したいほど憎い相手を許すように言われても、許せるはずがない。当たり前のことだ。

「裁判が終わった後なら、気が済むまで殴るなり殺すなり。好きにしていいですよ」

「話は最後まで聞け。貴様が過去に味わった屈辱の欠片程度は理解できた……つもりだ。私も、トドメを刺そうとする私を止めに入ったお前の部下を切り捨てよう」と一瞬思った」

見た目によらず随分と物騒なことを考える。いや、人は誰でも感情に飲まれればそんなものだろうか。それで、一体それがどうしたというのか。

「その時に、復讐の邪魔をされるのがどれほど腹立たしいか理解できた」

言ってることはやや的をはずしているが、全く見当違いなわけでもない。一応続きを聞いておく。単純に頭が悪いのと、眠いのも合わせり私の低能な頭脳は複雑なことを考えるほどのリソースがない。思考を拒否している。

「厚かましい頼みかもしれないが、お前を許す代わりに、主のした事を許してほしい」

「二佐は義務を果たしただけ。許すも何も無いでしょう」

正直、八神二佐に対してそれほど怒りの感情は湧いていない。あの時もただ広大な海の真ん中に一人放り出されたような、そんな喪失感と虚無感でいっぱいでは湧いていなかった。

「邪魔をされて、許せないという気持ちがあったからあんな行動に出たんじゃないのか？」

「それよりも、半生が全て無意味になったショックで自棄になってたのが大きいですね。だから苦しまずに殺してもらえそうな行動を取りました」

それでも結局死に損ねたが。最後まできちんと止めを刺してくれないと困ってしまう。空戦Sランクの立派なエースだというのに、詰めが甘い。いやまあ、トドメの邪魔をしたのは私の部下なのだが。彼らも私を氣遣つての行動だ、責めはすまい。

「次があるなら、ちゃんと首を撥ねてください」

「……お前は どうしてそんなに死にたがる」

「気が利きませんね……事情を知ってるなら、察してください。仇が死んでも、ずっと治る見込みのない、唯一の家族を見続けられないなんて辛いだけじゃないですか」

眠気で意識が朦朧としてきたのか、自制が聞かずに本音が蛇口を捻ったようにポロポロと溢れ出てくる。わざわざ話す必要も無い事なのに。

「治らないという保証もないだろう。なぜそう言い切れる」

「少なくとも、私が生きてる間は無理ですよ……」

肉体の医学は発展しても、心の医学が進展する速度はまるでナメクジが這うように遅い。スカリエッティすら匙を投げた妹の心が治せるほど発展するには、果たしてどれほどの時間が掛かるやら。さつき言ったとおり、私が生きている間はまず無理だろう。

「それよりも、六課についたら起こしてください。少し寝ます」

これ以上話しているとスカリエッティとの付き合いまで喋ってし

まいそうなので、会話を切ってそのまま寝てしまう。次起きるときは機動六課。また、謝罪のセリフを考えておかないとな。起きてからでいいか。

第21話

「ハンク……ハンク。准尉！ 起きろ!!」

耳元で怒鳴られて、やっと昼寝から覚醒する。目を開けて窓の外を見れば、もう六課の隊舎が目の前にあった。

「降りたら真つ直ぐ主に会いに行け。待たせるなよ」

「わかりました」

助手席のドアを開いて、車から降りる。振り向いて、ドアを閉める前に一言。

「わざわざありがとうございます」

一言だけ言っただけでドアを閉める。少し驚いたような顔をしていたが、二佐の命令の真意を考えればこういう細かい行動も面倒だがおいた方がいいだろう。親しくならなかったのは私なりの配慮だったのだが、そういう命令なら配慮はやめるべきだ。

「……礼はいらない」

すぐに無愛想な顔に戻り、車を発進させる。概ね予想通りの反応だ。今はまだ嫌われているようだが、多分一週間か一ヶ月そこらもすれば態度もいくらか変わってくるだろう。

駐車場へ向かう車を見送り、正面玄関から堂々と帰還する。出迎えては居ない。今の時間帯なら多分訓練中か、仕事中的なのだろう。

「あ、こんにちはハンクさん。もう退院されたんですか?」

と思っただけいきなり声をかけられた。しかも名前前で。声をかけてきたのは、メガネをかけた茶髪の女性……何度か忙しい中廊下ですれ違ったりはしているので顔は覚えていたが、会話はしたことがない。名前は……書類で見た記憶はあるが思い出せない。前衛として出ているメンバー以外の名前は興味はなかったからか。

「ええ、まあ。皆さん忙しい中で、一人病院で寝てもいられませんから」

「あれだけの重傷なら、何ヶ月か入院すると思ってたんですけどねえ。あ、別にもっと入院して欲しかったとか、そういうわけじゃないですよ!?! 予想以上に速く退院されたから、ちよっと驚いただけです」

一度も話したことがない初対面同然の相手なのに、よく喋る女だ。こういう相手は少し苦手。

「……ところで、急で悪いんですがちよつと、お腹を見せてもらえませんか？」

「なぜですか？」

「傷が治ってもないのに戻ってきてたのなら、もう一度病院に戻ってもらおうと思つて。つて、そうは見えませんが一応」

……ここは見せておくべきだろうか。他人から見ればセクハラの現場に捉えられてもおかしくないが、見せずに言葉を並べるよりは見せたほうが手っ取り早い。さっさと八神二佐のところへ行くようにと言われていたし、時間をかけるのはよくないな。

「どうぞ」

特に考えることもなく服の裾を捲り上げて、腹を見せる。

「……全然傷がないですね。すごい重傷だつて聞いてたんですけど」

「戻つたらすぐ八神二佐のところへ顔を出すと言われていたので、もう行つてもいいでしょうか」

医者腕云々とお決まりのセリフを言おうと思つたが、わざわざ説明することもないだろう。話がしたいならついてくればいい。置いていくつもりで歩くが、ついてくるなら話をしながら行こう。

「あ、はい。あと私なんか敬語は使わなくていいですよ、私のほうが階級下なのに」

私よりも、そっちが上官相手の話し方を学んだほうがいいと思う。というのは、胸の内に入れておく。私は気にしないし、他所の上官相手に同じように話して怒られても、別に私は困らない。

「癖なんですよ。気にしないでください」

隊長室への道を思い出しつつ廊下を進む。それにしても六課の施設は広い。小隊の最初の隊舎がプレハブ小屋だったことを差し引いても、この大きさは本当に異常だ。

「そうですかー、さすが地上本部のエリート。態度も違いますね」

「私がエリートなんて、冗談はよしてください」

振り切るつもりで早歩きしているのに全く遅れずついてくるこの

女。馴れ馴れしいというかなんというか。こいつも八神はやてがけしかけたのだろうか。悪意の欠片でもあれば遠慮無く振り払えるのに、悪意を全く感じない分たちが悪い。

そして、私がエリートなど馬鹿馬鹿しい話はやめてほしい。私は色々と割り切っているだけの凡人だ。

「謙遜はよしてください。あなたの戦績は見事なものだと思います。12歳で入局し、その後現場で様々な戦果を上げ准尉の階級まで一気に昇格。これをエリートと呼ばずになんと云えばいいんですか？」

様々な戦果って……公表できるような戦果は、テロリストの拠点破壊、犯罪者の殺処分以外それほどないはず。それだけならまだしも、質量兵器ばかり扱っているから、民間にも管理局にもあまり受け入れられないはずだが。

「私はただの兵士です。そこまで優秀じゃありません。命を捨てる覚悟さえあれば、きっと誰でも私と同じ事ができます」

命を簡単にチップにできて、絶対に生き残らなければならぬ理由を持つ。あとは、生き残るため、任務達成のために手段を選ばない。それさえだけで案外なんでもできるものだ。

ただ、生き残る理由ばかり並べて命を捨てる覚悟があるかどうかわからない奴も居るが。主に私の部下三名。四号はまだよくわからない。言葉を交わす機会があまりなかったからな。今度もう少し話し合ってみるか。

「私の思うただの兵士と、ハンクさんの思うただの兵士は随分と違うような……普通は怖くてそう簡単に命を掛けられません」

「任務のために命を捧げるのが兵士です。そういう人たちは兵士じゃないでしょう」

「あはは……でも、ハンクさんと似たようなことを言ってる子が居ましたよ。能力は優秀なのに、自分は凡人だって」

誰のことだろうか。言ってる「子」という表現からして、年下なのは間違いない。となると新人の内の誰かか……誰だろうか。まあいいか。

「この機動六課って、すつごく優秀な人が多いじゃないですか。だか

ら、自分が小さく見えちゃうんですよ」

「そうですね」

そう思う気持ちもわかる。ここは施設の規模だけじゃなく、保有する戦力も異常だ。そんな中にいきなり放り込まれれば、自分がちっぽけな蟻にでもなった気分を味わうだろう。自信を持っていれば、それも失う。

「優秀な人って、あなたも入ってますよ?」

……何も言うまい。私は優秀じゃない。そう言っても信じてもらえないなら、いつそ勝手に言わせておく方が面倒が少ない。

「海や空の人たちでも手こずっていた立てこもりの魔導師を無力化して。その後非魔導師と部下と共同して戦闘機人を捕獲。戦闘ヘリに乗って多くのガジェットを撃墜。なのはさんと戦って痛み分け」

確かに言われてみれば、中身を見ない限りは非常に優秀に見える。中身を付け足せば、立てこもりの魔導師を「人質の命を無視して」無力化。部下と共同して戦闘機人を「死にかけながら」捕獲。戦闘ヘリに乗って「魔法を使わずに」多くのガジェットを撃墜。高町なのはと戦って……いや、あれは戦いじゃなくて一方的な蹂躪だな。なんとか立ち向かって、「自分は瀕死、相手は腕の骨一本と肋骨本の」痛み分け。身の程をわきまえず働き過ぎとも思える。まあ、あれだけの無茶をして、生き残っているだけ優秀か。

隊長室前についたので、足を止める。

「どこが優秀じゃないっていうんですか? その子が聞いたら泣きますよ」

「これ以上は、また今度にしましょう。目的の場所についたので」

自分に対する評価など、私にとっては無益でくだらない話だ。親しくなるという目的で話すならまた空いている時間にもゆつくり話すべき。私はあまり話したくないが。

「そうですね。じゃあ、また今度」

さつきと同じくらいの早歩きで去っていく後ろ姿を見て、一息つく。戻って早々妙なのに絡まれて疲れてしまった。そしてこの後また疲れる事になるのだろう、ああ嫌だ嫌だ。はやく裁判の日にならない

いだろうか。裁判が終わればさっさと死ぬために出撃できるのに。

そういう事を考える自分を一度思考の隅に追いやり、仕事用に頭を切り替える。気を引き締め、一度深呼吸をし、服装の乱れがないかチェック。

「ハンク・オズワルド准尉です。入ってもよろしいでしょうか」

「ああ、入ってええで」

「失礼します」

ドアを開き、隊長室へと入る。さて、何を言われるのやら。

第22話

開いたドアから中に入る。同時に複数の視線が自分に向く。それを気にせず、まっすぐ八神二佐のデスクの前に歩く。

「退院おめでとう、ハンク君」

「どうもありがとうございます」

極めて事務的な言葉だけをかわす。わざわざ退院祝いを言うためだけに呼び出したわけではないだろう。次の言葉を待つ。

「……」

「……」

……待っているのだが、いつまで待っても何も言わない。そろそろ居心地が悪くなってきた。用事がないわけではないだろうが、いつまでも黙っているのなら訓練場へ直行してもいいだろうか。

「用がないのなら、職務に戻ってもよろしいでしょうか」

「あく……ちよつと待ち。皆、外に出とってもらえんかな。ハンク君と二人で話したいんや」

「わかった。ハンク！ はやてに何かしたらただじゃ置かねえからな！！」

「わかりました、何かあったら呼んでください」

あの叫んでいる小さいのは、ヴィータ三尉か。心配しなくても私は何もしない。何かする理由ももうない。嫌がらせを受けた仕返しをするにも、裁判の手回しという大きな借りで相殺されている。

「……さて。今日呼び出したのは、多分予想がついと思うけど、前の模擬戦についてや」

「賭けは私の負けですね」

「そうやない。私がなのはから頼まれて模擬戦の場を設けたせいで、あんたは危うく死にかけた。私が殺しかけたも同然や。その……ごめんな」

罪悪感からか、こちらを直視せずに顔を背けてつぶやくように謝罪された。が、状況がよく掴めない。

少し整理しよう。あの模擬戦は高町なのはの要望であり、それを受

け入れ模擬戦を行った結果、私が瀕死の重傷を負った。そして彼女は
その事について責任を感じていると。

「二佐に責任はありません。謝罪は不要です」

どうして責任を感じるのか。今回の件の大本の原因は私に有り、言
いは悪いが実行犯は高町なのは。場を提供しただけの二佐が責任
を感じるどころなどどこにもない。

「怒ってへん?」

「全く」

「……良かった。これで嫌われとつたら、どうしようかと」

「怒ってはいませんが、あなたの事は六課の誰よりも嫌いです」

それでもあの糞野郎どもよりは遥かにマシだが。裁判の件で大き
な借りを作ることになったが、貸し借りと個人的な感情はまた別。勝
手に経歴を調べられ、復讐を諦めさせられ今までの半生を棒に振り。
やっていることは正しくとも、さすがに嫌わずには居られない。

「あ、やっぱり?」

さっきの罪悪感に満ち溢れた表情から一変。いつものよくわから
ない顔に戻った。さっきまでの言葉や表情は全て演技か、すっかり騙
された。中将がこいつのことを雌狸と呼ぶ理由が改めてよくわかっ
た。一個人にしては強力すぎるバックも、この演技力があってこそ獲
得できたのか。

もちろんそれだけではないのだろうが。演技力だけでこんな部隊
が得られるのなら、私も同じようなバックを得ている。ただ実力、演
技力、使用術式、レアスキルだけではなく、他にも何かがあるはずだ。
私の持たない何か。興味はあるが、調べるつもりにはならない。藪
をつついて蛇が出たら困る。

「まあ、とりあえず賭けは無し。あれは模擬戦やなかった」

「そうですか」

よく言う。どのみち私が負けることは確定していたのだ、模擬戦は
ともかく賭けと呼べるものでは無かった。

「で、病み上がりで悪いんやけど。あんたと模擬戦したいゆう子が居
るんや……受けてるかどうかは、好きにしてくれてええ」

「……一体誰ですか」

ついこの前模擬戦で死にかけたのに、さして時間もおかずにまた模擬戦をしたいとは思わない。どうしても受けられないというわけではないが、またケガでもして病院に担ぎ込まれたら、診てもらえるかどうか……仕事だから診てはもらえらるだろうが、いい顔はされないう。あの病院の医師から散々無茶はやめろと言われてる。

「ティアナ・ランスターとスバル・ナカジマ。知つとるやろ？ あんたの本気を見たいらしいわ」

「あの二人組ですか……」

なんとなくだが、納得した。以前私の部隊と模擬戦して負け。その後高町なのはに負けで負け続きだから、私と二対一で勝って自信を取り戻したい。大方そんなところだろう。私はさすがに自分の部下（一名除く）よりは強いが、限定された状況以外では六課最底辺の実力だ。叩き潰すには丁度いい的に見えたのだろう。

「でも、あんたが本気を出す＝殺しにかかるわけやし……」

「全力で戦っているのが見たいというのなら、以前の高町一尉との模擬戦が私の全力となります。そのビデオを見せればどうでしょう」

ただし、あの時は殺すつもりが欠片もなかった。というよりも、殺せる気がまったくしなかつたというのが正しいか。とりあえず死ぬには早かつたから全力で抵抗していただけど、それでもある意味全力には違いない。

「多分、本気のアンタと戦ってみたいゆうのが本音やと思うわ。せやから、ビデオを見せたところであ……でもまあ、模擬戦はなしやな」
「要件はそれだけでしょうか」

それだけなら、速く訓練場へ行つて仕事をさせてもらいたい。ここ一週間ほどまともに仕事をできていない。仕事をせずに給料をもらうのはあまりいい気分がしないものだ。

「もう一つ、最後の要件。前入院しとる時にした質問の答えは？」

……家族にならないか、という質問のことか。

「ちよつと待てよはやて！ あたしは認めねえぞ!!」

ドアの外で聞いていたのか、ヴァータ三尉が叫びながら入ってきた

た。彼女が反対するからではないが、私も提案されたからといって一緒に住むつもりなど全くない。強制でなければずっと一人で居るつもりだ。

「答えは変わりません。お断りします」

「……やっぱりかあ」

「二佐はなぜ私に気をかけるのです?」

仮に外見が好みの相手であっても、自分を撃った相手に良い感情を抱くものだろうか。普通はないだろう。彼女の頭がおかしい……というのはいすぎだが、ややズレているところはある。しかし、ある程度まともな相手であることは確かだ。よってその線は除外するとして、一体なぜ私にこうも気をかけるのか。

「あんたの話を聞いとると、車道に突っ込んでいく子犬を見とる気分になるんや」

「私は犬と同じですか」

愉快ではないが不愉快でもない。実に微妙だ。主人の命令に従うというあり方については、まさに犬だ。今までにしてきた仕事からして、獲物を追い込んで食らいつくのは猟「犬」そのものだろう。だが実際に犬と言われて喜べはしない。

「そういう意味じゃ無いんやけど」

「どういう意味かはさておき……私は命令には従います」

要するに、言うことを聞かせたければ命令しろということ。悔しいが、嫌悪を上回るだけの借りもある。それに上司という立場を追加すれば、命令を聞かない訳にはいかない。

「命令はできるな。家族は命令されてなるもんやないやろ」

「私の家族は妹のみ。それ以外には居ません。今も、これからも」

「孤独が好きなんか? ……人間らしゅうないな」

「自分が本当に人間かどうか。私も最近わからなくなっているんですよ」

体の変化に伴ってもう一つ心配事がある。巨大な蛇に足から少しずつ飲み込まれてしまい、食われた分だけ自分が変わってきているよな。そんな錯覚がある。

「冗談を……」

「ええ、冗談です。それでは、失礼します」

冗談だと思ってくれるなら、それでいい。結局私の事をあまり理解できていない証拠だ。そんな相手を仮初でも家族と認められるはずがない。

結局、私はずっと一人なのだろう。今も、これからも。

第23話

退院から二日。街ではいつも通りひったくりや強姦、乱闘等の軽犯罪が起きているが、ある意味いつもと変わらない平和とも言える状態が続いている。ひったくりだの何だの、そういう軽い事は我々が出る事もない。地上本部の軽犯罪対策課の仕事だ。私はいつも通り訓練をしたり書類仕事をこなして本日の職務を終えた。

模擬戦をしたいと頼んできたらしい二名からの接触も特になし。訓練の最中に一度だけ様子を見に来たが、挨拶以外の言葉は一切交わさなかったところを見ると、模擬戦をどうしてもやりたかったというわけではないようだった。

そして今日も仕事を終えて郊外にある安いアパートに戻り一人で用意した夕食を、何故か三人で食べている。

「随分と暇なんだな」

「いくら私達でも、偶には休みが必要だって」

「私にも一日くらい暇な日はあるさ」

私は一応人間なのに、毎日仕事をしているわけだが。何もしない休日が無いことはないが。

「それよりも、当たり前のように私に会いに来るのはどうかと思うぞ」
保護者付きとはいえ、年若い娘が云々と、常識ある人なら言うだろう。私は手を出すつもりなど無いし、手を出した所で返り討ちにされるのが目に見えている。

それよりも、犯罪者とその部下が警察に当たり前のように会いに来てるのは絶対におかしい。頭の少しイカれてる私にもわかる。

「私もそんなに來たいわけじゃないんだけど、人目につかずに動くのは私が一番得意だから仕方ないんだよねー。ドクターの頼みを断る訳にはいかないし」

「そうか。それで、要件は何だ」

わざわざ人の部屋まで直接やってくる位だ。ただ飯を食いに來たわけじゃないだろう。大なり小なり、何かしらの用事があったて來たはずだ。

「君はあまり賢くないようだから、単刀直入に聞こう。仇を自分で討てずに、満足かい？」

「……最初の一言は余計だな」

「気を悪くしたのなら謝ろう。それで、答えは？」

考えるまでもなく決まっている。だが、果たして答えていいものか。私が入院していた間に盗聴器が仕掛けられていないとも限らない。うっかり答えて翌日確保されましたでは、話にならない。

「盗聴の心配はいらないよ。仮に仕掛けられていたとして、電波を妨害するなど私には造作も無いことだ」

なんとも、準備がいいことだ。

「満足な訳がない……あの屑共をこの手で殺せずに、満足できるはずがないだろう」

これが本心だ。だが牢屋の中にいる奴らをぶち殺せば、私は犯罪者だ。犯罪者が死んだとしても、保険金は一切出ないだろう。

「私が手を貸せば、簡単に牢屋に居る彼らを脱走させられる。脱走した凶悪犯罪者を殺してしまっても、大きな罪には問われないだろう？」

管理局は管理世界に住むすべての人々の安全を守るために存在するのだから」

予想通りの展開だ。復讐の機会を用意する代わりに、自分と手を組めということだろう。なんともわかりやすく、素晴らしい話だ。

「それで、対価は何だ」

誰もタダで動いてくれるとは言っていない。むしろ、ここから本題だろう。

「六課の情報を可能な限り私に流す。または私の側に寝返り、私の目的を達するための戦力になってもらう。どちらか一方を選んでくれ」

前者も後者も明確な反逆だな。バレたら処罰は免れない。だが、私にとつてそれだけの価値がある取引だ……最悪仇だけ討ってこいつを裏切れればいい。というのは甘いか。相手は指名手配を受けておきながら、こうも大胆に行動できる人物だ。その程度のことを計算に入っていないわけがない。

管理局内部にもスパイが居るとのことだし、何か行動を起こせばす

ぐにバレて処理されてしまうだろう。それは殉職だから悪いことでもないが、処分されるのが私ではなく妹であれば、最悪だ。

反対に相手が私を使い捨てにする可能性は……低いだろう。情報を吸い出すなら使い捨てにするのは惜しい。私がスカリエッツィの立場になったとして、やるとすれば洗脳か。まあそれもいいだろう。復讐さえできれば、あとはそれで。

「……どうだね？」

「受けよう」

「交渉は成立だ。よろしく頼むよ、ハンク君」

嫌らしく歪んだ笑顔を浮かべながら片手を差し出すスカリエッツィ。チラリとセインのの方を見るが、とても美味しそうに私の作った夕食を食べている。が、ここで私がスカリエッツィに危害を加えれば態度を豹変させて襲いかかってくるだろう。

大きな手柄を一つ挙げれば多少の無茶は許されるかもしれない。つまりは自分の手で処刑することも、スカリエッツィの首を中將に持つて行って頼めばできるかもしれないが。この場で殺すのはまず無理だ。単独で戦闘機人を相手にする能力なんて、私にはない。

「手をとるのは、仇を殺した後だ。代金ももらわずに領収書は渡せない」

「ははは、手厳しいね。彼らは明日の正午にでも脱走させよう。君は車を止める手段と彼らを殺す手段だけ用意して、私からの連絡を待っていてほしい」

「わかった。次に会うのはいつだ」

「それは教えられないね。君が裏切つて仲間を呼ばないという確証もない……まあ裏切つたら、君の妹が死ぬだけだがね」

簡単に裏切れないよう人質か。人に言うことを聞かせるにはいい手だ。

「君が自分の命を軽く見ていることは知っている。そして自分の命を軽視する分だけ、残るたった一人の家族に執着していることも知っている。私が知らない事は殆ど無い……心の治し方も、少し研究すれば理解できるだろうさ」

「脅しと懐柔か。私の家族に危害を加えたら貴様らを一人残らず殺してやる」

それこそ手段を一切選ばずに。管理局の質量兵器保管庫には、そのための手段がいくらでもある。それこそ、A級ロストログアに匹敵するものも。それを使えばどれだけの強さを誇ろうが関係なく皆殺しにできる。

だが、正直こいつなら妹の心も治してやれるかもしれないという期待がほんの僅かながらに存在する。

「安心したまえ。君が裏切らない限り、私達は何もしない。治療の研究も片手暇にしておこう。尤も、せつかくのスパイが怪しまれては意味が無い。仕事の遂行中に仕方なく交戦する事になった場合は、死なない程度なら攻撃しても裏切り扱いはしないよ」

「攻撃の結果、戦闘機人が死んでもか？」

「持ち運べる火力で彼女たちを殺すのは、かなり難しいと思うがね。まあそうだね。死人が出たのにお咎め無しとは行かない。見逃してあげられるのは重傷が限界だ」

そうなると対戦車ミサイル、ロケットランチャー、対物ライフル、へりに搭載している武装での攻撃はできないか。さすがに死ぬ。

「この制約は君の部下にも適用する。部下に命令して殺すのもアウトだ」

「わかってる」

殺すなら私にしてくれればいいのに。そうすれば何も考えることなく職務を全うし、殉職できるのに。

「それじゃあ、今日はこれで失礼しよう。セイン、帰るよ」

「はい、ドクター」

床へ沈んで消えた二人を見送り、二人の使っていた食器を台所へ持って行って洗いながら、これからの身の振り方を考える。糞野郎どもを殺した後どうするか。とりあえず思いつくだけの道を考えてみる。

一、スカリエツティに従い情報を流す。

二、管理局を抜け、スカリエツティの戦力として働く。

三、管理局を抜け、スカリエッツィの側にも着かず、今後起こるであろう事件を傍観する。

四、中将にこの件を報告し、スカリエッツィには偽の情報を流し続ける。

一は最も安全で、妹が危険に晒されることもない。

二は私の身に結構な危険が伴うが、別にそれは問題ではない。保険金の代わりに退職金をもらえるのだし。

三は現実的ではない。管理局はともかく、スカリエッツィが許さないだろう。

四……下策だな。一度や二度は騙せても、それ以上は無理だ。バレるまでに捕まえるのも無理。

結局、スカリエッツィの言うとおりにするのが一番賢い選択か。じっくり考えれば他にも道はありそうだが、それほど時間もない。今私にできることは、現時点である全ての金を妹名義の口座に振り込み、治療継続の用意をすることだ。明日の朝にでも口座振替をしに銀行へ行こう。

第24話

一晩考えたが、特に良い案は浮かばなかった。とりあえず、朝一番で銀行に行って、ある限りの貯金を妹の口座へ振り込んで出勤したが……さて。まあ、昼に備えて準備をしておくべきだろう。事を起こすのは、正午だと言っていたな。場所は知らされていない。

となると、誰かに逮捕される可能性もあるわけか。それは困るな。昼前にへりで空に上っておいて、現場に直行できるようにしておこう。飛ばす名目は、飛行訓練でいいだろう。

「二佐。ハインドの飛行訓練をしたいので、市街上空での飛行許可をください」

一応、できるだけ落ちて被害の少ないルートを提示させてある。本来なら戦闘用だが事務仕事にしか使っていないデバイスが、また事務仕事で一つ活躍した。今日のことが終わって捕まらなければ、デバイスマスターに戦闘用の機能を全て削ぎ落として事務仕事専用に変更してもらおうか。

「私に言われてもなあ……地上本部に掛けあってみると」

「許可は昼までに出ますか？」

「どうやる。それはあちらさん次第やしなんとも言えんわ。なんか急ぐ理由があるん？」

ポチポチと、自分の前に浮かぶスクリーンでメッセージを送信する二佐。何をしているのかは裏からも見える。地上本部あてにへりの飛行許可願を出してくれているようだ。

「部下が銃の整備を怠って作動不良を起こした連帯責任として、今日の私の部隊は休みなしで一日訓練にしてあります。昼は訓練場を他の方が使うようなので、その間に飛行訓練を行いたいです」

丁度いい言い訳のネタがあつてよかった。三号には感謝しなければならぬだろう。感謝の意を込めて、あいつだけ訓練内容を倍に増やそう。多分午後から私はここには居られなくなるから、四号に監視させておこう。前に配属されてた部隊の方針か、それとも単純に本人の気質か。あいつはやけに素直に命令を聞くから。

「ああ、それはアカンな……」

事の重大さをわかってくれたようで何より。今回は訓練中だったが、銃の動作不良が実戦の最中に起きれば命はない。私が居なくなつた後はあいつらに新人の訓練をしてもらわないといけないのに、これでは困る……私ではなく中将が。

私の部隊は中将が提唱する『新しい戦力』の代表で、経験を積み重ねて基礎を作り、それを次世代へと伝えなければならぬのだ。基礎がしっかりしていなければ、その上に立つのはひどく不安定で脆い物になる。だが、それは中将が望むのは安定した戦力。不安定ではダメなのだ。

「つと、もう返信来たで。『事故を起こさぬよう、最大限の注意を払つた上で訓練せよ』……やっぱ中将と関係あるやろ。あのオッサ……堅物がこんな簡単に許可出すはずがないわ」

「関係も何も、中将が後見人となつて設立された部隊ですが」

「そりゃわかつとるわ。関係っていうのは……うちの情報を流したりしとらんやろな」

「模擬戦の事は当然報告していますが」

それ以外のことは報告するようには言われていない。言われてもないことをするほど働き者ではない。

「では、失礼します」

敬礼して、背中を向けて隊長室から出て行く。下手をすれば、もう二度とここには戻らない。戻れないかもしれない。だが、挨拶はしない。余計な事を言つて勘ぐられても面倒だ。

「また、後ほど」

後ろを振り返らず、ロッカールームへ進む。普通の儀礼用の制服を乱暴に脱ぎ捨て、エンブレムの付いた戦闘用の制服に着替えて用意は終わり。私はこれでいい。寝かせ続けて六年間。たつぷりと熟成させた深い恨みだ、たかが一ヶ月と過ごしていない仲間と引き換えにするのに、躊躇うことなどないだろう。

着替えも終えたので、今度は屋外へリポートへ。

「あら、隊長」

出た所で丁度四号と出くわした。周りを見るが、四号一人だけだ。一号、二号、三号の姿はない。一人訓練をサボるような奴ではないと思っていたが。はて、どうしたのか。

「訓練はどうした」

「……隊長、こんなナリですが、私も一応女です」

つまり、そういう日か。それなら仕方ない。辛いとは聞くが、どれほどのものはわからないし。無理に働けとはいえない。

「そうか。十一時三十分からヘリの飛行訓練を行う。他の奴らに二番ヘリポートへ来るよう伝えろ」

「了解」

また四号と別れ、一人でヘリポートへ向かう。整備は万全のはずだが、一応先に乗りこんでエンジンを起動して暖気しておく。その間に一旦降りて武装の点検。ロケットポッドにかぶせてあるプラスティック製防塵カバーを外して、中身を見る。ハチの巣のように穴がいくつも並んでいて、その中にロケットの弾頭が見える。残弾はそれほど多くない。前に対ガジェット戦で盛大に撃つてから補給されていないからそれも当然だ。こっちは動火的に当てるのは難しいし、外れたら市街に大きな被害が出るから使わない。使うのはその真横に吊り下げられている4つの対地誘導ミサイル。こちらなら外れることはないだろう。ただし一発につき無茶苦茶な金が飛ぶが。

性能と調達コストが比例するのは、質量兵器も魔導兵器も同じか。管理局に入ったのはやはり正解だった。テロリストじゃこんな大きなものはマトモに使えやしない。

「隊長、全員呼んできました」

四号の声に振り向くと、完全武装した部下四人が一列に並んでそこに居た。装備を置いてから来ると思っていたが……完全武装で走ってきたのか。感心だな。

「全員乗り込め。今日は昼食抜きで遊覧飛行だ。ただし二号、お前が操縦しろ」

「え、マジですか隊長」

「お前以外に操縦できるやつは居ないだろう。暖気は済ませてある。」

速く乗れ」

嫌な顔をする二号を無視して、副操縦席へ座る。私に続いて渋々操縦席に乗り込む二号。ついで後ろのドアから三人が乗り込むと、ローターがゆっくりと回りだし、徐々に回転数を上げていく。そしてしばらく待つと、ヘリが少しずつ浮かび上がり空へと上がっていく。

「離陸完了。高度五十……七十……九十……百………三百。高度確保。これより訓練飛行を開始する。隊長、しっかりルート指示頼むぜ」

「わかってる。北西へ頭を向けろ」

デバイスを開いて飛行ルートを表示する。クラナガン西のハズレには刑務所がある。ヘリで全速を出し、真っ直ぐ行けば十分も足りない……だが、そこへ直行すれば怪しまれるので少しだけ進路をずらす。報告が入ってから向かう。スカリエッティが手助けするとなれば、刑務所に常駐している警備の魔導師には手が負えないだろう。

『いい眺めだな。街を見下ろしながらサンドイッチでも食いたいもんだ』

「残念ながら飯はなしだ。恨むなら三号を恨めよ、一号」

『おい三号〜』

『悪いって言うてんだろ……許してくれよ』

『私は別に一食くらい抜いても構いません』

客室でどうでもいい会話をしている三人は放置しよう。

「二号、エンジンの調子はどうか」

『悪くない。整備兵に感謝しねえとな』

いいことだ。

「……」

「……」

しばらく沈黙が続く。

『ところで隊長、どうしてこの飛行ルートを選んだんだ』

「お前はよく質問するやつだな。行政施設を避けるなら、このルートが一番少なくていい」

『市街地を速く抜けるなら南東だ。他に理由があるんじゃないのか』

？』

「……デバイスが選んだルートだ。私の意思は関与していない」

それよりも、午後零時……時間だ。

『緊急通信。移送中の犯罪者が五名、車両を奪って四番道路を西へ逃走した。援軍を頼む』

ようやくか。待ちわびた。

「こちら機動六課質量兵器運用小隊。訓練飛行中だが、進路を変更してそちらへ向かう……そういうことだ。進路を変更しろ」

『このタイミングで……まさか、隊長知ってたのか？』

「私がそんなことを知ってるはずないだろう。それよりも西だ。全速で向かうぞ」

ローターの回転数が上がり、スピードも上がる。もうすぐだ……もうすぐこのくだらない因縁にもケリを付けられる。

『逃げた犯罪者が何人か人を轢いたという情報が新たに入った。事実かどうかはわからないが、放っておいては危険なことに変わらない。できるだけ速く奴らを止めてくれ』

「搭載する武装の関係上、生け捕りは困難と思われる。死んでも構わないか」

『停止命令に従わない、もしくは抵抗するようなら許可する。民間人の安全には変えられない』

「了解」

誰に言われなくとも、元よりそのつもりだ。遠くに他の車とは全く違うスピードで走る、灰色の大型車を見つける。おそらく、あの中に仇が乗っているのだろう……

「左翼対地ミサイル、機首下機銃セイフティロック解除。ミサイルロックオン」

今すぐ撃ちたくなるが、それは我慢。形式上だけでも警告はしておかないと。

『おい、隊長。まさか警告なしで殺すのか？』

「警告はする。従わなければ殺せばいい」

おとなしく捕まってくれるなという願いを抱きつつ、管理局の車載

無線機にチャンネルを合わせる。

対地ミサイルをロックオンする。ピーーッとロックオン完了の音がやかましく鳴り響く。

「逃走中の犯罪者に告ぐ。直ちに車を停止させ、投降しろ。さもなければ殺害も辞さない」

『ふざけるな！ 我々は犯罪者などではない!!』

やはり、糞は糞か……だが、そうでなくては殺し甲斐がない。糞は糞らしく、見難くあがきながら糞をまき散らして死ねばいい。

「繰り返す。停止しろ」

『断る!』

そうこなくては。最後くらいは私の思い通りになって死ね。

「威嚇射撃を実行する。進路を直線で維持しろ、間違つて当てたら事だ」

『了解』

車そのものを狙いたくなるが、狙うのは車の真横。手元のハンドルで機銃の角度を調整して、トリガープル。機首下の機銃が火を吹いて、道路に着弾。アスファルトを抉り散らす。

「最終警告だ。停止しろ。次は当ててる」

『……わかった、投降する。撃たないでくれ』

車が徐々に速度を下げた停止する……そして、中から人が一人降りてくる。そいつはこちらにデバイスを向けていて、その先には砲撃魔法を使用するとき特有の光と、魔法陣が輝いていた。

「回避しろ!」

『りよ、了解!』

機体が右に傾き、スライド移動する。そしてその真横を青い砲撃がかすめ……右翼が爆発した。右翼に載せていた武装に誘爆したらしい。

「くそ……」

右目が見えないし、右腕も……首を右に向けると、キャノピーの強化ガラスは吹き飛んでコックピットが空にむき出しにされていた。右半身は服が破れ、その下からは血が。パネルに表示される右翼の武

装の表示は全て真っ赤。おまけに機体が回転しながら徐々に高度を下げていて、あちこちから警告音が鳴り響く。エンジンは……パワーが下がっている。このままだと間違いなく墜落して、みんな仲良くお陀仏だ。

「二号、機体を安定させろ」

『……』

「二号、返事をしろ」

……足掻けとは思ったが、ここまでしろとは一言も言っていない。殺されるゴミのくせに、随分と舐めた真似をする。

「操縦権を副操縦士に……よし。機首上げよし……エンジンの回転数は、上がらないか」

まずは機体を安定させる……機首を上げて減速はできた。エンジンはいかれてしまったらしい。次の瞬間には警告音もランプも、ボタンのライトも消えた。今度は電装系がいかれたようだ。これで武装は使用不可能……私が殺すには、直接行くしか無い。

「一号、三号、四号。生きてるか」

『三号が血まみれだ！ どうすりゃいいんだよ畜生!! 遊覧飛行じゃなかったのか!?!』

『私は軽傷です!』

「そうか。二号！ 起きろ!」

『さ、叫ばないでくれ……よ隊長……ゴホッ』

……声から察するに、かなりの重傷だな。血が喉にせり上がって、それを吐き出そうとしてる。

「機体を墜落させないように降ろせ。死ぬならそれから死ぬ。一号と四号、三号を死なせるな」

『隊長は?』

「奴らをぶっ殺してくる」

『ちよつと待て! ぶっ殺すってどうやって!?!』

ベルトを左手で抜いたナイフで切断し、割れたキャノピーから顔を突き出して地面までの距離を見る。百メートルくらいはあるか……できるかどうかは、蛇と私次第だな。ヘッドセットを外す。

「ああ……畜生。ヒデエ隊長だ…ゲホ、やってやるさ」

「頼んだぞ。後ろに乗ってる奴らを生かせるのはお前だけだ」

キャノピーに足をかけ、身体強化して飛び出す。そして、イメージするのは長い棒。果てしなく長い棒。左腕を突き出す。蛇が痣から這い出ていき、黒い棒が自由落下の速度よりも速く地面へ伸びて、突き刺さる。ここまでは、なんとか成功。問題はここから。

「くうー」

衝撃で肩が外れそうになったが、身体強化をしていたおかげでなんとか外れずに済んだ。だが、落下の勢いはまだ消えない。棒を思い切り握りしめるが、手の皮が一瞬で剥けた。次に肉が削られ、骨まで削れて掌がなくなった。それでも落下の勢いはあまり衰えず、地面がすぐそばに迫る。身体強化、脚部限定。所詮Eランクしかない魔力を全て足と、足の裏へ注ぐ。

地面が目前に迫った所で、足の下で魔力を爆発させる。ほんの僅かに減速したが、着地はうまくいかず。足が破裂し、脛から折れた骨が突き出た。……だが、それがわかるのは生きてる証拠。なに、問題ない。まだ動ける。バインドで突き出た骨を縛り付けて戻すと、すぐに傷が消えた。立ち上がり、ずつと遠く……豆粒のように見えるほど遠くで止まっている車を見据える。

「……」

ようやく奴らを殺せる。そう思うと、顔の形が笑顔にゆがむ……果たしてここまで『嬉しい』と感じたのはいつぶりか……蛇も急に与えられた巨大な感情〈餌〉に喜んで食いつき、飲み干し、それでもまだ尽きない昂ぶりを魔力へと変えてくれる。肉体にかつて感じたことがないほどの魔力があふれる。それもそうか、六年間ずつと感情を抑えこんで生きてきた。その抑えてた分が、一度に出たんだ。

「これなら行ける……殺せるー」

肉体強化をすれば、今までにないほどに力が漲る。体が軽い……もう治った足で地面を蹴れば、地面が爆ぜ、一瞬で景色が流れる。一歩で数十メートルほどは進んでいるか。一度地面を蹴るごとに小さく、遠くにあつた車がみるみるうちに近づいてくる。そして、さつき砲撃

をしてきた層の面が目の前に。足を止める。

「やあ……6年ぶり。僕のこと覚えてるかな？ 随分老けたじゃないか……」

六年前よりも髭が濃く、皺も増えている気がする。でもそんなことはどうでもいい。いつの間にか口調が昔に戻っているが、それもどうでもいい。

「誰だお」

6年前の軽い仕返しのため右手で顔を殴ったら、頭が綺麗にはじけ飛んで脳みそをまき散らして死んだ。これっぽっちじゃ、全然仕返しになっていない。6年前に味わった苦痛の、屈辱の一欠片も返せていない。仕方がないので、不格好に立っている体を蹴り飛ばした。今度は胴体に大穴が空き、その向こう側へ真っ赤な絨毯のように血と肉と内臓と……色々混ざったものが広がった。

「おいどうし……相棒!!」

助手席からもう一人の見覚えのある顔が出てきた。剣の形をしたデバイスを振り下ろされたので、それを弾くために蛇を剣の形で出し、それを持つ右腕を振り上げるとデバイスが砕けた。啞然としているその顔に剣を振り下ろす。水を切るように抵抗なく顔が切れた……しまったな。じつくりと痛めつけて殺すつもりだったのに。まあいいか、あと三人も残っている。

「ば、化物だ!!」

車の後ろから出てきた三人の内一人が私の顔を見るなり怯えて背中を向けて逃げようとしたので、追いかけて背中に剣を根本まで突き刺した。致命傷だけど、すぐには死なない位置に刺したからしばらくは苦しんでもらえるだろう。

「がっ……ふ!?」

「逃げたらダメだよ。まだ仕返しが済んでないんだからさあ!」

剣を引き抜き、横に居る二人をしつかりと見つめる。最高だ……6年間の願いがようやく叶う。6年前の恨みがようやくはらせる。

「やあ、会いたかったヘンリー・グスタフと、そっちの眼帯してるのは、名前なんて言っちゃった。まあどうでもいいや。僕のことを覚えてる

かなあ？ 6年前、あんたに家族を殺された後、妹ともどもひどい目に合わされたんだけどさあ」

「ま、まさか……あの時のガキか！」

「そうそう！ 思い出してくれたかなあ……妹はおかげですくとベッドの上さ。大変なんだよ？ 会いに行く度に『殺す、殺す』ってさあ」

「頼む！ 助けてくれ!! 私には家族がいるんだ、見逃してくれ！」

地面に頭を擦り付けて、典型的なセリフを吐くヘンリー。その隣で、逃げようとした奴の背中に刃を突き立てる。

「人の家族を殺しておいて自分には家族が居るから見逃してくれって、聞くと思ってるんだ」

「頼む！ 金ならいくらでも払う!!」

「……………」

後ろで物音がしたので振り向くと、デバイスをこちらに向けた男が。

「お前も道連れだ……化物！」

デバイスの先に魔力が集中するが、それが放たれる前に近寄り頭を踏み潰す。そして、またヘンリーに向き直る。

「そうだなあ……まあいいや。たくさん殺して気は済んだし、行ってもいいよ」

「ほ、本当か!？」

「ああ、行きなよ。今僕は最高の気分なんだ」

歩いて隣で苦しんでいるウジ虫のような男に、剣を突き刺してトドメをさして蛇を腕に戻す。

「ありがとう！ 本当に……ありがとう!!」

喜びながら立ち上がり、逃げようとするヘンリーの片足を後ろから斬り落とす。前に走りだそうとしたところで斬ったので、正面に倒れる。

「…………へ？ 嘘……お、俺の足が!？」

「その通り！ もちろん嘘さ。助けるつもりなんて、元からないよ。助けてもらえると思ったんだ、へえくく、馬鹿みたいだね！ 大馬鹿

だ！」

剣をナイフに変えて、右手の親指を切り落とす。

「ひぎゃ!？」

「いやあ……6年間長かったんだよ？ 毎日毎日、アンタ達を殺したいと思ってた」

人差し指

「いぎ!!」

「管理局に入って、本当はしたくもない殺しをして。途中でなんで僕はこんな事してるんだろうって、危うく自分を見失いかけたこともあったなあ」

中指

「っ……もう、やめてくれ」

「6年前、僕はそう言ったけどやめてくれなかったよね」

薬指

「…… はっ、はっ……」

「頑張つて、殺して、殺して、殺しまくって准尉になって、部隊を設立して」

小指

「やつと復讐ができると思ったら、機動六課の雌狸に邪魔されて……聞いている?」

反応が薄くなったので、身体強化を解除した『左手』で叩く。

「っ……頼むから……やめて」

「それで、一度は諦めたというか妥協したんだけど、スカリエツティがアンタたちを殺す機会を作ってくれるって言うから取引して」

「あ、あいつが……俺達は、逃してくれるって言ったから……信じてたのに!!」

もう死ぬかと思ったけど、案外元気になってくれた。人間は意外と頑丈なものだ。右手首。そろそろ血も少なくなってきたのか、流れる血が少なくなってきた。そろそろ殺そう。トドメは自分の手で。

「っ!!」

「アンタ達は、僕から全部を奪った。折角作った部隊も、きつともう解

散だ。まあ、もう用無しなんだけど、一人か二人は死んだかもしれない。本当に最期の最期まで色々奪ってくれた……でも、それも」

相手の左腕を剣で串刺しにして地面に縫い付け。左手で頭を抑えつけて、右手を振り上げる。これでようやく終わる。6年間の因縁も、この下らない恨みも。

「嫌だ、嫌だあ!!」

「これで終わりだ!」

固く握った拳を振り下ろす。

「死にたくなっ」

水風船が破裂するように頭蓋骨の中身が周りに飛び散り、拳はアスファルトの路面に突き刺さった。腕を引き上げて拳を緩めると、血が雫を作って地面へと垂れた。

「……ふう」

目を閉じて、一つ息を吐く。これで、全部終わった……血で汚れてしまった色の車に乗り込み、無線を本部のチャンネルに合わせる。

「……こちらハンク・オズワルド准尉。本部、応答してくれ」

『こちら地上本部。どうしました』

「へりは逃走した犯罪者に落とされたが、犯罪者は皆殺しにした。小隊の重傷者は二名……離れてるから今どうなっているかはわからない」

『了解。すぐにへりをそちらへ向かわせます』

「頼む」

車のエンジンをかけ、へりが落ちた方向へ走らせる。しかし、派手にやりすぎたなあ……査問されるだろうし、言い訳はどうしようか。

……まあいいか。それはその時考えよう。今は……とりあえず復讐を終えた達成感と幸福感を味わっていよう。

間章

第25話 呼び出し

復讐は終わった。がしかし、その代償として私はヘリを一機と部下を二名失った。死者は一名、三号ことサイファー・シース。兵員室の右側に座っていたため、右翼武装の爆発により内側に吹き飛んだ外部装甲に頸動脈と多数の臓器を傷つけられ死亡。部下が一通りの蘇生措置を試みたが、効果がなく十二時二十五分。死亡が確認された。

再起不能者一名、二号ことパトリック・ジグ。爆発した計器の力バーガラスが右目に刺さり失明。割れたキャノピーが右腕を深く切り裂き神経を切断されていて、右腕はもう使い物にならないだろうという話を先ほど病院からの電話で聞いた。意識はまだ戻らないそうだ。出血と、私が無茶をさせたせいかヘリを不時着させた直後から意識がなかったらしい。再起不能と決まったわけではないが、おそらく困難だろうというのが医者の話だ。

一号と四号は軽い火傷と裂傷、打撲。軽傷なので今後も訓練や任務もできるだろうが……しばらくは訓練中止。出勤はさせるが、休ませるつもりだ。私の処分がどうなるかもまだ聞いていない。

ヘリは左翼に吊るされていた無事な武装のみを取り外し、あとはスクラップとして廃棄処分することになった。

「……なあ、隊長」

「……」

一号が、冷たいアルミのベッドに横たわる三号を前にしてつぶやく。

「サイファーはな、良い奴だったんだ……訓練が終わって飲みに行ったらいつも彼女とのノロケ話を聞かせてくれてた」

「私の判断の招いた結果だ。責めたければ責めろ」

「ああ、じゃあー！」

巨大な拳が私の顔を正面から殴りつけ、体が床に倒れる。怒る理由は尤もだ。誰にも教えていないが、奴らが脱走したのは私がスカリ

エツテイと取引したから。奴らを脱走させ、私に復讐の機会を与えてくれる代わりに奴の頼みを聞く。つまり、私が全ての原因。殴られるだけの理由はある。

二メートルに迫る巨体に体を持ち上げられ、睨みつけられながら呪いの言葉を吐かれる。

「あんたがあそこで追わなけりやサイファーは死なずに済んだ！」

「その通り。私の責任だ」

「やめなさい一号！ 隊長は管理局員として当然の事をした、それを責めるのは間違いだ」

「それでもあいつが死んだことには変わりねえ」

「いいかげんにしろ！ 責任は犯罪者をむぎむぎと逃した奴らにあって、隊長に非はない！」

事情を知らないというのは素晴らしい。素直に批難を受け入れる他ないのだが。さすがに犯罪者と取引をしてあの糞野郎を逃させたとは言えないので黙っているが、責められるのは当然だ。

「スマン隊長……取り乱した。隊長はキツチリ仇も討ってくれたのに」

「気にするな。仲間が死んだんだ。動揺するのは仕方ない」

今まではずっと裏方で雑用をしていたそうだし、仲間の死とは無縁だったろう。始めてのことを前にして冷静ではいられる人間は少ないから仕方ない。そう思いつつ、私を持ち上げる手を叩いて離させる。

「隊長は、随分落ち着いてるように見えるが」

「家族を皆殺しにされたからな」

それに加えて、ここに来るまでにやっていた仕事の仕事だ。部下が死ぬのは始めてだが、仲間の死というものなら何度も経験している。もちろん辛さも多少はあるが、それよりもまだ仇を討てたことに対する幸福感の方が強い。顔にも声にも出さないが、まだ蛇は魔力を吐き出し続けている。

「……そういや、そうだったな」

「私は書かなければいけない書類がある。壊れたヘリの分と、二号三

号の分。三号には葬式の用意だ……本部の偉いさんにも何人が出てもらうから、それも頼んで回る。忙しいんだ」

遺体安置所から、一人だけで出て行く。重苦しい雰囲気とは裏腹に、シユツと軽い音を立てて開いたドアを潜る。その先には、八神はやてとその他数名。全員深刻な顔をして、こちらを見ている。

「……今回の件は、残念やった」

無視して廊下を進む。形式だけの挨拶ならば、三号の慰めにもならないだろう。それにやることもある。今夜の内に終わらせなければ、明日の葬式は間に合わない。

「待ってや」

「忙しいので、始末の話は後にしていただけますか」

「そうやない。また違う話や。ちよつと気になる事があつてな。今日の正午に逃げ出した犯罪者五人は全員あんたの仇。ほんで、あんたはその五人が出る前……ちようど昼前にへりを飛ばして、刑務所のある西へ進路を取った。まるで脱走することを知つとつたみたいに」

「……二佐」

襟首を掴んで引き寄せて、言葉を浴びせかける。彼女の言ったことは事実だが、それでも嘘を突き通すためには取り乱したフリをしなければならぬ。ここで知っていたと暴露できればその手間も省けるが……どういうルートで知ったとか、誰から教えてもらったとか。そういう事はどんな細かい事でも聞かれるだろう。

だから、ここは感情に任せて暴走するフリをして嘘をついた方が事が楽に済む。

「……確かに逃げ出した犯罪者五名は私の家族の仇だった。確かに私はへりを昼前に飛ばし、北西へ進路を取った。だがそれは偶然だ。第一、あのクソどもが脱走するなんて事を私がどうやって知ったっていうんだ。証拠はどこにある。それともあんたほどバツクに力がある人間なら、無茶な言いがかりも許されるのか？ そうなんだろう？ そうなんだな？ 権力に物を言わせて、自分たちよりも活躍する奴らに嫌がらせをするのは楽しいか？ 嫌がらせをするくらいなら最初から部隊を併合するなこのクソアマ」

外見も内面も怒りの炎が轟々と燃えているように演技をして、相手を批難する。私は悪くないと、そう主張する。我ながら迫真の演技だ、普通の生活を送っていたなら俳優にでもなれたかもしれない。

さすがに八神はやての言ったことが言ったことなので、取り巻き三人も止めはしない。

「……そうか、それならええんや。ごめんな、辛いところに変なこと言って」

「もう用事がないなら、これで失礼する」

掴みあげていた彼女を降ろして、彼女に群がる他の奴らを放って廊下を進む。ある程度離れて、多少声を出しても聞こえないくらいの距離に着いたので、通信用の端末を取り出してレジアス中將につなぐ。事が終わってから真っ先に詳しい報告を刷るべきだったが、一応私も病院にかかっていたから報告をする暇がなかった。

「こんばんは中將」

『先に報告は届いている。貴様の部下のことは、残念だったな』

いつも通りの低く平坦な声。本当に私の部下の死を悼んでいるのだろうか。それとも換えの効く戦力の、換えの効く人材が欠けたという認識なのだろうか。

どちらにせよ、もう私には関係がないことだ。今回の件で、責任を取らされて辞職へ追い込まれるのは目に見えている。これで私も晴れて追われる身になるのだろうか。

「はい。その事で、明日の葬式には中將にも是非参列していただきたいのですが」

『ああ、元からそのつもりだ』

「ありがとうございます。では、これで」

『待て。こちらからも用事がある。海と空の奴ら、陸が活躍したことがどうも気に食わないらしくてな。犯人を皆殺しにした件についてと、現場に残っていたSSランクに匹敵する魔力残渣について質問するらしい。まあ、形式上は呼び出しての質問だが中身は尋問だ』

「……いつからでしょう」

『今晚だ。すぐに地上本部へ来い』

「書類は」

『急がなくとも構わない。葬式の手続きはこちらでしておく』
「わかりました。では、これからそちらへ向かいます」

通話を切り、今度は駐車場へ向かう。ほんの短い期間だが、この機動六課での戦闘経験は非常に大きな収穫だった。勝てる相手と勝てない相手の見極めもついたり、それぞれの精神面の弱点もある程度把握できた。実際の戦闘時と模擬戦時の映像データも一応デバイスに移してある。スカリエツテイへ渡す手土産としては、悪くないものだろう。

まあ、渡す前に殺される可能性もあるのだが。これまで公表されたら管理局が傾きかねない情報を握った人間を何人か処分してきた。そういう奴ら同様に、私も色々なことを知りすぎている。そんな人間を首輪も付けず野放しにはできないだろう。今まで私がしてきたように、追手を差し向けられる可能性は非常に高い。果たして、それまでに合流できるのだろうか。

第26話 処分

最高の気分ではあるが、これから行く場所はヘラヘラ、あるいはニヤニヤとした軽い顔で在席している場所ではない。

緩みかけて居た顔を叩いて引き締め、いつも通りの無感情な顔を作る。気分も復讐の余韻から抜け出し、できるだけ平静に近い状態にして、重苦しい扉を開く。

扉の先には左右と正面に長い机があり、その机に式典ではよく見る偉いさんが何人か座っている。その中にはレジアス中将の姿もある。

その人達の視線の集まる、部屋の中央へと私は進む。

「ハंक・オズワルド准尉。これより君に対する査問を執り行う。なぜ呼ばれたかは把握して居るかね？」

正面の、一段高い所にある机に座る老人から、低くよく通る声が発される。中将からは尋問と聞いていたが……まあ同じ事か。

「把握しております」

「ならば、話を進めよう。君は本日12時15分、逃走中の犯罪者を殺害した。これに間違いはないかね？」

「はい」

余計な事は言わない。返事だけしてひとまずは様子を見て、それから対応を決めよう。

「書類によると、警告の後に威嚇射撃をし、その後に砲撃を受けヘリの武装が爆発。不時着したそうだな」

「はい」

「不時着するよりも早く地面に降り、犯罪者を殺害したと報告が入っている。君はEランクの魔導師で空を飛ぶ手段を有していないはずだが、一体どうやって着地したのかね？ もしも空を飛べるのなら、書類偽造で君を別件で処分しなければならぬが」

「私の所有するロストログアを棒のように伸ばし、それを伝って降りました」

つまらない質問をする。時間を無駄に使わせて何が楽しいのやら。「現場にはSSランクに匹敵する魔力を使った痕跡があったが、君の

保有魔力はEランクのはずだろう」

「感情を魔力に変換するという、ロストログアの効果の一つです。質問をするなら、資料に目を通してからにしていた方がいい」

「……貴様、私が誰かわかっていて口答えするのか!」

「存じておりますが。何か先の発言で不適切なところがありましたか、レジアス中将」

顔を茹でたエビのように赤くして騒ぐ空の大将は無視して、レジアス中将に助けを求める。階級が上の相手に真っ向から喧嘩を挑むなんて馬鹿な真似はしない。何をされるかわかったものじゃない。

「不適切なところは一つとして見当たらん。質問をするなら中身のあるものにしていただきたいのは、私も同じだ」

珍しく中将が笑っている。自分の嫌いな相手を馬鹿にできるのがうれしくて堪らない、そんな表情だ。

「では今度は私から准尉に質問だ。一人の犯罪者の遺体が過度に損傷していたが、何か彼らに恨みでもあったのかね?」

今度は海の大將。

「民間人を轢き殺してまで逃げた。部下に重傷を負わされた。彼らが私の家族を殺した犯罪者だった。そういった事情から、一人は多少痛めつけてから殺害しました」

「つまり、痛めつけたのは私情からの行動だったと」

「肯定です」

「殺害した事に問題はないが、それは少し問題だな。気持ちはわからなくもないが、管理局員でなくとも仕事に私情を持ち込むなど以ての外だ。それはわかるな?」

「はい」

「だが、私も家族を殺した犯罪者を目前にして自分を抑えられる自信はない。よって、私は目をつぶりたいと思う。他の皆様はどうするかね?」

「……単純に私を許すのではなく、中将に恩を売って操り人形にしようという意図が丸見えだ。これは少し露骨すぎるだろう。」

「結果に問題がないなら、処分する必要もないだろう。だが、問題がな

いわけではない。貴様は部下を一名死なせ、もう一人は未だ意識不明。おまけにへりは再利用不可だ。この損失は大きい。この責任をどう取る？ 最終的に判断を下すのは我々だが、希望を一応聞いておこう」

海が露骨と言ったが、陸もなかなかだ。恩を売られてたまるものかと、掌を返して自らの首を切れと言って来た。さすが中将、やり口がえげつない。

「私の辞職をもって、事の償いとさせていただきたい」

「辞職か。貴様の部隊はどうする」

「残している仕事を終わらせてから部下に隊長の任を譲り、後を全て任せます」

隊長の椅子に座らせるのは、四号でいいか。奴の事はよく知らないが、感情に流されて行動する事は多分ないだろう。それに、魔導師をトップに置いた方が民間の受けはいい。

問題は辞めた後にもある。私は管理局の裏側に長く勤め過ぎた。そのせいで知らなくていい事、知っていてはならない事、とてもじゃないが公表できないような事を山ほど知っている。私はずっとそういう人間を始末してきたが、今度は始末される側に回る事になる。せつかくスカリエツティが妹を治してくれと言っているのだから、できれば見届けてから死にたい……が、管理局が本気で殺しにすれば私にはどうしようもない。そうになったら諦めよう。

「私は准尉の意見に賛成だ。二人とも、どうだ？」

「反対する理由はないな」

「同じく」

「では、ハンク・オズワルド准尉。後日残す職務を終えてから、速やかに辞表を提出するように。」

……結局予想通りの結果になったか。まあ死ぬ事になっても最大の目的である復讐は果たせたのだし、良しとしよう。

第27話 別れ

二号の葬式が終わり、四号に隊長の任と翻訳を済ませた訓練マニュアルを譲り。中將には今までの訓練内容と作戦内容から考えた、部隊の運用方法のサンプルを送り。これで、管理局員として私がなすべきことは全て済ませたはず。やり残したことは、多分無いはず。これだと思に残すこと無くスカリエッティのところへ行ける。

「……やりきれんな、ハンク君は悪うないのに」

辞表を受け取った八神二佐がつぶやく。スカリエッティに協力するなら、管理局を離れたほうが丁度いい。獅子身中の虫となるよりは、さっさと寝返って敵として対峙するほうが気分が楽だ。

「私の指揮が招いた結果です。責任を負うのは当然でしょう」

「それでも、折角仲良うなろうとしよったのに。残念やわあ」

まだ諦めていなかったのか。管理局にいる間は親しくなるつもりはなかったが……ああ、管理局は抜けるから、もういいか。

「親密になる前にこんな事になって、良かったと思えますが。あまり親しくなっていたら、部隊の士気に影響が出るでしょう」

「それは、そうやけどな。なんかイヤやわ」

「では、また機会があればお会いしましょう。また会ったら、食事にも誘って下さい」

管理局を抜ければもう部外者だ。というよりも敵になる。それなら仲良くしておいて、裏切られたと思わせた方が動揺が大きくなるはずだ。そういった理由から、こちらから歩み寄ってみる。いわば打算からの行動だ。

「……え？」

「私が距離を置いていたのは、自分が死んだ時の影響を考えての事です。管理局を抜ければ、もう部外者。どうなろうが士気に関係することはないでしょう。そうなれば、距離を置く理由も消えます」

「ホンマ？　なら、今日仕事が終わった後にも一緒に」

「構いませんよ。では、失礼します」

尤も、夕食の時間まで生きていればの話だが。多分六課の施設を出

てすぐに追手が放たれるだろう。さすがに人の多い市街地で殺しに来ることはないだろうが、のんびり食事ができるのは今夜くらいか。最後の晚餐にならないことを祈ろう。

隊長室を出て、入口前に置いてある荷物を担いで廊下を歩く。出口まで行くと、四号が見送りに出ていた。一号はまだ三号との別れから立ち直れていないのだろうか、その姿は見当たらない。

「もう少しあなたの下で働きたかった。こんな形になってしまい、残念です」

「お前は私のようなヘマはするなよ」

個人の感情に流されて……というのはあまりないだろうが。敵とみたら脊髄反射で弾丸を叩きこむくらいの気概でいかないと死ぬ。こいつがそこまで至っているかどうかはわからないが、私の渡したマニュアル通りに訓練すれば多分遠からずそこまでたどり着けるだろう。

「はい。お元気で、隊長」

「一号にもよろしく伝えておいてくれ。じゃあな」

二、三年前に通勤の手段として買ったバイクにまたがり、エンジンを掛けて発進する。後ろ髪引かれる、というような気持ちはない。元々そこまで好きではなかった職場だ。未練があるはずもない。

第28話 迎え

一旦アパートに帰ってから、荷物を纏めて夕食でも作ろうかと思つた所で八神はやてから電話が来た。話の内容は、仕事が終わったから一緒に食事をしよう、ということだった。そういえば、昼にそんな事も話した記憶がある。もちろん私は了承した。その理由は、裏切るのなら親しくなつてからのの方が衝撃が大きいという非常に打算的なものだが。

指定された店は、第97管理外世界のニホンという国の料理を出す珍しい店。もちろん珍しきだけが売りではなく、味も一流ということ非常に人気の高い店だ。以前中将から飲み会に誘われた時、自慢気に話していたのでよく憶えている。だが男女が一緒にダイナーを食べるような店ではない。むしろ仕事に疲れた中年男性が数人で集まって、互いに愚痴を言い合いながら飯と酒を腹に入れ、酔いつぶれて家に帰る。そんな雰囲気のお店だ。

どうでもいいことと考えながら、バイクを停めてあるアパートの駐車場へ降りる。

「……」

階段を降り、駐車場の方へ向くと、街灯の下に人が一人。長身の女だ。そいつは季節外れのコートにフードを被っていて、いかにもそれといった風体だ。懐に仕舞いこんである減音器付きの拳銃に右手を伸ばし、空いている左手に小さいナイフ形に蛇を出す。さらに身体強化をかけて、戦闘の用意は完了した。

「……」

フードをかぶつた『怪しい奴』が顔をあげるが、その容貌は影に隠れて見えない。体型からして女なのはわかるが、先手は取らない。先手必勝とはよく言うが、それは一撃で確実に仕留められる手を持つている時に限る。相手がどんな戦闘スタイルかもわからないのに突っ込むのは自殺と同じだ。判断は慎重に。行動は大胆に。

「ハンク・オズワルドですわね？」

声から敵意は感じられない。相手の周りの靄からもだ。だが、安心

はできない。

「人違いです」

「……あらあ？ ごめんなさい、人違いでしたか」

「女性がこんな夜に出歩くものじゃないですよ」

警戒は解かずに、一般人のフリをしてバイクに近寄る。

「なんて、騙されると思ってた？」

「ツチ」

即座に懐から拳銃を抜き出し、安全装置を外して発砲。サブレッツサーに抑えこまれた銃声が夜に木霊して、銃弾が何か硬いものに弾かれる音がする。一発でダメならもう一発。それでダメならワンマガジン。今までの人生で培われた経験が、勝手に指を動かす。

「ま、待ちなさい！ 私は敵じゃないわよ!!」

リロードしてさらにもう一発、といったところで制止が入る。とりあえず拳銃弾では歯がたたないことはわかった、これ以上は弾の無駄なので、銃をしまって空の薬莢を拾う。

「こんな夜に、コートを着て、フードを被って、街灯の下で一人私を待っている。しかも私は追われる身で、私はお前を知らない。敵じゃないければなんだ」

「もう……私はクアットロ。ドクターの命令であなたを迎えに来たのよ。なのになんでいきなり撃たれなきやならないのかしら……全く不愉快だわ」

どうやら傷はない様子。あのコートに何かしらの秘密があるのだろうか……以前、セインを狙撃させた時には銃弾がたしかに体を貫通していたから、肌で弾くほど化物ではないことは確かだが。

「そうか」

ポケットを漁り、部屋のキーとデバイスを取り出して迎えの女に投げける。

「なにこれ」

「私はこれから食事に行く。多分明日までには戻るから、部屋で待っていてくれ。デバイスは連絡用の端末だ」

「はあ!? ここで一時間くらいずっと待ってたのに、また待ってって言

うの!？」

……なぜ通報されなかったのだろう。こんなに怪しいのが一時間も棒立ちしていたのに。それとも触れなくなかったのか。それもあ
るかもしれない、皆誰しも面倒は嫌いだ。

「静かにしてくれ、近所迷惑だ」

一応、相手の感情に配慮して注意する。怪しいという自覚がないなら、怪しいとストレートに言われたら傷つくかもしれない。一応恩人の仲間だ。できるだけ機嫌は損ねたくない。ヘルメットを被ってエンジン音をかける。

「なんですって?」

「言い方を変えよう、通報されるぞ。管理局との接触は避けたいだろう?」

「……まあ、そうですね」

「すまん。待つ間は寝るなり本を読むなり、好きにしてくれ。何かあったらデバイスにメールを送る」

ライトを付けて夜の道へと走りだす。食事だけならそれほど時間はかからないだろう。本当に用事が食事『だけ』なら。

第29話 会食

道中、一度交通事故に巻き込まれそうになったが間一髪で回避し、それ以降は特に何事も無く進んで店に到着。駐車場へバイクを止め、暖簾を潜って店の中へ。

「いらっしやいませー」

前に来た時と同じく、客のほとんどが中年男性だ。店員は変わっているようだが。八神二佐……もう上司ではないから階級付けでいう必要はないか。カウンター席は酒の入ったコップを掲げて乾杯するオッサンが数人いるが、女は居ない。座敷席に目を向けても、八神はやての顔は見当たらない。早すぎたのだろうか。

「何名様ですか？」

考えていると、若い女性の店員に声をかけられた。

「八神はやてに、この店で食事をしようと誘われて来たのですが」

「奥でお待ちです、こちらへどうぞ」

奥の部屋、なるほど。VIPというか、特別待遇というか。佐官というと、将官クラスには及ばなくともそれなりに……いや、かなり偉いのだ。そんな相手を一般客と同じように扱うことはできないか……しかし、前に中将と来た時には一般客と同じようにカウンター席で食事をしたような。どこに差があるのか……電話で予約でも入れたのか？

あれこれと考えを巡らせながら店員に案内されるままに店の奥へ。

「あ、待ったで」

部屋には私服姿の、薄化粧した八神はやて一人。いつもの取り巻きは居ない。隣の部屋に待機している可能性は無くもないが、私を拘束する理由もないから可能性としては無視しても良い程度だろう。もちろんスカリエツティとの関係がバレていれば話は変わるが、それは一言も伝えてないし、あいつ自身が伝えない限りはないだろう。

相変わらず無粋な考えをしてしまうが、いつもの癖だから仕方ない。テーブルを挟んで正面に座る。

「では、注文が決まったらお呼びください」

店員が下がったところで、口を開く。

「どうも、誘ってくれてありがとうございます」

「もう部下やないんやし、敬語は使わんでもええで」

「了解。それで、どういふつもりで呼んだんだ？　もう部下でもないだろう」

メニューを開いて適当に安いのを探しながら聞いてみる。私には彼女と親しくするメリットがあるが、彼女にはない。あつたとしても、デメリットも大きい。私と親しくなることを、彼女の取り巻きはあまり良くは思わないだろう。私と親しくすることで、その取り巻きと不仲になる可能性もある。そこまでして親しくなるメリット……思いつかないな。

「部下じゃないと仲良うなったらあかんのか？」

「理由がわからない」

「私はアンタのことを気に入ってる」

「自分を撃った相手を気に入るはずがない」

私だったら、という前提があるが……。考えてみれば、今私には気に入った人間、つまりは好意を持った相手は一人も居ない。信用に値する人間なら何人か居るが、それは仕事をする上での関係。個人としての立場で気に入る人間は居ない。

「そう言うてもな。わたしの家族も、なのはとフェイトと何度か敵同士で戦こうて、今はあの仲やし」

「……」

なるほど、考え方が根本的に違ふと。敵味方はあまり関係なく仲良く出来る相手なら仲良くしておきたい、大体これで合ってるだろう。とりあえず理解はできないが、納得はした。しかし元々戦っていた敵を信用するのは簡単ではない。私なら絶対に裏切らないという保証がなければ背中を撃たれることを恐れて警戒を解けないだろう。

「別に、仲間として親しくなろうとは思つたらん。家族になつてほしいとも、今更言わん。ただ、友達くらいにはなればええなつて」

「友達……」

相手からそういう申し出があるとは、正直願つてもない。だが一度

『嫌い』だと面と向かって言ってしまったし今更『喜んで友だちになりましょう』というのも不自然だろう。少しだけ過去の自分の行動を後悔する。今後のためにはそう言っておいたほうが得なのだが、その言葉に違和感を感じられれば……面倒なことになる。

しかし友達か。そんなものも、あの事件が起きるまでは居た。確か居たと思う。記憶には全部ノイズがかかかっていて顔も、声も、名前も思い出せない。

「最期に一つ質問だ、私のどこを気に入っている」
「顔」

……なぜだろう。すごく馬鹿にされた気がする。微妙に腹が立つ。だがこんな風にイライラするのは、少し感情が回復してきた証拠。少しは喜ぶべきか。

「冗談や。昔の私がまた別の道を辿ったたら、ハンク君みたいなひねくれた性格になっとったかも。そう思ったらなんか気になってな。あとはなんか危なっかしくて放っておけてのものもある」

「もう他人だろう」

「一度関わったら、赤の他人とは言えんやろ？」

「そういうものか？」

「そういうもんや」

いまいちよくわからないが、彼女がそう言うからには一般的にはそういうものなのだろう。さて、それよりもどう友人になりたいと切り出すべきか。いつそのことストレートに、表面上だけの好意を伝えてみるか。急だが、怪しまれても騙し通せばいい。

「……そういえば、お前のことはどう呼んだらいい？ 管理局を抜けたのに階級で呼ぶのもおかしいだろう」

「ん？ セヤなあ……はやってって呼んでや。その方が親密な感じがするやろ」

「なら、そう呼ばせてもらおう。はやて」
「何？」

名前で呼ぶと、やけに上機嫌そうな声で返事をされた。さて、ここからが問題。どう転ぶことになるやら。

「以前はああ言ったが、家族に誘ってもらえたのは嬉しかった。ありがとう」

まずは嘘から入る。嘘から入って、少しずつ事実を混ぜて。演技は得意だ、騙せるはず。

「!? あ……いや、別に礼なんていらんで」

「断った理由を言っただけでなかったから、今ついでに言わせてもらう。私に妹が居るのは知ってるな?」

「……うん、まあ」

「あれはかなり酷い状態だ。昔より状態は安定しているらしいが、精神医療の進歩は遅い。私が生きている間に寛解する見込みはないだろう。だが、私のたった一人の家族だから見捨てる訳にはいかない……私を家族にするという事は、それも身内に引き入れるということだ」

口が乾いてきたので、一口だけ水を飲んで乾きを癒す。できれば話したくないが、親しくなるのに一番手っ取り早い方法は腹に溜め込んでいる物をぶちまけることだ。親しくなればなるほど、裏切られた時の動揺は大きくなる。動揺が大きくなればなるほど、生まれる隙は大きくなる。そこに付け込む。

「魔法や科学の技術はどれだけ進歩しても、人の心はそこまで大きく変わっていない。身体障害者、精神障害者への理解は狭く、風当たりは未だに厳しい。当然その家族にも。これから管理局ではたらく上で重い足かせになる。出世も難しくなると思う」

「……なんや、そんな事気にしとったん。わたしは、こう見えても元犯罪者や。そんなんは全然気にせん。そこまで出世するつもりもない。問題ないで」

……ほう、初耳だ。ここまで話してくれたという事は、それなりの信頼を得られたと考えるもいいだろう。これ以上は望み過ぎというものだ、切り上げよう。

「今日は食事をする、それが目的で来たはずなんだが。いつのまにか話がメインに切り替わってた。いつまでも話して注文を決めなかつたら、店員にも迷惑だろう? いつまでも続けていたら、閉店の時間

もいずれ来る。それなら閉店の時間も気にならないところでゆっくり話をしたほうがいいと思うんだが」

「そ、それってもしかして……ち、ちょっと早いと思うんやけど」

何を想像したのか、顔を真赤にして視線をあちこちに彷徨わせるはやて。三号からナンパするなら覚えておくと一方的に教えられたセリフを少しアレンジしたものだし、そういうことが目的だと思われるも仕方ない。とりあえず効果は靦面のようだ……まんざらでもない顔をしているが、きつと気のせいだろう。

だが、とりあえず冷やかしの一つでも入れておかないと、後がマズイ。

「生娘みたいな反応だな」

「どうせ生娘やもん……相手もおらんし。ああもう、ヤケや！ 酒持ってこいやー！」

……冷やかしのつもりで言ったら、地雷を踏んでしまったようだ。面倒なことになったと、頭を抱える。これは、どうしたものか。

「ハンク君にも飲んでもらうでー！」

「バイクで帰るのに酒は飲めない」

馬鹿なことをしてしまった。私は面倒が嫌いなのに、わざわざ自分から面倒を呼び込んでしまうとは。

「ホテルに泊まればええやろ？」

これは……どうしたものか。いつその事一線を越えて、より関係を深めるか？ その方が動揺は大きくなるし、相手も私に手出しをしづらくなる……気は進まないが。もしも情が湧いてしまい、いざという時に殺せなくなったら困る。無いとは思いたい、何分経験のないことだ。どうなるかはわからない。

それに、もしも行為の最中に追手が殺しに来たらどうする？ 咄嗟に対応できるだろうか。そろそろ追手の用意も完了する時間だし、リスクは高い。それに見合うだけの利益があるのかも問題だ。

『pipii! pipii!』

「すまん、メールだ」

送信者は……J/S。件名、『追手の心配は無用』中身、『見張りを

送った。君はゆっくり会食を楽しみ給え。何なら、その後もね。クアットロにも、君が今夜は帰らないかもしれないと伝えてあるよ』

最高に最悪なタイミングでメールを入れてきたか。すぐに削除ボタンを押し、メールを消す。見られたらマズイ。

「誰から」

「メールマガジン」

「……」

後ろの障子が開いて、店員がやってきた。

「ご注文はお決まりになりましたか」

「ああ、はい。これ一つ」

品書きの一番値段のやすいメニューを選んで。付け合せやドリンクはなし……。食事が終わるまでには、彼女の気が変わってくれていいことを祈ろう。

人間らしさ

第30話 感情

結局、食事が終わってもまだ言うことは変わらなかった。むしろ酒が入ったせいでより言動が過激になり、とてもではないがお茶の間には放送出来ないような言葉を吐き出すだけでは飽きたらず、場所も弁えずに服を脱ぎだす始末。とりあえずどんどん酒を注文して。出てきた端から飲ませて酔い潰させ。誤解されないよう店員に説明して後を任せて、はやての財布から金を抜き取り会計を済ませて帰宅した。その後はまとめていた荷物を持ってスカリエッテイの拠点へと連れて行かれた。

説明するとこれだけだ。八神はやてとは一切、何もなかった。酔い潰させた直後には、色々な事を天秤にかけて『そういうこと』をしようかとも思ったが、できなかった。次善の策として、意識がない事をいいことにスカリエッテイの所へ拉致しようかとも思ったが、一応彼女には『借り』があるのでやめておいた。

「ふむ、案外つまらない男なのだね。君は」

私の口から、事の一部始終を聞いたスカリエッテイはそう言った。その後ろには、生体ポッドに入った私の妹が。いつの間に連れてきたのか、と聞くのは無粋だろう。私を縛り付けるなら、妹を人質に取るのが一番手っ取り早い。狂っているとはいえ、たった一人の私の家族だ。見捨てることなど、できるはずがない。

また、治療の面から考えてもなかなか合理的だ。治療をするなら、患者が一体どのような状態なのか。どのような症状があり、どのような障害があるのかを調べる必要がある。手元に置くのは間違っていない。

「反論はしない」

つまらない、という評価に対して反論するつもりもない。そもそも、私にそういうことを期待する方が間違っている。私はコイツの言うとおり、つまらない男なのだ。少し前まで第三者から見分には滑

稽な復讐者だったが、今の私は復讐も終えて抜け殻に近い。妹に関しては、期待はしているが……妹を見て治療よりも先に人質という単語が思い浮かんだことから考えるに、期待もそこまで大きくはないのだろう。

「まあ何にせよ。歓迎するよ、ハンク・オズワルド君……本名ではないが、こちらで呼ばれる方が慣れているだろう?」

「まあな。歓迎するなら周りのガジェットと、戦闘機人を退かしてくれるか」

大量のガジェットと、武器こそ出していないものの、私を警戒した目つきで見る数人の戦闘機人。これでは安心して話もできない。

「なら懐に入れている武器を出してくれるかい? いくら私でも武器を隠し持った人間が相手だと、怖くて握手を求められない」

言われるとおりに懐へ入れていた拳銃を取り出し、安全装置をかけて地面に置く。

どうせ銃を出しても撃つ前に殺されるのだし、わざわざ出させる意味もないと思うのだが。あと銃がなくてもロストログアがあるのだし、拳銃だけ置いても武装していることには変わりない。それでもこれからの上司だ、意味がわからなくても命令には従うべきだろう。今後のためにも、妹のためにも。

「それでいい。さあ、握手をしよう」

差し出された手の内側にキラリと光る物が見えたので、手首を掴んで捻り上げる。その直後に戦闘機人によって地面へ叩きつけられ、さらに身動きができないように腕を掴んだままのしかかられた。

確認できたのは一瞬だったが、スカリエツテイの持っていた物が何だったのかはわかった。光っていた物は、針だ。指の間に挟まれた、とても小さな針。暗殺では針に毒を塗って握手するという手口は割りと有名な部類に入るので、いつもの癖で警戒していなければ見逃していただろう。

「トーレ、離すんだ」

「わかりました」

上から抑えられていた力が消えたので、両手を頭の上に向けて敵意

が無いことをアピールしながら、ゆつくりと立ち上がる。確かここに居るのは、私の記憶する限り全員細い女性らしい体型だったが、それからは考えられないほど重かった。まるで鉄の塊にのしかかられたような重さだった。

女性の体重についてどうこう言うのは一般的に失礼と言われているので、口には出さないが。

「警戒心もまずまずと」

「テストのつもりか」

「その通り」

随分と温いテストだ。まあ、私にはその程度の役割くらいしか求められていないのだろう。

「それで、私は合格か？」

「合格だよ。戦力に不安があるが、それは君には求めている。君に求めるのは、機動六課との接点を使った諜報と後方攪乱。そして、切り札としての役目だ。君が彼ら、あるいは彼女らの前に出れば確実に隙を生む。それは非常に大きなものとなるだろう。攻めるときにも、退くときにも」

「なるほど」

相手を殺す、倒すには、隙を突くのが一番安全で確実だ。その隙を作るには動揺を誘うのも一つの手。戦闘の基本だ。そして私はその隙を作り出すための材料と。私の考えていたことと何ら変わらない。「君は普段と同じように生活して、私から連絡があった時に来てくれればそれでいい。ただ、裏切らないように監視は付けさせてもらうからね。セイン」

「そういうこと。まーよろしく」

どうも、彼女が監視役になるらしい。確かに監視するなら彼女が適任かもしれない。地面や壁に潜っていればどこで話を聞いているかわからないし、迂闊なことは言えない。監視が邪魔になって殺そうとしても、一撃で仕留められなければ地面に潜って逃げられる。私が能力を把握している戦闘機人はチンクとセインのみだし、新たに手札を公開せずに済むと。よく考えている。

しかし私も過大評価されたものだ。妹を人質に取られている時点で裏切れるはずもないのに、さらに監視までつけるとは。

「それで、帰っていいのか?」

「まだ話すことがある。君の体……正確にはロストロギアについてだ」

……この体質も伝わっていたか。まあ、そうだよな。こいつなら病院の端末に侵入してデータを抜き出すことくらい造作も無いだろう。

「かなり衝撃的だと思うが、ハッキリと言わせてもらおうよ。君自身がロストロギアになっている」

「……」

あまり驚かない。自分の体が変わっているのは度重なる負傷で痛感しているので、今更それがどうしたという感じだ。

「驚きで声が出ないのか、それとも前々から自覚があったのか。どちらだね?」

「自覚ならあった」

「なら話は速い。仮説を立ててみたのだが、聞きたいかな?」

「……教えてくれ」

正直どうでもいい、とは言えない。言ってもどうせ説明するだろうから無駄だ。

「君の持つロストロギア……『蛇』だったか。それは感情を餌にして活動する。だが君の立ち振舞を見てみると、どうも感情の起伏があまり見られない。全くないわけではないのだが、一般のそれと比べると遙かに少ない。つまりは餌が少ないわけだ」

「それで、腹を空かした蛇が耐えかねて宿主を食っている」と

「そうだ。肉体が損傷しても恐ろしい速度で回復するのは、体がロストロギアと一体化したせいだろう。あと一歩進行すれば感情を生み出す脳まで食われて自我が消えてなくなり、ただ感情を生み出すだけの機械に成り果てるところだった。意識が消えてないのは、食われる直前で食べきれない量の餌を与えられたからだろうね。まあ、それを食べ終わるまで進行することはないだろう」

あとすこし復讐が遅れていたら、私は私でなくなっていたということこ

とか。しかし、与えた餌は一体いつまで持つのだろう。妹が治るまでは持つてほしいものだが。

「安心したまえ、君が感情を抑えなければ進行することはまず無い。無理というなら私が幸せになれる薬を渡そう。君の替えは居ないのだから、潰れてもらっては困る」

幸せになれる薬。おそらく麻薬か、それに類似した薬品だろう。使えばきつと正気ではいられなくなる。それが嫌なら『人間らしく』感情を抑えず生活しろと……私としてはそれほど抑えていたつもりは無かったのだが、他人から見たら抑えているように見えると。

まあ、少しとはいえ意識して抑えてきたのだから、意識しなければ問題ないだろう。

「それに、マトモに戻った君の妹の気持ちを考えて見給え。兄が正気じゃなかったら辛いだろう？ 治した所で喜んでもらえなければ治し甲斐もない」

「……わかった。努力しよう」

人間らしく。人間らしく……人間らしくないとまで言われるようになってしまった事に文句はない。そもそも私の人間性は五年前のあの拷問で大きく抉られたのだから。それから五年も経てば傷もふさがり、回復する。

だがエリイの記憶はあの事件で止まっている。あの事件のまま傷は癒えずに、あの事件の前の私しか知らない。治ってからきちんと私を兄として認識してくれるだろうか、少し不安だ。

それを不安と感ずるのは、自分で感情の制御を止めたから。これからは、今まで考えないようにしてきた事も考えてしまうようになるだろうが、それが人間らしさというものなのだろう。

第31話 決闘

招かれざる客、というのはいつだって予想できず、唐突にやって来るものだ。

ほんの少し食料品を買いに街のショッピングモールへ出てきただけだというのに、予想だにしない遭遇があった。駐車場の代金をケチろうと数百メートルほど離れた所にある大きな駐車場にバイクを停め、そこから歩いて行こうなどと考えなければこんな事にはならなかっただろう。

「聖王教会の者です。あなたを保護しに来ました」

尾行の気配を感じて道を逸れ、路地に入ると同時に、数人の男に囲まれた。背後からも足音が聞こえるので、おそらく囲まれた。とりあえずロストロギアを起動して相手の感情を覗いたが、猜疑心と警戒心を感じさせる赤色混じりの黄色の靄が男たちを覆っている。保護をしに来たのならば、そんな感情を抱くはずがない。

湧き上がってきた不快感を隠しもせずに、言葉を吐き出す。

「複数人で囲って、保護をしに来たとは到底信じられないな」

いつも通りデバイスを介さずに身体強化をかける。それに気づいた相手がデバイスを起動し、それぞれの得物を手にし、さらに敵意のこもった視線で私を見る。やはり、保護をしに来たというのは嘘だったようだ。おそらくこいつらは、管理局の猟犬部隊。もし本当に教会の人間でも、捕まったら最後。管理局に引き渡されるだろう。

「何が何でも連れて来いという話なので、できれば武装解除して投降してもらいたい」

大人しく投降しても、誰かに情報を漏らしていないか尋問されて、それから殺されるのだろう。しかし抵抗すればこの場で殺されると。私にこの数の差をひっくり返すほどの実力はないので、この場をどう切り抜けるべきか。左右はコンクリートの壁で、前は塞がれているし、後ろも同じく。なら上は？。上を見上げて何もない。左右の壁の高さは十数メートルほど。多分いけるだろう。ナイフの形で出していた蛇を消して、武装を解除。ほんの僅かだが重量を軽減。

一度しやがみ込むと、それを投降の意思表示とみなしたのか安堵した表情を浮かべる男たち。折られたんだ脚をバネにして、全力で飛び上がる。一気に十メートルほど飛べたが、このままでは落ちるだけ。そこで、もう一度壁を足場にして跳ぶ。地面を蹴るのはわけが違うのでそれほど高くは飛べなかったが、それでも建物の屋上に手が届いた。片手で体を持ち上げて、そのまま屋上に登る。

「逃げられたー」

下から声が響く。とりあえず、屋上を走って隣のビルへ飛び移る。そしてまた助走をつけて飛び。それを繰り返して、先ほど居た場所から一気に離れていく。仕事でもないのにわざわざリスクを犯して戦う必要など無い。私のような弱い輩が生き残るには、苦戦する、あるいは勝てない相手と戦わないことが一番だ。

そしてビルの上を跳ね回り続け、やがては郊外の大きな空き地へと到着した。ここまで来れば大丈夫だろうと足を止めると、急に地面に影が現れたのですぐにその場を飛び退く。すると地面が炸裂した。正確には炸裂したのではなく、上から降ってきた何かの衝撃に耐え切れずにコンクリートが砕けたのだが。動いていなければきつと頭から叩き潰されて行動不能になっていただろう。

「……」

蛇を大剣の形で出して、間合いを掴ませないように後ろへ倒して持つ。さらに身体強化に全魔力を注ぎ、臨戦態勢を取る。煙が晴れると、そこにはトンファアのような武器を構えた女性が居た。纏う靄の色は赤。感情は読めないが、攻撃色だ。どこかで見たことがあるような顔だが、果たしてどこだったか。

とりあえずこいつが新たな追手なのだろう。問答無用で攻撃を仕掛けてきたし……眼球だけを動かして周囲を見渡してみるのが、敵の姿はなし。

他に敵が居ないことを確認した後で、敵の戦力を予想する。

単独行動をするのは、実力がありません。ついてこれる他人が居ない奴か、あるいは実力を過信するあまり連携ができないやつか。おそらくは、前者。実力は私よりもずっと上だろう。この開けた場所で逃げ

るのは多分無理だ。おまけに攻められたら負ける。なら、ペースに飲まれる前にこちらから攻めていくべきだろう。

拳銃を引き抜いて、同時に発砲。

「つつう!？」

顔面に命中するも、有効打にはなっていない様子。だが隙はできた。拳銃を投げ捨て、地面を這うような低い姿勢で前進し、一步で間合いに入り込む。そして両手で剣を持ち、真横に振って足を狙う。このタイミングで、狙う場所が場所だ。ガードは不可能。

となれば、次を取る行動は回避に絞られる。後ろに跳んで避けられだが、瞬時に長い槍の形を思い浮かべる。

「シーー」

足を踏み出し、呼気と共に喉を狙った突きを繰り返す。その瞬間には蛇が鋭い槍に変わり、相手の喉元に迫る。

「くっー」

ガン、と固い物を叩いた音が響く。トンファについた広い刃の腹で受け止められてしまった。すぐに腕を引き、二の突きをその持ち手へ打ち込むも打ち払われ、今度はしつかりと間合いを置かれる。あの一瞬で、驚きながらもガード、追撃を叩き落すのは相当な技量の証拠。奇襲くらいしか勝つためのカードが無い私に勝てる相手ではなさそうだ……しかし、私の思い出す限り猟犬部隊にはこんな腕の立つ人間は居なかったと記憶する。そうそう新人が追加されるような部所でもない、もしかして、こいつは本当に聖王教会の人間なのだろうか……

「……思い出した」

むしろなぜさっきまで思い出せなかったのか不思議に思う。これだけ特徴的な武器を持つ人間なんてそう居ないはずなのに、どうして思い出せなかったのだろうか。それなら、いくら抵抗したとしても私が勝てる道理はないはずだ。蛇を体の中に戻し、腕をだらりと下げている。

「何ですか？ 急に武装を解除して」

だが、安心はできない。できようはずがない。聖王教会と管理局は

深い関係にあるのだ。管理局が教会に私の始末を頼んでも、別におかしいことではない。それに教会には記憶を覗けるということでは有名な査察官が居る。管理局の弱みを握るために記憶を覗かれたら、ついでに私がスカリエツティと協力関係にあるという事実まで知られるだろう。そうなれば、犯罪者として処刑されるのは間違いない。

もし本当に保護が目的だとして、保護という名の拘束をされればスカリエツティの望む諜報活動はできない。

「勝てないとわかりきってる相手と、なんで戦わなきゃならない」

逃走に必要なのは、追いつかれないための足。そして一瞬の隙。足を手に入れるには、より強い身体強化が必要になる。そのためには多くの魔力が必要になる。幸いにも復讐達成時の感情はとてつもなく大きく、まさにロストログアと呼ぶにふさわしい魔力を蛇は蓄えている。

だが、こんな下らないところで使うべきではない。もっと使うべき時がいずれ来る。なので、今は新しく感情を作り出し、陸戦Dの限界程度の強化に留めておく。

「……はあ、なら最初から抵抗しないでください。それ以前になんで逃げたんですか」

「屠殺場へ送られる豚が、自分が死ぬとわかっていて大人しくトラックに乗り込むだろうか」

「シスター・カリムの命令で、あなたを保護するために来たんです。殺そうなんて思ってません」

「保護という名目で安心させて捕まえて、その後に管理局へ引き渡すつもりだろう。汚い金か、地位と引き換えでな」

死ぬのは怖い。理不尽な殺され方をするのは腹が立つ。治った妹を見られないのは悲しい……無理に創りだした感情なので純度は低いが、量としては十分。生み出された魔力を片っ端から身体強化に回す。後は会話で挑発し、隙を作り出して市街地に再度逃げ込めば追ってこれない。

「侮辱しないでください、私はそんな卑怯な真似はしません」

「そうするよう上司に命令されたらどうする。拒否したら処罰される

とわかっていても、拒否できるか？」

「騎士カリムはそのような事を命令する方ではありません」

「それを話された所で、信じるか信じないかは私次第だ。いきなり攻撃してきた相手の言うことを信じられると思うか？」

だが、これは参った。隙が全く見当たらない。それどころか……やや不機嫌そうにも見える。少し挑発が過ぎたようだ、これはまずい。「信じてもらえないなら、信じさせればいいことです！」

先ほど私がしたように一歩で懐へ潜り込まれ、そのトンファーを私の胸に向かって突き出してきた。

おそらく相手は、殺すつもりはないだろう。情報を引き出す前に、あるいは管理局に引き渡す前に殺してしまつては意味が無い。従つて、攻撃は非殺傷。当たつても問題ないが、戦闘能力の低下は避けられない。

「スネークバインド！」

両手の間に蛇を出して一瞬だけ受け止め、その一瞬で膝で相手の顔を蹴り飛ばす。が、こちらにも衝撃を受け止めきれずに後方へ吹き飛ばされる。痛みはないが、肺の空気をほとんど吐き出してしまった。息を吸う暇も与えられずに、追撃がかけられる。まず左から顔を狙つた一撃。それを蛇を巻きつけた腕で受け止め、さらに蛇を巻きつかせて自分の腕と固定する。右から来る剣は相手の上腕を掴んで強引に止める。一発二発ならなんとか凌げる、この状態を崩してはいけない。今までのほただの様子見だ、本気を出せばもっと恐ろしいスピードのラッシュが待っている。

「なかなか、やりますね！」

「……」

一息吸込み、歯を食いしばり、腕に力を入れ続けて膠着状態を保つ……復讐の時なら、押し切るどころか身体能力だけで圧倒できただろうに。歯がゆいところだ……だが、このままの状態が続いても増援が来たら終わる。いつまでもこの状態ではいられないか……セインを呼べば逃げられるだろうが、それではスカリエッティと繋がっていると公言するようなもの。それこそ最後の手段だ。

「でも私には勝てませんよ！」

蛇が引きちぎられ、それと連動するように腕の肉がちぎれる。戸惑った一瞬を突かれて掴んでいた左手も振り払われ、完全に無防備な状態になる。

「これで!!」

「炸裂しろー!」

右手で顔をかばい、強化に回していた魔力の一部を単純な魔力爆発として私と彼女の間で起こす。だがそれにも怯まず、爆発の中を剣が突き出て、衝撃だけが胸を貫く。

「っ!」

「おしまいですー!」

さらにもう一発が左から私の頭を、野球のボールのように叩きつけ、その衝撃で地面へ体が投げ出される。

「ぐあっ!」

非殺傷とはいえ、デバイスは金属の塊。そんなもので全力で頭と胸を殴られれば、脳が揺れるし、呼吸ができなくなる。痛みはなくとも、体を動かせない。

「っ……」

腕は動かせるが、視界が歪んでいるし、足に力が入らず立ち上がれない。落ちている拳銃に手を伸ばすが、その銃も拾い上げられる。苦し紛れに蛇を出して捕らえようとするが、踏み潰されておしまいだった。

「まだ意識があるのですか……ですが、そのダメージではしばらく動けないでしょうし。丁度いいでしょう」

……やはり、最初から逃げたおけばよかった。能力に差がありすぎる。単純な肉体能力も、技術も……おそらくは、踏んできた場数も私を超えているだろう。勝てる道理もないのに挑んで、このザマか。情けない。

「私達は、あなたを管理局に引き渡したりはしません。この腕に誓います」

「……信じ、られるか」

ようやく息を吸うことができた……全く、この体質は便利なものだ。もう少ししたら動けるようになるだろうが、逃げられはしないだろう。

「人は皆嘘つきだ」

「嘘はついてません」

ゆっくりと起き上がる……足元がわずかにふらつくが、戦闘続行は可能。勝率はゼロ。だが、私にも意地がある。どうせ殺されるなら、できることを全てやってから殺される。

「嘘つきは皆そう言う」

「嘘つきでなくてもそう言います……次で気絶してくださいよ、私も人を傷めつけて喜ぶ趣味はありませんから」

相手が構えを取ったので、私も蛇を拳に纏わせて、強度を上げる。その拳を引いて、構える。

「……」

「……」

目が合った瞬間には、もう相手は眼の前で、剣は眼の前。防ぎも避けもせず、それに合わせて体をひねりながら全力の拳を相手の顔に打ち込む。私の拳が一瞬だけ速く当たって、肉を打つ感覚が伝わってきた。

だがその直後にお返しと言わんばかりの鉄塊が顔面に衝突し、そのまま意識を刈り取られた。

第32話 探りあい

まぶたの上から差し込む光に脳が刺激されて、目を開く。まず目に入ったのは見慣れぬ天井。まるで水に包まれたような抱擁感のあるベッドから起き上がり、周りを見渡す。一度深呼吸して気分を落ち着かせようとすると、病院特有の匂いはなく、芳しい花の香りが意識を刺激する。

とりあえず確実に言えるのは、ここが自宅でもなく、病院でもなく、管理局でもないということ。病院なら病院の匂いがあるし、私に見舞いなど絶対に誰も来ないので花など添えられるはずがない。もし管理局ならこんな陽の光で快適に目覚められるはずがないのだ。起こされるとしたら、尋問のためにコンクリートか鉄製の寝心地最悪のベッドに拘束具で縛り付けられた状態で、冷水を顔にかけられるという最悪な目覚めをするはず。

となると、残るは消去法と気絶する前の記憶で、聖王教会か。ベッドから降りてスリッパを履き、丁寧に椅子の上に畳まれて置いてあった服に袖を通す。あの戦闘でそれなりに汚れていたはずだが、綺麗に洗濯されていて、シミ一つ無い。

もう一つ、床頭台の上に置いてある拳銃とホルスターのセットを手取る。グリップから伝わる樹脂の冷たさが、今の状況が夢ではないことを教えてくれる。安全装置がかかっていることを確認し、マガジンを取り出す。弾丸は装填されている。スライドを引くと、キツチリ弾丸が装填されていた。私を管理局に引き渡すつもりが無いことの裏返しのようにも思えるし、私程度なら武器を取り上げずとも脅威にはならないと言われているようにも思える。

つまり警戒は解くべきではないということ。シャツの上からホルスターを身につけ、それに銃を入れる。

さて、武器を手に入れたところで今の状況を改めて確認しよう。私は教会の騎士、シャツハ・ヌエラに叩き潰されて、眼が覚めたらここに居た。日の差し込む窓に近寄ると、部屋の隅の監視カメラが目に入った。ということは、私が起きたことは既に知られているだろう。

そう時間を置かずに誰か来るはずだ。

視線を窓に戻す。はめ込み式の窓のようで開閉は不可能だが、叩いてみれば厚みはないようで、その気になれば簡単に割れるだろう。だが割って脱走した所で逃げきれるとは思っていない。少し逃げた所でまた捕まるだろう。

「入りますよ」

コンコン、と控えめなノックの後にそう宣言され、懐に入れたばかりの拳銃を握り、部屋に一つしか無いドアへと銃口を向ける。警戒しながら開く扉を見守っていると、そこからはブロンドの長髪をたくわえた美しい女性と私を気絶させた張本人が順番に入ってきた。ちなみにシスター・シャツハは頬にガーゼを貼り、それを痛そうに擦っていた。ざまあない。

「申し訳ありませんっ！」

「このたびは、申し訳ありませんでした。私はなんとしても保護しなさい、と命令したのですが、私の意図と彼女の理解に食い違いがあったようで……」

鬼気迫る勢いで頭を下げるシスター・シャツハと、それとは対照的に冷静に言葉を吐き出すもう一人の女性。なんとしても、というのは手段を選ばずという意味だ。どういう意図で使ったとしても、それには武力行使も含まれるのだから間違つてない。何が言いたいかというと、責任転嫁はあまり感心しないということだ。

「……ひとまず、今の状況についての説明を求めます。誰から私を保護するように頼まれたのですか？」

心当たりは大いにある。どうせあのお節介が好きなら八神はやてが私の経歴を眺めて。そして私が管理局によって殺される可能性を見出し、自分が関係を持つ聖王教会の知人に助けを求めた。大体こんなところだろうが、一応確認をしておく。予想は予想で重要だが、それは確実な情報ではない。

「その口ぶりだと、保護される理由には心あたりがあるようですね。私の友人である八神はやて二佐に頼まれました」

予想的中といったところだな……彼女は善意の施しのつもりであ

れこれやっているのだろうが、そのほとんどが私への嫌がらせになっているのは見事なものだ。本当は全て知っていて、悪意を持って私に施しをしている、そう言われても納得できるほどだ。

「ところで、私は許してもらえないでしょうか……」

シスター・シヤツハに聞かれるが、攻撃されたと言っても非殺傷設定だ。痛みを感じない私から言わせてもらうと、極端な話撫でられたのと大差ない。高町なのはに比べれば随分と軽いものだ……尤もアレは私に原因があったから許したのだが。今回も私に原因が無いわけではないが、最初の男たちがあんな物々しい雰囲気を取り囲んでこなければ逃げずに話を聞いていたはず。そう簡単に許すのも、相手はどう思うか。

「……」

非常に情けない表情でこちらを見るシスター。見ていると、こんな奴に一方的に叩き伏せられたのかと自分も情けなくなってくる……普通の人間なら、そう思うのだろうか。どんな場面でどんな感情を抱くのか、それは本を読んで理解しているつもりだ。

そのつもりのだが、心の傷が癒えるにはまだしばらく時間がかかるようだ。妹のことで感情が発露することはあれども、自分のことにはまだ感情が湧いてこない。

手首に巻き付く輪の形で蛇を出し、相手の感情を覗く。一人は表情、言動と同じく、申し訳ない、そんな感情が伝わってきた。もう一人からは、黄色の警戒色が見える。

「あの？」

トリガーに指をかけたまま腕を下げる。

「許しましょう。そして、いきなり銃を向けた非礼をお許し下さい」

謝罪を受け入れ、それから自分も腕と頭を下げる。しかし、頭は下げても目だけは相手に向けたまま離さない。

「え、そんな……いいんですか？」

「元々が私の勘違い。であればいいのですがね。こうして手厚い保護をしているのが、謝意の現れであるのか……それとも油断させるための罠なのかにより、許しを撤回することもありえます。その点は、ど

うなのでしょうか？ カリム・グラシア」

頭を上げて、視線を逸らさずに話す。私に嘘は通じない。人が嘘をつくときには必ず感情が揺れる。そして私にはその揺れを見ぬくための目がある。

私の視線を正面から受けたカリム・グラシアの顔は変わらずとも、靄がわずかに揺れる。

「あなたの事ははやてからよく聞いています。ロストログアを起動している時には、目が蛇のように変わることも……警戒は解いてくれないのですね」

片方の目だけを鏡に向けると、なるほど確かに。本来白いはずの結膜は黄色く濁り、本来丸いはずの瞳孔は縦に裂けていた。だが、そんなことはどうでもいい。私は私。いくら肉体が人のものでなくなろうとも、それには変わりない。私という自我は消えていない。全く皮肉なものだ、一旦必要ないと復讐の時には押しさえ込んでいた自我を、今更元に戻す必要があるとは。

「あなたは、私達があなたを管理局に引き渡す事を警戒している。そうシャツハから聞きました。確かに聖王教会と管理局は深い関係にあります。それはもはや常識と言ってもいいほど世界に広く知れ渡る事実。よって追われる身のあなたが私達を警戒するのは当然の事です……しかし、私が頼まれたのは管理局ではなく、一個人としての友人からです」

感情の靄に揺らぎは見られない。嘘は言っていないようだが、肝心な情報が欠けている。

「そうですか。はやてが……。まあそれはどうでもいいです。私が聞きたいのはそれじゃない」

「っ……」

……わずかに揺れが見えた。感情を完全に殺して演技のできる相手ならば、すっかり騙されていただろう。もしも私が蛇を手に入れていなければ、すっかり騙されていただろう。巷ではその立ち振舞と美貌から聖女などと例えられることもあるが、その中身は真逆。悪女あるいは女優と例えられてしかるべきものだ。

「私が聞きたいのは誰に頼まれたかなどではなく、管理局に引き渡すか否か。管理局との取引で私を利用するか否か。その二点につきます。その他の情報はどうでもいい」

「……」

揺れが大きくなるのを確認したので、下げていた銃を持ち上げる。表情こそ変わらないが、沈黙と靄の揺らぎが全てを語っている。

「動くな。口を開く以外の行動をとったら、その瞬間に撃つ」

「……まるで頭の中を読まれているような気がしますね。そのロストログアの効果ですか？」

「敵に手札を見せるほど私は甘くない」

銃を撃たないのは、撃つたら最後。目の前の二人の内どちらかが私を殺しにかかるだろう。もし死なずに済んだ、あるいは奇跡的にこの場から逃れられたとして、聖王教会の人間に手を出したとして管理局は公的に犯罪者として指名手配するだろう。管理局だけでなく、教会も本腰を入れて私を追う。そうすれば、スカリエッティの望む活動は不可能になる。つまりは利用価値がなくなり、切り捨てられる。結果、教会と管理局、二つの組織に追い回されることになる。バックアップなしで逃げきれぬ相手ではない。

「勘違いであれば謝罪する」

これは弁解のチャンスを与えるということ。仮に全てが私の思い込みであれば、それに越したことはない。だがその可能性は低い。勘違いであればこれほど感情の靄が揺らぐことはないだろう。

「はあ……隠し通せればと思っていたのですが、仕方ありません。確かに管理局からは、あなたを引き渡すように要請が来ています」

「そんな、聞いてませんよ騎士カリム！」

自らの地位も重要だが、友人を裏切りたくはない。もはや隠すこともなく、靄からそういう思いが伝わってくる。欲と私情の間に挟まれて、どう動くか迷っているところだろう。

「それで、どうするつもりだ？」

「仮定の話ですが……あなたを管理局に引き渡す。と答えたら、どうしますか？」

「このまま引き金を引いて、逃げるだけ。逃げられるかどうかはともかく」

この距離なら外すことはまず無い。デバイスを起動する動作をした瞬間にトリガーを引き、視認不可能な速度で吐き出される弾丸は外れること無く頭蓋を貫通し、脳を破壊。確実な死をもたらすことだろう。

その直後に、激昂したもう一人が襲い掛かるだろう。初撃をしのいだとして、同時に部屋の外で待機している者達が突入し、拘束されるか。逃げ切るのは不可能に近い。

「では、引き渡さなければ？」

銃を向けられているのに笑顔で質問をするその度胸は、数々の修羅場を超えてきた証拠だろう。傍観者として見るなら賞賛に値するものだが、取引の相手となればこれほど厄介な者はない。

「ある程度の自由を約束してもらえるのなら、大人しくしてしましよう」

保護を頼んだのが八神はやてだとすれば、遠からず保護されたという一報を聞き私の無事を確かめにくるだろう。諜報活動はその時にすればいい。問題はあるが、それはこの場を切り抜けてから考える。今はこの駆け引きに全霊を込めなければ。管理局に引き渡されては、妹の姿を二度と見れなくなる……それはなんとしても避けたい。いや、避けなければならぬ。絶対に。

「……わかりました。私も、友人を裏切るのは心苦しいものですから。聖王教会はあなたを責任をもって保護します」

「口だけなら何とでも言える」

感情の靄は揺らがない。だが、人は誰もが嘘をつく。そう、本当に口先だけなら何とでも言えるのだ。正式な書類を交わしたわけでもない。時には書類を交わしてもそれを無かったことにすることもあるのだから、言葉などどうして信じられようか。感情の揺れも、ほんの数度揺さぶりをかければ慣れてしまおうだろう。

「この場で適当なことを言っただけで切り抜けて、後で引き渡す。そんなことをされたら、さすがの私でも怒らないでいられる自信はない」

嘘をついたらただでは済まさないと警告する。復讐達成時の歓喜は蛇が食いきれないほどのものだった。最高の純度の感情。途方も無い量の歓喜。その全てを魔力に変換し、その殆どを使わずに温存している。爆発させれば辺り一面を更地にするくらいならできらう。

「もちろん。嘘はつきません」

揺らぎはない。信じるに足る材料はまだまだ足りないが、打てる釘は全て打ち込んだ。後私にできるのは、相手を信じることだけ。

「ならいいんです」

銃を胸にしまい、上っ面だけの笑顔を浮かべて、安心したような声を出す。安心などできるわけがないのだが、安心したフリをしておいた方が好印象だろう。

「……はやてに聞いたとおり、警戒心の強い方ですね」

「でなければ生き残れませんから」

互いに交わすのは笑顔だが、内側に秘めるのは笑顔とは真逆のもの。シスター・シャツハが苦い顔をしているのは、この不穏すぎる空気に慣れていないからだろう。

第33話 会話

聖王教会の保護下に置かれることが決定してから数時間。それから少しだけ、カリム・グラシアと取引をした。単に私が「自分を管理局に引き渡すな」と脅しをかけるだけでは、一方的な要求でしかない。恐怖で縛れない相手ならば、利益で縛るしか無い。なので、私を単に管理局へ引き渡すよりも、保護しておく方が利益があると思わせるために、私の持つ情報の半分を彼女に話した。

結果は、曖昧な返事で茶を濁されて終わりとなったが。

そして、今はその後となる。今対面しているのは、先の女優より随分と御しやすい相手だ。シャツハ・ヌエラ。ただし殺し合いだけは絶対にしたくない。その実力は実際に戦った自分がよく知っている……だが戦わなければ、話し相手に丁度いいただの人間だ。カリム・グラシアが管理局と交渉しに行っている今、私は動くことができないのだから、その間の暇つぶしに付き合ってもらっている。

「ということは、誰の指導も受けず独力であれだけの実力を身につけたのですか？」

出されたコーヒーを啜り、頷く。さっきから話しているのは、ちよつとした身の上話から派生した私への質問。Eランク魔導師だというのに自分に一撃を入れられたというのが気になったらしく、師は誰かと聞かれた。それに対し師など居ないと答えたら、今の質問をされたのだ。

「……はあ、それは随分と沢山の死地を潜ってきたんですね」

「まあ、そうですね」

私の実力の殆どは、実戦経験で育てた判断能力。いわゆる勘によるものだ。それに加えて、ある程度の身体強化能力。

「師が居ればもつと伸びていたはず……惜しいですね」

「……伸ばしたくもないですね。カリム氏の交渉の結果によりけりですが、できることなら戦いの才能など必要ない生活をしたいです」

実際はまだ戦いの記憶も、あるかどうかもわからない才能も、どち

らも捨てていいものかどうか分からない。カリム・グラシアの交渉が失敗すれば逃げるために戦わなければならないし。成功してもスカリエツティが私を捨てれば戦わなければならない。捨てられなくても、管理局とは戦うことになるかもしれない。

だが、先ほど言ったことは私の心からの望みだ。妹が治った後、可能ならば是非妹と共に緩やかな日常を謳歌したい。それはとてもとても、幸せなものになるだろう……復讐だけでなく、さらに平和な日常まで望むのは贅沢すぎるのはわかっているが。

「戦いが嫌いなんですか？」

「嫌いですね」

生きる目的のため自ら望んで戦い……もとい殺しに身を投じてはいたが。誰が好きで殺しなどするものか……ああ、しかし最後に殺したアイツらに関しては何に好きで殺したな。訂正しよう、アレを除けば、嫌々ながらに仕事と割りきって殺していた。次第にそれにも慣れて、何も感じなくなったが。あいつらを殺すときに何も感じなければどうしようかとも思っていたが、完全な杞憂だった。

「ならなぜ管理局に……いえ、やっぱりいいです」

何を勘違いしたのか、何を感じたのか。質問を途中で切り、慌てて自らの口を手で塞ぐシヤツハ。もちろん聞かれた所で喋るつもりもなかったが、拒否するなら理由の説明もしないといけなくなるし。その手間が省けてよかった。

「……」

「……」

「……」

「……」

沈黙が続く。互いに切り出すような話題もないため仕方ない。こういう時にはゆつくり本でも読んで時間を潰すのが一番だが、本棚に目を向けても非常に分厚い歴史書や聖書ばかり。そういつたのには興味が無い。私が好きなのはもっと陳腐で、非現実的な三文小説だ。

「はあ……」

椅子の座り心地は最高と言ってもいいが、この空間はため息が出る

ほど居心地が悪い。カメラ等でコッソリ監視されているのには慣れているが、こうして正面から堂々と監視され続けるのは今まで無かった経験だ。さらに暇を潰す娯楽の一つもないとなれば、ため息が出るのも仕方ないことだろう。逃げ出すにしても相手が悪い。

「あの、何か至らぬことでも?」

「いえ、少しばかり退屈してきただけです。お気になさらず」

もう少し自分にコミュニケーション能力があれば、退屈することなく話せていただろうか。あまり人と対等に話すのは慣れてない、と言いつつするのは簡単だが。

……黙っていても仕方ない。適当に話を切り出そう。

「しかし、豪華な部屋ですね」

この部屋に通されて、最初に抱いた印象を言ってみる。鑑定眼などないが、置いてある家具全てが高級品だというのは一目見てわかった……言っておいて何だが、客室が豪華なのは当たり前か。本来なら来賓を招く部屋なのだし。それに加えて聖王教会は管理局と対になるほど大きな組織だ。豪華でないはずがないのに。我ながら、随分と馬鹿なことを言ってしまった。

「ええ。でも、私はもう少し落ち着いたところの方が好きですね」

「ほう。有名な騎士ともなれば、それなりの給料も出て贅沢に慣れているものと思っていましたか」

少なくとも管理局では、能力・階級により給料が変化していた。教会でも同じようなものではないのだろうか。

「確かに給料は結構出ますけど。贅沢はあまり好きじゃないんです。おかしいですか?」

やや口を尖らせて言うシャツハ。別におかしな事とは言わないが、やや意外ではある。……最近では管理局だけでなく、聖王教会でも汚職や賄賂が話題になっているが。彼女に限っては無縁な話のようだ。「いいえ。むしろ誰もがそうあるべきでしょう。管理局の高官は、高給取りなのに賄賂や汚職が絶えませんからね」

酷い時にはそれに加えて暗殺、謀殺まであるのだから……もう腐っているの一言につきる。だが私もその一端に関わっているから批難

できる立場ではないし、一管理局員がどうこう言っている話でもない……そういえばもう部外者か。なら問題ないな。

しかし、それに比べて彼女のなんと清いことか。汚職してばかりの連中には、これの一厘でも見習ってほしいものだ。

「そういう話は教会でもよく聞きますね。本来あつてはならないことなのですが」

「本当に。そうですね」

今となつては管理局の内部事情など、私には関係ないのだが。それでも適当に話を合わせておく。退屈な時間を過ごすよりは話をしていいる方が有意義だ。

「……」

「……」

また会話が途切れる。周りの調度品を眺めるのにも飽きたので、彼女に視線を移すと、居心地を悪そうに視線を逸らした。ひよつとして会話がこうも頻繁に途切れるのは、私と話をしたくないからなのか。

蛇を出して、相手の感情を覗いてみる。

「っー」

一瞬で警戒色に変化したのが、変わる前の靄には、僅かな警戒心以外には嫌悪感などの感情が見られなかった。嫌われているわけではないようだ。純粹に、人と話すのが苦手なのだろうか。それに付け加えて、私が何か行動を起こさないか警戒しているのか。

「逃げはしませんよ」

蛇を体の中に戻し、両掌を相手に向けて敵意が無いことを示す。いくら痛みがなくなるとも、いくら殴られてもすぐ治るとしても、また殴られるのは気分が良くない。

「ただ居心地が悪そうにしていたので、嫌われてるのかと思ひまして」
「……嫌ってはいません。わかつていいるでしょうけど、逃げられたら困るから気を張っているんです。あなたは嘘を見抜けるみたいですけど、私は見抜けませんから」

「私は嘘をつけるほど器用ではありません」

「人は誰でも嘘をつく、と言ったのはあなたですよ」

自分で言ったことながら、全く正論だ。それを言われてはとうしようもない。肩を落として落ち込んだフリをする。本職と比べれば拙い演技だが、これが私の精一杯。これで騙せなければもう抵抗はしないでおこう。するだけ無駄だ。

「私は、そんなに信用なりませんか」

ため息を吐き、同情を誘うようにわざとらしくない程度に言葉を放つ。

「そうやって落ち込んでいる姿も、演技なのか本気なのか区別が付きませんか」

「演技です」

肩を落とし、顔を俯かせたまま堂々と白状する。

「……随分あっさり認めましたね」

「まあそうですね」

頭を上げる。嘘をつく時疑われてはおしまいだ。疑われている状態で相手を騙し通せるのなら、嘘を突き通すのもアリだが。残念ながら私にそれほどの技量はないのでここで降参する。

「嘘ばかりついていると、本当のことを言って嘘と疑われますよ」

「私もあまり人は信じませんし、問題ありません」

「友達できませんよ……」

「いいません」

少なくとも、今の私には必要ないものだ。友人も、恋人も。単独では大した戦力にならないので、仕事上の仲間は必要だが。それ以上の関係は求めない。

「寂しくないんですか?」

孤児にそんな事を聞くとは……家族が妹しか居らず、その妹も正気が無く、話もできない状態だ。寂しくないわけがない。

心の中で舌打ちを一つして、一応返答しておく。黙っておいても詮索されるだけだ。

「ええ、寂しくありませんよ」

「嘘ですね。今のはわかりました」

全くダメだな。家族の事を考えたらどうしても表情に出してしまう。

「……余計なことはするものじゃありませんね」

「自業自得でしょう」

今度は心からのため息を一つ吐き出し、席を立つ。

「どちらへ？」

「少しお手洗いに」

ついでに外の空気でも吸って、頭を冷やしてこよう。最近どうも後先を考えないで行動するせいで、面倒なことばかり起きているからな。

今までのように、冷静に考えて動かなければ。今私が立っている位置はそれだけ厄介なのだし。

第34話

私はいつも死と戦ってきた。目的のため自ら望んで死地に赴き、時には銃弾の雨に晒されながら他人を殺して生き延びてきた。そして、生き延びて無事に仇を討った。仲間……部下と引き替えにだが。それで人生においての本懐は遂げた。

そして、今は死とは全く無縁の場所にいる。誰かに殺される心配もなく、誰かを殺す必要もない。最初は警戒していたが、カリム・グロシアから交渉の結果正式に保護することとなった、と伝えられてからは少し警戒をゆるめた。もう数日が経ち、監視の目はあるものの、敵意は感じられないので完全に警戒を解いて雑務の手伝いをしている。

……そして思う。ひよつとするとこのままでもいいのではないのだろうか、と。本当なら治らなかつたはずの妹の事など諦めて、このまま安全に過ごしていけばいいじゃないか、と。

確かにそれも一つの選択肢だ。人生における最大の目標は果たしたのだし、ほんの一つを切り捨てるのもアリだろう。いくらスカリエツティといえども、聖王教会の奥深くまでは侵入できるはずがない、このまま安穩と過ごしていけばいい。

「……無理だな」

自分で考えた事だが、すぐにそれをひっくり返す。私にとって、妹とは自分の命よりも重い物。切り捨てたとして、その先に幸せはない。待っているのは真つ暗で底なしの絶望と、絶対に消えない後悔だ。

「何がですか？」

隣で仕事をしていたシスターが聞いてくる。

「このまま教会の世話になっているのは、耐えられない。そう思ったんですよ」

私にはやるべき事がある。やらなければならぬ事がある。それを忘れてはならない。席を立ち、隣のシスターを見下ろす。

「……逃げるおつもりですか」

「いいえ、保護を解いてもらおうと。直談判しに行くので、案内をお願い

いできますか」

「管理局から狙われていた、とお聞きしていましたが」

「お願いします」

頭を下げて頼む。スカリエッティからの接触が無い今、自力で脱出する以外に方法は無い。見捨てられたとも考えられるが、奴のアジトまで単独で向かえば出迎えてくれるだろう。

そして、頼んだ結果帰ってきた答えは私にとって非常に予想外のものだった。

「危険を犯してまでドクターの下へ戻ろうとしますか。予想を裏切られましたね、てつきり安全な所で一生を過ごすのかと思いました」
笑顔でとんでもないことを言うシスター……いや、私の目的を知っていて、かつスカリエッティのことをドクターと呼ぶ。そんなのは、戦闘機人くらいしか居まい。

「心外だな」

しかし、驚かされた……まさか、これほど近くにスカリエッティの手の者が居るとは。

「怒りましたか？」

「いや」

この程度では怒る気にもなれない。八神はやてに勝手に身元を調べられたのに比べれば遥かにマシだ。いくら私でも、アレには腹が立った。

「私もいつ気付くだろうと待っていたんですよ。それで、いつまでも気付かないものですか……」

「待たせたか？」

「それほどでも。一週間でこえたら声をかけようと思っていましたから。しかし、ここまで決断が遅れたのはやはりここの居心地が良かったからですか？」

「ああ。寝心地のいいベッドはあるし、食事は自分で作るより美味しいが出る。殺すこともないし、殺される心配もない……」

ならなぜ、と聞きたそうな顔をしているので、答えてやる。

「だが、私は妹が目が届く所に居たい。何かあったら、今度こそ守って

やれるように」

私の居場所は、妹を守れる場所。妹をマッドサイエンティストの手に置いて、一人のんびりと安全地帯で寝ていられるものか。たった一人の家族が、次に見た時には戦闘機人に変わっていました、なんてことになつたら奴を殺さない自信がない。

「そうですか、ではすぐに脱出……といきたいところですが、まだ準備が足りてません。あと二日ほど待つて下さい」

「わかった。脱出方法の詳細は？」

下手に動いて、脱出のための計画をぶち壊すのは私にとつても彼女らにとつてもあまり良くない。だが、やれる事はやっておきたい。それで脱出が少しでも楽になるなら。

「単純に、あなたを聖王教会の敷地外へ連れ出す。セインに連れて行かせる。それだけです」

……予想以上に単純な方法で、なんというか。気が抜けた。一つ息を吐き、椅子に腰掛ける。

「簡単でしょう？ あなたはただ待つていればいい」

「楽でいいな」

「ええ。だから、その間は仕事をしてましよう。急に仕事の手を止めたとなると怪しまれますから」

椅子の位置を直して、端末に書類通りにデータを打ち込んでいく。と、ここで眼の前の端末画面にメールの着信を知らせるアイコンが点滅した。タイトルは『呼び出し』。内容は、至急応接室まで来るように、とのことだった。

応接室という……私に誰か客だろうか。おそらく管理局、機動六課のメンバーの中の誰か。その中でも最有力なのは、八神はやて。

「呼び出しだ。行ってくる」

また席を立ち、一人応接室へ。

応接室の扉を開けると、予想は半分当たりで半分ハズレだった。応接室に居たのは八神はやて、シグナム、ヴィータの三名。単独でなかった、という意味でハズレだ。

「元気そうやな」

「お陰様でな。保護なんて窮屈なだけで要らなかつたんだが」

「まあそう言わんといてや。ハンク君のためや……で、今日はいくつか聞きたいことがあるんやけど。時間ええかな？」

「いくらでも」

聞きたいことか。あまり良い予感はないが、果たして一体なんだろうか。

「まず、一つ。あんたの妹さんが攫われたのは知つとるか？」

「もちろんだ」

やはり妹にも監視の目があつたか……想定範囲内だが。さて、どう答えたものか。

「誰に攫われたか、心当たりは？」

「機密をばらされないよう私に首輪をかけた管理局か、私に恨みを持った反管理局勢力のグループか、あるいは以前私に接触しようとしてきたジェイル・スカリエツィイか……連絡があつたら犯人をぶち殺しにも行けるんだがな。全くない」

「卑怯な奴らだ……許せねえよ」

「全くだ」

他人の事で怒れるのは優しい証拠、と本で読んだが。当事者から見ているとてつもなくマヌケに見える。笑いを堪えるのもなかなかつらい。

「それで、聞きたいのはそれだけか？ 私にもここで与えられた仕事があるんだが」

「いや、それだけやない。犯罪者が脱走したあの日の朝に、不自然な金の動きがあつた。まるで、彼らが脱走して、殺害した後に口座凍結されるのを恐れて動かしたように」

なるほど、そこを突っ込んでくるか。確かに切り込むには妥当なところだ。しかし、まだまだ詰めが甘い、もう少し証拠を揃えてからでなければ意味など無い。

「私は金がたまつたから纏めて妹の口座に振り込んだだけだ。治療費にな。それに、それだけでは私が奴らが脱走する、と知っていた証拠

にはならない……前に私が怒ったのをもう忘れたか？」

「……ほんまに知らんかったんやな？」

「ああ」

「その言葉が聞きたかったんや。疑いだしたらきりがないしな……ごめん、嫌なこと聞いて」

「……」

謝るなら最初から聞くな、と思ったのはこれで二度目だ。たちの悪い事に事実なのだから、知らなかったフリをするしかないのがまた面倒だ。

随分と下らないことのために時間を割く。しかし、それなら後ろの二人は何のために来たんだろう。もしも私が認めた時に捕まえるためか？

「それじゃ、シグナム」

「ああ。ハンク殿、私と手合わせして欲しい……結局六課に居るときには一度も手合わせできなかったからな」

また唐突な頼みだ。だが、断る理由も特にない。今の私は一般人だし、死ぬような事はしないだろう。リスク無く相手の情報を得られるというなら、やる価値はある。手土産を一つ増やせば、スカリエツティから今後の支援を引き出せるだろう。

「私は問題ないんだが……」

扉を背に立っているシスター・シャツハの方を見る。私はよくても許可が降りなければ模擬戦などできないだろう。私は一応ロストロギア所有者なわけだし、それを起動するとなれば、尚更勝手に動く訳にはいかない。

「訓練場を使ってもいいですよ」

「ありがとうございます」

「おお、いいのか！ 感謝する」

戦えば私がスカリエツティにデータを渡して、対策を練られるとも知らず。大層な喜びようだ。

第35話 手合わせ

デスクワークで固まっていた体を入念なストレッチで伸ばし、身体強化をかけて両拳を構える。剣は使わない。剣の達人相手に付け焼き刃の剣術で挑むよりかは、比較的使い慣れている拳を使ったほうがまだ長持ちするだろう、と考えた結果だ。

しかし、なぜ今更手合わせなど望むのか。全く理解できないが、単純に試合をした事が無かった。だから今頼んだ。という単純な理由ではないだろう……もっと何か深い理由があるはず。裏があるはずだ。

それは何だ？

わからない。

自分に聞いて自分で答える。家にも局の端末にも、スカリエツティやその他犯罪者との付き合いは一切切残していないはずだ。だから、何かを疑われているという線は薄い。薄い、ゼロではない。武術の達人は戦いを通して相手の思考を読む、というのを本で見たことがあるが、それを狙っているのだろうか。

「準備はいいか？」

「できてる」

剣を向けられる。まあ、戦ったからといって私の思考を読めるわけがない……が、一応警戒しておくに越したことはない。眼の前の相手は敵。そう自分に言い聞かせ、マルチタスク含め思考を戦闘関連の情報で埋め尽くす。

「始めよう」

相手との距離は10mほど。非常に近い、とても近い。そのただでさえ近い間合いを一步で詰めてきて、勢いを乗せた剣を突き出してきた。それを斜め前に歩を進めて避けつつ、右手で剣を持つ手を抑える。相手の左手が私の腹に突き刺さるが、お返しに左手で顔を殴り、拳を振りぬいた瞬間に強化に回していた魔力を炸裂させて吹き飛ばす。

単純だが、それなりに強力。蛇を手に入れる前はこれが私の近接戦

闘における切り札だった。のだが、彼女は吹き飛んだ先で何事もなかったように一度宙返りし、足を地面につけて勢いを殺す。

「つつつ……まさか、受けながら攻撃するとはな」

ほんの僅かにダメージはあったようにアピールしてくる。アピールした様子と相応に動きは多少鈍らせてくるだろう。今のは全力ではないとはいえ、半分殺すつもりで打ち込んだのだが、改めて上位魔導師のデタラメさに頭が痛くなった。同時に、こういう奴らを殺すならやはり非戦闘状態で狙撃するのが一番楽だとも確信した。

「……」

ゆつくりとすり足で距離を詰める。剣の間合いの一步外側で足を止め、観察に意識を集中する。

「手を出さなければ、ダメージが回復してしまうぞ?」

白々しい事を言う。

「回復以前に、全くダメージを受けていないだろう」

強化した腕力で繰り出した打撃のヒット、腕を振りぬいた直後のゼロ距離魔力炸裂。この二段攻撃の衝撃はそれなりに大きい。並の魔導師でも、防御魔法を一切使わずに受ければ頭蓋骨の中身がシエイクされて、運が悪ければ脳内出血で死ぬくらいには。防御魔法を使われれば、拳で突破して魔力炸裂の衝撃で鼓膜を破壊する位しかできないが。

彼女のバリアジャケット……ベルカ式だから騎士甲冑か。その硬さが並の魔導師の防御魔法を上回るということ。これでは突破など、全力を出さない限り無理ではないか。

「まあ、なッ!」

低い姿勢からの逆袈裟。初段はフェイント……そう判断し、一步下がって避ける。さらにもう一步踏み込んできて、本命と思われる上段からの振り下ろし。振り下ろされる直前にこちらが一步踏み込み、左腕を頭の上に回してガード、右の肘を鳩尾あたりに打ち込み、魔力を炸裂させる。衝撃は十分伝わったが、ダメージが通った様子はない。その証拠に笑っているし。

右足を軸にして反時計回りに回転し、左の肘をこめかみに叩きこむと、やっと相手の姿勢が崩れた。

互いの吐息が顔にかかるほどの距離。完全にこちらの間合いだ。それで隙ができたとなれば全力の一撃を叩き込みたくもなるが、あえて後ろに下がって頭を落ち着かせる。

「フウ……」

息を吐く。こちらの攻撃は威力のほとんどが殺されるが、相手の攻撃はすべて素通りする。状況はこちらが非常に不利。不意打ちの形で後の先を取りダメージを与えることはできたが、もう通用しないだろう。おそらく次の交差で落とされる。それもわけがわからない内に。

となれば、ここで切っておくのが一番いい選択だろう。

「参った」

両腕を頭の後ろで組んで早々と降参の宣言をする。これ以上続けても意味は無い。

「どういうつもりだ？ そちらが優勢だったはずだが」

「魔法を使わず、手加減に手加減を重ねられた上での優勢だ。実戦ならガードした左腕ごと胴体を二つに斬られてたし、このまま続けたとしても結果は見えている」

ダメージが通らないなら通るだけの強化をすればいい。ダメージを受けるなら受けなくなるまでまで強化すればいいわけだが、そこまですると本気になった相手のうっかりで殺されかねない。こんな所で命を落とすなんて馬鹿らしいこと、たとえ冗談でもする気にはなれないし、今後の事を考えれば限界を晒すのは避けたい。こうして和気藹々と模擬戦をしているが、相手は敵なのだから。

「そちらも手加減をしているだろう？」

人聞きの悪い。私は私（陸戦E）の枠内に収まる全てを出し切っただけだ。

「なぜ手加減する。何を隠している？」

達人は戦いの中で相手の思考を読む。というのは本当だったらしい。あえて読ませないよう頭を空にして戦っていたが、その選択は正

解だった。うっかり読まれていたら最悪を通り越す事態になっていたに違いない。

「今が私の実力だ。手加減なんてできるわけないだろう」

「確かに魔導師としては妥当だ。だが、貴様は魔導師というよりは戦士だ。戦士としての実力はもつと上のはずだ！ でなければ、戦闘機人と戦い捕獲するなどできるわけがない。本気を出してみせろ！」

「あれは運だ。武器もあつたしな」

嘘は言っていない。あの時チンクが本気で殺しに来ていたら絶対に死んでいたし、部下の弾丸が防御をギリギリで貫通したから。最初のナイフがもう少し心臓に近い位置に刺さっていれば死んでいた。私の実力など、ほんの僅かではない。

「本気を出したくないのなら、出さなくなるようにしてやる」

彼女の魔力が熱に変換され、熱された空気が風を作り、顔を炙る。蛇を出すまでもなくわかる。これは本気で怒っている。そろそろ止めなければマズイだろう。

「交戦の意志を無くした相手、しかも民間人に本気を出して斬りかかるのか？」

「誰が民間人だ」

冷静なようでそうでない指摘。やはり頭に血が上ったきり全く降りてないようだ。

「私はもう管理局を抜けている。犯罪者でもないし、それ以外で今の身分を何と表せばいい」

相手の一番嫌がる言葉を選びつつ、相手自身の意志で自らの行動を縛らせる。一步間違えれば逆上して襲い掛かれる危険もあるが、このままでも襲い掛かれる危険はある。いざとなれば逃げればいいと判断した。

「ぐう……：ならば、せめて何を隠しているのか教えてくれ」

「教えたら私が死ぬから無理だ」

もし教えたら、私は管理局とスカリエツィ、敵に回すとこれ以上ない程恐ろしい二つの勢力に狙われることになる。いや、スカリエツィは管理局と繋がっているわけだし、一つの勢力と言っても問題な

い。片方ならまだしも、両方を敵に回して生き残れる可能性はゼロだ。奴らはきつと無人世界の果てまでも追いかけてきて私を殺すだろう。

監視の目はそこら中に潜んでいる。スカリエッツィの手下のドゥーエも窓から覗いているし、集まっている野次馬の中にも管理局の手の者が居るだろう。八神はやてがその一人かもしれない。

一度疑いだすとキリがないのでここらで思考を切り上げて、眼の前の事を意識する。

「……そうか。そういう事なら私も引こう」

剣を消し、管理局の制服姿となったシグナムに頭を下げられる。こちらでも強化を解いて頭を下げる。一度の模擬戦で、手加減されていたとはいえ収穫はあった。やはり格上との戦闘は、自分の実力を知るのにちょうどいい。

「またいずれ、手合わせして欲しい。その時は全力でな」

「気が向いたら」

次に戦うとすれば、そこは戦場だ。その時には全力で逃げさせてもらおうとしよう。私では勝てないとわかったのだし、無駄に負ける必要もない。

第36話

シグナムとの模擬戦から三日目の真昼。ドゥーエと話しながらベルカの街を歩いていると、本当に唐突に、何の前触れもなく事務処理専用のデバイスが起動し、スクリーンが展開した。それには驚いたが、さらに驚いたのは……

『やあ、元気にしているかい?』

そのスクリーンにスカリエッツィがでかど顔を映し出していること。慌ててスクリーン非表示化のスイッチを押し、周りに見ていた人間が居ないかを確認し、ドゥーエ以外誰も居ないことを確認してから監視カメラの方を見る。丁度、スクリーンは私の体で隠れて、カメラからは死角となっていた。全く心臓に悪い。

きつとスカリエッツィはわざとやっているに違いない。一つため息を吐いてから、小声で通信を再開する。

『平和な時間を楽しんでいるようだね。だが、それももうお終いだ。そろそろ戻ってもらうよ』

私への配慮など微塵もなく、ただ自分の言いたいことだけを言っている。そういえば、スカリエッツィはそういう奴だった。他人のことを全く考えず、自分の好きなように行動する。迷惑この上ない人種だ。

私も似たところはあるが、奴はさらにその上に行く。

『楽しかったが、少し長すぎたな。体が鈍るところだった』

『ああ、それはすまないね。とりあえず偽装のために、ドゥーエを殴るなり絞め落とすなりして気絶させたまえ』

『やる必要はあるのか?』

敵でもない相手に暴力を振るうのはあまり気が進まない。必要でないなら避けたい事だ。しかし、必要なら。やらなければならない理由があるなら、やるしかない。

『ドゥーエにはこれから聖王教会に潜伏してもらわなければならない。怪しまれずに続けさせるためには必要なことだ。大丈夫、彼女はMだから恨まれはしないよ。やったら向かって右側にある路地に飛

び込み給え、セインが待っている』

なるほど、それは確かに尤もな理由だ。

「ドクター、あまりいい加減なことを言わないで下さい……ですが、ハंकさん。これは必要なことですから恨みはしません。どうぞ、一思いにやってください。中途半端だと苦しいだけなので、思い切り」

笑顔で言われると、本当にそういう趣味があるのかと疑ってしまふ。あつたとしても、性格と同じように性癖も人それぞれ。一応そういうのには理解があるつもりだ。

「了解」

肩を掴んで、鳩尾に一発膝蹴りを入れる。体がくの字に曲がった所で、頸髓に肘を落とす。人間ならこれで落ちるはずだが……確認する暇はない。監視に尾行していた騎士が数人、こちらに走ってきているのが見えたからだ。心の中で彼女に謝罪しつつ、指示された通り路地に飛び込む。

「や、久しぶり」

ビルの外壁にもたれかかっていたセインがこちらを見て、片手を上げて挨拶をしてきた。

「そうだな」

一ヶ月と経っていないはずだが、それでも久しぶりと感じる。やはり平和な時間はとても長く感じるものだ。シグナムと模擬戦をする前はすっかり勘が鈍っていたが、アレのおかげで取り戻せた。感謝しなければならぬだろう。

「動くなー」

再開の余韻に浸る暇もなく、教会の騎士が追いついてきた。始末できないことはないが、教会とまで敵対するのはあまり好ましくない。ただでさえ敵が多いのに、わざわざこれ以上増やす必要もないと思ひ、放っておく。

「IS、デーパーダイバー」

足の裏から伝わる地面に立つ感触が消え、体が地面に沈む。例えるなら、湖面に張っていた氷に乗っていたところで、足元の氷が割れて水中に落ちる。そんな感覚だった。

ずっとこういう能力があればなあ、と思っていたのだが。本当に羨ましい限りだ。

.....

彼、ハンク・オズワルドが聖王教会から脱走し、行方を眩ませたという報告を受けたのは、六課に戻ってしばらく経ってからだった。

「そんなアホな」

『私もそう思いますが、残念ながら事実です』

報告を聞いた直後、まず真っ先にその言葉が出た。聖王教会は管理局と並ぶほど巨大な組織で、管理局のように人手不足ではない。だどいうのに逃げられた。

そして確信した。間違いなく内部に協力者がいる、と。しかし一体誰が。どうやって脱出させたというのか。見失ったのが敷地外だったとはいえ、それでも教会のお膝元で監視を完全に振り切るなど困難を極める。

「彼と接触した人物は」

『今洗い出してる最中ですが、数が多くて時間がかかりそうですね』

脱走した方法については私が考えることではないが……気にはなる。しかし、何故安全地帯から脱走したのか、そちらの方も気になる。理由もなく逃げるわけがない。人が動くには必ず理由が付きまとうからだ。

なので、考えられる可能性をあげてみる。

一つ。妹を助けに単独で動く。そこからさらに先を予想するならば、拉致した犯人に殺害される。あるいは妹を人質にして、何かしらの悪事に加担する。大穴で犯人を皆殺しにしてミッドチルダへ戻ってくる。彼の妹を治療できる病院は、クラナガン精神病院しかない。それほどまでに心の傷は深い。

10歳で家族を目の前で殺されて、初潮も迎えてない幼い体に汚い欲望をぶちまけられて。それを数ヶ月も続けられたのだから、心が再生不可能なまでに砕かれるのは当然だ。

だが、彼もまた酷い目にあっている。家族の死を見て、理不尽な暴

力を受け続け、痛覚を失った。妹を凌辱される様を見せられ続け……と、思考が逸れてしまった。

二つ。これは彼の言っていたことが嘘である前提だが、彼の妹は拉致されたのではなく、管理局に人質を取られることを警戒して誰かに保護させた。その見返りとして、何かに協力する。

そうなれば、次に考えるべきは彼の妹を拉致あるいは保護したのは誰か。管理局という線は薄い。自慢だが、私のコネは表にも裏にもとても広い。何処かでそんな動きをすれば、確実に耳に入る。

テロリスト、犯罪者はどうだろう。否、だ。彼の関わった任務で、彼が自分に繋がる証拠は何一つ残していない。ピンポイントで彼を恨む人間は居ない。

となれば、一番可能性が高いのはジェイル・スカリエツィ。あの犯罪者は何を考えているのかはわからないが、彼に接触しようとして戦闘機人を送り込んできた。私の知らない間にどこかで接触を持っていた可能性は高い。スカリエツィは生命操作技術に優れている……彼の妹を治療することも可能かもしれない。それを対価に取引を持ちかけた可能性は、高い。

考えれば考えるほど最悪な可能性ばかりが頭に浮かんでくる。

「嫌やなあ」

彼は魔法を身体強化しか使えない、魔導師とも呼べないような魔導師。だが彼は質量兵器と身体強化だけで戦果を上げ続け、たった五年で准尉まで上り詰めた。その過程で殺害した人間は百をゆうに超えている。

短い期間だが一緒に仕事をしていた陸士曰く、「目をつけられたら死ぬ」「狙われた目標は一週間以内に死ぬ。ストライカー級でも多分殺られる」「あくまで噂だが、上からの命令で管理局員も始末しているらしい」

最初に聞いた時には評価に尾鰭がついただけで、そこまで凄くはないだろうと思っていた。

甘かった、と言わざるを得ない。

彼が隊を去ってから改めて任務経歴書を見れば、陸戦Eの範疇に収

まり切らないデタラメなものであることを知る。

単独で完全武装したテロリストの拠点に侵入し、爆薬を設置して帰還後に爆破したり。1 km を越える遠距離からの狙撃でAAランクの魔導師を、戦闘状態に入らせずに殺害したり。ある時は道端に爆弾をしかけ、無関係な人間を巻き込んで凶悪な指名手配犯を殺害したり。最も最近の事件で、次元世界に広く知られている事だが……戦闘機人を独力で足止め。負傷させ、部下の狙撃で完全に無力化した。

本来ならエースと呼ばれてもおかしくない功績の数々。なのはそのように表に出ず、陸以外の人間がその存在を知らなかったのは、その任務のほとんどを目標の殺害により完遂しているから。故に質量兵器の存在を認めない空や海が必死になって広報を妨害していた。広報しない代償として、彼は異例の速度で出世できたのだろう。

「……怖いなあ」

私たちは確かに強力な戦力だ。しかし、戦わなければただの人間。彼はそれを知っている。戦っては絶対に勝てないことを知っている。だから、正面からの戦いことは避けるはず。

彼がやるとすれば、無防備な所で……例えば買い物の最中に心臓に大口径の鉛玉を撃ち込むとか。街を歩いている最中に、真横に停まっていた車を爆発させたりとか。マトモな人間ならやらないことだが、彼ならやりかねない。いや、間違いなくやる。なぜなら、彼はマトモじゃないか。

「狂っとる」

そう判断する証拠が私にはある。なぜなら私は彼に撃たれたことがあるから。マトモな人間ならまず銃を下げるであろう状況で、彼はトリガーを引き、私を撃った。そしてシグナムに首を切られ、死にかけた。その後態度を一切変えることなく和解した。その時にも、彼は正気ではないことを感覚で理解していた。

だが、その理解が少しばかり浅かったことも今わかった。その時には少しずれている程度の感覚だったが、それすらもフェイク。本質はもつと違う。彼が殺した家族の仇……その中で一人として体の原型をとどめて居るものはいなかった。仇とはいえ、あんな事を平気で

きる残虐性。一応は佐官クラスまで上り詰めた実力者をあつさりとは皆殺しにした実力。あれが彼の本当の人格と実力なのだろう。

それを知った私は、彼を身内に引き入れる理由を変えた。同情から、危険因子の管理へと。だがそれ以前にした事がまずかったのか、失敗した。彼が隊を離れてからも色仕掛けというやや強引な手段を用いて引き込もうとしたが、それも失敗。

最後の手段として聖王教会に封じ込めることで、彼の動きを拘束しようとした。

しかし、それも失敗。もう打つ手はない。後は彼が誰かに……凶悪な犯罪者に協力しないこと。それだけを祈るしかできない。

「はやて、何一人でブツブツ言ってるんだ？　なんか悩みでもあんのか？」

「大丈夫、心配せんといて」

まだ不安の域を出ないが、それが確信に変わるのは手遅れになった時。

つまりは、誰かが死んだ時。

確信に至ってからでは全てが遅い。今からでも彼を指名手配して広域捜索すれば……いや、無理だ。彼はこれといって犯罪を犯していない。一般人なら罪状を捏造することができても、彼は元陸のエリート。陸士の認識はエースのそれ。レジアス中将の求める理想の部隊の創設者。罪状を捏造して指名手配するのは陸の顔に泥を塗るどころか、ガソリンをかけて火をつけるようなものだ。

ただでさえ悪い陸との関係がさらに悪化し、完全に敵に回るだろう。

それだけはやってはならない。絶対に。だから、彼が良心に従うか、猟犬に食い殺されるかのどちらかを祈る以外にない。

第37話

目の前に召喚される複数のガジェット。その数十。内Ⅱ型が二体、Ⅰ型改が八体。

二型に装備されている機関砲が火を吹いたので、蛇を大剣の形で出し、斜めに構えて弾きつつジグザグに前進。防御魔法はおろかバリアジャケットすらないこの体で弾丸を受ければミンチ化は免れないため、真つ直ぐ正面からは突つ込まない。

周囲に回り込んだガジェットから発射されるレーザーが肉体に穴を開けるが、小さい

ので一瞬で再生。肉体の機能低下はない。

レーザーと銃弾の弾幕を掻い潜りつつ、機関砲の死角となる二型の真下へと滑りこむ

。ガジェットは絶対に誤射をしないように設定されているので、その穴を突いた回避方法。

直後に四方から鋼鉄製のベルトが襲いかかるが、その内一つを一刀で叩き斬り、その方向へと転がって回避。自分が先ほど居た所にベルトが突き立っており、回避していなければ圧殺されていた、と心の中でつぶやく。

ベルトが動き出す前に二型の上に飛び乗り、力任せに大剣を叩きつけて表面装甲を切り裂き、裂けて内部が覗いているところへ粘着榴弾を叩きつけて、ベルトに襲い掛かられる前に飛び降り起爆。亀裂部分から侵入した爆風で内部を破壊されたガジェットは隣に居た二型と数機のⅠ型を巻き込んで自爆し、その爆風にあえて吹き飛ばされ距離を稼ぐ。

が、吹き飛んだ装甲板が足に突き刺さりその場から動けなくなる。

仕方なくその場でアサルトライフルで弾幕を張って対応する。弾はⅠ型相手なら一発当たれば装甲を貫通し、内部の基盤を傷つけ制御を失わせることが可能な威力だ。しかし、なかなか当たらない。その間にもレーザーは再生を上回るスピードで体を焼いている。たまに飛んでくるミサイルをセカンダリのハンドショットガンを撃ちこん

で直撃するより速く撃ち落とすが、炸裂した火炎と破片がまた体を焼き、武器を破壊する。

レーザーで体に穴を穿たれても、穴そのものが小さいのですぐに塞がる。だが、その数が多すぎる。完全に包囲された状態で武器もなく、蛇を絡ませて一機落とす……が、背後からミサイルの直撃をもらい視界が真っ暗になり、感覚が現実に取り戻される。

「ご苦労様、どうかね、感想は」

バイザーを外すと、目の前にスカリエツティの顔があった。気持ち悪いので顔を押して無理やり離れたが、かなり息が荒くて気持ち悪い。生理的嫌悪という奴だ。

ちなみに先ほど外したバイザーだが、視覚を通して脳をジャック。肉体を設定された状況下にあると誤認させる。そして肉体に送られる信号を、バイザーとコードで繋がっている機械が解析し、バーチャル空間内の行動に反映させる。そして肉体へ送られる信号は生命維持機能以外すべてシャットアウトする。小型だが、とんでもない性能のシミュレータだ。

なんでも、これを片手暇で作ったというのだから恐ろしい。頭がおかしいとも言え換えられる。いや、おかしくなければ犯罪者などになりはしないか。

「誤射をしない設定が邪魔になってるな。それがあつたおかげでⅡ型を撃破できてしまった。それさえなければⅡ型を撃破できずに終わってた」

「そうかね？ 味方を破壊する兵器など欠陥品ではないか」

「そうとも限らない。ガジェットなんて、一度に何十機と投入するのが普通だろう。一機や二機の犠牲でエースクラスを殺せるならお釣りが来る」

「では対エース以上限定でフレンドリー・ファイア抑止システムを解除するよう設定しておこう。他には？」

「Ⅰ型の耐久性が少し気になった。装甲をもう少し強化できないか？」

「コストが増えるのはあまり良くないね。それなら逆に一機あたりの性能を落としてもコストを減らして、その分多く生産すればどうだろうか。どうせ落とされる時には簡単に落とされるのだしね」

「そういう考え方もあるか。AMFで並の魔法は無力化されるし、いいんじゃないか？ あとは……被害を少なくするなら低ランクの魔導師を集中して狙わせるといいかもしれない。落とせない相手にいつまでも粘るより、落とせる相手から落として行くほうが効率がいい。それに、弱い奴の援護に回らざるを得なくなるから攻撃の手も緩む。結果的に損害も少なくなると思う」

「そうか。ではAIに新たなチップを組み込んで、生産ラインにも少し調整を入れておこう。ありがとう、ゆっくり休んでくれ」

スカリエツティが自動ドアからスキップしながら出て行く。恐ろしくテンションが高いのは放っておき、私がラボに戻ってからはずっと使用してガジエツトと戦闘。問題点をどんどん上げていって、それをスカリエツティが改良していく。最初のシミュレーションでは全機被弾すること無く撃破できたが、二度目では被弾が増え。三度目では全滅させる前にこちらに死亡判定が出た。そして、今のは四度目。次はおそらくもつと強化されて、一機撃破するのも困難になるだろう。

「おつかれー」

スカリエツティが出て行った直後、セインが入れ替わるようにして水と濡れたタオルを持ってきてくれた。

「ありがとう」

水を受け取って飲み干すと、吐き気と動悸がわずかに収まる。あのシミュレーターは脳と体に結構な負荷を与えるらしく、終わった後は動悸と吐き気と目眩が同時に襲ってくる。じつとしていればすぐに収まるものだが、やはり心地よいものではない。

「ひどい汗だね。大丈夫？」

「大丈夫、死にはしない」

タオルで顔を拭きながら答える。本当は全身汗だらけで、今すぐ全身を拭きたいくらいなのだが、婦女子の前で服を脱ぐわけにもいかな

いので、顔と首だけを拭く。拭いたタオルをバスケットに放り込んだ位で気分の悪さも薄れてきた。自分の足で立って歩いて、部屋から出る。目的地はシャワールームだ。後ろをセインがついてくる。

「今の時間なら、シャワーは誰も使っていないよな？」

「たぶんねー」

随分と曖昧だ。まあ、入る前に確認すればいい。角を曲がると、誰かとぶつかりそうになったので足を止める。見上げると、図体のでかい初老の男性が居た。

ゼスト・グランガイツ。戦闘機人が過去撃破したという、陸戦Sランクの魔導師。一度は死んだらしいが、今は破壊された心臓の代わりにレリックを埋め込まれて動いているらしい。境遇は違えどロストロギアに生かされている者同士、気はそれなりに合う。今度一緒に出撃することになるらしいが。

「どうした？ 随分と顔色が悪いな」

「シミュレータを使った。汗まみれで気持ち悪いからシャワーを浴びてくる」

「……ああ、アレか。アレを使ったならそうなくても仕方ない。ゆっくり休め」

元々は戦闘機人用にと開発されたもの。それを脳の処理能力で劣る普通の人間が使える、負荷が大きすぎて廃人になってもおかしくないと奴は言っていた。だがその質はメイドインスカリエッティなどで非常に高く、ガジェットの使用能力向上だけでなく私自身の経験を積むのにも役に立っている。まあ、私の戦闘力が上昇したとしても、それはほんの雀の涙程度なのだが。それでも、無いよりはマシと思っただけで使っている。

「言われなくとも。そうする」

とはいえ、無茶をして廃人になつては元も子もないのでそこまで熱心に取り組む気もない。スカリエッティからも無茶はするなど言われているし、限界を超える前に大人しく休む。

ゼストと別れ、まっすぐシャワールームへ進む。ノックをしても返事が無かったので誰も居ないと思い、ドアを開ける。脱衣所に入ると

籠の中に放り込まれた戦闘服が目に入った。奥からはシャワーの音が聞こえてくるので、誰か入っているのだろう。

「仕方ないな」

ドアを閉め、脱衣所を後にする。このラボでは女性の数が多い。常駐するナンバーズが十一機……訂正、十一人。あとはルーテシアを入れて十二人。稀に帰ってくるドゥーエを入れれば十三人。対して男はスカリエツティ、ゼスト、そして私の三人。男女合わせれば十六人。一人ずつ入っているのは時間がかかって仕方ないので一度に多く入れるようにシャワールームも脱衣所も広くなっている。

よって奥でシャワーを浴びていたらノック音は聞こえないし、ノックする側も脱衣所が広いため、少人数あるいは一人でシャワーを浴びていた場合は音が小さく、よほど意識しなければ聞こえない。そのため、うっかり遭遇してしまうという事故が稀にあるらしい。それでスカリエツティはよく殴られる、とセインが言っていた。男女別の浴場を作ればいいのと思うのだが……スペースの問題でできないのだろうか。

とりあえず自分に割り当てられた部屋……倉庫を片付けてパイプで組み立てたベッドを置いただけの部屋に戻り、服を脱いでタオルで体を拭く。シャワーはまた後で浴びればいい。

「入るぞ」

返事も待たずにチンクが入ってきた。

「あ、すまない」

「謝ることはないが、せめて返事を待ってからしろ」

裸を見られたからといって別に気にならないが、返事を待たずに入ってくるのはどうかと思う。そこらは常識として教育されていないのか、あるいは他の姉妹の部屋に入ると同じ感覚で入ってきたのか。

しかし。謝った上でジツと観察するようにしてこちらを見るのはどうしたものか。なんとなく気味が悪いのでさっさときれいな服を着る。

「ああ、すまないな……それにしてもいい体だ。ドクターと違って、よ

く鍛えてる」

さつき見てたのは、私の体が珍しかったからか。確かに珍しいだろう、傷だらけの筋肉ダルマ+全身を覆う蛇の刺青なんて、そうそう見るものじゃない。

「対魔導師用に使える質量兵器はほとんどデバイスより重いからな。振り回すには筋肉がいる」

対物ライフルを持ったまま山の中を走り回ったり、廃ビルの階段がないから仕方なく外壁をロッククライミングしたり。フル装備で遠泳したり。そんなことばかりしていれば嫌でも筋肉がつく。

しかし、何故だろう。『ドクターと違って』という言葉が気になる……確かにあいつは見てわかるほど筋肉がないが、なぜそれをわざわざ比べるのだろうか。

まあいいか。

「それで。どうしたんだ」

「シャワールームが空いたぞ。すまないな、さつきは私が入ってたせいで入れなかったのだろうか？」

さつき入ってたのはコイツだったらしい。

「別に入ってきてても、私は気にしなかったがな」

「そういうわけにもいかない。問題があるだろう」

「たかが裸を見られたくらいでどうだと言うのだ。それとも貴様はこんな貧相な体に欲情するのか？」

「しない」

そもそも行為への嫌悪感があるし、そのせいで性欲は無いに等しい。だが、彼女の体に欲情する人間は結構いるだろう。もう少し警戒心を……持つ必要がないか。暴漢に襲われても、逆に襲った方を心配しなければならぬ位だ。

「一瞬で断言されるのも少し傷つくが……なら問題ないだろう」

教育係の常識を疑う。いや、こいつらは戦闘機人。生まれた時から常識外の存在だ。そいつらに常識を問う私が間違っているのだろうか。

「大有りだ。お前は誰に教育してもらったんだ？」

「稼働歴は長いからな。私の教育係はウーノお姉様とドクターだ」

「……そうか」

ウーノともいずれ話をしよう。だがその前にスカリエツティ……何よりも速く奴と話をしなければならぬようだ。奴の頭がおかしいことはわかっていた。それについてとやかく言うつもりはなかったが、気が変わった。私の大事な妹は治療のため仕方なく奴に預けているが、それも奴への信用あつてのこと。もし奴に何かへんなことを、あのクソどもがやったことと同じ事をされていたら、奴を殺さないまでも手足の三、四本叩き折って下半身の一物を切り落としてやらなければならぬ。

「お前は良くても、他のナンバーズはそうじゃないかもしれないだろう。誰かが使っていたら大人しく待つき。わざわざ教えに来てくれてありがとう」

「それもそうだな。もし入っているのが私一人だけなら言おう。それと、どういたしまして」

部屋を出て行ったチンクの後を追い、薄暗い廊下に出る。チンクは自分の部屋へ戻っていったようだが、私が目指すはスカリエツティの研究室。あいつが素直に話すとは思えないが、吐かないならそれでもいい。強引に吐かせるだけだ。

拷問は私の得意分野だ。指の一本や二本切り落とした所で、やつなら再生させるだろうから問題あるまい。

第38話 決断

スカリエツティのラボの扉を開く。それぞれがどういう働きをしているのか、よくわからない機械の群れと、いくつか並んだ『失敗作』の生体ポッド。そして、私の妹の入った生体ポッド……その前に、スカリエツティが居た。いつもは隣で作業しているウーノは見当たらない。一緒に居ればついでに話をしようかとも思ったが、それはまた後でもいいだろう。

「おや、どうしたんだい？ 可愛い妹の見舞いかな？ それにしては怖い顔をしているね」

「少し話がある。時間は取らせない」

「なんだい？ 作業しながらでいいなら聞かせてもらおうよ」

「そのまま構わない。話というのは、二つだ。まず一つ、お前はナンバーズに一体どういう教育をしている」

「どういふ、と言われてもね。一般教養と社会常識、あとは任務を果たす上で必要な知識。戦闘技術。倫理観は邪魔になるから、あまり力を入れていないよ。チンクの事ならそうだね。彼女はああ見えて君が生まれた時位から稼働している。しかし彼女は戦闘機人、その存在は許されざるものだ。故に外部との接触がほとんどなく、触れ合うのは姉妹か私、あるいはゼスト・グランガイツだけ。ルーテシア以外は皆私の作品で、彼女からすれば皆家族だ。家族に欲情する者は居ないだろう？ そういうことさ」

あのやりとりを見ていたのか。まあそうか、一応保険をかけてあるといっても私は元管理局員。裏切る可能性はゼロではない。ゼロでないなら警戒するのは当然。監視や盗聴など、むしろあって当然なのか。

「結局何が言いたいんだ」

「君を家族として見ているから安心していいだけ、ということだ。外部の人間に対してはおそらく普通の反応をするだろう。回答には満足してもらえたかな？」

家族、と聞いて思わず眉をしかめる。私は他人を受け入れられない

し、他人に家族と思われたくもない。

「満足だ。あと、私の家族は一人だけだ。貴様らを家族と思うことは絶対がない」

「本人には言わないでくれよ。彼女は案外デリケートなんだ、否定されたら傷つくからね。それでもう一つの質問は何かな」

妹に妙な事をしていないか、と尋問しようかと思っただが。どうやらその心配はなさそうだ。

「エリーの治療状況はどうなってる」

私の大事な妹。ただ一人の家族。仲間を裏切る事を代償に救済を約束させるほどに、大事な妹。治療がほんの少しでも進歩していれば、それ以上に嬉しい事はない。

「あまり芳しくない。脳から事件の記憶を消しても肉体との矛盾が発生する。記憶を消すのではなく封印し、アクセスを禁じる方法も取ってみたが、どうやってもプロテクトを破られてしまう。やはり人間の脳とは実に素晴らしいスペックを誇っているね……おっと、話が逸れた。現状、マトモな手段で彼女を治す方法は見つからない」

期待はずれだが、予想通り。マトモな、という前提条件がつけば治すことはできない。だがそうでなければ治すことは可能だ、と言いたいのだろうか。ただあまり褒められた方法ではないだろう。確実に法に触れる。人としてのあり方も問われる。

今更それがどうだと言うのだが。

「続けてくれ」

「君も管理局員だったなら、P・T事件のことは知っているね？」

「ああ」

有名な話だ。質量兵器以外ではほとんど。いや全く注目されていなかった辺境の管理外世界で起きた事件。高町なのは、フェイト・T・ハラオウンという非常に優秀な魔導師二名を管理局が発掘するきっかけとなった事件。詳細はともかく、そういう事件があったということを知らない人間は管理局には居ない。

確か事件の内容は、願いを叶えるというロストログア、ジュエルシードを輸送中の船団がプレシア・テスタロッサに攻撃され、積荷の

ジュエルシードが地球のある都市にばら撒かれた。それを回収したのが高町なのはとフェイト・T・ハラオウン。当時の名だとフェイト・テストロッサか。事件の最中のことは知らないが、結末はジュエルシードの制御に失敗したプレシア・テストロッサが虚数空間に落ちて終了、だったはず。

「プレシア・テストロッサの望みは、死んだ娘、アリシア・テストロッサの蘇生だった」

「それは初耳だな。それで、それと私の妹と何の関係が？」

「そこでヒントだ。フェイト・テストロッサが生まれるよりもずっと前に、プレシアは未亡人になっていた」

私の妹の治療手段と関係があるのなら、孤独に耐え切れずそこの男に抱いてもらった。なんてつまらない解ではないだろう。となれば、フェイト・テストロッサは普通の生まれではない。考えられるのは、娘をジュエルシードを用いない手段で蘇生させようとした結果できたモノ。

「クローンか」

「正解。彼女は娘の細胞からクローンを作り出し、自分の娘の記憶をインストールした。まあ、彼女は満足していなかったんだろうね。だから名前もアリシアではなく、愛情の欠片もないクローンを生み出すためのプロジェクト名と同じものになった」

通称プロジェクトF。汚れ仕事をやっていた時にその存在を知ったが。なるほど、フェイトという名前は偶然ではなかったらしい。そしてたつた今、こいつがいかに狂っているかを再確認した。

「そうだな」

もし結果に満足できていたのなら、フェイト・テストロッサはアリシア・テストロッサであつたはず。そしてP・T事件も起きなかつただろう。

「ちなみにエリオ・モンディアルもプロジェクトFの産物だ。私は直接関与していないがね」

「そんな事はどうでもいい。それよりも、エリーも同じようにするのか？ 劣化コピーを作つて、それに愛情を抱けずにこの手で処分しろ

「というのか？」

冗談ではない。なぜ自分が最も大切にしているものを、自分の手で壊さなければならぬのか。

「まさか。私の作るのはクローンだがあくまでも中身の無い器だ。その器に事件の記憶を消したオリジナルの脳を移植する。そうすれば肉体との矛盾も解消されて、めでたく完治だ。人格も行動も、細かな仕草も、それを司る脳がオリジナルのものだから、オリジナルと全く変わりない完璧なものとなる。どうだね？」

「……」

確かに私はエリーに治ってほしい。治って、人並みの人生を歩み、幸せになつてほしい。だが、スカリエツティの提示した方法で、本当に治つたと言えるのか？ 脳を抜かれて抜け殻となつたエリーは？ それだつてエリーだ。だが脳を移植された治つたエリーもエリーだ。移植されたエリーは確かに、体がクローンだということさえ隠せば幸せに生きられるだろう。だが抜け殻は処分されるしかない。意志が無くとも、抜け殻でもそれはエリーだ。エリー『だったもの』とは見れない。

ポッドの中に浮かぶ妹を見る。だが、何も答えてはくれない。思考が停止する。

「君は今まで色んな物を切り捨ててきただろう。妹の肉体を切り捨てるだけで、君の望みが叶うんだ」

まるで悪魔の誘惑。耳を塞ぐとしても塞げない。聞きたくないのに、聞いてしまう。脳の奥まで染みこむ、甘美な誘惑。

「あ……あ」

頼む。

そう一言声に出せばいいだけなのに。その一言で私の家族は救われるのに、喉下で言葉がつかえて出てこない。私に残つた最後の人らしさが、言葉に出すことを拒否している。

一度言葉を飲み込んで、私はどうしたいのかを考える。私は妹を救いたい、そう思っていたはずだ。どのような形であれ、救われるのならそれでいい。それでいいじゃないか。何を今更迷うことがある。

倫理観など捨ててしまえばいい。それに、残った体はもう壊れているのだからいいじゃないか。事故にあつた車を乗り換えるように、新品の体にすればいい。

そう、それでいいんだ。

「……たのむ」

「確かに、承つたよ。そうそう、世間一般は私のことを狂っていると言うが。その私が保証する。君も私と同じく、狂ってるよ」

これでいい。狂っているとわれようとも構わない。エリーの幸せこそが私の幸せなのだから。

「ああ、そうだ。ついでに一つ頼んでいいかい？」

「ツ、なんだ」

「クラナガンで輸送していたレリックと、もう一つ。私の目的を達成する上で重要なモノが困つたことに事故にあつてしまつてね。これから娘たちに回収に向かわせるが、君も一緒に向かつてもらいたい」

「わかつた」

レリックともう一つ、とは何だろう。まあ私には関係ないことか。

「ウェンデイのライディングボードのスペアがある。それで現場まで移動して、ルーテシアの攻撃に巻き込まれない程度に離れた位置から見張りをしてくれ。もし捕まったら、その場で最適な判断を。殺傷も許可するよ」

「わかつてる。やることはやるさ」

「ああ。しっかり殺つてくれたまえ。君の妹のためにもね」

……嫌なやつだ。本当に。

第39話 挨拶代わり

スカリエツティから支給されたライディングボードとは、なかなか便利なものだ。市街地で徒歩で武器を背負いながら移動していればかなり目立つ上に、狙撃地点の確保まで時間がかかってしまう。だがこれは空中を高速で移動でき、さらに音も出ない。空中戦力が出てこない任務であればこれほど役に立つものはないだろう。

さて、今回の私の仕事は地下に潜ったルーテシア及びユニゾンデバイスアギトの撤退支援。直接敵との交戦は避け、もしルーテシアが捕獲されそうになった場合は狙撃で気を引きつつセイインに回収させる。事前に相談して作戦を練った結果の配置だ。

……ちなみにルーテシアが地下に潜ってからそろそろ一時間ほど経つのだが、先ほど敵と交戦するという連絡が入ってから何も返事がない。大丈夫だろうか。発信機の反応が動いているから、生きているとは思うのだが。

『こちらルーテシア。レリックの確保に失敗……追撃を振り切れそうにない。助けて』

「地下では援護のしようがない。地上に出ろ」

『わかった』

通信が切れた直後に遠方の道路が爆発し、大量の土砂を巻き上げた。おそらく地下から地面をぶち破って地上に出るのだろう。双眼鏡で覗いてみると、土煙の中から紫色の影が飛び出してきた。双眼鏡を置き、持ち歩くにはあまりに大きいサイズのライフルを構えてスコープを覗き込む。

「そちらの位置を目視した。派手にやってくれたな、敵が見えない。サーマルスコープなんて持ってきてないぞ」

あつたとしても、付け替える時間がないし、調整する時間もないが。『ああでもないしないと捕まるところだった』

「捕まってくれたほうが、敵が動かなくて狙いやすいんだが」

『動いてる相手にも当ててよ。ヘタクソ』

無茶を言う。ここからルーテシアの居る位置までは一キロ以上離

れている。数百メートル程度でも高速で動く相手に当てるなんて無茶が過ぎる。少なくとも私には難しい。

「当てられないことはないが。複雑な動きをしているのは無理だ。それより追撃だ、回避しろ」

『もつと速く言つてよ役立たず』

言われてから飛んできた鉄球を回避するのは、ガリユーのおかげかあるいは本人の能力か。まあどっちでも構わない。敵に回らなければそれでいいのだし。

土煙を突破して出てきたのは、三名。一人は八神ヴィータで、あと二人はウインググロードを伸ばしてその上を走っている。片方はスバル・ナカジマ……もう片方は、誰だかわからない。

少なくともヴィータ以上ということはないだろう。ウインググロードを使うということは空戦は限定的にしかできないということだし、その上しか走らないのだから危険度も完全空戦可能なヴィータに比べれば低い。

よつて、再優先排除目標はヴィータに決定。銃口を向け、スコープ内に捉えズームする。しかし、ルーテシアが反撃しているせいでそれを回避するために動きまわり、とてもではないが撃てない。

だが狙い所はある。六課に居た間、ただひたすら自分の部隊の訓練をしていたわけではない。他のところと連携するために行動のパターンを把握し、隙が生まれる瞬間もしつかりと観察してある。だからわかる。撃つべき瞬間はもうすぐ訪れる。

『どうして撃たないの。落とされる』

「動きが不規則で狙いが付けられないのと、射線が通らない。もう少し高度を上げろ」

二脚で安定している銃身は、呼吸と心臓の鼓動に合わせて少しずつブレる。息を一度大きく吸込み、止める。呼吸に合わせて揺れていた照準が停止し、レイトクルの中心に高度を上げてきたルーテシアを捉え、完全に停止させる。意識を集中する。撃てるのは一瞬。速ければ弾丸はルーテシアを撃ち殺し、遅ければ目標をハズレるだけでなくこちらの位置を相手に晒す事となる。

ある種の賭けだが、こういう状況には慣れている。

『やっぱり役立たず……っ、追いつかれた!』

スコープの中でヴィータがハンマーを振りかぶるが、その動きはとも遅い。ナメクジが這うよりも遅く見える。だが、まだ撃たない。

ハンマーがルーテシアをかばうガリユーに向け振り下ろされたその瞬間、トリガーを引く。衝撃が肩を貫き、発砲音が耳を鼓膜を殴り、硝煙が鼻を突く。直後にルーテシアが地面に叩き落とされ、先ほどまでルーテシアが居たその空間にヴィータが乗る。弾丸は一直線に進み、射線上に居た目標を貫通し、空中に赤い花を咲かせる。

「……ミス」

やはり空中で動いている敵を狙うのは無理があつたようだ。腕一本を根本から引きちぎつただけで致命傷ではない。第二射を撃とうとしたが、落ちたのが丁度街路樹の陰とあつては見えない。他のやつを狙おうかと思つたが、丁度どれもこちらからは見えない位置に居る。

既にこの場所はバレてると考えて、相手側に狙撃手が居ないとも限らない。戦う上で最も厄介な奴の戦闘能力を奪えたのだし、最高とまではいかなくとも悪くはない戦果だ。ここは欲を出さず、すみやかに撤退するべきだ。

「掠り当たり。致命傷ではないが、戦闘能力は奪つた。第二射は撃てない。セイン、ルーテシアを回収して撤退だ」

『はいはい』

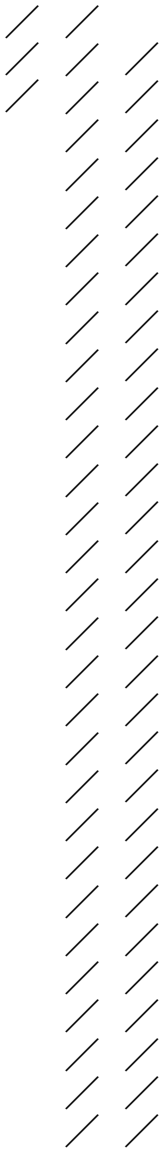
『痛い』

ルーテシアが文句を言ってくるが、文句を言えるということは軽傷ということだ。問題ない……そういえば、ほぼ死に体なのに文句を言っていた二号。あいつは今どうしているのだろう。見舞いに行くわけにもいかないし、スカリエツティに調べさせるか。

「死んでないだけいいと思え」

二脚を畳み、安全装置をかけて銃を背負う。それから藁藁を拾ってカバンに入れる。転落防止用の柵に立てかけていたボードを地面に寝かせ、その上に伏せ浮き上がらせる。ボードの頭を郊外に向け、使

い捨てのロケットブースターに点火。一気にその場を離脱する。



本当に、一瞬だった。何が起きたのかまだよくわからない。敵を叩き落としたと思っただけの衝撃がして。いつの間にか地面に向かって落ちてて。わけがわからない。とりあえず、状況を把握するために地面に手をつけて立ち上がるうとするけど……つこうとした手の感覚がなく、そのまま地面に倒れる。気づけばグラーフアイゼンを握っている感覚もない。

「あれ？」

攻撃する時以外、いつだってアイゼンを手放すことなんて無かった。なのはの砲撃を受けた時だって手放さなかった。なのに、どうしてアイゼンを握ってる感覚がないのか。

恐る恐る腕を見ると、そこには……肩から吹き出す赤色以外何もなかった。アイゼンも、それを握る腕さえも。

「っ！」

「ヴィータちゃん！」

かなりショックを受けたが、その間にもリインがバインドで止血してくれた。傷口が大きすぎて止血しきるのは無理だけど、それでもないよりはずっといい……その証拠に、出血は大分落ち着いた。頭も、少しは冷静になった。

よし、何をされたか把握しないと。私はさつき敵を叩き落として、その後に『ナニカサレテ』こうなった。たたき落とした奴が何かをしたようには見えなかったから、きつと視界外からの攻撃。落とされた直後に雷鳴が聞こえたから、かなり遠距離からの攻撃。

音が聞こえた方向へ視線を向けると、小さな光が遠くへ飛んで行くのが見えた。それが意味するのは……

「見逃された？」

そうわかった途端に、安堵し、さらに屈辱からくる怒りがこみ上げ

てくる。ベルカの騎士である自分が、何もできずに腕を奪われて。さらには見逃されるなんて、尋常でなく腹が立つ。見逃された事に安心している自分にも腹が立つ。

今までこんな屈辱を受けたことはない。何も負けたのが今回で始めてではない。だが、何もできずに負けて、トドメをさせる状況なのに捕まりもせず、かといってトドメも刺されないなんてのは今回が始めてだ。

「畜生……畜生!!」

屈辱に歯を食いしばり、残っている左手で地面を殴る。コンクリートの地面にヒビが入り、殴った手も痛い。失った右腕が尋常でなく痛むが、そんなのは関係ない。騎士としての誇りを、プライドを傷つけられた事のほうはずっと痛い。

「三尉！ 大丈夫ですか!？」

「そう見えるか!？」

そう怒鳴った所で、我にかえる。テイアナは自分を心配してくれているのに、どうして怒鳴ってしまったのか……どれもこれも、アタシを撃った奴のせいだ。てのは、言い訳でしかない。それとアタシ自身、視界外からの攻撃を全く警戒してなかったのもある。

「……すまねえ。アタシのミスなのに怒っちまって」

顔はわからなかったが、やり口は覚えた。もし次に出てきたら、絶対に叩き潰してやる。それこそ刺し違えてでも。そう心に誓って、意識を落とす。

第40話

グイータを狙撃後、特に追撃を受けることもなく郊外でセインに回収してもらって、別の地域から撤退したナンバーズと合流。合流後クアットロから今回のやり方は相手に砲撃、あるいは高速戦が可能な魔導師が居なかったから上手くいったのだと注意された。確かにその通りだが、そんな事は最初から理解していたし、クアットロの方は何の戦果もなかったそうなので単なる負け惜しみだと思う。

そのようにやや衝突はあったものの、何事も無く拠点に帰還し、これから作戦の完了報告をするところ。報告といってもボードにはカメラとマイクがついていたので、その映像を見たスカリエツティから話を聞くだけなのだが。

「やあ、お帰り。主目標を両方取り逃したのは少し残念だったね」

「回収役はルーテシアとセインだ。私に言うべきことじゃない」

「セインはともかく、ルーテシアは子供だろう？ 子供を前線に出して、さらに任務の結果について文句を直接言うのには少し抵抗があつてね」

人の感情の機微に疎い私だが、今の言葉が嘘だということにはわかる。ナンバーズは自分の娘だと言い切っておきながら前線に放り出し。その娘を傷つけた私に対し何も言わず。そんな奴が他人の子供を前線に放り出すことに負い目を感じるわけがない。そもそもそんな倫理観のある人間なら、戦闘機人なんて作るはずがない。

「つまらない嘘をつくな」

「受けると思っただがね。まあいいさ、また別のネタを考えておこう。それよりも君の戦果だけでも、グイータだったかな？ 確か。を戦線離脱させるなんてなかなかやるじゃないか。ああ、やはり君をスカウトした私の眼に狂いはなかったようだ」

「頭は狂ってるがな」

「言ってくれるじゃないか。まあその通りだが……君もどちらかと言ったら私と同じく、狂ってる部類に入るんじゃないか？」

「否定しない」

狂人とは、精神に異常をきたしている者の事だ。何を持って正常と定義するかは知らないが、少なくとも自分が異常だということは自覚している。倫理観など復讐を決意してから肥溜めに投げ捨てたし、常識もスカリエツティに肩入れすると決めた時点で欠片も無いと言ってもいいだろう。当然こいつにも倫理観や常識などありはしない。違うのは行動の根本にあるのが家族のためか、自分の欲求のためか、それ位だろう。

「同じ狂人同士、仲良くしようじゃないか」

「今のままでいい」

必要以上に親しくなるつもりはない。私の望むものを提供してもらい、私は相手の望む物を返す。ギブアンドテイクの関係が一番いい。

「ところで、聞きたいことがある」

「別の手段の事かい？」

「いいや。私の元部下……パトリック・ジグの現状についてだ。少し調べてほしい」

二号と三号に関しては、僅かだが責任を感じている。完全に個人的な事情で起こした事件に巻き込んで、その結果三号は死亡。二号は普通の生活を送る事も困難な怪我を負った。他人の起こした事件なら知ったことかと切り捨てるのだが、他でもない自分の起こした事だ。許されなくても別に構わないから、一応事情を話して謝罪はしておきたい……事情を他人に話すようなら当然口封じをするが。

「なんだ、そんな事か。彼なら君が度々世話になっていた病院に入院しているよ、レジアスから教えてもらっているよ。右腕が完全に使い物にならなくなって、現在リハビリの最中らしい」

「中将が？ いや待て。お前、レジアス中将と繋がっていたのか？」

管理局のどこかとパイプを持っているのは知っていたが、まさかあの中将とは。犯罪を徹底して嫌い、クラナガンの平和を誰よりも望む。そう自称していたあの中将がまさかこんな重犯罪人と繋がっていたとは驚きだ。

……しかし、スカリエツティを人ではなく道具として考えているな

ら不思議でもないか。道具が多少悪さをするからといって、便利ならば手元に置いておきたいのはわかる。

「そういえば言っていなかったね。面倒だから説明はしないが、私各色々と可憐要望を満たす代わりに、悪事を見逃してもらっている。あちらには、君が私の下に居ることも教えてあるからそれで伝えてきたのだろうね。あと、伝言も一つもらっている。『妹の治療が終わったら管理局に戻って来い。歓迎する』だとさ」

「そうか」

中将も世話焼きなことだ。戻るはずがないとわかっているだろうに、わざわざそんな事を伝えるとは。ひよつとして、管理局の奴らは皆総じて世話好きなのだろうか。どうでもいいか、そんなことは。

「私と違って表沙汰になるような真似はしていないし、捕まることはまずないから見舞いに行ってきたらどうだい？ なんなら治してやってもいい」

「本人に聞いておこう。しかし、随分と気前がいいな。そんなに私に恩を売ってどうするつもりだ。人体実験でもする気か？」

「その通り、タダなわけがないだろう。ロストログアと人体の融合というのは極めて珍しい。レリックウエポンや人造魔導師の性能向上に役立つかもしれない材料が手元にあるのに放置するのはとても惜しい」

「そうか。実験に協力するのはやぶさかじゃないが、死なない程度にしてくれよ。シャワーを浴びたら行ってくる。セインを借りるぞ」

トーレに連れて行ってもらえばすぐだろうが、空を飛んでいけばいくら速くても補足される可能性は高い。それに、さすがに戦力の要をたかが見舞いに駆り出すわけにはいかない。その点セインは移動に特化しているものの、戦闘能力は高くない。よってタクシー代わりに使うにはちようどいい。

「ホテルに連れ込んだりしないようにね。本人の合意があればいいけど」

「誰がするか」

そんなことをするつもりはないし、第一連れ込んだ所でどうしろと

いうのか。腐っても戦闘機人、押し倒す前に殺される。こいつはきつとそれをわかっていて、からかって楽しんでいるのだろう。本当に、私の上司はどいつもこいつも性格が悪い。

第41話 見舞い

「さて……」

二号の病室前に辿り着いたはいいものの。どう声をかければいいのか全くわからない。生きてて良かった、というのは嘘臭いし、かといって死んでいればよかったのにも思っていない。元気にしているか、と聞けば嫌味になるし。謝るには事実を告げる必要があり、それはこちらに引き込んでからでなければリスクが高い……まあいい、入ってから考えよう。二度ほどノックして、返事を待たずに病室に入る。

「あー、誰だ？ た……隊長!？」

「管理局はもうやめたから、隊長とは呼ぶな。あと無理に立たなくてもいいぞ、調子が良くないのはわかってる」

ベッドから慌てて立ち上がろうとしたので、一声かけて制止する。

「あ、ああ。まあ……それで、なんで今更見舞いに?」

「色々ゴタゴタしててな。ようやく身の回りが落ち着いたから見舞いに来た。腕だけじゃなく足まで動かないんだってな。そのことで話がある」

「……軟着陸とはいかなかったしな。たいちよ……うでいいな。面倒だ。隊長みたいに再生能力があればよかったんだけどな。まあ安心してくれ、恨んじやいなから。むしろ感謝してる。非魔導師でも管理局で働いて、悪党をぶちのめして平和に貢献したいって、ガキの頃の夢を叶えてくれたんだしな」

話を聴いていたら長くなりそうなので、返事もせずに要件を伝える。時間はあるが、あまり長居はしたくない。私は今のところ尻尾を掴ませるようなヘマはしていないので、指名手配などは受けていない。だが一応マークはされているはず。管理局員掛かりつけの病院で身分証を提示したのだし、そう遠くない時間に私への訪問者が来る。できればその前に用事を済ませたいのだ。

「また自分の足で歩きたいか?」

「無理無理、医者からも無理って言われたよ。まあ、二足歩行に未練は

あるけど」

「ならこつちを見る。一度しか見せない、しつかり読め」

読唇術。音を出さずに唇だけを動かして言葉を伝える技術。念話や通信のように解析されたり、音に出して話すように盗み聞きされる心配もない。そう言つて、ハンドサインと一緒に教えた技術。たかが病室の監視カメラでは口の動きまでは読めないなので、一番安全な意志の疎通方法だ。

『私はスカリエッツィの仲間だ。奴なら治せる』

唇だけ動かして、そう伝える。

「……マジか？」

驚愕の表情で固まる二号。残念だが、本当だ。

「私は嘘を付くが、これに限つては本当だ。どうする。どちらでも後の自由は保証する」

ただし、他に言わないとい条件付きで。それはスカリエッツィとも相談済みだ。外部に漏らした場合はもちろん、私が責任を取つて始末することになっている。

それは言わなくてもわかるだろう。なにせ私の元部下だ。私の行動の一つ位、予想できないはずがない。

「少しだけ考える時間をくれ……すぐには決められない」

「その内迎えが来る。その時までには答えを出しておけ。じゃあな」

「待つてくれ。無理にとは言わないが頼みがある。隊の奴らに連絡を入れてやつてくれ、心配してるんだ」

「無理だ」

考えるまでもない。こうして病院に来ることもそれなりのリスクがあるのに、どうして敵の本拠地深くに行つてまで元部下に挨拶しなければならぬのか。

病室の扉を開いて廊下に出る。と、これまた厄介な奴に出くわした。

「あ」

「失礼」

話しかけられるより早く横をすり抜けようとするが、腕を掴まれ

た。顔を上げると、そこには満面の笑みを浮かべた八神はやてがいた。

「久しぶりやなあ、ハンク君。偶然に感謝せんと」
「どうも」

最悪だ。今一番会いたくないやつに出くわしてしまった。一応礼儀として挨拶はするが、可能なら今すぐこの手を振り払って逃げ出したい。

「教会から抜け出したって聞いて心配したんやで。ずっと探しても見つからんかったし、どこに隠れとったん？」

「どこだろうな」

「後ろめたい事が無いなら教えてくれてもええやろ」

随分と引つかかる言い方だ。天然を装っておいて、実は私がどういう状況なのかを探ろうとしている。

丁度いい、ボロを出さない程度にこちらも探り返してやろう。スカリエッティとの繋がりはず知られていないが、それでも疑いの一つは持っているはず。どこまで知られているのか、私も気になるしな。

「知りたいなら犯罪者として拘束して強引に吐かせたらどうだ？」

挑発。これの返答で、一体どこまで知られているのか。どこまで確信を持っているのかを知る。

「いくら私でも、好きな人を犯罪者扱いはしようないわ。もしそうなら、それ相応の対応はとるけどな」

随分と白々しい。腹の中でどう思っているのかが丸見えだ。だが、どこまで確信を得られているのかはまだ微妙にわからない。しかしこれ以上深く探れば相手も同じだけ探ってくる。今いるのがギリギリのライン。もう少し探りたいところだが、どうしようか。相手が踏み込んでくるならそのまま探り。踏み込まないなら下がる。それでいいこう。

「それは良かった、管理局にいた間はかなり犯罪ストレスの所をくぐってたからな。それで罪に問われたら言い逃れのしようがない。あと恋人が欲しいなら他にいい奴を探せ」

「傷つくわあ、私そんなに魅力ないん？」

「前に言ったらろう、私はお前の事が嫌いだと。ところで私の元部下は元気にやつてるか？」

「ああ。それなら、地上本部直属に戻ったで。自分の意志でそう希望した。今は、治安維持隊に合併されとる」

「そうか。なら良かった」

「ところで。私からも質問なんやけど」

腕を振り払おうとした途端に、急に握力が強くなった。まるで家族の仇を逃がすものかと捕らえるように。だが顔は相変わらず薄っぺらい笑みを浮かべたまま一切変わらない。

「うちのヴィータが作戦中に質量兵器で狙撃されて、腕が一本なくなる重傷を負ったんや。多分スカリエツテイの協力者やと思うんやけど、そういう事する犯罪者に心当たりないか？」

とここまで知られているのか、今ハッキリした。この目と言葉は……私が犯人だと疑っているのだらう。犯人と断定するだけの証拠がないので、あくまで疑いにとどまっている。隠そうとしてはいるが、敵意と殺意が漏れ出ているし、証拠さえあればこの場で捻り殺す事も厭わないだらう。だが証拠が無いから手が出せないと。

「それは私に聞くよりも、陸のデータを漁る方が確実だと思うぞ」

「質量兵器を扱う部隊の元リーダーなら、犯人でなくともどんな銃が使われたとか。わからんか？」

当事者なら知っていて当然だらう、ということか、それとも私の経歴をからしてわかって当然ということか。

おそらくは両方。答えなければ疑念を確信に変えてしまうだけだから、答えた方がいいな。答えても確信するだらうが。

「普通の人間に対して使われる弾丸なら、騎士甲冑を貫けたとしても腕を飛ばすには威力が足りない。使われたのは多分対物ライフルだらう。それなら騎士甲冑を貫通した上で掠っただけでも腕を引き千切る位の威力はあるはずだ」

「なんでわかるん？」

自分から聞いておいて説明を求めるか。本当にひどい性格をしている。

「経験だ。バリアジャケットも騎士甲冑も、硬くてせいぜい防弾ガラス程度の強度しかない。対人用の弾丸程度なら防げるが、鋼鉄の装甲を食い破るために開発された対物ライフルにはあつてもなくても同じだろう」

軽く説明したが、説明したところで防げるものじゃない。防ぐためには発砲の瞬間を目視し、着弾までに戦車の装甲に匹敵する強度の防御魔法を使用するか、あるいはそれに匹敵する遮蔽物が必要だ。そんなことができるのはオーバーSランクでも極限られた人数しかないし、戦場にそう都合よく遮蔽物があるとも限らない。つまり、現実的ではない。

「経験て……まあええわ。防ぐ方法は？」

「厚さ数十センチのコンクリ壁で覆われた窓のないシエルターに引きこもるか、それに匹敵する防御魔法を使用する。もちろん着弾までに使わないと死ぬ」

つまり、狙撃を回避する方法はあつても防ぐ方法はない。だが避けるのは、狙撃位置を目視さえすれば簡単だ。目視さえすれば発砲された瞬間に移動すれば回避できる。逆に言えば、目視できていなければこれも現実的ではない。

「忠告だが、死にたくない。あるいは他人を死なせたくないなら、戦わないことだ。いくらお前らが強かろうと、死ぬ時は死ぬ」

「心配してくれとるん？」
「そう聞こえたか？」

心配はしていない。ただ厄介な奴らが不安を抱き前線から下がってくれるのなら。生命の危険に対して恐怖し、僅かにでも隙を見せてくれれば。そんな甘い事を考えている。

「でもな、私らは仕事を放棄するわけにはいかんと思うんよ」

「……その結果誰かが死んでも？」
「誰も死なせんかったらええだけの話や」

予想とは違って、とんでもなく甘いことを平気で言うな。家族が重傷を負っているのにそんな甘い事を演技でも言えるとは、随分と太い女だ。普通なら取り乱して然るべきだと思うのだが。

「そうか。私からはそれだけだが……もう帰っていいだろうか」

今度こそ腕を振り払って、一步離れる。嫌いかつ敵対する相手とあまり長話はしたくないし、セインをあまり待たせると機嫌を損ねてしまう。運賃の代わりに菓子を作るという約束でここまで連れてきてもらったが、機嫌を損ねると要求がグレードアップする可能性もある。

「ええけど、外はもう暗いで。送るか？」

「いや、いい。自分で帰る」

前を遮る八神を押しよけて、そのまま廊下を進む。目的は果たした、今は応援を呼ばれるよりも速くセインと合流し、安全地帯へと逃げるべきだ。

第42話 腹黒

昨日の会話で、疑念が確信に変わった。けれど、現状では何も手が出せないことが何よりも悔しい。しかも彼はそれがわかった上で、死にたくないなら引きこもって震えてろ、と挑発をかけてきた……正直、これほどまでに他人を殺したいと思っただけは無い。

証拠さえあればすぐに捕まえて、裁判にかけて、裏工作で死刑にしてやることもできたのに。いや、証拠がなくても作ればいい……だけど、彼の肩書が其れを許さない。

『地上本部のエリート』

確かに魔導師ランク『は』高くない。だが、それがどうしたと言わんばかりの戦果を上げているだけあり、高ランク魔導師の少ない地上本部における彼の評判は高い。さらに戦闘機人撃退の一件で民間にもその名は広く知れ渡り、その後は犯罪者の追撃中に部下を失い、責任をとって辞職したという悲運のヒーローとして同情を集めた……その後保護されたものの、直後に行方をくらました。そして昨日のヴィータ負傷……それからあの挑発。偶然にしてはあまりにできすぎている。彼が犯人なのは間違いない。だけど証拠が何一つ存在しない。狙撃の現場には硝煙反応以外には、薬莖はおろか髪の毛一本すら残っていないかった。射撃魔法による攻撃ならば、魔力残滓で検証できたものを……おかげで彼を犯人とする物理的証拠は何一つ存在しない。

まあ何にせよ。彼はなのはとは違うが紛れも無く一種の英雄として見られている。それを捏造した証拠で死刑になどできるはずがないし、できたとしてもその後が怖い。だがそれよりも怖いのは、被害の拡大。今回は狙撃という比較的大人しい手段を用いてきたが、それはおそらく証拠を掴ませないため。証拠を掴み、指名手配すれば証拠を隠す必要もなくなるから、もっと派手な手段を取るようになってもおかしくない。それこそ、強力な爆弾で民間人ごと私達を爆殺したり。

証拠を掴まなければ手出しできないし、証拠を掴んでも地獄が待つ

ている。どちらに転んでも待つのは最悪な結末というのが、さらに不安と悔しさを増大させる……それを回避するには、被害が拡大する前に彼を何とかして無力化するか、レリックから手を引くか。前者は簡単ではないし、後者はこの部隊が設立された理由を全否定することになるから認めるわけにはいかない。よって、選ぶのは前者しか無い。

「はやてちゃん、気持ちにはわかるけど、落ち着いて」

「ん!? ああ、なのはか……大丈夫。私は大丈夫や」

自分が思うよりも深く考えていたせいかな、なのはが近寄っていることにすら気づかなかった……どうしてだろうか、最初は本当に、自分と似た境遇の相手に同情する形で好意を抱いていたはずなのに。どうしてこうなってしまったのか。一体どこで間違えてこんな事になってしまったのか。

「……あ、そうか」

最初の間違いは、彼のことを勝手に調べたこと。決め手となったのは、おそらくホテル・アグスタ。あそこで私が彼を止めていなければ、彼は独力で復讐を果たしていただろう。それができなかったから、犯罪者に借りを作り、その借りを返すために私達に敵対している。でなければ、私達を攻撃する理由がない。殺されかけたことは実際恨んでいないようだったし。

なんだ、結局は私のせいなのか。

「どうしたの?」

「ヴィータをやった犯人の予想がついたわ」

「……誰」

能面みたいな、感情の消えた表情でなのはが詰め寄る。今にも暴発しそうな核

爆弾を見ているようで、冷や汗が止まらない。

でもヴィータと一番仲がいいのはが怒るのは、まあ当たり前だろう。それはなのはとの友情を再確認でき、嬉しくもある。だがそれとこれとは話が別。公私は分ける。なのはは彼を一度殺しかけたことがあり、引け目がある……教えてしまったら、どうしていいか迷ってしまうって、現場で事故を起こす可能性もある。

あるいは暴走して証拠もないのに彼に襲い掛かれても困る。なのはならやりかねないというか、むしろ確実にやる。そうなったら最悪部隊は解体……考えると恐ろしい。でも伝えずに彼と遭遇して、最大の戦力が殺されてしまっても困る。

「ハンク・オズワルド」

どちらがいいか考えた結果、結局教えることにした。黙っててもどうせしつこく言い寄られて、最後には教えることになるだろうし。

「ハンク君が？　でも証拠が無いよね……でも、うん。はやてちゃんがそう言うなら、そうなんだろうね」

「証拠はあらへんけど、昨日話をして、確信した。でも街で偶然会っても絶対に手を出したらあかんぞ」

釘を刺さなければ絶対に殺る。釘を刺しても殺る可能性がある。どっちにしても怖い。ならば刺して置いたほうが、なのはの独断として六課全体が批難される前に切り捨てる事もできるからいいだろう……切り捨てた所で、非難の嵐はさけられないだろうが。

「なんで？　ヴィータちゃんを傷つけたってことは、犯罪者なんだよね？　どうして撃つちゃダメなのかな？」

「言ったやろ。証拠がないで。証拠もないのに陸の英雄を攻撃したらどうなるか位わからんか？　うちはただでさえ地上本部から疎まれとって、海と空からの支援があつてこそ成り立つとる。問題を起こして支援を断られたら六課なんて即解体や」

「どれだけ念入りに釘を打ち込んでも全く安心できない。なのはは一度そうと」

めたら一直線に突っ走る癖がある。道中に障害があつても全部知ったことかと叩き壊して直進する。それがなのはの最大の長所であり、同時に最大の短所だ。戦力としては期待できるが、組織の歯車としては不適合。

「証拠はフェイトちゃんに捜査させる。証拠が掴めるまではハンク君の事は誰にも言わずに、質量兵器への対処の仕方だけ訓練しといて」

「納得できないよ！　わかっているならどうして捕まえられるの!?!」

「このままじゃどんどん被害が増えていくんだよ!?!」

「黙れ！」

うっかり怒鳴り返してしまった……デスクを強く叩いたせいで書類が舞い上がって床に散らばった。後で掃除しないといけない……
「それは私もわかっるとる……わかっるとるんや」

でもどうしようもない。自分が管理局員でなければ。隊長という役割を持っていなければ、感情に任せて彼を殺しに行っていたらう。けど、自分の立場が、管理局員である首輪と鎖がそうさせない。「ならどうして！」

「……六課のリーダーとして、無茶なことは許可できません。どうしてもと言うのなら、辞表を提出してから行きなさい。高町一等空尉」
やってしまえという自分を、機動六課のリーダーとしての仮面を被せて黙らせる。私が考えなしに動けば色々な人に迷惑がかかるから。だから、自分を殺してなのは『命令』する。

「はやてちゃん……わかった。そうまで言うなら街で会っても手出しはしない。でも、現場で出会ったら」

「その時は、好きにすればええ。偶然巻き込まれて死人が出ても、私は何も言わん」

悪意を持って家族を傷つけられれば、人としての良識が消える。それを身をもって体感した私は、彼と同類に堕ちてしまったらしい。このままなのは向かわせれば、私は世間になんと言われるだろう。英雄をろくに取り調べもせず殺害することを許可した層？ 偶然現場に出くわしただけの人間を巻き添えにすることを許可した外道？

けど、それでもいい。家族を傷つけられて黙っているよりは、ずっと。

番外 クツキー

昼下がり。私、ルーテシア・アルピーノは朝食を済ませてからハンク・オズワルドの後ろをずつとついて歩いている。隠れてはいるけれど、きつとばれている。でも気にしない。こうしているのはただの暇つぶしで、わざとばれるように動いているから。

ハンク・オズワルド、歳は18。彼は私と同じく家族を治すためにあの倫理なんて糞食らえ、常識なんて海に投げ捨ててしまえと言う変態科学者の手駒となった、らしい。本人に聞いてないから本当かどうかわからないけど。

ともかく、境遇が似てるから仲良くなれそうな気がしないでもない。だからこうして暇潰しのついでに、話すきつかけを探している。自分から話しかけるのは苦手だから、どうして付いてくるのか、とでも聞いてくれればそこから会話が発展していくと思う。

「……！」

キッチンのドアを少しだけ開けて見ていたら、目が合った。一瞬だけ作業の手を止めたけど、すぐに興味なさげに作業を再開した。

……何度目かわからないこのパターン。話しかけられるのを待っているのは絶対に仲は進まないことを理解した。

仕方が無いので、ドアを開いてキッチンに入り、自分から声をかけてみる。

「……何を、作ってるの?」

「クツキーだ」

こちらに顔も向けずに、数枚の鉄板の上に何かを載せて、それをオーブンの中へと放り込んで閉じた。

それからようやくこつちを向いてくれた……改めて顔を見てみると、なんともどこにでも居そうな穏やかな顔付きだ。こんな顔して平気で人を殺す事ができるなんて、やっぱり人は見かけによらない。

「なんでクツキー?」

今回の目的は仲良くなること。仲が深まれば、似た者同士で結託してあの変態に一泡吹かせられるかもしれないし。

「昨日病院に行った時にセインをタクシーがわりに使ったから、その代金として菓子を作ってくれと頼まれた。いくらか余分に生地を作ったから、お前も食べるか？」

お菓子なんてここに居てもほとんど出ない。出たとしてもあんまり美味しくない奇抜な物だし。

そういえば、この人が来てからは食事はこの人が作ることになっていたんだった。料理の味は今まで出ていたのと比べると随分良いものになってるし、お菓子にも期待していいかもしれない。

「涎が出てるぞ」

「あ……」

キッチンペーパーをちぎって渡される。真っ赤になった顔を背けて、涎を拭いた紙はゴミ箱へ。ものすごく恥ずかしい。こんな事、ずっと昔お母さんにされて以来だ。

恥ずかしさと屈辱からくる体の震えを隠せない。絶対に許さない。絶対にだ。

「とりあえず、いるって事いいんだな」

「うん」

しかしそれとこれとは話が別。食べたいものは食べたい。食べ物に罪はない。クッキーが焼けるのが待ち遠しい。

「あとは放っておけば焼ける。できあがるまではどこかで時間を潰してろ」

「一緒にいていい？」

「構わんが、珍しいな。いつもはゼストやアギトと一緒に居るのに」

「ゼストは休憩してる。アギトはあなたの事を嫌ってる」

「嫌われるような事をした覚えはないが」

「平気で人を殺そうとするのが好きじゃないみたい」

どうして人を殺しちゃいけないのかわからないけど、アギトは悪いことだって言ってる。殺人が嫌いらしいから、人を殺したところのあるハンクさんも嫌いらしい。殺そうとする姿勢も嫌いらしい。

私は、家族を助けるのを邪魔をする人なら殺してもいいと思う。だけど実際に殺したことはないから、嫌われてないんだと思う。

「そうか。まあ、そうだな。それが普通だ」

「私は気にしない」

邪魔なものを壊して何が悪いのか。それが建物でも人でも、邪魔なものは全部壊してしまえばいい。お母さんを助けるために必要なら、人でも物でも関係ない。

彼だって同じ考えのはず。同じ考えを持って、それを行動に移している。

「……その考えについては何も言わないが。少なくとも私を見本にするのはやめた方がいい」

まるで考えを見透かされたような一言。そういえばあの変態から、彼はロストロギアの影響で他人がどんな感情を抱いているのかを見ることができると説明されてたような。されてないような。

今気付いたけど、さつきと比べて目がおかしいような。まるで蛇みたいに瞳孔が縦に割れてる。

「なにも言っていない」

「見ればわかる」

思い出した、そういえば説明されたんだった。

「……なら。どうしてだめなの?」

「私は間違っている」

「どこが間違ってるの? 家族のために他人を殺すのは、悪いことじゃないと思う」

「いや。悪いことだ」

首を振って否定するけど、悪いこととわかっていながら辞めないのには理由があるんだろう。似た者同士だけあって、すごく気になる。それに、こういうことを聞く機会なんてほとんど無いだし、仲良くなるついでに聞けることは全部聞いて見よう。

「ならなんでやめないの?」

「それ以外に方法がないからそうしてる」

「なら私もそうする。それ以外方法がないなら、そうするしかない」
「そうか」

……少しだけ会話してみたけど、すごく大きな壁を感じる。乗り越

えられそうにないし、壊せそうもない大きくて分厚い壁に冷や汗が出る。

他人との付き合いがほぼ無いに等しい私には、これ以上踏み込むのは無理かもしれない……

「……」

「そろそろいい時間だな」

彼は失意に沈む私を無視して、手袋をはめオーブンに駆け寄る。私なんかよりもクッキーの方が大事らしい、シヨックだ。

それにしてもいい匂い……ダメだ、また涎が出そう。喋ってたらお腹も減ったし。

彼が取り出した鉄板を傾けると、皿の上に薄黄色で、端が少しだけ茶色く焦げた美味しそうなクッキーが流れ落ちて行く。少し固めに焼いたのか、クッキーが皿に落ちるたびにカンカンと音を立てている。口の中にたまった唾を飲み込むと、ゴクリと音がした。

「……」

「待て」

気がつくのと、焼きたてのクッキーに手が伸びていた。その手首を前から鷲掴みされて止められた。

ひよっとして、怒られるんだろうか。恐る恐る顔を見上げるが、さつきと表情は全く変わらない。少なくとも怒っているようには見えない。

「少し冷まさないと火傷するぞ」

「……」

屈辱だ。

第43話

セインと他数名のナンバーズにクツキーを振る舞った後は、こちらに来てから日課である妹の経過観察を行うためにスカリエツティのラボに向かった。エリーの病巣は肉体ではなく心にあるため、生体ポッドに浮かぶ一糸まとわぬ死体のような体からは容態の変化を窺い知ることはできない。

「やあ、ハンク君。丁度いい所に来たね。おかげで探す手間が省けたよ」

「どうした」

やけに楽しそうな口調と、いつもより三割増しほど醜く歪んだ笑顔でスカリエツティが詰め寄っ

てきた。その勢いは凄まじく、顔に息がかかりそうなほど近くにやってきても止まらないので頭を鷲掴みにして腕を突き出し、無理やり距離を取らせてしまうほどだ。

少しだけ感情を覗いてみるが、なんとまあ太陽のように眩しく輝いていて目が潰れそうだった。すぐに目を閉じて、視界を人間のそれに戻す。目がチカチカする……それよりも、スカリエツティがこれほど喜ぶとは絶対ろくなことではない。

「君の再生能力を再現できないかと、細胞を少し培養してみたんだがね。培養液に浸けた途端際限なく増殖し始めたよ、まるで癌細胞だ！」

だが、その再生能力は素晴らしいの一言に尽きる」

「……それで？」

ただそんな事をいうためだけに、わざわざ私を捕まえてそんな話をするとは思えない。たったそれだけの事でここまで喜ぶはずがない。なので、下らない前座を聞かされる前にさっさと本題を聞き出す事にした。

最近こいつの扱いにも慣れてきた気がする。慣れたくはなかったが。

「それで、早速戦闘機人に応用してみた。十四体ほど再生速度の調整と投与段階を失敗して、機械と肉の混ざり合ったナニカになってし

まったが、十五体目でようやく成功したよ。おかげで、かなり無茶な強化をしても壊れなくなつた。さらに高い再生能力でより頑丈になつた！ 正直ウエンディ以上の性能の機人は作れないと思つていたのだが、君のおかげだ。本当にありがとう」

「……お前は本当に。いや、なんでもない」

改めてどうしてこんな奴に妹を預けてしまったのか、と後悔してしまふが、しかし妹を治療できる可能性があるのはこいつだけ。世界とは何とも残酷だ。それにしても命を完全に物扱いとは、わかつてはいたが本当に倫理の欠片もないようだ。せめて僅かにでも倫理観があればと期待していたが、無駄だったらしい。

まあ最終的に妹が治りさえすれば倫理などどうでもいいのだが。期待していたのは家族を治療する者が倫理観の欠片もない人物だと心配になるからであつて、こいつに良識ある善人であつて欲しいなどとは全く考えていない。

「それで、初の成功例である彼女をお披露目したい」

スカリエツティがそう言うと、ガジエツトに抱えられて一人の少女がやってきた。私と妹と同

茶色の髪と瞳をした、世間一般には可憐と言われるであろう顔つきの少女。髪は肩の長さで切りそろえられていて、背丈は丁度、私よりも頭ひとつ小さい程度。そして何故か衣服の一つも纏っていない。

なぜ彼女を私に差し出したのかは不明だ。私にそういった欲望は存在しないのはわかっているだろうに。

「こう見えて、ほら」

「……」

スカリエツティが彼女の首に刃渡り十センチ程度の果物ナイフを当てても、少女は表情を微動だにさせない。そしてスカリエツティは全く躊躇う様子がなく、一気に根本まで刃を突き刺し、引きぬいた。彼女は首を抑えて床に崩れ落ちる。床に首の動脈を切つたのか、手で抑えられてなおすさまじい量の血が噴水のように飛び散り、当然私の顔と体にもかかった。私にこういうものを見せられて喜ぶ趣味はなく、わずかに不快に思う。

そして衣服を着せなかったのはこのためか、と一人納得する。首を切った意図はわからないが。

「どういうつもりだ」

だが、吹き出ていた血は一秒としない間に止まった。スカリエツティが彼女の首についた血液を布で拭くと、傷口が綺麗さっぱり消えていた。まるで最初からなかったかのようだ。

「見ての通り、再生能力もオリジナルの蛇を有する君には劣るが、非常に高い。まああまり多く出血したら輸血が必要だがね。これを君にプレゼントしたい、素材を提供してくれたお礼だよ。遠慮はしないでくれ」

そう言ってスカリエツティは彼女の腕に針を刺し、チューブに接続して輸血を開始する。再生能力を見せるためなら、わざわざ部屋を汚してまで首を切る必要はなかったと思うのだが。後の始末は全てガジェットにやらせるから、多少ラボが汚くなっても別にいいのだろうか。

「そんなもの貰っても困るんだが……まあいい。戦闘能力は？」

「君の娘のようなものだというのに、いらぬとはね。残念だ。まあ今の段階では戦闘能力は皆無だ。適性は近接格闘型だけど、訓練しないとな」

「私の家族はエリー一人だけだ。其れ以外には居ないし、増やす予定もない。それで、実用に耐えられるようになるまでどれ位かかる」

「そうだね……君の満足できるレベルを教えてくださいませんか？ それを知らないことにはなんとも言えない」

「AAAランクの近接特化魔導師を五秒以上足止めできる」

機動六課を敵にするなら、最低でもそれくらいでないと厳しいというか足を引つ張るだけ。それよりも戦力が低いなら、正直必要ない。砲撃、射撃特化なら最悪固定砲台にすればいいから足止めなど考えなくてもいいのに。

「半年かかる。十分に教育に時間と労力が割ける事前提だがね」

「しばらく戦力としての期待はできないと」

「時間をかければ間違いなく我々の中では最高の戦力となるのだが

ね。いやあ、その時間がないのが残念でならない」

「なんだ、近く総力戦でも仕掛けるのか？」

「ああ、そのつもりさ」

……もしかしたら、というつもりで言ったのだが。まさか当たってしまおうとは。

「エリーはどうなる。治療途中で放り出すつもりか」

「そんな無責任な真似はしないよ。器は既に作り始めてるし、なに。一年もすれば器は完成する。全部終わった後に、ちゃんと仕上げをするさ」

「終わった後と言うが、いつ、どこにどうやって仕掛ける。計画は。勝算はあるのか。管理局は腐っても次元世界を統括する組織だぞ？」

そこらのテロリストを撲滅するのはわけが違う。規模も、練度も、個々の能力も、何もかもが違いすぎる。いくら戦闘機人の能力が高くとも、彼女らは一応人としての側面がある。戦い続ければ疲労するし、疲労が重なれば戦闘能力が下がる。そうなれば数の暴力で封殺されるのは目に見えている。

「だからこそ勝ち目があるんだよ。何も次元世界のすべての人間が管理局による支配を良しとしているわけではない事は、君もよく知っているだろう」

「……ああ」

でなければ、テロリストなど居るはずがない。まあそのおかげで、私は准尉の階級までたやすく上り詰めることができたのだから、いくら嫌いな管理局でもそこだけには感謝しなければならぬだろう。しかし元をたどれば、管理局さえなければ私がこんな生活を送る必要はなかったのだから、感謝する必要もないか。

まあ何にせよ。管理局の統治を揺るがすようなでかい事をやらかすつもりなのだろう。この変態は。

「ミッドチルダで生活する全ての人々を人質に取ればいい。そうすれば管理局も下手に手出しができなくなる」

「言うは易しだな。レリックは集めて爆弾にでもするのか？」

仮に地上本部が陥落できたとしよう。どれだけ手際よく。どれだ

け損害を少なくできたとしても、その後には残る空と海が総攻撃を仕掛けてくるだろう。その前にミッドチルダの人々を人質にしなければならぬ。果たしてそれができるのか？ まあ、不可能ではないだろう。レリックを爆弾として使って脅せば……ただそうなると、何もレリックである必要はない。核などの強力な爆弾で代用できる。わざわざ管理局の激しい妨害を受けながらレリックを集めるよりもずっと簡単だ。

それをしないのには当然理由があるのだろう。

「いや、聖王のゆりかごの起動キーに必要なんだ」

「なんだそれは」

「古代ベルカの遺産だよ。地面に埋まってる。簡単に説明すると、1隻でミッドチルダを衛星軌道から瓦礫の山にできて、管理局の艦隊も蹴散らせる巨大戦艦だ。それを使い管理局の艦隊を蹴散らし、誰にも邪魔されない研究用の空間を手に入れることが私の目標だ」

「今までひっそりと隠れて研究してた割には、派手なことを考えるな。シナリオもらしくない。まるで子供みたいだ」

「ひっそりと隠れていても邪魔が入るからね。じっくり、ゆっくり一つの拠点に腰を据えて研究したいものさ。それに、ゆりかごがあればそこまで細かいプランなど必要ないよ」

話だけ聞けばとてもすさまじい代物のようだが、実際にその場面を見ているわけでも性能を見ているわけでもなく。ましてや古代ベルカの骨董品で管理局の最新鋭艦を相手にできると言われても。スカリエツティが楽観的になるとは考えにくいが、やはり信じることはできない。

「賛成できない」

「ほう、理由を聞こうか」

「理由は二つ。一つは私は実際にそのゆりかごの性能を見たわけじゃないから、話を信用出来ない。二つは、古代ベルカの時代から地面に埋まっているのなら、誰も手入れする人間が居らず、保管状況は最悪のはず。本当に当時そんな性能があったとしても、今掘り起こした所で同じ性能を發揮するとはとても思えない」

どこかの自動小銃は普段は泥の中に埋めておいて、有事の際は掘り起こして泥だけ洗い流せばそのまま使えるという話を聞いたことがあるが、さすがに戦艦となるとそうもいかないだろう。

「なら他の案はあるのかな？」

「市民を人質に取るだけなら、そんな物を使わなくとも強力な爆弾が何個かあればいい。研究するための空間はその後に交渉して強請れば問題ないはずだ。レリックを集めるよりもずっと簡単で、手早く済む。爆弾は地上本部の質量兵器保管庫に忍び込んで奪うだけだからな。あそこの警備はザルだから、クアットロと私が組めば苦労することはないはずだ」

クアットロが電子機器を制圧し、私が歩哨を制圧して爆弾を奪って逃げる。中将には恩を仇で返す形になるが、上司への恩など家族に比べれば羽一枚ほどの重さしかない。申し訳ないと思うが、家族のために無能の烙印を押されてもらおう。

まあ、まだやると決まったわけではない。決定するのはスカリエツティだ。

「それは私も思いついたのだがね。簡単すぎて面白くない」

「手段を選んでいる場合か」

「私は天才だからね。普通の手段では満足できないのさ」

「はあ……そういえば。私の元部下は結局どう返事をしてきたんだ」

相手をするのが馬鹿らしくなってきたので、話を変えてみる。結局アイツのことはまだ聞いていなかったしな。私のことを誰かに話しさえしていなければ、どういう選択肢を取ろうとも構わないが、やはりどちらを選んだのかは気になる。

「ん？ 彼なら提案を拒否したよ。犯罪者の手を借りるくらいなら、高い金を払って義手を貰ったほうがマシ、と言ったらしい。管理局員らしく、立派なことだ」

「私への皮肉か？ 別になんとも思わないぞ」

「そうかい、残念だ。君の怒るところも見てみたかったのだがね。ところで彼のことはどうする？ 私と君の関係を知る人間は少ないほうがいいと思うのだが」

「忠告はしてある。拾った命をわざわざ自分から捨てるのなら、それもいいだろう」

別に指名手配されてもやることは変わらない。戦うときにはただ頼まれたことをやるだけでいい。後方からの狙撃でも、前線に切り込んでも。街を歩くなら変装すればいいだけだし、身分証は金を払って偽造すればいい。幸いそういう事が得意な業者はミッドチルダには表に出てこないだけでたくさんいるし、金もそのくらいなら持っている。

失敗して逃亡した後の事を考えなければ、指名手配されても問題ない。どのみちスカリエッティの計画が失敗して捕まったら私の妹は助からないのだし、失敗した時の事を考える必要はない。

「もしも彼がばらしたら、処分は自分でしたまえよ。君が撒いた種だ」
「もちろんだ」

私が訓練したとはいえ、それも非常に短期間だ。地上本部の奥深くに潜らなければ始末するのは簡単のはず。まあ、多分その必要は無いだろう。話したら殺すと脅してあるのにわざわざ話すはずがない。

私のように狂っていないければ、誰でも命は惜しいものだ。

第44話 覚悟

いつもと同じ訓練場。いつもと同じメンバー。いつもと同じ時間帯。なのに空気だけがいつもと違う。張り詰めた、というか。刺すような、というか。もう少しハッキリとした言葉で表現するならば、私達含めた新人全体の士気が下がっている。そしてなのはさんたちはその逆に、ハッキリとした戦意。敵意とも言えるだろう。それを普段から隠す様もなくまき散らしている。

原因はわかっている。前回の出撃時、ヴィータ三尉が狙撃されて重傷を負ったからだろう。それ以前の出撃では負傷してもせいぜいが軽傷位で、この隊に居る間に死を実感することはなかった。ただ前的一件で、いかに死が身近にあるかを実感させられたから。

そう。今までは正直言うと、言っては悪いが気が抜けていた。ずっと自分が死ぬなんて、誰かが死ぬなんて考えもせず訓練し、戦ってきた。だけどヴィータ三尉の負傷が現実を教えてくれた……いや、現実なんてそれより前にわかっていたはずだ。

ずっと前はお兄ちゃんも犯罪者を追って殺された。少し前はなのは一尉と、ハンク准尉の模擬戦で准尉が死にかけた。その時には私は気絶していたので後でビデオを見せてもらったが、一尉は本気で殺すつもりで戦っていた。そして准尉は質量兵器とロストロギアでなんとか応戦し……普通なら死ぬほどの重傷を負った。一週間としない内に戦線復帰したけど。

その後には、逃走中の犯罪者を追った結果、あの人の部下が一人死んで、一人が完全に戦線離脱した。そして倍返しと言わんばかりに、部下を殺した相手を皆殺し。

そうだ。私はお兄ちゃんと、あの人も同じ管理局員で、同じく犯罪者を相手にしている。関係ないはずがなかったのに、死を無意識に恐れて関係ないと切って捨ててた。

「関係ないはずがないじゃない」

誰にも聞こえないように小さく呟く。スバルの憧れが高町一尉なら、私のあこがれはハンク准尉……だった。バリアジャケットすら展開

できない、魔導師とも呼べないような存在であるにも関わらず、質量兵器や策を弄して多くの高ランク魔導師を撃破しあつという間に准尉の階級まで上り詰めた……撃破イコール殺害と知ってからは幻滅したけど。

けどその実力だけは認め、准尉の本気と戦って、そこから色々なことを学ぼうとしていたのに、手加減をされた事に腹を立てて突っかって。結局何一つとして学べない内に彼が管理局を去ってしまったのは、とても残念だ。彼は誰よりも死に近い場所で戦っていたのだから、死への心構えの仕方等も教えてもらえただろうに。

けれど、後悔していても仕方がない。今は対策を考えなくちゃいけない。

けど対策と言っても、音の方が遅く聞こえてくるほどの速度と、AAランク魔導師のバリアジャケットを貫通し、掠っただけで腕を千切り飛ばす威力。当たったところが胴体なら間違いなく、体に風穴が空いて……いや最悪胴体が二つに千切れるかもしれない。死に方はどうあれ、間違いなく命を落とすだろう。

そして特徴的なあの音。使われたのはおそらく質量兵器。威力と弾速に特化し、射程距離はヴァイタータ三尉でも察知できない距離という驚異的な長さ。同じ効果を持つ魔法は、射撃魔法に特化した高ランクの魔導師でなければそう使えないはずだけど、質量兵器なら弾の続く限りポンポン撃てる。

対策としては、常に動き続けて狙いを付けさせないか。先に相手を仕留めるか。どちらにしても現実的ではない。

「皆。今日はいつもとちよつと違う訓練をするよ」

いつも通り、高町一尉が私達を上から見下ろしながら訓練の内容を発表する。その内容は、いつものシュートイベーションと何ら変わらない……回避する弾丸が超小型で超高速の直射弾ということ以外。

どう考えても対質量兵器用の訓練。最初にそれを告げないのはどういう意図があるのだろうか。

「それじゃあ、まず一発。いくよ」

そして無慈悲に人数分発射される魔力弾。同時に全員が衝撃で吹

き飛び、地面に倒れる。いつもなら皆「痛い」とか「いきなりひどいです」とか言うけども、今日に限ってはそんな愚痴は出ない。ヴィータ三尉の負傷の影響だろう。

ともかく、見てから回避は無理とわかったので、とりあえず防御魔法を使用する準備だけ整え、起き上がって第二射が来ないかを見る。大丈夫、魔力弾は浮いてはいるけど動きはない。

「今のは一般的な質量兵器と同じくらいの弾速だよ。さて……皆、今以上の速度の攻撃を、発射の場所もタイミングもわからない状態で回避できるかな？」

「……」

エリオとキャロはすぐさま首を横に振り、私とスバルは少し考えてから互いの顔を見て、首を横に振る。発射位置がわかっているならまだしも、わからない状態では。まず無理。

「うん、私も無理だから仕方ないよ。でも、今のは非殺傷設定の魔法だけど、敵が使ってくるのは質量兵器。防ぐことはできないし、当たれば死ぬ……ヴィータちゃんは運良く生き延びたけど、次もそうなるとは限らない。むしろ死ぬ可能性のほうが高い」

ヴィータ三尉の、片腕を失って大量の血だまりに沈む姿を思い出し、顔をしかめる。確かに、あれはあくまでも当たりどころが良かったから即死せずに済んだのだ。自分が死ぬ可能性もあると考えれば……怖くなるのは当たり前。でも大丈夫。同じことを管理局に入る時に考えて、考えた結果ここに居るのだから。

周りも私と同じ考えらしく、それぞれ下を向いたり肩を抱いて震えたりしてる。

「皆には死んでもらいたくないけど、それぞれの考えもあると思う。だから、今日の訓練はなし。訓練の時間皆よく考えて。これからも機動六課に残って戦うか。機動六課から抜るか。それから答えを聞かせてくれるかな」

私は恐怖を乗り越えてここに居るからこそ、その物言いに腹が立った。高町一尉の優しさに気づき、その提案に乗ったほうがいいのかという自分に腹が立った。一度飛び越えたはずのハードルを再び目の前に

置かれた事に。

「……無責任じゃないですか？　ここまで指導しておいて、あとは私達に任せるっていうのは」

「強制はしたくないから」

「それって、自分が責任から逃れたいだけじゃないんですか!?　死なせたくなければ隊を抜けるって命令すればいいだけじゃないですか！　私達が出撃を志願して死んだら、私達が望んだ結果だから自分には責任はないって、そう思いたいから私達に任せるんですよ！」

「ちよつとティアア！」

スバルに口を抑えられても、それを引き剥がして叫ぶ。

「……」

「黙ってないで何とか言ってくださいよ！」

目の前に降りてきていけば、胸ぐらを掴みあげて怒鳴れたのに。上から私たちを見下して……

「もう一度言うよ。自分たちで考えて、答えを出して。一時間後に戻ってくるから」

それだけ言って、訓練場から飛んで離れていった。当然撃ち落とすでも話を聞くななんて真似は私にできるわけがなく、歯を食いしばりながらそれを見送るしか無かった。

「……ティアア、多分なのはさんは、私たちのことを本気で思ってくれてたんだよ？　なのにあんな言い方は」

「わかってる。わかってるからこそ気に入らないのよ。私は管理局に入った時から、もう覚悟はできてた」

家族が任務中に犯罪者に殺されておいて、前線で働いてて死ぬことはない。なんて思うわけがない。それを知ってか知らずかあの言葉。腹が立たないわけがない。

でも、冷静に考えれば高町一尉が私なんかの過去を知ってるわけがないし、何もあの言葉は私だけに向けられたわけじゃない。皆が私と同じように家族を殺されてるわけじゃないんだし。皆が私と同じように覚悟できているわけじゃないんだし。

「二人で怒って……馬鹿みたいね。私」

クールダウン。落ち着いて、冷静に。

「ティアナさんは……どうするんですか」

エリオが私を見上げて聞いてくる。その顔はどうしていいかわからず、親に助けを求める子供のよう。今思い返してみれば、こんな子供を前線に立たせてたなんて。でも、それが本人の意志なら。

管理局も私達も、そこらの犯罪者に負けないくらい外道だ。テロリストと同じことをやっていると考えたと、どうもやるせない気持ちになる。

「私は残るわ。スバルはどうするの？ 私に気を使わなくてもいいから教えて頂戴」

「ティアアが残るなら、私も残るよ」

「……そう。怖くないの？」

「そりゃあ怖いよ。でも、私の命で誰かが救えるならそれもいいかって。なのはさんに助けてもらったんだし、恩もまだ返してないから。後もう一つ、私が居ないとティアアが無茶するからね」

「あんたは……まったくもう」

ため息をつく。もうスバルには何を言っても無駄だろう……でも、その理由だと残った二人も。自分のやっていることに気づいて少し嫌気が差したばかりだというのに。

「僕も残ります！」

「私も……！」

案の定。おそらくはスバルと同じ恩から来る感情だろう。スバルと同じ事情なのに、スバルだけ認めてこの子供達を認めないのは不公平で、絶対に納得しない。だから私も否定しない。止められないことへの罪悪感が胸を刺すけど、止められないのは仕方ない。

この罪悪感を消すには、高町一尉あるいはフェイト執務官、それもダメなら八神二佐の良心にかけるしかない……けど、きつとムリだろう。彼女たちは小さいころから戦い続けてきた。特に高町一尉と八神二佐は管理外世界の中で最も安定した世界の、戦いから最も遠い国で育ちながら、戦いの中に身を沈めている。期待はできない。フェイト執務官もだ。そんな良心があるならばじめからこの二人を前線に

は出さないはず。

「そう」

自分の所属する組織の異常さに気付いてしまい、落胆してこめかみを揉む。けど一度決めたことを今更投げ出す事は自分の信念に反するから、管理局を抜けるつもりはない。

「ま、今までと変わらないってことね。改めてよろしく、皆。お互い死なないよう頑張りましょう？」

逆に考えるんだ。上司がアテにならないなら、私が死なせないように頑張ればいい。頑張つてどうにもならなかったら、そこは諦めるってことでいいだろう。

第45話 朝食

「どうも最近、フェイト執務官が君のことを嗅ぎまわってるみたいだよ」

ドゥーエを覗くナンバーズ全員と、もう一人私の細胞を組み込んだ少女、ネームレス。プラス私とスカリエッティ、計十四人分の朝食を作っている最中、突如スカリエッティから話しかけられた。

「それで？」

嗅ぎまわっているからといって、どうこうする必要もないだろう。ヴィータ狙撃の証拠は何一つ残していないし、探られて痛い腹は二号かレジアス中将が教えない限り気にしなくてもいい。二号に関しては今のところ情報を漏らす素振りはないし、中将はそもそもコチラ側の人間だ。心配する事は何一つない。もし指名手配されても、困ることといえば堂々と命を狙われることくらいだし。

そんな事よりも話に気を取られて今作っている大量の目玉焼きをうっかり焦がしてしまわないかが心配だ。

「君の事を探るということは、同時に管理局のカーテンの内側も覗くということだ。つまり猟犬が動く。いや、既に命令が下されたそうだ。フェイト・T・ハラオウン執務官が猟犬の存在を知る前に始末せよ、とね」

猟犬、そういえばそんなのも居た。知りすぎた局員を上の命令で、犯罪者の犯行に見せかけて食い殺す、公的には存在しないとされている特殊な部隊。管理局員のほとんどが存在を知らず、知っている者のほとんどは猟犬の関係者。昔は自分もその一員だったが、別段感傷も何もない。そもそも彼女が食い散らされようとも私には関係……あるか。私の事を捜査している最中に死亡したとなれば、当然私の関与が疑われる。そうなれば指名手配、あるいは重要参考人として手配されるのは避けられない。私もやることはやっているのだし、言い逃れのしようがない。そうなるのは少しだけ面倒だ、買い物に行くのも一々変装していかなければならなくなる。

「それで？」

だが、それがわかっているとしても私にはどうしようもない。私はあそこに所属して功績を稼ぎ、戦い方を学んだから、猟犬は手段を選ばずに相手を殺しにかかる事もよく知っている。爆発物を使う可能性もあるし、下手に近くに居たら巻き込まれてしまう。それに聖王教会の一件でなんとか猟犬の脅威から逃げられたのだし、また目をつけられるのは勘弁願いたい。

「ちよつと行つて捕まえてきてくれないかな？ 今日彼女がどこへ向かうかの情報は既に入手しているから、待ち伏せは簡単だと思うんだが」

「お前は私をなんだと思ってる」

焼けた目玉焼きと、ボイルしていたワインナーを並べられた皿に移し替えながら返事をする。エース魔導師を殺害ならともかく、猟犬から横取りして捕獲しろなどと、無茶にも程がある。絶対に無理とは言わないが、得物を横取りしたとなると私まで狙われることになってしまう。そんな事をやらせるなら、私などよりも遙かに戦闘能力に優れたナンバーズを何人か向かわせた方がよほど確実だ。それともこいつは私を殺したいのか？

「おはよー……あー眠」

「おはようセイン。丁度いいところに来たな、テーブルまで運んでくれ」

焼いていた卵を全部皿に移し終えた時点で、丁度起きてきたセインに皿を運ばせる。もし私の妹がマトモだったなら、こんなに大量の卵を焼くこともなかったし、こうしてアジトにコソコソと隠れている事もなかっただろう。ああ、全くどうしてこうなったのやら。

「はーい」

セインが食堂へ皿を持っていったのを見送ってからスカリエツティに向き直り、話の続きをする。

「第一、どうして捕まえる必要がある」

「それはもちろん研究材料さ。プロジェクトFの成功例である年齢まで問題なく成長している個体はなかなか貴重でね。価値の分からない馬鹿な犬共に食い散らかされるのは惜しい」

「理由は分かった。しかし私が行く必要はあるのか？」

単純な戦闘能力で見ると、私よりも戦闘機人の方が遙かに優秀だ。相手が単独ならば、ナンバーズ二人がかりで行けば容易に捕獲できるだろう。低ランク魔導師でもマトモにやり合うなら苦戦する私が行くなど、論外だと思うのだが。

「可能な限り証拠を残さずに事を終わらせられるのは君しかない。それとも、無理と言うのかな？」

肩に手を置いて笑いかけられた。それは「拒否すれば妹がどうなるか。わかっているな」と暗に言われているようで……どうやら拒否権はないようだ。

「……できないとは言わないが。一人では厳しいな、クアットロとセインの随伴を許可してくれ」

クアットロが居れば街の監視カメラや人目は気にしなくてよくなるし、猟犬を撒くにも使える。非常に便利だ。そしてセインはいつも通り回収用に。戦闘用のメンバーの随伴はおそらく許可してくれないだろう。こいつは私の本当の実力を見極めたがっている。

「もちろん許可しよう。彼女がどこを通るか予想したルートを後ほど君の部屋の端末へ送信しておくから、朝食後に見ておきたまえ」

「了解」

「期待しているよ」

引き受けたはいいもの。一体どうやって猟犬から得物を横取りしようか。こちらに予想ルートがあるということは必ず相手にも同じような物があるはず。ならばそれを中心に展開しているはずで、鉢合わせになるのは確実だろう……ならば衝突は避けられない。不幸中の幸いだが、相手は割りと話を通じる連中だ。どうにかして説得できればそれに越したことはない。が、何の対価もなしに説得するなどまず不可能……しかし私に彼らを納得させられるほどの対価は用意できない。

いや、一つあったか。金にも換えれば結構な額になり、金に換えなくとも様々な用途がある物が。どうせ私が持っても使わないのだし、宝の持ち腐れ状態だ。それなら別に対価として引き渡しても問

題ないだろう。

「ああ、そうだ。名無しを猟犬に引き渡したいんだが」

奴らに今の状態の彼女を引き渡した所で、すぐに戦力として運用することはできない。なぜなら性能としては既に完成しているのだが、実戦の経験がなく力の扱い方を全く理解していないからだ。起動してからまだ一週間と経っていないのだし、仕方ないと言えばそうなのだが。

だが、猟犬に入れば実戦経験も積めるだろう。実戦の中で自分のスタイルを磨き上げて、徐々に力の扱いを学んでいけばいい。ただ、隊員の多くが私の家族を殺したあのクズと同類なので、人格の形成には間違いなく悪影響があるだろうが。

「構わないよ。彼女は君にプレゼントしたんだし、所有権は君にある。どう扱うかは君の自由だ。親としては大事にしてあげてほしくはあるがね」

「反対はしない、そういうことでいいんだな」

「それが君の選択ならね。ただそうなると、セイフティが解除される可能性もあるからハッキング対策を厳重にしておかないとマズイかな」

「どのくらいかかる」

「君が準備している間には終わるだろう。それより朝食を食べよう。冷めてしまおうし、準備する時間は多い方がいいだろう?」

「そうだな」

使ったフライパン等の調理器具を洗い場へ放り込んで食卓へ向かうと、既にこの施設に居る全員が席についており、それぞれが黙々と料理を口に運んでいた。セインとウェンディ、名無しに至ってはもう既に食べ終わっており、足りなかったのかトーストを新たに焼き始めていた。私も自分の席についてトーストをかじり、コーヒを一息飲んで一息つく。

今日は忙しい一日になりそうだ、と。

第46話 猟犬

午前九時のクラナガン。平日なのと都市の中心から離れているだけあり、予想通り人の数は少ない。全くないというわけではないが……だが、ここがフェイト執務官の通るルート上で最も捕獲に適した場所だと経験から判断した。人は人の目が全くない場所に一人で居ると自然と不安を感じるが、逆に言うところでも人の目がアレば安心するものだ。つまり、僅かに油断する。そこを狙う予定だ。

まあ、その前にやらなければならないことがあるのだが。幸いすぐに済みそうだ。

「ようハंक。こうして会うのは一年ぶりくらいか。わざわざ会いに来たつてことは死ぬ覚悟ができたつてことか？」

眼の前の無精髭を汚らしく生やし、ファーストフードをクチャクチャと音を立てながら食う頭髮の薄いやや肥満体の中年男性。本名は知らないの、隊長と呼んでいた。とてもそうは見えないがこの男こそが猟犬の指揮官だ。私に戦術思考を叩き込んだだけあり、やはり私と同じ場所を襲撃位置に選んだようだ。予想通り。

そして、こうして話している間にも私の頭にいくつもの銃口が向けられているのだろう。こいつが乗らなければ、私はきつと撃たれて死ぬ。もしかしたら死なないかもしれないが。まあ、撃たれたらやり返すだけだが。

「違う。取引がしたい」

「一応聞かせてもらおうか。言ってみろ」

「ハラオウン執務官に手を出すな。あれは私が生け捕りにする」

「もちろんタダとは言わないよな。対価は何だ？」

隣に立たせていた名無しの背中を押し、隊長に差し出す。さて、とりあえず交渉のテーブルに立ってはもらえた。あとはこいつの説明をして、取引を受けてくれるかどうか。

「スカリエッティ製、最新型の戦闘機人一体。製作者によると、性能は従来のものよりワンランク上だそう。性別は女、性経験は一切なし。戦闘経験もなし。頸動脈を切つても一秒以内に血が止まる再生

能力を持っているから、かなり無茶ができるだろう。適性は近接特化だが、仕込めば遠距離もできる。戦力として運用するならばらく訓練して、経験を積ませるんだな。時間をかければSランクも一対一で打倒できる位の性能はある」

「見た目も悪くない。スタイルも俺の好みだ……さらに将来的には戦力にもなる」と

隊長が髭を撫でながら、考えを漏らすように呟く。そして下卑た笑いを浮かべ、名無しの体を隅々まで舐めるように見回し、納得したように大きく頷いた。粘着く視線に晒されていた名無しは、自分がこれからどうなるのかも知らず、視線にどんな意味があるのかもわからず、こちらを見上げている。

……私に良心など存在するはずがないので、その眼を見ても何も感じることはない。

「むしろ釣りをやりたいところだ。上には俺達が殺つたと報告しておこう。もちろんこいつは俺達の好きにしていんだよな？」

「ああ。だが、壊れにくいと言っても壊れないわけじゃないからな。戦力として使うなら程々にしておけよ。もし壊れたら回収させてもらおう」

「おう、せいぜい楽しませてもらうとするさ。野郎ども！ 今日の予定はキャンセル、帰って新人の歓迎パーティーだ！ 盛大に歓迎してやろうぜ！ ガハハハハ！」

名無しが手を捕まれ、引つ張られるが。その場で踏ん張って動こうとしない。そして、首を切られても悲鳴を上げなかった名無しが、始めて声を出した。

「私の所有者はあなたじゃない」

今はじめてこいつの声を聞いたが……ずいぶんと懐かしい声だ。そして、スカリエッティがこいつを私に渡した理由もわかった。こいつは実験に協力した札なんかじゃない……私を縛り付けるための鎖だ。だがそれでも私のする事は変わらない。

「おいおい、こりゃ一体どうしたことだ？」

「名無し。所有権はそいつに移譲した。そいつに従え」

こんな穏やかな『妹の声』を聞くのは、六年ぶりだ。八神はやてといい、スカリエツティといい。どいつもこいつも私の上司は性格が最高に最悪だ。これは帰ったら一発殴らなければいけないだろう。

しかしあいつは、妹の声をしているからといって私が引き渡すのを躊躇うとも思っていたのだろうか。少し驚いたが、心が動くほどではない。

「……了解しました」

「がはははは、よろしくな嬢ちゃん。しかしこれだけもらっておいて執務官一人つてのは、やっぱり釣りを渡さないと気がすまねえ。受け取れや」

隊長がそう言うと同時にナイフを突き出してきた、それは寸違わず『私』の頭に突き刺さった……：ように見えたが、次の瞬間には『私』が消えて、無防備に突き出された腕だけが残った。

「もう少し賢い選択をすると思っていたんだがな」

そう呟きながらお返しにと額にナイフを一本プレゼントして、崩れ落ちるよりも速くこめかみに鉄板入りの靴で蹴りを叩き込む。ナイフによる脳の破壊と、蹴りによる頭蓋骨破壊。まず生きてはいないだろう。ちなみに先ほど隊長が刺した私はクアットロが私の立ち位置をずらして見せていた幻影だ。そして私はその一歩後ろに立っていたから、隊長のナイフは一歩分届かず、安全に反撃することができた。

『左右に三名ずつ。武装は拳銃』

そして隊長を殺した直後。クアットロから警告が入ったと思うと、左側で銃を取り出した奴らに向けて名無しが走りだし、適当に一人捕まえて振り回すだけで制圧してしまった。もう一方はセインが。さすがに仕事が速い。

「クアットロ、セイン、名無し。よくやってくれた」

『どういたしまして』

「制圧完了。いや、君に比べたら弱いねこいつら！」

「戦闘機人に襲われてまともに応戦できるほどの実力があれば、猟犬には回されない」

猟犬はそれほど強くもない犯罪者と、欲が強さと実力が釣り合つて

いない管理局員の集まる場所だ。そんな化物が居るような場所じゃない……と、いうことは私も化物になるのか。まあ、もう人とは呼べないし化物扱いが丁度いいか。

「さて、クアットロ。幻影はキツチリ張ってあるな？」

「もちろん。周りからは何事もなかったようにしか見えないわよ」

「ならいい」

一応確認してから隊長の死体を引きずって路地へと運ぶ。クアットロがちやんと仕事をしてくれているのなら、犯行を目撃した人間は居らず、カメラにも映っていないはず。血液の出るような傷は脳天に一発突き刺したナイフだけ。そのナイフも刺したままなので垂れていない。つまり、証拠は死体以外残らない。

路地に入ると丁度いいところにゴミを入れるコンテナがあつたので、鍵を叩き壊して中に放り込んでからナイフを回収する。続いてセインと名無しが同じように死体をコンテナに放り込んでいく。これで証拠はこいつらが見つかるまで気にしなくて済む。

「最初から少しだけ予定が狂ったが、まあ想定範囲内だ。ここからは元通り。最初のプラン通り事を進める。私が捕獲に失敗し、逆に捕獲されそうなきには遠慮なく殺してくれ」

「あのさく、そう言われるとかえってやりにくいというか、なんていうかさ……そういうマイナスなこと言うのはやめない？」

セインが気まずそうに頭をかいて呟く。しかし、そんな甘い考えでは困る。世の中何もかもが自分の思い通りうまくいくとは限らないのだし。現に今回も最初は名無しを引き渡して穏便に事を収める予定だったのに、結局は荒事になってしまったし。失敗した時のことも考えておかなければならない。

「ならクアットロ。その時は頼む」

『あら〜？ あなたはこんなところで失敗するような無能な人間なのかしら？』

「可能性はゼロじゃない。それに私の望みは妹の精神の治療。私自身がそれを邪魔するなら、死んだ方がマシだ」

私が生きて捕まりアジトの情報を漏らしてしまえば、機動六課は直

ちに攻撃を開始するだろう。そうなればスカリエッテイの計画は頓挫、私の妹の治療もできなくなる。そうなるよりは、情報を漏らす前に永遠に口を閉じる方が百倍マシだ。

第47話 狩り

「……収穫はこれだけか」

ハンク元准尉と一人の女性が写った写真と、車の外にあるボロいアパートを見て呟く。書類によればハンク准尉はこのアパートの一室に住んでいたという事で、この管理人に行き先を知らないかと尋ねてみたものの、何も知らないとの事。同じアパートの住民たちにも聞いても、行き先を知るところか一言も言葉を交わした事がないという者まで居る始末。彼が住んでいたという部屋も調べてみたけど、残っていたのはこの紫色の髪の毛の綺麗な女性と一緒に写真が一枚。誰かと付き合っているという話は聞いたことがないしとても不自然だけど、それが誰なのかはわからない。恋人だろうか？ プライベートについては一切話してもらえなかったけど、はやてから聞いた話だと恋愛とかには一切興味が無いらしいし。もしかしたら違うのかもしれない。

そういえば自分も恋人は居なかったな、とため息を吐きつつ車のエンジンをスタートし、発進する。

「参ったなあ……」

車を走らせつつ内心頭を抱える。地上本部にある情報に全て目を通して、その結果何も収穫が得られなかったから、僅かな希望を抱いてここに来たというのに。訂正、資料がないということがわかった、それが収穫だった。でも資料がないということは証拠もないわけで、やっぱり収穫はないか。ユーノにも無限書庫で調べてもらってるけど、結果はあまり期待できそうもない。

「何かあるはずなのにな」

シートに体重の殆どを預けながらぼやく。テロリストの拠点の破壊、犯罪者の殺害。そういう普通の任務履歴は何一つ隠されることなく開示されていた。確かに成果はエース級のそれだった。実力も、本気を通り越して殺す気なのはから数分間逃げ続け、さらには手傷を負わせたことからエースまではいかなくともかなり優秀なことも分かる。それだけ見るならあの階級も頷ける。けどこの組織は管理局。

質量兵器根絶を掲げ、魔法を至上とするこの管理局で。いくらあのレジアス中將がトップの地上本部でも、少なからずその考えがある人間は居るはずなのに、質量兵器を好んで使う彼が実力と成果に見合うだけの階級を、たった六年で手に入れられるとは考えられない。必ず他にも『何か』しているはずだ。

だけど、その『何か』が見つからない。資料に一切残らない任務をしていたのなら領けるけど、資料に残らないなら追求のしようがない。むしろ彼が無罪であると言われれば、その方がすんなりと受け入れられるくらいに尻尾が掴めない。

アコース査察官の手を借りれば白か黒か一度でわかるのに、と思うけど、明らかな犯罪行為をしていない。もしくは犯罪の証拠がない人間の記憶を覗く事はできないらしいし。

しばらく機動六課のある方向へと車を走らせていると、ふと見覚えのある人が街を歩いていた。荒く切られた茶色の髪に、どこにでも居そうな地味な顔つき。危うく見落としてしまいそうになったが、慌てて二度見して確認したので間違いない。渦中の人、ハンク・オズワルド元准尉だ。

車を路肩に寄せて止め、慌てて車から降りロックをかけてからその姿を追う。人混みの中に紛れて見失いそうになるが、管理局員が走っているということ人で群れは容易に割れる。

こちらの足音に気付いたのか、彼と思わしき人が振り返りこちらを見る。あまり感情を感じさせない無機質な茶色の瞳と目が合った。

そして彼は人の流れに逆らって移動し、路地へと潜った。私もそれを追い、彼の入った路地へと飛び込む。けど、そこは袋小路。おまけに人影は見当たらない。

「何か用か？」

背後から声をかけられた。威嚇するでもなく、警戒するでもなく。まるで手練のセールスマンのような、適度に距離感を持った声。それと、気のせいかもしれないけど、小さく聞こえた金属の擦れる音。殺意や敵意など全く感じないというのに、冷や汗が止まらない。背筋が

凍る用に寒い。久しく感じる事のなかつた、恐怖の感情だ……でもこれは、彼の持つロストロギアの効果により増幅されたもの。本来の私はそこまで臆病ではない。そう言い聞かせつつ、間違っても敵意を感じさせないように、ゆっくりと振り向く。

笑うでもなく、怒るでもなく、悲しむでもなく、楽しむでもなく。一切感情を感じない、仮面のような表情を貼り付けた顔が、金色の瞳だけを輝かせてこちらに告げた。片手はだらりとぶら下げ、もう片方の手はポケットに入っている。何かを握っているのかもしれないし、そうじゃないかもしれない。

もし彼がはやての言ったとおりヴィータちゃんを撃った犯人だとすれば、同じ勢力である私も邪魔なはず。つまりはここで殺される可能性がある。

おまけにこの路地、人一人通るのがやつとな狭さ。彼はその入口を塞ぐようにして立っている。さっきの金属音が銃の発射用意だとしたら、おそらくデバイスを起動する瞬間に撃ち殺される。実際、同じ手口で犯罪者を何人が殺している……つまり私は、畏にはめられた。増幅されている恐怖を飲み込んで、言葉を吐き出す。

「どうして、あなたに用があるの？」

自分で言っておいてなんだけど、もう少し他の言葉はなかつたのかと。

「最近私のことを調べて回っているみたいだからな」

「……どうしてそんな事を知っているの？」

「何故だろう。当ててみたらどうだ」

「誰かと連絡を取っている、とか」

「そのとおりだ」

予想通りの答えだけど、予想とは違い、挑発するでもなく、牽制するでもなく。ただ当たり前のように肯定した。その言葉からは表情と同じく何の感情も感じられない。彼の言葉が真実だとして、一体誰が情報を流しているのか。それは聞いても答えてくれないだろうし、帰ってから……帰れたら、じっくりと調べることにする。

「……ハンク・オズワルド。あなたに聞きたいことが有ります」

やましいことがある人間ならまず拒否するだろう。拒否すれば黒とし、拒否しなければ情報を聞き出せるだけ聞き出す。当然警戒はしておく。いつ彼の気が変わってこの命を断たれるかわかったものじゃないので、ポケットの中に入れた写真を取り出しつつ、袖の中に待機状態のバルディッシュを押しこむ。

「話せることは話そう」

「ありがとうございます。では早速……この写真の女性は誰ですか？」

「子供の頃の友人だ。街で会って、懐かしかったから食事に誘った。その時に撮った写真だ、無くしたとばかり思ってたんだがな」

「友人？」

「私もあの事件の前までは普通の子供だったからな。友人の一人や二人位は居る。いや、居た……が正しいか」

表情が全く崩れない。声も相変わらず平坦で、嘘か真実かの見分けがつかない。だけど嘘であると断言もできない以上食い下がることはできない。彼の過去を思い出して同情するし、彼の交友関係は不明だ。でもそんな事をするようなタイプには見えないので多分嘘だろうと思う。次の質問をする。

「そうですか。では次の質問を……あなたは今どこに住んでいるんですか？」

「回答を拒否する」

「……」

とりあえず収穫一つ。今住んでいる場所は話せない。住居を知られると不都合な事がある、ということ。思わぬ収穫に、うっかり手に力が入り、写真を握りつぶしてしまっただが、構わず次の質問をする。表情も変わらなかつたし、大事な物ではないのだろう。

「なぜ話せないのですか？」

「決まった住居がないから回答のしようがない」

「……」

これは間違いなく嘘とわかる。決まった住居がない人間には必ずあるはずの不潔さが全く感じられないから。どうにも、遠回しな質問

は意味がなさそう。なら、正面からぶつかってみよう。そうすれば何かわかるかもしれない。地雷をつついたら、最悪死ぬかもしれないけど……それでも彼は異常なまでに理性的だ。自分が殺されかけても相手を許せるほど。地雷を踏む可能性は極めて低い。

そう思つて、ストレートに聞いてみる。

「質量兵器を使つたのに、どうしてたった六年で准尉にまで昇格できたのですか？　周りからの妨害もあつたはずですよね？」

「だからこそ。質量兵器を用いて出した成果は管理局のイメージダウンにつながるため公表しづらい。魔法を使って出した成果ならば華々しく報道し、英雄気分を味わわせることで飼ひ慣らせるが、それができないからさっさと階級と給料を上げて重用し、首輪をかけた」

正面から行つた結果、収穫なし。この回答には納得がいかない。それもあると思うけど、絶対にそれだけじゃない。何かあるはず……なのに、それがわからない。尻尾の先すら掴ませてもらえない。軽くあしらわれている事に対してイライラしてきた。

「遠回しな質問をされてもお互いに時間の無駄だ。本当に聞きたいのは、そんな事じゃないだろう？」

「……確かにその通りだけど」

ああ、ダメだ。自分でも焦っているのがわかる。自分のペースに持つて行けないのと、この危険な状況への僅かな恐怖……冷静さを失わないようにしていても、どうしても焦ってしまう。一秒でも速くここから抜け出したいという気持ちが先走り、引つ掛けることもできやしない。でも、彼の言うとおりのまま延々と遠回しな質問を繰り返していても、飄々と躲されて確信を掴めないまま無駄に時間を過ごすことになる。

ダメだとわかっている。それでも、彼の誘いに乗つて、口が滑りだす。

「じゃあ、聞くけど。この前ヴィータ三尉が攻撃されて、重傷を負つたことは知ってるよね？」

「他ならぬ八神はやてから聞いた」

「撃つたのは、君？」

……この質問で初めて彼が表情を変えた。一瞬だけ驚いたように目を見開いて、すぐにいつもの無表情に戻り、それから数秒間、顎に手を当ててどう答えるかを考えているようだった。

その驚いた顔は、まさか自分が犯人扱いされるとは思っていなかったというものか。それとも凶星を突かれて驚いたのか。

「私がやったという証拠は？」

「ありません」

「証拠もなしに犯人と疑うとはな」

目を閉じて首を横に振り、さらにため息と。呆れたという感情を示すありとあらゆるジェスチャーを交えて心外だと言われる。

「だが正解だ」

気がつけば金色の瞳が私の目を覗いていた。まず感じたのは、わずか一瞬の間に顔が触れそうなほど接近されたことへの驚愕。その金の瞳に心を覗き込まれると、恐怖を抑えこんでいた殻が決壊し、死への恐怖が蛇口を捻ったように溢れ出す。

一気に雪崩出てきた恐怖という感情の濁流は、私の意識を一瞬だけ押し流し、とても大きな隙を作ってしまった。それは彼の間合いにあつては、まさしく致命的とも言える一瞬だった。

『マスター！』

長く連れ添ってきた相棒の声で我に返り、手の内に握ったバルディッシュを起動しようとする力を入れても、その時にはもう遅い。首を捕まれて壁に叩きつけられ。バルディッシュは私の手ごとナイフで刺し貫かれ、地面に落ちて。

「はな……してー！」

首を強く絞められているせいで掠れた声しか出ない。そのまま片手で持ち上げられて、天地が逆さになったと思うと、首を掴まれたまま地面にたたきつけられた。

「くっ、ぐえっ！」

衝撃で肺の空気を吐き出し、さらに胸に膝を落とされて残っていたわずかな酸素すらも吐き出してしまう。ただでさえ足りない酸素が

さらに不足し、苦しさに意識がまるで息を吹きかけられた蝋燭の火のように消えかける。それでも手の痛みのおかげか、なんとか意識を飛ばされずに済んだので、彼の腕を振り解こうと酸欠状態のまま暴れる。それでも腕は剥がれず、締め付けがより一層強くなった。

「か……ああ」

彼は黙ったまま、私の苦しきなど知ったことかと言うように表情を変えずにひたすら首を絞め続ける。そろそろ抵抗する力も消え、視界が暗くなってきた所で腕にチクリと痛みを感じ、喉を開放された。

「がはっ、ケホッ……う」

必死に息をして、酸素を吸い込もうとするが、今度はうまく呼吸ができない。呼吸ができないだけじゃな

い、体がうまく動かない。なぜかと思ったが、ぼやけた思考でもすぐに結論に辿りつけた。彼の手に空の注

射器が握られていたから。きつと何かしらの薬を打ち込まれたのだろう。

「鎮静剤だ。しばらく大人しくしてもらおうか」

「わ、私を……どうする、つもりなの？」

かすれた声しか出ないけど、質問はできた。打たれたのが毒ではないことから少なくとも殺す気はないというのはわかったけど、これからどうなるかと思うと怖くてたまらなくなる。

「私は知らないな。セイン、アジトまで連行しろ」

「はーい、最近こんなのばっかだな……まあいいけどさ」

「はらして（離して）……おれがい（お願い）」

後ろからいきなり現れた水色の髪の子に抱きかかえられても、力が入らないどころかろれつすら回らない。

「ま、そういうわけで一名様ごあんなーい」

そして、地面に引きずり込まれた。その後のことは、覚えていない。

第48話

「フェイト執務官を拉致し、クアットロと名無しと共にアジトに戻った私が真っ先に向かったのは、拉致したフェイト執務官の下でもなく。私の妹の入っている生体ポッドの下でもなく。いつも通り薄暗い部屋の中で眩く輝く白いスクリーンに映る様々な情報を眺めて薄い気味悪い声を上げて笑うスカリエッティの下だった。ウーノはいつも通り隣に突っ立って何かをしているようだが、何をしているかまではわからない。」

私が部屋に入ってパネルを操作し電灯を点けると、いつも通り気味の悪いにやけた顔のスカリエッティが振り向いた。ウーノはこちらに興味が無いのか作業を黙々と続けている。

「やあ、お帰り。全く君は本当に、私の期待を裏切ってくれるね……もちろんいい意味でだよ?」

楽しいという感情を顔、声のみならず全身から撒き散らすスカリエッティ。口ぶりからするに、当初私が彼女を捕まえられとは思っていなかったようだ。あるいは私が失敗して捕まることを望んでいたのか? 私も無茶な頼みだとは思っていたが、まさか失敗が前提の作戦だったとは。まあそれは後々聞くとしよう。まずそれよりも先に、聞かなければならないことがある。

部屋の入口から進みながら懐からナイフを抜き、スカリエッティの胸ぐらを掴み上げて刃を首に当てる。スカリエッティは無抵抗だが、ウーノがようやくやくこちらを向いた。だが、攻撃してくる素振りはないのでそのまま要件を口に出す。

「貴様の期待云々はどうでもいいが、名無しについて話がある」

私は今珍しく怒っている。それ故にやや短絡的で、下手をすればウーノが襲い掛かってくる可能性もあるという後先考えない非常に危険な行動だ。だが、今の反応を見る限りではその危惧は無用だったようなので、尋問を行う。

「ナイフを首に当てて脅すのは、話ではなく尋問と言うのではないかな? なあウーノ」

「同感ですが、今回の件に限っては教えなかつたドクターにも問題があります。さすがにフォローできません。諦めて素直に話すべきでしょう。それと、ハンクさんは痛めつけるにしても研究に障害が残らない程度にして下さい」

スカリエツティの肩を持つだろうと思っていただけに、予想外だった。それほどこいつは重大な何かを隠していたということか。ならば、ますます尋問のしがいがあるというものだ。感情を覗くために『目』を変えて、嘘を見抜けるようにする。

「わかつた。スカリエツティ、質問に答えなければ爪を剥ぐ。嘘をついても爪を剥ぐ。一度に一枚じゃないぞ、一回嘘をついたら足の爪を全て。二度目は手の爪を其れ以降は……そうだな。耳でも削ぎ落とすか」

どれも死にはしないが、想像を絶する苦痛を与える。地獄の苦しみ、とでも言うのだろう。よくテロリストを捕まえて拠点などの情報を吐かせるときに使ったが、シンプルかつ効果が絶大な手だ。どんなに口が固い人間でも、早ければ二枚。遅くても五枚剥がせば途端にペラペラと話しだす。

いつもなら手の爪を真つ先にはがすが、手を傷つけると後々研究に障害が出る可能性があるのですそれは避けたいところなので、まず足からとした。どうせ足の爪を剥ぎ終える頃には全て喋り終わっているだろう。

「聞かれた以上は答えるよ。何でも聞いてくれ」

「そうしてくれ。さて質問だが。心当たりはあるんだろう？ 名無しについてだ。どうしてアレの声は私の妹と同じなんだ？」

「ああ、答えるから下ろしてくれないか？ 首を圧迫されてて苦しんだ。これじゃまともに話もできやしない」

「いいだろう」

感情の揺れを見ているも逃げるような感じはしないので、手を離して床に落とす。大げさに首を抑えて咳き込むが、そんな演技には惑わされない。

「さあ、話せ」

「……わかったよ。彼女の声を君の妹と同じにした理由だがね、彼女を器にしようかと思っていたんだよ。顔もオリジナルが健康体に戻ればアレと同じになる」

「ほう」

つまり、私は自分で妹の入れ物をクズに引き渡そうとしていたのか。なるほど、あれが馬鹿な選択をしてくれたことには感謝しなければならぬようだ。私に戦闘技術を仕込んでくれた事といい、ヤツには本当に借りが多い。もっとも、返すつもりなど最初からなかったし、返そうと思っても他ならぬ私自身が殺してしまったので返しようがない。

そうなるの一つだけ許せないことがある。右手を捻り上げて、人差し指の爪と肉の間に横に倒したナイフの先端を押し込む。

「な、なにをする気だい？」

「つまりお前は、私の妹の首を切ったわけだ。私の目の前で」

大事な大事な、私の妹の入れ物となるはずの肉体を。すぐに治るからといって、眼の前で首を掻き切った。それはとてもとても、許せないことだ。

「あ、アレは少し調子に乗りすぎたというか。完成した喜びでハイになっただけというか。ともかくだね……」

抵抗を無視してナイフをさらに押しこみ、先端を軽く持ち上げると、ペリと音を立てて簡単に剥がれた。

「つ~~~~~！」

声にならない悲鳴が部屋全体に響き渡るが、この部屋は完全防音である上にドアを閉めているので、外に声が漏れることはない。手を離してやると、すぐに爪をはがされた指を抑えて蹲った。

「入れ物を作ってくれたことには感謝する。それがマトモな肉体じゃなくてもな。だから爪一枚だ」

「そ、そうかい……」

普通の人間の肉体とは違い、その存在は法に触れるものだ。知られてしまえば保護という名目で貴重なサンプルとして研究に回される可能性が非常に高い。しかし、悪いことばかりでもない。戦闘機人の

肉体は非常に頑強にできている。それに加えて私の再生能力も加わっているとすれば、車にひかれたくらいで死ぬことはないだろう。強姦魔に襲われようとも返り討ちにできる。普通に生活していればまず戦闘機人であるとバレることもない。バレるとしたら病院くらいだが、それはどうとでもごまかせる。そう考えれば良いことのほうが多い。

それを踏まえ、本来なら首を刎ねるところを罰を爪一枚で済ませたのだ。

「部屋に戻る」

それだけ言って部屋を出る。

そして、さきほどの部屋と同じく薄暗い廊下を歩きながら色々と考え始める。これからのこと。

妹のこと。名無しのこと。フェイト執務官のこと。これからの作戦のこと。おそらくは自分を狙って動き出すであろう機動六課のこと。考えなければならぬことは多くあり、しかし与えられた時間は非常に少ない。とりあえず優先順位だけは決めておかねば、と思ったところで、部屋の前に到着。だが何故かトーレが私の部屋の前で立ちふさがっていた。そして私の姿を見るなり、敵意こそ感じられないが警戒心した様子で近寄ってきた。

「来い」

そして、腕を掴まれてそのまま引っ張られる。強化もしていない状態では、私の身体能力は少し鍛えた成人男性とそれほど変わらない。つまり戦闘機人の力で引っ張られたら何もできずそのまま連れて行かれる。なので抵抗はせず、引っ張られる方向へ歩いて横に並ぶ。

「一体どうしたんだ」

「貴様の実力を見誤っていた。これから模擬戦をして力量を再確認させてもらう」

状況がなんとなく把握できた。フェイト執務官を殺さず生け捕りにしたという結果のみを聞いて、私が高ランク魔導師でも打倒できると誤解しているのだろう。個人的に模擬戦というと嫌な経験しかないし、このまま引きずられていった先でもきつとろくな事にならない

だろうという確信がある。なので、誤解を解くために口を開く。「待て、私は確かにフェイト執務官を捕獲した。したが、それは不意打ちで……」

「つまり不意打ちなら仕留められるということだろう。どっちにせよ実力を隠していることには変わりない」

話を最後まで聞かずに、そのまま私を引っ張っていくトール。話を聞くつもりが感じられない。このままだと模擬戦用のフロアーまでそのまま引っ張られていく事になるだろう。高ランク魔導師を相手に会話で隙を作るといってもなく神経を使う作業をした後なのだから、少しは休ませて欲しい。それに考えなければならぬこともある。

ともかくエレベーターは眼の前だ。乗り込んでしまえばそのまま訓練用のフロアへと数秒で到達する。そうなればあとは流れで結局模擬戦をさせられるのだろう。そしてボロ雑巾のようにされてそのままベッドかフロアの床でぶっ倒れて体が治るのを待つしかない。それは勘弁願いたい。

相手は話を聞くつもりがなく、強引に引っ張っている。そして私は模擬戦はしたくない。となると、こちらも実力行使に出る他ないだろう。悟られぬように一瞬で肉体強化を済ませ、自分よりも重い相手に格闘戦を挑むための筋力を確保。膝を裏から蹴ると同時に腕を引くと、少しバランスを崩したので、空いている片方の手で頭を押し込んでそのまま倒す。腕は強く掴まれているままなので、相手の体重が予想以上に重く強く引っ張られて一緒に倒れてしまい、上に馬乗りになるような形になってしまったが、とりあえず目論見は成功した。

「私がやったのは、こういうやりかただ」

きよとんとしているトールだが、すぐに自分があっさり転ばされたことを理解したようだ。あっさり転ばされたことが恥ずかしかつたのか、それとも男性に押し倒されているような状況が恥ずかしいのか、顔を赤くして顔を逸らされた。

「……つまり、卑怯なやり方で捕まえたということか。戦って捕まえたと思ってたのに」

「そこらの雑魚ならともかく。戦闘状態の高ランク魔導師相手に正面から行って勝てるわけがないだろう。わかったなら腕を離してくれ。誰かに見られたら、この状態だと誤解されかねん」

『バッチリ見てるよ。もちろん録画もしてある』

そんなところで、見計らったようなタイミングでスカリエッティから放送が入った。状況だけ見られれば弁解のしようがないので、なんとも。とりあえずスカリエッティが映像をまき散らさないかを心配しておこう。巢の居心地は良いに越したことはない。巢の中に居る他のメンバーに嫌われるよりは、好かれている方が居心地はいいはずだ。

未だに離してくれないトーレの腕を振り払い、カメラとスピーカーが一体になった監視装置へ向く。

『まあ、それよりもだ。君がさらってきたお姫様が目を覚ましたようだ。様子を見てきてくれないか？ 彼女の居場所は医務室、早く行ってあげたまえよ』

相変わらず妙な言い回しを好む奴だ。だが、見てこいと命令されたのなら見てくるしか無いだろう。戦闘ならともかく会話する程度ならマルチタスクを使って考え事も同時にできるし、別に何の問題もない。自室に引きこもって考えるか他人と話しながらの違いだ。

さて、新たな指示もされたことだし、思考を切り替える。彼女のデバイスは海に投げ捨ててきたし、抵抗されてもデバイスが無ければ大した魔法は使えないだろう。近接戦闘もできる魔導師と言っても、彼女の格闘スタイルは鎌、大剣など武器を使用したものが前提で素手での戦闘は全く考慮していない。一応基礎的な訓練は受けているようだが、それでも脅威とは言えない。警戒さえしておけば問題ない。

脅威度の予想も完了したので、床に倒れているままのトーレを置いて移動を開始する。

「待て」

「今度は何だ」

いい加減に若干の鬱陶しさを感じるが、それでも話は聞く。そのために振り向くと、トーレが目の前に立っていた。五歩分くらいは離れ

ていたはずだが、物音一つすら立てずに一步の間合いまで踏み込まれ、顔の眼の前で拍手をされた。猫騙し、という奴だ。少し驚き危うく手が出そうになったがなんとか踏みとどまり、一步下がって相手の顔を見る。なぜか笑顔だ。見て分かる通り敵意はないようだが、行動の意図が読めない。いったい何がしたいのやら。

「驚かせたのはさっきのお返しだ。それと……後で部屋に行ってもいいだろうか、教えてもらいたいことがある」

「物騒な用事でなければ歓迎しよう。もてなしはできないがな」

「それで構わない。じゃあ、また」

私への仕返しが成功したからか、満足気な顔をして去っていくトール。戦闘用に生み出され、それに特化した戦闘機人でも触れてみれば人間らしいところもあるようだ。できれば敵にはしたくないが、万が一そういう事態になり、正面から戦わざるをえない状況になったら……その一面を突くことで隙ができるだろうか。

少し考えてシミュレートしてみた結果、どうやっても無理という結論が早々と出たので、スカリエツテイに言われた用事を忘れない内にまた移動を開始する。奴とていいつけた用事を忘れられれば怒りもするだろうし、私もわざわざ怒られるような真似をしたくはない。

第49話 提案

エレベーターから降りて、廊下を歩く。途中で誰とすれ違うこともなく、目的地に到着する。ドアを二度ノックし、了解も得ずにカードを差し込みロックを解除。金属製の冷たい感じのするドアが、エアアの音と共に重さを感じさせない動きで横にスライドし、開ききる。開いたドアから部屋に入り、堂々と部屋の主の前にあつたソファアに座る。

「調子はどうだ？」

「……」

敵意と疑惑のこもった視線で見つめられるだけで、返事は来ない。鎮静剤の効果はもう切れているはずだから喋れないということはないだろう。拘束するときにも喋っていたから、喉が潰れているということもない。単に喋りたくないだけ、ということだろう。

喋らないのならバイタルサインや見た目で判断するしかないのだが、バイタルを取るためだけに相手に触りたくはない。AMFが効いていても魔力の放出くらいはできるだろうし、魔力を変換した電気を放出されたら困る。痛みは感じなくとも電撃を食らえば動けなくなるし、下手をすれば心臓が止まるからだ。そういった理由から見た目で判断する。

右手に巻かれた包帯には血が滲んでおらず、出血は治まっているようだが、顔色がやや悪い。敵にとらわれているのだから自然と考えられなくもないが、捕まえるときに派手に地面に叩きつけたから頭を打っていないとも限らない。

「頭からの出血や頭痛、吐き気、視界の異常などの症状はないか？」

「……ないよ」

頭を打つたりはしていないと。考えてみればスカリエツティ自らが貴重な研究材料と言ったのだから、検査はキッチリやっているだろう。そういう所見があれば見逃すことなく発見し、処置をしているはず。意味のない質問だった。

「けど……右手が痛い」

包帯を巻いている右手を抱いて呟いた。それを言われても私の知ったことではない。抵抗されなければ私もあんなことはしなかったのだし。かといって抵抗するなども言っていないから、私が悪いのだろうか……一応謝っておくか。

「それはすまなかつた」

「どうしてこんなことしたの？ どうして、ヴィータちゃんを撃つたの？」

「スカリエッツィに頼まれたから」

スカリエッツィの名前を聞いた途端に、彼女はさらに激しく敵意を込めた視線を向けてきた。私はスカリエッツィ本人ではないのだが、私が奴に味方しているという事実だけでも気に喰わないだろう。彼女の仲間を撃つて戦場から離脱させたのも私だし、敵意を持たれるだけの理由は十分ある。

「どうしてスカリエッツィに味方してるの？」

「妹を治してもらうため」

それ以外に私があいつに味方する理由がない。仇を討たせてもらったのには感謝しているが、その分はもう十分働いた。エース魔導師を二人戦線から離脱させたのだから、糞五人分の対価としては十分過ぎる。それでもまだ奴の下で働いているのは、一重に妹のため。復讐も終えた今、私に残ったのはそれ一つだけ。妹だけが私の生きている理由なのだから。

「それだけ？」

「それだけと言ってくれるな。前に言っただろう、私の望みはさつさと死ぬことだと。ああ答えたのは妹が治る見込みがなかったから。だが今は違う。あいつが治った姿を見ることができるようなら、それ以上嬉しい事はない」

「……まあ、たった一人の家族だもんね。でも普通の病院じゃ治せないのかな」

「普通の精神病院で治せるのなら、ここには居ない。そして、あいつは技術だけを見れば管理局の何年も先を行っている。さらには法律に縛られず、ミスを犯して糾弾されることも恐れないから、幅広い選択

肢がある」

管理局からの資金援助を受けているから、そこらの病院よりも良い設備が整っている、ということとは言わないでおく。そこまで言っても困惑するだけだろう。誰しも自分にとって都合の悪いことは聞きたくないものだ。

「じゃあ、管理局が憎いからスカリエッティに従ってるわけじゃないんだね」

「ああ。管理局は嫌いだが、あいつに従うのとはまた別だ」

「……家族のため以外に何か理由がある？」

「無い」

「嘘じゃない？」

「もちろん」

深く頷く。私にはそれ以外何一つ残っていない。家族のため以外にあるはずがない。

「なら、家族のために今すぐスカリエッティの仲間から外れて。今ならまだ管理局に戻る……一緒に戻ろうよ。今のところは罪もそれほど重くないし、罰も軽いものになるように協力するから。妹さんが治った後に、犯罪者の家族って目で見られるのはきつと辛いと思うよ」

正面から赤い目で見つめられる。その目からは先程までの敵意は感じられず、ただ善意のみが込められた視線。だが、善意はあれども現実が見えていない。私の言っていたことを一つとして聞いちゃいない。こいつの提案は妹を切り捨てて一緒に逃げようというものだ。大事な、大事な大事な妹を。赤の他人ならともかくだ。その妹を見捨ててこんな足手纏にしなければならない赤の他人を連れて、この施設から逃げ出し、スカリエッティの追撃を避けながらクラナガンに戻る。できるはずがないし、やるつもりもない。

「現状、エリーを治せるのはスカリエッティだけだ。確かにお前の言うようにこのままスカリエッティに協力して治療を継続させれば、犯罪者の家族というレッテルを貼られることもあるだろう。しかしお前の言うように管理局に戻ればエリーは治ることはない。それ以前

にあいつを連れて管理局へ戻る事はこの戦力からして不可能だ。帰ろうとすれば、彼女を見捨てるしかない。だが置いていけばまず処分されるだろう」

加えて言うならば、間違いなくこの部屋は監視されている。どうか監視されていないはずがない。集音器ももちろんあるだろう。となればこの会話も聞かれてはいるはず。堂々とそんな事を話さなければまだ可能性は億に一つくらいはあっただろうに、おかげでそれもゼロになった。執務官になれるほどの頭があるならそんなことはわかると思うのだが……人間は私が思うほど賢くはない、ということか。隊長も、こいつも。誰も彼も愚かな考えを持つものだ。

そして、私も例外ではない。

「話が変わるが、お前はこれから自分がどうなると思う」

「……わからない。どうなるのかな」

「このままだと、スカリエッティに研究材料として色々とされるだろうな。資料のはじめの方には薬の投与、細胞の摂取、環境への適性……あとは妊娠は可能かどうか、というのもあった。少なくとも人間的な扱いは期待しない方がいい」

「え……いやだよそんなの！ まだ誰かと付き合ったこともないのに！」

顔を青くして、自分の体を抱えて私から遠ざかろうとするフェイト。私だってこういうのはあまり口に出したくはなかった。だがこれからする提案を飲ませようと思ったなら強烈な脅しをかけなければ、きつと承諾してもらえないだろうと思えば口にしたのだ。

今の状況を見ているであろうスカリエッティからは後で色々と言われるだろう。裏切りとまでは言わなくても、自分の望まぬことをしたという事でまた無茶な仕事を押し付けられるかもしれない。しかし、それだけの価値がある提案だ。

「そこで私から提案がある。管理局を裏切って、スカリエッティの戦力として動かないか。優秀な戦力になる人材をスカリエッティの遊びで台無しにされるのは惜しい」

「う……でも、それってなのは達と戦わなきゃならないわけだし」

それは嫌だが、望まぬ妊娠をするのもまた嫌と彼女は言っている。だが、現実是非情だ。残念ながらどちらも選ばないという選択肢など存在しない。

「私の提案に乗るメリットを説明しよう。私は使う武器の特性上、殺さずに相手を倒すというのは難しい。だから機動六課と戦闘になれば今度こそ死人が出るだろう。つまりお前の親しい人間を殺すことになるかもしれない。だがお前が戦力に加われば私は戦わなくて済む。お前の姿を見れば相手は油断するだろうから、そこを突いて非殺傷設定の魔法を撃ちこめば相手を死なせずに無力化できる。あとは望まぬ苦痛と性行為を受けなくても済む、ということ。デメリットは、それが犯罪であるということ。元仲間と敵対すると、それから来る精神的苦痛位か。受けない場合は元仲間と戦わなくて済むが、親しい人物が死ぬ。望まぬ苦痛と性行為を受けることになる……」

そこまで言ってソファから立ち上がる。小さな音だが、廊下から足音が聞こえた。それも二人分。おそらくスカリエッティとウーノだろう。実験の準備が整ったから連れて行くために来たのか、それとも予定を狂わさせないために私にこれ以上喋らせたくないからか。どちらにせよ話はもう終わらざるをえない。

「今すぐに決めろとは言わないが、スカリエッティは近々総力戦を挑むつもりで居る。時間はあまりないぞ」
「……」

最初と同じように沈黙してしまったフェイトに背を向け、ドアの方を向く。足音はドアの前で止まったので、私が出てくるのを待っているのだろう。

「良い返事を期待している」

背を向けたまま一言だけ発し、ドアを開いて廊下に出る。真横に立っているスカリエッティとは目を合わせず、そのまま通りすぎようとする。

「案外優しいのだね、君は」

スカリエッティからかけられたのは、文句でもなく皮肉でもなく意外な言葉だった。思わず足を止めてしまう。

「面白くない冗談だな。私が人情で他人を助けるとでも？」

「おやおや、照れ隠しとは君らしくもないね」

「……会話中の様子からして、異常は無かった。頼まれたことはやったから部屋に戻る」

彼女には一度助けられた借りがある。それを返すという形で、今回の提案を行ったのだ。断じて照れ隠しなどではない。

第50話

フエイトとの話は終わった。そして今は、私と入れ替わりに入ったスカリエツティが彼女と話をしている最中だろう。彼女が一体どのような選択をするのか……それによって、今後の方針が大きく左右される。もしも彼女が協力を拒んだのなら、スカリエツティは夢中になって実験をするだろう。そうなれば私の妹の治療法の研究は後回しにされる可能性が高い。脳の移植など聞いたこともない手術を行うよりは、もつとリスクの小さな方法を探してもらいたい。あとあまりそちらに集中し過ぎると管理局への攻撃作戦に粗が出てくる可能性すら出てくる。

だが、フエイトがこちらに協力するとしても問題が幾つかある。

一つは反逆の可能性。何かしらの対策を練っておかないと、戦力として運用するどころかこちらに噛み付かれて重傷を負う可能性がある。

二つ。協力すると口で言っても、やはり元の巢に戻りたいという気持ちはあるだろう。従うふりをして脱出され、こちらの情報をみすめす持つて帰られては今後の行動に支障が出る。

三つ。協力し、管理局側を攻撃するとして、全力を出すかどうか。やはり元味方に対して刃を向けるのは躊躇うだろう。全力を出さない兵士など居ても意味が無い。

これらを解決するにはどうすればいいだろうか。薬漬けにして抜けれなくする……パフォーマンスが低下するから却下。それに戦闘中に薬が切れて戦えなくなったら、役立たずもいいところだ。洗脳するのも同じく本来の能力を発揮できないだろうから却下。となると、脅迫位しか方法がないか……しかし何をネタに脅そうか。これとって彼女を脅せるようなシロモノは手に入れていない。彼女自身以外は……死を恐れない、という事は多分無いだろうし、それがいい。爆弾付きのネットワークスでもくれてやろう。

そこまで考えた所で、ちやうど自分の部屋まで戻ってきた。カード

をドアの横にある機械に通してロックを解除し、ドアノブを回して扉を開く。靴を脱いでスリッパに履き替え、コートを脱いでハンガーにかけて部屋の奥へと進む。座って考え事をしようと思っていたソファーには、既に先客が居た。

「遅かったな」

読みかけの本を閉じて、トーレが座ったままこちらに向く。

「それほど時間は経っていないはずだが」

時間にして十分と過ぎていない。遅いと言われるには短すぎると思う。それでも、トーレからすれば遅いと判断するほど長い時間なのだろうか。とりあえず対面のソファに座り、トーレに向き合う。

「それで、話は何だ」

「あー、そうだな。どうしてお前は命を粗末にするんだ？」

「命を粗末に、そう見えるか？」

自分ではいまいち自覚がないが、周りからはそう見えるのだろうか。まあ、確かに少し無謀なことをしたりしているかもしれないが。

「ついさつきだって、私がうっかり反撃していたらお前の頭くらいは簡単に吹きとばせてたぞ」

「そうだな。迂闊だった」

足をかけたのはまずかったか。せめて後ろから銃を向けるくらいにしておけばよかった。いやそれもまずいか。

「それに、その前もだ。エース魔導師を捕獲するのに、どうして私に声をかけなかった。一言言ってくれば手伝ってやったのにどうして戦闘向きじゃないセインとクアットロ、それと調整も済んでないあの新人を連れて行ったんだ。振り返ちにされる可能性だってあっただろう」

「それについては、言い逃れはできないな」

声をかけるなどは言われていなかったし、後でバレるのは間違いないだろうが、スカリエッティに黙って連れて行くのは可能だっただろう。それをしなかったのは私だ……ひよつとすると私は、無意識の内に死にたがっていたのかもしれない。

「その前は護衛も観測手も付けずに単独で狙撃したし。ひよつとして

死にたがりなのか？」

「……そうなのかもしれない」

痛みを感じないから、負傷を気にせず戦っているからそう見えるかなのかもしれないのに加えて、そうでもしないと。言われてみれば、自分の命を軽んじている節はいくらかある……まあ、フェイトが戦力に加われれば私が前線に出る必要もなくなり、命を投げ出すような真似をしなくて済むだろう。加わらなくともどうにかして無理やり前線に引っぱりだが。せっかくリスクを犯して捕まえたのに実験材料としてダメにするのはあまりに惜しい。

「まだ付き合いは浅いが、それでもお前は仲間だ」

仲間と認めてもらえていたのは意外だが、ナンバーズの中でちゃんとした会話をしたことがあるのは、ウーノ、ドワーエ、トーレ、クアツトロ、セイイン、チンク。ウエンデイからはボードのスペアを借りるときに、扱い方を少し聞いただけ。あとは軽い挨拶だけで、一言も言葉を交わしたことがない。それを仲間と言ってもいいものか。

「ありがたい話だが、私は戦闘機人じゃないし魔導師でもない。特別に強いわけじゃない。再生能力が少し高いだけで、最悪殺傷設定の魔力弾が頭に一発直撃しただけで死ぬ。そんな奴の心配をしてたらキリがないぞ」

そうならないために今のところ撃たれる前に撃っていたが、それができたのは私の存在が知られていなかったから。八神はやては私がヴィータを撃った犯人だと確信しているし、そうなれば確実に六課メンバー全員に狙撃への警戒を命じているだろう。狙撃手は警戒していない相手を撃つてこそ真価を発揮するのに、警戒されてしまえば脅威はかなり減少する。対物ライフルなら普通の防御魔法は抜けるだろうが、威力はかなり減少するから致命傷を与えられるかどうかかわからない。できればもつと口径の大きな、初速が早く、貫通力が高いものが欲しい。

しかし、今持っている物以上のものとなると地上本部の保管庫から盗んでこないと。だがアレにそんなリスクを犯すほどの価値はないし、スカリエツティに今から開発を頼んでも間に合わない。今の武器

で満足しておこう。

考えが逸れてしまった。今はトーレとの会話の最中だ、それを忘れてはいけない。

「それなら心配をかけさせないよう、強くなれ」

「無茶を言うな」

私のスタイルは既に完成している。相手の手の届かない場所から一撃入れて殺す。外すか仕留められなければ逃げる。という卑怯な物だが。しかしそれ以外のやり方は知らない。以前は魔力がないから魔法は使えなかったし、肉体強化以外の魔法を使った白兵戦は経験がない。今は蛇のお陰でそれなりの魔力があるが、砲撃、射撃魔法などの複雑な演算式を必要とする魔法を扱いながら、戦闘行動を取れるほど私の頭の演算能力は高くない。それを補助するためのデバイスも、そこらの犯罪者から殺して奪った安物の上事務処理特化に改造してしまっているため、戦闘にはとてもじゃないが使えない。バリアジャケットを構築して余波から身を守る程度が限界だろう。

つまり私は質量兵器を扱うのと、近寄って殴る蹴る切る以外の戦いはできない。優秀な近接戦闘魔導師は身体能力と付け焼き刃な技術で圧倒できるほど弱くない。つまり実質役に立たないと考えてもいい。そこをどうにかして役に立てるようになれ、ということなのだろうが、あまりにも時間が足りない。無理な話だ。

「それに私の仕事は、敵を狙って、撃って、殺すこと。殴り合わなきゃならない距離まで近寄られた時点で負けだし、近寄られる前に逃げる」

「そういう状態になっても負けにならないために、強くなれと言っている」

「一週間や二週間程度鍛えた程度で何になる。たったそれだけの訓練でAランクの近接魔導師と殴り合いで勝てるわけがないだろう」

「なら近寄った敵を撃ち落とせ。お前の武器は咄嗟に張った防御魔法くらい貫通できる威力があるんだろう？」

「無茶苦茶だ」

痛覚はないはずなのに、頭が痛い……気がする。対物ライフルはた

だでさえ長い狙撃銃の中でも最大級の大きさだ。子供の身長ほどの長さがあり、かつ十キロを超える重量を振り回して高速で動く魔導師に照準をつけ、弾丸を当てるなんて、肉体を強化していても無茶だ。かといってPDWでは火力が足りない。拳銃など論外だ。結局蛇か拳でケリをつけるしかない。

やはり、近寄られた時のことは逃げることで以外考えない方がいい。しかし……

「そこまで言うなら、私が殴りあう必要がなくなるように、敵を蹴散らせ」

それが現実的だ。私がこれ以上強くなるよりも、ずっと現実的。

「それがお前の役目だろう」

「私が居なければどうなる」

「他のやつが居るだろう。さつきも言ったように、狙撃手の仕事は遠距離から敵を撃ち殺すこと。殴りあう距離まで寄られたら負け。わかったか」

他のナンバーズに、ゼストにルーテシアの召喚獣。フェイトの返答により、彼女も戦力に加わる。それに加えて私はずっと遠い場所から狙撃をする。それも最低でも戦場から数百メートルは離れた位置から。それだけの距離を前衛を無視して突破できるほどのスピードを持つ奴はフェイト位しか居ない。警戒が必要なのは、それだけの距離から狙撃または砲撃を仕掛けてくる奴。高町なのは、八神はやて。そして、元狙撃手だったというヴァイス・グランセニック。この三名のみ。あとの連中は近寄られたらどれも同じ結果にしかない。

「それもそうだが。訓練して無駄ということはないだろう」

「無駄じゃないが、効率が悪すぎる。その間射撃の訓練していたほうがマシだ」

本気で殺す気のシグナムを相手に格闘戦したら、こっちが万全の状態でもきつと三秒持てばいい方だ。前にシャツハとかいう騎士を相手に蛇を連続で変形させて不意を打ったが、結局無駄だったし。勝機があるとすれば、対物ライフルを腰だめで狙いを定めて、撃つ。それはあまりにも現実的じゃないから前衛が突破されたら抵抗は考え

ずさつさと逃げる。それが最善。

「……そうか」

少し残念そうに見えるのは気のせいか、と思いかマをかけてみる。
「訓練に付き合っただけで欲しいのか」

「そういうわけでは……」

目をそらすのと、言葉に若干の乱れ。嘘をついている人間特有の仕事。眼を使って覗くまでもなく、黒だ。

「それなら、フェイトにでも頼むんだな。あいつならお前の高速機動にも対応できるはず……ん？ あ」

そこまで言っただけで、一つ大変なことに気が付いた。自分のやってしまったことだが、自分が銃と肉体だけで戦っていたからすっかり頭から抜け落ちていた。自分が魔導師ではないから、すっかり忘れていた。そして、事の重大さに思わず頭を抱えた。

「どうした」

「海に投げ捨てた」

「何を」

「あいつのデバイス」

「はあ!? いや……だがドクターの命令はこなしたんだから、怒るのは筋違いか。だがあいつがこちらに加わるとしても、デバイスが無ければ戦力にならないぞ」

そう。フェイトのデバイス、バルディッシュに発信機のような機能がついているかもしれないと思いついて、アジトが割れる可能性を警戒し海に投げ捨てたのだが、魔導師はデバイスによる補助がなければ大規模な魔法を行使できない。そこらのDやCランク魔導師ならば標準的なデバイスを本人に合うように調整すれば問題ないが、Aランク以上となると完全な実力を発揮するために特別なデバイスが必要になる。

しかも、彼女のデバイスは幼い頃からずっと使用し続けてきたものだ。今更アレ以外のデバイスを与えた所で、能力の大幅低下は避けられないだろう。

「戦力に加える予定だったが……マズいな」

今から捨てた場所に行って、潜って探すか。もう捨ててから時間が

経っているし、きつと沖に流されているだろうから厳しい。今から行っても夜になるからさらに難易度が増す。最悪スカリエツティにデバイスを作らせて、というのもアリだろうが。やはり探するのが最善だろう。

「トール。ナンバーズの中で一番索敵能力が高いのは誰だ」

索敵能力が高いということは、敵を探すことに優れているということ。探すものが敵かデバイスかの違いだ。サイズがかなり違うが、できないことはないだろう。できてもらわなければ困る。できないと言ってもやらせる。あとは、信号を発していた場合に備え信号遮断用の容器が必要だ。探せばそういう物の一つくらいはあるだろう。無ければクアットロにジャミングさせる。

「デイエチだが……まさか、探させるつもりか？」

「もちろん。さすがに潜るのは私が潜るが」

戦闘機人は体が非常に重いから、潜らせるつもりはない。潜らせて浮かんでこれずに溺死しましたでは、正直どう責任を取ればいいかわからないし。

「泳げるのか？」

「訓練してたから、人並みには」

「どうやって行くんだ。デイエチは飛べないぞ」

「ライディングボードのスペアを使う。あれに乗せて行けば、飛べなくても問題ないだろう」

スペアと言っても、あれは魔法使用機能を全てオミットして機関銃やミサイル、爆弾、緊急離脱用のロケットブースターを載せた全くの別物になっているが。スカリエツティに許可はもらっているから問題ないだろう。多分。

「探している間に襲われたら？」

「ボードに載せてあるブースターに点火すれば逃げ切れる。レーダーは海面スレスレを飛行していれば探知できないし、振り切ったらどうにかして戻ってくればいい」

完全空戦可能な護衛を付けたほうがより安全に探せるが、素早く動くためには人数が少ないほうが都合がいい。こういう考えをするの

は私が過去仕事をするときに、大体単独かツーマンセルで動いていたからだろう。その方が証拠も残らないし。

「護衛について来てくれるなら、それはそれで有難いが」

「なら一緒に行かせてもらおうか。お前一人ならともかく。大事な妹をお前の巻き添えで敵に捕まるのはマズイ」

「……そうか」

計画通り。というわけではないが、ダメ元で頼んでみて正解だった。ナンバーズの中で最も戦闘力が高いトーレが護衛につくのなら、これ以上心強い事はない。ソファの肘掛けを抑えながら立ち上がり、ドアを開いて出て行く。

「どこへ行く」

「出るなら早い方がいいだろう。準備だ」

潜水具は酸素ボンベ以外は不要。事務処理特化に改造したデバイスでも、水圧に耐えられる程度のバリアジャケットなら構築できる。それ以外で必要なのはデイエチとボードと容器のみ。ボードは倉庫に置いてあるし、容器はスカリエツティに聞けばわかる。デイエチも頼めば多分協力してくれるはず。してくれなければ、させるだけだが。

第51話 潜水

視界に映るのはどこまでも続く海の青と、空の青。海面ストレスを飛んでいるせいで、時々風に飛ばされた波の飛沫が頬を打って不愉快だ。しかしこれ以上の高度になるとレーダーに探知される可能性がある。面倒ながら高度を上げる訳にはいかない。自分で提案しておきながら少し後悔している真つ最中だ。

「止まって」

ボードの後ろに乗っているデイエチの声に従い、ボードに自動ブレーキをかけて徐々に速度を落とし、完全に停止させる。何事かと思い後ろを向くと、デイエチがある一方に視線を固定させていた。私もそちらを向くが、空の青と雲の白。あとは海鳥達だけ。

「管理局のヘリだ。これ以上進んだら多分見つかる」

見えないし音もしないが、デイエチはナンバースで最も索敵能力が高いという話だ。信用できる。やはり無理やり説得して連れてきて正解だった。しかし、先を越されたとなるとどうするべきか。

「距離と方向は」

「10時の方向に6000。高度は200でこっちに向かっている。相手の探知範囲に入るまで、一分もない。砲撃は射程外でしかも護衛に高町なのが付いている……あとデバイスからのものらしい信号が前方800、深度120から発信中」

「どうする。蹴散らすか」

トーレの提案について少しだけ考えてみる。出てくるなら首都航空隊と思っていたのだが、まさか機動六課直々に出てくるとは。ボードに搭載してある対空ミサイルでヘリを狙ったとしても、アレの防御力は桁違いだから撃墜は不可能。高町なのはトーレが引き受けてくれるとしても、護衛が一人だけということはないだろう。新たに出てきた護衛の攻撃を避けながら、ボードに載せている機銃でヘリを落とせるほどの技量はない。

結論、交戦は避けるべき。

「今回の目的は戦闘じゃない。デバイスの回収だ。見つかったら逃げ

切ればそれでいい」

「拾える？」

「交戦開始までには無理だな」

防水仕様のインカムを頭につけてからデバイスを起動し、潜水服をイメージしたバリアジャケットを展開する。昔はこれだけで少し疲れが出るほど魔力量が低かったのだが、今では全く何も感じない。蛇の恩恵の一つを今あらためて感じた。

重たい酸素ボンベを背負ってベルトで止め、手首に深度計とコンパスを。足首にダイバーナイフを装着。信号遮断用の箱を持つて準備は完了。ボードの上に立ち、海を見る。

「デイエチは相手の探知範囲外までボードを移動させて待機。トーレは私をデバイスの反応のある場所まで運んで、その後は私が浮上するまで上空で待機。交戦の判断は任せるが、私が浮上したらすぐに回収してくれ。あとデイエチは合図があるまで絶対に手を出すな」

「わかった」

「まあ、いいが」

ボードの上に降りてきたトーレに正面から抱きかかえられ、そのまま浮き上がり、目標地点まで運ばれる。バリアジャケットのおかげで風圧は全く感じないが、海に映る波からかなりの速度で飛んでいることがわかる。

こうも他人に身体を密着させるのは初めてなので非情に落ち着かないが、相手に敵意はないと自分に言い聞かせて落ち着かせる。しかし、トーレも同じ気分なのだろうか。不自然に顔が赤いし、密着しているせいで心臓の動きもわかる。さつきから心拍数が上がりっぱなしだ。

「顔が赤いし、心拍も増大してる。肩の力を抜け、緊張し過ぎると落とされるぞ」

「大丈夫だ……クソ、誰のせいだと思ってる」

「私のせいだ。しかし、別にこの運び方じゃなくても良かったんだが」「この方が運びやすいだろう！ それよりも目標地点だ。落とすぞ！」

「感謝する。幸運を」

手を離された直後に蛇を起こしてパラシュートのような形で出して急減速し、速度を落とした状態で着水。ヘリの来るであろう方向を見ると、羽の生えた何かがちらに飛んでくるのが見えたので、すぐに真っ暗な海中へと身を沈めた。潜りながら蛇を再度変形させて、先端を銜のように尖らせて見えな海の底へと伸ばす。蛇は水の抵抗などありはしないかのように急速に伸び、数秒で伸びが止まった。

『敵接近。交戦する！』

頭の中に直接響く念話を受け、早めに取つてこなければと少しだけ焦りが生まれる。蛇を腕に巻きつけて、何度か引つ張つても抜けないことを確認し、一気に縮める。身体が蛇に引つ張られて暗い水の底へと猛スピードで沈んでいく。

飲み込まれるような黒い海。水の抵抗は大きく、潜るスピードを早めれば早めるほど水流に身体がかき乱され。深みに潜れば潜るほどバリアジャケットの上からでも身体を包む圧迫感が増加していく。だがまだ持つだろう。持つてもらわなければ困る。

そして、しばらく潜り続けそろそろ限界かというところでようやく底が見えた。蛇を縮める速度を落として、あとは慣性に従って海底に降り、地面に足をつける。

「……」

一息ついて海面を見上げるが、まるで夜の空のように真っ黒だった。空と違うのは星があるかないかだが。

『ダイエチ。デバイスの位置は』

デバイスの補助を得つつ念話を送る。初めて送るが、うまく相手に伝わっていきければ。

『念話使えたんだ。インカム持ってた必要なかったじゃん。デバイスの位置は……少し流されてる。南に60mほど進んで。修正の必要があれば適宜教える』

ちゃんと伝わったようだ。

『了解』

身体を寝かせ、バタ足で海底を這うように泳ぐ。ライトに惹かれるのか時折魚が前を横切っては、私の姿を見て逃げていく。やはり地上を走るのとは訳が違い、進む速度はとても遅い。空戦魔導士ならば水中でもある程度自由に動けるといふ話は聞くが。やはり陸戦一辺倒の私にはそううまくはいかない。こうやって地道に動くしか無い。

『一人海に潜った！』

『そうか』

トーレからの緊急の念話にそうとだけ答え、泳ぐスピードを上げる。今の私は蛇以外にろくに武器を持っていない。追いつかれればろくな抵抗もできずに捕まるだろう。そう考えるとのんびりはしてられない。

そして、それからデイエチの指示に従い泳ぎ続けた……そして、大した障害もなく。潜ったという魔導師に追いつかれることもなく、ようやく目的の物を見つけた。ライトで照らした先には、海底を転がる金色の宝石……だが、見つけたはいいもののある意味では魔導師よりも厄介そうな物と出くわしたので、驚きに一度泳ぎを止めるほど。

それは、とてつもなく大きなサイズの鮫。それが一匹、私と目的の物との間に割り込んできたと思うと、私を餌と認識したのかグルグルと周りを泳ぎ始めた。その鮫がどれだけ大きいかと言うと、口を開けば直立した大人一人が余裕で入りそうな位。あまりの大きさに息を飲む。しかし目的のものが目の前にある以上は引き下がれないし、のんびりしては潜ったという魔導師に狩られる。

覚悟を決めて、デバイスに向けて蛇を泳がせる。それと同時に鮫がこちらに頭を向けて、その大きな口を開き凶悪な牙をむき出しにして突進してきた。陸上ならいざしらず、水中ではろくな回避行動が取れるはずもなく。ダイバーナイフを抜いて鮫の弱点と言われる鼻先に突き刺すくらいしか抵抗の手段はなかった。

そして、当然そのくらいの攻撃で巨体が止まるはずがなく。バリアジャケットごと突っ込んだ腕を食いちぎられ、さらに巨体による体当たりをまともに受けてしまう。水中とはいえどその衝撃は凄まじく、胴体を庇った左腕がマッチ棒のように折れるほど。

意識を失わなかったのと、食われたのが体ではなく腕だったこと。そして私が痛みを感じない体質であったのが不幸中の幸いだろう。おかげでパニックにならずに、ショック死もせずに済んだ。ひとまず食いちぎられた腕に蛇を巻き、簡単な止血を行う。目的のものであるデバイスを啞えた蛇を縮めて手繰り寄せる。だが鮫は腕一本では満足していなかったのか、また私の周りをぐるぐると泳ぎ始めた。弱るのを待っているのかまた突っ込んでくる今のところ気配はないので、折れた腕をなんとか動かしてデバイスをさっさと箱に放り込む。それからまたじつと鮫と睨み合う。問題は、こいつが逃してくれるかどうかだ。

『その貴様！ 動くなよ！』

と、念話が入ると同時に鮫が上を向く。私も眼をこらして見ると、赤色の、明確な敵意を持った誰かが降ってきて、鮫のヒレが一つ切り落とされた。何が起きたのかはよくわからないが、とりあえず逃げるチャンスだというのはわかったので蛇の銛を海底に突き刺す。急な水圧の変化なんて関係ない、さっさと浮き上がらないと死んでしまう。

『トーレ、回収準備。浮上する』

『わかった。無事か？』

『生きてはいる』

蛇を突き刺したまま、一気に伸びろと念じる。グン、と体が持ち上げられ、上方へ……海面に向かって加速する。それに追うように鮫のヒレを切り落とした誰かが急浮上しようとしたのが靄の動きでわかったが、もう一つの巨大な殺意の塊……多分傷つけられて興奮した鮫のものだろう……に飲まれて消えた。まあ、数秒としない内にその塊が消え、中から靄が出てきたが、時間は稼げた。

特に何の妨害も受けること無く、派手に水柱を上げながら水面を突破。重力の重みが全身にかかり、棒のようになった蛇にしがみついているはいられなくなり、海面に体を落として、力を抜いて浮かべる。

「バリアジャケット解除」

水圧に耐える必要がなくなったので、ジャケットを解除してしま

う。改めて腕を見ると、二の腕から先が完全になくなっている。その分デバイスの演算に余裕ができたので、今度は止血のためにバインドを使用。蛇ではそれほど締められなかったが、バインドと合わせればよりキツく締めることが出来る。

「……よし」

縛った箇所から血が出るほどにキツく締めると、食いちぎられた断面からは一滴も血が出なくなった。それはバインドの効果があったからなのか、それとも血が出すぎたからなのか。どちらにせよ止血は完了した。あとはトーレに回収してもらっただけだが、そちらが早い私が殺されるのが早い。すぐとなりで水柱が上がり、先ほど鮫を殺したであろう誰かの姿が水を振り払って現れた。

その誰かとは、機動六課ライトニング分隊副隊長。シグナム二等空尉。彼女は水面に力なく浮かぶ私を見下ろし、一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐに剣を構え私に向かってきた。血が足りずに回転の遅くなった頭でも、一瞬でまぜいとわかった。しかし蛇は止血に使っているし、デバイスは防御魔法を使うだけの演算能力がない。箱で防ぐには、壊れてしまったら信号が漏れてアジトの位置を特定されてしまう。結果、肉体を強化して体で直接受けるしかなかった。

自分にできる精一杯の抵抗をしても、それをあざ笑うかのように突き出された剣は筋肉の壁を貫通し、内蔵を切り分けて背から突き抜ける。

「ッ!!」

突き刺さった剣を蛇を巻きつけて固定し、それ以上動かないようにする。これでは腕を止血した意味が無い。

「やはり貴様か、オズワルド!」

「やはり……と言われても何のことだかな」

腹に突き刺さった剣を片腕で抑えながら返事をする。それにしてもいきなり殺傷設定で剣を突き刺してくるとは恐れいった。この短い間に管理局の方針は変わったのだろうか、それとも単に殺したいほど嫌われているだけか。

おそらくは後者だろう。蛇も使っているし、怒りで理性を失ってい

るか。便利だが、こういう時には短所が目立つ。

「とぼけるな！ ヴィータを撃つたのも、テスタロッサを拉致したのも、貴様じゃないのか！ でなければなぜここに居るか、説明してみせろ！」

「ただのダイビングっ……」

そう答えると顔を殴られた。殴られた顔は痛くもなんともないのだが、腹に剣が刺さったままで殴られたのがマズかった。腹の中で剣が暴れて出血がひどいことになった。これほど痛覚がなかった事がありがたく思ったことはない、あつたらきつとこれほど冷静では居られなかっただろう。そして、この状況で希望を見出すこともできなかっただろう。

「あまり私を怒らせるなよ。私は貴様をいつでも殺せる」

「わかった……わかった」

喉元までせり上がってきた血を、そのまま相手の顔面に吐き出して視界を潰す。そしてすぐにバインドをもう一つ展開して互いを縛り付ける。粗末なバインドで、高ランク魔導師の手にかかれればあつという間に解除できるだろうが、解除されたらされたで構わない。意表を突くことだけが目的なのだから。それに彼女が私を本気で殺すつもりならば解除されても逃げないだろうし、そうなれば効果範囲からは逃れられず致命傷でなくともなければ相手に少なからずダメージを与えられる。そうでなければ、私は生き残れるかもしれない。

こうして密着していればこれからする事の威力も完全に伝わるし、おまけに剣も刺さったまま動かないという、一石三鳥の策。投げる石は私の命だが、ひよつとしたら助かる可能性もある。そこは蛇の機嫌にかけるしかないが。

「貴様何を……まさか！」

「私は、管理局が嫌いだ。家族を殺して、私と妹の心を壊してもまだ飽きたらず。さらに私に濡れ衣を着せて、殺そうとするなら」

箱を持ったままの左腕をシグナムの背に回し、囁く。

「お前も道連れだ」

これからやるのはこの前こいつにやった事と同じ。切り札だが、そ

ここまで複雑なものではない。魔力さえあれば誰でも使える単純な方法。魔法とも呼べないような、単純な物。私とシグナムの間に魔力の球を作り、そこに前に使った程度の魔力では目眩まし以上の効果は得られないが、今は抑える必要はないのだから、全開で行く。ひよつとしたらAランクの砲撃魔法を使う位の魔力量はあるかもしれない。しかし確実に殺すならまだ足りないので、さらに魔力を注ぎ込む。それを私とシグナムの間に全て集めながら、トーレに念話を送る。

『爆風で目眩ましする。死ぬかもしれないが、回収頼む』

『馬鹿かお前は！』

馬鹿。そう言われても、それしか方法がないのだからそうするしかない。私はいつもそうだ。今も、昔も、先があればこれからも。

「クソツ、付き合ってられるか！」

注ぎ込んだどす黒い色の魔力。それが私の処理能力の限界を超える前にバインドが解かれ、腹に刺さっていた剣も抜かれて、シグナムが私を蹴り飛ばして離れる。肋の数本は折れたかもしれない。

その直後に球形を保っていた魔力球が崩壊し、内部に込められていた魔力が炸裂。暴力的なまでの魔力が全身を爆圧で叩き潰そうと、ゆっくりと迫ってくる……この感覚はあくまでも危機的状況を目前にして、感覚だけが暴走しているからゆっくりに感じているだけというのわかるが、それに身体が追いつかないのでなんとも歯がゆい。体を守るために蛇を盾のように展開しようとするが、全身をかばうには少し間に合いそうにないと、焦ることなく理解する。となれば、どこを守るべきか。

胴体を守るべきか。否、既に背に貫通する傷をつけられており、改めて守る必要はない。

心臓や肺のある胸を守るべきか。否、既に大量出血し、血液を送るポンプの役目などそれほど果たしていない。呼吸も、血液が足りず酸素が全身に行き渡っていない以上意味が無い。

頭部。ここを守らなければまず即死する……今回の目的はデバイスの回収だが、命をかけるほどではない。短い時間でそう判断し、蛇を頭の前に展開しようとしたところで、強烈なGが身体に加わり、意

識がブラックアウトした。

第52話 危機

『……先の戦闘で、ハンク・オズワルドは最後に魔力を暴走させ自爆。高機動型戦闘機人は爆発と共に反応をロスト。ハンク・オズワルドですが、今のところ死体は見つかっておりません。しかし、先にお送りしました映像記録にありましたように片腕を失い、さらに腹部に剣を刺されて、十分に致命傷と言える傷と、致死量の出血が確認されましたのでおそらく生きては居ないだろうというのが医療班の見解です。それと、フェイト執務官、及びそのデバイス共についてですが、未だにハンク・オズワルドが犯人であるという証拠は見つかっておりません。なお今回の件についてレジアス中將から、直接地上本部に来て説明するようにと要求が来ております。以上で、報告を終了します』

「報告」苦勞様。通常業務に戻って」

部下からの報告を聞いて、ウインドウを閉じる。

「はぁ……」

「そうですか……ハンク元准尉が」

「そういえばグリフィス君も准尉やったな」

「ええ。僕と違って現場を経験した叩き上げだから、一度話をしてみたかったんですが……結局、一度も話すことはありませんでしたね。その機会も永遠に失われてしまいました」

「そか……」

もう、色々な感情がゴチャゴチャになって……ため息しか出ない。病院で治療を受けているヴィータの事を考えると、狙撃した犯人である彼が死んだという報告は確かに嬉しい。他人の死を喜ぶなんて私も随分と酷い考えをするようになってしまったと少し落ち込むけど。けど、喜んでばかりもいられない。フェイトちゃんは未だに姿を眩ませたまま、手がかり一つすら見つからないのだから。私たちに何の報告もなく、市街地に車を乗り捨て、路地裏に小さな血痕だけ残して突然姿を眩ませたフェイトちゃんと、その付近のゴミコンテナから発見された『消音器の着いた銃を持った』複数の管理局員の死体。それも死亡推定時刻も行方不明になった時間と重なる。一体何故管理

局員が銃を持っていたのかはわからない……単なる偶然？ ありえない。この管理局で、しかもミッドチルダで、銃を持った管理局員が警備にあたっていているなんて話は聞いたことがない。しかも、消音器がついてるなんて地球の警察でもありえない。あつたとしても特殊部隊……

「特殊部隊……」

考えを一旦その言葉についてシフトする。あの死体が全て特殊部隊だとしたら、銃を持っている理由は当然誰かの殺害になる。その誰かとは誰か……あの時間帯、フェイトちゃんが消えた付近にその対象となるような人間は存在しなかった。ならば、その目標として一番可能性が高いのは、フェイト。彼女の役職は執務官。故に、様々なことを知っているし、調べている。当然知らればマズイ情報だつてあるだろう。だが、彼女はここ最近捜査といえばハンク・オズワルド元准尉についてのことばかり……彼の事を深く調べたばかりに特殊部隊を差し向けられたという結末か。しかし、彼女が殺されたにしては現場に残った血痕があまりに小さかったし、彼女が振り返りにしたのならまず全員非殺傷設定で気絶していて、それに加えて戦闘の痕跡が残るはず。ところが現場には血痕以外に特に痕跡は残っていないかった。魔法を行使した痕跡すらも。

これは姿の见えない第三者が居ると考えていいだろう。ならばその第三者とは誰か。フェイトちゃんに魔法を使わずに、かつ魔法を使わず、証拠も残さず捕獲できるような化物が……そんなのは、戦闘機人位だろう。

……私のこの考えに間違いがないのなら、彼女をさらったのは戦闘機人。デバイスを回収しに戦闘機人が現れたのは彼女を戦力として運用するため。となれば回収に現れたハンクも加担しているのだろう。一体何が濡れ衣だというのか。調べられて困るような背景を持っていく上に、スカリエッティに加担しておいて。濡れ衣ではなく墨染めの衣だろう。真っ黒だ。出来ることなら洗いざらい全部吐かせてから裁判にかけて死刑にしたかったけど、もう死んでいるのだからそれはできない。

「……死？」

そういえば、彼はどうして死んだ？ 自爆して死んだ。

なぜ？ 致命傷を負っていたので、道連れにするため。

致命傷を負わせたのは、道連れにしようとしたのは誰？ シグナム。

「……」

マズイ。非常にマズイ。今になって冷や汗が滝のように流れてきた。彼はヴァイターを狙撃した犯人なのだろうが、アリバイがないというだけで彼が犯人であるという事を示す証拠は一切ない。デバイスの信号発信現場に居たものの、先に殺傷設定の剣で腹を突き刺し致命傷を負わせたのはシグナムだ。彼は武器と言えるものも持つておらず、一切抵抗しなかったし、海底で動くなど念話で命令された時には既に腕を食いちぎられ出血している状態だった。その状態で海底でジツとしているわけがない。浮上した後も、降伏勧告も行わず問答無用でいきなり刺した。その後管理局員らしからぬ脅しをかけたのも、全て記録でバッチリ残っている。記録を操作すれば絶対に痕跡が残るから、言い逃れは不可能。おまけに、前にも同じようなことを考えたが、彼は陸の英雄。民間受けも、悪くはない。それをよりにもよって私の部隊の、しかも私の家族が殺したとなれば、それは非常に大きな問題となる。

館内放送のスイッチを入れ、マイクを握りしめ、息をめいっばい吸い込んで……

「シグナム二尉！ 今！ すぐ！ 私のところに来なさい!!」

叫んだ。それはもう、力の限り叫んだ。隣に座っていたグリフィス君が驚いてコケてメガネがどこかに転がっていく位の音量で叫んだ。

「や、八神部隊長？ どうされたんですかいきなり」

「さっきの報告は聞いたとつたやろ……」

「え、ええ。一応聞いていましたが。戦闘機人と交戦。その場に居たハंक・オズワルドをシグナム二尉が切りつけ、致命傷を負った彼は自爆して死んだ、ということですよね？」

「その通り。その通りなんやけど……」

説明しようとしたところで、部屋のドアが開いて飛ぶような勢いでシグナムが部屋に入って来たと思うと、正面でピタリと停止し、私の方を不安そうな顔で見る。些細な問題ならこの場で胸の一つでも揉ませてもらえば始末書位で有耶無耶に出来るが、今回ばかりはそうはいかない。なのはが砲撃で廃棄都市区画のビルを一つふつ飛ばしたとか、ヴィータが経費でアイスを買ったりとか、シャマルが手料理を隊員に振る舞ったりとか、そういうのとは次元が違う。

「主はやて、お呼びでしょうか」

「うんうん……シグナム二尉。呼ばれた理由はわかる？」

「も……もしかしてハンク・オズワルドの事でしょうか」

「正解。随分とんでもない事をしてくれたなあ……」

「あ、あの時は、その……なんと云えばいいのでしょうか……怒りで我を失っていたと言いますか」

ああ、ダメだ。自分のことばかりで全然事の重大さがわかってない。前々からなのはと負けず劣らず脳筋だとは思ってたけど、ここまですとは思ってなかった。

「あのなあシグナム。うちは前々から中将に睨まれとるんよ。戦闘機人を撃退して、英雄とまで呼ばれるようになった中将のお気に入り引っこ抜いたせいで余計に嫌われとるし、おまけにそのお気に入り二度も殺しかけとる。これだけでも潰されてないのが奇跡と言ってもええ位や。そこにさらに、現場に居合わせただけかもしれない非武装で、抵抗もできない状態のそのお気に入り、英雄を……今度は殺した」

「しかし彼は！」

「うん。彼はヴィータを撃った犯人かもしれない。せやけど証拠がないんや。彼が犯人っていう証拠は何一つなく、そう思うのは全部私の妄想。あの場に居たのも、彼は妹さんを人質に取られて連れだされただけで、管理局に敵対する意志はなく、投降を呼びかけられればそうしていた可能性のほうが高い。海も、空も、陸も……一般の局員も多分そう思うやろな」

彼が武装していたなら、まだ言い訳もできただろう。彼が抵抗した

なら、まだ弁解もできただろう。彼が先に手を出していたのなら、責任逃れもできただろう。最悪でもシグナムが非殺傷設定で攻撃していたのなら、と後悔を挙げればきりが無い。だが悲しいかな、彼は致命傷を負わされてから反撃した。言い逃れはできない……他人ならまだしも、家族をトカゲの尻尾切りには使えない。聖王教会も、シャツハヤカリムと友達であるという事だけで私たちの肩を持ったりはしないだろう。はつきり言って、限りなく詰みに近い状態だ。

「……地上本部へ、一緒に説明しに行こうか。シグナム」

肩に手を置いて、できるだけ優しい口調で命令する。拒否権が無いことくらいわかっているだろう。

「はい……」

「それじゃグリフィス君。ちよつと出かけてくるわ」

後ろ盾はもう期待できない。けどどうにかして部隊を存続させなければ、せつかく援助してくれた人たちに申し訳ないし、何より予言を実現させてしまうのは非常にマズイ。中將はあの予言をまるで信じてないし、私たちが居なくなれば一体誰が予言実現を防ぐというのか。

「武運を。良い結果を期待して待っています」

「ははは、ありがと。できるだけ頑張ってみるわ」

ゆるめていたネクタイを締め直し、シグナムの襟首を掴んで引きずって部屋から出て行く。気合を入れなければならない……機動六課の存続は私の肩にかかっているのだから。

第53話

目が覚めて、まず目に入ったのは、誰かの顔。起きたばかりで頭がぼんやりしている上に、焦点が定まらないので誰かわからない。大きな声で何かを言っているようだが、それもわからない。何度かゆつくりと目を閉じて、開いてとまばたきを繰り返し、だんだんと焦点が定まるようになってきたら、ようやくそれが誰かわかってきた。

「……スカリエツティ」

、どうも、私はまた死にそこねたらしい。右手で地面を押しして起き上がろうとしたら、バランスを崩して起き上がりそこねた。何が起こったのかと思い右腕を見ると、二の腕から先が綺麗になくなっていった。そこでようやく、自分が気を失う前に何をしていたのかを思い出す。

まず海底でサメに襲われた。

浮上したらシグナムに襲われた。

どうせ死ぬなら一人くらい道連れにしよう、自爆した。

普通に考えれば三度は死んでいる。しかし今生きているということとはトーレが助けてくれたのだろう。後で礼を言っておかなければならない。

「……そうだ、ケースは」

今度は左手で身体を起こして周りを見ると、スカリエツティが鈍い銀色のケースを持ちだして、私に見せてくれた。それを見て、私は当初の目的を果たせたのだと、安心して一息つけた。勝手に戦力を引っぱりだし、自身が死にかけて拳句何の成果も得られなかったのでは全く話にならない。

「目が覚めて一番にケースの心配か。それより先にまず言うべきことがあるんじゃないかい？」

「戦力を勝手に持ちだしたことか。すまない」

そういえばスカリエツティには、ケースを寄越せといっただけで何の説明もせずに出てしまったのだった。あの時には急いでいたから、説明する時間もなかったのだが。

「まったく。万が一トーレかデイエチのどちらかが負傷していたらどうするつもりだったのかね」

「見逃してくれ。結果は最良のものだろう」

トーレとデイエチは負傷せず、デバイスも信号遮断のケースに入れて持ち帰ることができ、私も生還することができた。まさしく最良の結果だ。

「自身が死にかけておいてどこが最良なんだい」

「高ランクの魔導師に殺す気で襲われて、生きている。十分最良だろう」

「妹の治った姿を見たくはないのかい？」

「それが理想ではあるが、私は魔導師じゃない」

防御魔法は使えない。肉体強化による高速移動以外はできない。砲撃の相殺手段がない。なんだかんだで、私は所詮非魔導師の限界点でしかない。逆に言えば非魔導師でもその気になればこのくらい出来るということだが。

しかし、そのせいで私はこの一年で何度死にかけたことだろう。一度はチンクに腹の肉を吹き飛ばされ、一度はシグナムに首を切られ、一度は高町なのはになぶり殺しにされかけ、一度は上空からパラシュートなしで降下して、そして今回はサメに襲われて、その後シグナムに腹を突き刺され、自爆して……よく生きているものだ。

「しかし、このまま戦い続ければ君はいずれ死ぬ。ただでさえ弱いのに、さらに片腕が無くなったならそもそも戦力としては見れない」

「わかっている。だから、この先戦わなくても済むようにフェイト・テスタロッサのデバイスを取りに行った」

「彼女が素直に応じるだろうか？」

「応じるさ。人の命が。特に大事な友達が殺されるくらいなら、自分で戦うだろう。それと腕については」

蛇を食いちぎられた箇所から何匹か出してねじり合わせ、腕の形にまとめ。元の腕をイメージすると、見慣れた腕が元通り。噛まれたところに継ぎ目は残ったが、手を握って開いてと、問題なく稼働する。触覚もある。

「見ての通り問題ない」

「前々から思ってたんだが、君は本当に化物かい？」

「そうだな……否定はできない」

なぜできると思っただのか。なぜできてしまったのか。そう考えると気味が悪い。

「まあ、悪いことばかりじゃない」

そう。あくまでもそう考えた場合は気味が悪いが、考え方を変えればそうでもない。これで私はまだ戦えるのだと考えればそう悪くもない。エリーの心が治った時にちゃんと感覚のある両腕で抱きしめられるのだと考えれば、悪いことではない。エリーには気味悪がられるかもしれないが、それも黙っておけば知られることはない。

それに、この体でなければスカリエツテイの目に止まり、この手で復讐を果たす事もできなかった。エリーの治療をしてもらうこともできなかった……結果でしかないが、蛇は私にとっても素晴らしい物を与えてくれている。崇められるだけで特に何をしてくれるでもない聖王などよりも、十分に信仰の対象として値する。

「前向きだね……まあ、それに越したことはないか。自分が死んだからといって、いつまでもふさぎこまれていては困る」

一人合点していたのだが、唐突に言われた言葉の意味が理解できずに頭がフリーズする。私はまだ生きているのに、なぜ死んだと言われるのか。こいつから敵意のようなものは感じられないし、これから殺されるということもないはず。だから、なおさらわからずに混乱する。

「どういうことだ」

考えてもわからないならば、素直に聞けばいい。

「言った通りだよ。陸の英雄と呼ばれたハンク・オズワルドは、海上で偶然遭遇した機動六課の八神シグナムに刺され、自爆。その後の行方は不明。死体は確認されていないが、死人として扱われている。ちなみに君が死ぬ前の扱いは、現場に居合わせただけの民間人ということで六課には嚴重な処罰が与えられるらしい」

「その情報はどこからだ？」

「レジアス・ゲイズから。ドゥーエに裏を取らせてあるから、情報は確かなはずだよ。障害が少なくなるのは面白くないがね」

相変わらず天才の思考は理解できない。物事の判断基準が面白い
か否かとは、自分と違いすぎる。

まあそれは置いておいて。機動六課への処分はおそらくかなり重いものとなるだろう。民間人（と思わしき人物）へ警告なしで殺傷設定の攻撃を加えるなど、懲戒免職どころかブタ箱へぶち込まれて然るべき行為だ。そして隊員が問題を起こせば必ず隊長にも責任を負う事になるため、加えられる処罰は……コネを駆使して報道から何からシャットアウトし、民間に情報を一切流させずに全て内々で処理したとしても、しばらく部隊の機能は停止する。そして最悪―私にとっては最高―の場合、機動六課は解散し、八神はやては責任を取り降格処分。シグナムは牢屋行き。

私がかれほど素晴らしい結果を生み出せるとは、死にかけて甲斐があったというものだ。ひよつとすると、戦う必要すら無くなるかもしれないし、そうなればあとは妹が治るのを待つだけ。その後はどこかでのんびり暮らす。それはもう最高の結末だ。

そして、今の気持ちを一言で出すと。

「楽に終われるか。願ったりだ」

これよりも最適な言葉はないだろう。

「しかし君は名を失った」

「元々戸籍も名前も偽造だ。執着はない」

オズワルドという名を気に入ってはいたが、それが使えなくなつたからと言ってどうして気にする事があるうか。都合がいいことの方が多いのだからむしろ喜ぶべきことだ。私が死人として扱われるのなら、これからは完全にノーマークで動けるし、もし事が失敗に終わっても指名手配されることもない。管理外世界で生活していれば管理局と一生関わらずに過ごせるのだから、万々歳だ。

八神はやて他機動六課の隊員は私をスカリエツティと組んでいると思っただろうから、私が死んだと知り気が緩んでいるはず。カラーコンタクトとメガネ、カツラをつけて外見を変えれば、私が生き

ていると気づかれることもないだろう。ロストログアについては起
動さえしなければ反応は出ないし。痣も肌を露出しなければ問題な
い。一体何に問題があるというのか。

「そうかい。まあ、君がいいならそれでいいさ。あとトーレが君の事
を心配していたよ」

「トーレか」

そういえば助けてもらった礼も言っていない。助けられた時には気
絶していたから、言えてないのは仕方ないことだが、意識が戻ったの
なら言わなければならぬ。

「どこに居る？」

「彼女なら……ちようどこの部屋の前に居るね。トーレ！ 入ってお
いで」

スカリエツティが大きな声で呼ぶと、部屋のドアがスライドして開
き。そして入って来たのは、スカリエツティの言っていたとおり不安
そうな顔をしたトーレ。いつもの毅然ときた態度の彼女から考える
と、全く逆の雰囲気だ。

私の顔を見るなりすぐにいつもの無愛想な顔に戻ったが。

腰掛けていたベッドから立ち上がり、トーレの目を見る。目を逸ら
されたが、構わずそのまま礼を言う。

「助けてくれてありがとう。おかげで死なずに済んだ」

一言だけ言って、頭を下げる。

「私はただ戦力が減るのが嫌だったただけだ」

相変わらずこちらを見もせず、私のためではないから礼は要らな
いと言い放つトーレ。それなら最初から礼など必要なかったか。

「礼は素直に受け取るべきだよトーレ。それとも照れ隠しかい？」

「ち、違います！」

顔を赤くして、頭をブンブンと振りながら必死になって否定してい
る。私のためではない、と口ではいいながらも、本当はその逆……は
て。こういうのを本で読んだことがあるような。何と言うのだった
か。

「そうかい。ハンク君、言葉の礼だけでは不足なようだ。傷は治って

るし、腕も問題ないんだろう。食事にも連れて行ってあげたらどうかな？」

あと一息で思い出せそうといったところで、スカリエッツィの言葉に思考を中断する。

確かに命を助けてもらってにおいて礼の一言だけではあまりに軽すぎるか。食事でも軽いが、それ以上の対価は今のところ用意できない。

「そうだな。トーレさえ良ければ、いい店があるんだが。どうだ？」

今は亡き隊長に何度か連れて行ってもらった店。値段は張るが、味は確かだ。私の作るものとは比べ物にならない。

出るならついでに変装用の道具も仕入れておこう。

「礼など必要ない」

「そうか。残念だ」

強制するつもりはないので、拒否されればそれで止める。まあ、買い物くらいは一人で行ける。メガネだけでもかけていけば、誰も私とはわからないだろうし。

「し、しかし……どうしてもと言うなら。行ってやってもいい」

こちらに背を向けて言っているの、どういう顔をして喋っているのか全くわからない。感情を覗けば何を考えているのか一発でわかるが、あまり多用すると不信感を招くのであまり使いたくない。

なので、言葉からの情報のみで判断する。彼女は行きたくないのだろう。

「無理にとは……」

無理にとは言わない、と口に出そうとしたところでスカリエッツィに肩を叩かれ、振り返ると念話を送られた。

『彼女は素直じゃない。口ではああ言ってるが、誘って欲しいんだよ』

面倒な性格をしていると思いつつながら、態度には出さずに改めてトーレに向き直る。

「頼む。一緒に来て欲しい」

「……わかった、そうまで言うなら仕方ないな。いつ出るんだ？」

「……」

そういえば、今が何時かわからない。腕時計は腕ごと海の底だし、私の持っていたデバイスは気絶した時に落としたようで見当たらない。さらにこの部屋には時計がない。自分が何時間寝ていたのかわかれば時間もわかったのだが。

『今は午後6時半だよ。他の者の夕食はウーノが作ってくれるから、安心して行つてきなさい』

それを察してくれたのかスカリエツティが念話で時間を教えてくれた。デバイスがなかったので返信はできないので、頭だけ軽く下げておく。

「1時間で用意できるか？」

「もちろんできる。むしろその半分でもいい」

「いや、そんなに急がなくてもいい。ゆっくり準備してくれ」

それに、そこまで急がれるとむしろこっちが困る。シャワーを浴びて血と血の臭い落として。バレないよう髪型を変えて、私のイメージに合わない服を着て。銃を持って。そこそこ時間が必要になる。

「そうか？ フフツ、頼みなら仕方ないな」

頼んでいるわけではないのだが……まあいいだろう。顔は見えないが楽しそうなのはよくわかるし、あえて水を指す事もない。戦闘機人にも、偶には息抜きが必要だろうし。

第54話 恋

高層ビルが建ち並び、人が所狭しと歩き回り、車が道路を埋め尽くし、夜だというのに昼のように明るく、路地にまで光が射し込む活気溢れるクラナガン市街。例えば人混みの中で見知った顔とすれ違おうとも、気のせいで済ませられるほど人口密度が高いこの街では、多種多様の店が、数えられないほどの店舗を作り毎日客を奪い合っている。そして人気の店には客が殺到し、そうでない店は次々と潰れてそこに新しい店が建つという光景が日々当たり前のように見られる。

まあ、それはあくまで大衆向けの店に限り、金持ちの行く高級店にはあまり縁のない話だ。

「着いたぜお客さん」

「ご苦労。また帰りも頼む」

「へいよー」

管理局から認定を受けていない、所謂裏タクシーの、態度の悪い運転手に割高の代金とチップを渡して、車のドアを開いて先に降りる。正規のタクシーと違い、管理局から睨まれると困る奴らは移動の足として使うには最適なのだ。

一人先に降りてからトーレの手を取り、軽く引いて車から降りてもらう。

「足元に注意して。転けるなよ」

「わかってるー!」

髪の色と同じく薄紫色。裾は足首が隠れる程度の長さで、太ももまで覗かせる大きなスリットが入っていて、肩も露出したシンプルなドレス。ドレスの下から覗くのは、スリットから少し見える真っ白な脚と真逆の、光沢のある黒いハイヒール。そのおかげで元々高かった身長がさらに高くなり、彼女が正面に立つと少し目線を上げなければならぬほどになっている。ドレスの上には寒さを防ぐためにファーのついたコートを羽織る。

顔にはクアットロから借りたメガネをかけ、元の顔を引き立たせる程度の薄い化粧をしている。普段縁のない格好をしているせいかな恥

ずかしそうな表情もあいまって、とてもトーレとは思えない雰囲気を放っている。

なぜこんな服や化粧品がアジトにあるのか全くわからなかったが、買う手間と金が省けたと思って納得しておく。考える必要のないことだし。

「こ、この格好は変じゃないか？」

片手でドレスの裾を握りしめる様は、まさに慣れてないという感じがする。

「どこもおかしいところはないから堂々としていればいい。店側はプロだし、様子がおかしいとすぐ見抜かれるからな」

変装としての点数は満点と言っているのだが、服装に慣れていないのか少し挙動不審になっている。怪しまれては変装の意味がない。

私も普段縁のないスーツ（しかもブランド）姿だが、この格好に合った立ち振る舞いをするつもりでいる。

「それはわかっているが……」

「いつまでも店の前で立ち尽くしては迷惑です。行きましょう」

笑顔を作り、声と口調も変え。優しく片手を持ったまま横に並び、もう一方の手を腰に回して、トーレを押して店の入り口へ進む。

「ま、待ってくれ、私はこういう店に入った事がないんだ」

こういう店。というといかがわしい感じがするが、ただの上流階級向けのレストランド。入った事が無いと言っても、極端に言えばただ利用する層が違うだけで、そこらの居酒屋と変わらない。食事をするところなのだから、ただ食事をすればいい。商談をしたりすることもあるが、今日の目的はトーレへの礼。特に込み入った話をするわけでもない。

「緊張せず、気を抜いて。楽にしていればいい」

耳元で一言囁いてそのまま進む。ドアの前に来ると自動でドアが開き、中から店員が出迎えてくれる。

「いらっしやいませ。ご予約はされていますか？」

「二時間前に電話したジャック・オブライエンです」

適当に考えた偽名。どこにも存在しない人間の名前だが、だからと

いって問題はない。

「席へご案内します。こちらへどうぞ」

「行くよ」

トーレの手を引いて店員の後ろをついていく。

「わ、引いてくれなくても一人で歩ける」

「そうですか」

手を離して、二人並んで無言で歩く。

「こちらの席になります」

案内されたのは、パーティ会場ほどではないがそれなりに広いホルの、窓際のテーブル。椅子を音を立てないようにゆつくりと引き、同じく音を立てないように座る。トーレも私を見よう見まねで座る。「ご注文がお決まりになりましたら、ベルを鳴らしてお呼びください。では、ごゆつくりどうぞ」

「ああ。ありがとうございます」

ウェイターが去って行ったところで、トーレに向き直る。

「好きなものを頼んでください。お金は気にしないでいいですから」
なぜかスカリエツティが妹の口座に振り替えたはずの金をいつの間にか全て引き下ろしていて、私に渡してきたから食事するくらいなら問題ない。

「それより、なにか見られているような気がするんだが……」
「……」

目を変えて、周りを一度見回してみる。警戒心、あるいは敵意を持った人間はこの場には居ない。窓の外にも、視界に入るところには居ない。

ただ、トーレのことを性的な目で見る奴が何人かいるだけ。

「あなたが魅力的だから、皆見惚れているんですよ」

『敵意を持った人間は居ない』と暗に伝えてやる。デバイスなしで話が使えればこんな回りくどい言い方しなくてもいいのだが。デバイスの補助なしでの会話の仕方なんて誰にも教わったことがない。

「そ、そんな恥ずかしいことをよく言えるなお前は……」

「そういう風に演技してるだけですよ」

周りに聞こえない程度の声で呟く。ごく小さい声だが、戦闘機人なら聴覚も強化されているだろうし聞こえるだろう。

「お前に敬語を使われると違和感がひどい。いつも通りの口調でいいぞ」

「今日はあなたにお礼をするためにこの店に来たんです。恩人には敬語を使わなければ失礼でしょう」

一呼吸してから、また小声で付け加える。

「格好だけ変装して、中身に気付かれては意味がありませんから」

「……ああ。なるほど」

ざっと見た感じでは、この中に私の知る人間は一人もいない。だが、こちらが相手のことを知らないだけで、この中に私の事を知っている人間が居る可能性も否定できない以上、あまり素の自分ではないきではない。今の所誰もこちらに気付いている素振りは見せはないし、静かに食事をしていれば見つかることもないだろう。

「何を注文するか。決めましょう」

「……そうか。そうだな。しかし、何を頼めばいいんだ？」

「何でも。好きなものを」

「じゃあお前と同じのものを。どれがいいかなんて、わからないからな」

「酒はどうします？」

「お前は？」

「酒についてはよくわかりませんから。適当に、料理に合うものと頼もうと思います」

酒の味が分かるほど飲んではないから、どれがいいと言われてもわからないが。ベルを鳴らして、ウェイターを呼ぶ。

「〇注文をお聞きます」

鳴らしてすぐにやってきたウェイターに、魚料理のコースとそれに合う酒をと注文した。

「畏まりました。しばらくお待ち下さい」

さて。

「退屈ですか？」

ずっと変わらなず無愛想な顔を崩さず。正面に座っているのに未だに一度も目を合わせていないトーレに話しかける。

「いや、そんなことはない。そうみえたか？」

「ええ。そういう顔をしていました」

つまらないのでなければ、一体どうしたというのか。

「こういう場面は始めてで……恥ずかしい」

誘わせておいて、恥ずかしいとは。一体どうということなのか。

「さつきも言いましたが、堂々としていればいいんです。私達は客なんですから」

「そうじゃない……」

「じゃあ何が」

「お前と、二人きりなのが」

そう言う途端に顔を赤くして俯いてしまった。私は特に何かした覚えは無いのだが。

「ドクター以外の男性というと、あの騎士しか居なかったから……ドクターは親のような存在だし。奴とはほぼ関わらないし……異性として意識するほどの関わりを持つ奴は、お前以外に居ないから、恥ずかしいんだ」

突然の独白に驚き、数秒間思考が停止する。そして、平静を取り戻してからトーレに質問する。

「二つ聞かせてください……それは、好意としての意識ですか」

トーレの反応がおかしいのも。食事に誘わせておいて恥ずかしいが、それが原因か。できれば、それが好意としての意識でない方がいいのだが。きっと、そうではないと思うのだが……方が一そうだとしたら。

「わからない。だが、お前の事は嫌いじゃない……仲間としてかお前個人としてかはわからないが、前みたいな危ない事はしてほしくない。これが好きという感情なのか？」

「これ以上は話すべきじゃない」

誰に聞かれるかわかったものじゃないこの場で、あまり自分の身元を明かすような事を言うべきじゃない。

それ以上にトーレの気持ちの方が好意かどうかを聞きたくないから、止めさせた。私が好きだと言われても、私は誰かを好きにはなれないのだし。自分の妹一人すら救えていないのに、誰かを好きになる資格なんてないのだから。

だから、もし好意を抱かれていても、それに応えることはできない。だから、その好意がもし本物だとしたら……私は拒絶するしかない。そうなれば彼女は傷つくだろう。だが私はきつと受け入れられない。でも傷つかせたくない。

「お前は確か、人の感情が見れた筈だな。私の感情を見てくれ。そしてそれが好意なのかどうか教えてくれ」

らしくない。いつものトーレは、もつと偉そうに、自分に絶対の自信を持つてような態度をしているはずなのに、今の彼女は全くトーレらしさが欠片も存在しない。いつそ偽物と言われた方が納得できるほどだ。

「……私は、六年前から誰かに好意を抱いたことは一度もありません。だから、見てもきつとわからないと思います」

これは嘘。自分のためではなく、相手のための嘘。相手を傷つけさせないための嘘だ。私は感情を見れば相手がどういう思いを持っていくのかが大体わかる。靄を通して、本人の持つ思いが伝わってくるからだ。だから、トーレの持つ思いが好意か否かは見ればハッキリわかる。

故に、見てしまえばその思いを理解してしまう。今の私はとても冷静とは言いがたい。これ以上嘘をつけばたちまち見抜かれて、面倒なことになる。

だから、それを拒否して勝手な考えを述べる。そうであって欲しいというただの願望とも言えるが。

「でも、その気持ちは多分好意とは違うと思います。付き合いもまだ浅いんですから、好意を抱くには早すぎます」

「そうだろうか……そう言われると、そう、だな。」

なんとか納得してもらえたようだ。私自身、家族以外の誰かに好意またはそれに近いものを向けられたことがなく、また他人に好意を

向けたこともない。こういう状況は始めてだった。おかげで、こんなにも動揺して、醜態を晒してしまった。

「この話題はこれで終わりにしましょう」

「その前に一っだけ聞かせてくれ。お前は、私の事をどう思っている」
……それは、決まっている。いくらこんな話を聞かされようが、私
の他者への認識に変化はない。

「優秀な戦力です」

それ以外に何があるというのか。彼女は戦闘機人。戦うために生み出された機械の兵器と何ら変わらない。見た目や思考こそ人間と同じだが、中身は違うのだ。

それを戦力と言い切って、一体何が悪いというのか。

だが、兵器と認識しているなら傷付けたくないというような思考は生まれないはず。兵器は他者を傷付け、自分も傷つけられるものだ。ということは、私は彼女を一人の人間として認識し、尊重しているという事になる。これは明らかに矛盾した考えだ。

いや、考え方を変えればそうでもない。兵器として見ているからこそ、性能を落とさないために傷付けさせないという考えはおかしくはないはず。だがそれは物に対する捉え方であって、彼女に向ける気持ちは妹へのそれに近い気がする……ダメだ。わけが分からなくなってきた。

「……そうだな。お前はそういう奴だった」

少し悲しそうな表情を見せるトーレ……そうだ。兵器には感情がない。兵器は意思を持たず、ただ所有者に使われるだけの存在のほずだ。感情があるということは、兵器でないということ。

「もうひとつ。あなたを傷付けたくないとも思っています」

私らしくないセリフだが、兵器に対してこんな感情を抱くはずがないの。これは間違いなく、私が彼女を一人の人間として見ている証拠だ。

「……？」

私が復讐のための道具、妹を助けるための道具になり切れていれば、こんな事にはならなかっただろうに。こんな考えは抱かなかつた

だろうに。

「あなたが私に向ける気持ちと同じく、傷付けたくない。傷ついて欲しくないと思ってます」

これが好意なのかどうかはわからない。だが、こんな気持ちを他人に抱くのは始めてだ。命を救ってもらった恩はあるが、きつとそれだけではない。

「は……う？　それは、つまり」

「あなたが大事ということですよ」

他人から見れば、まさに恋の告白そのものだろう。トーレもそう受け取ったのか、顔をさつきよりもずっと赤くして固まってしまった。「す、少しお手洗いに行ってくる」

そう言つて立ち上がり、一人歩き出した。少し歩くとつまづいてよろめき、転けかけていたので、余程動揺しているのだろう。

「……はあ」

トーレが居なくなったので、ため息を一つ。胸に手を当てると随分と早いリズムで拍動しているので、私自身もかなり動揺していたようだ。なぜあんな言葉が出てきたのか理解できないが、これが恋というものなのだろうか。

よくわからないが……しかし、優先順位を間違えてはいけない。恋などに現を抜かすよりは、エリーを治させることを最も優先しなければならぬ。

だが、もしエリーが治ったら……その後は普通に人を好きになれるかもしれない。そうすれば今の気持ちはどういうものなのか、ハツキリするはずだ。

第54話 呼び出し

レジアス・ゲイズ。時空管理局地上本部の最高責任者。階級は中将。彼が着任してからミッドチルダの治安は大幅に改善し、民間から一般局員からと広い層から大きな支持を得ている。そして、地上の戦力向上のために非魔導師の戦力化……要するに質量兵器での武装した兵士を採用しようという危険思想の持ち主、と空と海から認識されている。しかし、地上本部には高ランクの魔導師が非常に少ないためその発想は悪くない。ガジェットに対してもその効果は魔法攻撃よりもずっと高いし、対魔導師にも質量兵器は撃たれてから回避は間に合わず、防御しても効果が薄い物が多い。実際に質量兵器運用第一小队という部隊が設立され、それからわずか一週間経つてから初の実戦投入で犯罪者を皆殺しにして人質を救出するという大戦果を上げた。

人を……主に私を犯罪者と呼ぶのは気に食わないが、そこさえ目をつぶればその政治的手腕、人の能力を見る目は確かだ。素晴らしいと称賛してもいい。

その人を見抜く目のお陰でヴィータが殺されかけてしまったが……それはハンク・オズワルド個人がやったことだ。恨むべきは中将ではないし、もう既に彼は死んだ。

まあ……そのせいで呼び出されているのだが。

「八神はやて二佐。八神シグナム二尉。なぜ呼び出されたかはわかるな」

まあ、何が言いたいかという性格と口は悪いがやることはキツチリやる優秀な人間……だと思う。きつと。だから、私への処分も自分のやるべき仕事をキツチリとやるつもりなのだろう。

「民間人の殺傷……です」

シグナムが苦々しく呟く。シグナムがトドメを刺したわけではないが、致命傷を与えたのは間違いない。

「わかっているのなら話は早い。資料は見せてもらった。機動六課は本日午後、地上本部の管轄下である海上に、デバイスの信号調査の名目で出撃。今回地上本部にわざわざ呼び出したのはうちの管轄内

だったからだ……まあその位はわかっているだろうからわざわざいう必要もないか。そして高町なのはと八神はやては現場に居た戦闘機人と交戦。八神シグナムはその付近で海底に潜っていた民間人『かもしれない』負傷した人間に、ろくな警告もせず殺傷設定で攻撃……結果、その民間人『かもしれない』人間は、魔力暴走を起こし死亡……間違いないな？」

かもしれない、という部分をやけに強調する中将。一応怪しいとは思っているようだが……しかし重い処罰は逃れられないだろう。

「はい」

「魔導師は、人間に攻撃する場合原則として非殺傷設定を使用する事になっているはずだが。何か正当な理由があつてそうしたのか」

「……」

「私は事実の有無を確認している。答えは、あつたか。なかつたか。その二つに一つだろう。答えろ」

「ありません……でした」

ギリ、と歯を食いしばる音が聞こえそうなほど苦々しい顔をしてシグナムが答える。フォローしてあげたいけれど、下手な事を言う訳にはいかない。下手な事を言えばむしろ逆効果になりそうだから、最低限のフォローしかできない。

「しかし中将。彼は戦闘機人と共にあのエリアに居ましたし、あの海域はダイビングスポットでもなんでもありません。状況としては、犯罪者である可能性のほうが高いかと」

「あくまでも情況証拠にすぎない。もしかすると強制されてあの場に居ただけ、という可能性も否定出来ない。それに攻撃もされなかつたのだらう？ それでは罪に問うことはできないな。それ以前に奴がした犯罪行為といえ、貴様への傷害行為位だろう。しかしそれも高町なのはの私刑を見逃すという事で清算済み。それを罪の問うのなら、高町なのはを懲戒免職し、さらに逮捕状を出さなければならぬ……別件で奴の罪を問うというのなら、証拠を提出してから言うのだな。それに、仮に奴が犯罪者だつたとして警告なしに殺傷設定で攻撃してもいいという理由にはならないな。他に言い分はあるか？」

「いえ……」

「全く……奴は最低限の人員と予算、そして魔導師で無いにも関わらず最高の結果を出していたというのに。貴様らときたら、潤沢な予算に立派な隊舎を与えられてさらに優秀な魔導師ばかりを集めておいて何だ、今までの功績は石ころを手に入れて……。どこの誰かもわからない小娘一人を拾い。ただの木偶を壊すだけ……。そしてメンバーの一人はどこかへ消え、一人は撃たれて重傷を負い事実上の戦線離脱。一体何だ？ 貴様らは木偶の集まりか？」

「返す言葉もございません……」

確かに、彼の……彼の部隊の出した成果は非魔導師の集まりとしては非常識なまでに大きい。『あり得ない』とも言い換えられるほどに。設立されてわずか一週間で空の隊員でも手を焼くような立てこもり犯を皆殺しにして人質を救出。その後には地上本部に侵入した戦闘機人二体と交戦し、その二体を捕獲……。結局逃げられたが。さらにその後には、逃走した犯罪者五名を追い、皆殺しにして余計な被害者を出すことを防いだ……。メンバーに限ってだが、犠牲を出さずに。

対して私たちはといえば、中将の言うとおりひどい有様だ。レリツクを集め、ヴィヴィオを拾い、ガジェットを破壊するだけ。そしてヴィータが抜け、フェイトちゃんがどこかへ消えた。

「処分は後の会議で決定し次第伝える。八神シグナムはそれまで自宅謹慎とする。八神はやて、貴様にも管理責任がある。同じく自宅謹慎しておけ。その間の機動六課の業務は次席の者に引き継ぐように……。全く。惜しい奴を亡くしたものだ」

「……もし謹慎中に、ガジェットが現れたらどうするおつもりですか」
言われてばかりも癪なので、少し手を噛んでみる。さすがに新人達とリミッターのかかったなのは一人では、多数のガジェット相手は厳しいだろう。なのは一人ならともかく、新人のフォローもしながらとなると……

「貴様ら二名を除く機動六課の隊員の行動は制限しない。ただし、貴様らの謹慎中は監視と抜けた戦力の補填のため、出撃時には地上本部から一部隊派遣する」

「お言葉ですが、地上本部の魔導師では、ガジェットに対して有効な戦力にはならないと思います」

私がそう言うと、中将はそれを見越していたかのように口角をクツと引き上げて小さく笑い、こう言ってきた。

「派遣するのは質量兵器運用第二小隊だ。魔導師ではない」

質量兵器運用小隊。最悪なまでに聞き覚えのある部隊名だ。つい最近までは、ごく短い期間だけ質量兵器運用分隊という名前で機動六課に併合され、そして一つの事件で五名の隊員の内一名が死亡し、一名が重傷を負い、さらに隊長が辞任したことで解散した部隊。管理局に残った二名を頭に据え、人員をつぎ込んで再編成されていたとは聞いたが、まさかうちに派遣するなんて。

「そんな、設立したばかりの部隊を使うのですか？」

「これは決定事項だ。貴様が口を挟む余地など存在しない。わかったらさっさと帰れ。私は忙しい」

「そういうわけです。お引き取り下さい」

傍に立っていた副官のオーリス三佐が間に入り込み、私たちを早く帰らそうとしてくる。口を挟む余地がない、とハッキリ言われてしまったからにはこれ以上どうすることもできない。

ずっと何も言わないでいるシグナムの手を引いて、執務室から出て行き、廊下を歩く。すれ違う地上本部職員からはクスクスと小さな嘲笑が向けられ、その度にシグナムが引いていない方の手を血が出るほど握りしめていた。

「申し訳ありません……私の個人的な感情のせいで、主に多大な迷惑をかけてしまいました。この責任、どう取ればいいか……」

地上本部の建物の外に出て人が居なくなつた途端にシグナムが頭を深く下げてそう言った。

「気にせんでええよ。ハンク君……いや、ハンク・オズワルドは確実な証拠はないけど、ヴィータを撃った犯人やった。それが死んだのは、ええ知らせや。少なくとも、一人については警戒せんでもええようになつたんやから」

そうでなければ、あんな発言をするはずがない。彼は私のことを嫌いと言っていたし、彼の性格からしてわざわざ嫌いな人間の心を心配するとは思えない。だから彼が犯人で間違いないと思う。

だから、シグナムのやったことは……間違いではあるけれど、完全に悪であると否定は出来ない。家族の仇を討つことが悪であるなら、彼も悪だ。

だから、彼は処分された。依願退職という形ではあるけれど、実際は処分だ。小さいけれど実績ある一部隊の隊長という席を退かされた……切り捨てられたのだ。地上本部が特例を作り、空と海に対し付け入る隙を与えたくないがために。

私もシグナムを、機動六課の体制維持のために処分しなければならぬのだろうか。

ヴェータが抜け、フェイトちゃんも消えた今。これ以上の戦力の喪失は、事実上の無力化に等しい。できればそれは避けたいけれど、現実には優しくない。私を支援してくれている主な人たちは、空と海の派閥に属している人が多い。そして派閥の頭は、やはり陸に借りを作ることを良としないだろう。結論は、やはり切り捨てられる……

第56話

「ありがとう。私のために、こんなに色々と買ってくれて……」

八割程度の買い物を終え店から出た後に、トーレがそう言ってきた。こんなには、とは言いがせいぜい紙袋一つ分程度の化粧品と普段着だ。それほど多くはない。額にすればそれなりのものだが、それでもたかが知れている。どうせそんなに使うことのない金だし、それだけで喜んでもらえるのなら私も悪い気はしないので、素直にそう言ってみる。

「喜んでもらえて何よりだ」

今回の買い物では、大体管理局に勤めていた頃の一ヶ月分の給料の半分程度ほど使った。その半分以上をトーレのための買い物に占めている。量はそれほどでもないのだが、店の質が非常に高かったから買い物の費用も高くなってしまった。

「でも、かなり高かったと思うんだが……よかったのか？」

「気にするな」

だがまあ、それを気にしているわけではない。元々金使いが荒いというわけでもなく、妹の治療費にと貯めていた金が自由に使えるようになったのだから、資産はそれなりにある。それこそ最新型のデバイスをいくつか買えるほどに。それに加えて、トーレには命を救われたのだし、むしろこの程度では礼としては全く不足と言ってもいい。だからトーレが気にする必要などどこにもないのだ。

口下手なせいで今の考えを短くするのは少し難しく、口には出せないが。

「そうか……意外と財布のヒモが緩いんだな」

「今日は特別だ」

そう、特別だ。今まで妹以外の誰かのために、自分から何かをするという事をしたことがない。例え頼まれても断ってきた。なのに、今日はいつもと違いこうして『他人のために』行動している。これは、以前の私からすればあきらかな異常だ。あるいは変化とも考えられる。これを異常ではなく変化と捉えるならば、その原因はエリーが治ると

いう確信を得られたからか、それともトーレの事を特別だと思っ
るからか……あるいは両方か。

特別……その特別がどういう意味で特別なのかは、買い物をして
いる三時間の間ずっと考え続けていたから、よくわかる。しかし。

「まだ、ダメだ」

まだやらなければならぬ事が一つ残っている。それを後回しに
はできない。それを終わらせるまでは、心を理性で封じ込めよう。あ
とほんの少しの辛抱だし、耐えられるはずだ。エリーのことだって、
六年間ずっと耐え続けたのだから、短くて一ヶ月。長くて一年と無い
だろう。きつと、持つはずだ。

「どうしたんだ、ハンク」

……私の目を覗き込む心配そうなトーレの顔を見ると、彼女を思う
この気持がどういふものなのかがよくわかる。

「なんでもない。心配しないでくれ」

だから、笑顔を作り、目を閉じて視界を塞ぐ。普段は隙になるから
とほとんどしない行動を、あえてする。これ以上彼女の顔を見つめて
いると、マズイと思つたから。既に心に罅は入っている。求めればす
ぐに手の届くところに彼女は居る。彼女の顔を見ていると、罅が広
がって、求めたいという思いがさらに漏れ出てくるから。

彼女と一緒にになりたいという思いは確かにある。が、それよりもま
ず家族だ。妹一人助けられずに、どうして赤の他人のため心を割り裂
けようか。優先順位は絶対に変わらないし、変えられない。

「本当に？ 刺された傷が痛むんじゃないのか？」

「大丈夫だ」

顔は見ずに、手を取って引つ張るように歩き出す。彼女の手はとて
も温かく、その温もりは罅へと染み入るように胸へと沈んでいく。
二、三步進んだ所で腕がピンと張つた所で引つ張られ、肩を掴んで振
り向かされる。

「ひよっとして、私と一緒に居るのが嫌なのか？」

「そうじゃない」

むしろ、一緒に居て欲しい……。そうは言わない。そうは言えな

い。そういうのは相手を抱きしめながら言う言葉だ。しかし、共に居て欲しいのは彼女も妹も同じ。だが私の腕は二本しかない。この二本の腕で一度に抱きしめられるのは、一人しか居ない。そしてこの腕で最初に抱きしめる相手は六年前から決まっているのだから、今ここで彼女の思いに応えることはできず、また彼女に思いを伝えることはできない。

「じゃあ、なんなんだ？」

だからせめて、一度離れた手を今度は強く。しっかりと握る。温かい。その温かさ、柔らかさに思わず笑みがこぼれる。作りものではない、心からの笑みが。

「あ……」

「今日は少し寒いな」

本当は寒いなんて全く思わないが、なんの理由もなく手を握るのは不自然なので適当な理由をでっち上げて言ってみる。

「そうだな」

トーレも手を振り払うこともないので、嫌がられては居ないらしい。だから、このままで。隣に立ってまた歩き出す。できれば、こんな平和な時間がずっと続いてほしいものだ。

まあ、そんなのは無理だとわかっているが。

第57話

今日のように困った、あるいは寂しい、という気持ちを抱いたのは一体どれほどの昔だろう。胸をベルトで締めあげられるような苦しさ。随分と長い間、こんな思いを抱いた事はないと思う。

いつもは隣に居る人。私にとつてはフェイトちゃんとはやてちやん……その二人が隣に居ない。手の届くところに居ない。それはとても孤独で、寂しくて。それがどれほど辛いかを思い出させられて……それを紛らわそうと何かに当たり散らそうにも、原因である当てるべき対象は既にこの世には居ない。仕方がないので、いつもより訓練で使う魔力弾の量を三倍に増やしているけど、弱いものいじめをしているような感じがして途中で辞めた。

だからと言って、地上本部から派遣されてきている『彼』の元部下二人に当たるわけにもいかない。あの二人と、犯罪者としての彼は何の関係もないのだし。

「……」

だから、彼の顔写真を貼り付けた枕を殴る。殴って殴って、ひたすら殴りまくって、このどうしようもない孤独感を怒りに変えて、枕を彼に置き換えて、怒りを彼にぶつけていると錯覚させて紛らわす。一発ごとにボス、ボス、と重い音がしてベッドが軋む。それでもこの胸の苦しみは消えない。殴っても楽になれないのなら、いつものように砲撃で消し飛ばせば楽になるだろうか。

「ママ、大丈夫？」

「あ、ヴィヴィオ……」

待機状態のレイジングハートに手を伸ばした所でヴィヴィオに声をかけられ、我に返ることができた。そして、自分がしようとしていたことを思い返し、自分の精神状態がマトモではないことに気付く。それから慌てて笑顔を作って、膝についてヴィヴィオに視線を合わせ、肩に手を置く。ビクリ、と大きく震えられたので、よほど怖かったのだろう。

「ごめんね、怖かった？」

「……ううん、そうじゃないけど」

そう言つて、手鏡で自分の顔を見せつけられる……これは、全くどうしてこんな引きつった笑顔になつていゝのだらう。仕事をしてるとカメラに映る機会も多くなつて、ソレでも恥ずかしくないようにと散々笑顔の練習をしてきたのに、それでこんなひどい笑顔とも言えないような笑顔になるなんて。

まあ、原因はわかつている。その原因に対して対処のしようがないからここまで追い詰められてるんだけども。

「大丈夫。怖くないから」

ヴィヴィオを抱きしめて、安心させてあげる。そして私はその温もりで心のスキマを埋める。彼さえ居なければこんな事にはならなかつたのに、と思うけど。ヴィータちゃん撃たれてから時間が経つて、少し冷静になつた今あらためて考えてみれば、彼だつて被害者の一人なのかもしれないだし、怒りを向けるべき対象が違う。そもそも彼が一連の事件の犯人だといふ確実な証拠はない。だけれども、はやてちゃんは彼が犯人だと言つた……何らかの確信があつたのだろうけど。それでもあそこに居たということは、スカリエツティと何らかの関係があるわけで。

……仮に彼が、本当に犯人だつたとして。彼ははやてちゃんを嫌いだと言つていた。けど、ただそれだけで犯罪を犯すほど、彼は馬鹿じゃないだろうし。だから自分の意志でやっていたとは考えにくい。彼の妹が病院からさらわれた時期と、彼が行方不明になつた時期は完全に被る。とすれば彼が妹を人質に取られて仕方なく犯罪を働いていたと考えるのが自然。

もしあの時シグナムさんが感情に任せて彼を斬り殺す前に、私が止めに入つてちゃんと話をしていれば、説得も不可能じゃなかつたかもしれない。説得して、六課に戻つてきてもらつて、一緒に戦つてもらふのも不可能じゃなかつたかもしれない……。でもそれは所詮 if の話。今更後悔しても、遅すぎる。

しかし、いくら悔やんでも一度起きたことを無かつたことにはできない。だからこそ、こんな調子ではダメだ。あの時シグナムさんを止

められなかった責任を取って私がすっかりしないといけない。凹んでいる暇はない。

「ヴィヴィオ、明日からちよつと忙しくなるから、構ってあげられる時間が少なくなるかもしれないんだ。いいかな？」

「うん、我慢する」

笑ってそう言ってくれる、血のつながっていない自分の娘を一度離して、頭を撫でてあげる。

「よし。いい子、いい子」

「えへへ〜」

こうして家族の笑っている顔を見ると、自分まで嬉しい気分になる。けれど、彼は……こんな気分を味わうことはなかったのだろう。家族の笑顔を取り戻すために管理局で人を殺し続け、ボロボロになって治療のための金を稼いで、結局家族が治って笑っている姿を見ると無く死んでしまった。なんとも報われない。

ソレに比べれば、今の私はずっと恵まれていると思える。

第58話 説得

午前七時。太陽が西から上り、空から大地を照らし、夜の冷たさから少しずつ世界が温かさを取り戻し始める時間。そんな時間に、認証されていない裏タクシーでアジトまで戻ってきた。本当はホテルにも泊まらずそのまま帰る予定だったのだが、トーレが夜も遅いから泊まろうと言ってきたので、仕方なくホテルで一夜明かしてからアジトに帰ってきた。私としては、あまり他者との接触を持つことは好ましくなかったのだが……特別視するのなら要望にはできるかぎり応えるべきだろうと思つた結果、そうになった。

「戻つたぞ、スカリエツティ」

「ああ、おかえり。避妊はきちんとしたかい？」

いきなりキツイ冗談を言ってくれるスカリエツティを無視し、横を通りぬけてカモフラージュされたアジトの入り口に触れ、暗証番号を入力して扉を開く。二人は入らないのかと振り返れば、スカリエツティが顔を真赤にしたトーレに首を締め上げられていた。

一緒に部屋に泊まったと言っても、彼女はベッドで寝て。私はソファで寝て。そういうことは何も無かつたのだから、そうと否定すればいいだけの話なのに、ああいう風にムキになつて否定するから妙な誤解をされるのだ。

「ハンクー！ お前も何か言ってくれ！」

スカリエツティの首を絞めるトーレと目が合ったと思うと、今度は私を怒鳴つてきた。とぼつちり、でもない。一応当事者だ。しかし、私が否定した所で説得力に欠けるような気がしないでもない。とはいえ、言えと命令されればそうした方がいいだろう。

「スカリエツティ。私はそういう事をする機能はあるが……行為への拒否感。いや嫌悪がある。だからお前の言つてたようなことはしてない」

スカリエツティの頭越しに見えるトーレの顔が少し残念そうに見えたのは、きつと気のせいだろう。そのせいでスカリエツティの締め上げが強くなったように見えたのはきつと気のせいじゃない。見る

からに顔が青くなっている……が、同情はしない。奴の自業自得だ。「わかってる。そんなことはしてないって知ってるから離してくれないかな、トーレ」

「……冗談なら、もう少し笑えるものにしてください」

「わかってている」ではなく「知っている」とは、引つかかる言い方だ。ひよっとしてずっと監視されていたのだろうか……あり得る。こいつのことだし、むしろ監視していかないはずがない。何かあったらそれをネタにからかって、楽しもうという魂胆だったのだろう。トーレの反応とソレを見ているスカリエッツィの笑顔からして、それは確定。そしてその目的は果たされているようだ。相変わらず趣味が悪い。最悪と言ってもいいくらいだ。

まあ、そんなことは付き合いを始めた時。いや、それよりも前。こいつの存在を知った時からわかりきっていたことだ。今思うことでもないだろう。

そして、趣味。というよりも性格が悪いのは私も同じだろう。これから一つ、やらなければならぬことがある。以前話をしたときからそれなりに時間は経っている。意思決定は既に終わっていて、今は心の整理とか用意をしている段階だろう。終わっていないければ、当然スカリエッツィのオモチャに。バルディツシユは……プログラムを修正して私が有効活用させてもらおうとしよう。腕一本失ってまで回収したものをゴミにするのはもったいない。

「スカリエッツィ。ちよつと来てくれ」

トーレからようやく解放されたスカリエッツィに声をかけてから、アジトの中へと履いていく。いくらトーレでも。いやむしろトーレだからこそ、怒って暴行を加えても気絶しない程度に抑えているはずだ。

その証拠に、すぐ立ち上がって、なんともない顔をしながら私の後ろをついてきた。

「ああ、何かな」

「ガジェットは今いくら出せる」

「んーむ、出撃可能、という意味ならいくらでも。しかし今後のことを

考えて、消耗しても構わない数はⅠ型、Ⅱ型それぞれ二十くらいかな。Ⅳ型は無理だね。あれはできるだけだけ温存しておきたい。彼ら。あるいは彼女らか。に喧嘩を売りたいのは構わないけれど、できればもう少し待ってもらいたいね」

「フェイト・ハラオウンの回答次第だ。アレが協力すると言うのなら、元味方に全力で攻撃できるように慣らしておく必要がある。最低でも一度。欲を言えば三度は出撃させたい」

彼女は私と違って六課のメンバーとの精神的なつながりが非常に深い。だからいきなり全力で攻撃しろ。あるいは殺せと言われても、おそらくできないだろう。だから今回は慣らし運転の意味で出撃する。私が使っているシミュレータが使えればいいのだが、あれは脳への負荷が強すぎる。色々とぶつ壊れている私でもキツイのに、マトモな彼女には……まあムリだろう。元々脳の処理機能も強化されている戦闘機人用にと用意されたものだから、普通の人間が使うべきものじゃない。

「記憶を消して洗脳するのが一番手っ取り早いと思うんだけどね。そうすれば実験の後でも戦力として運用できる」

「判断能力が低下する。そういうのはできれば最後の手段にしたい」

「躊躇って、足を引つ張られるよりは余程いいと思うよ？ 私はね」

「付き合いが深ければ相手のこともよくわかる。そのアドバンテージを失うのはもったいない……というのは建前だ」

「ほう？」

こいつを理屈で説得できるとは思っていない。戦い以外での頭の回転は、私と次元が違う。でなければ戦闘機人やその武装。あるいはガジェットのような機械の量産などできるはずがない。説得しようとしても逆に丸め込まれるのがオチだ。だから理屈での説得は諦めて私らしくない非合理的な発言で丸め込む。こいつは基本的に合理主義とは対極のところの、あえて言葉にするのなら娯楽主義者であるから、こいつが面白いと思うであろう発言をする。

「本音を言えば、彼女には一度命を助けられた。あまりひどい扱いをするのは主義に反する」

「君らしくないね。ところで、その主義に関して詳しく聞いても？」
「簡単だ。恩には報いる」

返すことのできない恩に関しては諦めているが。例えば、あの糞共から助けてくれた魔導師。クロノ・ハラオウン提督の指揮下の魔導師だったらしい。らしいというのは、本人に確認できていないから。私が猟犬になってから、あれこれとコネを使ってそのクロノ・ハラオウン提督に謁見したところ、私を助けた数週間後の任務で死んだとのこと。まあソレに関しては諦めている。ちなみにその上司へ恩は感じていないので、管理局を害することに別段罪悪感はない。レジアス中將にはスカリエツティの計画のことは話していないが、生きてさえ居れば簡単に……とは言わないが、事後の混乱もすぐに治めて復興させて、さらに権力を握ることも可能だろう。だから一度はあえて恩を仇で返す。

そして、フェイト・ハラオウンについてだが。彼女への恩はバルディッシュの回収と、選択肢の用意という形で返してある。つまり、これで貸し借りはなし。

「単純だけれど、なかなかいい主義だ。感動した」

「時と場合によっては簡単に覆すがな……さて」

話をしながら歩いていたら、ある部屋の前に辿り着いた。目的地だ。ドアをノックして入室の確認をする。

「……どうぞ」

許可を得たので、ドアの横にある機械にカードを通してロックを解除。ついでに蛇の擬態も解いて、右手は無い状態に。

「この部屋は。アレかい」

「確認する。そろそろ意志も固まったことだろうしな。拒否したら、その時は好きにしろ。協力もする」

「もちろん。そうさせてもらうよ」

センサーに手を当てると、ドアが横にスライドして開く。その中には、待機状態のデバイスを手に持って、神妙な面持ちでソファに座りこちらを見るフェイト・ハラオウンが其処に居た。やはり戸惑いや不安があるのか、戦いを生業とする人間とは思えないほど白かった手は

固く握られてさらに白くなり、さらに少し震えている。それに加えて、腕の無い私の姿を見て、少しだけ引きつった顔になった。すぐに戻ったが。

私とスカリエッティはガラスの天板のテーブルを挟んで正面に座る。スカリエッティはニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべながら。私は膝を組んで、相手を見下ろしながら。この方が威圧感が出て、反抗心も薄れるだろう。

そして、彼女の目を見て口を開く。

「さて。時間は十分に与えたはずだ。答えを聞こう」

丸二日という時間は、心を整理するには十分過ぎるだろう。これで決まっていなければ、実験材料となる未来しか残っていないが。

「自らの意志で元仲間と戦うか。大事な人が死に、さらにはこの変態のオモチャにされるか……お前はどちらを選ぶ」

「変態とはまた随分な言い様だね。せめて天才と言ってくれたまえ」

「お前は黙れ。さあ、答えろ」

「……」

彼女は喋らない。いや、口を開いて声を出そうとはしているのだが、言葉が喉で止まってしまい音として出てこないのだろう。意志は決まっていなくても、やはり認めたくないという気持ちがあるらしい。

「……しは、私は……」

「さあ、どちらだ」

「決められない……。どっちも、私は嫌、嫌だよ……!」

ようやくまともな言葉を出したと思ったら、ここに来て決められないときた。思ったよりもずっと意志が弱いらしい。しかもいきなり顔を両手で覆って泣き出すとは、始末におえない。しかし道は二つしかないわけで、なんとしてもここで決めてもらわなければならない。時間は有限だ。その有限の時間を無駄にして過ごすよりは、策を練っている方がずっといい。

「どうする? ハンク君」

「お前の方が頭がいいんだから、どうにかして決めさせろ。さすがに想定外だ」

私は強制はさせたくない。自分の意志で決めてもらわなければ。自分の意志で戦うかどうかを決めてもらわなければ、確実にそれは迷いとなって隙を生む。その隙に付け込まれれば、戦略が崩れる。

「……ふむ、いいだろう。任せられた。さて、フエイト・テスタロッサ。君は少し勘違いしてるようだけれども、君が戦うのは仲間を傷つけるためじゃない。仲間を守るためだ」

「守る、ため？」

「そうだ。君が戦力に加われれば、我々にも少しだけ余裕ができる。余裕があれば殺さないよう手加減することもできなくはない」

何を温いことを言っているのか、と怒りたくなるが、ここは抑えておく。スカリエッティに任せたのならこいつのやりたいようにやらせるべきだ。頭の悪い私が余計な事をして、こいつの考えを台無しにしては任せた意味が無い。

それに、私にとってこいつの言っていることが馬鹿馬鹿しくても、彼女にとってはそうでもないようで、泣き止んで、不安そうな表情はそのままジッとスカリエッティの顔を見ている。効果はあったようだ。

「本当は彼を使う予定だったが、彼は君のデバイスを回収するために右腕を失ってしまった。おかげで元からギリギリで足りていた戦力が、完全に不足してしまっているんだ。しかし君のように非常に優秀な魔導師が居てくれれば、空いた穴を埋めて余りある……君にしかできないことだ。そして、これは君にも益のあることだ。さっきも言ったが、君が居てくれれば無駄な死人を出す事もなく計画を遂行できるだろう……そして、君もひどい目に合わなくて済む。私たちには君が必要なんだ。フエイト・T・ハラオウン」

別に腕は蛇で代用できるからいいが。まあそれは置いておこう。確かに、彼女が居れば事は少しだけ楽に進むだろう。それでも数百メートル続く地雷原を探知機なしで踏破するほどの難易度には変わらないが。

しかし、スカリエッティは随分と女の扱いにも長けているようだ。いや、正確には人の扱いか。私だったら『お前のために色々と苦労し

たんだから、対価に見合うだけの成果を出せ。拒否したら死ぬよりひどい目に合わせる』としか言えないだろう。そして、スカリエツテイの甘い言葉は彼女の心のどこかに触れたのか、涙を止め。迷いや不安はまだ残っているが、それでも何かを決めたような顔になった。

「……わかりました……」

「だとき。ここからは君の役目だ」

スカリエツテイが得意顔でこちらを向き、あとは任せたと云ってくる。とりあえず眼を一度変えて、感情を覗いてみる。特に怪しいところは見られないが、元仲間と会ったら揺らぐ可能性は非常に高い。それだけは頭に置いておこうと決めてから、眼を閉じて元に戻す。しかし、この能力は本当に便利だ。嘘を見抜くには丁度いい。

「ひとまずはおめでとう。と言わせてもらう。この瞬間から、お前は私たちの仲間となったわけだ……」

「うん……じゃあ、改めて。よろしく」

差し出された左手を握ることはしない。てつきり私が手をにぎるものだと思っていたのか、彼女はやや戸惑った表情を浮かべる。しかし私は彼女を仲間と認めただけではない。まだ仲間と認識するには、判断材料が不足している。だからこれから判断材料を手に入れる。

「私はまだお前のことを信用していない。元仲間を相手に本当に戦えるかどうかを確かめなければな。昼食を摂った後出撃して、それを確かめさせてもらう。準備をしておけ」

「……わかった」

「じゃあ、私はこれから朝食を作るから失礼する。作ったら持つてくる」

「え、でも片腕で……」

片腕で作れるのか、と聞こうとしたのだろうが。二の腕から蛇を出して、互いに絡み合わせて腕のようにし、元の腕をイメージすれば、ちゃんとしたヒトの腕が。これで料理もできる。それだけ見せて、入ったドアから出て行く。

「あ……」

「それじゃあ、私もこれで失礼させてもらうよ。活躍を期待している。」

頑張ってくれたまえ」

スカリエツティも私の後をついて出て行く。そして廊下に出て、ドアが閉まったところで、歩きながら会話を始める。

「見事な説得だったな」

「君があらかじめ追い込んでくれたのと、デバイスのAIに少し細工をしておいたからね。一晩自分の半身とも言えるデバイスと会話して、そういう方向に意志が傾きやすくなつたのさ。あとは少し彼女の望む言葉を推測してかけてやれば、簡単に落ちる。ところで今日の朝食は何かな？」

「スクランブルエッグとパン。それと作り置きのパテトサラダ」

「楽しみにしているよ。では、私は皆を呼んでこよう」

スカリエツティと廊下で別れ、あいつは居住区に。私はキッチンに向かう。できれば家事以外何もすることがないくらい暇なのが理想的のだが、残念ながらそうはいかない。今日は面倒だが、昼までに爆弾首輪を作つて。さらに出撃時のサポートに誰を連れて行くべきかを考えなければならぬ。今日は忙しい一日になる。

第59話

十二時。昼食を作るだけ作って、先に一人で食べ終えて、食事の時と同じように一人訓練場で作業をしている。目の前にあるのはウエンデイから借りているボードのスペアと工具と、ガジェットの操作装置。ガジェットには人の手ではとてもじゃないが重くて持ちあげられないような武器……重機関銃とその弾。歩兵用の対空ミサイル弾体と、発射筒。それらを使用するための小型レーダー。それに接続するためのケーブルなどを吊るしてもらっている。食事を先にしたのは、オイル臭い手で料理を作って文句を言われてはかなわないからだ。

と、まあそれは置いておいて。ボードの先端部に小型レーダーを押し付け、ボルトと金具で数カ所を固定。緩まないように、ガジェットのアームの先端につけたスパナでしっかりと締めさせる。そこに保護用の円錐形のカバーを被せて、隙間からケーブルを引っ張りだしてボードの上に付けられた、ノートパソコンに似た形を取っているデバイスと、プレートの腹部分にセットしてある大容量バッテリーについて、スイッチを入れて起動。デバイス側からもレーダーユニットが認識されていることを確かめて、次の作業に移る。今度はボード自体を持ち上げさせ、その下に潜り込んでいくつか金具をセットする。そうしたら次はボードの背に小型の対空ミサイルがセットされたミサイルコンテナを固定。またコードを伸ばしてデバイスに接続する。

なぜ一々デバイスに接続するのかというと、事務処理特化に改造した私のデバイスは、情報処理能力だけは高い。市販品と大した差はないが、それでも戦闘用の機能を本当に最低限だけ残して後のメモリは全て情報処理に割り振っている。なので試しにこれ一つで火器管制装置の役目を果たせないだろうか、と思っ少しテストしているところだ。処理するためのプログラムは専門外なので、ガジェットの改造型の物をそのまま流用している。パーツの番号も同じだし、処理装置を少しだけアップグレードしただけなのでおそらくバグなどはないと思う。しかし、念のために一度だけチェックしておく。スキャンボ

う。というわけで2つ目の制作に入る。同じサイズの携帯灰皿を取り出し、蓋を開けて……さつきと同じ作業をしたら、今度は蓋をバーナーで溶接し、絶対に開かないようにする。その後はリングに極細のワイヤーを通して完成。ひと通り終えたので手で汗を拭いて、それからボードを見れば、もう配線がむき出しだったあの汚いボードはななく。代わりに配線を隠すカバーでデコボコしている、ほんの少しだけ小奇麗になったボードがそこにあった。腹に機銃と巨大なロケットブースターを抱え、背には本体よりも巨大なミサイルコンテナを。さらにUの形をしていた先端部は本体の色と同じグレーのカバーで覆われ……もはや原型をとどめていない。本来はこの武装全ての機能が使えるはずだったのだが、あいにくと私には魔法を使う才能が欠片もないのでこうするしかない。つくづく魔法の便利さというものを思い知らされる。魔力とデバイス、あとは才能さえあればなんでも出来る。空も飛べて、近接格闘もできて、誘導弾。直射弾。捕縛。砲撃。索敵。本当になんでもできる。魔法が使える奴は本当に羨ましい。

こんな事を考えるのは、作業が一段落ついて余裕ができたからだろう。本当はこんな事を考えている場合じゃないんだが。

「……」

次に考えるべきは、今回連れて行くメンバー。フェイト・ハラオウンが元味方を相手に本当に戦えるかどうかを見る、という目的で出撃するのだが。さすがに私一人とガジェットだけではあまりに心細い。爆弾を持たせて裏切れないようにするからフェイトに攻撃される心配はないが、敵に狙われたら起爆はできないし逃げられないしでひとたまりもない。もしもフェイトが落とされた時には回収しなければならぬし、その時には敵陣に一人で突っ込むことになるから援護が必要。さて、誰に頼むか……と、考えていたところで誰かの足音が聞こえる。その方向へ向くと、訓練場の入り口からこちらへ歩いてくる名無しが見えた。

「どうした」

「今回の出撃、私も一緒に行かせて」

「却下」

「私も戦力として役に立てるはず。どうして？」
「私の妹の入れ物になる身体だ。傷の一つでも付けさせるわけにはいかない」

作業に使った道具は道具箱に。爆薬と信管はそれぞれ別々の箱に入れて、箱をガジェットに持たせて立ち上がる。ボードは浮遊設定にしておけば重力に逆らって地面から一定の距離で滞空するので、あとはそれを押して歩けばいい。どれだけ重量があらうとも、重力から解放されて浮いているので重みはゼロ。

隣に並んで歩く名無し。もとい『容器』の顔は見ずに、言葉だけを聞きながら前に進む。こいつには私に対して何か特別な感情があるようだが、その正体はよくわからない。わからないということに対し、得体のしれない不気味さを感じるのでできるだけ接触は避けている。だというのに、こうして接触してくるのはとても。迷惑だ。顔と声がエリーと一緒にだけあって、まるで妹と一緒にいると錯覚しそうになるのもまた辛い。抱きしめたくとも、姿が似ているだけの偽物とわかっていいるから抱きしめるわけにはいかないのがまた……人形を抱きしめようとしているのだと、思いとどまるのだが。その度に虚しさに苛まれる。そんな事を思うのは、孤独を感じているからなのだろう。

「私も戦いたい。役に立ちたい」

「ダメだと言っている」

「絶対に怪我はしないから」

「万が一にも、お前が鹵獲されるような事があってみる。スカリエツティの作戦が一瞬で無駄になる」

一度は世話になった隊長殿に売り渡そうとしたこともあったが。こいつの用途を知ってからはそうしなくてよかったと思っている。なぜなら、一度敵の渡してしまえば、貴重なサンプルとして監獄の奥深くに監禁されるだろうから。もしその状況になった時、成功するかしないは置いておいて。私はなんとしてもこいつを回収しに管理局へ全力で突っ込まなければならぬ。成功率は限りなく低いだろう。だがそれでも、大事な大事な妹の体だ。やらなければならぬ。こい

つは戦闘経験が無いし、他のナンバーズよりもそうなる可能性は高い。そのリスクを考えると、こいつを前線に引つ張りだすわけにはいかない。

それに、偽物であるとはいえ妹を傷つけられたら、私は絶対に正気では居られない。冷静さを欠いた兵士など、役立たずもいいところだ。だから、こいつを戦わせる訳にはいかない。

「お前は常に健康で居ればそれでいい。ソレ以外は考えるな」

「……」

「じゃあな」

地面を蹴り、腰のあたりで浮いているボードに飛び乗って訓練場を移動する。無駄話をしている間に、出撃の時間が迫ってきている。私は死んだことになっているのだから、フェイスマスクでもしておかなければならない。そのために、一度手を洗って適当な布でも探さなければ。

第60話 交戦開始

13時。ミッドチルダ郊外上空にて。

アジトから出撃しておよそ二十分。障害の一つもなく目的地に到達したので、ボードに乗ったまま高度を上げて、雨雲の中で滞空する。現在の位置は、首都クラナガンから離れた廃棄都市区画。その中心からかなり離れた部分の、さらに上空。ここならば戦闘しても被害は少ないし、目撃者も少ないだろうと考えて選んだ場所だ。天候は雨。地上にも、見える範囲の空にも人は居らず、それほど強くはない風が吹いている。魔力探知されないためにバリアジャケットではなく雨合羽を着用して移動していたが、少しだけ濡れてしまい身体が冷えてしまっている。が、それでもコンデイションはベストに近い状態。私
が動かなければならない時にはすぐに動ける。

「目標地点に到達。これより作戦行動を開始」

赤い色をした、掌サイズの六角形の結晶。莫大な魔力を秘め、かつてこれ一つで空港一つを焼きつくしたというロストログア。レリック、という物らしい。ケース出したそれを掌に載せ、その掌の中で僅かな量の魔力を炸裂させる。人が至近距離で触れても、蚊に刺された位の痛みしか感じない程度の、ほんの極小の量。たったそれだけの魔力爆発で、まるで大口径のライフルを発射したような衝撃が跳ね返り、真っ赤に焼けた鉄を握っているかのような熱が発生する。このままだと暴走して自分が消し飛んでしまう。そうなっては意味が無いので、すぐに封印機能も兼ねたケースに放り込んで沈静化させる。

さっきした事の意味は、安定状態であるエネルギー結晶体に衝撃を与えて不安定にし、不安定化した事により発生する揺れを出すため。そしてその揺れを管理局に観測させて、機動六課をおびき出す。この作戦の第一段階。クラナガンからも比較的近い距離にあるこの場所でレリックの反応が出たら、出てこないわけがないのだ。

「フェイト・ハラオウン。聞こえるか」

雲の海を突き抜けて、上へ出たところに居たフェイト・ハラオウン

に声をかける。リーダーに捕まりかねないからあまり上空は飛びたくないのだが、相手がそこにいるのだから行かなければ仕方が無い。

「聞こえてるよ……」

「少ししたら管理局の部隊。おそらくは機動六課が来るはずだ。殺せとは言わないが、全力で戦え。でなければ死ぬぞ」

「……」

「返事は」

「わかってる。だから、今は一人にして」

やはり戦うのには抵抗があるようらしい。この程度なら想定の範囲内ではあるが。

さて、これで言われたからと下がるわけにはいかない。逃げるようなら起爆しなければならぬし、裏切ろうとした瞬間にも起爆しなければならぬ。そのためには彼女を目に届くところにおいて置かなければならぬ。

「それは出来ない。お前の監視が私の仕事だ」

「……」

諦めたようで、すぐに下を向いた。

『本当に大丈夫なの？』

「不味いことになる前にちゃんと殺す」

クアットロからの通信。彼女が裏切らないか気にしている風なクアットロを安心させるために、スイッチを握る。あの量の爆薬なら、防御魔法の上からでも確実に殺せる。防御の薄い彼女がゼロ距離での爆発を受ければどうなるかなど、わかりきっている。

今度は通信のチャンネルを切り替えて、クアットロ、ウエンディ、デイエチの三人に限定して繋ぐ。その三人は地上で待機しており、撤退時に上がってもらい、一発砲撃を撃って牽制。さらにクアットロの幻影で水増ししたガジェットを出し、その隙について撤退するという作戦だ。

「ウエンディ、デイエチ」

『問題ないっす』

『準備はできてるよ。いつでも撃てるし、索敵も万全』

「作戦は道中で説明した通りだ。攻撃は撤退時若しくは敵に発見された時に限る」

今回の作戦は単純。レリックの反応を感知させ、機動六課をおびき寄せる。そしてフェイト・ハラオウンと戦わせる。彼女とともに戦えるメンバーはもはや高町なのは以外に残っていないが、だからこの作戦を提案した。高機動高火力と、高火力重装甲。相性は良い。他と連携されれば援護しなければ厳しいだろうが、今残っている機動六課にメンバーの中に空戦可能な者は竜召喚師のキャロル・ルシエと、ウイングロードで限定的に空戦が可能なスバル・ナカジマのみ。連携するには実力が劣りすぎていて、逆に足を引っ張るだけだろう。

さて、機動六課にはいつはやられてばかりだったが。今回ばかりは意趣返しといこう。

『観測用ガジェットからの通信。ヘリが2機、隊舎から出撃したらしい。一機は地球製の物と形状が似てる』

デイエチからの通信。なら片方は、再編された質量兵器運用小隊の可能性が高い。相手の取るであろう作戦は、重装甲と質量兵器を装備した地球産の武装ヘリで魔導師にとっては脅威となるAMFを発生させるガジェットをあらかじめ破壊し、それから小回りの効く本命の魔導師を投入する。おそらくはそれだろう。管理局の歴史の中で、質量兵器と魔法の共同作戦は私の部隊が初めて行ったことだ。たった一度だけ。だからこそそれ以外の戦術、選択肢が存在しないことを理解している。だから、最初の一手を崩す。崩してしまえばソレ以上の手の打ち方を知らないのだから、もう打てない。

「リーダー、FCS起動。全武装ロック解除」

武器が起動する音が鳴り、各武器の残弾数、ロックオンの状態、リーダー反応が載っているスクリーンが展開される。デバイスが急に増えた情報量に悲鳴を上げ、冷却用のファンをうるさいほどに回転させる。もう少し性能のいいデバイスを使用した方がいい。スカリエツティに頼めば簡単に性能のいいデバイスを作ってくれるだろうが、奴にはあまり借りを作りたくはない。今のでもなんとか使用できるという状態なので、なんとか騙し騙し使っていく。

「手は出さないんじやなかったっけ」

「機動六課の連中じやない。私が相手をする」

「死人は出さないって、約束したよね」

「そんな契約をした覚えはないがな」

「なら、ここで君を手出し出来ないようにしてみせようか」

死にたいならやればいい、という言葉が喉元まで上がってきて音になりかけたが、こんなくだらない事で苦労して手に入れた戦力を失うのはもったいない。なので、仕方なく武装のロックを掛け直す。ボードのテストはまた今度。今回はこいつが戦えるかどうかの観察に徹しよう。

「……わかった。今回は下がろう。ただし、私のところに来た場合は自衛のために行動させてもらう。死人を出したくないなら、自分で全部落とすつもりで。全力で戦え」

そして、そのままお互い無言で待機する。その状態からおそよ10分が過ぎた頃。レーダーに反応が二つ現れた。距離は十数キロとあったところ。あと数分で交戦範囲に入るだろう。

「来たぞ。落とされるなよ、回収するのも手間だ」

ボードを傾けて急降下し、ビルの谷間へと身を隠す。そしてデバイスのメモリを、索敵だけ残して後は全てガジェットのおペレーターに振り分ける。ビルの隙間から空を見上げると、そのまま空に上がっていく8体のガジェットが見え……そして飛んできたミサイルに四体叩き落とされた。その後も一体ずつ何かのせいで爆発していった。飛んできたミサイル四本だが、なぜか八体撃ち落とされた。銃声は聞こえなかったし、魔力弾の色も見えなかった。消音器を付けた狙撃銃だろうか。しかし、ヘリから狙うにはまだ遠すぎる。ということ。インカムのスイツチを叩き、チャンネルを絞って通信する。「ディエチ、伏兵が居る。近くに敵が居ないかスキャンして確認しろ。クアットロは見つからないよう偽装に専念。ウエンデイはこっちに来て適当に暴れる。ただし、相手は対物銃を持ってはるはずだ。撃たれてもいいが、当たるなよ」

さつき上から降りてきた時に、私は偽装も何もしていなかった。一

応ボードの裏は雲の色にペイントしてあるが……あの時に落とされていてもおかしくなかったと反省。そして、作戦の変更をする必要が出てしまった。撤退時に補足されていない私たちが攻撃をして攪乱し、その隙を突いて回収。撤退という流れになる予定だったのに、私が補足されてしまったのでその前提が崩れた。地上で暴れてしまえば、あちらからも地上戦のできるメンバーが出てくるだろう。全く面倒なことになった。

『どうすればいいっすかね』

「殺さない程度に、好きに暴れろ」

『全員殺しちゃえば手っ取り早いと思うんだけど』

「そうしないと上のやつが働いてくれなくなる。色々と制約はあるが、それでもアレの方が私より戦闘力は高いからな」

ウエンデイとクアットロからの通信にそうとだけ答え、ボードの上につけてあるガンラックからアサルトライフルとハンドガンを取り、それぞれにサプレッサーを装着。マガジンを挿入して初弾を装填。安全装置を解除。それからボードから地面に、音を立てないように降りる。ボードの上部に装着した馬鹿でかいミサイルコンテナのおかげで、本来このボードの機能の一つとしてあった盾としての機能が完全に潰れている。元々盾を使うような距離での戦闘を想定していなかったせいだが……まあ今後こういうことがあるかもしれない。手を使わなくても動かせるようにスカリエッティに改造を頼もう。借りはできるだけ作りたくなかったが、必要なことだ、仕方がない。

スカリエッティに頼み事をした際に要求される対価が面倒なものでなければいいのだが、と思いつつ魔法を使って感覚を強化。壁を背に、ボードを正面に立て。目を閉じて音を拾うことに集中する。

まず聞こえるのは、ビル風の音。ヘリのエンジンと、ローターの風を切る音に混じりコンクリートを砂利が叩く音。さらに集中すると、靴底の擦れる音。銃とスリングが擦れる際に起こる不快な音まで聞こえるようになった。正確な数こそわからないが、三つの部隊に分かれて行動しているようだ。相手が猟犬なら五人一小隊。そうでないなら最低三人一小隊。それぞれの位置こそ離れているが、だからと

いって油断しては、おそろく居るであろう狙撃手に撃ちぬかれる。殺るなら一気に。かつ派手に動きながらでないと反撃されるおそれがある。感覚の強化を解除し、今度は肉体強化に魔力を回す。

『よし、全部このあたしがやっちゃうツスよ！』

そして、遠くで聞こえる爆発音と発砲音を合図に、私も銃を構えて路地から飛び出した。目視で発見したのは五人。格好は管理局の標準的なバリアジャケットだが、手に持っているのはデバイスではなく本来ならば禁止されているはずの質量兵器。アサルトライフル。おそらく所属は猟犬。距離は二十メートルかそこら。

その情報を一瞬で判断し、弾丸をフルオートで横一列にばら撒く。しかし相手もそれに反応して防御魔法を使用し、弾丸は全て弾かれた。ならば、と今度は銃を手放して肉体強化に費やす魔力をさらに増やし、地面を蹴って突撃。相手から放たれる銃弾の射線に入らないように、左へ弧を描きながら接近しつつ、ナイフ二本を両手で抜く。数歩で距離を詰め、一番手前に居た奴の両肩にナイフを突き刺す。何の変哲もないただのナイフだが、それでも高速で突き出せば銃弾と同じ。バリアジャケットを切り裂いて突き刺さり、刺された男の顔が苦痛にゆがむ。

いつもなら心臓に刺すのだが、今回は殺してはいけないという制約があるためそうしない。

ナイフをすぐに手放して、あとはもう敵の集団の中に潜り、一人ずつ強化した拳で殴り倒していく。全員倒したら立ち止まらず、建物の中に入り眼を切り替え、狙撃手を探す……が、視界内には居なかつたので、一息ついて落ち着く。腕時計を見ると、この間およそ十秒ほど。勘は鈍っていない。むしろ以前よりも冴えている。

安全を確認したら隠れていた建物から出て、殴り倒した奴ら、一人ずつ腕を踏み折っていく。反撃するにも腕が使えないとどうしようもないだろうし。

全員分の腕を踏み折ったら、ボードを呼んで飛び乗り、場所を移動する。上空では既に戦いが始まっているようで、上を見上げれば雲の合間から桃色と黄色の魔力光が見え隠れしている。

『よし、二班と狙撃手一人倒したツス！ 残りは何処ツスカー!!』
「もう一班は私が潰した。次は六課の魔導師連中が来るはずだ、備えておけ」

『了解ツス！』

予想される敵戦力は、ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ、エリオ・モンディアル、キャロル・ルシエの四名。あとは私の元部下の部隊だが、非魔導師では降下時が隙だらけなのでおそらく来ないだろう。

ライフルをリロードして、再度上を見上げると、スバル・ナカジマの得意とする魔法。ウインググロードがいくつか伸びてきて、廃ビルに突き刺さり瓦礫と粉塵をまき散らした。

『第二ラウンド、もとい本番の始まりツスね』

「油断するな。相手はさっきの雑魚とは違うぞ」

『わかってるツス』

一旦建物に隠れ、そのウインググロードから降りてくる四つの人影を見守った。ウエンディの言うとおり、これからが本番。さて、殺さないうようにという制約の下で、私はどれだけ持ちこたえられるだろうか。

第61話 死闘

「面倒なことになったな」

最初から最後まで、想定通りにうまく行くとは思っていなかったが。予想していた中でも最悪の次に悪い展開になってしまっている。ビル影に隠れたままボードのリーダーから送られてくる情報を見続けたが、降下してきたのは四人。それ以上増えては居ない。そして目視での確認で、その戦力内容は私の予想した通りであるという事が判明している。

最悪の展開は、上でハラオウンと戦っている高町なのはがこちらに降りてくるということだったが。そうなっていないのはやはり殺されたくないから全力で戦っているということだろうか。見ていないのでなんとも言えないが。

『どーするツスカ』

「召喚士と槍使いをやれ。残りは私が」

『了解、一度仕掛けた後地上スレスレまで降りるツスカから、そこで狙うとイイツス』

ライフルのマガジンを抜き、腰につけているポーチのジッパーを開いて放り込み、今度は胸のマガジンポーチから弾丸が全弾装填されているマガジンを差し込みリロードする。対物ライフルでなくとも、普通の魔導師のバリアジャケット程度なら防御魔法を使われない限りは5・56mm弾で抜ける。ということは、奇襲が成功すれば最低でも片方の戦闘力を奪えるのだ。

問題はどちらから狙うかだが。順番は重要だ。機動力が高く接近戦が強力なスバル・ナカジマと、中距離での射撃が得意なティアナ・ランスター。どちらも非常に厄介で、できればまとめて潰したいのは山々だが。二兎を追う者は一兎をも得ずという諺の通り、欲張ってどちらも無力化に失敗するという結末になっては非常にマズイ。よって優先するのは、一気に距離を詰められ一方的に殴られる可能性のあるスバル・ナカジマにしよう。射撃は、撃ち合いになれば誘導も演算

もしなくていいこちらが有利だし。

『おらおらー！ 私はここッスよ！』

インカムのスイッチを切り忘れたまま、ウエンデイが叫ぶ。音量は自動で加減されるようになってるのでうるさすぎるといふことはないが。インカムのついていない左耳からも声が聞こえてくるとうことは、よほどの大声を出したのだろう。陽動には丁度いい。

『全員食いついた、三秒後前を通るッス！』

「了解」

通信を聞き、安全装置のツマミをフルオートに変えて、表通りに銃口を向けて構え、意識を集中して感覚を引き伸ばす。その直後ウエンデイの乗ったボードがそれなりのスピードで突っ切っていく……私
の感覚で『それなり』なので、実際はもっと早いのだろう。それを追いかけるようにスバル・ナカジマのウイングロードが伸びていき、術者が上を走っていく。その瞬間に銃口を少しだけ下げてトリガーを引き絞る。エアアの抜けるような音が連続で響き、銃弾が吐出され、銃床が反動で私の肩を叩く。吐出された銃弾の帯に足を踏み込んだ『目標』が、足を貫かれてバランスを崩し、自分の作った道から転げ落ちて破砕音を放ちながら、ビルの隙間から見える世界から消えた。

『おお、ナイススキルッス』

「足を撃つただけだ。殺しちゃいな……」

リロードする手と、言葉を放つ口を止める。凄まじく嫌な感じ……ハッキリとした敵意？ のようなものを感じたので地面を蹴って飛び上がり、ビルの屋上を目指す。一度の跳躍では減速してしまうので、もう一度壁を蹴って、垂直に飛び上がり、屋上に捕まる。その直後に真下の路地を数発の魔力弾が通過していった。しかしさっきのは勘、というやつなのだろうか。今までなんとなく、という感覚を得て行動に移したことはあるが、今日ほどハッキリと感覚を得たのは初めてだ。右腕を蛇で補っているからだろうか。感情を見抜く能力がさらに進化し、視界内に居なくとも。さらには眼を使わなくてもわかるようになったようだ。例えるのなら、嗅ぎとる、とでも言おうか。今までは忘れていたが、蛇の侵食が進んでいるのだろう。侵食が行く

ところまで行った時に私の自我は残っているのだろうか。ビルの屋上からぶら下がりがりつつ考える。

「逃すか!」

見るまでもなく、怒りの感情を纏った女が下から上がってきている。それから逃れるために、片手でぶら下がっていた身体を持ち上げて屋上に上がる。当然といえば当然だが、ゆっくり考え事をする暇など与えてもらえないらしい。戦場で考え事をするとは、自分のことながら随分と余裕だ。相手の実力を考えると、そんな余裕は本来あるはずがないのだが……頭を切り替えよう。

敵はBランクの陸戦魔導師。肉体は通常の人間のもの。射撃魔法を主に使用。移動能力、格闘能力は平均的な魔導師のもの。もう片方とセットであれば互いの欠点をカバーし合い、とても厄介な相手と言えたが。片方だけであれば、殺してはいけないという制限があったとしても、時間をかせぐことだけを考えれば簡単な相手だ。とはいえ油断は禁物。こちらの残弾は今装填しているマガジンに入っている分と、未使用のマガジン一本分。それと拳銃。決して無駄遣いできる量ではない。使いどころを選ばなければすぐに無くなってしまう。

そして、その使いどころはまさしく今。

背後から迫り来る敵意に対して、拳銃を右手で抜き、左の脇の下からろくに狙いも定めずに三度引き金を引く。当たりはしなかったが、牽制にはなったらしく敵意は停止した。振り向くと、敵意の主。スバル・ナカジマが左足から血を流しながら立っていた。通常ならば痛みで歩くことは愚か、這いずることすらできないだろうに……いや。通常ではないからこそできるのか。そこは腐っても戦闘機人といったところ。

しかし、痛みが行動の障害にならないというのなら、銃弾の一発被弾した程度では機能の低下は僅かなもの。主要な血管からは外れているのか、出血量はそれほどではない……が、少なくともない。時間が経てば出血が増えて動けなくなるだろうが、それまでに私が捕まるほうが早いだろう。そしてどうするべきかの判断をしている内に、もう片方がビルをよじ登って背後に立った。

「管理局員への攻撃。質量兵器の使用。攻撃には正当な理由になるわ。痛い目を見たくなくなったら武器を捨てて投降しなさい！」

状況は一転。若干の有利から、崖っぷちの不利へ。つまりは振り出しに戻る。さてどうするべきか？

大人しく投降する。却下。考えるまでもない。

ウエンディに助けを求め。却下。あつちはあつちで忙しいだろう。

デイエチに支援を頼む。保留。撤退時まであちらの存在は隠しておきたい。余程追い詰められるまではこの決断はなし。

抵抗する。採用。一対一なら実力は拮抗している。ならば一撃で片方を潰して強引にその状況に持ち込めばいいのだが。この状況でそれをするのは少し難しい。なんとかして引き離すか、上が片付くまで逃げ切るか。逃げ切るのが一番現実的だろう。

「……わかった、この通りだ」

いつも話すよりも、ずっと低い唸るような声で、降参の意思を口だけで示す。それから銃のスリングを肩から外し、屋上のコンクリートの上に置く……フリをしてスバル・ナカジマの方へ突っ込む。しかし相手もやはりそれを想定していたようで、迎撃の拳が正面から。無力化するための弾丸が背後から迫ってくる。それぞれを回避するため大きく飛び上がり、空中で体を捻って拳銃を相手の太ももを狙って撃ちこむ。が、貫通はしない。せいぜいがバリアジャケットの上から衝撃を与え、痛がる程度……だが、それでいい。損傷した血管にさらに衝撃を与え、出血を増やすことが目的なのだ。着地と同時に右腕を振り、着地狙いの誘導弾をはたき落とす。どうせ非殺傷だ、受けても痛覚がないからダメージにはならない。

「嘘、弾いた!？」

驚くランスターを放置し、さらにもう一度跳ねてビルの上から飛び降り、アスファルトで塗装された道路の上に着地。二人の視界からひとまず逃れたことに安心、している暇はない。上からさらに荒々しくなった敵意を纏ったランスターと、スバルが私を追いかけて飛び降りてきた。それも、魔力の弾丸の雨と共に。一発二発ならともかく、

十以上となれば弾くのは無理。受けるのも厳しいと思うので、大人しく逃げる。軽く飛ぶだけで十メートルほどは移動できるので、上から垂直に降ってくるだけの弾丸を回避するのは容易。

ただし、その後突っ込んでくる近接魔導師はまた別。ローラーで地面を滑走し、加速。速度、体重、さらに魔力強化の上乗せされた一撃を、空中に居る私は回避できず、右腕を盾にして防ぐしかできなかった。接触の瞬間に腕の軋む音が聞こえて、さらに結構な距離を吹き飛ばされる。

「う、ぐうー」

何度かバウンドして転げまわった末に、地面を蹴りあげ体勢を立て直す。すると今度は眼前にローラーブーツの足底が迫り、首を曲げて避けるももう片方の足で鳩尾を蹴り上げられ、胃の中身をぶちまけながら体を浮かせられる……それでも、ボクサーのガードスタイルを取るくらいはできた。そこへさらに容赦を感じさせない追撃が来る。両の拳と、遠距離からの精密な誘導弾に、顔、腹、足、腕、胸。ガードは最初の五発で崩れ、その後はともかく全身を打たれ、痛みこそ無いもののその衝撃に意識を揺さぶられる。打撃を受けたところが熱を持つ。呼吸すらもできない……が、意識はまだある。意識があるのなら、なんとかできる。歯をくいしばって耐えて、耐えて、連打の間を待つ。いずれは相手も息が切れるはず。そのうち、解放される。それまではひたすら殴られる。

「あああああ!!」

雄叫びの後に、今までで最も重い一撃。右ストレートを顔に受けて、またフットボールのように転げまわる。が、ひとまずこれである連撃からは解放された。転げまわって、両足を地面に立てて。靴底をすり減らしながら減速。停止。眼を開く。平衡感覚は失っていない。背負ったライフルをちらりと見るが、銃身が歪んでいてまず使いものにならない。左腕はほぼ潰れていて、細かい動きはできそうにない。あれだけの連打を右腕は、さすがにロストロギアをそれにしただけである。あれだけ殴られて撃たれたのに、全く違和感がない。足も、まあなんとか動く。強化しておいてよかった……が、一番の問題は地面で

頭を打った時マスクが破れてしまったことだろう。おかげで、私の生存が知られてしまった。

「……………え？ オズワルド、准尉？」

一瞬の戸惑い。それなりの距離があるのに顔を見分けられるとは、さすがは戦闘機人。では、生半可な攻撃では活動不能には追い込めないだろう。

口の中からあふれる血を飲み込み、四肢の強化に使う魔力をさらに増やす。そして、猛然とスバル・ナカジマへ突進。数十メートルの間を二歩で詰める。そして戸惑いから未だ復帰出来ていないのに迎撃の蹴りが正確に飛んできたのは、普段の訓練の賜物か。しかしそれは無意味。刃に変えた腕で太ももを刺し貫いて止め、腹にえぐり込むように左腕を突き出す。バリアジャケットを貫通し、貫手が腹に突き刺さる。腕が血で真っ赤に染まるが、さらに押し込む。皮を破り肉を裂き柔らかく生ぬるい臓物をかき分け、背骨に手が届いたところで、それを握りつぶす。

ガクリ、と。機械の人形が電源を抜かれたかのように膝から崩れ落ち、バリアジャケットも解除され、管理局の制服姿の少女の腹から腕を抜く。支えを失った彼女は地面に倒れ、血の水たまりを作る。

「あ……………う、そ……………なんで、准尉が……………」

「……………」

問いかけに答えず、左腕を振って血を払い、ティアナ・ランスターの方を向く。目の前で起きたことが信じられず、呆然としていながらも、今の現場を作った私に恐怖を抱いているようだ。

「その女！」

「っ！ あんた、スバルをよくも!!」

私に呼びかけられて正気に戻った彼女が叫ぶ。銃の形をしたデバイスを構え、こちらに恐怖と殺意を向けてくる。

「すぐに治療すれば助かる見込みはある！ 上の連中と撤退するか、このままこいつを見殺しにして戦うか！ 好きな方を選べ！」

戦闘機人はどこまで損傷を与えれば無力化できるか、というのは私も知らないので脊髄を潰して強制的に動けなくした。途中で動脈を

確実に傷つけているが、管理局の医療水準ならなんとか……なるだろうか？ まあ戦闘機人だしそう簡単には死なないだろう。トドメは刺していないから、ハラオウンとの契約にも違反しない……

私の問いかけに対し、ランスターはデバイスを降ろした。敵意は依然消えていないが、それでも戦闘態勢は解除されたと見ていいだろう。

上から聞こえる音が消え、雲越しに見えていた魔力光も収まった。念話で戦闘の停止を頼んだのだろう。ちょうどいいので、ボードを呼び出して、その上に乗る。

「アンタ……どうして生きてるのよ!! シグナムさんにやられて死んだんじゃないの!？」

「貴様とは面識がなかったと思うのだが」

「この……嘘を!」

「嘘かどうかはさておき。さよならだ、貴様らがまだ我々の障害となるのなら、また会うこともあるだろう」

質問には答えず、積んでいたミサイルを上空のヘリに向け発射し、空になったコンテナをパージ。それから高度を上げつつ加速。

「総員、撤退」

たったそれだけ、全員に通信を送る。それからブースターに点火し、一気にその場を離脱した。

第62話 死闘（フエイト）

雲の上。バリアジャケット越しに、冷たい風が身体を撫でる。その感覚に身を震わせながら、これから始まる……始めさせられる戦いのために、身体に喝を入れ、熱を込める。見つめる先は、ついこの前まで共に戦いの場への移動手段として使っていた、機動六課の輸送用ヘリコプター。と、もう一機。見るからに装甲が厚そうでも重武装の、管理局製ではないヘリ。再編成され、機動六課に派遣された質量兵器運用小隊の所有する物……そして、白を基調としたバリアジャケットと、手に持つ金色の穂先をしたデバイスを持つ魔導師。数多の魔導師の所属する管理局でもトップランクの魔導師。機動六課の最高戦力……そして、私の親友である高町なのは。

バルディツシュを握りしめ、一つだけ深呼吸。戦うために思考を切り替える。私だって本当はこんなことをしたくない。

「行くよ、バルディツシュ」

《本当に良いのですね?》

「私はまだ死にたくないし、他の人に死んでもらいたくないから……やりたくなくても、やらなくちゃいけない。わかってくれるよね」

《私はマスターの意思に従うのみです》

「ありがとう」

礼を言つて、ザンバーフォームのバルディツシュを振りかぶったまま背中から魔力を放出し最大速度まで一気に加速。そのままなのは目の前まで接近し、叩きつけるようにバルディツシュを全力で振り下ろす……けれど、ダメージが通った様子はなく、彼女は健在。驚きの表情に顔が固まっている彼女に、一度振り下ろした剣を逆袈裟に切り上げ、そしてすぐに距離を離す。防御魔法も使っていないのに、相変わらずデタラメな防御力。

「フ、フエイトちゃん!」

いきなりの攻撃に驚いたなのは。その言葉に返事はしない。一つでも言葉を交わしてしまえば躊躇いが生まれるから……躊躇いは隙になり、隙は攻撃を呼ぶ。だから、何も言わず。なのはを見つめたま

ま、デバイスを構え、魔法を使う。

「プラスマバレット」

簡単な誘導弾を大量に、広範囲に放って弾幕を張り、視界を潰す。それに混じって移動し、なのはを囲んだところで炸裂させる。視界を眩い電気の光が埋め尽くすけど、彼女の位置はしつかりと把握している。彼女の真下にあたる方位から、切り上げ……ようとして回避する。すると丁度、彼女の得意とする砲撃魔法が真下に放たれた。ほぼ溜めなしで放たれた砲撃魔法でも、私は一度直撃を受けたら簡単に落とされてしまう。そうすれば彼女は私を回収しようとする……：そうしたらハンク君は間違いなく、何の躊躇いもなく、私の持つ爆弾を起爆させて、私ごとなのはを殺す。だから、当たる訳にはいかない。

「……」

一度距離を置いて、またにらみ合いに。彼女はこちらにデバイスを向けて、怒りと戸惑いの混じった表情でこちらに話しかける。

「どうして私に攻撃するの？ フェイトちゃん」

氷で背筋を撫でられたような、冷たい感覚。表情は、いつもよりも少し厳しい。けれど、言葉には底の見えない深い怒りが込められている。彼と対峙したときはまた違った種類の恐怖。私は付き合いが長く、深い友人を裏切ったことへの罪悪感を感じ……：なのはは裏切られたことへの怒りを持っている。それが恐怖を増幅させる……：彼に抱く恐怖が死への恐怖なら、なのはに抱くのは喪失への恐怖……：どちらがより怖いか、なんて決められないけど、どちらも等しく恐ろしい。

「ねえ、答えてよ」

喉を撫でるよな優しい声。のはずなのに、怖い。身体が震えて、顎がカチカチと音を鳴らす。

「……そう、しろって。命令、されてるから」

「誰に」

「は……」

『もし、続きを言ったらどうなるか。わかってるわね？』

ハンク・オズワルド。そう言おうとした瞬間。念話と同時にデバイスの格納スペースから短い音が鳴り、一気に血の気が引いて慌てて口

を閉じる。死にたくないから。彼に誰かを殺させないために仕方なく戦ってるのに、ここで殺されてしまったては。命令に従って、嫌々ながらに攻撃した意味が無い。私が死ねば彼が誰かを殺す。そうさせないために、私は戦う。戦わなければならぬ。戦わなければ、生き残れない。

「ごめん。言えない」

「……そうなんだ。でも、フェイトちゃんの意味じゃないんだね？」

「そうだよ！ 私だって、本当はこんな事したくない！」

「なら、戻ってきてよ。また一緒に戦おうよ、フェイトちゃん」

できる事なら、そうしたい。今すぐにでも、そうしたい。でも。

「それは、できない……私はまだ、死にたくないから」

「……」

デバイスの格納領域にある、銀色の小さな筒。一見、ただの携帯灰皿あるいは印鑑入れのように見えるこれは、中に私一人を殺すのに十分すぎる量の爆薬が詰められた爆弾。これを手離せば、その瞬間に逃げるよりも速く爆発に飲み込まれ、私は死んでしまうだろう。だから、ここで退くことはできない。

「ごめんね！ 死にはしないから!!」

二発だけカートリッジをロード。あふれる魔力をすべて電気に変換して、指向性を持たせて放つ。普通の出力の魔力攻撃じゃなの物は物ともしない……かといってカートリッジ一本ロードした程度でダメージが通るとも思っていないけど、元々ダメージを与えるための攻撃じゃなく、目眩まし。文字通り雷の速度で着弾した攻撃は防御を許さず、閃光と音をまき散らす。そう、閃光だけならさつきと変わらなけれど、今度は本物の雷と同じく大音量もついている。それは単なる大きな音と呼ぶにはあまりにも破壊的過ぎて、もはや音の爆弾と言ってもいいほど。あらかじめ対策をしておいたのに、こちらも耳もかなり深刻なダメージを受けているようで、耳鳴りがやまず。軽くめまいがする。

「……」

そして、それを何の対策もせずに受けたであろうのははと言う

と。意識を失い力なく地面へ落下していった。途中でレイジングハートが制御を奪ったのか、速度を落としながら落ちていったから落下して死ぬことはきつと無いだろうと思う。

これで、一段落。私は死なず、なのはも死なず。ひとまずは、良い結果が出た……

《警告！・ 3時方向ミサイル接近！》

「ッー」

安心していたところで、不意打ちのように飛んできたミサイル。それを見た瞬間に、電熱を持った弾をあちらこちらにばら撒きその場から遠ざかる。目論見は見事に成功し、ミサイルはあらぬ方向へ飛んで行く……が、その後爆発し、広範囲に鋼鉄の破片をまき散らし。身体を丸めて少しでも被害を抑えようとしたけど、ほんの少しだけ遅れて飛来した、熱を持った破片は防御をまるで紙のように貫通して身体に突き刺さり、切り裂き、引き裂いて行く。

「う、ギッ!!」

昔、本当の母から受けた、殺すつもり魔法。それと同等か、あるいはさらに強烈な痛みが全身を襲う。歯をくいしばっても、耐えられない。身体が中と外から焼かれ、血が喉元へせり上がり、手足が動かず、視界の片方が真っ赤に染まる。

それでもなんとか生きていることに。意識があることに感謝しなければならぬ。どんどん力が抜けていくのに抗いながらバルディッシュをなんとか持ち上げ。頭も上げて、ミサイルを撃ってきたへりを睨む。と、その下から大量のミサイルが発射されて……機動六課のへり、見知らぬ武装へりの両方に何発か命中して……煙を吹いて何が起きたのか全く理解できずにいると、インカムから通信を告げる音が聞こえ。

『総員撤退』

ハンク君の声が聞こえて、それを合図に耐え難い痛みを耐えつつ魔法を発動。浮かんできたボードがロケットで加速し、遠ざかっているのを見て軌道を少し修正。ボードの進路上に割り込み、血まみれの身体を叩きつけるように着地……そして、彼の腕を掴んで、意識を手放

した。

第63話

飛行中のボードの上に血まみれの女が降ってきて、私をボードから引きずり降ろそうとした。今の状況でそれだけ見れば、反射的に頭に銃弾を叩き込んで蹴り落とそうとした私は悪くない。当然、顔を認識して寸前で止められたが……意識はないようなので、引きずり降ろそうとしたのではなくただ落ちないように捕まったただけだろうと推測。回収の手間が省けたと考え、落とさないうちにバインドでボードに括りつけさらにブースターをパージし巡航速度を落とす。

全身血まみれ、ということはいレギュラーがあつたのだろう。高町なのはならば殺傷設定は使用することはないだろうし、何より全身の裂傷とその傷口の火傷。さらに傷口を軽く抉ったら見える金属片は、質量兵器を使用されたのだと考えられる。人間を相手にミサイルを撃つとは、容赦が欠片も感じられない。さすが私が教育した部下だけある、と感心する。

さて、そんな感傷はもういいとして。バリアジャケットすら維持出来ず、出撃時と同じ管理局の制服姿となり、片方の眼球が潰れ眼窩がむき出しになって、元の美貌を著しく残った彼女。その傷を見るために、失礼とはわかっていながらも服の前面を開き、その身体をぎつと見てみる。均整のとれた美しい身体……普通の感性をした成人男性なら劣情を催さずに入られないであろうその身体には、まるで似つかわしくない傷と夥しい血液で彩られていた。12の時から六年間殺し殺されの仕事をしてきたので、どれ位の傷なら助かるか、どれほどの傷なら助からないかの基準は理解している。

そして目の前の彼女は、出血量、傷の深さと数を記憶の中に居る生死の境に居る者達と照らしあわせて考えると……既に手遅れ。ミサイルの爆発で飛散した破片を近距離で全身に浴び、即死しなかったのは奇跡と言ってもいいだろう。運がいいとは言いがたいが。即死していれば苦痛を感じることもなく、安らかに逝けただろうに。リスクを犯し、さらに苦勞もして手に入れた戦力をこんなところで失うのは

非常にもつたいないのでなんとかしてやりたいのは山々だが、かといってこれといって打てる手も無いのが現実。このボードにはリーダーと機銃はあっても医療機器は一つも積んでいない。私も治療魔法は使えないし、瀕死の人間を助けられるほどの医療知識も持っていない。

《出血量が危険域に到達。脈拍・血圧低下。治療を》

仕方ないから見捨てようか、という考えを抱いたところでデバイスに治療を要求される。手の施しようがないから見捨てようとしたのだが……デバイスもこれが致命傷なのはわかっているだろうに、それでもなお頼んでくる。まるで人間のようだ。

「そうか。言われても何もできないぞ」

《連れだしておいて、何と無責任な》

借りは既に返した。そして、戦場に出たのは誘導されていたとはいえ彼女の意思なのだし、非難される謂れはない。しかし、苦勞して手に入れたものをこうも簡単に失ってしまうのはもつたない気もする。先の戦闘で私の生存がバレてしまったから、私を殺したという理由で謹慎中の八神シグナム、連帯責任で処分を受けている八神はやての二名が戦線に復帰し、六課の戦力が万全に近いものに戻ってしまう。スバル・ナカジマ一人抜けた穴を埋めてなお余りあるほどの戦力。それを考えたら、やはりフェイトの戦力はあつた方がいい。

なにか助けるための手はないものか、と思いつかりエツティに回線をつなぐ。やつならば私には思いつかないような手段をしっているかもしれないと考えたからだ。

『やあ、どうした。何か問題でも起きたかい？』

「フェイト・ハラオウンが負傷した。原因はミサイル炸裂時に飛散した金属片による裂傷と内臓損傷。意識はない。怪我の程度は口で言うよりも見せたほうが早い。画像を送る」

ボードに接続してあるデバイスを引っこ抜いて画像を撮影し、それをスカリエツティに送信する。

『ああ、これはひどいね。持って数十分といったところかな？』

「延命措置はできるか」

『道具がない、魔法もないとなれば手の施しようがないね。損傷が激しすぎるからレリックウエポンとしての蘇生も見込めない』

「打つ手なしか」

『それでもない。君の血を傷口にかければ、傷を塞ぐくらいはできるかもしれないよ。一応こちらでも蘇生、治療の用意はしておくがね』
「そうか」

理屈は聞いてもわからない。だが、それで助かる可能性がわずかでもある、生存できる時間が僅かにでも伸びる可能性があるのなら私は言われたことを実践しよう。どうせ失敗しても彼女が死ぬだけなのだし、試すだけならタダだ。左腕を何度か振り回して、付着しているスバル・ナカジマの血を払い、さらに右腕で軽く拭ってから左腕をフェイトの傷の上に持つていき、刃物に変えた蛇で深く切り開く。肉が裂ける不快な感触を我慢し、刃を抜く。すると血が噴水のような勢いで吹き出て、彼女の全身にかかる。こんないい加減な処置とも言えないような処置で果たして死の寸前にある人間が本当に助かるのだろうか、と甚だ疑問だが……効果はあったようだ。傷が少しずつだが、目に見えて小さくなっていき、出血量もそれに応じて減少する。スカリエツティの見込みは正しかったようだ。そして認めたくはないが、私の身体が既にヒトとは呼べないものとなっている事を改めて認識した。

《何をしているのですか》

「私の身体をスキャンしてみろ。理由がわかる」

右手でデバイスコアを持ち上げて、術式起動のための魔力を通す。大体のデバイスにはロストログアの探知魔法がインストールされているはずなので、調べさせればわかるだろう。そして一秒ほどすると、弱い電流が頭の前から爪先にかけて流れたようなピリつとした感覚がして、デバイスから音声 flowed。

《……以前から人間らしくないとは思っていましたが。まさか本当に人間ではないとは驚きです。その身体は最初からでしょうか》

「手に入れた時から少しずつ侵食が進んで、今に至る。だ」

《なるほど。二重の意味で人でなしですね》

事実、その通りなのだから否定のしようがない。復讐のため家族のためと人の道を踏み外し。そしてこの身体も既に人とは呼べない。こいつの言うとおりに二重の意味での人でなしだ。

まあそれよりも。今この場で話すべきはここで寝ている彼女について。傷は既に塞がったが、それはおそらく表面だけ。内臓に至る傷については、治るにしても時間がかかるだろう。出血は今更いくら出たところで大して変わりはないし、輸血もできるはずがないので当然、現状のまま放置するしかない。

《マスターは助かるでしょうか》

「死ぬ」

バツサリと宣告する。今更傷を塞いで止血をしたところで焼け石に水だ。止血するまでに出た血の量が多すぎる。灰色だったボードがもはや見る影もなく、赤一色だ。

《……》

機械にも感情があるのであれば、このデバイスは間違いなく悲しんでいる。この眼にこそ映らないが、今の沈黙は親しい者の死を看取る人間のそれだ。だから何だという話だが。じっくり看取れるだけ良いじゃないか。私なんて、別れを惜しむ間すら与えられなかったのだし。いやそもそも機械にそんなものは必要ないだろう。

「だがアジトにつく時間によつては蘇生できる可能性もある。ウエンデイー！」

「はいはい、呼んだツスカね」

クアットロとデイエチを乗せて私と同じスピードで横に並んで飛ぶウエンデイ。それに声をかけると、速度を維持しながらボードを真横に寄せてきた。クアットロ、デイエチ、ウエンデイの三人は血まみれで倒れているフェイトを見ても何も言わないあたり、死人やそれに近い状態の人間を見るのに慣れているのか、さほど抵抗がないと見える。取り乱されるよりはずっといい。

「クアットロとデイエチはこっちに移れ。ウエンデイはこいつを落とさないように、全速力でアジトへ」

ウエンデイのボードは私のもものよりも積んでいるものが少ないか

らスピードが出る。おまけに彼女のほうがボードの扱いに慣れているので、安定して速度を出せる。全速力で飛ばせば、使い捨てのブースターに点火した……とまではいかないものかなりの速度が安定して出るはずだ。こちらのブースターは燃料切れでパージしてあるが。

「わかったツス。そんじゃ二人共、悪いけどあっちに移って欲しいツス」

蛇に命令してフェイトの身体を包ませ、それをウエンデイに引き渡す。重量の変化で少しグラついたが、すぐに元に戻し。今度はウエンデイのボードから移ろうとするデイエチの手を引き、ボードに乗せる。さきほどよりずっと大きい揺れが起きるが、自動制御でなんとか持ち直す。あとはクアットロだけなのだが。

「面倒だわ」

「時間がない。拒否は認めない」

と拒否してきたので右腕を伸ばして捕まえて、片手持ち上げて私のボードの上に乗せる。三人乗るとさすがに狭いし飛行速度も落ち、バランスも危ういものになるが。それでも自動制御で持ち直せた。戦闘以外なら、安物のデバイスでも不都合はない。いいことだ。

「心停止は免れんが、蘇生は早いほうが成功率が上がる。急いで届けてくれ」

「了解。それじゃ、お先ツス」

荷物を受け取ったウエンデイは、返事をしてすぐに真剣な表情になり、急加速。数秒で最高速度に達し、後ろに乗っている二人を降ろしてブースターを使わない限り追いつけない速度でアジトの方角へ飛んでいった。

ウエンデイにフェイトを任せただけ以上、もう慌てる必要もないので、巡航速度を少しだけ上げてアジトへと向かう。

「ねえ君。さっきあの女の服が肌蹴ってたのが見えたけど……まさか動けないのを良いことに」

デイエチが自分の体を抱いて、ボードの上で一步引き下がる。彼女がその気になれば私が襲ったとして、私を殺すくらい訳ないだろうに

なぜそのような反応をするのか。そも。正常な嗜好を持った一般男性が、いくら美人といえどあれほど血まみれで瀕死の女に欲情することなどまずないだろう。まして性欲の欠片もない私となれば、そんな事をするはずがないのはわかるはずだが。

「傷の確認と応急処置だけだ」

「本当に？」

「トーレ姉様とホテルで同じ部屋に泊まったのに何もしなかったこいつが、何かするハズないわよー。ねえ、ハンク」

「……え、何それ初耳なんだけど」

「……速度を上げるぞ」

余計な詮索をされたくないの、デバイスに命令して速度を上げる。この話はトーレと私の話なので、他人に詳細を教えるなら彼女に許しを得てからでなければ機嫌を損ねるかもしれない。私を良い意味で特別視してくれている相手の機嫌を損ねる可能性のあることを、わざわざ進んでしたくはない。

「聞かれたくないみたいねえ。デイエチちゃん、聞くならもう少し別の話にしなさい」

「じゃあ、昨日姉さんが珍しく化粧をして出かけてたのは？ 今朝普段とは違う服を着てたのは？」

「昨日出たのは買い物に付き合ってもらった。今朝着てた服はその礼に買ったもの」

「いいな、私も欲しい」

「トーレには恩があったが。お前にはないだろう。クアットロならともかく」

今回は撤退の支援として連れてきたものの、結局何もせず終いで撤退している。恩と呼べるものも特に無い。恩も無いのに礼は成り立たない。クアットロには以前フェイトを拉致する際手伝ってもらったので、それに見合う程度の礼を要求されれば渡すつもりだ。

「あら、私に何か買ってくれるの？ じゃあ宝石でもお願いしようかしらあ」

「働きの見合った報酬に限る」

「冗談よ」

「……」

口では冗談と言いつつも、内心は本気だった。私に嘘は通用しないのはこいつもわかってるだろうに。

第64話 交渉

「本日の廃棄都市区画での戦闘で、行方不明であったフェイト・T・ハラオウン執務官と高町なのは一尉が交戦し、高町一尉が鼓膜を破損する軽傷。機動六課所有のヘリは墜落。乗員にはけが人なし。質量兵器運用小隊の武装ヘリが中破。そして、陸に降りアンノウンと交戦したスバル・ナカジマ二士が内臓損傷。動脈損傷。脊髄破損で現在意識不明。デバイスの戦闘記録と相方のティアアナ・ランスター二士の証言によると、下手人はハンク・オズワルド……か。随分と奇抜な報告書だな。この報告は既に私に届いているが、それでも持つてきたということは、処分の減免を求めている、ということか？」

難しい顔をして報告書に目を通す中将を正面に、自分は自分で色々と考える。フェイトちゃんも敵になった、という話には非常に驚いたが、想定範囲内。報告によると彼女は洗脳などをされている様子はないようで殺傷設定で攻撃してくる事はないだろうし、危険度はそれほどでもない。問題はもう一人。

ハンク・オズワルド。死んでいるはずの人間の名前を聞いたが、なぜかあまり驚かなかった。隣で聞いていたシグナムは驚いた顔をしていたけれど、私はなぜかその報告を聞いて『ああ、やっぱり生きていたか』とむしろ納得してしまった。なぜ、と考えてみると簡単に答えは出た。機動六課に居た時、何度も死にかけて、殺されかけて。その度に何事もなかったかのように死の淵から舞い戻ってきた。それがそう簡単に死ぬわけがない、と頭の隅で考えていたのだろう。死体だって見つからなかったし。

「……そうです」

「ハンク・オズワルドは事実犯罪者であって、貴様の騎士のやったことは間違いない、と」

「いえ、そこまで言うつもりはありません。彼女のしたことは大きな間違い……それは疑いようのない事実です」

「では、奴が死んでいなかったから処分を軽くしろと」

黙って頷く。そのために、謹慎中にわざわざ面倒な手続きをいくつもしてここに来たのだし。

「はあ……貴様は何が悪かったのか理解しているのか？ 殺したか殺してないかが問題だと思っているのなら間違いにも程があるぞ」

ため息と、両手の平を上に向けるジェスチャーで、どれだけ呆れられているのかがよくわかる。こんな屈辱を味わうのも、すべてあの男のせい。あの男さえ居なければ、私たちが処分を受けることもなかったのに。

その感情を言葉と一緒に出さないように気をつけながら、会話を続ける。

「わかっているつもりです」

「ではなぜ来た。それがわかっているのなら、処分の軽減など求めるはずがないだろう」

「……機動六課は戦力の損耗が激しく、このままでは犯罪者に対処できません。せめて、処分の先送りを」

「いつその事解散すればいいだろう。役立たずなのだからな」

……ダメだ。中將は、完全に私たちに。いや、私に味方するつもりは一切ないらしい。それどころか、敵と言ってもいい。排除できないという意味ではハンク・オズワルドよりも厄介な敵。前々から嫌いだったけれど、今日でさらに嫌いになった。

いつまでもこうしていても仕方がないので、カードを切る事にする。

「中將」

「なんだ」

「話は少々変わりますが。ハンク・オズワルドがたったの六年間で准尉にまで昇格することができたのは、何故でしょうか」

「……」

さっきまでの呆れていた表情が一気に引き締まり、今度は鋭く研ぎ澄まされた敵意をこちらに向けてくる。やはり、彼の出世速度には何かがあるようだ。その何か、がわからないままカードを切るのにはリスクが大きい。現状を変えるためのカードはこれ一枚しかない。身を

滅ぼす可能性もある危険なカード。しかし、成功さえすればその利益は大きい。

ひどいギャンブルだ。

「実力だ」

「確かに彼の実力は、彼自身の功績で証明されています。しかし、この管理局で、質量兵器を主に使う彼が、アレほどのスピードで出世したのはやはり何かがありますよね」

「もしも、私がカードの中身を知らないと言ったら。今度こそ叩き潰される。今のところバレている様子はない。内心は冷や汗が滝のようにつながっているのを悟らせないように、作り物の笑みを顔に貼り付けて、言葉を紡ぐ。」

「管理局という組織が質量兵器を嫌い、その使用のほとんどを禁止しているのはあなたが一番よく知っているはず。通常ならそれが大きな障害となるのは間違いありませんよね」

「私が奴の昇進を推薦したのだ。多少の障害は苦にならん」

「果たしてそれだけでしょうか。何か他に理由がありますよね？ 公にはできない何かか」

「適当に予想をつけて、もう一枚カードを切る。これが間違いであれば、賭けは私の負け。機嫌を損ねるだけ損ねて、その分だけ処罰は重くなる。さて、この選択が吉と出るか凶と出るか。」

「……」

中将は目を閉じ、机に肘をついて手を組み、沈黙を保つ。自分に敵意を持つ相手と、二人きりで無言の時間を過ごすのは、とてつもなくも居心地が悪い。座ったことはないが、針の筵に座らせられる方がまだマシかもしれない。速く口を開いてくれと思いつつ、次の言葉を待つ。

「……どこまで知っている」

十秒ほど経ってから、ようやく口を開いた。食いついてくれたのと、最悪の居心地から開放されて少しだけ安心。

「誰かが聞いているかもしれない場所で言うのはマズインじゃないでしょうか」

「……いい度胸をしているな」

「ありがとうございます」

ハツタリに見事引つかかってくれたので、それも含めて素直に礼を言っておく。相手が誰であれ、自分が認められるのはありがたいものだから。

「よかろう。不本意だが、貴様の要求を認めてやる。ただし、こちらから一つ条件をつけさせてもらう。当然のことだが、殺傷設定の使用は禁止する。必ず生け捕りにしろ。自殺、事故死なども認めない」

「……彼は痛みを感じません。非殺傷設定では、効果が薄いのですが。それに、私たちのリスクも高くなります」

「最低限のコストで最高の成果を上げる犯罪者と、コストばかり嵩む癖に録に成果を上げられない味方……貴様の貧弱な頭でも、どちらを手元に置きたいかはわかるな」

「……」

犯罪者に容赦する必要があるのか、という言葉は口が裂けても言えない。自分の騎士たちも私のためにはいえ、彼の比にならないほど多くの人に危害を加えてきた。管理局に恨みはないのに。そして更生の機会を与えられ、今は管理局で働いている。

そして彼は、管理局に家族を殺されたというどうやっても挽回できない恨みが有り、さらに自分の家族のためという確固とした理由の下で私たちに敵対している。昔の私達と彼、果たしてどれほどの差異があるというのだろう。個人的な感情だけで見るならそんなのは関係ない、と切つて捨てられるが。他人の視点から。客観的に見れば、私たちに更生の機会が与えられたのだから、悪意のみで行動しているわけではない彼にもそれがあつて然るべき。

もしも私たちが、一時は英雄視されていた彼を殺せば、どうなるか。世論は私たちを激しく糾弾し、ただの殺人犯として処罰される。それだけでは済まない過去の闇の書の被害者たちに管理局で世のために働くと誓い、納得出来ない事をなんとか納得してもらっているのに、また人を殺したとなれば負の感情を抑えきれず凶行に走る者も現れる。

私だけで済めばまだいいが、今まで私を支援してきてくれた人にまで迷惑がかかるのは……絶対にダメだ。

「それを守るのなら、貴様の処分の先送りと任務への復帰を認めよう。今後の働きによっては処分の軽減も考えてやる」

処分を決定するのはこいつではなく、他の者だとしても。陸の管轄内で管理局員が問題を起こしたら、処分を決定する会議で主導権を握るのはやはり陸の頭になる。これ以上逆らうことはできない。

「寛大な処置に……感謝、します」

歯を食いしばる。思っていた中でも最良に近い結果だというのに、満足できない。理想は私たちが処分されず、かつあの男を……これ以上は、いけない。思考の中に、その単語を上げては。私がその単語を脳裏に浮かべてしまえば、次彼を見た瞬間に行動に移るだろう。その瞬間に、私はこの世で最も憎いあの男と同類に成り下がる。復讐のためには誰かを『ス、薄汚い殺人者に。』

それだけは絶対に認められないのだから、中将の出した条件は別段障害にも何にもならないはず。だということにあえてその条件を出した理由は、私の考えを読んでいたからだろうか。最高に性格が悪い。

唾だけでなく思いつく限りの罵倒を吐き出してからこの部屋を出たくなったが、そえrをすべて飲み込んで部屋から出て行く。

ああ、今日はなんて最悪な日なんだろう。

第65話 狂気

背の高い木々の上をかすめる程度の高度を飛び、ある座標の上空に到着したら高度を下げる。木々の合間を縫って地面に降りると、土と草で巧妙にカモフラージュされた入り口が……あるわけでもなく。隠す気が微塵も感じられない鈍く光る金属製の扉があった。その正面にボードを下ろして、扉の隣に据え付けられたテンキーのカバーを外して8桁の暗証番号を入力する。見た目と同じく重い音を立てて扉が開き、ライトで照らされた通路が姿を現す。

「おかえりー……うわ、大丈夫？」

通路の床からセインが出てきて、随分とのんびりとした声でそう言った。そういえば返り血を浴びてからずっとそのままだった。乾燥して冷たさもなくなったから忘れていた。

「ほとんど返り血だ。それよりも、ウエンデイが死にかけのを連れて帰っただろう。そっちはどうなってる」

「ドクターが処置してると思う。とりあえずシャワー浴びて血を落としてきてよ、お化け見てるみたいで落ち着かない」

戦闘機人も化物みたいなものだろう、とはあえて言うまい。今までに何度も言ったことがあるのだし。私は既に化物だ、ともあえて言うまい。こちらも今までに何度も自分に言い聞かせてきたことなのだし。

大人しく言うとおりにシャワーを浴びてくるとしよう。出てきたガジェットにボードを任せて、自分は通路の真ん中を一人足早に進んでいく。

後ろではデイエチとクアットロ、セインの三人が何かを話しているが、私にはどうでもいいことなので放置しておく。そんなことよりも今はシャワーを浴びたい。一度は気にしなくなったが、やはり他人から指摘されると気になりだしてしまうものだ。おそらく、管理局時代に他人の視線を気にしてきた癖が抜けきっていないのだろう。

通路の突き当りにある扉を抜けて、普通の施設らしい通路へと変わる。そこから迷路のように入り組んだ通路を進み、迷うこと無くシャ

ワールームへ。扉の前に立って聞き耳を立てるが、誰かが使っている様子はなし。扉に手をかけて、開こうとしたところで。

「おや、ハンク。そんなに血まみれで、治療しなくていいのか?」

「チンクか。セインにも同じことを言われたが、ほとんど返り血だ。これからシャワーを浴びて落とそうとしてたところだな。使うつもりだったなら申し訳ないが後にしてくれ」

「うん、そうしたいのは山々なんだが訓練してたら汗が気持ち悪くてな。一緒に入らないか。背中とかは洗いにくいだろう」

「お前には貞操観念や羞恥心はないのか」

ため息が出る。自分の事ならよくあるが、他人の言動に対して呆れるというのは私にとってはなかなか稀な事だ。

「トーレに手を出さなかつたのだから、私に手を出すとは思えないな。それともこんな貧相な身体に欲情する特殊な性癖があるのか?」

にやりと意地の悪い笑みを浮かべて私に聞くチンク。当然私にそんな性癖はないのだが、血まみれでこんな小さな少女と一緒にシャワーを浴びるといふ絵面を想像すると非常に嫌な気分になる。後でスカリエッティに何を言われるかわかったものでもないので遠慮したい。それが元で他の奴らに妙な誤解を抱かれても困る。

「そんな趣味はない。私が気にしているのは世間体だ」

まだ色々と聞いたげなチンクを放置して、シャワールームに入る。私を追って入ってこようとするチンクの肩に右手で触れ、腕に変えている蛇を本来の姿に戻して全身に絡みつかせて拘束。騒がれないように口にも巻きつけておく。全身を蛇で縛られたチンクを左手で押し出し、ドアを閉め鍵もかける。さすがに爆破して入ってきたりはしないだろう。そこまでして一緒に入りたいと言うのなら、彼女への認識を仲間でなく痴女として改めなければならぬ。

血まみれの服を脱いでゴミ箱へ放り込み、裸になってシャワーを頭から浴びる。少しだけシャワーを浴びながらじつとしてっていると乾いて固まっていた血がお湯で溶かされ鉄臭い臭いが浴室に充満しだす。鼻を摘みたくなる臭いだが、我慢する。髪に指を通すと血と湯が混ざったものが流れに従って落ちていき、よりいっそう臭いがキツくな

る。軽く指を通しただけで落ちないものは、ガシガシと乱暴にかき乱しながら落としていく。肌についた血なら軽くこすれば落ちるのだが、髪についたらなんとも面倒くさい。命には変えられないが、これだから近距離での戦闘はしたくない。

髪についた血を洗い流したら、今度は身体を軽く洗って浴室から出て、タオルで身体を拭き、普段着を着て浴室から出る。蛇に巻かれたままのチンクを解放して、スカリエッティの待っているであろう治療室へ向かう。

「やあ、遅かったじゃないか」

顔からはどうなったか読み取れない。処置が失敗したとも、成功したとも、成功したものの不安が残るとも取れる。助かっていてほしいと思うが、果たしてどうなったのやら。

「蘇生はできなかつたよ。手は尽くしたのだが、やはりダメージが大きすぎたようだ」

「……そうか」

やはり現実というのは思ったとおりにならないのが当たり前だ。望んだことが叶わないなんてしばらく前まで当たり前だったのだし、これも想定内の範囲内。さほどダメージはない。が、気になることが一つだけある。

「その後ろに浮かんでる脳みそはなんだ」

「心肺蘇生が無理だとわかったから、頭だけ抜き出してみた。適当な素体に移植して、君の妹の蘇生のための練習でもしようかと思ってるよ」

「……」

驚きのあまり声も出ない。こればかりは全くの想定外。というよりも、想定できるはずがない。蘇生させられないからといって脳を摘出して保存するなんて、フィクション以外で聞いたことがないのだから。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。脳へのダメージが最小限になるよう迅速かつ精密に手術したし、この後についても最高評議会という前例がある。彼らは肉

体が減んでからずつとこの方法で生き延びているからね」

最高評議会。存在そのものは知っていたが、今のフェイトのように脳だけで生き延びているというのは初めて知った。ともかく、スカリエツティは前例があるから大丈夫だろうと判断してやった、ということでもいいのだろう。私も前例があるのならその方法に関して何も言うつもりはない。

「ふむ、脳波に変化が出たね。目が覚めるみたいだ。あとは任せるよ、私は移植用素体の選別をしてくる」

「移植に使える素体があるのか？」

「プロジェクトFは私が基礎を作った技術だ。人造魔導師。戦闘機人もそれをベースにして完成したものだから共通する点は多いし、今の技術なら移植の生体拒絶反応は問題にもならない。それじゃあ、私はこれで失礼するよ」

そう言っ出て行くスカリエツティを見送ってから、脳の収められた透明なケースに向き直る。機動六課相手にどれほどの戦力となるか見極めてから運用する予定だったのに、予定が大きく狂った。こうなった彼女にもはや戦力としての価値はない。スカリエツティのオモチャにされる前に、死なせてやった方が彼女のためでもあるだろう。

拳を握り、筋肉を弓のように引き絞り、限界まで張り詰めたところで勢い良く拳を付く出す。

『うわわわわあ!!? 何、何!!』

「……」

一発で叩き割るつもりで全力で殴ったはずの透明な筒には罅どころか傷すら入らない。なかなか頑丈に作られている。そして、殴った衝撃で彼女が完全に目覚めてしまった。まあ、起きてしまったものは仕方がない。起きてしまったのに叩き壊せば、無用な恐怖を与えてしまうことになる。苦しまずに殺してやろうと思っていたので、恐怖で苦しむことになるのならやめておく。

まあ、今のままでも現実を受け入れることにより新たな恐怖に苦しむのは確定している。そうなった原因の一端である私に責任はない

が、管理局へ送り返すときに発狂しては、事が失敗に終わった後の処罰が重くなる。

「おはよう。身体を失った気分はどうだ」

私に今できる事は素早く現実を認識させ、それを受け入れさせるということ。最初は絶望の方が大きいだろうが、僅かにでも希望を見せた瞬間にロストログアを発動して、その感情を全力で増幅させる。そのため、一旦目を切り替える。

『え？ 起きていきなり何を言っ……え？』

一瞬で視界を埋め尽くすほどに広がった、真つ黒な絶望の色。その絶望の深さに、一瞬だけ過去の自分を幻視した。

そして思った。実に哀れだと。情報を探っている最中に、探っている対象に何もできないまま無力化されて拉致され、己を見失い、友人と戦うように意識を誘導され、嫌々ながらも従った結果がこれだ。哀れすぎてかえっておかしいが、笑えない。

『なに、何なのこれ……』

「落ち着け」

無茶な注文だとは理解している。私が彼女の立場であっても、確実に戸惑うだろうから。

『落ち着けるわけ無いよ！ なんなのこれは!! 私の身体はどこ!？』

ねえ、ねえ!!』

「……」

『黙ってないで答えてよ!』

腕を組んで、目を瞑って声。いや、スピーカーから発されているから声ではなく音か。を聞く。今のところ希望は見えないが、絶望が怒りに変わりつつあるのはわかる。悪い傾向ではない。絶望は己の内側へと貯まるもので、怒りは他者へと向けられるもの。絶望が貯まれば、それはいずれ狂気へと姿を変える。一度変化してしまえば、二度と元に戻ることはない。私は絶望を怒りに変換して辛うじて狂気を逃れたが、エリーは男に犯され狂気に犯され、あの有り様だ。狂うよりは、私のように歪んだほうが幾分マシというものだ。

それはともかく。

「そうだな。確かに説明は必要だ。どこまで覚えている」

『全部説明して!』

「……わかった。今日の昼に出撃し、お前はミサイルの破片を全身に浴びて致命傷を負った。応急処置をして延命を試みたが、それでも心肺停止。脳にダメージが行くとマズイと判断したスカリエツティが脳を摘出した。これが全部だ」

『どうして私が、私だけこんな目に……君のせいだよ。君さえ居なければ!!』

やはりこいつも私を責めるか。今の状況では別に構わないのだが、やはり納得がいかない。自分の意志で戦場に出ておいて、いざ被害を受けたら他人のせいにする。まるで自分でイタズラをして怒られて、怒られた責任を他人になすりつける子供のようだ。

……まあ、責任はなくともそうなる原因を作ったのは私なのだが。「死ななかつただけ良いと思わないのか」

『思うわけ無いよ! ずっとこのままなら、いつそのこと殺してくれただろうがまだいい!』

「ずっとそのまま、という訳じゃないぞ。スカリエツティがちゃんとした肉の入れ物を用意してくれている。それも嫌というのならこの場で死なせてやってもいい」

希望と、怒りを向けるための案山子を同時に提供してやる。すると、すぐに希望の色が見え出した。ここですかさず蛇を出して、その希望を捕まえてやる。

『元の体に、戻れるの?』

「元の体には戻れないが、元と同じように肉体を持って動けるようにはなる」

『……動けるようになったら、覚悟しといて。こうなったのは君のせいなんだから、仕返しはさせてもらおうよ』

さきほどまで色濃かった絶望はすっかり鳴りを潜め、今は赤い怒りと鈍く光る希望が見える。目論見は成功したと見ていいだろう。

さて、仕返しをするということだが。もしも彼女が動けるようになったとして。デバイスは私が持ったままなのだから彼女には何も

出来るはずがない。魔法が使えず、銃も持たない非力な少女に追い詰
められるほどやわな訓練はしていない。

「その時は好きにしろ」

捨て台詞のように言葉を吐き捨てて、部屋から出て行く。任された
ものでも、発狂する心配がなければ放っておいても大丈夫だろう。

第66話 会議

テーマ 思案

流れ フェイトが戦力として使用できなくなった事を残念に思いつつ、使用者の居なくなったバルディッシュをクラッキングして所有者を切り替える。

さて……結局、フェイト・テスタロッサは戦力としての復帰はもはや不可能と言っている。となれば彼女と交わした契約も無効となる。制限一切なしで戦えるのは、やりやすいといえそうなのだが、やはり優秀な魔導師を相手にするととなると、同じく高位の魔導師を護衛に付けないと不安が残る。特にシグナム。アレの剣の腕はまさしく一流だ、正面から、という条件の中ではナンバーズでさえ勝てるかどうか怪しい。騎士ゼストはリミッターが解除された彼女を相手にしても勝てそうなほど優秀だが、下手をすれば死にかねないやつを戦力として運用するのは、自分が相手をするよりも不安だ。

しかし、いざ戦うとなれば、絶対に誰かが彼女の相手をしなければならぬ。その時に誰を当てるべきか。

「それほど深く考える必要はないでしょう。敵の戦力はあなたのお陰でかなり下がっていますし、機動六課はもはやドクターの計画の障害とはなりません。どうにかなるでしょう」

テーブルを挟んで反対側に座るウーノが言う。彼女はこの陣営においての参謀の役割を持つ者だ。今後のことを決めるのには、スカリエッティか彼女の判断を仰ぐべきであると判断し、手の開いているだろうウーノに頼んで対話の場を設けてもらった。

「相手を過小評価すると痛い目を見るぞ、ウーノ。魔導師三人が抜けた分は質量兵器を使う部隊を編成・合流して穴埋めしている。下手な魔導師より奴らのほうが質が悪い」

質量兵器の特徴は、すべての使用者に平等な力を与えるということ。トリガーだけ引ければ、極端な話赤ん坊だろうと筋肉隆々とした大男だろうと殺すことが出来る。弾丸は種類にもよるが、おおよその

場合音の速度を大きく上回る。それこそ二倍三倍に。ならば、戦闘機人の防御力を超える攻撃力を持った質量兵器を、一個中隊が標準装備とした場合どうなるか。

練度にもよるが、それは間違いなく大きな脅威となる。

「全員が全員あなたほどの実力を持つのならそれは脅威でしょうが。そうではないのでしょうか？」

「楽観的過ぎるし、私を過大評価しすぎだ。私は一兵士の域を超えない程度の能力しか無い。魔導師のように一人で戦況を変えるほどの力はない」

「それこそ過小評価でしょう。ロストログアによる能力の強化を抜きにしても、あなたの能力は素晴らしいものです。設立したばかりの部隊を指揮し、魔導師でさえ手を焼いた犯罪者を皆殺しにし。戦闘機人であるチンクを正面から戦って捕縛し……」

「もうそれ以上は言わなくていい」

何度も言われたことだ。そろそろ聞き飽きた。それを言われる度にすべて偶然が重なった事だと返しているのに、それでも飽きずに繰り返し賛辞を伝える。あまり褒められるとそれが油断となる可能性がある以上、迷惑以外の何物でもない。その全てに悪意がないのがまた悪質さに拍車をかけている。

「……まあ、その姿勢も強さの一つなのでしょう。賛辞を素直に受け入れず、自らを小さく見ることにより、慢心せず万全の準備をしてから敵を襲う」

「逆に言えば。準備をする時間を与えられずに襲われたら最悪何もできずに終わる」

戦い。というよりも、私がするのは戦争だ。事前に出来る限りの準備を整え、万全の体制を敷いてから戦いに挑む。ただその場限りの力を、何も考えずに正面からぶつけ合うだけなら猿でもできる。それが悪いとは言わないが、それで勝てるのは力で劣る相手のみ。格上を相手にするにはやはりいくらかの対策をしなければならぬ。

まあ、対策をする前に襲われてしまった事も一度や二度ではない。前だってそうだ。

「そういう時には妹たちを使ってください。そのために指揮権を与えているんですから」

……本当に今更だが、指揮権を与えられるというのは信用の証でもある。いつの間にか、その信頼を勝ち取るための成果は上げてしまっていた。特別優秀というわけではないはずなのに、なぜここまでの戦果を挙げられたのか自分でも不思議だ。おそらくは、単純に策が上手くいた事。それと相手の質量兵器に関する知識が薄かった事があげられるだろう。他にも要因はあったろうが、主なのはこの二つ。相手も対策を練ってきたら、途端にこちらが不利になる。

「彼女たちでは不安ですか？」
「もちろん不安だ」

ナンバーズで戦闘向きの能力を持つメンバー。ウーノ・ドゥーエ・クアットロ・セインの四人以外なら一人二人欠けても問題ない。そして当然、それに劣る戦力しか無い上に、指揮官としても並み程度の実力しか無い私が欠けたところで一切の問題はない。スカリエッティからしても、既に解析の終わった私にリスクを犯してまで助けだす価値はないだろう。

よって私はもう一度捕まってしまうえば、二度と目の目を見ることはないだろう。妹が治ったとしてもその姿を見ることはできない。敵側からすれば、大きな被害を出している私はなんとしても捕まえないだろうし。私の姿を見たら被害を一切無視して、ナンバーズには目もくれず私だけを狙ってくるかもしれない。普通ならば考えられないことだが、機動六課は良くも悪くも普通じゃない。それを思うと、戦力はいくらあっても不安だ。

「それならばいっそ、ここで全てが終わるまでジツとしていればいいじゃないですか。あなたは十分に働きましたし、許されないことではないですよ」

「私もできればそうしたいんだがな」

果たしてそれをスカリエッティが許すかどうか。奴の戦力として働く、という条件と引き換えに妹を治療してもらおうという契約をしているのだから、役割を放棄するのはどうかと思う。無論奴が許すのな

らば喜んで引きこもらせてもらうが。

「もちろん、そんなのは許さないよ。君にはまだまだ働いてもらう」

「ドクター……」

「ということだ」

背後から話しかけてきたスカリエツティ。その言葉は、私が隠居することを許さないというものだった。やはり世の中はそれほど甘くないらしい。

「出来る限りの援助はするが、働かない者を手元に置いておくつもりはないよ」

「正論だ。しかし、いつまで無給でこんなに危ない仕事をさせるつもりだ」

椅子を回転させてスカリエツティに向き直り、返事をする。成果はある程度出しているつもりだ。それこそ、人間一人の命を買うのには少々過分なほど。そろそろ、情報の更新がほしい。

「急いで仕事を仕損じるとも言う。まあ楽しみに待っていてくれたまえ」

「急げとは言うつもりはないが、必ず成功させろ。それがお前の仕事だ」

「もし失敗したら？」

「お前を殺して、私も殺されよう」

スカリエツティを手にかけた時点で、私はナンバーズの誰かに殺される。しかしそれは問題ない。私は妹の治った姿が見たいという望みだけで生きているのだから、妹が治らないとわかれば生きる意味もない。契約違反の罰を与え、そして死ぬ。

「自分の死をそうも簡単に容認するとはね。狂ってる」

「お互い様だろう……さて、役者がそろったことだし。会議の続きをしよう」

もう一度椅子を回して、またテーブルに向き合う。スカリエツティの計画の最終段階。作戦の大筋はスカリエツティとウーノの二人に決めてもらい、私はそれが実行可能かどうかを様々な可能性を考慮して、実行可能ならば細かい戦力の割り振りをシミュレートし、決めて

いく。私はそのためだけにここに居る。

「そうだね。とは言っても、計画に大きな変更はない。要点はアインヘリアル破壊、聖王の器を奪取、地上本部の無力化。この3つ。これだけだが、どれかが失敗すれば終わりだ」

「それで、どうする」

「まず戦力を二班に分ける。アインヘリアルを派手に壊して注意を引き付ける班、時間差で手の空いた機動六課に襲撃を掛け、器を奪う班。スピードが重要になるから、細かい細工はせずに正面から突っ込んで奪っていくべきだろう。異論は？」

「私はドクターの作戦が上手くいくよう、全力でサポートするのみです」

「私からは一つだけ。騒ぎを起こしたかといって必ずそっちに人が行くわけじゃないだろう。多少注意は向くだろうが、他にも方法はあるだろう」

「拉致するだけなら正面突破よりもっとリスクなく、静かにやる方法がいくつもある。戦力を正面からぶつけるのは、おそらく機動六課を潰したいからなのだろうが、それも拉致のついでに静かにやれる。主要な柱に爆弾を仕掛けて起爆すればいい。セインの能力なら柱の内部に直接仕掛けられるから解除される恐れもない。」

「隠密行動が得意な者が今手元に居ないから正面からの方が……そういういえば君が居たね」

「私は表立っての戦闘よりそっちの方が得意なんだがな」

「今までは何故か得意分野ではない戦闘ばかり任されていたが。敵地への侵入、重要人物の拉致または暗殺、敵拠点の破壊。そのどれもが、私の本領といえる分野だ。慢心するわけではないが、今の機動六課は質量兵器運用小隊という異物が混ざり、馴染んでいない状態であり、そういった状態の組織に潜り込むのは、とても容易い。」

「では、プランを少しだけ変更しようか。必要な物は」

「セインとスタンガンと爆薬5キロ」

「随分と控えめだね」

「潜入、目標確保、脱出の三段階」

時間さえあれば施設をまるごと潰す位訳ないのだが、メインは拉致。そして時間のないタイムアタック。柱を一本折るのがせいぜいだろう。しかし、爆発の混乱に紛れて逃げるには丁度いい。一本爆破したらまた他のも探すだろうし、それだけ逃げる時間を稼げる。

「ついでに六課の隊舎も木っ端微塵にしてくれると嬉しいんですけどね。後が楽になります」

「欲張るな」

さすがに拉致と発破解体の両方は無理だ。拉致をするだけでもかなりのリスクがあるのに、さらに爆破の用意までしていたらバレーにきまっている。敵地のだ真ん中で身バレなんて、冗談でも笑えない事態は避けたい。二兎を追う者は一兎をも得ずという諺もあるのだし、二兎を追って両方共逃すよりは確実に得られる一兎を負うべきだ。

「無理かい？」

「無理だ。そうまでして壊したいなら拉致して爆破して混乱してるところに、ガジェットを遠隔召喚してミサイルの雨を降らせればいい。もちろん私が脱出した後にな」

ただし、あの規模の施設を破壊しようとするればさっき言ったとおりミサイルを大量に撃ち込まないといけない。つまりそれだけのガジェットを出撃させる必要がある。機動六課には、広域殲滅魔法の使い手が二名と強力な竜召喚士が一名居るのだから、多くが撃破されることになるだろう。

「ならその案でいこう。それならば、万が一にも器を壊してしまうこともないだろうし」

予定では順序が逆になるはずだったからね、とほざくスカリエツティ。拉致するのに殺しては意味が無いだろうに、なんでそんなに派手なやり方をするのか。

「……ああ、そうだ。今になってからなんだけど、中將からの伝言を忘れていたよ。『やりすぎだ』とさ」

「今さらだな……そういえばお前は中將とつながってたはずだが。今回の作戦は伝えているのか？」

管理局への……海と空には限定せず、つながっているはずの陸にさ

え宣戦布告となるものだ。中将が知れば確実に反対。いや、妨害……
拘束しそうなものだが、伝言がそれだけならおそらく。

「うん、伝えてないが。それがどうかしたかね？」

「……いや。もういい」

やることは決まった。あとはプラン通り進めるだけ。私は私のやるべきことをやる。残る段階は本当に少し。あと少しで、孤独の苦しみからも開放される。

「次の仕事が終わったら、こういう仕事からも引退したいな」

そして残りの人生を、妹と共にゆつくりと過ごす。それはきつと、私の生きてきた半生のどの時間よりも素晴らしい物になるだろう。

「ドクターの計画が成功すればそれも可能でしょう。そのためにも、お互い頑張りましょう」

「ああ、必ず成功させる」

「士気は上々か。頼もしい限りだよ。では、私も自分の仕事に戻るとしよう。君たちも、準備は怠らないようにね」

その言葉を最後に、それぞれ立ち上がり、自分の準備のためにバラバラに動き出す。これが終われば、私は昔のエリーを取り戻せる。あの事件の前の、誰よりも愛おしく、誰よりも大事な妹を。

いつも以上に気を引き締めてかからなければ。今回ばかりは、どれほど些細なミスであっても許されない。

「もうすぐだから……あと少しだけ待っててくれ。エリー」

第67話

『猟犬の噂を聞いたことがあるか?』

昨日中将との交渉で見事に行動の許可を勝ち取ってから、数時間。彼への対策のためゲンヤ三佐に情報の提供を求めて電話し、まず最初に聞いた言葉。猟犬。その言葉が表すのは、猟師。つまりは飼い主の命令に従い、獲物を追い詰め。時には喉笛に噛み付き獲物を仕留める犬。犬が猟犬と呼ばれるのはまだわかる。猟「犬」なのだから。

『ハンク・オズワルドは、その猟犬だったかもしれない』

しかし、人間がそう呼ばれると悪い予感しかない。だから、私は聞いた。猟犬とは何かを。そして、一つ納得した。最悪の予想で、できれば外れてほしいと願っていた物だ。

『管理局にとつて都合の悪い人間を、内外問わず殺して回る極秘の部隊……らしい。詳しいことは俺も知らん。そういう事にしておいてくれ』

表に公開できないような仕事をしている、していたとは思っていた。でなければ、いくら優秀でも魔導師とも呼べないような人間が、あんなスピードで出世できるはずがないから。それでも、いくら狂人でも。そこまで非道ではないと、思いたかった。

これで、彼を殺さなくてもいい理由が無くなってしまった。

『彼は、ずっと前から犯罪者だった、ということですか』

『証拠が一切ないから、過去のことと犯罪者扱いはできない。罪に問えるのはスバルの件だけだな』

……確かに。過去の経歴では、彼は担当する犯罪者のほとんどを殺害して捕獲する以外はまさに模範的な管理局員であった。戦闘機人の一件を差し引いても英雄視されても問題ない位。

それが全て、復讐のための土台作りのための演技だったというのだから恐ろしい。そして、直前で私の妨害があったにも関わらず結果見事六年越しの復讐を成し遂げた。恐ろしいほどの執着心。恐ろしいほどの達能力。

「しかし、娘さん。スバルがその被害にあったんですよね。彼が憎い

とは？」

『そりや憎い……だが、スバルも最前線で働く以上こうなる覚悟はしていただろう。殺されなかっただけマシとも言える。少なくとも奴は殺す気がなかったはずだ』

「復讐したいとは、思わないんですか」

自分でも、下衆な質問だとは思う。下衆な考えだとはわかっていゝる。自分の手で殺せないなら、せめて他人の手で殺す。そんな考えを抱いてしまうほど、私は歪んでしまった。憎しみは人を狂わせる、とはよく言ったものだ。以前彼に「復讐は何も産まない」なんて言ったが、今の私にはそれをいう資格はない。

『憎いからって理由で一々復讐してたらテロリストと変わらん。俺達の仕事は法の範疇で犯罪者を捕まえる事だろう』

「……」

ぐうの音も出ない。これが、大人の対応というやつだろうか……そして、今言われたことは、私たちを否定している。ゲンヤさんは、シグナムのしたことを。私のやろうとして知っていることを知っているのだろうか……顔が広いから知っていても何ら不思議ではないが、だとしてらこれは警告なのか、それとも叱咤か、あるいは、失望か……

『もちろん、奴が管轄内に現れれば拘束する。事情はどうあれ、あいつのしたことは犯罪だし、娘の件もある。絶対に逃がさん』

「あの……三佐」

『お前も奴を追うなら、家族の仇、友人の仇という考えは捨てる。奴に復讐したが最後、お前も復讐される側になるぞ』

「……」

やはりバレていたらしい。いや、それなりの付き合いなのだしバレていないほうがおかしいか。それはともかく、三佐の言っていることは極めて正しい。そのことは私もよく理解している。

「わかっています」

『ならいい。せっかく今まで援助してやったんだ、犯罪者として処罰されるような末路は許さんぞ。それじゃあ、俺もそろそろ仕事に戻る』

「ええ、お時間を取らせてしまいすみませんでした」

『構わねえよ。じゃあな』

電話が切れる。

「はあ……」

自分の浅はかさに思わずため息を吐く。家族を傷つけられたら、誰だって復讐の道へ走るに違いない。そう思って電話をかけたのに、逆に警告をされる始末。が、確かにゲンヤさんの言っていたことは的を射ている。

ずっと忘れていた事だが、私たちが働いている管理局とは、この次元世界において警察の役目を担っている組織。そして警察とは、治安を維持し、犯罪者を捕まえるという役割をこなす。犯罪者もただ黙って捕まるわけではなく、多くはかなり抵抗をする。それを制圧する過程には大きな危険が伴い、その際に重傷を負ったり死亡したりすることも決して珍しいことではない。だからこそ、前線ではたらく職員には高額給料が支払われ、各種の手当がつき、さらには死亡時の手当まである。働き始めの時にちゃんと説明もされていたはずで、私はそれも了承してこの仕事についた。

その時には、今のような事態など想像もしていなかったに違いな。自分たちは高ランクの魔導師で、それを簡単に傷付けられるような人間はそう居ないと、完全に慢心していた。だから、こうして家族が傷つけられたことに対して怒り狂っている。つまり私には、ゲンヤさんの言うところの『覚悟』ができていなかったのだろう。家族が傷つき、死ぬ覚悟。友人が傷つき、死ぬ覚悟。自分が傷つき、死ぬ覚悟。ならば彼はどうなのだろう。少なくとも自分が死ぬ覚悟だけではないはずだ。魔法という鎧も盾もなく、質量兵器という剣一つだけ持って、鎧と、盾、剣を完備した魔導師に圧倒的不利な戦いを挑むのだし。機動六課に居た頃でも、何度も殺されかけたのに、その度に復帰してきた。まるで死を恐れていないかのよう。

私はああはなれないだろう。なりたくもない。私と彼は違う。彼と同じにはなりたくない……復讐してしまえば、彼と同じになるのなら、やはり復讐はすべきではない。いや、やり方さえ変えれば、同じ

にはならないだろうか。そのまま、やられた事をやり返せば……家族を傷つけてやれば、私の気持ちも味わってもらえるだろうか。

第68話 潜入

何週間かぶりに、管理局の制服に袖を通す。さすがに短期間で調達は無理だったので、辞めてから管理局に返さずに、寝巻きがわりに着ていたものにアイロンをかけたものだ。思えば管理局を辞めてからというもの、過ごした時間は極めて短いものではあったが、その密度は今ままで最も濃く。復讐のために日々をただダラダラと生き続けていた時期と比べれば、なんともあつという間に過ぎていったような感じがする。そう感じた理由はおそらく、管理局員から犯罪者側への立ち位置の変化もあるが、希望の一つも見えない真つ暗闇の人生の中からようやく一つの希望の光を見ることができたから、という理由の方が大きいだろう。やっと掴んだ一つの希望。労働環境に不満は多々あるが、たったひとつでも希望があれば私は文句を言いつつも働こう。

地毛よりもやや黒めの髪色のカツラをかぶり、目元にうすくラインを引き、メガネをかけて目を細め、カラーコンタクトで瞳の色を変え。さらに表情を微笑みで固定すれば、変装は完了。化粧台の上に置いたスタンガンを懐に仕舞って、部屋を出る。あとはセインに評価してもらって、これでいいかどうかを判断する。

「誰だよあんた」

部屋の外で待っていた、爆薬の入ったバッグを抱えたセインに言われる。普段自分のことをよく見ている者が見て、自分とわからなければ変装は成功だろう。機動六課の連中とはそれほど深い付き合いはしていない、これでバレることはないはずだ。

「私だ」

「いや、うん。そりやそうなんだろうけど。完全に別人だよ。声のトーンと喋り方さえ変えたら本当に誰だかわかんなくなるんじゃないかな」

評価は上々。ならば、このまま機動六課へと向かって速く仕事を終わらせてしまおう。アインヘリアルの破壊も、あまり時間をかけてい

ればうまくいかない可能性もあるのだし。

「そのための変装だろう」

「……変装上手だねー。それで食べていけるんじゃないかな」

「それで生活はしたくないな。」

こんな技能が役に立つのは、潜入行動の場くらいだろう。それをするのは管理局か犯罪組織か。どちらにせよ平和な生活とは程遠い。私はそんな事を望んでは居ない。

「ともかく、準備はできたことだし。行くとしよう」

「はい」

セインを連れて駐車場へ。それからセインを車のトランクに入れて、自分は運転席に座り、エンジンをかけ、車を発進させる。今回のプランは、変装と偽造した身分証……質量兵器運用小隊の補充要因のもの……を持って機動六課へと正面から侵入。補充要員が来るという偽の情報は既にスカリエッティが流してくれているから、怪しまれることもないだろう。午前中は新人として訓練をし、アインヘリアルアインヘリアルの破壊の情報が入り混乱しているところで目標を確保。その後柱を爆破し、混乱に乗じて離脱する。

実に大雑把な作戦だが、正面から火力をぶつけて奪取するよりかはマシだろう。

二時間ほど運転をし、市街を通って機動六課の隊舎へと到着。関門でチェックを受けるために、一度車を停止させる。セキュリティもまさか正面から進入するとは思っていないのか、警戒の色は見られない。今のところは大丈夫のようだ。

「作戦開始」

『了解。じゃ、検討を祈るよ』

セキュリティが詰め所から出て着て、近寄ってきたところでセインに指示を出す。おそらくトランクから車体をすり抜けて地面に潜ってきているだろう。この車は少し車高を低くしてあるから、遠くから見た程度ではわかるはずがない。

セキュリティに窓をノックされ、声をかけられる。

「失礼、身分証を見せてもらっても？」

「少し待ってください……はい、どうぞ」

財布から偽造した身分証を抜き出し、手渡す。スカリエツティの作った身分証が粗悪品でなければまずバレることはないだろう。セキュリティが機械に身分証を通すと、表情も換えずすぐに戻してくれただころを見ると、問題はなさそうだ。

「ジャック・オブライエン一士ですね。念のため車の中を改めさせてもらってもよろしいでしょうか」

「どうぞ」

エンジンを切り、車を降りてキーを渡し、車の点検をさせる。車両保険と仕事に必要な書類以外は車に載せていないので、何かを言われることもない。

「はい、もういいですよ。手間をかけさせてしまい申し訳ありませんが、規則ですので疎かにする事はできないんですよ」

「わかっています。仕事をサボってテロリストを中に入れたらここに立つ意味がありませんからね」

「ご協力とご理解に感謝します」

「じゃあ、私はこれで」

渡していたキーを受け取り、再び車に乗り込んで地下の駐車場へと走らせる。第一関門は突破。ここからは第二関門。それから施設に堂々と入り、事務室へと進む。新入りは、普通なら事務所で手続きをしなければならぬ。

不自然でない程度に緊張を見せつつ、廊下ですれ違う人に挨拶をし、堂々と事務室へと入る。室内の注目がこちらへ集まる……が、見知った顔はほとんどない。知り合いは四号一人だけ。

「おはようございます。質量兵器運用小隊の補充要員として参りました、ジャック・オブライエンです」

「ああ、おはよう。話は聞いてるよ……それにしても、早いね。まだ予鈴も鳴ってないのに」

書類の山に埋もれていた女性が背スジを伸ばしてこちらを見る。以前見た時よりも、若干やつれて目の下に隈ができているが、彼女は

四号……もといエレーナ・ルーダス伍長だ。私が辞めてからは彼女が質量兵器運用小隊の隊長、この前の戦闘で死人が出ただろうし、さらにヘリも損傷している。その苦労は想像を絶するものだろう。

まあ、一新人としてこの場に来ている私にとつては、本来知るはずもないことなので、いつも通り普通に振る舞う。バレている様子はない。第二関門は突破したと見ていいだろう。

「ご迷惑でしたか」

「いや。勤勉なのは結構なことだ……私はエレーナ・ルーダス。階級は伍長で、この小隊の隊長をつとめている。掃き溜めにようこそ。歓迎するよ」

歓迎されても、半日としない間に出て行くのだが。

「掃き溜めとは？」

「この隊は設立から何人も死者、重傷者が出てる。設立時のメンバーも私ともう一人以外誰も残っちゃいない。そんな危険な場所だから、誰も来たがらない。だから他所で使いものにならない連中をかき集めて、なんとか隊の形だけを成しているから掃き溜めだ」

そんな事を知りもせず、気だるそうに説明を続ける四号。もとい伍長。今は隊長か。私が後任を任せたいと、私が暴れているせいでひどく苦勞しているようだが、罪悪感や微塵もない。嫌ならやめればいだけの話なのだから。

「始業まで時間があるな。八神二佐のところへ案内してやる。一応はこの頭だ、挨拶は済ませておけ」

「わかりました」

想定通りの展開。おそらくは次が最終関門。そこさえ抜ければ目的は達成したも同然だ。

伍長が立ち上がり、大きく伸びをしてからこちらに歩いてくる。ドアを開けて彼女を先に廊下へ出したら、自分もその後ろをついて部屋から出て行く。

「ごつちだ。最近荒れてるから、機嫌を損ねないように注意しろよ。腐ってもここで一番偉い人間だ、機嫌を損ねたら面倒なことになる」「何かあったのですか」

知っているがあえて尋ねる。聞いておいたほうが自然だろうし、内側の人間からの情報は精度が高い。今の状況がどういうものか、事前に知らされていた情報とどれほどの差異があるのかを確認したり、新しい情報を仕入れることができるのは非常にありがたい。

「身内をやられて、また別の身内がそれでキレて大問題を起こして連帯責任で処分されかけた……で、その下手人が、うちの前の隊長かもしれないってことで、こっちに飛び火してきてる」

「……」

なかなか面白い状況になっているらしい。機嫌が悪い時ほど人間は注意が散漫になるものだから、最終関門も簡単に突破できるだろう。

その後は無言で後ろをついていき、時々通りすぎる顔見知り達に会釈をしながら進んでいると、隊長室に到着した。伍長がドアを乱暴にノックする。

「エレーナ・ルーダス伍長です。新人を連れてきました、入ってもよろしいでしょうか」

「ええで。入って」

許可を得たところで、カードキーをドアの横の機械に通してロックを解除し、ドアに触れて扉を開く。中に居たのは、八神はやて。八神シグナム、リインフォース……と、副官のグリフィス准尉。最後に何か、聖王教会のカリム・グラシアとシャツハ・ヌエラ。イレギュラーだが、戦闘をするわけではないので気にはしないでおく。

「機動六課へようこそ。新人君。ジャック君やったっけ?」

「はい」

「……」

沈黙し、目を細めてしばらく私の顔を睨むように見てくる八神はやて。変装は完璧のはずだ、体臭も薄めた香水でごまかしてある。バレることはないはず。他のやつも気付いている様子はない。問題は無い。堂々としていればいい。

「あの、小官の顔になにか……」

「うん? ああ、ごめんな。誰かに似とるような気がしたんやけど。」

気のせいやったわ。下がってええで」

「……失礼します」

一礼して部屋を出る。一瞬バレたかと思つてヒヤリとしたが、やはりというか何というか。ザル警備にも程がある。あまりの警備のゆるさに、誘い込まれているのかと思うほど。だが、仮に誘い込まれているとして。包囲を食い破つて脱出することは、ここまで来た以上もはや不可能。目を切り替えたなら抑えこんでいるロストログリア反応が出て即拘束という事になりかねないので、確認はできない。今は経験により培つた勘を頼りに動くほかない。

「どうだ。緊張したか」

「はい。八神二佐だけだと思つていたので。まさか聖王教会のお偉方まで居らつしやるとは」

「予言がどうのこうの言つてるのは聞いたが、私たちには関係のないことだろう」

……予言、とは何だろう。おそらくカリム・グラシアのレアスキルのことなのだろうが、口ぶりからしてその内容までは知らないようだ。下手に聞いて勘ぐられるよりは、沈黙を保つほうがいいだろう。

ここに来た時と同じように、四号の後ろを着いて歩く。途中でターゲットを連れた高町なのはとすれ違ったが、わざとなのか天然なのか見向きもされなかった。何か話していたので集中して聞いたが、自分が仕事をしている間は部屋で待っているように、というような内容だった。高町なのはの部屋はわかっているので、奴さえ居なければ確保は容易だろう。

それでは、時間が来るまでは管理局員として訓練に励むとしよう。

第69話 脱出、再びの死闘

ひとまず潜入に成功したため、怪しまれないため伍長に従って訓練を行う。各種筋トレに走りこみ、射撃訓練等。私が指揮していた時よりも、ほんの少しだけメニューの追加された内容。本当ならこの程度なら簡単にこなせるのだが、あえて少しだけペースを落とし、慣れない訓練に戸惑う新人隊員を装う。その甲斐あつてか伍長には少しだけ体力のない新人程度にしか思われていないようで、注意は完全に外れている。二号は事務仕事に夢中で、訓練には一つも口を出してこない。

そして、その絶好の環境で時はやってきた。施設内に警報が鳴り響き、アインヘリアルが襲撃されたという内容の放送が流れる。壁にかかっている時計をチラリと見ると、予定通りの時刻。一分のズレもない。あちらが準備をしてくれたのだから、こちらも動かなければならない。周囲に居る人間と、監視カメラの位置を確認する。人数は伍長を含め五名。カメラの死角で行動するのは無理と判断し、開き直って少しだけ派手に暴れることにする。

「訓練中止！ 出撃準備！ オブライエンはこの場で別途指示があるまで待機せよ！」

「わかりました」

伍長が背を向けたところで羽交い締めにし、露出している首筋に隠し持っていたスタンガンを押し付けてスイッチを入れる。

「何をすッ!!」

バチリ、と短い音がして伍長が一度大きく痙攣して脱力し、倒れそうになる。その身体を回して後ろにいる隊員への盾とし。腰に付いていた拳銃を抜き取る。持った方の親指で安全装置を解除し、一番近くでかつ一番早く反応した男に向かって二発発砲。胴体と太ももに当たり、短い悲鳴を上げて倒れる。それから事態を飲み込み始めた残りの三人に順番に向けてトリガーを引いて、一人だけ弾にあたって倒れた。残りの二人はなんと撃たれる瞬間に身体を射線からずらして回避し、同時に突っ込んできたが、床から現れたセインに殴られて両

方共床に沈んだ。こちらも素晴らしいタイミングだ。

「お見事。相変わらずいい仕事ぶりだね」

「そっちもよくやった。爆薬は？」

「言われた場所にセットしてあるよ」

「ご苦労様。次の段階に以降する。場所は指定するから連れて行つてくれ」

「トドメは刺さなくていいの？」

「重傷で放置した方が時間と手を稼げる」

死体だと処理するだけでいいが、重傷者は生きているから治療をしなければならぬ。交戦は避けられないが、加減をする余裕があるのならその方がいい。

「急ぐぞ」

あまりゆっくりしていると、銃声に釣られて警備や他の連中がやって来る。監視カメラもあるので私が施設内を移動しては確実に捕まる。戦力的には精鋭ぞろいの機動六課の連中を、片っ端から相手にしてはキリが無い上に実力差からして無謀なので、ここからはセインのISに頼って移動する。

抱きつかれた状態で床に沈むと、そのまま水の中を泳ぐように無機物の中を移動し始める。なんとも奇妙な感覚だが、この方法で移動するのは何度も経験しているためもう慣れた。何も言う事はない。せいぜい目標の居る部屋の方向を示す程度。

壁の中なので誰かの妨害を受けることもなく、何の障害もなく目標の居る部屋の壁に到着した。

「索敵頼む」

背中から腹に回されているセインの手を指先で三度軽く叩き、首をできるだけ曲げてから、至近距離でしか聞こえないような声でささやく。念話で伝えないのは傍受される可能性を恐れてのことだ。もし部屋の中に誰か居たら、奇襲で一気に叩き潰す。もしも念話が傍受されれば、それが失敗に終わる。

「ん、了解……居るねえ、二人。召喚士と、槍使いのガキ……部屋の真ん中に、目標を挟んで立ってる。私たちが見たら後ろを向いてるか

ら、今がチャンスだよ」

「槍使いは私がやる」

「オツケー。もう片方は私がやるよ」

「ああ」

抱きついていたセインの腕が離れ、背中を押されて壁から部屋の中へと押し出される。我ながらうっかりしていて、着地の際に床に散らばっていたゴミを踏んで少し大きな音が出たので、部屋の中に居る人間全員の視線がこちらを向いた。相手は既にバリアジャケットを展開していて、臨戦態勢なのが表情からも見て取れる。背後から撃つてさっさと黙らせる予定が台無しだ。

が、バツクアツプは万全だ。

「動かないでくだ、むぐっ!？」

「それはこつちのセリフだよ。少しでも動いたら首ねじ切つてオモチャにしちゃうから、そのつもりで」

こちらに注意が向いた瞬間に、セインが床から現れて片方を拘束。片手で口を抑えつつ、もう片方の手で首を絞めている。戦闘機人の力で首を絞められれば、頸動脈を外していてもそう長くは持たないだろう。

「キャロー！」

そして、またこちらに気を取られたエリオ・モンディアルに一步で詰め寄り、殺すつもりで魔力強化した拳を腹に打ち込む。しかし相手もただやられるわけではなく、咄嗟の判断で槍を間に挟み衝撃を低減させた。それから槍の形をしたデバイスが軋み、元の形に戻る反動をそのままに柄を足元を掬い上げるように振られる。非常に良い選択だ、普通なら避けるか防ぐかで意識をこちらに向けるしか無い。

だが、私はいにく普通と呼べるほどマトモな人間じゃない。その槍をあえて足に受けて止め、足元から蛇を出して絡みつかせ、槍を止める。そして相手はと言うと槍が止められたとわかった瞬間に手を離し、バク転で距離で取りつつ蹴りで私の顔を狙ってきたエリオは、素晴らしい判断力と才能を持っていると思う。だが、まだまだ経験が浅い。目の前の敵にばかり気を取られてしまって、護衛すべき対象の

事を忘れてしまつてはまだまだだ。

「あなた……もしかして、ハンクさんですか」

「応える必要はないな」

奪つた槍型のデバイスを両手で持ち穂先を落として構え、相手を牽制する。相手もデバイスが無ければ持ち前の才能も完璧には発揮できないだろうから、最低限動きに注目しておけばいい。眼球だけを動かしてセインを見ると、既に気絶したのかもかく様子もないキャロル・ルシエを床に倒し、目標を部屋の隅へと追い詰めていた。スタンガンは不要だつたようだ。

目線をずらした瞬間を狙つて飛びかかってきたエリオに対し、構えをそのままに槍をあえて手放し、一步引いて相手の間合いから逃れる。その瞬間にセインが目標を捕獲し、同時に部屋の扉が開いた。

「ヴィヴィオ！」

「ママ？ 助けて!!」

「目標確保！ 逃げるよ！」

そして、乱入してきた保護者とその他数名。交戦中に念話で呼んだか、騒ぎを聞きつけたか。どちらでも構わない。目的は既に達したのだから、あとは逃げるだけでいい。袖の中に隠してある爆弾の起爆用スイッチを押して爆薬を起爆する。建物が連続した轟音と共に大きく揺れ、近くでガラスが割れる音、遠くでコンクリートの塊が地面にたたきつけられる音が鳴る。彼女らがそれに戸惑つた一瞬で、目標を脇に抱えたセインに捕まりまた壁に潜る。

しかし、高町なのは。奴は哀れというべきか愚かというべきか。最初から自分が護衛についていれば、血は繋がっていないとはいえ娘が攫われることも無かつただらうに。攫つた私が考えることでもないが。

しばらく地中を泳いで、地下の下水道に出た。あまりに目標が暴れるため、このままでは地中に置きざりにしかねないということで、セインが一度大人しくさせようと提案したので、それに賛成して一度この広い場所に出たのだ。

「どうしてこんなことするの？ 帰してよお……」

「黙れ。痛い目に会いたくないなら、大人しくしていろ」

スタンガンのスイッチを入れ、スパークさせながら顔に近づけてやると、途端に静かに。そしておとなしくなった。暴力は時に物事を最も簡単に解決するので、今のように使いどころさえ間違えなければ非常に有効な手段だ。

「……ふう、やっと一息だな」

「そーだねー……潜ってばかりで疲れたよ。どうせ潜るなら今度はお風呂に潜りたいよ」

少し妨害や予定外の事があつたものの、結果としては無事目標を確保することができた。あとはこいつをアジトに連れて帰るだけ。それさえ済めば、スカリエツティの計画はほぼ成功と言つていいだろう。

そうすれば、エリーの心は治り。私もこれ以上誰かを傷つける事もなく、緩やかな生を送ることが出来る。求め続けていたものに手が届く瞬間というのは、なんと甘美なものなのだろう。

しかし、私は忘れていた。こういう時にこそ、最も気をはらなくてはならない事を。

激しい敵意を感じ、ほんの僅かな時間。コンマ一秒ほども無いだろう時間を置いて思考を戦闘状態に切り替え、咄嗟にセインを蹴り飛ばすと、伸びきった足の上に鋼鉄の刃が降ってきた。その刃は足を切り落とすのではなく叩き潰して足を地面に釘付けにした。そして、その刃を振り下ろした襲撃者は土煙の中ゆっくりと立ち上がると、セインの方を向いた。

最後まで気を抜くのではなかった。思考が切り替わる一瞬さえ無ければ、蹴りだした足を引っ込めるのもまだ間に合ったはずなのに。基本中の基本を怠った自分に舌打ちをしつつ、襲撃者の足を掴み蛇を纏わりつかせて足止めをする。

「セイン！ そいつを連れて逃げろ！」

「ちよ、あんたはどうするのさー！」

「いいから行け！ 任務を忘れるな！」

私がそう怒鳴りつけると、すぐにセインは目標であるヴィヴィオを抱えて地面へと消えた。

「逃がしませんよー！」

それを追うように、襲撃者。シャツハ・ヌエラが蛇を振り払い駆け出そうとするが、私がその背中に拳銃を発砲しさらに蛇を大量に出して伸ばしたことで追跡を中断する。そして、その注意がこちらを向く。

「……姿を変えています、その声。ハンク・オズワルドですね」

「だからどうした？」

片足でバランスを取りつつ立ち上がって返事をする。足の再生にはしばらく時間がかかるので、時間を稼げるのなら、会話でも何でもして出来る限り稼いでおきたい。

が、その考えは甘かったようで、彼女は手に持つトンファーをガード越しに私のボディに叩きつけて壁に吹き飛ばし、全身をコンクリート壁にかなり強く打ち付けられる。衝撃が激しすぎて非殺傷設定なのか、殺傷設定なのかどうかすらわからない。

「ぐえ、あはっ……」

地面に四肢を突いて、呼吸のできない苦しみを噛みしめる。このシスター、全く容赦がない……いや、こいつらからしても、スカリエツティ陣営に属する私は敵なのだから、容赦をする必要もないか。

しかしその割には追撃がない。殺すつもりはないのだろうか……そのおかげで、なんとか息を整えられるのだが。これが強者の余裕ということか。

「抵抗しないでください。私も弱い人を積極的に傷つけたくはありません」

「抵抗しないわけにはいかない。なんとしてもここで足を止めてもらう」

一度深呼吸をし、両腕をだらりと下げ。ゆっくりと、フラフラしながら立ち上がる。先ほどのダメージが重く、まともに動けない様を装って。

そして、今度は拳を構え、身体を強化して砕けた足に蛇を強く巻き

つけることで支えとし、戦闘続行の意欲を示す。

「抵抗すればするほどに罪は重くなります。あなたは罪ばかりを重ねて、一体何がしたいのです。何度も死にかけながら、何故あなたは止まらないのですか」

「家族のため。それ以外の理由は必要ない」

「それは自らの命を賭してまで成すほどの事なのですか？ 関係のない、罪のない多くの人々を巻き込んでまで助けたいのですか？」

「私はただそれだけのために生きている。それ以外はどうでもいい。他人を巻き込むこともどうでもいい」

笑いながら応える。今答えたのは私にとって、たった一つだけの重要な事実だ。

『眼』を切り替えると、視界が真っ赤に染まる。攻撃色であり、怒りの色でもあり。その中に哀れみの色も混ざっている。しかし、今見たものはそれではない。セインがアジトへ到着するまでの時間を稼ぐための、道筋。ついこの前第六感とも呼べるあの悪寒。あれを今視覚化して、捉えたい。それさえできれば、勝つことはできなくとも時間は稼げる。

「そうですか。では、お喋りもここまでにしましょう。次はせめて一発で気絶してください。苦しいだけですよ」

足の感覚は随分戻ってきた。万全には程遠いが、先ほどは完全に潰れていたのだから動くだけましと思おう。

赤い世界の中で、線が一本奔る。相手の右腕から私の頭に向かって伸びる線。本能に従って、その線を横から叩くように拳を動かすと。ガツリ、と蛇で覆った拳とデバイスがぶつかり火花を散らして、攻撃を弾くことに成功した。

「っ！」

ただし、さすがに高ランク魔導師の一発は重く手がしびれた。もしかしたら骨が逝っているかもしれない。それでも攻撃が来る場所がわかるというのはありがたい。

その後すぐに新しい線が走り、また同じように殴り、弾く。弾いた瞬間に魔力を炸裂させて相手により大きな衝撃を与えるのを忘れた

い。

弾いたらまた同じように線が現れ、それを弾く。それを一度、二度、三度四度五度六度と、数えるのも面倒になるほど繰り返す。線が現れては消え、現れては消え。ひたすら防御に徹する。自分でもよく捌けるものだと思うほど重く、早い一撃が、機関銃の弾丸のように押し寄せてくる。来る場所がわかっっていて、それを弾くことができても、それを全て弾き続けるのは至難の業。反撃しようにもその隙もなく、絶え間なく続く綱渡りのような駆け引きはいつまでも続けられない。拳と打ち合うごとに加速し、重みの増す攻撃は格の違いと、才能の重要さという奴を教えてくれる。対する私は五感と肉体能力の強化で底上げして、経験から来る勘とロストロギアによる反則に支えられてこうして立つてはいるが、才能に嫌われているために、そう長くは持たない。

そして、張り詰め。それでも引き続けられる糸が切れるように、ガードをすり抜けた一撃が額に直撃した。首が引っこ抜かれるかと思うほどの衝撃で吹き飛ばされ、そのまま何度かゴムボールのようにバウンドしてから無理矢理に距離を離された。かなりの強さで脳を揺らされたので、視界が安定しない。身体も思うように動かない。

「思ったよりも持ちこたえませんでしたね。」

「……いつ、ああ」

身体が動かさず舌も回らないし、平衡感覚がいかれて立つことすらできない。蛇を這わせて精一杯の抵抗をしようとするが、あくびが出るほど遅いスピードで飛びかかる非力な蛇など簡単に振り払われ、警戒を緩めぬままトドメを刺しに寄ってくる。

言うことを聞かない身体に力を込めて腕を上げ、腕時計を見れば、接敵からもう既に二分も経っていた。この位時間を稼げればもう言う事は何も無い。最初から勝てるとは思っていなかったもので、あくまでも時間を稼ぐという方向性を持って戦ったのが功を奏したのだらう。これだけ時間を稼げれば、いくらセインと同じように壁に潜れるとしても追いつくことは困難に違いない。

「もう一人は逃しましたが、あなたを捕らえられたのは大きいですね。」

当面の脅威が減ります」

「まだ……捕まるわけには、いかない。な」

壁に寄りかかりながら、今度は演技でなく本当に重大なダメージを負って。膝がガクガクと震えるのを堪えつつ、ゆっくりと立ち上がる。あと少しで六年越しの願いが叶う……その瞬間を目の前にして、どうして捕まることができようか。

だが、現実は厳しい。視界が定まらず、足が碎けて再生の最中。身体は思うように動かない。加えて相手はトップクラスの魔導師。この状況で無事に逃れられる可能性は、奇跡が怒らない限りはゼロに近い。それでもまだ、命があるのならチャンスはゼロではない。遠のく意識を気力でつなぎとめ、言うことを聞かない身体に喝を入れ。願いへの執着を蛇に食わせて魔力を生み出し、手のひらに集める。壁と手のひらの間に魔力の塊である球体、スフィアが生み出され、真っ黒な魔力の色が壁と手の隙間から漏れる。

「最後の抵抗ですか……ですが、無駄です！」

その光景を見て、私が何をしようとしているのかわかっていないシャツハが私の腹に刃をめり込ませる。だが、私のやろうとしているのは何も彼女を倒すためのものではない。

内臓をかき乱される最悪な感触に顔をしかめ、もはや何も入っていない胃から空気だけを吐き出し。そして準備は完了する。逃げられる可能性がないなら、他の可能性を作ればいいのだ。

「……」

トンネルの壁に強力な爆薬をセットし、爆発させればどうなるか。そんなのは子供でもわかる。壁の中を移動できるのなら瓦礫も、破壊したところから流入する大量の土砂の中も移動できるだろう。しかし、その前に私を捕らえるのは間に合わないだろう。

大量の蛇を一瞬で召喚して撚り合わせ、球を作り、それに全身を包んで襲い来るであろう何十トンという瓦礫と土砂に備えて、その中から右腕だけを出して魔力を爆発させる。少々込めた魔力が多すぎたのか、壁に当てていた右腕が消し飛んだが。どうせ一度千切れたものを蛇で元に戻したもので、また生やせばいいと考えて蛇玉の中で身

を小さくする。土砂さえ入ってこなければ酸素の続く限りは生きられるので、あとは助けが来るまで待てばいい。

第70話

チクタクチクタクと、時計の秒針が動く音だけが蛇で作った小さなシエルターの中に響き、意識が覚醒する。他に光のない中で腕を動かし時計を見て、黄緑色にうつすらと光る数字と針先が示す時間を確認する……他にやるべきことも考えるべきこともないので寝ていたのだが、どうも一時間は短い……

「助けはまだ来ない、か」

ため息を一つ、しようとして気がついた。少し、息が苦しい。寝ている時は起きている時よりも呼吸数が抑えられるとはいえ、やはりこの小さなシエルターに入る空気はとても少ない。むしろ一時間以上持っていることは奇跡であるとも思える。

しかしこのままではそう遠くないうちに酸素がなくなり、呼吸ができず苦しみながら死ぬことにだろう。さて、そうなる前に管理局かスカリエツテイか、どちらかの助けが来るか、それともこのまま一人で死ぬのか。

別に、死ぬのが怖いというわけではない。生と死の境界線ギリギリに立った回数を数えると、両手で数え切れないほどある。さすがに生き埋めは初めてだが、だからといって焦ることはない。今まで生きてこれたのは奇跡のようなものだし、奇跡はいつまでも続かない。奇跡がもう少しだけ続いて欲しい、という思いはないこともないが、それは無視の良すぎる話。

こうして何かを考えていても使う酸素の量が増えて死ぬのが早まるだけなので、もう一度寝てしまおう。次に起きるのは、助かった時だけ。助からなければこのまま死んで、二度と目を開くことはない。

心残りはあるが、悔いたから、あがいたからといって結果が変わるわけではないのだから。この世はなるようにしかならない。これを私の最後となるかも思考とし、目をとじる。

「ハンクー」

その直後に聞き慣れた声。どうやら私はよほど運がいいらしい。が、こんなところでツギが回ってきてても正直あまりうれしいとは思わ

ない。ここで運が回ってくるよりも、糞野郎達を殺すときにもう少し運があればスカリエツテイの味方をするにもならなかったのだが。

「ごめん待った!？」

セインが能力で蛇のシエルターを通り越して、顔だけを出して私に話しかける。

「それほどでも」

「意識ははつきりしてるね。じゃあ、この蛇消して」

「わかった」

自分で意識をして蛇のシエルターを解く。するとその瞬間、今まで蛇が抑えてくれていた土砂が一気に開いた空間に流れ込み、全身が土砂に圧迫される。それに押しつぶされるよりも速くセインが私を捕まえてくれたおかげで、そのまま土砂に埋もれて圧死せずに済んだ……それから一つ深呼吸をして、肺にたまった淀んだ空気を吐き出す。まったく便利で羨ましい能力だと思う。

「上の状況は」

「アインヘリアルを無事に破壊して、トーレ姉に器を渡して……多分もうアジトに付いてる頃だと思う。時間がかかったのは地上の安全な場所に行くのに時間がかかったからだよ」

「わかった。それと遅れたことは気にしないでいい。私は生きているし、慎重になるのは悪いことじゃない」

白昼堂々地上本部の切り札を破壊して。さらに管理局の隊舎に潜入し、保護している人間を拉致してさらに隊舎を爆破。宣戦布告とも取れるこれは、管理局始まって以来の重大事件だ。警戒も厳重になるだろうし、何よりも面子を潰されたことで犯人を捕まえようとやっきになるはず。捕まらず、計画を最終段階まで進行させ、成功させるにはかなり慎重になる必要がある。私や他の戦闘向けナンバーズは欠けても問題のないピースだが、ウーノ、クアットロ、セインといった特殊な能力を持つメンバーは替えが効かないためより慎重さが求められる。だから、少し助けに来るのが遅れたからといって責めるつもりはない。私は死んでも居ないし。そも死んでいたら責めるもクソも

ないので、どつちにしてもセインが私に責められることはない。

「うん、ありがとう。じゃあとりあえず地上に……」

「急がなくていい。地上に出るのは、安全な場所である確認できてからだ。せっかく助かったのに、地上に出たところで包囲されて捕まったら意味が無い。いいな」

「……そうだね。器を引き渡したところまで行くのにしばらく時間が掛かるけど、我慢してよ」

「大丈夫だ」

死ぬまで生き埋めになるかもしれないとも、寝ていようと思っただくらいだ。日の光はまた見たいが、出られるのがわかって焦ることはない。ここまで大きな事をしたのだから、焦って失敗などしたくはない。ここまで来たのなら、確実に成功させる。させなければならぬ。

side out

思っていた中で一番最悪な展開を上回る、さらに最悪な展開。あり得ないと思っていた事を、あっさりとやってのけられてしまった。手酷くやられすぎて、もはや怒りすら湧いてこない。湧いてくるのは自分への呆れだけ。

「はあ……ここまでやられると、いつその事笑えてくるわ」

担架で運ばれていく隊員達と、建物の一部の崩落した機動六課の隊舎。ただ漠然と爆弾を置いて、炸裂させるのではなくちゃんと支柱を折って崩落させているあたり、彼の几帳面さが伺える。そして、連れ去られこの場に居ないヴィヴィオ。計算された行動。こんなところに手を出したりはしてこないだろう、という油断していたところにクリーンヒットした。

それにしても本当に彼にはやられてばかりだ。偽造された通行許可証を手にした彼の侵入を許し。一度は怪しんだものの、仕事に忙しく結局見逃し。施設内に爆弾を設置し、ヴィヴィオを拉致するための

準備時間を与えてしまった。最後には、手の届く距離に居た彼を爆発の衝撃で揺らめいて逃し。外部からの協力者を追撃に出したものの、結局捕まえることは叶わず。

高ランクの魔導師。あるいは、ランクこそ低いものの才能のある者ばかりを集めておいて、この体たらく。直接戦闘になれば彼に勝ち目など一切ないはずなのに、こうも出し抜かれ続けているのは彼の戦闘以外の能力が高過ぎるのか、それとも私達が戦い以外ではまるで能なしということなのか。あるいは、中將の言っていたようにその両方なのか。

「なあ……っ？」

ハイライトの消えた目で、一部が崩落した機動六課を見つめながら隣に立つなのはに声をかける。

「……そうだね。ここまでやられると、さすがに。いくら理由があっても、許せないかな」

「せやけど、捕まえようにもアレはとづくに遠いところに行つとる」

「死んじやつたのかな？」

「それはないと思うわ」

下水道内で生き埋めになった、というのはシスターシャツハの談だけれど、あれは生き埋めになったくらいで死ぬような男じゃない。絶対にしぶとく生き延びているはず……そして私達が彼を捕まえようとし続ける限り、彼もまた私達に害を振りまくだろう。ここまで手酷くやられ続けて、今更面子にこだわるわけではないけれど、彼のことはなんとしても捕まえなければならぬ。なのははフェイトちゃん の件に加えて、さらヴィヴィオまで攫われて怒り心頭みたいだし、私も役割を放棄する訳にはいかない。結局、こうして被害を出し続けてでも対峙しなければならぬ。

「じゃあ、何処だろうね」

「少なくとも、私らの手がとどく範囲内には居らんやろ。安全圏に一回下がって……次は一体何をしてくるんやろうな」

どうしてヴィヴィオを攫ったのかはわからない。以前も戦闘機人に狙われていたが、結局理由はわからない。彼がわざわざ危険を冒し

てまで手に入れたからには、かなり重要なナニカなのだろうけど。もしかしたら予言と何か関係があるのか……少なくとも単なる嫌がらせのためでないことは確か。

「八神隊長。生き埋めになっていた者の救助が完了しました」

「お疲れ様。今度は悪いけど処置の手助けしたって。手は多いほうがええやろ」

「了解しました」

走り去る隊員と、その先に居るケガをして地面に寝かされている隊員。何人が瓦礫に押しつぶされて重傷。あるいは死の縁に立たされている。ケガをしていない隊員の方が多いけれども、冷静に考えてみれば大勢の人間が死んでいてもおかしくなかった……これは彼なりの警告なのだろうか。これ以上痛い目を見る前に、大人しく引き下がっておけという。立場など捨て、我が身かわいさに手を引けという。

いや、考えすぎだろう。死傷者が少ないのは持ち込む爆薬の量に限りがあったからと、出撃の準備でバラけていた人間が数カ所に集まったから。負傷者の多くは移動中に崩落に巻き込まれたというのが多い。まあ、それはともかくとして。

「しっかしこれからの事を考えると、嫌になるなあ」

多額の予算を投じて建てられた隊舎は潰れて、犯罪者に隊舎に侵入され好き勝手に暴れられ。高ランク魔導師がたくさん居るのに取り逃したとあっては面目も丸つぶれ。中将はこれを聞いたら私達を嘲り笑うだろう。おまけに書かなければいけない書類が山ほどある。これだけデカイ事件……むしろテロか……を起こされたらマスコミも騒ぐだろうからそっちへの対応もしなくちゃならない。なんというか、大変。その一言に尽きる。復讐なんてしている暇がない。仕事なんて投げ出してしまえば復讐をする時間もできる。そうするのは簡単だ。しかし、それをしてしまえば、私は隊長としての責任を投げ出して仕事をやめたただの屑になる。

「はやてちゃんは、自分の仕事をしてくれればいいよ。出てきたら私が捕まえるから」

「頼もしいなあ。けど、やられんといてな？　なのはちやんまでやられたら、もうどうしようもないでな」

戦力として数えられるのはたくさん居る。けど、これ以上親しい誰かが傷付けられたら、私はもう耐えられない。辛くて辛くて、周りに当たり散らして、仕事なんて手に付かなくなる。そうしたら今までやってきた事をつきつけられ、良くて懲戒解雇。最悪晴れて犯罪者の仲間として牢獄入り。それは嫌だ。

「大丈夫。戦えば負けることはないから」

「……アレが素直に戦ってくれるやろか」

彼は自分の実力が低いことを理解している。だから正面から戦うことは極めて稀。彼がそうするときには決まって、どうしてもそうしなればならない時か、あるいはすでに至近距離まで近寄られているときのみ。そうでない時にはほとんど手の届かない距離か、死角から。こちらから出て行くのは極めて危険だけど、彼にはもう、障害を排除する以外で私達を相手にする理由がない。よってこちら打って出るしか無い。けどそうになると、罨を張って待ち構えられても仕方がない。

「……それも、そうだね」

「まあ、もしアレと戦うことになったら、絶対に外さずに初撃で仕留めるようにな。下手にいたぶろうなんて考えたら逆にやられるで」

「うん？　それほど強かったかな、彼」

「強い……てわけやないけど。毒蛇みたいな奴やな」

戦鬪だと一撃で倒さずに隙を見せた結果スバルが容赦の欠片も感じさせない一撃をもらい、完全に動けなくなって戦線離脱。ヴィータはそもそも戦いすらさせてもらえずに、戦線離脱させられた。相手がセッティングを済ませてある土俵に入ると、オシマイだ。

そして私かというと、今まさに毒が全身に回りつつある状態。一発で確実に無力化しなかったから、反撃に手酷く噛まれてこの有り様。肉体的な死ではないが、社会的な死が迫ってきている。もうすでに手遅れに近い状態だけど、それでも速く捕まえればまだ助かる見込みも

ある。が、捕まえようにも相手はよく逃げる。それに加えて6年越しの復讐を完遂した、恐るべき執念深さ。

「油断したらあかんで」

「大丈夫。戦えば私は必ず勝つから。それから、今まで自分がやってきたことを反省してもらおう」

「……アカンわ。ちよつと頭冷やしいな」

確かに、アレとなのはが戦えばどのような状況でも、まず間違いなくなのはが勝つ。それは前の模擬戦の過程と結果から見ても明らか。なのはが全力で防御魔法を使えば手持ちできるような武器では貫通するのはまず不可能だから。共倒れ覚悟の自爆でさえきつとなのはは防ぎきるだろう。

けど、アレの本領は防御・回避・反撃などあらゆる抵抗を許さない不意打ちにこそある。今回のように変装して……いや、変装にかぎらず、アレはきつと多くの殺害のための手段を知っている。頭に血が上っていて冷静さを欠いた今のなのはを殺すことなど造作も無いだろう。

「私は冷静だよ」

「そんな嘘すぐにわかるわアホ。鏡見てみい」

ポケットから手鏡を取り出して、なのはに突きつける。笑顔を作っ
てはいるつもりなのだろうが、引き攣っていてとても恐ろしい。まるで般若面のよう。怒りの矛先がこちらに向いていないことはわかっ
ていても、それでも恐ろしい。

「……な？ 今の状態で倒しに行っても返り討ちにされるだけやで」

「ならどうしろって言うの？ このまま黙って、事が終わるまでじっ
としてればいいの!?!」

「落ちて着かんか阿呆! 下のモンが頑張つとんのに上司がうるたえ
とってどうするんや!」

胸ぐらを掴み、私でも珍しく怒鳴る。なのはには冷静になってもら
わないといけない。さっき言ったこともあるけれど、私もせっかく落
ち着けた気分が昂ってしまいそうだったから。

「……そう、だね。でも、これからどうすればいいのかな」

「とりあえず負傷者の手当やな。追撃はその後や」

何を考えているのかわからない以上、下手に動くべきじゃない。焦って対策をせずに行けば、それこそいいカモだ。相手が動

いてから、何を考えているのか見極めて、対策を練って。それから打って出る。速さも大事だが、これ以上被害を受ければ隊と

しての機能を維持できなくなる。相手を道連れに出来るならともかく、こちらだけがやられるのは割に合わない。

もし被害を出すのなら、確実に仕留める。もしくは道連れにするときだけ。それ以外で出してはならない。

第71話 帰還

「やあ、おかえり。ご苦労様だったね」

と、アジトに帰ってから、入り口で待ち構え満面の笑みを浮かべたスカリエツティにそう言われた。戻って一番に見るのがこいつの顔とは、あまり嬉しくはない。他の奴なら嬉しいという訳ではないが……いや。もし出迎えてくれたのがエリーだったなら嬉しかったに違いない。

それはまだあり得ないとわかっているので、ため息を一つ吐いて返事をする。

「今戻った」

「帰っていきなり悪いけど、迎撃の用意を頼めるかな。もうすぐ管理局の空挺部隊が到着するからね」

……どうも休んでいる暇はないらしい。まあ、いくらレジアス中將でもこれほど手酷く裏切りを宣言されれば、頭に血が上ってなりふり構わず戦力を投入して叩き潰しに来るだろう。人員不足と言われていても、それはあくまでも本局に比べての話。おそらくは猟犬も投入されているはずだし、その戦力はかなりのものになる。ガジェットだけではとても抑えきれない。だから、ゴミカスのような戦力にしかない私でも、居ないよりかはマシンなので前線に出なければならぬ。全くいつも通りだ。

しかし戦うにしてもまずは準備をしなければならない。今着ている服は誰かさんのおかげでボロ布になり。銃は下水道に埋まっている。戦うのなら、一度着替えて武器を持たなければ。

「それはいいが。絶対に撃ち漏らしが出るぞ」

「少しの撃ち漏らしなら、入ってきたところでガジェットの物量で圧殺するよ」

「なら迎撃はいらないんじゃない」

「とんでもない。あくまでも少しに限るよ。数を揃えたところで、機銃掃射でも受けたらあつという間に数が減って突破されてしまう」

「……それもそうか」

「まあ、ゆりかごが空に上がれば勝利が確定する。すでにクアットロが起動準備を始めているから、それまでの我慢だ」

「具体的には、どの位」

「さあ……ね。君の言っていた通りゆりかごは長年土に埋まっていたものだ。しかし中を何度か見た程度だが、故障箇所は見当たらなかったから劣化は気にしなくていい。玉座に器を座らせれば、戦船と呼ばれたその性能を遺憾なく発揮できるはずだよ」

「どの位かかる、と聞いてるんだ」

私が詰め寄りながら尋ねると、スカリエツティは目を逸らしながら小さく言った。

「……最悪、一晩」

「……」

一旦目を閉じて思考を巡らせてみる。本気で潰す気のレジアス中将が送ってくる部隊……主力は戦車、輸送車両、ヘリの機甲部隊となるだろう。両方共アジトの中へは入ってこれないが、そこから投入される戦力は大きい。並みの魔導師でも質量兵器をもたせればガジェットの優位性も薄れる。

スカリエツティの言っていた通り、ガジェットは銃を持った人間を相手にするには少し相性が悪い……そうなると私の役割は銃を持って、地上から進攻してくる連中の排除になる。空はトローレ一人居れば撃ち漏らしが出るとしても少しだけだろうから問題ない。だがトローレほどの機動力のない私では撃ち漏らしがより多くなるだろう。なら、量より質を優先しよう。どうせ全ては捌き切れないのだし。

「今、ここに居る戦力は」

「ウーノ、トローレ、クアットロ、セインの四人以外は出払ってるね。あと予備に13番……名無しのことだよ。で、ドゥーエ以外のナンバーズは全員こちらに集まってきてる。到着するまでもう少し時間がかかるけど、到着さえすれば迎撃は容易い。それまで持ちこたえられるかい?」

「……まあ、できるだけのことはやっておこう。ウーノにも出るように頼んでおいてくれるか」

持ちこたえるのが一晩から数時間に変わったのなら、まだなんとかできる……だろうか。否、なんとかする。戦力は少ないが、全力で動けばなんとかできるだろう。そして、少ない戦力ではあるが名無しを前線に出す訳にはいかない。大事な私の妹の器だ。鹵獲されでもしたら困る。

「わかった。それと、より確実性を増したいのなら、地上本部へ潜っているドゥーエにレジアス・ゲイズを殺させてしまえば済むのだが……どうしたものか。君はどうするべきだと思う」

「それは私が決めることじゃないだろう」

「参考までに、だよ」

「わかった……事が終わった後のことを考えれば殺すべきじゃないだろう。秩序の破壊が目的ならそれもいいが」

事が成功しても、失敗しても。どちらにせよ治安は一時的か、恒久的か、どちらにせよ悪化する。成功すれば私は妹と共にどこか管理外世界で隠居する事ができるが、失敗すれば重犯罪者として投獄もしくは処刑される。そして残った妹は、事件を起こした人間に関わる者の家族として恨みを向けられる可能性もある。ただ恨みを向けられるだけならいいが、治安が悪化した状態での恨みは簡単に暴力として具現化する。私が守れなかったせいで今の状態になっているのに、さらに私が原因で殺されるとなれば死んでも死にきれない。

そういうわけで、中將には事が失敗した時いち早く混乱を治め、治安の回復を成し遂げてもらわなければならない。よって生きていてもらわなくては困る。

「おや、他人の事を考えるとは君らしくもない」

「私にも情はある」

何か勘違いしているようだが、まあいい。勘違いしてくれているのなら、それでも構わない。説明するのも面倒だし、失敗した場合の事を考えているとわかれば、今まで積み上げてきた信頼関係が崩れてしまう。こんな瀬戸際になってからそんな事態は避けたいので、適当に返事をしておいた。

と、話している内に銃火器や戦闘に使う物品が並ぶ武器庫へと到着

した。ボロボロになってもはや服としての機能をほとんど果たしていない管理局の制服を脱ぎ、迷彩服に着替える。ベルトを閉め、ホルスターを腰に下げ。上から防弾プレートを仕込んだチョッキを着て、ショットガンとりボルバー式の拳銃を手取る。視界の確保できな
い森林内での戦闘ならば、大口径の対物狙撃銃は取り回しが悪いだけで意味を成さない。それならば軽量の武器を持って、至近距離から散弾を浴びせてすぐに離脱する。それがいい。ブービートラップも仕掛けておきたかったが、生憎と時間がない。

「ガジェットを出せ。迎撃に出る」

敵を壊滅させるのはまず不可能。しかし足止め……時間を稼ぐ位ならやってみせよう。妨害戦は得意な方だ。

「その前に、渡しておくものがある」

「なんだ……デバイスか？」

唐突にスカリエツティから渡されたものは、黄色の宝石……いや、待機状態のデバイス。少し外見が変化しているが、これは見覚えがある。なにせ片腕を食いちぎられてまで、海底から取ってきたものだ。忘れるはずがない。

「バルデイツシュユ？」

「見た目が同じなだけで、全くの別物だよ。AIも入ってない、市販品よりちよつと性能の良いアームドデバイスさ」

「宝の持ち腐れだ」

スカリエツティの言う「ちよつと」はおそらく私の「ちよつと」とはかなり差があるはず。一体どれほどの性能なのやら。まあ、使うつもりはない。こいつとはもうすぐ手を切ることになるのだから、これ以上の借りは作りたくない。後々借りを口実に呼び出されたり、干渉されたりするのはゴメンだ。

「いやいや。その魔力を身体強化だけにしか使わないのはもったいない。偶には派手な砲撃でも使ってみたらどうだい、君用の魔法もインストールしてあるから是非使ってみてくれ」

「私はこれだけで十分だ」

蛇を出して弾薬箱を啜えさせる。相手の数が数故に長期戦は避け

られない。自分だけで持ち歩ける量には限りがあるし、かといって一々補給に戻るのも効率が悪い。よってその問題を補給係を自分のすぐ傍に置くことで解決する。それにヒトガタが動くよりも長細い蛇がうねりながら動いている方が目立たなくていい。

「残念だよ。まあ、渡しておくから気が向いたら使ってみてくれ。今の君ならかなり優秀な魔導師として戦えるはずだ。それじゃあ私はガジェットを出して、テスタロッサの術後経過を見てくる。他にすることもないのでね」

「使えるようなら前線に出してくれ。少人数で戦線を支えるのには限度がある」

「チエックが済んで問題が無いようなら出そう」

「戦わないなら殺す、と脅してやれ」

彼女の心が壊れていなければ、二度目の死を迎えるのは怖いだろう。普通の人間にとって、死とは他の何よりも恐ろしいものだ。そうではなくては困るといいうのもあるが。

「時間がない。今度こそ、出るぞ」

ゴーグルを掛けて、ショットガンを抱えて通路を走る。私は私にできることをする。できることしかしない。身の丈にあった行動が生き残るために最も重要な事だ。まあ、生き残る必要もないし、生き残りたいともあまり思っていないのだが。それほど命に執着していないのに、こうも醜く。そしてしぶとく生き残っているのはまったく人生わからないものだ。

第72話 殲滅

木の幹を蹴り、枝を蹴り、と派手には移動せず、姿勢を低くして藪に身を隠し、出来る限り森のなかを這うように移動する。相変わらず空の上からは砲撃の音や、魔力弾が炸裂する音が聞こえてきて。けっこうな頻度で撃墜された魔導師が森のなかに落ちてくるので、樹上を移動しても問題ないのではないかとも思ったが。それでも今更動き方を変えるつもりもなく。蛇の眼を使って敵を探していく。普段は獣も多く居るらしいが、見間違う可能性は無い。これだけの異変だ、おそらく逃げ出している。

「居た」

そして、ようやく遠くに「色」が見えた。ヒトガタは見えないが、それでも相手の位置はよくわかる。その色に向かって進路を変更し、移動速度を少しだけ上げる。そして、音は極力立てないように。どうしても少しだけ音は出てしまうが、上から聞こえてくる音に比べれば些細なもの。よほど大きな動きをしなければ問題ない。

地面を這うように姿勢を低くして。そして静かに、速く移動する。相手もこちらに向かって、割りと早めな速度で移動しているので、相手の姿を視認するのにそれほど時間はかからなかった。

相手の構成は予想通り、戦車一両につきライフルで武装した随伴歩兵が数名。それと戦車が十両以上。サーチャーが周囲を飛び交っているの、魔導師も居るのだろう。一人ずつこつそりと仕留めていく予定だったが、分散していかないのならばそれはできない。ならどうするか、と言うと。簡単な話だ、まとめてやってしまえばいい。

胸につけた通信機で周辺一帯に潜ませてあるガジエットの大体半分を管制下に置き、集合命令を出す。一分としない間にガジエットが集合してきて、その内の一部が敵のサーチャーに引っかかる。

「敵だー！」

そして、銃声が何度か轟き、少し遅れて爆発音が。これでガジエットは管理局の連中を敵として認識したので、もう後は放っておくだけで敵は殲滅される。周囲で浮遊していたガジエットが一齐に枝葉の

間を騒がしく移動し上空へ抜け、敵の真上へと移動し。そこからミサイルを雨のように地面へと撃ち込み始めた。何機かは咄嗟の反応で落とされたものの、それでも一機につきミサイルが六発。それが何十機というわけだから、やられる側からしたら雨が降るようにミサイルが降ってくるのだろう。着弾した端から爆発し、地面が炎に包まれ、その度に見える「色」が減っていく。恐怖の叫び、断末魔の叫びは爆発と炎に掻き消されるが、恐怖の感情。怒りの感情は爆発のように私の脳内に燃え上がっては消えていく……家族への思い、平和への思い、理不尽に殺されることへの怒り等等など。消えていく者達の思念がどんどん雪崩れ込んでくる。自分のものではないのに、まるで自分がその感情を経験したかのような錯覚……あまりの情報の大きさと、自身の経験と他者の記憶との矛盾にちよつとした吐き気を感じたので、一度木に背中を預け地面に座り込む。

ほとんどの「色」が見えなくなったところで空爆を一旦止める。視界を切り替えて空爆の終わった跡を見れば、周辺の木々は折れ、血肉が飛び散り火の粉が舞い、戦車が燃え上がって。地獄のような有り様だった。

無人機による空爆。密集している相手に対しての空爆というのは地球では常套手段という話だが、ここまでの効果を発揮するとは思わなかった……それと、残党は狩る必要はないようだ。色は既に遠ざかりつつある。逃げる敵まで追う必要はない、こちらは時間を稼げばいいのだから。別に、吐き気で身動きが取れないというわけでは断じて無い。

吐き気が少しマシになったので目を切り替えて、管制下においていたガジェットの制御を元に戻し、空に上げて。周りを見渡すが、まともった色は見えない。どれも分散していて、今のようにな網打尽とはいかないよう。

空からは相変わらず戦闘音が響いている……耳には入ってこないはずの悲鳴も、頭に響く。

「……少しキツイか」

吐き気はおさまらないし、しつこく纏わりついてくる悲鳴も消える

どころかよりその音量を増している。頭を振って追い払ってもまだ悲鳴は絶えない。感情が色で見えるようになったと思ったら、今度は聞こえるようになるとは……蛇の能力は便利だけじゃ終わらないと。しかも、多くの人間が死んだり傷ついたりする戦場ではかなり強い感情が聞こえてくるためあまりの騒がしさに吐き気がする。先の戦闘で胃の中身を全部ぶちまけたので、吐いてスッキリというわけにもいかない。聞こえてくる悲鳴は耳を塞いでも頭のなかに直接響くので、この声を止める方法はこの戦場から離脱する以外になく。かと言つてここで下がれば施設へ大勢の敵が侵入してくる。それはつまり計画の失敗を意味しているので、結局のところ我慢して敵を排除していくしかない。

いつまでもうずくまっているわけにはいかない。立ち上がって顔を二、三度叩いて、音と衝撃で意識をハッキリさせる。耐え難い吐き気で思考も動きも鈍る。まさしく最悪といえるコンディションだが、ここは耐えて戦わなければならぬ。空にはトーレが居るが、陸には殲滅力の低い私の他に人員が居ないのだ。私が敵を少しずつでも排除しなければ、アジトへ進入する敵の数がそれだけ増える。責任は重いが変に気負わずいつも通りに、自分にできる事だけをやっていればそれでいいだろう。無理はしない。

最悪の身体を引きずって「仕事」に戻ろうとしたその時に、インカムから声が聞こえた。

『聞こえるかい?』

「ああ……」

口を開くと、胸から胃液がせり上がってきて。その気持ちの悪さに一瞬だけ咳き込んだ。

『なんだか調子が悪そうだね』

「用件を言え」

『テストロッサの術後経過を見たのだがね、なかなか良好だ』

「朗報だな……で、それは今言うべきことか?」

わざわざ戦闘中……ではないが、作戦行動中に言うほどのことではない。もつと緊急の事があるはずだ。

『人の話はちゃんと聞くものだよ』

『続きがあるのはわかっている。気分が悪いんだ……さつきと本題に入
れ。でないと切るぞ』

『せっかちなだね。じゃあ一番最後に伝えようと思ってたことを最初に
言おう。彼女がそっちに向かっている』

「応援か？」

だとすれば大歓迎だ。この戦場は私にとってあまりにうるさすぎ
るし広すぎる。仮に私のコンデイションが最高だったとしても、とて
もじゃないが一人ではカバーしきれない。体調が悪いのならなおさ
ら。

「違うよ」

しかし、そういう甘いことを考えている時に限ってそうならないの
が現実というもの。後ろから言葉が発せられると同時に振り下ろさ
れる刃を横に転んで避け、起き上がりざまにショットガンを撃ち散弾
を叩きつけようとするが、発射された散弾は木の幹を挟るだけで既に
空へと逃れていた通り魔には当たらなかった。

「何のつもりだ」

空に浮かぶ、新たな身体に入ったフェイトを見上げながら呼びかけ
る。見た目が十九歳の見た目同様のものから小学生高学年位になっ
ただけで、それ以外に大きな変化は見られない。

「私言ったよね。治ったら覚えておいてって」

「ああ、言ってたな。それで、どうするつもりだ」

「さつきもいっぱい人を傷つけて……反省してもらおうよ！」

木々の隙間から金色の光が見える。声からは殺意までは行かない
ものの敵意がハッキリと感じられ。おそらくあのまま上から砲撃を
打ち下ろして私を無力化しようという魂胆なのだろう。シンプルだ
が良い手だ。

少し考えが足りないが。通信機の周波数を変更して仕掛けを作動
してやる。

「管理者権限発動。バインド」

飼っている鳥が逃げる可能性があるなら、逃げられないよう紐をつ

けておくのは当然のこと。飼い主から逃げたり、飼い主に歯向かったりするような紐を引っ張ってやれば地に落ちる。

「へ？ きゃああああ!」

フェイトが悲鳴を上げながら、木の枝葉に何度か身体を引っ掛け落ちてきた。体中を自分のバインドで縛られた状態で。

「どうして、バルディッシュ……なんで!」

「一応こうなるかも、と思って仕込んでおいた。お前に本気でかかって来られたら、私は手も足も出ないからな」

強制はしてないが、本人の意志に反して戦わせるわけだから離反の可能性は十分に考慮していた。だからバルディッシュを拾ってきた後に、スカリエツティに中身を少しだけいじらせておいた。嚴重と言えるレベルのプロテクトがかかっても奴にとつては解除するのにさほど苦勞する代物ではなかったらしい。やけに自慢気に話していたのを覚えている。その結果が、この眼の前で蛇を前にした蛙のように怯えて動かない……いや、動けないが正しいか……少女だ。

「歯向かったからには、覚悟できてるな?」

「……こ、殺すの?」

「いや、そんな勿体無い真似はしない」

せつかく海の底まで潜ってデバイスを取ってきて。せつかく死ぬところを助けて新しい身体まで用意してやって。それで大した活躍もせずに殺処分ではあまりに勿体無い。かなり大きな投資をしたのだから、見合った成果を出してもらわなければ困る。

だから、こうなる事を考えてもう一つ種を仕込んでおいた。それを起動させるために、無抵抗……というか抵抗ができない彼女を仰向けにし、馬乗りになり、首を絞める。

「うっぐ……かっ」

恐怖で顔を真っ青にし。息ができずに口を開いて舌を伸ばし。ひたすらに喘ぐだけ。私がかもう少し力をいければ簡単に首が折れ、死んでしまうだろう。もう少し働いてもらうのももちろん殺しはしない。しばらく締め続けているとわずかな抵抗もしなくなつたので、一度手を離して、指先で優しく首筋に触れる。脈はある。次に口元に手をか

ざし、呼吸を確認。気絶してるだけで、死んでるわけではない。

「しばらく操り人形になって暴れてもらおうか」

意識がないはずのフェイトの肉体が立ち上がり、空に舞い上がってどこかへ飛んで行く。本当は本人の意識があっても使えるのだが、無の方が彼女が裁かれることになった時の判決で少しは良い結果が出るだろう。それと動きに障害もなくなる。あとは放っておけばデバイスが身体を動かして敵を探し、リンカーコアから魔力を絞り出して魔法を行使して。少し攻撃力の高いガジェットのようなものとして、私の代わりにしばらく戦ってもらおう。戦闘力も機動力も私よりはるかに上なのだから、排除する効率も上がるだろう。

『いやあ、すまない。いきなり暴れ出すとは思わなくてね、つい取り逃がしてしまったよ』

「わざとなんだろう。嘘を言わなくてもいい」

『……まあね。そっちに行ってもどうせ戦力になるだけだしいいかなと思っただよ』

「それより、一度戻る。地面を走り回るよりガジェットに空爆させて、あとはアレに任せた方が効率がいいだろうからな」

『了解。必要な物はあるかい？』

「いらない……空爆させておけば時間は稼げるだろう。その間、少し休みたい」

『珍しいね、君が弱音を吐くなんて』

「私だって人間だから、一応な」

吐き気はきつと疲れのせいもある。それにしても、結局銃は一発しか撃たなかったし持つてくる必要はあったのだろうか。いや、彼女が出てこなければ使っただろうし、持つてきたこと自体は悪いことじゃない。ただ少し間が悪かったただけだ。

第73話

「お疲れ様。やっぱり帰ってきてばかりで戦闘は厳しかったか」

「敵を倒したのはほとんどガジェットだ。疲れてるわけじゃない」

「おや、じゃあなんで帰ってきたのかな？」

「死人の声がうるさすぎて吐き気がしたから帰ってきた」

戦場から離れた今はかなりマシになったが。それでもこのアジト近くにまで敵が寄ってきて、そしてガジェットにやられているのか声が聞こえてくる。この調子ではすぐにまた吐き気に悩まされることになる。やはり戦闘機人とエース級魔導師でも二人だけでは、戦線を支えるには少なすぎるようだ。いくら個人が強くとも戦況をひっくり返すには数が足りない。他のメンバーが帰ってくればその数も少しはマシになり、戦線を維持する位はできるだろうが……果たしてそれまでここが陥落せずに持つだろうか。

「……声？ ああ、ひよつとして蛇の使い過ぎか」

今の言葉だけで、スカリエッティには今の私の状態が伝わったらしい。

「そうだ……動くのがやっとでな。しばらく戦力にはなれない」

「まあ構わないよ。君には今まで十分すぎるほど働いてもらったしね」

「なら、もう戦わなくていいのか？」

「そうだね」

「そうか……」

戦わなくていいのなら、この吐き気だつて気にしなくていいだろう。戦わなくていいのなら、戦えなくても問題ないだろう。子供もさうらって機動六課を爆破して兵士を適当に蹴散らして、これで私の役目は終わり。

そんなわけがないだろう。

まだ仕事は残っている。だが、ここ最近まったくといっていいほど休んでいないので少し疲労がたまっている。

ソファアーに半ば倒れるように座り込み、一度だけ完全に脱力する。

「ところでスカリエツティ」

「なんだい」

「エリーの手術はいつするんだ。アレの様子を見たが、術後それほど経っていないのにずいぶんと元気そうだったが」

「手術につかつた機材の消毒がまだ済んでいない。しかしそれさえ済めばいつからでも始められる。いつがいい」

「ああ……そうだな」

少しだけ考えてみる。出来る限り早く治してもらいたいという気持ちは確かにある。しかし手術はかなりの集中力が必要になるものだ。脳の移植ともなれば尚更。事が落ち着いてからでないも、もし手術の最中にドンパチしてその余波で施設が揺れて、そのせいで失敗して死なれては今まで私が今までやってきたことが全て無駄になる。

今度は逆に考えよう。計画が全て終わってから手術にとりかかった場合。計画が失敗してしまえば手術もできない。完全に元の木阿弥だ。こちらも全てが無駄になる。

もしナンバーズ全員が集結したとしても、これほどの事態だ。今は陸の戦力しか出ていないが、そう遠くない内に空と海からも援軍が出るだろう。そうなれば、いよいよ物量で押しつぶされておしまいだ。

失敗する可能性がわずかにあるが、なんとか食い止めつつ手術をやらせるか。計画が失敗すれば手術そのものが不可能になるリスクはあるが、確実に成功する方を選ぶか。

「……計画が成功してから」

「失敗する可能性もあるが。いいのかい？」

手段を選ばなければ一つだけ確実に計画を成功させられる方法がある。ゆりかごが空に上るのを待つまでもない。一流、天才を自負するスカリエツティの反感を買うことが絶対条件となる手段なのであって言わなかつた手段なのだが。

「質量兵器保管倉庫には核弾頭がいくつもある。もちろん厳重に管理されているが、セインの能力なら盗むのは簡単だ。二つを盗んで、一つはクラナガンの上に。もう一つはここを包囲する連中に落とすぞと脅そう。空中での爆発は地表はなぎ払えるが地下への効果は薄い

から、ここにはそれほど影響がないはずだ」

最悪の手段。人の命を盾に兵を引けと管理局に命令すること。しかし最良の手段でもある。一応は民主主義的な面も持つ組織だ。一人二人ならともかく、百万単位の民間人の命は無視できないはず。もし無視したなら、その時はエリーは助からず、管理局の権威が失われるだけだ。民の命を見捨てる非情な組織として非難され、支持を失い、テロリストがより一層活気づいて世界の安定は失われる。管理局がそれを良しとするか否とするかで結果は変わるが、賭けとしての分は悪くないはずだ。

「……」

だが、最大の問題はスカリエツティがこの提案を受けるかどうか。こいつの協力なくして現在の包囲を突破し、地上本部へ侵入することは不可能だ。おそらくは受けないだろう。この天才が自分のシナリオを、相手に突破されるのではなく身内の手でねじ曲げられるのを許すはずがない。

「素晴らしい案だ。今すぐ実行しよう……とでも、言うと思ったかい？」

「いや全く」

むしろ反対するだろうと思っていた。予想通り。

「私の専門は生体工学。実験の過程や、研究を続行するために命を奪うことはあるとも。だが無駄な殺しは好きではない。せつかく殺すなら死体も解剖して実験して研究して……跡形もなく消し去るなんてもつたいないじゃないか」

「現在進行形で外で行われてる戦闘の中には、ミンチになったのも居るが」

主に私がガジェットに仕込んだパターンのせいで。少ない戦力で圧倒的多数を相手にするのなら、容赦をしてはいけない。相手の戦意を挫く意味でも死を眼の前にぶら下げるのは重要だ。だれだって死ぬのは怖い。

「それは自分を守るため。最小限の無駄として受け入れよう。まあそれは一旦置いておくとして。君の案はあまりに不安定だ。確かに今

の包囲はセインの能力ならば秘密裏に突破できるだろう。施設への侵入も可能だろう。だがほんのすこし前に同じ手を使っておいて今度もまたうまくいく可能性は非常に低い」

「地上本部はこの施設の攻略にほとんどの戦力を割いているから相当手薄なはずだ」

「娘たちが戻れば殲滅できる。それからでも遅くはないはずだ」

「殲滅スピードが早すぎてゆりかごが起動するより早く海と空から増援が送られてくる。いくら個々の能力が優れていても物量にはかなわない」

高町なのはほどの殲滅力があればまだ話は変わるが、我々にそんなものはない。なら代用品を使う。これは間違っていないはずだ……

「だがやはり認められない」

「この期に及んでまだ手段を選ぶつもりかスカリエツティ」

私はもう手段を選ぶつもりはない。この段階になって形振り構っていないではエリーを助けられない。それは即ち、私の人生の全てが無駄になるということ。今まで殺してきた犠牲が無駄になる。それは申し訳ない気がする。

「これは私のためだけじゃない。君のためでもある。娘たちは君のことを、君自身が思うよりも高く評価している。そして君は自分のことを好いていてくれる者が傷つくのをあまりよしとしない。そうだろう」

「それは確かにある。だが私が一番に優先するのは常に血の繋がった家族だ。家族を救うためには手段も選ばない」

「自分が傷つくのも?」

「私が傷つくだけでエリーが助かるなら安い。最悪死んでもいいと思ってる」

「私が傷つくのが嫌なら、傷つかずに帰ってくればいいんだろう」

「できるのかい?」

「やってみせる」

「……そうまで言うのなら任せよう。私は傷つくなどは言わないが、くれぐれも死なないように頼むよ。でないと治す甲斐がない。あと

こつちもこつちで迎撃は続けておくからやるなら早くしてくれたまえよ」

あくまでも同時進行。自分のシナリオを完全に放棄するわけではないということか。

「感謝する」

身体を起こしてソファから立ち上がる。吐き気はもうすっかりナリを潜めた。

妹のために、あと少しだけ頑張るとしよう。

第74話

機動六課の隊舎が崩壊してからしばらく。もう日も落ちて、辺りが暗くなつてからようやく被害の全容が確認できて、地上本部へ持つていくための書類も完成した。

まず、施設の被害。これは施設の真ん中にある柱が一本折れて、爆発の衝撃で崩落した場所以外でも窓ガラスが大量に割れて、モニターも割れた。崩落の余波で電気の配線がアチコチ切れて停電を起こし、自動保存されていなかったデータが壊れた。

次に人の被害。負傷者の人数は全体の割合で言うと二割ほど。崩壊に巻き込まれた者と爆発によって飛散したコンクリや鉄筋の破片で負傷した者。あとは爆発に驚いて階段から落ちたり、転けたりした者が少し。それと、質量兵器運用小隊で撃たれてケガをしたのが少し。死者が三人。

被害総額はそこまで細かく計算していないから正確な値ではないが、復旧に必要な費用は与えられた予算を全て食いつぶしてもまだ足りない。そしてその被害を記した書類をこれから提出しなければならぬ。

今後のことを考えたら、もう何もかもが嫌になつてくる。きつとまた嫌味を言われるだろう。言われるだけで済めばいい、今回の責任を問われれば私は……最悪管理局に居られなくなるかもしれない。いや、もしかするともつと、想像もできないほどひどいことになるかもしれない。失態に次ぐ失態で海からも空からも完全に見放されていよう、もし投資した分を返せと言われてしまえば、私は返すことができない。嫌なことばかりが頭を過る。

「お客さん、つきましたよ」

思考が一段落したところで、タクシーの運転手から声をかけられる。施設が崩れたときに車も巻き込まれて潰れて車が使えないので、タクシーを呼んで地上本部へ向かっている所だ。もちろん今度はいよいよ身元の確認とボディチェック、体のスキャンまでしてあるからあの男が化けているということはない。仮にそうだったとしても

護衛にシグナムを連れていたので、襲われても叩き潰せる。

「どうも。支払いはカードでええかな」

財布からキャッシュカードを取り出すと、運転手が前から手を伸ばしてそれを受け取る。そしてカードをスキャンして、私に返す。

「はい、ご利用ありがとうございます。またのご利用をお待ちしております」

シグナムと共に車を降り、地上本部の施設を見上げる。アインヘリアルが襲撃、破壊されたという話は聞いているが、地上本部までは敵の手は届いていないよう。階段を登り、正面玄関から施設の中に入ると、スカリエツティのアジト攻略のために多くの戦力を派遣しているのが影響しているのか、いつもより警備の人間が少ない。そのおかげで嫌悪を通り越して敵意のこもった視線がいつもより少なく、針の筵に石を抱いて座らされるような居心地の悪さが、ただ針の筵に座るだけ位に軽くなっている。それでも居心地が悪いことには変わりないが。

突き刺さる視線を耐えつつ、暴れだしそんなシグナムを制しつつ。窓口に向かう。

「所属とお名前と、身分証を提示してください。それからご利用をどうぞ」

もう何度も顔を合わせて、その度に同じことを聞いてくる窓口の担当。それが彼女の仕事なのだから、私も文句を言わずにいつも通り質問に答え、管理局員である事を示すカードを渡す。

「機動六課の八神です」

「すぐに照合いたします」

彼女は私が渡したカードを機械に通し、その後隣においてあるモニターを見てから一つ頷いてカードを私に返す。

「ご利用をどうぞ、八神二佐」

「被害の報告書を提出しに来ました」

「かしこまりました。中将は今会議で忙しいようなので、代わりにオーリス三佐をお呼びしましょうか」

「……お願いします」

中将も三佐もどちらも苦手だ。中将は私より階級が高いせいで強く出られないし、三佐は階級が低くても中将の娘ということで同じく。おまけに親子揃って人のことを毛嫌いしてくれている。言っていることがデタラメならまだ歯向かうこともできるけど、責められることのほとんどは私の失敗ということもあつて反論するつもりにはならない。特に最近は一つ嫌味を言われる度に、オズワルド准尉のことを持ちだされて、反論する気力が削られていくのだ。

「今呼びします。しばらくお待ち下さい」

精神的な拷問の時間まで、少しだけ猶予が与えられる。ここで一つ深呼吸をして、心の準備をしておく。それからさつきから黙っている、いや黙らせていると言ったほうが良いシグナムにもう一度釘を差しておく。シグナムのいい所は非常に家族思いなことだが、この場ではそれが逆に仇となる。目の前で私がこつぴどく罵倒されているのを見るのは耐え難いことだろう、それでもし我慢できず暴力を振るったらどうなるか。玉座から一転降下、檻の中へ。ただでさえ犯罪者との境界ギリギリの場所に立っているのにこれ以上はマズイ。

「シグナム、私が何を言われても」

「黙って立っている、ですね。わかっています」

「うん。辛いやろけど、我慢してな」

「非難を向けられる主が我慢されるのですから我慢できないはずもありません」

「ありがとな」

「いえ……今のこの状況は、私の責任もありますから」

まあ、それもある。とりあえず冷たいコーヒーを自販機で買い、手近なベンチに座って口につける。昼から何も口にしていないせいで、喉が渴いたし疲れのせいで眠気もする。そのためにコーヒーを選んだ。

「シグナムも飲むか？」

「いえ、私はかまいません」

「そうか」

紙コップに氷と一緒に入っているコーヒーを飲み干した後、氷をボ

リボリと噛み砕いて、飲み込む。冷たい飲み物はいい、頭も冷える。コップの中の氷もなくなり、コップをゴミとして捨ててすぐ。またベンチに座ったところで、エレベータから降りてきたオーリス・ゲイズ三佐と目が合った。彼女はこちらを見るとまっすぐ歩いてきて、すぐ前で立ち止まった。自然、見下ろされる形になる。

「こんばんは、八神二佐。ずいぶんと手酷くやられたらしいですね」「ははは……否定はできませんよ。事実ですから」

開口一番の皮肉を笑って受け流す。この程度はもう慣れたもので、ボクシングで言うところのジャブくらいなものではない。一体次はどんな皮肉が飛び出すのか。ストレートか、ボディか、それともアッパーか。心の準備さえできていればかえって楽しめるようになる……のだが。

「それで、被害の報告書は」

意外なことに、彼女の口から出てきたのは皮肉ではなく報告書の要求。口調は平静を装ってはいるものの、どこか焦っているようにも感じる。スカリエッティのアジト攻略が進んでいないのだろうか。だから私の失態も強く責められず、ジャブ程度で済ませるのか。私も罵倒されて喜ぶような特殊な趣味は持っていないので、それはありがたい。さっさとクリアファイルに入った報告書を手渡す。

「これです」

「……」

私の手から報告書を受け取ると、眼鏡の向こう側の、ただでさえ鋭い目がさらに細く鋭くなり、眼球が動いて文面をざっと眺め始める。「確かに受け取りました。ではこれは中将に渡しておきます。もう帰ってくださいって構いません」

五秒ほどで軽く目を通したようで、紙をファイルにしまったが、皮肉の一つもない。

「帰る前に一つ聞いてもいいですか」

「どうぞ」

「ジェイル・スカリエッティの拠点攻略はどうなっているのでしょうか。かなりの数の部隊を出したと聞いていますが」

「……」

答えたくないとばかりに目をそらされた。よほど上手くいったないらしい。まあ、それも仕方がない。高ランク魔導師ですら戦闘機人が複数に大量のガジェット。さらに不利な状況での戦いに慣れきっている危険人物。これで苦戦しないほうがおかしい。

「ここで言うべきことではないですね。それにあなたには関係のないことでしょうか？ 早く帰って、正確な被害総額を計算したらどうですか」

「……ええ、そうさせてもらいます。元々ここには書類を持ってきただけですから」

ベンチから立ち上がる。

「スカリエツティのアジト攻略、うまくいくといいですね」

「どうも。そちらも、これ以上死者が増えなければいいですね」

お互いに嫌味を言い合ったところで、互いに背中を向けて離れる。そして入ってきた玄関へ差し掛かったところで、けたたましいブザーと共に赤い回転灯が点灯したので、一度足を止める。

『施設内に戦闘機人らしき侵入者発見！ 武装隊員は直ちに配置に付け！』

「……主」

隣から聞こえる声は、まるで獲物を目の前にお預けを食らっている獣の呻き声のよう。首輪に繋がる紐を握っているとわかっている、怖い。

「勝手に暴れちゃあかんで。ちゃんと許可もらわんな……まあ、戦闘機人相手ならそう待たんでも出番はあると思うけど」

わざと周りに聞こえるよう、声を潜めずに話す。ここに大した戦力が残っていないのはわかっている。戦闘機人一人でもかなりの脅威となるはず。そこに都合よく強力な魔導師が二人。全滅する前に応援要請が出るだろう。しかし、それを待っているのは獣が紐を食いちぎって暴れだしかねない。まつよりも、自分から動く。エレベーターを待つオーリス三佐の後ろまでゆっくりと歩いていき、そのまま声をかける。

「オーリス・ゲイズ三佐」

「……言いたいことはわかります。私はあなた方の手など借りたくもありませんが、状況が状況です。特別に！ 戦闘に加わることを許可します。中將は私が説得しておきますので、行くなら早く行つてください」

「ありがとうございます。シグナム、行くで」

一旦外に出て、夜天の書を起動。そのまま空へと飛び上がり、保管庫へ向かって飛ぶ。施設内の通路を走って行くよりも外から飛んで行く方が早い。ある程度の高さまで上昇したら、そのまま今はまだ誰も到着していない倉庫の前まで降りていく。

「ほんじゃ、名誉回復のお時間といこか」

「ええ。今度こそ我らの敵を打ち倒し、捕らえてみせます」

これほど早く、今までの失態を払拭するまではいかないものの、信用をわずかにでも取り戻せるような事態が起きると思つてもいなかった。この上なく好都合だ。しかしそれだけに失敗はできない。

第75話 失敗

高度四千メートルの夜空。二つの月が照らす雲の海は、人によっては絶景と感じられる光景なのだろうが、風情を理解できるような感性など持ち合わせていない私とその景色を見ても、刺すような寒さと、息苦しさ。そして地上から視認されないという結果しか感じない。息苦しきは問題ない。そして、視認されないからと言って安心はしていない。スカリエッティがステルス塗料を縫ってくれているのでこうして管理局に察知されずに飛んではいるが、哨戒の魔法使いといっ出くわすとも限らないので安心などできるはずがない。

『もしもし、こちらセイン。地上本部地下に到着したよ。倉庫の場所はわかんないから誘導お願い』

出るときにスカリエッティから押し付けられるようにして持たされたデバイスから、セインの音声が届く。目の前の空間に浮かぶスクリーンには地上本部の俯瞰写真と、光点が一つ示されている。点の位置がセインの居場所。倉庫は西側の外れ。彼女が今いるのが、正面玄関付近。

「北西へ三百メートル。それで倉庫の真下に出る」

『はい了解。にしても同じ手が二度も通じるかな、どうも嫌な予感がするんだけど』
「罠だと思うか？」

地上本部には大した戦力は残っていないが、施設防衛機能は最低限の人員さえいれば動かせる。だがその心配をしているのなら、ほぼ杞憂だろう。私達が狙うのは倉庫の中身だけ。質量兵器保管庫は所謂弾薬庫だ、防御用の攻撃スフィアなんて置けない。あつたとしてもせいぜい監視装置くらいなもの。目的のものだけ頂いて手早く帰れば、地上本部に空を飛べるような奴は居ないし見つかったら逃げられるはずだ。

移動する光点を見つめながら、自分も高度を下げる。雲の上から、雲の中、そして雲の下へ。気圧の変化による不快感を耐えながら、セインからの通信を聞く。

『どうだろう。でもまあ、ここまで来たなら罫でも行くしか無いよね』
「……セイン、止まれ。そこが倉庫の真下だ」

『ういー』

「目的のものはすぐに見つかるはず。わかりやすいマークがついてるからな」

『じゃ、行きますよー』

その声が聞こえた直後に、通信機からブザーが聞こえ、眼下の施設からは赤色の光が。まあこの程度は想定内。高度を二千まで落として、武装のロックを解除する。

『あれ、ひよつとしてヤバイ?』

「気にせず探せ」

『そんな無茶を、つてしかも目的のブツが無いよ!』

「そんな馬鹿な。もっとよく探せ、どこかにあるはずだ」

『いやいや、周りスキャンしたけど本当に無いんだって!』

……これは、想定外だ。いや、だがこれはよく考えれば簡単に想定できた事態じゃないか。核兵器は強力だ、威力や質の悪さはロストロギアにも引けをとらない。ならばロストロギアと一緒に危険物として別の倉庫に移してあるということも、普通に考えられる。

『どうする!?!』

「……撤退しろ」

『うん、了解! うげ、ヤバイ……』

「どうした」

『ディープダイバーが使えない! これじゃ逃げらんないよ!』

またしても想定外。失敗しても逃げられるとタカを括っていたが、そういう方向で対策を取ってきたか。私が管理局を辞めてからまだそれほど経っていないのに、いつの間に倉庫に仕掛けを施したのか。

さてそれはともかく、ディープダイバーが使えないとなると、セインをどうにかして助けないといけない。

『扉も開かない! 閉じ込められた!』

しかし拾いに行くとなると、地面近くに降りなければならぬから

私が狙われるリスクも当然有る。武装局員程度ならなんとかなるだろうが、もしものためにボードに固定していた対物ライフルを構え、高倍率の暗視スコープを覗いて地面を見下ろして索敵してみる。

「……」

警備の武装局員が十数人程度、デバイスカ銃を構えて倉庫入り口を包囲しているのが見えた。そのどれもが統一されたバリアジャケットか防弾衣を着ている。他には居ないかと一旦目を切り替えて探してみると、集団とは少し離れた場所に二つの色が見えた。イレギュラー。スコープで観察してみる。距離が距離なのと、暗視スコープで視界があまりハッキリとしないため誰なのかはわからないが、髪の長さでシルエツトから女性というのは辛うじて分かった。

セインを見捨てて撤退すべきか、非常に悩むところ。もし見捨てても殺されることはないだろうが、替えの効かない駒を切り捨てておいて何の成果もなしに帰ったとしよう。それをスカリエツティが許すだろうか。許すわけがない。それなら私自身を囚にしてセインを逃すほうがよほどいい。

「理想は一人で戻ること。最悪は両者とも捕まること」

その中間が現実的。とりあえずボードに抱えている二つの爆弾を、そのイレギュラーとセインの居る倉庫の天井に着弾点を設定して、切り離す。倉庫に落とす方の爆弾は信管を切つてあるため爆発はしない、ただ貫通するだけ。そしてもう片方は何もいじっていない。炸裂した周囲に居る人間を物言わぬ肉塊に変えるだけの威力がある爆弾が、地上へと落下を始める。

そして、ボードと地上の中間地点で、爆弾の片方が何かに貫かれ、炸裂した。

「ッ!？」

爆風に煽られ、ボードがバランスを崩す。なんとか落ちないようにはがみつくも、貴重な武器であるライフルが地上へと落ち始めている。慌てて右手を蛇に戻して伸ばして掴むが、その瞬間にまるで剣で刺すような敵意が私に向けられた。

だがもう片方の爆弾はちゃんと倉庫の天井に着弾し、天井に大穴を

開け、その穴からセインが飛び出してきた。一瞬遅れてそれを追うように、イレギュラーの内一名が空に舞い上がる。そして、私に敵意を向けるもう独りのイレギュラーも同じく。

『やば、追ってきた』

「こつちもだ」

ライフルを構えて、クロスヘアの中心に敵を置いてトリガーを引く。しかし外れる。当然だ、相手は動いているし距離もある。着弾するときには敵はその場所に居ない。第二射を放とうとしたが、自分よりもずっと下の高さで魔法陣が輝きを発したので、ボードをスライドさせて移動する。が、予想していた魔力砲撃は来なかった。その代わりに、移動する速度を上げてイレギュラーが近づいてくる。相手との距離が近づくとつれスコープの中の像がはつきりと見えてきて、イレギュラーの正体を明かす。

「八神はやてか」

スコープから一度目を離して、ため息を吐く。一体こいつは何度私の邪魔をすれば気が済むのか。敵意は感じられるものの殺意は見えないので、様子を注視しながら高度を維持する。相手の出方がわかるまで動く訳にはいかないのだ。一発撃った後ならすぐに第二射は撃てないから、さっさと移動してセインを追いかけられることもできた。一度動き始めた相手を正確に狙い撃つのは、魔法でも銃でも同じく困難だからだ。しかし、動き始めを狙うのは容易い。今逃げようとするればその動き始めを狙われる。

だからここはあえて動かず、相手の出方を見る。いきなり撃つてこないということは少なくとも警告くらいはするはず。一つでも言葉を交わせれば相手の調子を崩せるから、それを待つとする。セインについては心配いらぬだろう。イレギュラーの片割れはおそらくシグナム。そうでなくとも髪の毛の長さからして教会のシスターではないことは確定。であれば地面に潜りさえすれば簡単に逃げられるはずだ。

だから私は、目の前の相手から逃げることに集中する。

「久しぶりやな。ハンク君。てつきり死んだもんやと思つとつたけど生きとつたか」

しばらく待つと、私と同じ高度まで八神が上がってきた。そしてこのまるで気の知れた友人に話しかけるかのような軽い口調。声からはとても私が憎まれているとは思えない。しかし目に見える色は声とは裏腹に負の感情で染まっている。それでまああれほど、なんでもないという風に声を出せるものだ。やはり彼女には演技の才があるのだろう。その才を活かせる仕事をしているかというのを否だが。

それはともかく、話しかけられたのならこちらも隙を作るための足がかりを作るための返事をする。

「昼間に会ったはずだから、その言葉はおかしいんじゃないか」

「ああ、そうやったな。でもま、そんなことは重要じゃ無いやろ？」

「そうだな」

確かに、いつ会ったかなど些細なことではしかない。何をしたか、という話ならそれなりの事をしでかしているから些細とは言わないが。

「うん。それじゃ重要な事を言わせてもらうわ。ここで死ぬか、死なないけど死ぬより酷い目に遭うかどっちか選ばせたるわ」

またも軽い口調。しかし、感じられる敵意はさつきからずつと大きくなり続けている。それほどまでに私が憎いか。まあ憎いだろう。家族を傷つけられ、仲間を傷つけられ、拳句の果てには隊舎とメンツまで潰された。これで憎むなという方が無理な話だ。立場が逆なら私もきつと憎んでいたはずだ。

気持ちはわかる。わかるが、私もやらなければならないことがある。償いはしてやれないし、復讐も受け入れられない。

「まるでマフィアの脅しだな。とても管理局員の口から出てきた言葉とは信じられん」

心にも無いことを、呆れの感情を混ぜて、動作と一緒に吐き出す。挑発だ。

「マフィア……ね。それをアンタが言うか？ マフィアも真つ青な殺し屋のくせに。何人殺しとんねん」

「そういうお前も、その歳で二佐まで上り詰めるために何人の男に股を開いた。演技と能力と後ろ盾だけで昇進できるほど温い組織でもないだろう」

「生憎とまだ清い身やわ。死ねセクハラ野郎。で、どうすんの。抵抗するならばつ殺す。せんのなら死ぬほど痛い目見るだけで済ましたるけど……中将からは殺すな言われとるからできれば抵抗せんといほしいわ。そしたらこつちが今まで散々被らされた汚名もちつとは返上できるし」

最後の一言で、彼女がどれだけ苦労しているかがよくわかった。きっと私が散々暴れたせいで、その余波が彼女を襲ったのだろう。一時は機動六課に身を置いていたのだ、多少の責めも向けられるだろう。

しかし同情してやるつもりはない。そんな情けなど持っていない。脇に置いていたライフルを拾って構えて、トリガーを引く。しかし避けられる。当然だ、撃たれるのがわかっていてジツとしている馬鹿など居ない。

「警告はした。そして攻撃してくるってことは死にたいってことやな」

敵意が膨らみ、爆発する。殺意もまた同様に、その色の濃さに目が眩む。

「死にたいわけじゃないがな」

そう返事をするように呟いてから、ボードを動かす。その後自分居た空間を魔力砲撃が飲み込み、さらに雲を割って月を晒した。リミッターがかかっているはずなのに、恐ろしい出力だ。あれに巻き込まれたら生きていられる自信がない。

だから、早く逃げる。

ボードの頭を一度大きく上に向けた後に下に向け、一度飛行制御を切って重力落下に身を任せる。砲撃の余波でボードが故障したかのように、見せかけるために。そして、相手の追撃の第二射の用意が整う。2つ目の魔法陣が輝きを放ち、そこから私を殺すための、殺意の乗った砲撃が放たれる。

「獲ったー！」

その声が聞こえた直後、ボードにつけていたロケットエンジンに点火する。重力に加えて、さらに後方へ向けて強力な炎の噴射による二

段加速により一瞬で砲撃の範囲から外れ、地面が迫る。このままでは地面に墜落するだけなので、機首を上げ水平飛行に移る。既に速度は最高まで達している、このまま何事もなければ逃げ切れるはず。

だが、残念なことに何事かあつてしまった。砲撃から逃れ少しだけ気が緩んだ瞬間に、正面から殺意を感じたと思うと、もう目の先に剣の刃が迫っていた。ボードは既にスピードが乗っていて回避は不可能。真っ直ぐ進めば頭を真つ二つに割られてしまう。

「くそ」

一瞬の判断でライフルを間に挟んで刃を防ぐ。受け止めることにはなんとか成功したが、そのせいでライフルの銃身が切り飛ばされてなくなつて、さらにボードに足を固定するための器具も衝撃で外れて。慣性のままボードが夜空を飛んで行き、己の体は空に投げ出される。高さは以前へりからパラシュートなしでの降下を敢行したときよりも低い、それでもこのまま地面にたたきつけられれば体は持たない。かといつて蛇を使って降りるのはあまりに隙だらけ。使いたくなかつたが、仕方なく持つてきたデバイスを使う。

「セットアップ」

ライフルが銃身を切り飛ばされた時と同じように、一瞬でバリアジャケットを纏う。そのまま防御魔法を使いながら地表に衝突、四肢を地面につけて衝撃を分散させ、さらに防御魔法とバリアジャケットに吸収させて、体に損傷はないまま着地に成功する。問題はここから。ボードがない以上ライフルは壊れたから、取れる手段は近接戦闘しかない。しかし相手はシグナムと八神はやて、のんびりしていたら他の連中もやってくる。苦戦は必須。しかし苦戦しているのは負けが確定する。素の状態なら詰みだが、今はスカリエツティからもらつたデバイスがある。その性能の如何でどれほど苦戦するかが変わってくるのだが、あろうことか私はデバイスの中身を知らない。武器の把握は基本中の基本だというのに、なんとという初歩的なミスか。

とりあえず上から降ってくるナイフの形をしたデバイスをキャッチして、これから襲い掛かる困難を打ち破るべく構えを取る。相手の手の内はわかつていて、どう対処すればいいかも考えてある。問題は

それが実戦でどこまで通用するか。

第76話 抵抗

状況確認。現在地、地上本部付近の路上。障害はエース級近接魔導師一名、砲撃魔導師一名。援軍の可能性が大。障害の排除は困難。撤退するなら時間をかけるのは論外だが、時間がかかるのは必須。というよりも、不可能だろう。いくら肉体を強化しても空戦魔導師の追跡はあのボード無しには振りきれない。戦おうにも武器は中身の不明なナイフ型のデバイスと、蛇と、豆鉄砲のような拳銃のみ。過去共に多くの任務へ赴き、多くの敵を殺してきた相棒ともいえる私のライフルはもう使えない。長かった銃身は中程で真つ二つに切れ、刃を受け止めた衝撃で残っている銃身もゆがんでいる。狙撃の用途には二度と使えないし弾が出るかどうかもわからない。

デバイスを構えてから一秒で思考を纏めあげて、どうするかを決めようとする。決めるよりも前にするべきことは、愛銃の銃身の長さを半分に切り落としてくれた蛇腹剣の刃節の回避しかない。知ってはいたが、初めて相手にする独特の軌道。まるで生き物のように、全方位から襲い来る刃。ひとまずは右側から襲い来る刃を、四肢を地面につけ伏せるようにして避ける。防ぐのは論外、そこを基点に鞭のように撓る刃がまとわりついて、体を傷つけられた上でさらに身動きを取れなくされる。

地面についた四肢をバネにし、一気に伸ばして大きくその場から前へと飛ぶ。刃の包囲の中にとどまってはいけない。

「……どうする」

戦闘用の思考とは別に、これからどうするか、という思考を巡らせる。逃げることは不可能に近い。だが、セインを逃がすことにはあつさりとも成功した。最悪の結果は避ける事ができたのだ。ここで抵抗しても無意味というわけではないが、今の武装では手傷を負わせることすら困難だろう。ならばいっそ投降するのも選択肢に入れてもよいのではないだろうか。抵抗をやめて投降すれば、少なくとも殺されることはないだろうし……捕まってもまたスカリエツティが助けを

出してくれる、なんて都合のいい話はないだろうが。裁判にかけられても、猟犬での活動記録を交渉のネタにすれば死刑だけは避けられるかもしれない。それに生きていれば、エリーの治った姿をいつか見ることができるかもしれない。

今は捕まっておいて、後で助かる可能性のある選択をするか。ここで死ぬか。選ぶべきは断然前者だろう。

だがその前に、やれることはやっておいて損はない。もう少しだけ抵抗してみる。

戦闘用以外の思考を全て切り捨てて、集中し、感覚を研ぎ澄ます。目で見える範囲は空気の流れまで視認できるほどに。見えない部分は聴力でカバーし、全方位を認識下に置く。今度は地面を這い、足を刈り取ろうと襲い来る刃を跳び上がって避ける。接近戦において、動きようのない空中に体を置くということは自殺行為に等しい。だがあえてそれをする。

足元を通ったばかりの刃が、一瞬の間すら置かずに跳ね上がり、首を切断しようと迫る。回避のしようがない。迫る刃の先端を、強化した左手で殴るように弾く。そして後に続く節が左腕に巻き付いて、私はそれを二の腕から先ごとデバイスで切り落とす。断面から大量の血が噴き出るのがおかまいなし。私の左腕は、右腕と違い一度も切り落とされたり食いちぎられたりしていない生身。しかし、私の身体は口ストロギアだ。なら生身もクソも関係ない。

刃節に絡め取られ、離れていった左腕が何匹もの蛇に変わり、刃に絡みつき、そして根本に向けて登り出す。蛇のような刃節を、蛇が絡みついて遡っていく。持ち主は慌ててデタラメに剣を振り回すが、蛇は離れない。その様子をただ眺めるだけでなく、デバイスを口に咥え、上空から私を見下ろしながら、魔法の発動準備をするもう一人に向けて対物ライフルを右腕で持ち、ただ銃床を肩に当ててもせず真上に向けてトリガーを引く。当たるかどうかはともかくとして、幸いにも弾は出た。反動が全て手首にかかったせいで手首はイカれたが。そして碌に狙いを付けずに放たれた弾丸はしかし威嚇程度にはなった

ようで、魔法陣の光を霧散させた。

が、これまで。正面から殺意を感じたと思つたら、既に遅く。目の前に迫る鞘を避けることも受けることもできず、防御魔法を展開しようにも間に合わず。殴られた頭が首ごと引っこ抜かれるような衝撃を受けて、身体が真横に飛び、さらにビルの壁に叩きつけられる。

気絶こそしなかったが、デバイスは口から離れ、ライフも手放してしまった。目に血が入って視界が霞んだ上に、さらにチカチカと明滅する星が舞っている。腕からの出血もそろそろマズイ域に達している……ので、バインドをかけて止血。

戦闘続行は可能だろうか。力の抜けていく身体に喝を入れて立ち上がろうとするが、バランスが悪い上に目の前がぐるぐると回って、立ち上がる前に崩れ落ちた。

しかたがないので、上体だけ起こしてビルの壁にもたれかかったところを、バインドをかけられて完全に行動不能に。

「……」

予想通りの過程に、予想通りの結末。手も足も出ずに負けてしまった悔しいとか、そういう感情は一切湧いてこない。ただ事実をありのままに受け入れる。

「あれだけ強く殴ってもまだ意識があるか」

声が出た方を見上げれば、息も切らさず余裕の表情すら見せるシグナムが居た。銃が壊れていなければ、あるいは完全な白兵戦を仕掛けてくればまだ勝機は欠片位にはあったかもしれない。しかし今の状況でもしもの話をしても仕方がない。あるのはこの状況という結果だけ。

「ハンク・オズワルド。貴様を管理局員への攻撃と質量兵器の不法所持で現行犯逮捕する。不満はあるか」

「……いや」

ノコノコと近寄ってきた彼女へ、神経の伝達ではなく己の意志だけで動かす蛇を飛びかからせるが、全て鞘で叩き落とされる。それとは別にあと二匹を出し、一匹はライフルを持たせて、撃たせる。完全に背後から放たれた弾丸を彼女は簡単に避けてみせ、外れた弾が私の後

ろのビルに当たってコンクリートの欠片をまき散らす。

もう一匹はデバイスを持たせて、こちらに持ってこさせる。もちろん見逃されること無く踏み潰されるが、右腕を蛇に変えて伸ばし、デバイスを確認。

「なっ！」

デバイスの補助を得て、身体を縛るバインドの術式に割り込んで破壊する。

これでもう動ける。血は多少足りないが、さっきの数秒で意識は完全に戻った。身体に強化をかけて、これからすぐに始まる戦闘に備える。

「くそ……意識を断っておくべきだったな」

右手に持ったデバイスを顔面に迫る鞘に沿わせ、逸らす。蛇のお陰でどこを狙っているかはわかる。そして視力の強化のお陰でどう振られるのか、軌道もわかる。なので防御に関しては先ほどのように避けられないタイミングで当てられなければなんとか防げる。来るとわかってる所にナイフを置いておけば防げるのだから、楽なものだ。そのまま二度三度と攻撃を防ぐと、相手もただ鞘で殴るだけでは無駄とわかったのか一度手を止めてきた。

「逃げられないのがわからないのか……それとも勝てないのがわからないのか。貴様はどっちだ」

「……」

敵と話す舌など持たない、というわけではない。単純にナイフを口に咥えたから喋れないのだ。間合いを置いたところを今度はこちらから詰め寄り、一瞬で再生した左腕を突き出す。驚かせはしたが、それでもしっかりと反応して拳の間合いから離れるのは、魔導師ランクは伊達ではないといったところか。そして下がったついでに一度は投げ捨てた自分のデバイスも回収している。私も口に咥えたナイフを手に持ち直して、相手と向き合う。

「参った、投降する」

デバイスを待機状態に戻し、バリアジャケットも解いて私服に戻る。やれるだけのことはやろう、という思いで戦って、やれるだけの

ことをやった。文字通り身を削つての奇襲も失敗したし、これ以上打てる手はない。魔法戦でこいつに手傷を負わせられるとも思えないし、大人しく投降する。

「……………は？」

「もう一度言うぞ、投降する。これ以上抵抗はしない」

ナイフを傍に放り投げて、両手を頭の上で組んで降参の姿勢を取る。強化魔法も解除する。

「さっきまで抵抗していただろう。信じられるか！」

「倒せる可能性があるなら抵抗するが、文字通り手も足も出ないんだ。抵抗する意味もない」

このまま続けていても、いずれこちらの体力が切れてやられるだけ。最悪殺される可能性だってある。無意味な抵抗を続けて死ぬより、大人しく投降した方が賢い。

「……………」

敵意は消えない。警戒心も消えていない。しかし先程よりは薄れている。投降の理由に納得してくれたとみていいだろう。

「バインド」

魔力で編まれた縄がまた身体を縛る。破ろうと思えば簡単に破れるそれを、今度はそのまま何もせず受け入れる。

理想ではないが、最悪でもない結果だ。文句は言わず、ここは一度捕まっておくでしょう。もしかしたら、万に一つ位の可能性で助けが来るかもしれないし。死ぬよりはマシだ。

第77話 面会

今日は全く最悪な一日だ。一日に二度も叩き伏せられて、己の身の程、あるいは限界というものを改めてよく理解させられた……おかげで頭も冷えたが。最近は大体の事が上手くいったことで少々油断し、計画もあと少しで完遂ということで焦っていたのだろう。だから今回のような馬鹿な失敗をした。そして今、こうして地上本部地下の特別房に放り込まれている。地上なのに地下というのはなかなか独特な名前だが、静かでいい。

いづどんなときでも冷静さを失ってはいけない。基本中の基本ができてないのはかなり問題だろう。死ななかつたのは運がいいか。「陸の英雄さんも、落ちたもんだな。戦闘機人と手を組んで管理局にテロをしかけるなんてよ」

自分の馬鹿さ加減に何度目かわからないため息を吐くと、檻の外に居る看守から話しかけられた。

「私は最初からこうだ。英雄なんかじゃない」

看守の問に対してそう答える。そもそも私が英雄だと勝手に言い始めたのはマスコミだ。元々英雄とは真逆の中身なのに、外見だけを見て英雄だなんだと祭り上げられたのを勝手に信じこんで落ちたと言われても困る。

「んなこと知ってるさ。ただの皮肉だよ」

「そうか。それより看守、暇だ。本を持ってきてくれ」

「暇か。そうか。悪いが絶対に目を話すなつて命令されてるんだ。離れるわけにはいかんな」

「この身体で何かできると思うか？」

鉄製の手枷足枷、魔力を吸収する魔導師用拘束具、さらに吸収した魔力を使つて作動するロストログア封印術式。全四種の拘束具を看守に見せつける。ここまでされて何ができるといふのか。やろうとすればできないこともないが、ここは凶悪犯を一時的に抑えこんでおくために地上本部に作られた特別製の地下房。看守一人始末したとしても、逃げられないのだし無駄な事はしない。そもそもこの看守を

突破するのもムリだろう。いつでも銃を撃てるように肩にストックをつけてトリガーに指をかけっぱなしだし、魔法を封じられている状態で射線を回避するような曲芸じみたことはできない。

「あんたならなんとかしそうだな」

「何度も言うが過大評価だ……それより、話にも飽きた。娯楽ももらえないなら寝ていいか」

ろくに会話らしい会話もしていないが、飽きた。目的もあと待たず待たず。それまで暇な時間を過ごす位なら寝たほうが有意義だろう。

「一応囚人なのに態度でかいなあ……うん。ま、ちよつと待て。本は無いが人は来る」

「人？」

一体誰が。と、思ったが私に用がある人間なんて数えるくらいしか居ない。機動六課派か、中将派か。はたまた口封じのために猟犬がやってくるか。いや口封じのためならもうとつとつに殺されてるか。ともかくその客が退屈を紛らわせてくれることを願う。

「俺の予想じゃ、そろそろ来る頃だ」

看守の後ろの階段から足音がする。音は軽い、女性の足音だろう。看守が椅子から立ち上がり、階段を降りてくる『誰か』に向けて敬礼をする。

「地上本部地下特別房にようこそ。高町一尉。私とイスと犯罪者くらいしかいない部屋ですがどうぞごゆっくり」

「……出迎えありがとう」

聞こえてくる声は、実に起伏がなく、風のない池の水面のように平坦。人前だから感情を理性の殻で無理やり抑えこんでいるのだろう。しかし心の中は嵐のように荒れ狂っているに違いない。軽くつつけば簡単に殻を破って、激情が顔を見せるだろう。

危険な爆弾が、看守の横を通り檻の中であぐらをかいている私の前に出てくる。蛇が封印されているせいで色は見えない。しかし内側で荒れ狂う殺意が一瞬だけ顔に出てきた。彼女がどれだけ私を憎んでいるか。百の言葉で伝えられるよりも遙かによくわかる。

「半日ぶりだね」

「そうだな。それで、何の用だ」

「聞きたいことがあるんだけど」

「答えられる範囲なら答える」

このセリフは、今までに何度か言った気がする。まあいいか。

「大丈夫、聞きたいことは三つだけだから。まず一つ、ヴィヴィオはどこ。無事なの」

三つだけとは意外と少ない。てつきりもつと多くの質問をされると思ってたのに。

「スカリエツティのアジト。捕まえるとき生け捕りと命令されたから、おそらく無事だろう」

「そう……じゃあ次。フェイトちゃんはもうしてるの？ 前に君の元部下が落としたって聞いたけど、生きてるの？」

「生きてる。本人の意に反して戦わされてはいるがな」

「後で詳しく話を聞かせてもらうよ……じゃあ最後。ヴィーたちちゃんを撃つたのは、君？」

本当のことを言ったら怒りそうな気もするが、隠してもいざれば。なら正直に話しておくべきか。

「私だ」

「弁解は」

殺意が膨れ上がる。看守も異常に気付いたのか銃を持ち上げて構えようとしている。ここで煽るような事を言ったら、看守が見ている前でも関係なく殺されるかもしれない。普通に対応しよう。普通に。

「撃ちたくて撃つたわけじゃない。妹を人質に取られて反抗できなかった」

「本当？」

「本当だ」

嘘は言っていない。

「ヴィヴィオを攫ったのも、自分からやったことじゃない。そういうこと」

「もちろん」

「だから許せて？」

「いやいやとんでもない。私も同じ立場なら許せるはずがないからな」

「ッ……じゃあなんであんなことをしたの！ どうしてあんなことができるの！」

苛立ちが限界に達したのだろう。殻を破って激情が弾けて出た。手も待機状態のデバイスに触れているし、ここで煽ったら確実に砲撃が飛んでくるだろう。煽らない程度に、言葉を選んで説明しようか。どう説明するのがいいだろうか。そもそも『あんなこと』とは何を指しているのか。元仲間を傷つけたことか、それとも彼女の『大事な物』を奪ったからか。それともどちらもか。

「そうだな……何て説明すればわかりやすいか」

少しだけ腕を組んで考える。パツと浮かんでくるのはどうも相手の怒りを煽るような説明。こんな説明の仕方をすれば私が死んでしまう。自殺したいわけでもないのに良い説明の方法が浮かばないのは、知らずの内にスカリエツテイに影響されていたからか。

「私を殺せばヴィヴィオが返ってくる。殺さなければヴィヴィオが殺されるとしよう。その時お前はどうか」

浮かんだいくつもの煽り文句から、比較的相手が怒りそうにない。あるいは怒る気を削ぐ物を選んで自分の置かれていた状況を伝える。……」

実際に、彼女も私と同じように『大事なもの』を奪われている。そこから状況を広げて、私の立場を想像するのは簡単だろう。そして私と同じ答えを出すはずだ。だが納得はしないはず。

「この話はまた後。今度は、フェイトちゃんのことについて話して」
だからなのか、答えは言わず後回しにして話を進めようとしている。

「いいとも。何から話せばいい」

「フェイトちゃんの意志に反して戦わされてるっていうのを、詳しく」「デバイスにウイルスを仕込んで、身体とリンカーコアを外から操作してる」

「……つくづく外道だね。看守がいなかったら君、どうなったたかわからないよ」

「怖い話だ」

彼女が一度死んで、脳だけを新しい身体に移植してあると教えたら一体どうなったたことやら。いや、それは私のせいじゃないし怒られることもないか？ まあ、ヴィータの事と同じようにどうせ後でバレルのだし教えてもいいだろう。殺されるのならその前に看守がどうにかしてくれる。そのための看守だろうし。

「もう一つ。最初の質問の答えで、あいつが生きていたといったが。実は一回死んでる」

「どういうこと」

「ミサイルの爆発で飛散した破片を全身に浴びて、肉体が生命維持不可能かつ修復不可能なレベルまで損傷した。それで一度心肺停止状態になった。脳を摘出して新しい身体に移植した。容姿は本人の幼少期と変わらないから、見たらわかるはずだ」

「……………」

数秒間表情が固まって、まばたきもしなくなったと思ったら、同じ表情を顔に貼り付けたままデバイスに手を伸ばした。それを見かねた看守が声をかける。

「高町一尉、お気持ちちは察します。なので殴る蹴る位なら見なかったことにもできます。しかし魔法の使用はさすがに見過ごせません。デバイスから手を離してください。そいつには聞かなきゃならんことが山ほどあるんです」

「わかったよ……ところで、なんでそれを私に言ったの。怒らせたくて言ったのかな」

「氣遣いだ。どうせこの後出撃するんだろう？ 友人を気付かない内に殺してしまわないようにな」

「……………どうもありがとう」

「ごっちこそ。いい暇つぶしになった」

わざわざ睨みながら言わなくても、全く感謝していないのはよく分かる。

「皮肉だよ！ ……それじゃ今日は帰るね。もう疲れた」

「疲れさせて悪いな。また来てくれ、話し相手はいつでも歓迎だ」

「私はできれば二度と話したくないよ。じゃあ」

肩を落として踵を返し、来た道に戻る高町を見送る。これでまた、しばらく退屈になってしまう。

離別

果たして、戦い続けて何時間が経っただろうか。空には2つの月が浮かび、大地を薄明かりで照らす。照らされた大地からは、夥しい数の黒煙が立ち上っている。ガジェットや私達に破壊された管理局の兵器と、管理局に破壊されたガジェットの上げる煙。一体この戦いでどれほどの人間が傷つき、あるいは死んだのか。それはわからないが……ひとまずこのエリアに私以外の動く物は何一つとして存在しなくなった。それは事実だ。

「クアットロ」

『何でしょうか、トーレ姉様』

高速での移動を止め、ゆっくりと。空を散歩するように飛びながら連絡を取る。

「エリア制圧完了。敵反応はなくなったから、ガジェットの追加を頼む。私は一度休憩させてもらう」

『わかりました。すぐに追加を向かわせてエリアの維持をさせますわ。どうぞゆっくり休んでください』

「ああ……さすがに疲れた」

本当に。こんなに長時間、連続して戦闘を行うのは初めてだ。いくら機械が身体に入っけていてもさすがに疲れた。一度アジトに戻ってシ食事をとって、軽くメンテナンスをしてもらって。それからまた出撃しよう。休んでいる暇はない。

「しかしハンクは、どうしてるか……」

あいつのことだから、痛みを感じないのいいことにまた無茶をしているんじゃないだろうか。殺しても死なない奴だから死んではない、それでもまた重傷くらいは負ってそうだ。もしケガをして戻っていたら、また怒ってやろう。無茶をするなど言っただろう、と。

「ふふ……ツツ?!?!」

そう笑っていたら、突然腹に強烈な熱と衝撃を感じ、身体のコントロールを失ってそのまま地面に真っ逆さまへ落ちていく。

状況がわからない。一体何がどうなっているんだろう、そう思っ
て落ちながら腹を触……れなかった。腹が、なかった。腹から下が消え
て、肉と機械とハラワタが、覗いていた。

「あつ……？」

脳が状況を理解しきれていない。目から入ってくる情報を処理す
ることを拒否している。その後遅れて聞こえてきた銃声で、何が起
こったのかをようやく理解した。遠距離からの狙撃。ハンクの得意
とする戦法……ハンクが元いた場所は管理局……ならば、管理局に同
じ方法が使える人間が居てもなんら不思議じゃない、か。

『お姉さま何があつたんですか!? 姉様!!』

身体が地面に打ち付けられ、衝撃で視界が黒く染まる。全身が今ま
で感じたことのない痛みに襲われている。傷ついた器官から遡って
きた血が気管に入り、新たな苦痛を生み出す。しかしそれを吐き出せ
る空気は肺に残っていない。クアットロの心配する声に返事をする
こともできない。

最後まで油断をしてはいけない。基本を怠った結果がこれだ。こ
の有り様じゃ人のことを言う死角はないな。

「ドクター……皆、ハンク………すまない」

意識が急速に薄れていく。身体が深い水の底へと落ちてゆく。

「……？」

毛布に包まって眠っていると、誰かに呼ばれたような気がして目が
覚めた。目を擦って周りを見るが、看守以外に誰もいない。その看守
もこちらは見ておらず、私を呼んだようには見えない。だがこの場で
誰かが私の名前を呼ぶとしたら、看守以外に誰もいない。

「看守、さつき私の名前を呼ばなかったか」

「いや、呼んでないぞ。夢の中で呼ばれたのを勘違いしたんじゃないか?」

「そうか……」

なら、気のせいだったのか。それにしてもやけにハッキリと聞こえたよな。ならば幻聴だろうか。それとも念話だろうか。しかしそれを確かめる術はない。念話だとすればナンバーズの内の誰かだろうが、そもそも囚われている私に伝えなければならぬ事はなにもないはずだが。

『ハンク……すまない』

今度ははつきりと聞こえた。聞き慣れた仲間……と言っているのだろうか……の声。戦場で何度も聞いた、瀕死の兵士が上げる弱々しく、未練や恨み、後悔の念をこの世に残して散っていく最期の声。それを蛇が拾ったのだろう。封印で目が使えなくなったので感情は拾えないと思っていたが、強い思いなら拾ってしまえるようだ。

「……」

できれば傷ついてほしくないと思っていたが、どうやら彼女は私の手の届かないところで散ってしまったようだ。無念、といえばそうだろう。失いたくないものをまた失ってしまったのだし。だが意外なことに悲しみや怒りは湧いてこない。目の前で失ったわけではないからやや現実味に欠けるからだろう。しかし蛇が拾ったあの声は死ぬ寸前の兵士のそれ。そして声は彼女が死んだか、あるいは死ぬ寸前の重傷を負ったのは間違いない。

トーレには何度か助けてもらった恩がある。しかしその恩を返してやることはできないらしい。まあ、進んで返そうとも思っていないかったが。それでも、少し悪いと思う。

「看守、こっから出してもらおうってわけにはいかないよな」

ならせめて、弔いには参加してやるべきだろう。

「ん? 当たり前だろ。あんたを逃したら俺のクビがっ!」

看守の顔がこちらを向いたその瞬間。両腕を蛇にして伸ばして看守の首と腕に巻きつかせ、抵抗されるよりも早く。声を出させず、銃も撃たせずにその首を締めあげて、気絶させる。

「すまんな」

一言詫びてからその身体を引きずり寄せ。腰についた鍵を奪い取って檻を開く。枷の鍵は持っていなかったので、小さな蛇を潜り込ませてこじ開け……看守から服を奪い取り、私はそれに着替えて。看守には私の着ていた服を着せる。そして枷をはめ、身代わりに仕立て上げ。ポケットに入っていたハンカチを口の中に押し込んで、布団をかぶせて。

今度は鏡を見て、自分の表情も薄ら笑いに固定して。声の調子を整えれば……

「あー、あー……よし……全く、封印するなら完全に封印してくれないと困る」

これで完璧。もし封印が完全だったなら、ロストログアと一体化した私の意志も封印されていたはず。なのに私自身の意志があるということは、それは封印が不完全だったということだ。おそらくはかけた魔導師の術式が不完全だったか、そもそも生体という常に流動し続ける存在を完全に封印するのは無理があつたのか。そのせいで死に際の女の声を聞いてしまつて、らしくもない事をしなければならぬ。全く面倒極まる。

そして堂々と、階段から廊下へ。廊下から各棟をつなぐ通路を歩き、そのまま玄関ホールへ。服装のおかげですれ違つても誰にも怪しまれない。そしてそのまま外へ。主戦力が出払っているのと、戦争で普段とは異なる空気のおかげで、いつもは嚴重なはずの警備も全くザルだ……

「おいお前！」

が、さすがにこの夜中に外へ出ようとすれば当然警備員から声をかけられる。普通この時間帯に外へ出る局員はあまり居ないから仕方ない。そこで、懐に入っていたタバコケースを取り出し、一本差し出す。もしこの警備員が喫煙者ならばよし。そうでなく、見逃してもらえないならここで気絶させてそのまま逃げる。

「夜勤の合間にちよつとタバコを吸いに出るだけさ。あんたも一本どうだ？」

「今は勤務中だぞ」

「いいじゃねえか。どうせバレねえよ」

さあどうだ。

「……仕方ねえな」

手を出してきたところで、スツとタバコを引いて、肩をすくめて小馬鹿にするような声を出す。

「おうおう、警備員ともあろう者がそんな不真面目でいいのかい？」

「誘ったのはそっちだろ」

手からタバコを奪い取られる。これでいい、思い通りだ。

「ははっ、それもそうだ。優しい警備員さんで助かったぜ」

「褒めるなよ」

陽気な声を作りながら会話をし、その警備員と外に出て、喫煙所へ。喫煙所には監視カメラが設置されているが、その死角となるカメラの真下に立ち、さっそくタバコを啜えて火を付けながら息を一つ吸い込む。煙が喉を通り肺に入ってくる。なれない異物が肺に入ること咳き込みそうになるが、耐えて煙を吐き出す。

警備員はライターを持ってないのか、私の隣までやってきてたばこを啜え、火をねだる。

「んじゃ火いくれ」

「ほらよ」

ポケットにしまわずにおいたライターを取り出して、彼のタバコに火をつける。そして紫煙を吸い込んだ瞬間、鳩尾へ左手での貫手を食らわせる。刺さった感じではよく鍛えられている腹筋だが、顎から力が抜けている状態では内蔵を守る防壁の役割を果たすことはできない。啜えられているタバコが、口が大きく開かれたことで地面に落下を始める。タバコが地面に落ちるよりも早く、顎に右フックを当てて完全に意識を刈り取る。

「本当に、優しい人で助かった」

落ちたタバコを拾って火を消し。自分の銜えていたタバコも火を消して、タバコ専用のゴミ箱へ放り込む。これで看守のところへ誰かが行くか、この警備員が起きるまでの時間は稼げた。顔の筋肉を揉み

解して、表情を戻す。ガラスに映る自分の顔はいつもどおりに、ヒトの形の肉に皮を貼り付けただけという無愛想ないつもの『私』だ。
喫煙所から出て、夜のクラナガンへと駆け出す。

第79話 逃走

夜の街。ネオンが眩しく光るビルの中をひたすら跳ね回る。ビルの上から他のビルへと跳び移り、ひたすらそれを繰り返す。

て市街を抜けようとする。しかし肉体強化をしていないためやはり速度が出ず、なかなか市街を抜けられない。が、このペー

スなら管理局員に追い回されなければ夜明けまでにアジトに戻れるはず。

問題は気絶させた2人がいつまで寝ていてくれるか。起きるまでにどれだけの距離を稼げるかだ。市街地を抜けるまでに起きられたら追手が差し向けられるし検問も張られる。移動を始めてからそれなりに時間が経っているし、そろそろ起きてもおかしくはない。

「……」

どこかから溢れ出てきた膨大な殺意に思わず足を止める。殺意の主は大体察しがつくが、予想よりもほんの少しだけ早い。気絶させた奴が起きたか、誰かに見つかってその報告が機動六課の連中の耳に入ったのだろう。緊急時だけあって情報の伝達が早い。さすがの中将もプライドは捨てたか。

となれば、もう魔力を抑える必要もない。どうせバレるのは時間の問題。ならば少しでも距離と時間を稼ぐのが得策か。

「ん……」

足を止めたまま自身のリンカーコアとロストログアを縛る魔法の鎖を、魔力放出で強引に引きちぎる。身体が少し軽くなったところで、蛇を何匹か撒いておく。ロストログア反応を撒き散らしておけば多少の時間稼ぎに使えるかもしれないからだ。

あとはいつも通りに肉体強化。フェンスを飛び越え、ビルを一つ二つ飛ばして飛び越えていく。多少明かりがついていようが、夜中に空を見上げるような奴はそういない。居たとしても少数。さらに夜闇にまぎれて跳ぶ姿を見つけられるのはさらに限られる。道路を走るよりかはスピードが落ちるが、見つかるよりはいいだろう。これなら追いつかれる前に街を出られる……わけがないか。殺意の移動

は私が移動するよりも早い。さらにペースを上げる。しかし、まだ殺意の移動のほうが早い。五分としない内に追いつかれるだろう。とりあえず、走れる間は走っておく。

そして、時間が経ち。まき散らしたデコイに引つかかり見事に殺意は分散してくれた。ようやく私に追い付いてきた殺意の主の一人が、今まさに上空に居る。銃もなく、デバイスも無いとなれば、このまま殺されるのを待つだけ。ならどうするか。

「……仕方ないよな」

不本意ではあるが、いつも通りに汚い手を使うことにする。ビルから跳ねる軌道を少しずらして道路に着地し、急に上から人が降ってきたことに驚き固まっている適当な通行人を一発殴って気絶させ。そのまま脇に抱えてまた走る。これで、上空からの攻撃の可能性は消えた。公的な機関故に、取れない行動というやつだ。人質ごと標的を殺害することはできない。特に機動六課の連中は人質ごと吹き飛ばすという選択肢そのものが頭に浮かばないだろう。

これで罪がまた一つ増えたが、いまさら気にすることもない。テロリズムの幫助に管理局員の暴行、拉致、殺傷。管理局施設の破壊。拘留所からの脱走。これだけやっていればもう最高刑である死刑は決まったようなもの。それに民間人の暴行、拉致が加わってもこれ以上刑が重くなることはない。なんとと言っても死刑以上の刑は存在しないのだし。

人質を抱えたまま走っていると、上を飛んでいる殺意が急に降下してきた。

「動くなあー」

少し先に隕石のように降ってきたのは、八神シグナム。こいつには一体何度命を狙われたかわからない。戦つても勝ち目はまず無いので、すぐに人質の首を軽く切ってから思い切り投げつける。自動車よりも早い速度で投げられて、地面にぶつかれば人は死ぬ。動脈を傷つけたから、放置してもあの人質は死ぬ。受け止めて処置しなければあの名も知らない人は死ぬ。だがそれは大きな隙を晒し、私を見逃すこ

とと同義である。その状況で彼女は民間人の命を取るか、復讐を選ぶか。

まあ、おそらくは前者。

「ッー」

彼女は、投げられた人を見事に受け止め、他人の命をとった。

だから、受け止めた彼女の横を通りぬける際にささやく。

「すぐに止血すれば助かる。市民を守るが管理局員だろう、勤めを果たせ」

今後障害となることは明らかだけに、可能ならここで殺しておくたいところだが。しかし俺にはこいつを殺せるだけの實力も無ければ武器もない。そんな相手に見逃してもらえないのなら無理に戦う必要もない。そのまま一気にシグナムの傍から走り去る。

「関係のない人間を傷つけて……貴様には誇りがいいのか！」

駆け抜けた後ろから罵声が飛んでくる。その質問に、立ち止まって答えることはしてやれないので心の中で答えてやる。

誇りなんて邪魔なだけだから、とつくの昔に捨ててきた。

第80話 帰還

無事にクラナガンを抜け、一度郊外に身を隠した。遠くにチラチラと光る炎を目標にしてしばらく走って、戦場のすぐ手前まで着いた方がいいが。体がそろそろ限界に近い。少しずつペースを落として、何歩か走ってからようやくやく止まる。

「……ふう」

立ち止まり、一つ大きく息を吐き、強化に使っていた魔力を身体から抜く。

考えてもみれば、一時の感情に任せて脱走したのは早計だった。今更私一人が戻ったところで、トーレが死んだ穴を埋められるわけでもないのだし、むしろ碌な武器が無い以上足を引つ張るだけ。トーレの吊いはそもそも、エリーの所に戻るついで。そう、ついでなのだ。だから急いで戻る必要もなかった。

「……」

まあ、ここまで来てしまったものは仕方がない。このまま森の中に入ればそこは即戦場。一旦中へと入れれば体を休める暇などありはない。身体はここに来るまでに酷使しすぎてボロボロだが、少し休めばすぐに再生する。なんとも都合の良い身体だが、今までの無茶のツケを払う時間は目の前まで迫っている……多分。

何故かって、戦場に入つてすら居ないのにすでに吐き気と頭痛がするし。吐き気はともかく頭痛がするのは、蛇の侵食が進んでるからと見て間違いないだろう。痛みなんて久しく感じたことがなかったのに。

だが、まあ。痛みがあっても無視はできる。この頭の中に響くような感覚も、余計な荷物が一つ増えた程度の認識でいい。身体の何処かに欠損があるわけじゃないから、動くことに支障はない。

「……よし」

意を決して、戦場である森の中へと足を踏み入れる。それと同時に多くの断末魔が頭の中に木霊し始める。予想よりも、ずっと激しい。

五月蠅い。吐き気がする。頭が痛い。

それを気力で抑えこみ、さらに一步。全身に怨嗟の念がまとわりつく。身体が重い。断末魔が頭に響く。死者の思いに足を引かれる。目を閉じてても瞼の裏に死者の手が伸びる。

だが、いくら積み重なっても所詮は死人の念。質量を持たないそれに足を引かれることなどありえない。おまけにその念の本身は、生者への嫉妬などという下らないものだ。そんな思いに私の渴望が引かれて動きを鈍らせるなどありえない。

瞼の裏に伸びてくる死人の手を弾き飛ばし、目を閉じて索敵を開始。近くや遠くから刃のような鋭い殺意がいくつも感じ取れるが、私に気付いている勘のいい奴はほんのわずか。そして、殺意の他に一つ色の違う念を見つける。こちらに向けられる殺意には蛇を向かわせ、私はたった一つ、森の奥に見える色の違う死者の念に向けて足を進める。

草を分け、木を避けて、森の奥へと進んでいく。何度か管理局の連中と鉢合わせしそうになるが、気付かれる前に足を止め、身を潜めて通りすぎてからまた動く。私に気付いていた連中は蛇が絞め落としてくれたようなので、もうこの森の中に私のことに気付いている人間は居ない。誰にもばれないように、さらに奥へと進んでいく。

そして、また何事も無く目的地に到着した。

月明かりの中に、胴体を二つに分断され、血と臓物と機械の破片をまき散らした美女が一人。上から差し込む月明かりに照らされながら、眠っていた。というよりは、死んでいたが正しい。

状況とこいつの能力から考えて、高速機動を止めた瞬間を補足されて落とされたか。人には死ぬなど言っておきながら、ずいぶんと自分勝手なやつだ。

「……はあ。馬鹿野郎」

深い溜息と共に、思いを吐き出す。怒りは湧いてくるが、怒鳴るほどじゃない。悲しいが、泣くほどじゃない。

ぼんやりと、月明かりに照らされてた死体から輪郭の定まらない靄が立ち上る。

『すまん。ハンク』

その声が聞こえた瞬間に手をのばす。だがそこには何もなく、伸ばした腕は虚しく空を切った。

これはきつと幻聴だ。極度の疲労が引き起こした幻聴。蛇の創りだした死者の念。いくらトーレの声に似ていても……死人がしゃべることはない。

……そう、思い込めれば楽なのに。

「……」

目を閉じる。こんな時に涙の一つでも流せれば、弔いにもなるんだろうが。こんな悲劇とも呼べない喜劇じゃ悲しくても泣けはしない。昔泣きすぎたから、涙はもう枯れてるんだろう。

「薄情者ですまん」

二つに別れた死体を、蛇に飲み込ませる。泣けないのならせめて、この死体を親の所へ持って帰ってやるべきだろう。持って帰って、きちんとした墓を作って埋葬してやれと言え、そこまでやって初めて弔いになる。

遺体を蛇に丸呑みにさせたら、その蛇を連れて森の中を進む。幸い隠しハッチの周りにまで敵は来ておらず、暗証番号も変えられていなかったために、あつさりとスカリエッティのアジトの中へ戻れた。暗い通路に電灯が灯り、こちらに銃口とミサイルを向けて待ち構える多数のガジェットが照らされた。

「……」

撃たれないので、そのままガジェットの前を通ってエレベーターホールに繋がるドアを開こうとする。すると、肩に誰かが触れた。振り返ると、そこには見慣れた水色の髪が。顔は、もうぼんやりとしていて見えない。

いや、まだ手は伸ばされていない。そうしようという考えを捨て、それを触られたと錯覚したのか。

「……おかえりなさい」

「(こう言っただけなのかどうかはわからんが……ただいま。トーレの事は、すまない)」

「ハンクは関係ないよ。君が居ても、居なくても。きつと……」

重い声。怒りと、悲しみと、憎しみと。多くの色が混ざり合って、彼女の姿を隠している。だから、彼女が今どんな顔をしているのか、わからない。泣いているのか、怒っているのか、それとも笑っているのか。

「ッ……！」

家族を殺された時の気持は、私もよくわかる。それをぶつけたいが、ぶつけるべき相手が私ではない事を理解しているから、感情の行き場を失っている。私が傍にいるせいで、その気持ちは余計に増幅されている。このままだと遅かれ早かれ壊れてしまう。そして、私と同類になってしまう。世話になった相手が『そう』なってしまうのは、私は望まないし、彼女も望まないだろう。憎しみだけに囚われて生きるのは人の生き方じゃない。私が言うんだから間違いない。

こういう時に落ち着かせてやる方法は、一つしか教えられてない。「お前の気持ちは俺にもわかる。俺もお前と同じように、家族を殺された。だから、そういう時にどうすればいいかも知ってる」

親が子をあやすように、背中に手を回して、優しく抱きしめてやる。そうすれば多少は落ち着く。一度落ち着けば、それも蛇が増幅してくれる。蛇は悪いことだけじゃない、こういう使い方もある。

「……そんな、困るよ。離してよ……」

「我慢はするな。泣きたいなら泣けばいい。怒りたいなら怒ればいい」

私は頼る相手が居なかったから、仇を憎むことでしか心を保てなかった。唯一残った家族もあのザマ。心の拠り所にはならず、私に義務を負わせるだけの重荷でしかない。だが、こいつは違う。一人減ってしまったが、他に十人もの『マトモ』な姉妹と、少し頭のネジが外れているが、一人の親が居る。それでも、どうしても私と同じ道に走るのなら、あえて止めることはしない。

「あたしは……我慢なんか」

「強がらなくてもいい。お前はまだ子供なんだから、少しは年上を頼れ」

だが、勧めもしない。他にもっといい道があるのに、わざわざ茨の道を進む必要はない。そう私は思う。

「……い。憎い……あたしは、管理局の奴らが憎いよ!! あたし達もたくさん殺してきたけど、そんなのは知ったことじゃない! 皆殺しにしてやりたい!!」

心からの声。セインの本心。聞き出したかった言葉。我慢することをやめて暴れだしたセインを腕力で無理やり抑えこむ。戦闘機人を抑えこむのは文字通り骨が折れるが、それでも強化魔法を使って、蛇の再生能力も合わせればなんとか。

「ああ、俺もそうだった」

「ねえハンク、復讐って苦しいの!？」

「苦しい。あんまりに苦しくて、何度も死にたいと思った」

「殺したら、スッキリするの!？」 全部解決するの!!」

「復讐で得られるのは一時的な満足だけだ。何かの解決にはならない」

「復讐、終わったらどうなるの……」

「何もない。人殺しの罪と、全部終わったって虚無感だけが残る」

吐き出すものを吐き出したら、大分落ち着いてくれたようで。なんとか暴れるのはやめてくれた。

「……復讐、した方がいい?」

「自分で決めろ」

「ハンクは、どうしてほしい?」

「始めるのに他人の助言を求めるくらいなら、やめておけ」

復讐の道を選んだ私に彼女を止める権利はない。だから助言にとどめておく。

「……」

それに、さつき話していた時は忘れていたが。もしセインが復讐を始めるにしてもまずは目の前の、試練、というよりはもはや戦争になっっているが。を突破しなければならぬ。これを終わらせなければ復讐も何もないだろう。

そこまで言って、しばらく抱き続けてやる。五分か、十分か。する

とようやく泣き止んでくれた。

「落ち着いたか」

「うん……ありがと。そろそろ離してくれるかな、恥ずかしい」

言われたとおりに離してやる。顔は少し赤いが、さつきまで纏わり付いていた靄は綺麗に晴れた。

「なら、スカリエツティの所へ連れて行ってくれ。散々頭を殴られたせいで中の構造が思い出せない」

武力という面ではもう力になれないが、それ以外のことなら手伝えることもあるだろう。私には私の戦いがある。

「……わかった。ところで、あの蛇は？ やけに膨れてるけど」

「知らない方がいい。少なくとも今のお前は」

もし中身を知ったら、折角落ち着かせたのが全部台無しになる。見せるのは、何があつても動じないであろうスカリエツティと、ウーノだけにした方がいい。ドゥーエは見せる見せない以前にここには居ないし。とにかく、その他の連中には見せたらどうという反応が返ってくるか予想がつかないから、見せずに持っていく。

「ひよつとして……嫌なもの？」

「さつき落ち着かせたのが全部台無しになる位には」

「……じゃあいいや。こっちだよ。ついて来て」

さて。私が捕まっている間に、状況はどの位悪くなってるのやら。

第81話

「やあ、お帰りなさい」

スカリエッツィの研究室へ入ると、いつもと同じように背を向けたまま挨拶をされた。

「トーレが死んだ」

「知ってるよ」

……それがどうしたと言わんばかりに、平然と返事をされる。声だけでなく、心もまるで風の吹いていない湖面のように穏やかだ。血は繋がっていないが、一応は自分の娘だろうになんとも思わないのだろうか。薄情なやつだ。

そうは思っても口には出さず、蛇を指さして一つだけ質問をする。「一応死体は持って帰ったが、どうする」

トーレ他ナンバーズの活躍のおかげで敵はこのアジトの近辺まで到達できていない。押されつつあるが、埋葬する時間位はあるだろう。

「ご苦労様。その台の上に置いておいてくれ」
「わかった」

蛇を手術台の上に乗せて、消す。すると蛇の腹の中に溜まっていた血と臓物と肉、それと機械が台の上にぶちまけられ、むせるような血の匂いが部屋に充満する。その匂いを嗅いでも、スカリエッツィは黙々と作業を続行する。何をしているのかは知らないが、娘が死んだことすらどうでも良くなるほど集中できる大事なことなのだろう。

「スカリエッツィ。私はこれから何をすればいい」

トーレの死体を回収しようと脱走してきたはいいが、その目的一つ達成したら、あとはもう何も思い浮かばない。もう十分すぎるほど働いたとはわかっていて。だが、それでも。何かしなければとは思う。その何かが思い浮かばない。

「何もしなくていい。君はもう十分働いた。家族の傍に居てあげなさい」

「……わかった」

考えても見れば、射撃と体の頑丈さ以外に取り柄のない自分が武器を失ってできることなど何も無い。戦場に出たところでそのまま死ぬだけだろう。もう非力を通り越して無力だ、惨めすぎて笑えるものなら笑っていただろう。

入ってきた扉からそのまま外に出る前に、一つだけ聞いておこう。望みは薄いが。

「なあ、スカリエツティ。トーレを生きかえらせるのは……」

「無理だよ。死んでから時間が経ちすぎてる」

「そうか」

フェイトを生きかえらせることができたから、彼女ももしかしたら……と思っただが。やはり無理だったらしい。少しだけ期待していただけに、万に一つの可能性も無いと断言されては気も落ち込む。

「わかっているとは思いますが、言わせてもらおうよ。トーレが死んだのは誰のせいでもない、彼女本人が油断したからだ」

「……わかってる」

戦場で死は誰にでも平等に訪れる。必然に、あるいは理不尽に。実力不足、無謀な指揮、敵の策略、油断などによって。理由は様々だが、今回に限っては彼女本人の油断だろう。目に見えないほどの早さで飛び回っていれば狙撃など当たるはずがなかっただろう。油断して動きを止めたのが悪い。

そうはわかっているとしても、納得がいかないのは。きつと彼女のことを気に入っていたからだろう。

「少し休む。何か仕事ができたら呼んでくれ。出来るだけのことだよ」

今度こそ部屋を出て行く。いくら後悔しても、死人は戻ってこない。辛い過去に引きずられる位なら、目先の幸福な現実を見よう。もう少しで家族が、私の愛しいエリーが戻ってくるのだ。これほど喜ばしい事が他にあるだろうか？ いやあるはずがない。他人が一人死んだ位の事は、きつとすぐに忘れられるだろう。

「……もうすぐ。もうすぐだ、エリー」

部屋の外で待つていた名無しを見て、呟く。そうだ、こいつも犠牲

になる……他にももつと、私の望みのために巻き添えで死んでいった人間はいる。幾つもの死体の上にある幸福。それでいいじゃないか、トーレだって数ある死体の一つに過ぎない。

「……」主人様」

愛しい妹の声で、そう呼ばれる。背筋が寒くなる。大事な人の顔なのに、大事な人の声なのに。その中身は全く別のもの。その違和感に、吐き気がする。

「うっ……！」

口を抑えて、えずく。

「大丈夫、ですか？」

「その声で喋るな。その顔で私を見るな」

こいつはただの器だ。外側だけがあればそれでいい。中身は知らない。中身があるから、傷ついたような顔をする。その顔で見つめられると、妹に責められているようで、悲しくなる。中身は別物なのに。「言っただろう、私を見るな」

「申し訳、ありません」

「喋るな。黙って後ろを向いて、自分の部屋に戻れ」

「……」

「よし」

言われたことには従う。まるでロボットのよう。それでいい、そうであれば、まだ拒否反応は無い……部屋に戻ろう。そうすれば、少しは休める。そう思っていたところで、何か強烈な感情をぶつけられる。疲労のせいで反応が遅れ、そのまま誰かに殴られた。

「オズワルド！」

なかなか、痛い。痛覚が戻っているおかげで、少しだけ怯む。

そして、そのまま持ち上げられて壁に押し付けられる。下手人を見ると、それは見覚えのある小さな少女。元、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。小さな体で私を持ち上げられるのは、移植された素体のスペックか。

「見つけたよ、この人でなし！」

「……ああ、それでどうした」

持ち上げられたまま、見下ろしたまま話す。人でなしだからといって、なんだと言うのか。すでに体は人の物じゃない。心も常人のそれとは違う。それは自覚している。

「また私と同じ被害者を出すつもり！」

「そういう話なら、するつもりはない。それよりも、なぜお前がここにいる。外で戦ってたはずじゃないのか？」

「質問に答えて」

「答えるつもりは無い。それよりも、命令だ。離せ」

そうと言った途端に、セーフティが発動して首にかけられていた手が緩められ、地面に降りることができた。掴み上げられたせいで、服に皺がついてしまった。気にするほどのものじゃないが、

「質問には答えなくていい。魔力が切れたんだろう、休んで回復したら再出撃しろ」

「……ッ！」

もし魔力が残っていたら、いちいち殴りかかった後に締め上げたりせず、肉体強化をかけて一発で殴り殺していただろう。そのほうが面倒が少ない。

「自分一人の望みのために、どれだけの人を不幸にするつもり!？」

「邪魔をしなければ誰も不幸にならない」

「その子はどうなの!？」

後ろを向いて、こちらを見ず。黙ったままの名無しを指さすフェイト。

「器になるためだけに生まれてきたんだ。役割を果たせて本望だろう」

「そんなのは、ひどすぎるよ!？」

「……お前は家族が居るからそうと言えるんだ」

「なら、作ればよかつたじゃない! あなたはそれさえ拒んだ!？」

……それを言われると、言い返せない。実際に、一度は提案されたのだ。打算塗れとはいえ、家族にならないかと言われて手を差し伸べられた。それを拒んだのは自分自身。

言葉に詰まり、その代わりに感情だけが昂っていく。

「何か言っよ！」

「そいつに聞けばいい！ 私の選択が、そいつにとってどうかなのか！ 答えろ名無し！」

もしも不満が無いなら、法や人道的観点以外には何も問題は無いはずだ。

「本来なら廃棄処分されるはずだった私が、何かの役に立てるというのならば、それ以上に嬉しい事はありません」

「……そう。でも気に入らない、あなたのやり方は絶対に認めない」「認める認めないは勝手だが、邪魔はするな」

話し合っても平行線。お互いに歩み寄るつもりがなく、答えが交わらないとわかつているのなら、これ以上無駄なことはない。無駄なことに労力を費やすより、残り少ない時間を未だ目を覚まさない家族と共に過ごそう。

「疲れたから休む。お前も休め。大事な戦力だ」

「気持ち悪いこと言わないで。寒気がする」

「そうか」

互いに背を向けて別れる。なんとも、無駄な時間を過ごした。

第82話

ただ、何も無い時間を二人で静かに過ごす。何の感情も感じられない、眠っている愛しい妹の枯れ細った体の収められたカプセルに背を預け、目を閉じて再会の時を待ちわびる。途中で新たにできた理想には届かないが、それでも。それでも待ち望んでいた結果が、もう目の前に迫っている。その瞬間が、どうしようもなく待ち遠しい。

楽しみとも、憧れとも違う。よくわからない感情が沸き上がってくる。これは少なくともマイナスの感情ではない。まるで宙に浮いているかのような、奇妙な浮遊感。心地よい。今しばらくは、これに浸っていたい。

「……家族の団欒も、許してくれないか」

爆発音と共に、知覚範囲に侵入してきた少数の敵意。どうにも私の楽しみの中には必ずと言っていいほど邪魔が入るようだ。感情の質からして機動六課の人間ではなさそうだが、それでも戦闘機人とガジェットの群れで構成された防衛線を突破したとなると結構な実力者なのだろう。

戦闘機人の能力は確かに素晴らしい。だが、やはりベースが人間である以上は疲労が蓄積し、そこへ親しい者の死が訪ればミスも起こり得るか。

情報を纏める。クアットロとウーノ以外の戦闘機人は外で戦闘中。その二人も今は手が離せない状況。スカリエッティは、戦力としてカウトするのは無理。トーレは死亡。名無しは出せない。施設内の戦闘可能な戦力は、ガジェットとテストロッサと私のみ。が、テストロッサは魔力切れからまだ回復しきっていない可能性もある。

一瞬で導き出された答えに、解きほぐされていた意識が戦場へと引き戻され、糸が切れる寸前までピンと張り詰められ、思考が戦闘関連の情報でうめつくされる。

拳銃を抜き、安全装置を外して初弾装填。長年愛用し続けてきた大砲はもう破壊され、こんな頼りない豆鉄砲一つと己の身だけで魔導師と戦わなければならない。正気の沙汰ではない。が、たかが魔導師。

たかが管理局。そんな程度のモノ共に、私の人生の邪魔はさせはしない。させてなるものか。

「ゆつくりと立ち上がり、一度だけ振り向いて、愛しい最後の家族が入った生体ポットの表面を撫でる。」

「ちよつとだけ離れるから。必ず戻ってくる……待っててくれよ。じゃあ、行ってくる」

別れの挨拶を済ませ、そのままドアから出て行く。通路を走り、敵の居る方へと進みながら、スカリエツティに無線をつなげる。

「敵が施設内部に侵入した。迎撃する。隔壁を下ろして時間を稼いでくれ」

『君は働かなくていい。そう言ったはずだが。そんなに私達が信用できないのかね?』

「信用してないわけじゃないが、ウーノとクアットロはゆりかごを空に挙げるための準備をしてるんだろう。私が出る以外に無い」

降りてくる隔壁の隙間を通って、ガジエツトが破壊される音が聞こえてくる上のフロアへ進む。幸い、侵入した敵意の数は増えてない。一部隊撃破すれば、少し間が空くだろう。その間に、警備システムの再構築か、防衛線をいよいよ下げるか……最悪投降するか。いや、それは駄目だな。ここまでやってしまえば、投降しても待っているのは処刑台。エリーは治らないし、私は無駄死に。今まで殺してきた人間も無駄死。今までしてきたことの全てが無意味になる。

「強化」

それはとても許せることではない。だからこそ、ここでさらに殺しておく。ガジエツトを一体呼び寄せてその背に捕まり、爆発音のする現場へ飛び込む。

動いている感情を数えて、相手の数は三人と判明。少しだけ顔を出して覗けば、近接型の魔導師と判明。無謀とはわかつているが、殺るしかない。ガジエツトの動きを少しだけ操作して、全機を一度に突っ込ませて、撃破させる。決して広くはない廊下に爆炎が舞い上がり、視界がほぼ潰された中を、バリアジャケットあるいは騎士甲冑に包まれた魔導師が前進する。

捕まっているガジェットを足場にして空中で飛び上がり、天井に着地。まずは列の一番後ろに居る魔導師を、感情の位置で索敵。真上から跳びかかり、その肩に刃となった腕を叩きつけるように突き刺す。一瞬だけバリアジャケットに阻まれたが、無事貫通。関節を砕き、脇まで刃が通り抜ける。そのまま前へ転がるようにして地面へ着地。同時に、切り落とした腕が地面に落ちる。まずは一人無力化。

残る二人も追撃はせず、一旦煙の中に身を伏せる。

「ツアア！」

伏せたのは正解。頭の上を大剣が振りぬかれ、その勢いによって生じた気流に煙幕がかき乱される。音は一切立てなかった、というよりもより大きな爆発音がかき消していたが、それを聞き取って反撃に転じられるのは、一体どれほどの力量か。

「二人やられました！」

「慌ててはいけません！ 冷静に！」

何度か聞いた覚えのある声。嫌な相手が来たと、内心ため息をつく。元より勝ち目があるとは思っていなかったが、これで完全にゼロになってしまった。

まあ一対一に持ち込めば、時間を稼ぐだけならなんとかなるだろう。こっちは殴られても死なないし、動きは読める。体力が尽きるまで、体が再生できなくなるまで、防御に徹すれば。

間違いなく弱いであろう方へ銃を向け、発砲。徹った感じはしない。即移動。反撃で、煙幕がかき乱される。

やはり銃ではダメか。ならば近接戦闘を仕掛けるしかないだろうが、ベル方式を相手に正面からの殴り合いでは分が悪い。しかも、二対一となれば尚更。

「大丈夫か！」

「腕が、腕が……！」

だが、そのためにあえて殺さずにおいたのだ。放置すれば出血多量で死ぬ重傷を負った味方を見捨てて、戦闘を続行できるかどうか。おそらく否。最低でも一人は治療か後方への移送のために居なくなる。否でなくとも、こいつは仲間を見捨てた事に何の感情も抱かないほど

冷血ではない。

一人相手なら、時間を稼ぐ位はできるだろう。相手の出方を見るために、煙幕の中に伏せる。

「……仕掛けてこないのですか」

相手の出方を伺って数秒。聞きたい言葉が来たので、それに対して返事をしてやる。

「退くか、進むか。選べ」

立ち上がったって、煙の中から話しかける。

「やはりあなたでしたか。この状況では、むしろこちらが選択肢を与える側のはずですが。降伏するか、負けて拘束されるか、今なら選ぶ権利を差し上げますよ」

「もう一度聞く。仲間の命を見捨てて前に進むか、仲間の命を助けるために退くか」

「……あなたに抵抗する時間など与えませんよ。あなたを確保し、部下も撤退させます」

なるほど確かに。私をここで捕らえれば、負傷した一人と、私を運ぶ手でもう一人。侵入した三人全員の手を埋めることができる。だが、できればそれは避けるべき。この施設の中に、私以外の戦える戦力はガジェット以外にない。つまりは、私が最終防衛線になるということ。いなくなればその分壁が薄くなり、突破される危険も高まる。それは無しだな。

まあ、会話だけでも十分時間は稼げた。問答無用で殴り倒されていればまた終わっていたかもしれないが、おかげでガジェットの再配置も完了した。

「つまり、こちらの提案には反対ということでもいいのか」

「そういう事です。トーマス、あなたは怪我人を連れて下がってください」

「残念だ」

蛇を盾の形で出して、後ろに飛びつつガジェット達に一斉射撃の命令を出す。一瞬遅れで煙の中を一人突っ込んでくるが、あとの二人は爆炎の中に消える。感情も、炎と一緒に散った。おそらく死んだだろ

う、苦しむ暇もなかったはずだ。

「これで二人死んだ」

猛烈な怒りの感情。元々の素質も相まって、盾を一撃で叩き割る威力の攻撃が恐ろしい精度とスピードで飛んでくる。まるで機関銃のようだ。

だが、正確な分防御もしやすい。相手の狙う場所がわかる私にとって、正確な攻撃というのは捌きやすいものだ。むしろ中途半端な相手で、相手が狙った場所から攻撃がずれるようならやりにくい。

「私の首は、仲間を見捨ててまで取るほどの価値はないぞ」
「っ！」

煽れば煽るほどに、怒りの炎は激しく燃える。その分攻撃も苛烈になる。こちらの強化した腕などまるで砂細工とでも言わんばかりに、一撃で骨を砕かれる。だがその度に新たな腕を生やして防ぎ、元の腕が再生したらまたそれで防ぐ。腕が碎ける痛みというのは実に酷いものだが、最後の家族の為を思えばこの程度どうということはない。

「化物め！」

「何とでも言えばいい」

そうして煽れば、さらに回転数が上がり。さらに腕の本数も増やさざるを得なくなる。腕、というよりも蛇が束になったもので触手と呼ぶほうがふさわしい。そのほうが耐久性も増す。芯がなければ折れることもなく、ただ衝撃を受けてしなるだけ。曲がり、絡みつき、それを引く抜くことでさらに体力の消費を加速させる。

だが、こちらもなかなかキツイものがある。腕を8本まで増やしたのはいいが、頭の処理がなかなか厳しい。普通は無いもののある物として動かしているせいで頭痛がしてきた。

「……………」

相手も同じくらいで疲労してきたのか、ようやく一端離れて一呼吸置いた。離れたのなら、先程までは自分が巻き込まれるのを恐れて使えなかったガジェットのみサイルが使える。これから攻守は逆転。休む暇など与えずに、ガジェットへ命令して撃ち込ませる。そしてまた広がる爆発と煙。相手の視界を潰し、こちらは音を立てずに移動。

しかし相手の位置は感情でわかる。

私を無視して先へと進むか。

ガジエツトのミサイルをノーロックで射出、それを蛇で絡めとり、進路上に叩きつけると、たまらないといった様子で飛び出てきた。そこに蛇を投げつけるが、叩き落とされる。

それならばと拳で殴りかかるが、防がれる。しかしそれでいい、腕から蛇をはやして、相手の腕を絡めとる。さらに足から杭のようにした蛇を地面に突き刺して、体を固定。

相手も同じ勝負に乗る気なのか、今度はこちらもバインドをかけられる。

「余程、先へ行かせたくないようですね」

「……まあな」

増やした腕を4本まで一度減らし、一本には銃をもたせ、残る3本は槍の穂先のように先を尖らせて、突き刺す。貫通せず。銃を接射しても、貫通せず。

後ろから放たれた誘導弾を、蛇の触手で叩き落として。

「……」

「……」

お互いに攻撃が通らないことを理解し、しばし睨み合う。

「手折るには勿体無い実力ですね」

「……」

唐突に褒められるが、手は緩めない。

「実戦だけで鍛えられたあなたの実力。無才の人間の到達点と称されるだけがあります。ちゃんとした指導を受ければもつと強くなれると思います」

「スカウトなら別の人間にしろ。私に家族以外の物は必要ない」

「そう言うと思っていました。だからこそ、手折るのが勿体無いと言ったのです！」

デバイスが稼働し、空のカートリッジが地面に落ちる。そして目の前で魔力爆発が起きて、蛇の拘束が引きちぎられ、アンカーも抜けて、体が宙に浮く。不味いと思った時には、既に手遅れ。目に見えるほど

の魔力をまとったデバイスが、目の前に迫る。

「乾坤一擲！」

六本の腕全てを重ねて防ぐが、それもあっさりと消し飛び。強烈な魔力の奔流に体を吹き飛ばされる。体全てが痛いなどという次元では語れない感覚に包まれ、意識もとびかける。

まるで弾丸のように体がまっすぐ飛び、そして通路の突き当りにぶち当たって、体の中から風船が弾けるような音がして、血反吐を吐き、ようやく止まる。

意識はあるが、体が動かない。手足も気づけば無い。なら生やせばいい。そうやって、また立ち上がった。

「もう一発!!」

強烈な衝撃と共に、視界の右半分が消滅する。デバイスが当たった所が消えているのがわかってしまった。血が足りない。いやそれ以前の問題。体が命令を効かない。いやそれ以前の問題。命令を出す場所が深刻なダメージを受けている左半身が動かない。右半身だけでは動きようもない。左右のバランスを欠いては、動けるはずがない。

手足はただ痙攣するだけで、感覚は消滅した。ああ、動かない。動けない。動かないと。意識はあるのに。

「……道を踏み外さなければ、剣を交える友となれたかもしれないね」

ダメだ。彼女をこの前へ進ませては。悲願が、私の妹が助からなくなってしまう。大事な、大事な。私の、僕の、妹。

ここで終わるわけには。

「いか、ない……行かせない」

第83話

強烈な一撃を持って碎かれ、再生し、限界を超えて既に人の形を留めない四肢。体中が、煮えた油をかけられたように熱く、痛み、脳が発する警告がもう動くなど命令し、立ち上がろうという意志に反してただ痙攣を繰り返す肉体。

こんな体で、私をここまで追い詰めた相手に一体何ができるというのか。何も出来やしないだろう。だが、それでも、幸か不幸か私はまだ生きています。

「まだ、生きてるぞ」

視界が半分消滅しても。体が醜く膨れ上がろうとも。まだ生きています。体は再生している。ならばまだ戦える。一秒でも長く、相手をしてやる。時間を稼いでやろう。何度手足を碎かれようとも、何度全身を潰されようとも、死ぬまで相手をしてやる。悲願のためだ、多少の苦痛は代償として受け入れられる。

「……化物ですか。いえ、失礼。真正正銘の、化物ですね」

何も言わず、肉体強化をさらに重ねかけ。相手の速度の前には、射程など合っていないようなもの。実力は離れすぎて、渡り合うなど到底不可能。ならば小手先の技でごまかしたり、相手から離れて蛇で攻撃するようなことは諦める。

大人しく、いつも通りの方法でやろう。殴られながら、致命の一撃を叩き込む。打たれながら、全力の一撃をためて、打ち込む。だが一回ではとても当たらないだろう。十回でも当たるかどうかかわからない。ならば百回挑戦しよう。ああ、しかしあまり時間はない。できれば一度で仕留めたいところだ。

「あなたの目的は時間稼ぎ。時間をかけるほどあなたの思う壺。しかし、無視して背を向ければその背に牙が突き立てられる。であれば、全力で、最速で潰すが最善」

「よくわかってるな。ならやってみせろ」

こちらとしても、長引けば長引くほど後に響く。いつ増援がやってくるかわからない以上、いつまでも相手をしている暇はない。早期決

着はむしろ望む所。当然結末はこちらが勝つ。

「やってみせましょう」

視界から消える。どこを打つかはわかる。あえて、受ける。

「ッー」

衝撃。打たれた部分が消し飛ぶ。構わない。どうせすぐに再生する。再生していない場所を殴られる。またそこが消える。しかし、蛇が隙間を埋める。

先程よりも一撃一撃の重さは増している。だが、それ以上に、こちらも早く再生する。痛みなど既に有つてないようなもの、無視できる。

ひたすらに、サンドバッグのように殴られ続ける。殴られて、その部分が消えて、その度に再生する。腸が散ろうと、肉が弾けようと関係ない。相手が殴り疲れるまで、あるいは耐えかねて大技を出す。その時を、ジツと。彼女もそれはわかっていているようだ。より激しくラツシュをかけて、再生が追いつかなくなるように殴り続ける。凌げるものは五本の腕で防いで、一本は未だ力を溜めておく。

「そうだ！ それでいい!!」

大きく叫ぶ。如何に高ランクの魔導師であろうと、こいつは人間だ。無呼吸で殴り続けても、いつかは限界が来る。それを待ち、待ち………待つて………。

彼女が大きく振りかぶり、私を殴ろうとする。

「今!!」

溜めに溜めて。元より有った右腕で、満身かつ渾身の力を込めた一撃。デバイスで防がれる。拳が砕けた。だが、ミシリと、わずかにデバイスが軋んだ。ここで、拳に固めた魔力を前へと指向性を持たせて解放する。

ボツ、と鈍く爆発音がしたら、双方共に大きく後ろに吹き飛び、私は壁に叩きつけられ。相手は顔を煤けさせながらも、しっかりと床に足をつけて減速し、止まった。その顔は心なしか先ほどよりも楽しそうに見える。

「………惜しい」

双方共に、そう呟く。キツチリ当てれば必殺の二段構え。初撃で固い防御を抜いて、二段目で確実に破壊する。その位の心構えで放った一撃は防がれてかすり傷で終わる。悪戯に魔力を消費しただけに終わってしまった。

まあいい。どうせ体と同じように、魔力も回復する。

「本当に、掴むには惜しい。ここで仕留めなければならぬのが本当に残念でなりません」

「なら今すぐ回れ右して帰ってくれ」

声も表情も残念そうには見えない。むしろその逆。蛇を通すまでもなく歓喜の感情が溢れでているのがわかる。怒りも少々混ざっているが、それでも愉悦の方が遥かに大きい。

こういうのをバトルジャンキーと呼ぶのだろうか。

「それは出来ませんよ。私も部下を二人殺されていますから、さすがに手ぶらでは帰れません」

「そうだよな。まあ」

自業自得といえればそれまでだろう。お互いに。どういった理由かは知らないが、あちらはこちらの陣地に侵入して暴れまわった。その結果部下が死んだ。自業自得。

こちらはあちら側の平和をかなりかき乱した重犯罪者。テロリストとも言え換えられる。狙われるのは至極当然。自業自得。

「頭を完全に潰せば、さすがに死んでももらえますか？ 死なないまでも、気絶くらいは」

「わからないな。やったこともなければ、やろうとも思わん」

さらりと恐ろしい言葉を吐く。しかし、今の言葉は冗談でも何でも無く、本気なのだろう。現に頭の半分を消し飛ばされた。

「では、やってみましょう」

閃光が奔り、頭が砕け散るのを自覚する。瞬時に再生。驚く彼女の手を掴み、握りつぶさんばかりに力を込める。

「……本当に、どうすれば死んでももらえるんでしょうか」

「知らないな。だが」

さつきと比べれば随分遅くもう片方の手が振るわれ、それを掴む。

今度は脚が振るわれるが、こちらの腕は六本ある。さらにもう一本の腕を使い、止める。そして、握りつぶす。簡単に骨が砕け、デバイスが手からこぼれ落ちる。それを脚で遠くに蹴り飛ばし、無力化は完了了。

「わざわざ隙を晒してくれてありがとう」

「くっ！」

「化物は、人間じゃどうしようもないから化物なんだろうな」

バリアジャケットも剥がれ、教会で見た修道服の格好に戻る。こうなればいかな魔導師と言っても、ただの人間と変わりない。そして私はただの化物。ただの人間と化物が争えば、死ぬのは人間の方だ。

「私の負けですね……殺さないんですか？」

「生きていれば色々と使える」

殺さず、しかも後遺症も残らない程度の損傷で捕らえるなど普通ではできるはずがない。こんな時に運が巡ってくるなど……まあ、こちらにとっても、彼女にとっても悪いことではないので良しとしよう。生きていれば肉の盾、人質、身代金と、使い道はいくらでもある。時間があれば洗脳して駒にもできたが、残念ながらその時間はない。

背中から生えた腕の一本を切り離し、大蛇に変えて彼女を巻く。生きて帰れるのだから、運がいい。

「辱めを受ける位なら自殺しますよ」

「暴力シスターを襲う位なら、仲の良い女が他に居る。安心して捕虜になれ。暴れられたらかなわんから、治療はしばらく後になるがな」

巻いた彼女を肩に担いで。蹴り飛ばしたデバイスは蛇に回収させて、来た道に戻っていく。

「捕虜になった時点で、安心などできるはずもないのですがね」

「自分の判断ミスを恨むんだな」

実力差を考えればわからなくもない判断だが、最初に撤退していれば部下が死ぬことも、自分が捕虜になることもなかっただろうに。まあ、ともかくだ。望外の結果になったのだし、一応スカリエッティに報告しよう。

「スカリエッティ」

念話で話しかける。無線機を使おうとしたが、攻撃を受けたせいでグシャグシャだったので諦める。慣れないからあまり得意ではないのだが。

『君か、負けて見逃されでもしたかな。逃走の助言なら不要だよ、もう何もかも遅すぎる』

「逆だ。シスターシヤツハに勝って、捕まえた。手足も砕いてある」

『……冗談だろう?』

「冗談なものか」

そう思いたくもなる。私だつてそう思いたい。

「だが、これで終わったわけじゃない」

一人厳しい敵を無力化したからといってそれで終わるわけでもない。どうせまた増援が来る。外で頑張るナンバースもいつ限界が来るやらわからないし、そうなったらまた内部に侵入してくる敵と戦わなければならない。

まだまだ、先は長い。

第84話

蛇を引きずりながら、スカリエッツィの居る研究室の前まで到達した。何度も壊されまくったせいで、足の再生が上手くいってないからやけに時間がかかってしまった。足と同じく、いびつに再生した腕で扉を開く。

「よう、スカリエッツィ」

「……ああ、おかえり」

後ろから声をかけると、スカリエッツィは一瞬だけ作業の手を止めてこちらに振り返った。そしてすぐに作業を再開し、猛烈な勢いで彼の正面のディスプレイがスクロールし始める。

「ひどい有様だが、よく勝ってくれた。正直終わったと思ってたのだがね」

「自分でも勝つとは思ってなかった」

本当は時間稼ぎをするだけで終わる。終わらされるはずだったのだが、これは正直想定外の事態。無論、良い意味で。この体がどれほど死から遠いのかも改めてわかったし。

いびつな形の腕を這いまわる蛇の刺青を眺める。前の持ち主は頭をぶつ飛ばしたら死んだが、私はそうではない。これは蛇との相性が良いからか、それとも侵食の度合いが大きいからか。まあ、そんな事はどうでもいい。悲願を達成できるのなら、それは何を代償に支払ったとしても、良いことだ。

「最後は手を抜いたように見えたが。そこはどうかかな、シスター・シヤツハ」

「命をかけた決闘において手を抜くなど、相手への侮辱になります。そのようなことは絶対にありません。ただ、人の形をした人ではないものを見て驚いて、隙を晒したのは事実。一生の不覚です」

化物扱いされて傷ついたりはしない。私が化物なのは、純然たる事実だ。むしろそれは良い。人には出来ないことでも、化物ならできる。化物だから勝てたのだ。

「じゃあ、スカリエツティ。こいつは置いていく。私は上に出て、部隊の足止めをする」

「待ちたまえ。もうじきに日が昇る。ゆりかごの調整ももうすぐ終わる。ゆりかご内部には君の使える武器を置いてある。武器が有る方がやりやすいだろう?」

「つまり、次はそこで戦えと」

「ああ。この施設の防衛も必要だが、アレが空に上がらなければ我々の目的は達成できない」

なるほど。それが司令官からの命令ならば、兵士である私はそれに従おう。それに、確かに武器がなければ私は殴るしか能のない化物だ。武器があれば、自分自身の運用の幅も広がる。

「任務了解。元々、正面からの殴り合いは私の趣味じゃない」

他に手段があるのならば、優先してそちらを使うべし。正面切つての殴り合いは馬鹿に任せ、自分は安全なところから火力を投射する。もしくは馬鹿が注意を引いている間に致命の一撃を叩き込む。それが元々の私のやり方だったというのに。私は一体いつからこんな馬鹿のやることをする馬鹿になったんだ。

スタイルが決定的に変わったのは、この前地上本部の倉庫に盗みに入つて愛用の銃を壊されたところだろうな。それが元通りになるのなら、エースを相手にした場合の勝率もコンマ以下の確率だが大きく上昇するだろう。敵を前にした時に取れる選択肢が多いというのは、それだけで有利につながる。

「転送する。そこを動かないでくれ」

三秒ほど。足元に魔法陣が浮かび上がり、一瞬光りに包まれて目を閉じる。そして眼を開くと、今度は知らない場所。目の前にはクアツトク。足元には大量に散らばる銃火器の数々と、デバイスらしき剣が数本。

「誰っ!? って、あなた……少し見ない内に随分とひどい格好になりましたわね」

「格好については、研究所で一悶着あってな。わかるだろう? まあ少し時間を置けば戻る。いきなりで悪いが、ゆりかご内部構造のデー

夕を寄越せ」

「データねえ。いいけど、空に上がるまでの時間に頭に入るかしら？」
「五分で覚える」

足元に転がっていた、刀の形をしたデバイスを拾って、それに入れるように頼む。その間に使用する武器を吟味して、蛇に唾えさせる。愛用していたボルトアクション対物ライフルはさすがに特注品だったから無かったが、それより凶暴な見た目の武器があった。デイエチの使っていた大砲と、航空機の機関砲に使われるようなサイズの物も。一体どこからこんなにかき集めてきたのか、全くもって謎だ。謎だが、これだけ武器があれば心強い。扱いきれるかどうかはともかく。

「インストール完了。ドクターも心配性ですわ。このゆりかごに侵入できる奴なんて居るはずがないのに」

「いや、一人確実に来る」

ガジェットや対空砲火程度で沈む事はない奴を一人知ってる。スカリエツティもそれを知っていて、ここに置いてある武器もそのために用意したものだろう。通常の魔導師を相手にするには過剰過ぎる武装。

「家族と友人を奪われて怒り心頭の奴がな」

あの魔力量、天才と言われる才能、積み重ねてきた実戦経験。それにより作り上げられた実力が、さらに家族を奪われた怒りで強力になるのなら。その程度の障害は容易く抜けてくるだろう。私でさえ数多の障害を乗り越えて復讐を果たしたのだから、彼女にそれが出来ないわけがない。怒りの力というのは、本当に人を強くする。

「友人はともかく、家族ねえ……血はつながってないの？」

「誘拐する時に目を見た。アレに血の繋がりの有無は関係なく、本当の家族としてガキを見てた」

同じ思いをさせてしまったことは申し訳ないと思うが、それでも私にはいかなる犠牲を払ってでも果たしたい目的が有る。家族を助けるという願いが。ただしそれは相手も同じ。だから必ず来る。

私も、偽物の家族でも家族と思うことができれば、もう少し楽に生

きられたかもしれないな。色々、もう遅いが。

「……それで、来るとして勝算は？」

「全力で殺しに行く。それしか無い。そのためなら、多少ゆりかごの中が壊れても問題ないだろう？」 目的のための仕方ない犠牲 コラテラルダメージだ」

銃を取り、グレネードを腰に括り付けて、剣のデバイスを持ち、蛇に爆薬を飲み込ませる。これで、私のできる戦いの準備は、頭に地図を叩き込むだけ。

「艦の運行に支障を来さない程度なら」

「そのためにデータをもらう。あと負けても私が死んで、お前も捕まって、船が落ちるだけだ。安心しろ」

「まあ、あんたが死んでも聖王が居るから。消耗させるだけ消耗させれば、その後が有利になるかもしれないわ」

「聖王。あの子供か」

私が攫った少女。ヴィヴィオ、と呼ばれていたか。

「そうよ。何か疑問でもある？」

「いや、何も」

さて、しかしそれはどうなのだろうか。私が恐らくやって来るであろう高町なのは殺せば、一人の人間の、偽ものとはいえ親を殺すことになる。と言っても今まで何百人。下手をすれば千を超える人を殺してきた。今更一人殺すのがなんだというのか。今更何故そんなことを疑問に思うのか。あと少しで私の人生の望み全てが叶えられる。それを思えば何を迷うことが有るのか。

「子が親を殺す。なんてドラマチックかしら」

ああ、そうか。迷っているのは殺すことではない。殺させることか。

あの少女に人が殺せるとは思わない。ましてや、仮にとは言え自分の親など。となれば何かしら記憶か人格の操作か、あるいはフェイトのように強制的に操りでもするのだろうか。それが彼女に親を殺させる唯一の方法だ。

彼女が親を殺したとして、その後正気に戻ったら、一体どれほどの苦痛となるか。自分の家族を失う苦痛は知っている。だが、自分の家

族を殺す苦痛までは知らない……心の痛みしか知らない私ですら、想像できないほどの苦痛。

「その必要はない」

データの記憶が完了した。そして、多くの様々な感情の幕を通してもわかるほど研ぎ澄まされた、一際遠くから殺意を歓迎する。

そんな悪趣味なことはさせない。親を殺したら間違はなく恨まれるだろうが、それが原因で殺されても構わない。復讐は個人の権利。私はその権利を行使し、果たしたのなら、他人もその権利を持ち、果たすのを禁ずることはしない。できない。

「私はそのためにここに居る」

「期待しないで待ってるわ」

全身に武器をぶら下げて立ち上がり、歓迎に向かう。しかし……肉片一つ残らずに消し飛ばされたら、今度はどうなるのだろうか。さすがに死ぬだろうか。

最終決戦

ゆりかごが土と轟音を巻き上げて、ゆつくりと空へと舞い上がっていく。私の希望が空へと登る。そして、そこに群がる邪魔者達。立体スクリーンに映る外の光景だが、その邪魔者たちは対空システム相手に全く歯が立たず、誘蛾灯に集まる羽虫のように寄ってきては落とされていく。

この調子で何もなければ、無事に大気圏外まで上がれるだろう。何もなければ……

『やあ、調子はどうだい』

「良好だ。どうしたスカリエツテイ」

『ガジェットを大量に撃破しつつ、高速で接近する魔導師が二名。宝物を取り返しに来たようだよ』

やはり、何もなしとはいかせてもらえないな。予想よりも一人多いが、想定範囲内。全戦力で突っ込まれてはさすがに落とされる可能性もあった。一度に来ればいいものを、拠点をとすのに戦力の分散して投入するのは愚の骨頂だ。

まあ、こちら人も人の事は言えない。重要な防衛目標が二つあって、そのどちらにも戦力を割いているのだから。

「機動六課か」

『ご名答。もうじきに到着するよ』

どうするか考えて、考えて。強力なAMFが効果を発揮しているゆりかごの中は、銃火器がメインウエポンの私にとってはかなり有利な状況。とはいえ、あれは私とは別のベクトルで化物だ。万が一をかなり高い確率で起こすエース。できれば戦闘は避けたい。

「クアットロ。対空防衛はどうなってる」

『困ったことに、薄い所を突いてきたわ。その分ガジェットを回してのだけど、それも次々壊されてる』

「他の有象無象は張り付かれても問題ない。射程圏内に居るガジェットのミサイルを全部叩きこんで可能な限り消耗させろ。落とせなくてもいいから、ミサイルを抱えたまま落とさせるな。そうすれば後が

楽になる」

対空砲火の一番薄いところ、というところ。確か装甲も薄かったような。だが、ゆりかごの出入り口はそこにはない……魔力砲撃でぶち抜かれない限り。しかし間違いないとやってくるだろう……かつての空港の件もあるのだし。多分、入り口を探してそこからお行儀よくノックして、入る許可を求めてから。なんてせずに装甲を砲撃で破壊して、入り口を作って侵入してくるだろう。かつての空港での一件もあるし、そのくらいはやって来るに違いない。

『……そうしたいところだったけれど。該当区画のガジェット消耗率は六割を超えてる。これ以上は周りの敵の侵入を許すことになるからできないわ。さすがにこれ以上物量のアドバンテージを失うのは不味い』

「なら仕方ない。中に誘い込め。私が止める」

『そうになったらやってもらうしかないけど。できるの?』

「実は、私は今まで一度も任務を失敗したことがない。数少ない人に誇れる事だ」

一度でも失敗すれば死んだ任務ばかり受けてきて、その全てを成功してきた。

とはいえ、いくらなんでも今回は不味い。エース級が一人ならともかく、二人ともなると。一人は高町なのは確定で、もう一人は一体誰になるのか。高町の殺意が強すぎるせいで、どうにもその影に隠れてしまってその感情が見えない。そこまで強い殺意は感じないのがどうにも気になるが、排除目標には変わらない。

『はあ。万が一あんたが勝ったら、借り一つね』

「失敗すれば十割。成功しても九割死ぬ。気にするな」

どちらにしても死ぬのが前提の作戦。これほど無謀な作戦も、猟犬の時には何度もやってきた。かつての報酬は復讐の土台作りだが、今は家族を救うため。相手はどうなのだろう。家族を救うためか、友人の敵討か。まあ、それは対面した時に聞けば分かる話。ゆりかごの外と中ではAMFの効果が段違いだが、対空砲火をくぐり抜けて取り付いたのだ。ここに辿り着く前に死ぬということもないだろう。

そう思っていると、ゆりかごの船体が小さく揺れた。揺れた、といても船のサイズからして、車に飛びついて揺らすのとはわけが違ふ。これほどの巨体を揺らすのには、どれほどの質量をぶつけるか。どれほどのエネルギーが必要になるか。それを個人でやってのける化物は一人くらいしか居まい。

『外壁損傷。侵入されたわ』

いつもの余裕綽々な態度とは真逆に、少しの不安をはらんだクアツトロの声。私にとっては想定内の事だ。対応するための策、という程のものではないが考えてある。

「ここまで素通りさせろ」

『は?』

「素通りさせろ、と言っている」

『ああ、とうとう本気で狂ったの』

「馬鹿を言うな。ありったけの戦力をぶつけられて臨戦態勢の奴を前に正面切つて殴りあうより、素通りさせて良ければ油断。悪くても警戒態勢の相手を一発で殺すほうが楽でいい」

『自分が負けたら後が一つしか無いって事、わかって言ってるのよね』
「わかってる」

『逃げたり、降伏して命乞いする気じゃないでしょうね』

「私の妹は、次元世界の安定よりも。私自身の命よりも重い」

何度も命をかけて戦った。何度も命をかけて任務を果たした。捕まっても自分の意志で逃走し、スカリエツティの下へ戻ってきた。その行動を省みて、クアツトロはどう思うか。逃げようとするばいつでも逃げられた。裏切ろうとすればいつでも裏切れた。それをしなかったのは何故か、妹のためだ。それがわからないほど馬鹿なら、爆弾を抱えて特攻してでも私の意志を示してみせる。

爆弾ならもう抱えてるが、な。

『……信用していいのね』

「任せろ」

『隔壁一部解放。全ガジェット待機モードに移行。あとは念話でも送つて、ここに居るって宣言すれば勝手に来るわよ……あとは任せる』

わ』

「そうさせてもらう」

敵意の方へと歩き出す。この策が功を成せば、勝機もわずかに増す。だが、その勝機をさらに増やすために、それを賭金にして博打をする。既に相手は殺る気に満ちあふれているが、それでも顔を見た瞬間に問答無用で砲撃をぶち込んでくるほど危険人物でもあるまい。こちらから攻撃を仕掛けなければ、対話の足がかりはある。

対話をして、あわよくば説得……は無理だろうからその最中に一撃叩き込めばなんとかなる。そう信じて、大量の爆薬、武器をもたせた蛇を連れて殺意のやって来る方へと進んでいく。障害物もないし、なかなかのスピードで向かってきている。このままなら五分とかかるまい。

そして、そう考えてから三百秒ちようど。殺意の塊が目の前に現れた。通路を曲がり、中空を飛行し。殺意に濁った目でこちらを見据えて、停止した。次いで現れた赤い少女も同じように。

「……」

向けられた金色の矛先の杖。真っ白なバリアジャケット。栗色の髪。そして質量を持たないはずなのに、体を押しつぶされそうと錯覚するほどの魔力量。それよりも強烈な殺意を私にぶつけてくるのは、高町なのは一等空尉。

その隣にいるのは、小さな体躯に見合わぬ錘を手にし、片腕を無くした少女。八神ヴィータ。こちらからは感情が読み取れない。

「招いた覚えはないが、ようこそ。ゆりかごへ」

いきなり砲撃を受けるということはないらしく、まずは挨拶。銃口を降ろし丁寧に、礼儀正しく。

「探さなくても、出てきてくれたんだ」

「招かれざる客でも歓迎は必要だろう。できることなら入り口から帰ってもらいたい……まあ、それができるわけもないか……ああ、ちなみに、私を通り抜ければ聖王の間はすぐそこだ」

ひとまず、自分の背後に蛇の網を張り巡らせる。これ以上先には進ませない、という意味表示の代わりだ。

「なら、そこを退いてくれないかな」

「無理だな。申し訳ないが」

「私が君を退かせるのなんて、簡単だって、わかるよね」

ひとまずは綱にかかってくれた。おまけにこいつは私のことを完全に下に見ている。たやすく飲める相手だと、油断している。それがどれだけ危険なことか、わかっていない。だが問題はもう片方。何を考えているのかわからない。蛇の眼を持ってしても、感情が読み取れない。

まあ、片方の殺意が強力すぎるからだろうか。

「退かすか。それはまたどうやって」

「実力で」

「痛みで気を失うほどヤワな訓練はしてないぞ。少なくとも、死ぬまでここを退くつもりはない」

挑発的に微笑んでやる。

「まあ、そのほうが願ったりかなったりだろうがな。娘を奪還するついでに、私も殺しに来たんだろう?」

「……」

「認めるよ。化物。認めるよ。殺したいって。家族を奪われて、友人を傷つけられて。怒ってるんだろう? 一度は私を殺そうとしたじゃないか」

人の感情を操る話し方は、猟犬の頃に散々仕込まれている。ましてや相手が冷静さを欠いているのならば、誘導はたやすいことだ。面白いうように殺意が膨れ上がっていく。

「ふふふ……まるで、悪党みたいだね」

殺意に凍りついた顔が、愉悦の顔に歪む。心の底から憎い相手を殺せるという喜びを目の前にして、自分を抑えきれないのか。きっとそうなのだろう。

「そうとも。私は悪党だ。大勢の人を殺して、傷つけて、お前の家族を攫った悪党だとも」

「じゃあ、そうしてもいいよね」

「ああ、殺したいなら殺せばいいさ」

殺意を向ける対象からの許可を得て、魔力が固まる。

「だが、人殺しを友人や家族がどう見ると思う?」

「ツ!」

その一言に殺意が揺れる。憎しみばかりが膨らんで、未だ覚悟が固まっていないようだ。後のことを考えていない。

「私を殺したその後だ。晴れて娘を奪還したとしよう。私達が負ければ、フェイト・テストロツサも元通りとは言えないが返ってくる。私の妹は助からないが、お前らにとっては万々歳の結果だ。だが、お前は私と同類になる。殺した人数は違えど、殺したという事実は変わらない」

「なら殺さずに捕らえるだけだよ」

「そうだな。そうすれば私は裁判を受けて、大量殺人と破壊工作、テロの罪で死刑になるだろう。しかしどちらにせよ結果は同じだ。死ぬのが早いか遅いか。直接殺すか、間接的に殺すかのどちらか」

そこまで話すと、彼女は言葉に詰まる。

「フェイト・テストロツサは私のことをひどく嫌っていたよ。汚い人殺しだとな。ヴィヴィオ、だったか。あの子も怯えていたよ。自分も殺されないかとな……お前も同じ目で見られることを考えてみたら、どうだ?」

「……」

「私を倒し、スカリエツティの企みを挫く。そうすれば妹も死ぬ……何の罪もないのに心を壊された私のかわいい、それでいて哀れな妹は、この方法以外では助けられない! つまり心が死んだまま生き続ける! 助かる命を切り捨てるのは、殺人と同じじゃないのか!? 無辜の民を殺すのが正義なら、そうするがいいさ!」

それはとても悲しいことだ。私が今まで殺してきた全ての人の死が無意味になる。全ての罪が無意味になる。

「あなたは自分の家族にそういう目で見られてもいいってどういうの!」

「良くなければこんなことはしないさ。それに、家族を助けるために罪を犯す気持も……ヴィータ。お前もわかるだろう」

さつきから黙っている彼女にも話を振る。できれば注意をこちら

にも引いておきたい。そうすれば周りの仕掛けにも気付かれない。

「わかる……けどさ。他に方法は無かったのか、お前は」

「ああ。探したとも。幼い頃からずっと考えてきた。どうしたら彼女を助けられるか、常々考えて。精神病院に入院させて、ずっと、あらゆる法律で許される治療を受けさせてきた……だがそれじゃダメだった。それで見つけた最後の希望が、この方法だ」

復讐のための土台作りと、家族の治療。その同時をこなして、心の内を他人に知られないようにするのは全く大変の一言では片付けられないほどの苦勞だった。

「要は、スカリエツティに『私なら治せる』と言われて従ってんのか」「その通り」

事実如若干前後はあれど、概ねその通り。復讐の機会を与えてくれるというのもあったが、今従っている理由はそれのみ。

「……家族のためなら、自分はいくらでも手を汚すって?」

「さらに付け加えるなら、自分の命を捨てるのもためらわない! その過程で人を殺した事を知られる覚悟も有る。正気に戻った彼女が死ぬと言うのなら、それに従う」

そして、最後に一息。思考を切り替え、本音を吐き出す。

「僕は、エリーのために生きている。そしてエリーのために死ぬ」

一瞬だけ心の仮面を外し、幼少の頃殺した本当の自分を曝け出す。

そして、また仮面をかぶせる。

「さて、改めて聞こう。私を殺して先へ進むか、諦めて元に戻るか。高町なのは、八神ヴィータ」

「私は、無理だ。お前のことを殴る権利はねえ……昔、お前と同じように家族のために、殺してはねえけど沢山の人を傷つけた」

「いい子だ」

だが。その立ち位置では巻き込まれるのは確実。戦う意志がないのに死ぬのは哀れだが、ここまで来たのだ。覚悟はできているだろう。

「……君なら、家族のためにどうするか。わかるよね」

「ああ。そうだな。残念だよ」

会話での時間稼ぎはもう終わった。爆薬をつけた蛇の配置はもう終わっている。一步前に出て、一言。

「135番、136番を除く全隔壁閉鎖」

通路の奥から勢い良く降りてきたいくつもの隔壁が、ガンと音を立てて床にぶつかり、そして私と彼女たちだけの個室が出来上がった。戸惑う様子もなく、ただ敵意だけが変わらず向けられる。

彼女らは、このまま決戦を行うつもりなのだろう。

「AMF最大出力」

体にかかっていた肉体強化の術式が妨害を受け、強制的に解除され、砲身が一瞬だけ下がる。それを筋肉で支えていると、あちらも同じように飛行術式が解けたのか、宙に浮いて私を見下していたところから、地面に落下する。これで同じ目線だ。

「起爆」

体勢を立て直す暇も与えず、総量百キロを超える爆弾の一斉起爆スイツチを押す。そして、視界が太陽のような光に包まれる。

さあ。いくら不死身の体と言っても、体の全てが消えてしまえば死ぬるだろう。心残りはあるが、これでエリーが助かるのなら……それでいい。

戦いの跡

ずっと小さい頃の子供の頃の記憶しかないけれど、私には兄が居る。というよりも、居た。記憶が途切れる前の、大きな背中。事故にあつて、両親は死に。私はずっと意識のないまま、生きていても死んでいるとも言えない状態で病院のベッドの上で何年も過ごしていた。

ついこの前意識が戻ったけど、それまでずっと病院のベッドの上で眠っていた私を、この歳になるまでずっと育ててくれた兄。いくら感謝の言葉を並べても足りない位に感謝している。けれど、その言葉を捧げようにも兄はもうこの次元世界のどこにも居ない。生という壁一枚を隔てた向こう側、その気になれば行けるほどに近いのに、この世のどこよりも遠い場所にいる……義父曰く、私を助けるために命を落としたのだという兄は、私がいかに逝くことは望まない。

だから、せめてものお返しに、名も刻まれていない墓石に花を置く。「せめて、笑った写真の一枚でも置いていってよ」

そして文句を一言。兄が私に残してくれた物は、贅沢をしなければ一生暮らせるだけのお金と、この体と、写真が一枚。そしてその写真には、義父と、兄と仲の良かったという綺麗な女性と、仏頂面の兄。写真に写っている義父以外の二人は既に他界。死んだ理由は碌なものじゃないとだけしか教わっていない。それ以上の事は何度尋ねても今はまだ知る必要がないと言われて、義父から聞き出すのはあきらめている。

まあ度々街で会う管理局の人から、本当の事情は教えてもらっているからわざわざ教えてもらわなくてもわかってるけども。本人が話したくないのなら、無理に聞き出すこともない。

生前の兄が使っていた名前、ハンク・オズワルド。調べてみれば、大きな功績を上げて、エースという側面で名前が知られていた。でも八神さんから聞く話によれば、兄は義父のテロ行為に手を貸し、友人と家族の両方を一度に奪った大犯罪者。レジアスさんから聞く話によれば、引退後は後釜を任せようと思っていたほど優秀な部下。様々な

顔を持っていて、どれが兄の本当の顔なのかはわからない。もしかすると、そのどれもが本物ではないのかもしれない。ただ一つ本物と言いつけるのは、その行いの全てが私のためということ。

だったら、その思いに答えてやるのが、妹の義務だと思う。でも。「私は元気だから、気にせず地獄でしつかり迷惑かけた人達への償いをして頂戴」

私一人のために数えるのも馬鹿らしくなるほどの人に迷惑をかけて、傷つけて、償いもせずに死んだ兄。そこまで大事に思ってくれていたのは妹として嬉しいし、守ってくれたことにも感謝してる。

けど、私だけが助かってても兄が居なければ結局私の本物の家族はもう居ない。結局私はひとりぼっちで、多くの犠牲になった人たちへの罪悪感を抱えて生きていなくなっちゃならない。そんな重石を抱えて、果たして幸せになんてなれるものだろうか。幸せになってもいいんだろうか。

「君が元気に生きていれば、それが最高の弔いになる。そのために彼は死んだのだし」

「あんたが兄さんを変な道に引きこまなきや、私も何の重石も感じずに済んだのだけど」

いつの間にか後ろに立っていた義父に返事をする。加害者でもない私が負い目を感じているのに、全ての元凶が一切の罪悪感なしにこうして堂々としているのはどうも腹が立つ。

「君を治せるのが私以外に居なかったからね。彼が幸せになるには、私が手を貸す以外に無かった。そもそも君は、私達の起こした行動に直接関与したわけじゃない。負い目を感じる必要は全くないのだよ」
「動機にはなったでしょう。それに、死人が幸福なんて感じるもんですか」

苦勞して治療した妹の立っている姿も見れずに、一人で死んでしまつて。自分が死んでも私が治ればそれでいいとも思っていたんだろうか。我が兄ながら、なんて馬鹿な。

「君がそうして二本の足で立ち、自分の頭で考えて、こうして他愛無い会話をする。彼が望んだのはまさに今の君だ。望みが叶うのは死ん

だ後でもいいと言ってたし、天国か地獄かのどちらかに居るのか、そもそも死後の世界があるのかどうかの議論は置いておいて。きっと満
足しているだろう」

「……そうかしらね」

「……そうだといいのだけれど……実際はどうなのか。それは兄本人に
しかわからない。」